

---

**ブラック ロックシューター -No cry and Distance-**

社 九生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブラック ロックシューター - No cry and Dis  
tance -

### 【Nコード】

N8109L

### 【作者名】

社 九生

### 【あらすじ】

？私はどうして生きているんだろう？？

意味のある生き方も、また意味のある死に方も出来ないアンドロイドたち。

自分の存在意義を見出すために、彼女たちはもがきながらも前へと進もうとする。

初音ミクの大ヒット曲「ブラックロックシューター」をモチーフにした、VOCALOIDを愛する全ての人に捧げる大長編SF  
毎週土曜日19時更新(変更有) 執筆:社 九生 絵:Topo  
ro

## Rock・O?プロローグ? (前書き)

本作品では「挿絵」を使用しています。

もしも挿絵表示を「OFF」にしている方がいましたら、是非とも「ON」にしてお楽しみくださいませ。

## Rock・0?プロローグ?

意味のある生き方も、また意味のある死に方も分からない。

そんな?彼ら?と、この終わった世界を、私はもう長いこと見守ってきた。

だが、もしかしたら、その?輪?は今ここで……断ち切られるのかもしれない。

\* \* \* \*

> i 7 6 7 6 — 1 2 1 8 <

\* \* \* \*

ひび割れたような空の雲間から、夕陽が眩く煌めく。

それを背に受ける?月に蓋をされた塔?……その上空はまるで血が滲んだような紅で満ちている。

黒髪のツインテールの女は、一人、それらの光景を前に佇んでいた。

全くの無表情で。これから自分がしようとする事に特別な高揚を感じている様子もなく。

ただ、彼女の黒い双眸には……夕陽と同じ、燃えるような色が静かに宿っていた。

「?ナナシ?だ……これが最後の連絡になる。だが、特に何も言う事はない」

彼女は頭に取りつけたヘッドギアのインカムから、どこかにいる誰かに言葉を紡ぐ。

ぶっきらぼうな語りの出だし。抑揚に欠け、感情のこもっていない錆びついたような声。

しかし本人からすれば、その言葉の中に、ありったけの想いを詰め込んだつもりだった。

「これが最後になる」……インカムで繋がる誰かとは、もう逢えなくなるかもしれない。

だから言う必要などないのに、彼女は敢えて？ ナナシ？ と自分の名を言ったのである。

その名前を、自分がいたことを、忘れてほしくないからだ。

「……ああ、礼を言う。じゃあ、そろそろ、時間だな。頼む」

ナナシは短く語尾を切ると、ヘッドギアを静かに取り払った。

そして目の光景に変化が現れるのを待つ。

それはすぐに起こった。

塔の上に不自然にくくりつけられた球体が……その？ 鎖？ を断ち切られたのである。

地響きのような音を辺りに響かせながら、大きな球体は前のめりに塔から離れ始める。

一方の彼女は、その様子を微動だにせず見つめている。

左手には、つい先程まで自分と仲間を繋いでいたインカム付きのヘッドギア。

それがゆっくりと彼女の手を離れ……球体が完全に落下した轟音と重なるように、地面へと落ちた。

その音が凄まじい粉塵と共に辺りに迸る頃には、既に彼女はいなかった。

傍らに置いていたエイのような形の一人用飛行艇……？ エア・グライド？ に颯爽と乗り、三日月の底辺から頂点までをなぞるかのように猛烈な勢いで紅い空を駆け昇っていく。

そして一定の高度に達したところで、速度を落として放物線を描

き、反転。

彼女はその目に蓋を失った塔の中身を捉える。

> i 8 0 3 9 — 1 2 1 8 <

地煙りが包み込む中から、全身が真っ黒に染められた翼獣が飛び出してきた。

それも一匹ではなく、あっさり？無数？と言えてしまうほど超大量に。

あたかも巣穴をほじくり返された蟻ありのようにどつと溢れ出た黒き獣の大群は、四方八方へ波打つように広がり、翼を持つ者は上空のナナシめがけて突っ込んでくる。

しかしナナシは機体をひるがえすことはなく……それどころか一切の臆面も見せず、まるで初めからそうするつもりだったかのよう  
に、上昇してくる黒き翼獣めがけて？急直下？を開始した。

？グアアアアアアアアアアアア！？

耳をつんざくような雄叫びを上げる黒き翼獣を、一匹、二匹、？  
ヒュン！ヒュン！？と機体にぶち当たる紙一重のところかわして  
いく。

しかし相手の数は尋常じょうじょうでなく、ナナシの視界はとつくに無数の黒  
い点で覆い尽くされている。

そして次から次へと飛びかかってくる敵たちに、ナナシはいよいよ  
対応が難しくなり、右へ左へ回避運動を続けた末……不意を突く  
ように正面から飛び込んできた翼獣と激突した。

「イン……ストール……」

彼女のしなやかな身体は、宙を舞っていた。

それまで乗っていた機体の破片が飛び散る中、彼女は一枚の小さな？チップ？を　それは現代で言えばゲームのメモリーチップのような見た目だが　左手首に付けられている黒い腕時計の、その側面にある挿入口の中へとベントインした。

途端に電光が迸り、彼女の身は一瞬、棘のついた白い光に包まれる。

また一匹の獰猛な獣が、翼とくちばしを大きく広げて身一つとなつた彼女へ襲いかかろうとしていた。

対象が突如として白い光を放つたのにも怯むことなく……いや、そうするだけの知性も理性もなく、ただただ破壊衝動にのみ突き動かされるこの暴徒は、光を通り過ぎた直後、その身を真っ二つに裂かれて霧消した。

彼女の右手には電光の中から現れた、部分両刃の細長い鉄刀……？クロガネ？が握られていた。

地上が自分めがけて凄まじい勢いで落ちてくる。

いや、現実には落ちているのは自分の身体だ。

無数にうごめく黒き獣たち……？ブラック？の無数なる点々の合間に、確かに見える。

わずかだが、斜めに輪切りにされた塔の内部。

その底に湛えられた？青白い光の井戸？……。

そこが自分の落ちていく場所。辿り着かなければならない場所。

ナナシは自由落下の最中にも刀を振るい、行く手を阻むブラックたちを薙ぎ払っていく。使命感に駆りたてられるかのよう。しかしその瞳の色は、全く揺れることはない。

彼女は突き進む。突き進むように、落ちていく。

「……っ！」

次の瞬間、彼女は目を疑った。

それまで全く統制のとれていなかったブラックの大群が、何かに



気付いたように取って返し、塔の側面にへばりつき、集合し、互いの身体を黒い液状とさせて融合していくのだ。

それは見る見るうちに形を成し？大きな掌？となって飛来者を掴もうとする。

自分めがけて伸びてくるその黒く、大きな掌に向かい、彼女はクロガネを縦に構えた。

10メートル……5メートル……ついに刃の切っ先が掌と触れ、そのまま漆黒の中を走り抜けていく。

彼女は落下の勢いに任せてブラックの集合体を真っ二つに斬り裂いていった。

しかし途中で視界からパツと唐突に漆黒が消えた。

何事かと思う暇もなく、ブラックの集合体はそれまでの形を変え、中指から裂けて双方向にだらんとしなっていた掌が……今度ははつきり？髑髏？と分かる巨顔へと変貌した。

ぽつかりと開いた両目の空洞に真っ青な眼光が湛えられ、歪んだ唇はこの世の全てを嘲っているように見える。

そんな不気味な狂笑を浮かべる髑髏は、次の瞬間、ありえない上下幅で口を「くぱあっ」と広げ、

？パクン……？

ナナシは回避も防御のしようもなく、ブラックに飲み込まれてしまった。

視界は一瞬にして暗闇に埋まり、蝕まれるような嫌な痛覚が全身に走る。

いつもこうして、暗闇の中をもがいていた……。

事態にそぐわないような思いを巡らせるナナシ。

だが、元より？光？を掴むために暗闇から這いずり出ようとしてた訳じゃない……。

そこにいるしかなかったんだ。気がついたら暗闇にいて、そのまま生きるしかなかった。

希望を掴むために走った時もあった。光を探していた時もあった。しかし、いつだって堂々巡りだ。暗闇から暗闇へ。

この世界は端から端までそんな調子で、出口なんて元からどこにもなかったんだ。

成す術もなく、彼女の身体は黒くうごめく物体に取り込まれていく。

必死にもがいても、あがいても、四肢に込めた力はもう徒労感にすり替わりつつある。

そんな彼女の目に、ふと、左手首の黒い腕時計が見えた。

その部分だけは手つかずの状態で、二つの秒針と数字板が薄いガラスの中にある。

そしてそれは、今の、この危機の中でも、確かに？時？を刻んでいた。

そうだった……。止まっていた時計の針は、また動き出していったんだ。

彼女の<sup>まぶた</sup>瞼が閉じられる。

しかし、それはほんのちょっと勇気をもらうためだ。永い眠りにつく訳じゃない。

その目はまたすぐに開かれる。

黒き双眸の、その左目に、<sup>あお</sup>蒼い<sup>ほのお</sup>焰？を灯して。

「うあああああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああ！」

彼女のありつたけの咆哮<sup>うなり</sup>と共に放たれた？青白い光？は、瞬く間に空間の隅々まで冴え渡り、次に盛大な？爆裂？が起こった。

全身を包んでいた漆黒の空間が、刹那せつなの内にまるごと砕け散ったのである。

見えた……？光？が。

暗闇から脱したナナシの目に色鮮やかに映ったもの……塔の内部その奥底に存在する？青白い光？をたつぷりと湛えた井戸。

それは彼女の身体が纏まとう光と全く同じ色合いで、そこへ向かって無抵抗に落ちていく様は、まるで離れ離れになった光の一部が源へと回帰していくかのようだった。

彼女は宙で身を小さくねじり、塔の断面の形に区切られた紅の空を……恐らくはこれで見るのが最後になるであろうこの世界の空の色を、その双眸に焼き付けた。

そして視界が、青と白の幻想色に包まれていく……。

\* \* \* \*

彼女は塔の中、いや？トランシユ・ホール廃棄炉？の中へと落ちていった。

私は一部始終を見させてもらった訳だが……実に無謀というか、やけにスケールのでかい飛び降り自殺というか、まあ、見ていて楽しかったのは認める。

しかし、この世界に起こる大抵の事件の因果律だった彼女がいなくなったことで、私の彼ら？アンドロイド？に対する観察意欲はやや低下してきた。

まあ、それでも次に興味があるのは、彼女が廃棄炉に突入するために？封印？を解いてしまったこの後始末を、一体誰がどのようにして行うのか、ぐらいだろうか。

いや……もう一つあった。

彼女はもうこの世界にいないわけだが、もしかしたらあるかもし

れない？向こうの世界？で、何かを成し、何かを変え、そうしてその反響はここまで届くのか？ という興味だ。  
いつだって君は、私に面白い物を見せてくれるよ。

ブラックロックシューター

B・R・S

……

Rock・i? ナナシの記憶? (前書き)

本作品では「挿絵」を用いております。

もし挿絵表示を「OFF」にしている方がありましたら、「ON」  
にしてお楽しみくださいませ。

## Rock・1? ナナシの記憶?

> i7679 — 1218 <

私はもう歩けない。

謝ったら許してくれる? いや、そんな訳はないよな……。

今は指の一本も満足に動かせないんだ。もう1か月も前からずっとこんな状態。ただ、呆然、悄然しやうぜん。私の身体は廢墟はいきよの風景に溶け込んで、そしていつしか、その中に塵ちりも残さず消えていくのだろう。それが?死ぬ?ってことなのかな。

何故だろう。

?生きる?ってことが良く分からないのに、それだけは嫌に理解している自分がいる。

「……ここにいたのか、?ナナシ?」

一人用飛行艇?エア・グライド?を駆り、いつの間にか目の前にいた少年。

その金髪碧眼へきがんの少年型アンドロイドは、地面に突き刺さった瓦礫がれきの壁にどつぷりと背を預けて座り込むツインテールを見下ろしていた。「こちら?レン?。セントラル南方にてナナシを発見。え、今の状態ですか……?」

レンは飛行艇の操縦席に付けられた無線から誰かに連絡を入れた。投げかけられた質問に、彼は特に感情のない声で、

「あー……なんていうか、燃え尽きちゃってます。完全に」と、自分なりに感じた対象のありのままの状態を報告した。

艶を失ったツインテールの黒髪：裾がボロボロのロングパーカー  
…数多の傷跡に：灰や粉塵で薄汚れた肌の露出部分：そしてぼつかりと穴が空いたような黒き双眸……。  
これらを見る限り、少年の中では「燃え尽きている」あるいは「ほとんど死んでいる」以外に適当な表現が思い浮かばなかった。  
いや、確かに彼の言葉は、ナナシの現状を如実に表していると言える。

「……はい、では命令通りにナナシをそちらに連行します。では」  
レンは「ピッ」と無線を切り、操縦桿から視線を身体ごとナナシに移す。

「じゃ、という事でこれからお前をつれていく。キズだらけだけど歩けるよな？」

ナナシはわずか、ほんのわずか、少年に対して目を上げた。

レン……レンだよな？

私と戦った仲間。大事な仲間の一人。

いつも？相棒？と一緒にいて、二人はとても仲良しで、喧嘩だつて良くしていたけれど……好き合っていると言うのかな？

私には良く分からないが……そんな見えない糸で繋がっているような二人だった。

「あんま手間取らせるなよ……？団長？の命令なんだ。」

いつしか、レンの決意を聞いたことがある。

「だるい」とか「やりたくねー」とかが口癖なヤツだけど、でもその時ばかりは真剣な瞳で、全世界の負を背負い込んだって構わないような力強い声で……。

「何があったって、オレは？リン？を守るんだ」って言ってたんだ。

「お前……リンはどうした？」

お前はそう言っていただろうか？

「リン？ 誰だよ……それ」

ナナシが期待していたのとは違う言葉が、無表情な返事で聞かされる。

ナナシは力なく視線をレンの足元に落とす。一目見た時から……「もしや」とは思っていたが、ついさっきまでは、希望を持っていたのだ。レンを信じていたのだ。

しかしそんな、10本あった中で最後に残された蠟燭ろうそくの火は……他ならぬ少年自身の言葉によって儂はかなくも消えてしまった。

「そうか……お前？ 記憶？ を消したんだな。忘れたのか、リンを」  
レンの返事は相変わらず。

「誰だか知らないな……とにかく、立って歩いてくれ」

レンはナナシの右手を掴み、引っ張って強引に立たせようとした。しかし彼女の右手はブランと伸びるだけで、他の部分は全く呼応しようとしなない。

立って歩く気力…生きる気力…それが、今の彼女には微塵みじんもないのである。

「……私も、記憶を消せばいいのかな。お前みたいに」

「それでいいんじゃないのか？ オレはお前が立って歩いてくれれば、それでいいんだけどな」

ナナシの声は、今にも消え入ってしまったそうなほど小さく、頼りなかった。まるで命の終わりにさしかかった者の、絶望が喋らせたような細かい声だった。

ナナシは自分の腕を掴むレンの右手を頼りに、生気のない表情でだらりと立ちあがった。

関節の至る所が軋きしむ…？あの戦闘？の後、この傷ついた身体は何よりメンテナンスを必要としていた。

「逃げないと思うけど……一応、逃亡者には取り付けるって団の



決まりだから」

レンは、自分の左手首に付けられたリング型デバイスの挿入口にチップを差し込む。

すると小さな電光が迸り、レンの手元に紫色の電光を放つ手錠が現れた。

ナナシは黙ってそれを受け入れた。いや、その様子は受け入れたというのではなく、単になるがままに、と表現した方が正しいようである。

「いくぞ」

ナナシは小さく手招きをするレンの右手を見るではなく、その目は少年の足元と、これから自分が乗るだろうエア・グライドのステップしか捉えていない。いや、瞳がそこに向けられているだけで、その奥は全く別の光景を見ているのかもしれない。

魚のエイのような形をした一人用飛行艇エア・グライドに、エンジンがかけられる。

レンは立って操縦桿を握る。そのすぐ後ろにはナナシが両膝を抱えるようにして座り込んでいる。この飛行艇は元は一人用なので、華奢な二人とは言っても、エイの背中に乗り合わせるの少し窮屈そうだ。

緩やかな速度で、エア・グライドは発進した。

長らく消息不明だった団の失踪者を捕まえたのだ。それも今や茫然自失。

そんな様子だから、まさか逃げることはないだろう。

レンはそう飛行艇を急かせる必要もなかった。エア・グライドを一定の高度に安定させたところで、まるで任務達成の余韻を楽しむかのように、歩くような速度でマシンを進める。

一方、ナナシの瞳に、下を流れる街の荒んだ光景が映り込む。

元は人類の都市だったこの世界も、今では倒壊したビル群・建物が荒涼とした風景を晒す廃墟の世界となっている。

そこで散見される機能停止を間近にうづくまるアンドロイド……

風が瓦礫の空洞に吹きつけ呻き声のような音をたてる……空は薄汚れた綿の集まりのような雲に敷き詰められ……太陽は雲の斜幕に濁って役割を存分には果たせないでいる。

?この世界に残っているのはなんだろう? ?

ふとそんな想いが込み上げてくるとともに、彼女の脳裏にとあるシーンが過ぎった。

こんな風に、エア・グライドに乗って、いつしか仲間のみんなど空中散歩を楽しんだ。

その時と景色は同じ。同じ廃墟の、灰色の、何にもない無機質な世界。

でも……その時には、こんな空しい気分にはならなかった。

「ちょっと……速度を上げるからな」  
速度が上げられる際、マシンが揺れ、ナナシはよろめいてしまった。

落ちそうになったところを慌てて手すりにしがみついたが……彼女は、レンの背中を見る。

?別人だ? 改まってそう思った。

他人の状態などまるで意に介していない。気付かないフリすらしていない、ひたすら無関心な背中。

ナナシは元より陰鬱な光を宿していた瞳の中を、また一層暗くして、両膝を抱えてうなだれた。

「……準備はいいですね、諸君たち」

ひよろりとして背高のつぽの細面ほそおもてのアンドロイドが、小高い瓦礫の山の上から下にいる複数のアンドロイドたちに言った。抑揚のない声で、ほとんど棒読みに近い。

「あいな、タン」

坊主頭をした上半身裸の巨軀きょくマッチョな男アンドロイドが、立ったまま片足で貧乏ゆすりをしている。

それもかなり激しく……細面のアンドロイド？タン？の物言いに苛立っているようだ。

「毎回思うんだけど……お前の言ってる事って、ホントに団長の意志なのかよ？」

タンは仏頂面をそのままに、傍らかたわで長い腰かけ椅子に鎮座している団長の顔を見た。

青髪紅瞳あかめの端正な容姿をしたアンドロイド……この寡黙かもくな青年が、団のリーダーらしい。

彼は自分へ向けられた視線に、沈黙を保ったまま同じく視線を返すことで返事をした。

タンはそれで何かを読み取ったようで、マッチョの方に向き直り、

「ほら」

と、自信ありげに言った。

「わかんねーよ！ てめえ、なめてんのか!？」

マッチョがいよいよブチ切れ、瓦礫の山の上を駆けあがる。とす。

しかし足が滑り、

「どうえやああっ!?!」

あえなく、転倒。

巨体が背中から地面に叩きつけられ、周囲に「ドーン!」という轟音を響かせる。

「……………ハハッ」

山の頂で、タンはとてつもなく嫌味な顔をした。

ただでさえ団長の前でずっこけて恥じの極みなのに、そこへ畳みかけるように……………

マツチヨの怒りのボルテージは猛烈な勢いで上昇し、彼の身体をグツグツと震わせている。

「て……………てめえ……………俺だつてトリオ? ウロ・タン・ダー? のリーダーなんだぞお……………それをてめえっ!」

「……………まあ、ウロが勝手にリーダー面してるだけですわね」

「ブチ」……………はつきり聞こえたその音が、ウロの怒りのボルテージMAXを告げた。

「てめえは? 廃棄炉? 行きだこのヤロオオオオオオオ!」

目を血走らせて斜面を駆けあがるうとするウロの後方に、宙高く飛ぶ小さな影が……………。

「いい加減にしろクソマツチヨ!!」

?ズド……………? 鈍器特有のイヤな音が辺りに低くこだました。

犯人は野球帽をかぶった少年型アンドロイド。

凶器・犯行手口は、野球のバットで後頭部強打。

「GJ! ダー。恩に着ますよ」

「……………へッ!」

地面に横たわり白目をむくウロをしり目に、二人は互いに右手の親指を立て任務完了を合図しあった。

そしてそのあと……………タンは何事もなかったかのように話を続行。

ウロは頭を抑えつつゆらゆら立ち上がったが、迫る? 狩りの時間? に反撃の機を失っていた。

「……と、いうわけです。ほらそのマッチョ二人！ さつさと準備につきなさい」

「て……てめえ……団一番の非力のくせによお……！」

「は？ 団長の命令ですよ？ あなたが気を失っていた間に、団長自ら喋べられてのご指名ですよ？」

「な……なに……！？」

「だからほら……さつさと行かないと」

「ぬ……ぬぬう……」

無論、全てタンの仕組んだ？だが。

それでも団長の命令には忠実なウロは、もう一人のマッチョ型アンドロイドと共に指定された場所へと急ぐ。

二人が目指したのは、廃棄炉が封印されている大きな四角形の石桶<sup>おけ</sup>。

その石桶の前面に、二本の鎖が中央でクロスする鋼鉄製の扉がある。

二人は鋼鉄扉の左右にある船のかじ取りのような鉄製のハンドル

それは扉を拘束する二本の鎖の弛張<sup>しちやう</sup>を調整する機械だが、

右にはウロ、左にはもう一人がハンドル操作の役についた。

後は団長の命令を待つのみである。

「団長、よろしいですね？ では……？ ホール解放ッ！？」

団長の代弁者であるタンが、右手を振り上げ高らかに宣言した。

ハンドル操作についた二人は……いやこれはウロだけだが、「あいつ……いつか粉々に……」とつぶやきながらハンドルを手前にぐるぐる回し、鎖をゆるめていく。

そして二本の鎖が完全にゆるみ切り、扉が？ギイイ……？という音を立ててゆっくり開くと……中から犬獣型<sup>けんじゆう</sup>の？ブラック？が数体、勢いよく飛び出してきた。

「来たな……者ども、かかれッ！」

タンの更なる言葉により、アンドロイド達は一斉にチップ・インを開始した。

「インストーラツ！」

いたるところで電光が迸り、アンドロイド各人が武器を手に持つ。ウロは大きなトマホークを両手に握りしめ、団長めがけ突進しようとするブラックの群れに突っ込む。

「うおらあッ！！」

豪快な横払いが数体のブラックを一度に切り裂く。

それに遅れて少年・ダーも野球のバットを手にブラックと戦闘を開始。……が、何故大事な武器がごく普通の野球のバットなのだろうか。

「おらおらどうしたア！ もっともつとかかかってこいやあッ！！」

勢いよく振り落とされた斧はブラックを縦に切り裂き、地面に叩きつけられ威力のすさまじさを物語る。ウロは巨体を存分に生かし、そして先ほどの怒りをぶつけるがごとく順当に敵を倒していくが、一方の少年・ダーは早々にバットが折れ（心も折れ）

「あ、も、ムリ。かえる」

ひっそりと戦線を離脱していた。

このトリオ……タンは団長の代弁者と通信士というスキルを持つだけで戦闘は専門外……ダーはこのとおり非力……ウロは単純にして短気だが、この三人の中では間違いなく一番の戦力である。

一方、鋼鉄扉が中から飛び出そうとするブラック達の勢いによって完全に開き切った。

中から？グルルルル……？不気味な呻き声が聞こえ、暗闇に二つの大きな青瞳が怪しく浮かんでいた。

それにアンドロイド達は手を止め、一様に扉の方を見る。

「団長、……」

タンが話しかけたのも束の間、団長は既に立ちあがって頂の先端まで歩を進めていた。

そこへ耳をつんざくようなブラックの鳴き声が周辺に轟く。

大気が振動する程の音圧に、アンドロイド達は思わず耳をふさぐ。その声を発した者……鋼鉄扉と同じぐらいの身体の大きさを誇る巨大人型ブラックが、？ズシン？という重量のある足音を立てて扉から現れた。

そしてその巨大ブラックは真正面にいる団長の姿を見ると……それまでの鈍い足取りが一変、猛然と突進を開始した。

しかし団長に焦る様子は皆無<sup>かきむ</sup>。ただ冷静に、取り出したチップを左手首の液晶モニター型デバイスに挿入する。

「イン……ストール……」

寡黙な団長が、その声帯を久しぶりに震わせた。

団長の身体を青白い光がまとい、紅い瞳<sup>あか</sup>はより深紅<sup>しんく</sup>となってサファイアのような色の光を放つ。更に団長の右腕がそれまるごと急速な変化を遂げ、白に青のラインが2本入った巨大な？砲身？へと姿を変えた。

「超高出力粒子砲？エンドレス・エンド？……」

タンは？これから起こること？を見こし、山の頂からおりて退避<sup>たいひ</sup>していた。

そして青白い光をまとう団長の有り様に見入り、恍惚<sup>たうとう</sup>とした声で呟いた。

円形の頂に一人残された団長は、全身にズシッと来る粒子砲の重量感を心地良く感じながら、正面から突進してくるブラックに銃口を向けた。

しかしブラックは手前で大きくはね上がり、そのまま団長をおしつぶすつもりなのか、身体を真つ平らにしたまま急降下してくる。

団長はそれに合わせて至って冷静に照準を変更……：天空に向け、その引き金を引く。

細く収束された青白い光の波動が、ブラックの腹をいとも簡単に貫く。

そこを中心に亀裂が全身へと一斉に広がり、ブラックは断末魔もないままに粉々にはじけ飛んだ。

そしてブラックをブラックたらしめていたエネルギーが、黒い液体となって地上にいるアンドロイド達に降り注ぐ。

漆黒の雨。

その不気味な雨音が、それまでの喧騒を嘘に変えていく。  
圧倒的にして残虐的。

この容姿端麗な青髪紅瞳の青年が団長たる理由である。

ブラックロックシューター

「……漁夫の利でも狙っていたのか？　？　B・R・S？……」  
降りしきる雨音の中で彼が言ったその言葉は、自分の真後ろにいたナナシに向けられたものだった。

「その呼び方はやめる。私は？　ナナシ？　だ。武器の名前と一緒にするな……」

「ふん……」

ナナシは彼と目を合わせようとはしない。

視線を自分の足元にやって不快を露わにした声で応じる。

「別に漁夫の利でも構わないぞ？　お前は長らくどこぞで？　腐っていた？　ようだが……」

エネルギーの吸収の仕方は覚えているな？　こう……地に落ちた黒

い液体に……掌を向けるだけだ」

団長は、ナナシに対しては普段よりいくらか饒舌となるようだった。

そして雨が止むと彼はおもむろに……地に溜まったいくつもの黒い水たまりに掌を向けた。すると水たまりから？　黒い蒸気？　が発生し、それがどんどん団長の手のひらの中に吸収されていく。

他のアンドロイド達も続々と、団長と同じように黒い蒸気を吸収し始めた。

この行為がいわゆる人間で言う所の、彼らアンドロイド達の？　食事？　だった。

「……さて、食事も済んだ。お前はお前の用をとつとと済ませるんだな。B・R・S」

「何度も言わせるな。それに今の私には？　使えない？　代物だ……」



「まだ眠っているだけだろう？ 部品はいくらでもある。メンテナンスをすればお前は元通り。その……お前を腐らせた？ 記憶？ もな」  
団長の口ぶりは全てを見透かしているかのようだった。

更にそこにはいささかの傲慢しゅうまんも含まれている。  
ナナシと喋る時、彼は口元の端を釣り上げて絶えず不敵に微笑んでいるのだ。

そして彼は、会話に入れず、ただ二人の間に突っ立っていたレンに指示を出す。

「そいつを？ トエト？ の下へ連れてけ。気に入らない奴だが、我が？ エクスプロリズム？ の主力だからな」

「は、はい。今すぐ」

レンは慌ててナナシの腕を引き、メンテナンス所であるトエトの下へと向かうべく、また

エア・グライドに彼女と共に乗り込んだ。

渋々といった様子で歩き出したナナシは去り際、振り返らずに言った。

「私の記憶が消える前に言っておく。そして消えてからも、私のこの想いは恐らく変わらないだろう。」

私はお前を許さない……？ カイト K A I T O ？ お前だ」

そして再び歩き出していく。

団長……いや K A I T O は、ナナシの乗るエア・グライドが上昇していくのを見上げつつ、

「許さない……？ 俺達がした事は、自分が生きる為に仕方のない事じゃないか」

当然、それは彼の独り言だ。それも誰に聞こえてしまっても構わないような、自分の意思の明らかな表示でもある。

彼が思うことや欲することは、たったのそれだけ。以外には何もない。自分がアンドロイド全体を率いて、滅んだ人類の後継となるつもりもなければ、そもそも他者に想いを馳せるようなこと自体、彼にはない。

ただ、自分が存在すること、その存在を維持していくこと。  
彼の興味や行動理念は、この二点に集約される。  
そのためのハンター集団・エクスプロリズムであるし、下僕ども  
であるし、世界であるし、そしてナナシ……B・R・Sである。

### T o C h a p t e r 3

彼女は、最期になんて言っていたのだろう。

廃墟群の中に、外装がはがれ朽ちながらもそびえ立つ二連のビル。  
？ユートピタワー？

一階、二階のメンテナンスルームは既に他のアンドロイド達で埋まっていたので、レンは三階にナナシを案内した。

建物の中も外観と同様に壁や天井、所々がはがれ落ち、二人の歩く廊下は瓦礫片で散乱していた。

道中、二人の間に会話は全くなく、建物には二人の乾いた足音が響くだけだった。

そして目的の部屋に着き、入口の自動ドアが開かれると……道中の荒れ果てた様子とは一変。

機器・備品の数々が棚などで仕切られ、整理のよく行き渡った清潔感漂う光景が彼らの視界にパツと広がった。

「あ！ ゴヨヤクのカタですネ！」

部屋へとやってきた彼らの下へ、何やら小動物のようなものがぴよんぴよんはねながらやってくる。

> i 8 0 4 1 — 1 2 1 8 <

「あるえ？ キンパツのあなたはまえにメンテしましたよネ？」

「いやオレじゃなくて……後ろの、コイツ」

「……あアっ！」

「見りゃわかるだろ……」

レンは呆れた声を足もとの小動物にもらす。

長い胴にネコ耳の付いた帽子をかぶり、愛くるしい瞳にV字の細長い手足……この建物の各階でメンテナンスを担当している博愛ロボット、？トエト？である。

体長はレンの膝に届くか届かないかぐらい。本当に小さい。

「おやー、これはズイブンとキズついてますネ……」

「……………」

「うぬー、コレはなおすのにジカンかかりますヨ。アナタは？トクシユコタイ？ですよネ？」

「……………」

「ふムふム、ココがこーなって、アレがコウ……ふムふム」

トエトは黙りこむナナシの周りをせわしく動きながら、彼女の傷の状態を細かくチェック……しているのだが、はたから見ると小さく元気な妖精がまとわりついてきて困っている、そんな風にも見えた。

「じゃ……オレは団長のところに帰ってるからな。あと頼んだぞ、トエト」

「アイアイサーあッ！」

レンはそう言うと部屋から出ていった。

去り際にナナシとすれ違い、彼はナナシの横顔をふと見たが……

彼女は黙ったままうつむくばかりで、これといった反応はなかった。

「燃え尽きてる」

先刻の自分の言葉が、頭の中で反芻はんすうされた。

「では、サツソクメンテにとりかかりまショーウー！」

トエトの相変わらず元気な声。

しかしナナシ、無反応である。

「え……メンテしたくないんですか？」

「……………」

「あー……の、えと、トエト。なんかしゃべっててくださいよお」  
「……………」

ナナシは依然黙りこくつたままである。  
それにシビれを切らしたトエトは、

「ふがあー、はやくシンリヨウダイについてくださいよお！」

小さな身体を目いっぱい使い、ナナシの右手をつかんで引っ張る。  
それにナナシはやや前に態勢が崩れたが……ふと、

「仕方ないんだよな……生きていくためには、仕方ないんだ」  
「……………」

ナナシの突然のつぶやきに、トエトは疑問符を浮かべて引っ張るのをやめる。

彼女のその声は、トエトではない別の誰か、目の前にいない誰かに語られた言葉のようだった。

ナナシは左手首に付けられた腕時計だけは残し、以外は全部取り払ってそのキズだらけの身体を露わにした。

そして用意された診療台しんりょうたいへとお向けになる。

「ハーン。コワくないですからネー。スリープモードにイコウしまーす」

トエトは治療機械を操作するコントロール台へ着き、いくつも並ぶレバーやボタンの中の一つを小さな手で「ポチッ」と操作した。

ナナシがあお向けとなっていている台の下からいくつもの端子ケーブルが彼女に向かって伸び、まずアイマスク付きのヘッドギアが彼女の頭に付けられた。

他にも4本のケーブルの端子が、左肩、右手甲、左わき腹、右太もも側面へと、次々とジャックインされていく。

普段は人工皮膚の内部に隠されているが、端子ケーブルの先端が各ポイントへ赤外線を放つ事でジャックが開き、このようにケーブルが接続される。体内に送られるのは膨大な量の電気信号……それがアンドロイドの体内機構に様々な命令を与え、最終的にはアンドロイドの内部機構が術者に見えるように開かれる。つまり、医者

が人間の身体にメスを入れる行為にあたる。

そして術者は彼女の頭の先にある治療機械のトンネル。人間世界で言えばCTスキャンのような外観をしている。

ナナシはスリープモードへ入った後、こちらのトンネルに入れられ、トエトがスコープを通して機械を操作し、故障箇所を順次修復、といった寸法が取られる。

だが、ナナシはその体内機構が一般のアンドロイドとは？異なる？ため、それを修復するとなると、通常のアンドロイドの修復作業よりは大幅に手間と時間がかかる筈である。

嫌だ……嫌……撃ちたくない……

スリープモードへと移行していく中、ナナシの意識が次第に遠のいていく。

瞼の裏の暗闇に、過去の記憶が否応なしによみがえる。

超巨大人型ブラックを目前にする盟友と……それにB・R・Sの銃口を向ける自分の姿。

ナナシは歯を食いしばって引き金を引こうとする自分を抑えつけていた。

しかしそれは自分の内なる叫び……プログラムされた本能によって……じゅうん 尽くその意思を蹂躪された。

「嫌ああああああああッ！」

全てを穿つ光が銃口から放たれる。

瞬間に景色は青白く染まり、超巨大ブラックも、そして盟友も……もろとも灰燼に帰した。

引き金を撃つ間際、盟友はこちらに向かって微笑んでいた。その唇は自分に何かを語っていた。

彼女は、最期になんて言っていたのだろう。

「これでいいんだよ」

「早く撃って」

違う。どれも違う。

確証はどこにもないが、絶対に違う。

その直感だけはある。

「エート……記憶の？抹消？もヨヤクの内容にふくまれてますネ。わかります、わかりますヨ。アナタもつらかったんでしょネ……。では、まずそのイマワシい記憶からパツとけしてしまいましょネ！」

トエトは明るく言うと、コントロール台のレバーを操作した。

トンネル内で、先端が細い三つ又状の金属になっている小型アームが伸び、それが徐々に、徐々に……彼女の左耳の中へと侵入しようとしていく。

これは、彼女の頭の中にあるメモリーに干渉せんとするものである。

チツ……チツ……チツ……チツ……

暗闇の中に、黒い腕時計の秒針が刻まれる音が響いている。

今の彼女の世界にあるのはこの音だけ。そして音だけで、今何時かは分からない。

盟友の言っていた言葉も分からないままだ。

思えば、この腕時計は他ならぬ盟友にもらったものだった。

だから衣服を脱ぎ去る際も、この腕時計だけは外さなかった。

それだけ大事なモノ。大事な仲間だった。

そう、盟友はいつも微笑んでいた。意味もなく。

初めの内はそれが勘かんに触ったが、いつしかその笑顔が彼女のすがりつく場所になっていた。

チツ……チツ……チチ……チツ……

彼女を囲む黒々とした空間の中に、いくつものシーンが浮かび上がる。

星を探したこと。自分たちや、この世界の謎々について考えたこと。

過去と未来について話したこと。黄昏をただ無言に流れていったこと。

シーンの中にいるのは自分だけではない。他の誰かという。盟友という。

自分は忘れたくない。過去の日々の、どんな些細な時間も、いつまでも覚えていたい。

なら、盟友だって、自分たちと過ごした時間を忘れたくはない筈だ。

チ……チチ……チ……チチチチツ……

時計の針が高鳴る心音のごとく速まっていく。

そして彼女の耳にはつきり聞こえた……盟友の言葉。

「わたしといたこと、いつまでも忘れないでね」

暗闇の中に、か細い光が、差し込んできた。

チチチチチチチツ……

更に速まる秒針に急ぎ立てられるように、ナナシはそこか細い光に左手を伸ばした。

掴んだ瞬間、その光は輝きを増して暗闇に広がり、冴え渡った。

あたたかな光がナナシを包む。



その中で彼女は、語りかけるように言葉を紡ぎだす。

「私の記憶だ……なくしたら駄目なんだ。忘れられる事は、何より悲しいことだから」

ナナシはまた、左腕の黒い腕時計を見やる。

そしてその名を口にして、？もつ逃げないよ？と固く誓う。

？<sup>マイコ</sup>MEIKO?……大切な、大切な、盟友の名。

t o b e . . . . c o n t i n u e d



## 作品解説@Rock・1

### ・世界観

舞台は人類が滅んだ後の終末世界。

今では個体数何百と昇るアンドロイドのみが生きている。

彼らは？ブラック？を倒すことで生じるエネルギーを糧としており、それは個体の大きさやパワーの違いでアンドロイドが得られるエネルギー量に差が出てくるため、時にはより優れたブラックを巡ってアンドロイド同士で戦うこともある。

つまり、地球上のサバンナで繰り広げられるような「弱肉強食」の世界がそこにはある。

しかし人間並みの知能を持つ彼らは、次第に集団を形成するようになり、アンドロイドの中でも取り分け高い戦闘力と知性を持ったカイトKAITOが率いるハンティング集団・？エクスプロリズム？が、現在では終末世界の頂点に君臨する形で存在している。

しかしKAITOはいわゆる「君臨すれど統治をせず」という自分本意なアンドロイドであり、狩り場を完全に独占してしまうばかりか（後述）、この世がまるで自分のためにあるかのような思いさえ抱いている。

そのためエクスプロリズムに属せない者、あるいは追い出された者の末路は大抵悲惨であり、ことKAITOの目に適わない力なきアンドロイドは朽ちるのを待つだけである。

・ブラック……全身が漆黒に包まれた、影がそのまま立体化したような怪物。

「知性」を持たず、ただ目の前にあるものを壊すという衝動があるだけの暴徒だが、終末世界ではアンドロイドたちの貴重なエネルギー源になっている。

つまり、ブラック>アンドロイドといった「食われる者、食う者」の図が確立している。

彼らアンドロイドが何故ブラックをエネルギー源にし、そもそもどうやってエネルギーとして変換されるのかは、是非劇中でご確認していただきたい。

個体によって大小様々で、容姿もスタイルも異なるが、大まかには翼獣型、犬獣型、人型

の3タイプに分けられる。(デザイン準備中)

トランスユ・ホール  
・廃棄炉…… 簡単には、ブラックが湧き出てくる井戸である。

エクスプロリズムは団長・KAITOの考案により、？二つ？ある内の一つを占拠。

鋼鉄製の扉が付いた石桶で廃棄炉を封印し、エネルギーが欲しい時にそれを解放、団員全員で出現するブラックを退治していく。

これはようするに、効率的なエネルギー獲得と不意の戦闘によるリスク軽減を考えたホール管理術である。

一方、このように実状と全く異なるにも関わらず「廃棄炉」と呼ばれているのは、井戸そのものが持つ謎めいた雰囲気にある。

奥底に幻想的な？青白い光？を湛え、そこに落ちゆく物はどこまでも落ちていき、一向に底へと達したような音を響かせない。まさに底なし井戸。

そんな「落ちたら一貫の終わり」といったイメージが自然とアンドロイドたちに植え付けられ、更にエネルギーがある限りいつまでも生きられるアンドロイドにとって、唯一自分から命を絶てる場所のように思われている事からも、「いらぬ物を自発的に捨てられ

る場所」といったニュアンスでいつの間にかそう呼ばれるようになった。

はっきりとした語源や由来、そもそも何故あるのか、何かと不明な点が多い。

#### ・技術／乗り物

チップ・イン……簡潔には、今は滅んだ人類がその過去に生み出した究極の物質保存・取り出しの技術。

定義などの明言はここでは避けるが、いわゆる「四次元空間」へと粒子状にして送り届けた（預けた）アイテムを、チップ（＝キー）を読み込み用のデバイスに？インストール？することにより、自分のいる三次元の世界に再構築する。

ついでに「読み込み用のデバイス」のところでも更に付け加えると、ナナシは黒い腕時計であったり、レンは手首にはめたりリングであったり、個性に応じて様々な形が取られている。

この技術は過去の人類の社会ではごく一般的であり、さぞかし通勤・通学・ショッピングなど、あらゆるシーンで手ブラーライフが楽しめたことだろうが、現在ではもっぱらアンドロイドが武器を出し入れする際に用いられる。

ちなみに製作舞台裏の話になるが、発想のモデルは「仮面ライダー 龍騎」である。

エア・グライド……一人、あるいは少数が乗り込める屋根のない飛行艇。

反重力装置を推進力としており、太陽光があれば特別な燃料はいらないスグレモノ。

チップ・インと同様に過去の人類でも大いに役立つていたのでは……と思わせるが、そうでもなく、軍隊・警察・消防などの公的機関が非常時に使うぐらいで、民間レベルでは全く普及されなかった。

その一方で終末世界ではアンドロイドたちの有効な移動手段となっており、機体それぞれに一人用から複数用、形やカラーリングなど、様々なバリエーションがある。

ちなみに発想のモデルは……そのエイのような形や飛ぶために最低限の設計しかされてない点など、全てにおいて「風の谷のナウシカ」である。

設定画で紹介している機体は、ナナシがプロローグで乗っていたエア・グライド。

> i 7 9 2 4 — 1 2 1 8 <

……と、現段階で解説できることはこれぐらいです。

登場人物につきましては別途で、次話以降更新していきます。

Rock・2?くるくるまーくのすじいやつ?

カツ……カツ……カツ……カツ……

一段一段ゆつくりと、階段を下りていく足音が建物に響いている。レン。彼がこうも、壁に手をつきながらのろのろと階段を下りているのは、彼の頭の中に振り切れない?もや?があるからだった。

……っ!　り……っ!　わああああああつ!

自分は誰かを前に悲痛な叫び声を上げている……。

しかし視界は青白い靄もやに包まれ、なんだかよく分からない。

そんな不鮮明なワンシーンがここ数日頭から離れず、彼を悩ませている。

思案の迷路に迷い込んだ彼は、考えに夢中になるあまり、歩く速度が遅くなっていたのである。

そうしてやっと1階のフロアへ降り立った。

彼が歩く玄関へと続く廊下は、曲がり角が一つしかなかったが……

……  
「……っ!?!」

レンは曲がり角の薄暗い暗闇に、何か?赤い渦巻き?がうごめくのを一瞬見た。

ブラックか、それとも単に気のせいか……。

それが壁に施されたデザインでないことは、見えた次の瞬間には消失していた事実が物語っている。

レンは息を吞んで左手首のリング型デバイスに手をかけつつ、慎重に距離を詰めていく。

メンテナンスルームは白い蛍光灯が清潔感を醸かもし出す明るい空間だが、一步外を出た廊下は、壁や天井が老朽ろうきゅう、落ちた瓦礫がれき片がいく

つも床に散乱し、蛍光灯が一つもないために昼間でも薄暗く、また嫌に広いので気味の悪い空間であった。

見通しの悪さからくる錯覚さうかくであればいいのだが……じりじりと曲がり角へ近づいていくレンはそう願いつつ、角の間際で壁に背を預け、一旦深呼吸する。

そしてチップを挿入口にあてがい、

「インストー……!!」

疑惑の廊下へと、勢いよく飛び出したのだった。

## T o C h a p t e r 2



「お前らよお……？あいつ？がまたこの近くで出たんだってさあ」  
狩りを終え、瓦礫の山の斜面に寝そべってすさまじく退屈そうに  
空を見上げるウロが、後ろの二人に言った。

タンは鎮座ちんざする団長の傍らかたわに立っており、ダーは野球のボールを  
真上に投げては左手のグローブでキャッチするというのを繰り返し  
ている。

この団、特に用事がない時は暇である。

「それがどうかしたんですか？ ウロ」

「いや別にどうってこともないんだけどさあ。気になるじゃねえか。  
なあ、ダー」

「あいつって誰だよ？ それより野球やろうぜ！ 野球！」

「お前は本当にそれしか言わねえよなあ……」

三人は退屈しのぎに言葉を交す。

つい先刻ブラックとの戦闘があったばかりの場所なのに、今では  
のんびりとした牧歌的な雰囲気漂っている。

「北のゴンザエモンさんが見かけたんだとよ」

「へえ……どこで？」

「あんなあ、ゴンザエモンさんは北にいるんだから北に決まってる  
だろうが」

「北ってどっちだよ」

「あ……タン、お前は頭が良いんだから分かるよな？」

ウロは首を後ろに回しつつ、試すような口ぶりでタンに尋ねる。

「……北、というと？ エインセル？の方ですかね。ここからでは」  
「エインセルかあ。じゃあ北のゴンザエモンさんは、エインセルの  
ゴンザエモンさんという訳でもあるんだな」

「まあ、彼が本当にエインセルにいるんなら、そついう事になりま  
すかね。」

つい先ほどこの近辺で見かけましたけど」

「……なあ、ウロ、ちよつといいか？」

独りキャッチボールをやめたダーがウロに何事か尋ねようとしているが、

「じゃあ俺は何だ？ 街の中央、それも全アンドロイドの頂点に立っているハンター集団・エクस्पロリズムの所属の俺はなんて言われるんだ？ ?セントラル？のウロか？」

「いや……？ ニュートラルでバカ？ でしょう、きっと」

「ウロやーい……」

「ええつ？ ニュートラル・デ・バカ……？ おい、どこのどいつだよそいつは！」

「……さあ」

「おーい……」

ウロは両手で坊主頭をかかえ、激しくかきむしりながら、

「あー誰だそいつ！ ? 聞いたことねえ！ イライラ、イライラするぞお！ ?」

自分の分からない事があると、ウロはすぐにこのような状態になる。

相棒二人はそれを熟知しているので、ウロがこの状態になったらほっばる事に決めている。

「……ま、ニュートラルでバカな彼はほつといて、ダー」

「うん？」

「何か尋ねようとしていた事があつたようですが、それは一体？」

「いや……ウロの言つたた？ あいつ？ ? っぽい奴をおいらも見かけたなあーって思い出してさ」

「はい」

「野球の練習を裏で一人してた時に……なあんかみられてる感じがして、ふいつて見上げてみたら……腹に赤色の渦巻模様をした図体のデツカイ奴が、こつち見ててさあ。」

ただとだけど、次の瞬間にはパツて消えてて……ウロってそいつの

事を言ってるのかなあって」

「私の方にも団員から目撃情報が多数寄せられていますけど……目的・正体ともに不明。常に単独、神出鬼没、……ホントに謎が尽きませぬね。？くるくるまーくのすごいやつ？」

「へえー、そういう名前なのかあ。」

一瞬チラッて見たただけだけど、確かにすごい渦巻模様してたよあいつ」

カイト  
K A I T Oは頂の中心で、まるで王様が座するような腰掛けの長いアンティークチックな椅子に座り、頬杖をつきながら三人のアホらしい会話に黙って耳を傾けていた。

いや、傾けている、というか、この場にいる以上聞こえてしまうのだが。

三人の会話に加わるつもりは全くないが、会話の中で出てきた？くるくるまーくのすごいやつ？……実は彼、少なからずこの者の存在について知っているのだ。

彼の目に映る2連の塔・ユートピアタワーの頂点は、鋭利な刃物のように空に突き出している。

その頂点に雲間から差し込んだ陽が反射し、閃光のように光がきらめいた。

その塔の閃光に見覚えがあるかのように、K A I T Oは目を細めて鋭利な刃物の切っ先を見つめた。

\* \* \* \* \*

陽光が刃に反射したきらめきの中から、横払いの斬撃が繰り出された。

こちらもそれに応じ、二つの刃が勢いよく衝突して火花が散る。

いくつもの斬撃が繰り出されるも、己が刃は華麗に斬撃を弾き返す。

「……その程度か？  
ブラックロックシューター  
B・R・S」

「その名前は、やめると……、」

ツインテールが大きく揺らめいたかと思うと、そのしなやかな身体は頭上高く跳躍し、

「言っているッ！」

空から降りおろされた縦一文字を受け止める。

「チツ……」

攻撃が失敗したとみるや、彼女はすかさず後方へ宙返りして間合いを取る。

そして長刀・クロガネを地面に勢いよく突き刺すと、空いた右手でチップを取り出し、

「インストール」

チップインが完了する頃には、彼女は再びクロガネを右手に持ち、はたしはたし進む電光と共に猛進していた。

その左手に握られていたのは、デザートイーグル型の黒い光沢をその身から放つ実弾銃だった。

「姑息こしやくな……」

放たれた2発の銃弾を刃で受け止める。

しかし目の高さに構えた刀を振り下げると、前方にナナシの姿はなかった。

「後ろだ、K A I T O！」

ナナシがクロガネを大きく振り上げて空中より飛来してくる。

K A I T Oはすかさず反転し、その勢いで振りおろされた斬撃に對抗する。

ひと際大きな衝突音が響き渡った。

弾き飛ばされたクロガネが後方へと飛んで地面に金属音を立てる。

そしてK A I T Oの首にはナナシの銃の口が、一方のナナシの首にはK A I T Oの刀の切っ先が付きつきられていた。

両者とも立ったまま身動きが取れず、肉迫した状態で静止している。

「……あのブラックは、私の？エモノ？だ」

均衡状態を保ったまま、ナナシは横で倒れている犬獣型のブラックを横目でみやった。

この二人、狩りで討ち漏らしたブラックのエネルギーを巡って争っていたのである。

「？私のエモノ？？ 何をぬかしている……」

K A I T Oの言葉に苛立ちの色がにじんだ。

「……お前はそいつのエネルギーを自分のために使おうとしているんじゃない。

例えば、俺の後ろにある瓦礫の下で？うずくまっている？機能停止寸前のアンドロイドのために、使うつもりだろう？」

「……！」

「そうか、凶星か。……クズが」

K A I T Oの言葉にナナシは一瞬反応が遅れてしまった。

直後、彼女の腹にK A I T Oの左拳がめり込むようにして強烈に突き刺さった。

「ぐあつ……！」

ナナシは思わずその場に座りこみ、その隙に彼女のうなじに鋭い刃がつきつけられた。

「……勝負、あつたな」

それだけ言い放つと、K A I T Oは瀕死の状態にあるブラックへと近づいた。

何も持たれていない左手を、その手のひらをブラックへと向け……黒い蒸気となって吸い込まれていくブラックは、次の瞬間にはもう跡形もなくなっていた。

「……K A I T O、一つ答える」

ナナシは両手をお腹に当てて座り込んだまま、やっと絞り出したような声で聞いた。

「私たちはなんで生きている……？ なんでこんな争いばかりをしている……？」

K A I T Oは振り返ると、自分に向けられる憎悪と不安とが一緒

くたにされたナナシの黒い瞳……その中の水晶を砕くような、突き刺すような視線を浴びせ、その上に言葉に乗せた。

「全ては、……？ 摂理？ だ」

ナナシに反論の言葉はない。

何故なら自分もその？ 摂理？ の環わに組みこまれている他ならぬ一人であるからだ。

何体ものブラックを殺し、時には仲間とさえ……。

その自覚ゆえ、彼女は言葉を唇くちびるを噛むほかなかった。

「ただ……、」

意外なことに、K A I T O は次なる言葉を紡つむいだ。

「自分、いや、アンドロイドそのものか……それらに対する存在の疑念・価値の意識がお前を蝕ほじんでいるのなら、それはそれで問題だ。お前の戦力低下はひいては、我が団の戦力低下に繋がるからな」

「……何が言いたい？」

「奴に逢え。？ G n o s ？ ……他のアンドロイド連中には？ くるくるまーくのすごいやつ？ などと言われているが、奴ならお前の疑問に答えられるだろう。」

我らの起原から何まで全てを知っているからな……」

K A I T O はナナシに背を向け、そのまま歩き出す。

「ま、待て……そいつは一体何だ？ どこにいる？」

「奴の目的も今どこにいるかも分からない。……が、その名の由来は知っている。」

？ G o d k n o w s (神のみぞ知る)？ ……そのアナグラムだ」

ナナシは疑問符交じりにハツとしたような表情をする。

「では、あと？ 1時間後？ だ。大きな戦いになる……せいぜい身体を休めておけ」

K A I T O は跳躍し、ナナシが次の言葉を声にしようとする頃にはもう遠くへ行っていった。

一人残された後で、ナナシはふらりと立ちあがり、ブラックがいた場所をふと見やった。

その場所は今では小石が一つあるだけの空地となっている。

そして次にナナシが向かったのは、さっきの場所に横たわっていたブラックのエネルギーで救おうとした、機能停止寸前のアンドロイドの下。

「……死んでる、か」

都合良く斜めの状態で横倒しになっている瓦礫を日よけにして、女のアンドロイドがその下でひっそりと事切れていた。

人工皮膚の所々が剥げ、内部の管や機関がむき出しになり、まるでガラスに包まされた人間の死骸しかいのような有様だった。

「いつも……こうだ。私は中途半端だ。ブラックを倒してそのエネルギーを入手するより前に、まずはこいつに……自分のエネルギーを分け与えていればよかったんだ」

言葉が口をついて出た瞬間、強い後悔の念が胸に湧き上がった。

エネルギーを与えていたらK A I T Oとは戦えなかった。それこれから一時間後には、大げさにはアンドロイドの？未来？を左右する戦いが待っている。

だから自分は、エネルギーを温存することに……。

「全部、全部、言い訳だ。現実はどうじゃないか」

目の前に横たわるアンドロイドの屍しかほねの様をしかと見つめる。

死んでいるという状態が、こんなにも無残なのか。

殆ど背後の瓦礫と同化しつつある。

自分以外の誰かがここを通りかかっても、誰もその存在に気がつかないだろう。

「ナナ……シ？ もう、時間だよ？」

ハツとして、ナナシは声の方を見る。

明るい茶色の髪に、満面に湛えられた優しい微笑み。

自分をB・R・S以外の名前と呼んでくれる数少ない？盟友？の

一人、M E I K Oメイコが瓦礫の上に立って不安げな表情でこちらを見下ろしていた。

彼女の位置からはこの屍が見えないらしく、ナナシは複雑な表情をしつつも、

「ああ、いま、行くよ……」

そしてナナシは……この一時間と数分後に同じような過ちを繰り返す事になる。

2度目のそれは、相手の死骸すら残さない完全なる存在の抹消となってしまうが。

To Chapter 3



「…………ル？」

レンは勢いよく角から飛び出したものの…………視界に広がったのは、誰もいない一本道の静まり返った廊下と、その先にある扉のない玄関から見える外の風景であった。

「な、なんだーあ……………」

レンは思わず安堵のため息を吐く。

挿入口を間近に使われる事のなかったチップを腰に付けたポシェットの中に収め、再び歩き始めた。

と、その時、

「…………あ、あのお……………」

「う、うわっ!？」

背後から突然、生気のない、まるで幽霊みたいな声が聞こえた。振り返ってみると仰天。暗闇に青ざめた女の顔がぼっかり浮かんでいるではないか。

「ブ…………ブラッ…………ク……………じゃない何だアンドロイドがこのヤロウ!」

「ヒイ!？」

レンの口調のあまりの変化に、今度は相手のアンドロイドが驚いてしまった。

「びっくりさせんなよ……………こんな薄気味悪いトコで急に後ろから出てきてさあ」

「ご…………ごめんなさい……………でもここ……………、ふふ、私にとっては、妙に落ち着くんですよね……………ふふ、ふ……………」

「な、なに、こいつ……………」

グラマーな身体に、ローライズのロングパンツを着こんでやたらにセクシーな女性型アンドロイド。白いロングストレートの髪は後ろで一本に束ねられている。

そして何より目を引くのが……二つの大きな乳。

しかし、その魅力的な容姿とは裏腹に、表情は陰険でかつ青ざめており、確かに本人が言うように「ふふ……」と不気味にほくそ笑んで暗闇に佇む姿は、異様なほど似合っている。

「用がないなら、オレは行くからな」

「ふふ……ふ、……あぁッ！ ま、待つてください！」

行こうとするレンを追いかけ、彼女の巨乳が上下に？ぶるぶる？と揺れる。

「何だよ。良く分からないヤツだなあ……」

「そ、その……、ここらへんで、っていうか、この建物の中、っていうか、この街全体？……っていうか、とにかく？大きな剣？を見かけませんでしたか？」

「大きいって言ったって、どれぐらいだよ？」

「ええ……つと」

彼女は頭の上に両手で輪を作り、お尻が地面スレスレになるくらいまでかがんだのち、

「これっ……ぐらい、です」立ち上がって、彼女の両手の輪は元の場所に戻った。

かがんだ時、レンの目には一瞬、彼女の大きな二つの乳の谷間が見えた。ふと、目をそらしたが……これまで通りちょっと見たのは言うまでもない。

「……つまり、私の身体一つ分ぐらい大きな剣ってことなんですけど」

「あ、ああ、そうなの？ うーん、見てないなあ」

「……えっ、」

彼女はひどくショックを受けたような顔で、近くの壁に足元から崩れるようにへたり込んだ。

「ああ……おしまいだ。私はもうおしまいだ。あの剣がないと、私は食事にもありつけないし、歩くことだってままならないし……色々、色々のままならないんだわ……」

「お、おい、どうしたんだよ急に？」

レンの言葉などどこへやら。

彼女は両膝を抱えて自分のネガティブワールドに入ったつきり、もう戻ってこなかった。

「終わり。廃棄。スクラップ。なによ……この世ツマンネ。マジツマンネ」

「あー……オレってもう行っていいの？」

「剣がない……拳がない……あれ？ ？ 賢？ がない……はは、私は馬鹿よそうなのよ……笑えばいいじゃんクソが……ブツブツブツブツ」

「……じゃ、オレは行くからな」

レンはため息が出そうな顔で振り返り、玄関に向かい一歩踏み出そうとした。

礼なんていらねえよ！ 困った時はお互いさまってもんさ！！

自身の身長ほどはある大きな剣を悠々と片手で持って右肩に担ぎつつ、自信たつぷりな笑みを浮かべて気前よく言い放つ。

そんな誰かを前にしたシーンがふつと彼の脳裏に浮かんだ。その誰かの顔は鼻から上が見えていないが……白い髪の三つ編み……はちきれんばかりの二つの乳……

ああ！ コイツ、後ろで独り言をブツブツつぶやいているコイツだよ！

レンは勢い良くくると振り返ると、依然ネガティブワールドに入り浸る彼女の両肩をガチッと掴み、

「え、な、なに、……」

「オレとお前ってどこかで逢ったよな！？ なんかキャラ違うけど確かにお前なんだよ！」

レンは彼女の顔すれすれに自分の顔を近づけ、彼女の身体をぶん

ぶんと激しく揺さぶる。

「ちよ、やめ、止めてくださいって!」

「お前だつてオレのこと覚えてるだろ!? お前の名前は!? そんなでもつて……、」

「い、いち、一応? ハク? って……言いますけど」

「オレの近くにさ……! あん時オレの近くにさ、? 誰かもう一人? いたか!？」

レンの声がひと際高く建物に響き渡る。

記憶が消されて感情もリセットされたはずの自分が何故こうも……脳裏に一瞬よぎつたそんな疑問も、目前の、自分の記憶の手掛かりを前に吹き飛び、レンの彼女の肩を握る手には自然と力が入った。「なあ、もう一人、いたか……?」

振動が止み、肩で大きく息をするハクに、レンは改めて尋ねた。

「ええと……私にはなんのことが、さっぱり……」

「そんなはずないだろ! 絶対にお前だつたつて! 頼む、思い出してくれよ」

「う、うーん……」

レンは怖かった。

自分を悩ませているあのワンシーン。

脳裏に過つた白い髪の女性アンドロイドの姿と、目前にいるハクの姿が少なからず一致していることから、あのシーンが「記憶なんかじゃなく幻想」という可能性はもう消え去ってしまった。

つまり、あの青白い靄の中で悲痛な叫び声を上げている自分。

このワンシーンは間違いなく自分の、消え損ねた過去の辛い記憶の一部。

なぜ辛いか。

それは記憶を消すという行為自体、アンドロイドの活動に支障をきたすようなショックがない限り行われ得ないからだ。

あとはハク。

過去の自分を知るだろう彼女が、何か有力な情報を……。

「ごめんなさい……本当に何も、知らないんです」  
駄目だった。

「……そう、か。オレも悪かった。つい、カッとなって」  
レンの手が彼女の両肩から離れる。

直後に虚脱感と徒労感が彼の全身を包む。

「……そういえば、おまえは、なんでここにいるんだ？」

「え、……それは、」

別に聞いてもどうしようもない事だった。

しかし行き場のないフラストレーションが、ふと彼にそんな言葉を喋らせたのだ。

「ええと、私は？くるくるまーくのすごいやつ？さんに、廃棄されたメモリを運びに……」

「なんだって？ ふんだらへっだらすごいやつ?? まあ、どうでもいいんだけどさ」

「あ、よかった。これって言っちゃいけないことっぽいので……」  
レンは良く聞こえなかった部分と、ハクの意味深な言葉をいぶかしんだが、徒労感からどうでもよくなった。

そしてハクとは向かいの壁に腰をおろす。苛立ちを露わにした、ややくそな座り方で。

「……あ、あのお、」

「なんだようっさいな……オレは考え事してるんだ」

「ごめんなさい……」

見た目ではハクの方が大人びてはいるのだが、性格の違いからか、10cmは自分よりも身長の高い少年にあっさり立場を失っている。それを二人とも気にする様子は特になかったが。

しばらく沈黙が続いた。

薄暗い廊下の左右に壁を背にして座り込む、黄色と白の人型の物体。

一人は両膝を抱えて青息吐息。もう一人は顔をしかめて思案中。

両者黙りこくったまま、身体を置く空間だけを共にしてそれぞれ

頭は別の世界にいつていた。

しかし突如、ハンマーで巨大な窓ガラスを割ったような豪快な破砕音によつて、その重苦しい沈黙は破られることとなる。

「な、なんだ!？」

音がしたのは上階からだった。

レンは「もしや」と一抹の不安を覚え、ナナシのいる3階へと走り出した。

考え事をしている最中の出来事だったので、階段を駆け上つていく際にも頭の中には思案の残留があつたが、今はとにかく音の正体をつかむこと。

もし不安が的中しているのなら、自分は団長にどんな? 刑罰? を与えられるか分かつたものではない。

彼は階段を2段3段飛ばしつづ、ナナシのいるメンテナンスルームへと急ぐ。

「……トエトツ!？」

部屋のドアが開き、真っ先に目へ飛び込んでくるその惨状。

両目をばつてんにして壁に倒れ込んでいるトエト……火花を散らす壊れた機械から上がる黒煙……そして床に散乱するガラスの破片と、割れ砕かれた窓ガラス……不安はどうやら、的中してしまつたようだった。

「おい、大丈夫か? ナナシは……くそ、逃げたんだな」

「ふ、ふえゝ……ハ、ダ、……」

「ん? なんだつて?」

逃亡を図るナナシを止めようとして振り返ちにあつたのか、トエトはその小さな体を「ぶすぶす」させながら、レンに何らかの言葉を残そうとしていた。

「おい、なんだよ、早く追わなくちゃいけないんだ……トエト?」

「ハ、ダ、カ……は、ダメです……イロイロ、と……」

ガクツと頭をたれ、トエトはレンの腕の中で意識を失つた。

「ハ、ダ、カ……? はだか?」

レンは周囲を見渡し、診療台付近にある白いカゴの中に見つけてしまった。

ナナシが脱ぎ去った衣服を……。

「……分かった、トエト。ハダカはダメだよな、色々……」

レンはナナシの衣服が入ったカゴをそのまま手にもち、割れ砕かれた窓ガラスから外を見た。するともう遠くに、ツインテールをなびかせながら走り去るナナシの背中があった。

「ったくもう、どうしてこんな目にばかり……」

レンはうんざりとしつつ、カゴを右肩に担いで、窓ガラスからふっと飛び降りた。

？スタッ！シャキーン！！？……それが理想の着地だったが、

「あゝいてゝえー!?」

これが現実だった。

このユートピアタワー、各階にそれなりの距離があるので、地上三階とはいっても25、6Mは悠にある高さなのである。

「いてて……チクシヨウ……ってか、あんなに離されてる……」

ナナシの背中がどんどん遠ざかって小さな点と化していく。

彼は入口に戻って自分のエア・グライドを取りに行こうかと一瞬考えたが、それを実行するためには塔をわざわざ迂回せねばならなかった。

「……ぶっちぎりにしてやんよ。オレは足には自信があるんだ！」

レンは頭についた瓦礫片を払いつつ、ナナシの衣類が入ったカゴを再び右肩に担ぎ、

左手のみを地面に付けてクラウチングスタートの態勢を取った。

そして自分の中で「1……2……」とカウントを取り、

「3……っ!!」

地煙りを上げて勢いよく走り出した。

「自信がある」の言葉を裏切らない疾走でナナシとの距離を見る見る内に縮めていく。

しかし元から距離がある上に、走るコースには障害物がてんこもりである。

アンドロイドなのでスタミナ切れという事はないが、このままでは追いつけないと思ったレンは、

「前言撤回。止むを得ないよな……許せよナナシ」

走りながらにポシエツトからチップを取り出し、道を阻む瓦礫の山を飛び越え空中で、

「インストールッ！」

次に彼が地面へ着地した時には、その左手に、レンの服装と同じ黄色いカラーリングがされた未来的フォルムの拳銃が握られていた。ナナシとの距離は目測5、60Mはあるだろうか。

しかし彼女も自分と同様に瓦礫の障害物に手間取っている。それにそもそもケガ人だ。

レンはナナシが裸であることも相まり、少し後ろめたい気持ちで引き金を引きつぱなしにして、銃の？チャージ？を始めた。

そしてチャージの完了音を聞くと、

「ナナシい！ 止まっても撃つからなあ……！」

レンの叫び声に遠くにいたナナシは振り返り、思わず足を止めてしまった。

その隙にレンは銃口を、ナナシではなく前方の空に向かって放った。バレーボール大の大きさの黄色いレーザー球が勢いよく銃口を飛びだし、放物線を描いてみるみるうちにナナシの所まで届こうとしている。

「……っ！」

ナナシは急いで身をひるがえしたが……。

瓦礫につまづいて態勢を崩した彼女の手前に、レンの放ったレー



ザー球が落下した。

レーザー球は地面にぶつかるとスパークし、いくつもの稲妻が周囲に拡散した。

その一つがナナシの胸に命中し、全身に電流が走り身動きが取れなくなった。

レンの銃は殺傷能力は低いが、このように対象を生け捕りするには適したものであるようだ。

本来なら、同じアンドロイドに使う代物ではないだろうが。

「う……くそ……」

稲妻が「バチ、バチ」と音を立てながら、棘とげのついた鞭むちのように彼女の身体にまわりつき、その自由を奪っている。

それでも彼女は力を振り絞り、立ち上がるうと、前へ進むうとする。

そこへふと、地面に頬ほおを押しつけた彼女の顔の前に、何やら白いカゴが投げ込まれた。

彼女はとつさに疑問符を頭に浮かべる。

「おまえの服だ……マヒが取れたら、まずはそれを着てくれ」

「レン」

「逃げるなよ。追いかける身にもなってくれ……」

レンは横倒しになっている瓦礫の上から、曇り空を目のやり場にして、下にいるナナシに言った。

「もう、いいか？」

「ああ、いいぞ」

振り返ってみると、レンの眼下でかきあげられた二本の束髪そくはつがしなやかに宙をなびく。

凜りんとした佇まいのナナシが、ちゃんと足元から上まで服を着た状態でそこにいた。

ただ如何せん、上半身は前の開かれたパーカーと胸にはブラジャーが一つのみ。ともすると全裸の時よりもセクシーに見える。

「ああ……良かった」

「不思議だな」

「何が？」

「？羞恥心しゆうしじん？……というのか。それは？ニンゲン？特有の概念で、我らアンドロイドにはないはずのものだ。お前は私が全裸である事をかなり気にかけていたようだが……当の本人である私は全く気にしてない」

「なんか色々ツッコみたいけど、つまり、どういうことだよ？」

「お前は私よりも？ニンゲン？らしく出来てるってことだ」

「ほめられてるのか？ それ」

「そのつもりだがな」

レンは「よっ」と瓦礫から降り立ち、ナナシの下へ近寄ろうとする。

「……一つ、お前に聞きたい」

「は？」

ナナシの突然な物言いに、レンは思わず立ち止まった。

「自分の？記憶？を……知りたくはないか？」

「な、なんだよ、急に……」

レンにはまだ明確な意識はないが、潜在的にはナナシが今言った

ような願望があった。

それを偶然にせよ言いあてられたことで、レンは慌てたような表情をしてやや身構える。

「私は記憶を消さずに済んだ。」

それこそ私のメモリーに干渉するアームが、左耳の中へと侵入していく間一髪のところ。しかし記憶を消さなかったといつても、それはある時期からある時期までの記憶に過ぎない」

「言っている意味が分かんないぞ？」

「つまり……私たちは今までに何度も記憶を消して今に至っている。身体は同じでも、中身はいま何人目の私なのか分らないんだ。」

お前にはあるか？ 自分が生まれた時の記憶が……」

その言葉にレンの右肩がピクつとつりあがる。

ナナシの言う通り。レンには、自分が生まれた時の記憶がない。

彼は所在なさに視線を迷わせた後、足元を一応のやり場にして一言述べた。

「……気が付いたらオレは、団長のところにいた。それだけだ」

「私もそうだ。ないんだ……？ 自分が生まれた時？ と、？ それからの記憶が」

レンは緊張した面持ちをナナシに向け、次なる言葉を待った。

「気が付いたらそこに存在していて、それからは自分が生きる為に淡々と日々課せられたノルマを果たしていく。私たちアンドロイドというのは、たったそれだけの存在なんだ。」

前に進むことも出来ず、後ろに戻ることも出来ず、永遠に？ 今？ という時間を維持しているだけの存在。

もう……そんな状態にある今の世界は？ 終わっている？ と思わないか？」

「だから、なんだよ？」

「私は、自分がどこから来たのか、何のために生まれたのかを知りたい。」

その為には？ G n o s ? というやつに逢わなくちゃいけない」



「違う！ オレは、オレはな、」

レンはナナシの言葉をさえぎり、

「……オレは、自分の記憶が知りたいだけだ」

その言葉がナナシの耳へと届く頃には、レンは凄まじい粉塵を巻きあげて走り出していた。

向かう先は、先刻いたユートピア・タワーである。

「……記憶が消えても、なんだろう、消えない？モノ？があるのかな」

見る間に小さな点と化していくレンの背中に、ナナシは意味ありげに呟いた。

\* \* \* \* \*

ここは、その活動が永遠に停止したアンドロイドたちの墓場。

黒い鉱石で出来たいくつもの十字型の墓石が、瓦礫の中にぼつかりと開けられた空地に整然と並べられている。地盤がもろいためか、墓石のいくつかが傾いてしまっている。

いつからそこにいたのだろうか。まるで空間から忽然と現れ出たように、大きな凶体に黒く錆びた鎧を身にまとったアンドロイド……いや、その外見の堅牢、無骨さからは、？機械兵士？といった方がしっくりくるような感じがする。

彼……と喋っているのだろうか。

彼はとある墓石を前にしている。

祈りをささげるでもなく、ただ墓石に刻まれた文字を見下ろして立ちつくしている。

そんな彼の腹には、赤色で大きな？渦巻模様？のペイントが施されていた。

一陣の風が吹いた。すると直後にはもう、彼の姿はそこになかった。

彼が見ていた墓石に刻まれた文字。

それはかすねていて良く見えないが、二つ書かれている。

? L e n a n d L y n n i n t h e f u t u r e (11)  
れからのレンとリン) ?

t o b e . . . . c o n t i n u e d .

&lt;&lt;Chapter 4&>&>;(後書き)

次回 予告

Rock・3? 追憶夢?

乞うご期待

登場人物紹介@Rock・1〜2(その1)(前書き)

本稿では「挿絵」を使用しております。

もしも挿絵表示を「OFF」にしている方は、「ON」にしてお楽しみくださいませ。



## 登場人物紹介@Rock・1〜2(その1)

どうも。

タイトルの通り登場人物紹介でございます。

本編Rock・1〜2までに出てきたキャラクター達を、Topporoさんが描いてくださった設定画を用いて簡単に紹介させていただきます。(これでヴィジュアルを説明する手間がはぶ……おっと)

・ナナシ

>i8045—1218<

またの名を？ブラックロックシューターB・R・S？

元より何かにつけて懷疑・自責的な性質を持ち、本意ではないとはいえ盟友を手にかけてしまったことで深い罪悪感に苛まれ、長い間日々悄然とした陰鬱な時間に溺れていた。

しかし、そんな闇の淵から彼女を救ったのも、やはり盟友の存在であった。

>i8046—1218<

主な武器は細長い部分両刃の鉄刀・？クロガネ(上記)？と、黒い拳銃(デザイン準備中)。

え？ ナナシの最大の武器についてだって？ 黙秘権を行使するッ！

(製作舞台裏)

言わずと知れた初音ミク大ヒット曲「ブラック ロックシューター

「のモチーフとなった、h u k eさんデザインの超有名キャラクター。知らない人はこの機会に覚えてネ!

本作品は要するに二次創作な訳なんだけど、本家様にこれといったストーリーがなかったの、「キャラクターだけ借りちゃえ!」といったノリで物語を作っていたのですが……なんと、本家様が7月の「電撃! ホビージャパン!」に「アニメーション」でブックロックシューターのDVDを付録として無料配布するそうです。

えーと、正直製作の途中から「自分のキャラクター」として独立してただけに、筆者の心中は複雑です……。二次創作の怖いところですよー。DVD見る勇氣ありませんっ!

まだ物語も序盤なので、あまり深くは語れないのですが、彼女は筆者にとって非常に思い入れの深いキャラクターです。ただ、そうは言っても自己投影として描くつもりはありませんし、典型的な「好かれヒーロー」になってもらうつもりもありません。

まさに本編の今後の展開を見てもらいたいのですが……そうですね。

同じ?自分の生き方?に悩む者同士、彼女には彼女なりの生き方を見つけてほしいです。

自分はその姿を、世にも奇妙な物語のタモリよろしく語り部していければ、と思っています。(うわ、何この中二文……)

・ カイト  
K A I T O

> i 8 0 4 8 | 1 2 1 8 <

エクスプロリズムの団長。

?自分が生きる?こと以外にあまり興味がなく、団員を従えて毎日同じような日々を送っている。

ナナシとは思考パターンが根本から合わないためか、何かにつけて良く対立する。

> i 8 0 4 9 | 1 2 1 8 <

主な武器は百銀刀アマミヤ (Toporoさん案 / 上記) と超高出力粒子砲・エンドレスエンド (デザイン準備中)

第二弾に続きますー！。

登場人物紹介@Rock・1〜2(その2)(前書き)

本稿では「挿絵」を使用しております。

もしも挿絵表示を「OFF」にしている方は、「ON」にしてお楽しみくださいませ。

## 登場人物紹介@Rock・1〜2(その2)

・レン

>i8050—1218<

ナナシとは反対に、過去の辛い記憶を？抹消？してしまった少年。しかしその断片がまだ頭の中に残っており、全貌を知ろうと？Gnos?に逢う決意をする。

主な武器は銃系統全般。

第二話で用いたレーザー銃(デザイン&名前準備中)の他、手榴弾など、今一步火力に欠けるような武器を使う。

ようするに彼は、……戦闘タイプではないのだが、とある？もう一人？とコンビを組むと……？

・ハク

>i8051—1218<

イラストの通り、何かとお色気がましいグラマラスな女性アンドロイド。

しかしその性格は容姿とは裏腹に陰険でかつネガティブ。どこかで紛失してしまった？大剣？を探しているようだが……。

(製作舞台裏)

このキャラクターの初期作画時、どうも「ケツ」と「ボイン」といった単語に過剰反応してしまったToporoさんがエロ・アクセ

ルを全開にし、上記のイラストよりもさらに過激なデザインを筆者に上げてきました。

公開しようか迷ったのですが……

> i 8 0 5 2 — 1 2 1 8 <

いや……こんなコカンはアカン!!

作品は文章が主体なのでこれでも良かったのかもしれませんが……何かと彼女を出した時に落ち着かないので（自分が）、これを全年齢対象版にリメイクしてもらい（上記）、そちらを採用する事にしました。

全く、火遊びがすぎるぜ T o p p o r o さんよ……。

・ウロ・タン・ダー

エクスプロリズムの幹部クラス三人組。

? 幹部クラス?とは言うものの、K A I T O は特にそういった階級付けにこだわりのない（自分が団長ならそれでオーケー）ので、古株で実力もある彼らが勝手にその座についている。

とは言っても、戦闘力以外の能力があまり必要とされないエクスプロリズムにおいて、実質戦力として数えられるのはウロだけである。

タンは他の団員よりも知性があり、?通信士?という貴重なポストに就いているから良いものの、ダーに至っては何故幹部なのか謎である。恐らくはウロやタンに可愛がられているからだろうが、彼に従うよう言われた団員たちは反感を抱いている。

> i 8 0 5 4 — 1 2 1 8 <

左から)

ウロ……仲間思いで何かと暑苦しいバカマッチョロイド。

> i 8 0 5 5 — 1 2 1 8 <

武器は？ウロボロスラッシャー（上記）？という名のトマホーク  
（Topporoさん案）

タン……主に団の情報伝達と、口数の少ない団長の代弁を承っている。

ウロに対しては何かと意地悪で毒舌。インテリではあるが、どこか抜けている。

ダー……野球好きで二言目には「野球しようぜ！」と言うやんちゃな少年アンドロイド。

しかし野球以外のことにはあまり興味が無い所為か、時にはタン以上に冷静で落ち着いた状況分析をしたりしなかつたりする。

主な武器は野球のバット（木製）。

ここまで自分の好みを持ちこんでくるともはや感心するが……当然のように戦闘の度に折れる（心も）。

だが、次の回までにはちゃっかり新しいバットをどこからか調達してきている。

（製作舞台裏）

本作品オリジナルキャラクター。

デザインも1からTopporoさんに考えていただきました。その節は本当にry

ファンフィクションにオリキャラを登場させるというのは、何とも照れくさいですね。

他の正規キャラクターに負けないよう、彼らを活躍させるつもりであります（ネタ的な意味で）。ちなみに三人の名前の由来はVOCALOID曲「卑怯戦隊うるたんだー」から。

えーと、とりあえずタンを見て「ガンの力 に似てね？」と言っつのは禁止です。

くまへるまーくろいじやっし  
・Gnos

>i9823—1218<

アンドロイドたちの生き様、世界を観察する？傍観者？という存在。

？ステルス迷彩？？空間転移？などの機能を持ち、あらゆる場所に出没する。

彼が何故アンドロイドを観察し、記録し続けるのか目的は一切不明。

高度な頭脳を持つが、喋ることが出来ず、左腕の液晶を文筆代わりにして他者とコミュニケーションを取る。

（製作舞台裏）

まず「くるくるまーくのすごいやつ」という彼の異称について、これはsuper cell作の初音ミク「くるくるまーくのすごいやつ」という楽曲の名前をそのまま引用したものです。

ちなみに『恋愛』をテーマに歌われた同曲ですが、その要素は微塵も引き継いでなく（苦笑）、完全に語感で名付けた次第です。

ステルス迷彩とか空間転移とか、後々『このチートっぷりをどう説明すんの？』と聞かれたら色々困るキャラクター。しかし絵師の



Topporoさんがこのキャラの設定を気に入っていて、何だか彼自身のバックボーンを含めて色々と考えてくれている様子。ありがたや。

・白トエト／黒トエト

> i9824 — 1218 <

白トエト（画像左）はエキスプロリズム専用のメンテナンス機関『ユートピア・タワー』で働くいわゆる医療ロボット。一体だけでなく何体もいるらしい。

『博愛プログラム』というのが組み込まれており、誰にでも分け隔てなく優しい。

一方、黒トエトは何かの拍子にプログラムが狂い、見事にグレて一匹狼を気取るようになった偏屈屋。セントラル北部の砂漠地帯に『サンドリヨン』と名付けたメンテナンスルームを立ちあげ、そこで『カネ』や『珍品』の譲渡を条件にアンドロイドの？命の修理？をする。

キレイごとが大嫌いで、美辞麗句を並べる白トエトのことを「めでたいやつら」などと揶揄し、また好奇心からメンテナンスの際にアンドロイドに様々な悪戯を仕掛けるなど小悪魔な面が目立つ。

（製作舞台裏）

名前の由来はGnosの異称と同様にトラボルタ氏作・巡音ルカ『トエト』という楽曲からそのまま引用したもの。こちらも原曲様の要素は一切引き継いでなく、完全に語感。

私めの作品にはそういった引用が多々あり、製作者様には本当に頭が上がらない思いであります……。

いやまあ、それをいっただらこの『ファンフィクション』の形をと

った本作品のアイデンティティそのものが危うくなるのですが（苦笑）

\* \* \* \*

第一部の登場人物紹介はこれにて終了です！ ワーイ！

第二部についてはまた追々。恐らくは部の終了の際にまとめて出すかと思われます。

それではまたッ！

## Rock・3? 追憶夢? (前書き)

本稿では「挿絵」を使用しております。

挿絵表示を「OFF」にしている方は、どうぞ「ON」にしてお楽しみくださいませ。

### Rock・3? 追憶夢?

マジ……マジでどこ行ったんだ……私の大剣? リヴォルヴ?

……

白い髪のアンドロイド・ハクは、ユートピアタワーの周辺をうろ  
うろ、自分の大剣を探し回っていた。

金髪碧眼へきがんの子　　そういえば名前を聞いてなかったけど　　がす  
っとんで行った後、閑散としていたタワー近辺はにわか騒がしく  
なった。

どうも? 失踪者が出た? とかで、その失踪者やらが所属する団の  
メンバーが数名エア・グライドで乗りつけてそいつを探しに来たと  
のことだ。

なるほど、それでさっきの? バリン!? というガラスの破砕音  
と、それに慌てて対応した金髪少年って図か。団員だったわけねあ  
の子。

いずれにせよ、私には全く関係のないツマンネ出来事だ。

ただうざったいのは、団員の一人が私にしつこく話しかけてくる  
こと……

「まさかこんな所で? 白豹はくひょうのハク? ねえさんに出逢えるとは……こ  
れも天のお導きでしょう。」

どうです?　一匹狼なんて辞めて、我が団・エクスプロリズムに入  
団しませんか?」

「い、いやあ、私はそういうのはちょっと……」

やたらに顔を近づけて白い歯を「キラッ」と見せつけてくる坊主  
頭で上裸のゴツイマツチヨと、その後ろでバットで素振りを続ける  
野球帽をかぶった少年。

この二人、私を一目見た時は、

「は、？白豹のハク？がなんでこんなところに！？」

「ウ、ウロ……団長に報告した方がいいかな！？」

なんて驚いてたくせに、

「なんか、前にボコされた時と様子が違うなウロ……？」

「あ、ああ……そして、良く見ると……か、かわいい……ポイン！  
！」

と、態度が一変。

「ところで、そこに俺の愛機？サイハテ号？があるんすが……どう  
です？」

これから一緒に空のお散歩でもいかがかと……（キラッ）

マツチヨの方がいきなり私にアプローチを仕掛けてくるようにな  
った。

野球帽の方は……さつきから必死で笑いをこらえてるんだけど、  
まだ素振りを続けてる。

オイオイ、空気は殴れねーだろ。まともぶってるけどこいつもこ  
いつで色々おかしい。

っていうかさつきから？白豹のハク？とかなんだろう……私って  
陰でそんな風に言われてたのかな……なんで……？分からない……  
……気味悪い……ああもう鬱<sup>うつ</sup>だ……死にたい……空が落ちてこないか  
な……ブツブツブツブツ……。

その時だった。

急に？ズドン！？と大きな爆発音がした。

更に音がした方で黄色交じりの黒煙が上がっている。

「な、なんだあ！？」

そうか……ナナシの野郎……？大破？したんだ！

つくう〜泣かせるぜ！ 野郎ども、さつきと爆発が起きた場所へと  
急ぐぞ！

裏切り者とはいえかつての戦友！ 骨ぐらい拾ってやるうぜー！

「あー……ウロお？ 多分違うと思うんだけどお……」

「いいからお前もグライドに乗れ！」

ハクさん！ 愛の空中散歩はまたの機会に！」

慌てた様子でそう言つと、マッチョは自分のエア・グライドに乗り込んでさっさと行つてしまった。他の団員も次々とその後が続いていく。

いや……マッチョの機体のカラーリング絶対におかしいだろ……。よりにもよつて？ピンク？だぞピンク。あいつ目え付いてんのか？

「おい、おい……！ ハク！」

> i 8 2 3 3 | 1 2 1 8 <

「……ああっ！」

さっきの金髪の子だ。

見つかるかとマズいのか、瓦礫がれきに身を隠すようにして私に話しかけてくる。

あれ、この子もあのマッチョたちの仲間じゃなかったっけ。

「もつとこつち来てくれ。もう辺りに誰もいないと思うけど、聞かれるとマズいんだ」

「あなたはあの人たちの仲間じゃないんですか？」

「いやまあそうだけど……とりあえずその説明は後だ。

ところで？ぐるぐるまーくのすごいやつ？の居場所……お前知ってるか？」

おいおい、？とところで？つて言葉で切りだす話じゃなーぞ！

「ああ、いや、まあ……知らないといえば、ウソになりますけど」「本当か！？ 教えてくれよ！」

「え、ええ……」

？大剣？を失つてからなんでこう……面倒事が立て続けに起きるんだらう。

変なマッチョに絡まれるし……しかも？愛の空中散歩？とやらの

約束はあいつの中で勝手に成立してるっぽいし……そしてなにより、この金髪の子……。

なんで急に？ぐるぐるまーくのすごいやつ？の居場所なんか聞いてくるんだろ？……。

いやそもそもなんで私は？知らなくもない？なんて言っちゃったんだろ？……。

「なあ、教えてくれるんなら早くしてくれよ。あいつら戻ってきちゃつよ」

さつきから色々と図々しいなお前！

「……いや、でも、そのお……これは教えちゃいけないことになつてるんですよ」

「ふーん。じゃ、知りたくないんだ」

「ふえ？」

「お前さ、？剣？を探してるって言ってたよな？

その剣の在りかを知ってる奴を一人さ……オレ知ってただよ」

な、な、な、なんとお……！？

「え、ちよ……」

「教えて欲しかったら……お前の情報とこ・う・か・ん、だ」

こ、こいつ……得意げな顔しやがって……！

私はお前を他の団員に突き出すことが出来るんだぞ？

自分の立場ってものをわきまえて物は言えよ……

「……で、どうする？」

「はい、教えますからその方の所へ案内してください。お願いします心から」

っあああああああ！く、口が勝手に……！

い、いや、背に腹は代えられないんだ……そうでしょ？ 剣の方

が大事でしょ？

「そうと決まったら……事は急げだ！」

金髪の子はパツと立ち上がって……腰にくくりつけていた黄色い手榴弾を一つ手に。

そして塔の三階、ガラスの割れた窓枠から室内めがけてそれを投げ込んだ。

直後に派手な爆発音が響き渡り、部屋から黄色交じりの黒煙が上がる。更にその部屋から「ぎゃあああああ！」っていう何者かの悲鳴も爆発音に紛れて聞こえた気がする。

ああ……さっきの爆発もこの子の仕業だったのね。

さっきの取引といい、マッチョらの陽動といい、今の爆破といい……。

よくもまあ、悪知恵が働くもんだなあ。

「な、なんだよ今度は……トエトが大破したってのか!？」

「あのさあウロ……爆発!!誰かが大破、って発想はもうやめた方が……」

「野郎ども急げ! これ以上仲間を……やらせてたまるかあああああああ!」

「……だから、誰もやられてないっての」  
「またも勘違いをしたウロは、エア・グライドを音の方へと急発進させる。」

それに続いて他のアンドロイド達も、呆れ顔のダーも後に続く。

その隙に二人は、瓦礫に身を隠しながら足早に逃げていくのだった……。



瓦礫の縁ふちに腰掛け、ぼんやりと……ナナシは一人鉛色の曇り空を見上げている。

「？ニンゲン？はね、こうして星空を眺めるのが好きだったんだって」

「ふーん。でもさ、いつも何にも見えないじゃん」

「今は……空を分厚い雲が覆っているけど、それが晴れたら、夜は、満面の空にいくつもの輝く砂粒が見える。それが……？星？なの」  
レンとそんな会話をする彼女に、隣で話を聞いていたナナシがふと口を開く。

「お前は本当に物知りなんだな。私たちが知らないことをいっぱい知っている」

「別にえらいことじゃないよ。むしろ……」

言いかけて、MEIKOは言葉を飲み込んだ。

ナナシや他の仲間たちも首をかしげる。

「いつになったら晴れるのかなあ〜」

レンの隣に座っている金髪の少女が、夜空を見上げて呑気そうに言う。

皆が見上げる空は真っ暗だった。星はおろか、月さえもその姿を隠している。

あたかもそんなものは初めから存在しないかのように。あつたとしても遠い童謡の世界のことであるかのように。

光源になっているのは、蠟燭ろうそくを模した蜀台しやくたいから放たれるLEDの深い藍色あじいろのライトだ。それを中心に、四人は会話の席を囲んでいる。毎夜のことだ。ごくありふれた日常の一片。一日の終わりが近づくと、四人は誰とも言わず集まって、自分の知らないことに関して

想像を働かせ、互いに笑ったり怒ったりする。

別に、彼らアンドロイドに必要なことではない。そもそも彼らは夜になったからといって、明日に備えて睡眠を取る必要がない。

エネルギーさえあれば、彼らは永久に不眠不休で活動できる。

しかし四人は毎夜のようにこうしているし、頃合いになるとLEDライトを消して眠りにつく。これはエネルギーを温存するためであるが、彼らにはそれ以上の意味があった。

瞼を閉じたら、今日の日はさようなら。

そして開けたら、また今日の日もおはよう。

それが四人にとって、ささやかだが自然でうれしいことだったのだ。

「? 生きている? ……特にナナシにはそう、感じられた。

「ちよつと前にさ……見つけたんだ。

? エホン? つていうのかな? 絵がいつぱい詰まってるやつ」

皆が寝静まった頃……ふと、レンの声が聞こえた。

その隣には金髪の少女もいるようだ。

二人の姿は宵に隠れ、そのシルエツトが並んで腰掛けている。

レンの口元が少女に対して「これなんだけど」というように動き、その手には長方形の物体が持たれていた。

それが彼の言う? 絵本? だろう。

二人はLEDの藍色のライトの近くに寄り添い合うようにして、ぱらぱらと絵本をめくっていった。

「? アクギャクヒドウ? の限りを尽くす王国があつて、

そこには十四歳になる王女様がいたんだ。

それでこの女の子は、海の向こうの青い髪のヒトを好きになる。

でもその青い髪のヒトは、隣の国の緑の髪のヒトに一目ぼれしちゃうんだ」

レンの少しかしまったような声が、静寂にこだまする。

あたかも夜の一部分かのように、その声は辺りの雰囲気によく馴染

染んでいた。

> i 8 2 3 6 | 1 2 1 8 <

「それで？シット？した王女様は、「緑の国を滅ぼしなさい」って  
言って本当にそうする」

「え……緑の国はどうなったの？」

「全部壊れちゃったよ。イエも、ヒトも、みんな壊れちゃうんだ。  
でも……これって悪い事だろう？ 赤い髪のキシが立ちあがって、  
みんなと一緒にお城を囲む。王女様は三時に？シケイ？ってことに  
なる」

「？シケイ？ってなに……？」

「うーん……なんていうか、その、悪い事をしたヒトを？クロス？  
ってことらしいよ」

「じゃあ、その王女様はみんなにコロされちゃうんだ。悪い事をし  
たから」

「……でもね、この王女様には顔が良く似た男の？メシツカイ？が  
いて……」

「うん」

「シケイになる寸前、そのメシツカイが王女様の？ミガワリ？にな  
ったんだ」

その時、ほんのわずかな雲の合間から、気まぐれのように月明か  
りが差しこんできた。

明りの源は姿を雲に覆われたままだが、そのか細い光はあたたかも  
月まで昇っていくための筋道、段無き階段のように見えた。

「あ……レン、あれ見て！ あれ……！」

「ええ？ うわ、なんか光ってるぞ……？」

「あれがホシかな……！？ なんか、とつてもキレイ……！」

少女はレンの話などそつちのけで、初めて見る月明かりにはしゃいでいる。

「あのさあ……リン、」

「ねえねえ、レン、あそこまで行ってみようよ！」

少年の言葉などどこへやら、彼女は月明かりが降り注ぐ場所を指さす。

「い、いやあ、それもいいんだけどさ……まずはオレの話を最後まで、」

「ほら、消えちゃうかもしれないだよ!? だったら早く行かないくちや!-!」

「う、うおお!?」

彼女はレンの腕を引っ張り、一直線に月光の差す場所へと走っていく。

恐らくその場所は、彼らの足を持ってしても一晩のうちには辿り着かないだろう。いや、永遠に、と言えるかもしれない。

しかしそんなことは考えにない彼女は、レンの手を引いて大はしやぎでその場所へ走っていった。

ナナシが見たのは、そこまでだ。

宵の遠くに二人の姿が消えていく。そこまで。

翌朝になって、二人はボロボロになって帰ってきた。

喧嘩でもしたのか、互いに目も合わせようとせすブスっとしている。

ナナシは二人が帰ってきたら昨夜のことをたずねようと考えていたが……聞けなかった。

結局のところ、レンが絵本を持ち出して少女に何を伝えようとしたのかは、分らずじまいだった。

\* \* \* \* \*

「おい、ナナシー。聞こえてるかおい」

レンの声が聞こえる。それもかなり近くから聞こえる。

「……あ」

「大丈夫かよナナシ？ ぼーっとしてさ」

ナナシは、空を見上げながらしばしの追憶夢にひたっていた。

レンに呼びかけられたことで解かれ、更に彼の隣に誰かの姿があることに気付く。

「……なんだ」

ナナシはレンの隣にあの？金髪の少女？がいると錯覚した。

しかし実際にいたのは、少女とは似ても似つかないグラマラスな白い髪の女アンドロイド。

それに思わず「なんだ」という言葉が口からこぼれてしまった。

これがハクのネガティブスイッチを「ON」にしてしまう事となる。

「一目見て……「なんだ」……だってさ……どうよ私……？」

なにこの……第一印象で諦められてる感？ 私ってそんなもん？

ブツブツブツ……」

「つかこんな所で何やってんだよナナシ！？ もうとっくに先に行

つてると思っただぞ」

二人は、ハクの事などまるで眼中にないかのように話をする。

「早くしないと追手が来るぞ！ さっき団の奴らがお前を探してた

！……」

「ああ……私も、先を急ぎたいのは山々なんだが……」

ナナシは立ち上がり、レンの目を見てはつきりと、

「道が、分からないんだ」

そう何の恥じらいもなしに言った。

「……ようするに、方向オンチってことだな？」

「いや、だから道が分からないと……」

「それを？方向オンチ？って言うんだよ……！！」

どうするんだよ、もう一つのトエトんとこの場所がわからなきや

……」  
そこでレン、隣で呪詛のような独り言を呟き続けているハクの姿が目に入る。

「……あ、多分、大丈夫だ。コイツが知ってるかも。」

「おいハク！ お前の出番だぞー」

「だからして……この世はすべからく……私につめた……はうあ！？」

ハクは呼びかけられるや否や、すぐさま現実世界に帰ってきた。

「お前ってさ、ユートピア・タワーの方じゃない、非団員向けのト  
エトの場所って分かる？」

「それはまあ……私もそこでメンテナンスしてもらってますし」

「その場所もさ、教えてくれない？」

レンは特に遠慮する様子もなく、軽い調子でそう言った。

そんな彼の言葉を受けた時のハクの思考はこうである。

まーただよこいつ……

いつも「教えて」って言うてくるくせに、私がタワーにいた時は、  
「うるさい！ 考え事してるんだ」とか言うて私の質問には答え  
てくれなかったのに……

私は便利屋じゃないっつーのっ！！

ハクの顔にそれとなく不満の色がにじみ出る。

「あ……なに、知りたくないの？ 剣の在りか」

ハクは胸の内では怒りをたぎらせつつも……。

「いや、ご案内させていただきますのでどうかご安心ください」

決して口から外へ出る事はないのである。

小心者というか、臆病者というか……。

「道案内をしてくれるのは助かる。」

それにしても……お前の顔、どこかで見た事あるな」

「私はあなたを見たことありませんけど？」

「随分とあの時と印象が違うが……私の記憶違いか？」

ナナシはハクの顔をじろじろと見つめる。

その隙のない黒い双眸そつぱうの鋭さに、ハクはやや腰が引けたが、自分の本来の目的を思い出すと、ナナシに向かって勇気を出して言った。  
「あ、あのぉ……私の剣の在りか、ご存じなんですよね……？  
あなたが」

「お前の剣の在りか？」

そこでレンが慌てた様子で横やりを入れる。

「わぁーわぁーわぁーっ！ ……知ってるって、良かったなハク！  
明らかに不自然なふるまいをするレンを、ハクは冷たい眼差しで見つめる。

レンは必死に「空気を読んでくれ」と眉間にしわを寄せてナナシへ視線を送るが……

「いや……私はいいつの剣の在りかなんて知ら、」

「わぁわぁわぁわぁわぁーっ！！ ……今思い出してるってさ！」

ナナシ、視線の意味に気付く気配など全くなく。

ハクとの取引のために「お前の剣の在りかを知っている奴がいる」と持ち前の悪知恵で嘘を吐いたはいいが、当てにしていたナナシはこんな調子。

いくら視線を送っても無意味だろう。

それに気付いた彼に残された手段は、強引に話題を変えて話をうやむやにすることくらいだった。

「じゃ、じゃあさ、次の目的地が分かったところでさっさと先を急ごうぜ！」

追手がいつ来るかわからないしさ、こんなところからはいちはやく退散退散……！！」

レンは矢継ぎ早に言葉を並べる。

「退散退散……！ ……今の彼が言つと、何だか追手よりも別の何かから逃げたいように思える。

「レン、本当に良いのか？ ……ここまでしてもらって言つのなんだが……」

既にどこかへ向けて一步を踏み出していたレンの背中に、ナナシ

が話しかける。

「良いつて……？」

「お前はエクスプロリズムの団員だろう？」

私は既に団を抜けている身だ。しかも逃げ出す形でな。

その私に協力するってことは……」

「別に協力してる訳じゃないよ。さっきだって言っただろ？」

オレは自分の記憶を知りたいだけだって。それと団は違う話しだろ」

彼はそう、まだ幼さの残る瞳に決意の光を浮かべながら言い張るものの、結果的にはナナシに協力する形となっている。

本人の言い分がどうであれ、傍から見たら明らかに団の背反にあたるような行動をしている彼を案じてナナシは忠告してやったのだが、今の彼には何を言っても無駄なようだ。

そしてその瞳に宿る決意の光に、ナナシは以前のレンの姿を見るようだった。

どれだけ記憶を消しても、変わらないものがある。

それは明確には何故か言いきれないが、本人の中から記憶が消えたとしても、現実から過去という時間を取り除く事は何を持ってしても不可能だ。

過去はその昔に確かに起きた？現実？として、未来永劫そこにある続ける。

たとえ本人が忘れたとしても、時計は覚えているのだ。

だから彼や今の自分も、もしかしたら記憶を消す前と同じような行動理念を持ってここに存在しているのかもしれない。存在してきたのかもしれない。

それにナナシは安堵するような気持ちになると同時に……ある種の罪悪感も覚えていた。

自分がこれから成そうと考えていることは、その最終地点は、つまり、それら連鎖と続いてきた過去の循環の輪を？初めからなかった？ことにしてしまうかもしれないのだ。

「あのお……お話し中申し訳ないんですけど」



ハクが遠くの空を見上げながら、二人の会話の空白を見計らって口を開いた。

「なんだよ、ハク」

「さっきから黒い影が二つ……空の向こうからこっちにやってきてるんですよ」

「あ……」

「まあ、私なんかの視力なんて当てになりませんけども……」

二人が話しこんでいる間に、何故だかネガティブモードが発動してすっかり卑屈ひくつになっていく彼女だが、少なくとも視力に関しては月並みの自信を持って良いだろう。

その事は第三者であるレンが、直後の叫びと共に証明してくれた。

「あのエア・グライド……エクスプロリズムのやつらか!？」

「……すまないが、この場は逃げる。今の私に飛行艇相手に戦えるような力はない」

「ああ、オレもそれには賛成だね!」

レンはナナシの傷ついた姿を一瞥いちへつ、次の瞬間には身をひるがえして走り出していた。

ナナシもよろめきながら後に続き、自分が第一に見つけた黒い影が敵機だと今さら理解したハクもあたふた走り出していった。

しかし、言うまでもなく相手は空の利を得ている。

障害物だらけの地を走るナナシらに追いつくのも、もはや時間の問題だった。

ブラックロックシューター  
B・R・Sを見つける…… B・R・Sだぞ…… 白い髪…… グ  
ラマラスボディ…… ボイン…… ボイン……。

ウロはエア・グライドを操縦しつつ、先刻のハクの姿が強烈に頭に残っていた。

団長の命令通りB・R・Sを探して捕えなければならぬのだが、どうしても、どうしてもハクとの（個人的に衝撃的な）再会に胸が高鳴ってしょうがないのである。

それに合わせて彼の思考も、B・R・Sから徐々に、タワーに戻ってみたらその姿がなかったハクを探すことに自然と焦点が行ってしまっていた。

そして単独でハク、もといB・R・Sを探し回る彼の目に、とある光景が映り込んできた。

「ぬ……なんだやつら見つけたのか？ 激しくやってやがら」

部下が操縦していると思われる二機のエア・グライドが、地上にいる黒いツインテールの女アンドロイドを中心に飛び回り、手持ちの武器で攻撃を繰り返している。

一人は鎖付きの無骨なハンマーを飛ばし、もう一人は？マシンガン？を乱射している。

「なんて汚いマネしてやがるんだ……」ウロは部下二人のずる賢い戦い方に内心呆れたが、その目はすぐにある者の存在に奪われる。そして部下二人に対する？呆れ？は、自らが赴いて肅清ちやうせうしなければという？悪に対する怒り？へとすり替わっていた。

細長い鉄刀を右手にどうにか応戦するB・R・Sの近くに、両手で頭を抱えてうずくまる？ハク？の姿を見つけてしまったのである。「てつつつ…… つめええらあああああああああああああ

あー！」

ウロは愛機？サイハテ号？のブーストを最大出力にしてすっ飛ばす。

彼の頭に「B・R・Sを捕まえる」という団長の命令はとうにない。あるのはただ、今や銃火が過ぎ去るのを身を丸めてしのぐしかない弱いマイ・プリンスを救うというナイトが如き使命感だけである。

「ヒイっ!？」

ハクのすぐそばを、相手の放ったマシンガンの一発が横切った。

地面に弾丸と同じ形の穴が空いている……。これが自分に当たったらと思うと、彼女はパニックに陥りそうになった。

しかし「きゃあああああ!」と悲鳴をあげて立ち上がるものなら、それこそマシンガンの的になってしまふ。

ハクは近くで横倒しになっていた瓦礫の壁に身を隠すようにして、必死に身を丸めてナナシが危機を打開してくれるのを待つしかなかった。

だが……さっき見た限りナナシの持っている武器は？刀？だったような気がする。拳銃も取り出して応戦しようとするも、弾切れなのか結局使われることはなかった。

しかも万全ではない身体で……今戦っているのだから追いつめられて止むを得ない形だ。

そこで相手はエア・グライドで空の利を得、かつ飛び道具を用いている……。

ハクは、自分の中で「銃 > 刀」という等式を作り上げて一人恐怖すると更に身を丸め、背後で鳴り響く激しい銃声が止まないのをひたすら祈っていた。

止んだらそれはナナシの敗北を意味し、それは自分の終わりを意味している。

いや、彼女はいたって部外者、無関係者だが、恐らくは「生け捕りにしろ」と言われている筈の逃走者に対して、「もし当たって死



つてきた上裸の闖入者やんごっすという結果になった。

もう安全だと事態を読んで立ち上がったハクを見つけたウロは、全身に「やってやりましたよ」感をかもし出しつつ、彼女に渾身のウイंकを飛ばした。

しかしウイंकを飛ばされた彼女がウロに対して感じた思いは、恩義でもましてや恋心でもなく、単に、

こいつ、相変わらずきめえ……

という嫌悪感であった。

\* \* \* \* \*

「いやー、不届き者がいるもんですなあ。

ああもちろん？ やつらはエクスポリズムの団員なんかじゃないつすよあ？」

ヘラヘラ笑いつつ、ウロはバレバレな嘘を吐いている。

しかも彼はナナシを前にしてもなお本来の目的を忘れてしまっているようで、そればかりかその視線は一点にハク（主に乳の谷間）へと注がれている。

「それにしてもハクさん……あなたを救えたことを、ワタシは誇りに思いますよ」

一人称まで変え、急にかしこまった口調になったウロは、愛機サイハテ号の機体を右手でさすっていきながら、その向こう側まで優雅な足取りで歩いて行った。

いや、あくまで？ 本人としては？ 優雅な足取りのつもりなのだ。第三者にとって、その足取りは「体躯に合わない振る舞い」「無駄にスロウリイ」であったとしても、ウロ本人にとっては紳士を気取っているつもりなのだ。

そして彼はハクとの間にピンク色の愛機を挟み、彼女に背中を向



？ふひゆううううううううう……

空風横切る誰もいない廃墟の光景のみが、彼の目前に寂しく広がっていた……。

\* \* \* \*

「なんか、運が良かったな、オレら。  
あいつら仲間同士で勝手にやりあってくれるし、これはもらえちゃ  
うし」

レンは、ナナシの運転する紺色の機体に先刻頂戴したサイハテ号  
を寄せつつ、笑みを浮かべて言った。

彼の後ろにはハクも乗っていて、機上が狭いのと高所が怖い所為  
か、機体の前部を半円状に囲んでいる鉄柵を両手でしっかりと握り  
しめ、目をつぶってうずくまっている。

レンのお尻のすぐ下に、ハクの顔面が位置しているといった何と  
も珍妙な図である。

「ところでナナシ……メンテナンスを受けた後は、？ぐるぐるまー  
くのすごいやつ？のところに行くんだろ？」

レンがそう問いかける相手は、こちらと目を合わせようとせず、  
前だけを見据えている。

その衣服や身体は先程の戦いで更に傷ついてしまっていた。致命  
傷だけは避けられたものの、弾丸のいくつかが彼女の身体をかすめ、  
腕や太ももの側面に痛々しい裂傷れっしょうを作っている。

しかし、当の本人は全く意に介していない様子で、

「ああ」

と、素っ気ない返事でレンに答えた。

「でもさあ、その後はどうすんの？」

記憶を取り戻した後だよ。つかオレみたいに前の記憶を消した訳で  
もないのに、なんでそうする必要があるんだ？」

その質問の答えは、自分にも言い聞かせるような意図もあったのか、ナナシは一言では済ませなかった。

「私が知りたいのは、自分たちアンドロイドの起原だ。つまり、私は自分が生まれた時……一番初めの記憶が欲しい。お前とは少し異なるが、欲している物自体は一緒だ。

消してしまった自分の記憶……自分の意思で消したかどうかは、分からないがな」

「じゃあ、それを取り戻して、自分たちの起源とか色々分かったとする。

その次にどうすんの？ 知ったところで何になるの……？」

その言葉は、そっくりそのままレンにも言えたが……。

ナナシは握るハンドルに視線を落とし、間を挟んで彼の問いに答えた。

いつものように無表情で、淡々とした声。

しかし、その言葉の終わりには、わずかな抑揚の変化に彼女の感情が垣間見られた。

「さっきも言ったな？ この世界は？ 終わっている？ と……。

だから私は、この世界を ……」

彼女は迷いなど微塵も感じさせない頑な口調で、はっきりと言いつ放つ。

「元からなかったことに……つまり、？ あとかたもなく壊すつもり？ だ」

見間違えかもしれない。

レンは彼女の黒い左目に一瞬、？ 蒼い炎？ が小さく燃え上がったのを見た気がした。

\* \* \* \*

薄暗い空間に、赤、紫、青のライトが交差している。

ドクロや恐怖に歪む者のデスマスク、蛍光色に輝く液体に入れら



れた試験管詰め謎の肉片。

そんな悪趣味な品の数々が壁に沿ってディスプレイされ、怪しい色合いの照明と相まって空間に一層の邪悪さを与えている。

こんな魔女の館のような気味の悪い部屋で、大小のシルエットが何事かやりとりしていた。

それは一方にとっては命乞いで、もう一方には悪趣味な品をまた一つ増やすための好機だった。

「？カネ？がない……？ それは残念だ。キミは？死ぬ？しかないネ」

「ま、待つてください！ 代わりになるようなモノを持って来てあるんです」

「ほう……それはその、キミが背中にしょっている？大剣？のことかな……？」

その大きなシルエットの男……青いライトに照らされたその身体は、至るところに裂傷（ひびきず）が走り、満身創痍（まんしんそうい）であるのが薄暗の中でも一目で分かる。

彼は慌てた様子で背中にしょっていた大剣をおろすと、まるで王様に差しだすかのようにひざまづき、腰掛けの丸い椅子にふんぞりかえる小さなシルエットへとそれを献上した。

「ふむふむ……」

その小さな物体は、献上品を端から端までしげしげと眺め、そして息を呑んだ。

「こ、この剣……激しく見覚えがあるんだけど……」

「？黒トエト？様……いかがです？ こちらをカネの代わりに……」

「いやぁ……その、だねえ、ならないことはないよ？ オレっちもすんごく欲しかったし……」

「で、では……！」

男は希望を手にしたかのようにパアッと明るい表情になる。

しかし？黒トエト？と呼ばれた方は、やや恐怖が滲むような、妙な面持ちで、

「う、うーん……どうしよう……あいつはいま剣を持っていないわけだから……」

「じゃあ隠せば大丈夫かなあ？ でも、うーん……弱気なあいつでもここへ来ないとは限らないし……」

「あ、あのお……黒トエト様？」

ブツクサ言いながら、黒トエト様はご思案中である。

彼の脳裏に浮かぶは、かの？白い髪の悪魔？……

しかしその悪魔を呼び覚ます召喚アイテムがこうして目前にあり、今や我が手中に収まるうとしている。

彼は小さな身体で熟考に熟考を重ねた結果……。

「……よし、分かった。キミをメンテナンスしてあげるよ。特別に」

「ほ、本当ですか！？ 助かったあ……」

「ははは、あがめたまへひざまづきたまへ。？負け犬アンドロイド？よ……」

ちなみに彼の？熟考？というのは、時間の流れでいう所のせいぜい5、6秒である。

ようするに欲に目が眩んだだけだ。

彼は？カネ？に始まり、？ニンゲン？たちがその昔に使っていた遺品を好む、アンドロイド相手に？命の修理？を交換条件にした意地悪な収集家なのである。

t o b e . . . c o n t i n u e d .

&lt;&lt;Chapter 3>> (後書き)

次回 予告

Rock・4?カタストロフ・イン・ザ・ダーク?

乞うご期待

## Rock・4?カタストロフ・イン・ザ・ダーク? (前書き)

本稿では「挿絵」を使用しております。

もしも挿絵表示を「OFF」にしている方は、「ON」にしてお楽しみくださいませ。

## Rock・4? カタストロフ・イン・ザ・ダーク?

私はいつものように、アンドロイドたちの観察を続けている。

そうは言ってもこの広い土地、そこに何百とまばらに存在するアンドロイド全ての生き様を同時に見ることは当然出来ない。

いくら? 空間転移? が出来る私といえど、その身体はこの世に一つしかないのだ。

だから私は完全な独断と興味に基づき、最近はとある2人のアンドロイドにスポットを定めて彼らの行動を追っている。

金髪碧眼<sup>へきがん</sup>の少年。

全体的に暗色が印象的なツインテールの女。

実に面白いことに、彼らはどうやら私を求めて行動しているよ  
うなのだ。

すぐ間近に当の本人がいるというのに……別にこちらから出て行っても構わないのだが、それでは? アンドロイドの生き様を観察する? という私の立場から逸<sup>いつ</sup>してしまう。

私はあくまで彼らの生活、日常を、第三者として見つめ、考察し、記録するだけで、あちらから何らかの干渉がない限りは、自分の方から手を差し伸べてはならないのだ。

まあ、あの白髪<sup>はくはつ</sup>の女が私の拠点へと二人を案内してくれるようだから、彼らと逢う時も近いだろう。

それまではいつも通り、私は観察・記録に徹するのみだ。

白髪の女が加わった三人は、エクспロリズムの団員から奪取したエア・グライドを駆り、セントラル北部にある小規模砂漠地帯へと飛び立って行った。

恐らくは黒髪の女のメンテナンスをすべく、ひとまずは? 黒トエト? が一体で切り盛りをするメンテナンス施設へ向かうのだろう。

こちらはエクспロリズムが自分たちの専用メンテナンス施設と

して占領下に置いてあるユートピア・タワーとは異なり、団員だろうが？野良？であろうが、黒トエトの望む物さえ用意すれば、誰でも施しを受けられる場所である。

基本的には人類がその昔に使っていた？カネ？さえあれば受けられるが……あの三人がそれを持っているかどうかは甚だ怪しいところだ。

白髪の女に期待が出来そうだが、どうやら彼女は普段、カネ以外の手段でメンテナンスを受けているようだし、やはり持っているかどうかは疑わしい。

まあ、いつも強引な彼女のことだ……結果的には何とかなるのだろう。

黒トエトのメンテナンス施設が？隠れている？セントラル北部の砂漠地帯は、その砂の色が黄色ではなく、瓦礫がれきをミキサーでそのまま細粒化したような灰色である。

その砂丘がラクダ山のように連なり、いくつものなだらかな起伏を成している。

まるで生命の何もかもが火葬に処され、その灰が積もりに積もったかのような場所。

そんな所にいま、三人の乗ったエア・グライドが二機、それぞれ着陸した。

かの筋肉隆々（きんにくりゅうりゅう）なアンドロイドから奪取したピンク色のエア・グライドから、先に金髪の少年が降り立つと、同じ機体に相乗りしていた白髪の女が恐怖から解放されたかのような安堵の表情で、ふらふらと立ち上がった。高所が苦手なのだろう。黒髪の女も近くに降り立つと、二機のエア・グライドを並べて置いたまま、案内役である白髪の女の後を少年と共にいった。

歩き出して間もなく、白髪の女は何の変哲もない場所で立ち止まった。そこは起伏のない平らな砂地である。

その上に、周囲と同じ灰色をした厚みのない長方形の板がぼつんと落ちている。

全くシンボリックな気配のない実に瓦礫然とした代物だが……白髪の女は板の端をおもむろに持つと、それをめくるように取り扱った。

すると板が敷かれていた場所に、地下へと続く階段が現れた。

私の位置からはその入口がわずかに見えるだけだが、少年が何にもない場所から忽然と出現した地下空間にひとしきり感嘆した後、白髪の女を先頭に三人は階段を下りていった。

その最後尾……黒髪の女は、何らかの気配を感じ取ったかのように、階段に足をかける寸前でピタッと止まり、周囲を見渡した。

私の存在を察知したのか？

そう慌てることもなく、私は自分の身体を周囲の色に溶け込ませる。

言ってみれば？ステルス迷彩？の原理だ。

そして何も無いことを確認すると、彼女は二人の後に続いて行った。

思えば……金髪や白髪もそうだが、特に彼女とは長い付き合いだ。もちろん彼女と面を合わせて話したことはない。

あくまで一方的に私が彼女を知っているに過ぎない。

その過去を。彼女がとうに覚えてはいないだろう部分を。

私は実際に見て知っている。

例えば……彼女は先刻、エクスプロリズムの団員と止むなく戦うことになっていたが、上空から攻撃してくる相手に応戦するため、彼女は刀とは別に？銃？もインストールしていた。古くから彼女が愛用している黒いデザートイーグル型の拳銃である。

弾切れだった所為が使われることなく、すぐにチップの中に戻されたが。

私は偶然にも……彼女がそれを入手するまさにその瞬間を見つめていた。

アンドロイドに銃や機関銃の類は通用しない。





すると拳銃は瞬く間に粒子と化していき、辺りの殺伐とした空気の中に消え入った。

こうして人類が自分たちの希望を掴むために？対アンドロイド用兵器？として新規開発した武器の一つが、皮肉なことにアンドロイドである彼女の手に渡った。

別に深い考えなど彼女にはなかっただろう。

たまたま空きのチップを持っていて、彼女はその用途を見出しただけに過ぎない。

そして彼女はそれを手に、再び人間たちの殺戮さいりくを繰り返していく。

三人が地下へと入って行ってから、20分ほど経った頃だろうか。私が見続けている光景に変化があった。

例の出入り口から、あの金髪の少年が颯爽さつそうと出てきたのである。

そしてエア・グライドがある場所へと足早に駆けていくと、二機のうちどちらに乗るか悩むような素振りをした後、結局は自分が乗ってきたピンク色の方を選んだ。

少年が向かう場所はもう分かっている。

ならば私も、そこで彼を待っていないければならないだろう。

彼もまた、あの黒髪の女のように、自分の記憶を取り戻したがっている。

それは一向に構わない。私を求めるのならば、いくらだってくれてやる。元はといえばその記憶は、他ならぬお前自身のものなのだから。

ただまあ……？過去の自分？に打ち勝てたら、の話したが。

今日はきつと？厄日やくび？だ……トシヨカンってところで入手した辞典を引いて見ると、「災難にあつた日。嫌なことのあつた日」  
って意味の言葉だつて。

まさに今のオレツちの状態だよクソア！！

薄暗い魔女の館のような不気味な空間に、一人のアンドロイドと、  
どういった単位で呼べば正解なのか分らないが、とりあえず一匹の  
全身真っ黒な小さいロボットがいた。

胸が縦に長く、両手足が短い。そんなまるでオコジヨのような見  
かけをしたこのロボットは、腰掛けの丸い椅子の上に両足を立て、  
体躯の割に大きなパソコン画面に向かつている。

この黒トエト様に向かつて、毎度のように脅しつけやがって  
あのアマ……。

？黒トエト様？と自らを呼称する彼は、あたかも吐き出せない内  
面の怒りをぶつけるかの如く、叩きつけるような荒々しい手つきで  
キーボードに何かを入力し続けていく。

？ズダダダダダダダダ！？……部屋にはそんなタイプ音が耳  
うるさく響いている。

「っあ　　っうっせえよさつきからあ！！」

突如、後ろから怒鳴り声が届いてきた。

しかしその声は男のように野太くはなく、やけに粗っぱいが質と  
しては女の声である。

黒トエトはその声に「ヒイツ！？」と全身を身震いさせると、ピ  
タッとタイピングを止め、ゆっくりと後ろを振り返った。

それはまるで「ギチギチギチ……」と首の関節が鳴る音が今にも  
聞こえてきそうなくらい、恐怖に凝り固まったぎこちない動きだつ  
た。

「いや、ちょ、こ、これはですね、メンテナンスには必要な作業でして……」

「あんだと？ ならしうがねえが……もつと静かにやれよ。でないと、」

その声が聞こえたのも束の間、天井から縄一本でぶら下がる橙ただいの電球の、その光の円の外から……、  
？ シュフィン！？

平たい両刃の先端が、黒トエトの目前で勢いよく振り止められた。

「ぶち壊すぞ、黒・ト・エ・ト・？」

「ヒイヒイヒイヒイヒイ！？」

「返事はどうしたあ！！」

「し、ししし、心底リョウカイしました？ハクねえ？様ツ！ ですので何卒剣を下ろして頂くと凄まじくハッピーなんですけどどうかツツツ！ お願いできないでしょーか！？」

「ああん？」

？ チャキ？……縦に向けられた両刃が、橙と相まった銀色の輝きを放つ。

「ヒイヒイ、」

「うつせえーオラアツ！！……わーったよ、もう何もしねえって」

「ホツ……」

「ところで、あねさんのメンテはどれぐらいで終わる？」

「はっ、只今鋭意作業中でありまして、明日の早朝には終わるか、

……  
言葉の続きをさえぎるように、一度振り下ろされた刃がまたトエトの目前で止まる。

「……1時間で終わらせる。出来ないとは言わせねーぞ」

「いや、その、えと、トエと……。無理じゃないです、がんばれば……」

「ああ、死ぬ気でがんばれ。じゃ、あたしはちよっくら外の空気を吸ってくるから。」

こんなクソ暗い部屋にいたら胸が詰まりそうなんぞな」

ハクは右手に？大剣？をたずさえ、光の円の外へと去って行った。部屋の入口付近にある赤、紫、青のライトが、そこを通るハクの背中に当たる。

三色の光が演出する邪悪さに……未だ全身の震えが止まらない黒トエトは、固定された視線の先にあるハクの後ろ姿に、あたかも？悪魔？を見るような印象を受けたのだった。

先程までのネガティブな白髪女はどこへやら……それとまるで同じ容姿をした女は、頭に二本の角を生やしているんじゃないかというぐらい生命力に溢れていた。

怖い……怖すぎる……もっとちゃんとあの太剣を隠しておけばよかった……。

布を巻いて「開封厳禁」だなんて張り紙をくつつけたぐらいじゃダメだった……。

黒トエトは「ずうん」と自己嫌悪に陥ったが、ハクのガーゴイルの如き形相が脳裏を過ぎり、慌てて作業を再開した。

「あの性格バイリンガルめ……オレツちがいつも治してやってるっていうのによ……お前はここを失ったらどこでメンテを受けるんだ？ ああ？ 行く当てなんてねーだろうが……？ 負け犬？のクセに……ナマイキだ……ナマイキナマイキナマイキ……」

そう、まるで剣を持っていない時のハクの人格が彼に取り込まれたかのように、ブツクサとありったけの不平不満を口先に並べながら。

\* \* \* \*

真つ暗な背景に、蛍光色の小さな文字がびっしりと敷き詰められている。

何の心得もない者は、その膨大な量の文字を前にしただけで頭痛がしてくるだろう。

しかし黒トエト、彼の場合は違う。

ついさつきまであれほど苛立っていたのに、パソコン画面に浮かぶ蛍光字を見つめている内に少し、いやかなり和らいできた。

それどころか今や愉快的気分になってすらいる。

？ナナシ？と言ったつけ……うちじゃ初めて扱うんだけど、面白いやつだな。

こいつはその存在だけで十分力ネの代わりになるよ。身体の機関から考える事まで全部、他のアンドロイドと違って素晴らしく魅力的だ。イイねイイね、とても気に入った……。

黒トエトが作業をするデスクトップ周辺は、メインモニターの他にいくつもの小型パネルが取り付けられており、他の周辺装置と相まってさながら要塞のような有様である。

そしてその要塞の主が食い入るように見つめている画面には、今はメンテナンスホールに入っているナナシから吸いだしたソースの海が広がっている。

彼は慣れた手つきでキーボードを操作すると、脇の小型モニターに同じく蛍光色とある図が浮かび上がった。

それは現代で言う所の？バイオハザード？のロゴマークにそっくりだった。

うっほ。現物を見るのは初めてだ。？アズルブルー？を生成する機関？メルトリカ？……こんな形してんだ。思ってたよりコンパクトなんだなあ……。

彼はメインモニターと合わせて計5つにもなるモニターをしげしげと、世界の真理が詰められた書物をひも解いていくかのように見ていく。

どれもこれも珍品好きな彼を刺激する情報ばかりだったが……その中でも特に彼が興味をそそられたのは、ナナシの思考回路を解析したデータ群、つまり、彼女の？ココロ？だった。

何こいつ……疑念の塊じゃん。

目の前の現実、自分の存在、他者の存在、世界の存在、生の意味、

死の意味、……何から何まで疑い尽くして、しかも何一つろくな答えも出せてないまま放置されてる。

特に自分の存在価値に関しては、こいつ悩みすぎだろ。

ばっかじゃねーの？ そんなん考えたってしょうがないのにさ……。

次の文字列に目を移した時、彼の手がピタリと止まった。

へえ……そんな疑問を全部ぶち壊す為に、こいつはこの世界そのものを壊すつもりなのか。そんでそのための手掛かりを掴むべく、自分が誕生した時の記憶を欲しがってる。へえ、へえ、へええええええ……。

そう思い至った時、黒トエトの口の端が怪しく歪んだ。

背後の壁には、ドクロが青のライトに照らされて不気味に笑っている。

ちよつとした悪戯いたずらを仕掛けて、それで誰かが破滅していく様を楽しむかのような嘲笑。自分は絶対に安全な場所にいながら、奈落の底へ落ちていく者どもを見下ろす時の顔。

黒トエトはそんな笑みを浮かべるドクロと、寸分たがわなない表情をしていた。

おめでたい白トエト共には永遠に分からない。あのギゼンシヤどもは、メンテナンスの醍醐味が元気に全快したアンドロイドの姿を見ることだと思ってやがる。

クソが、そんなんじゃねーんだよっ！……普段は決して見ることのできない部分が、いともたやすく見られることに決まってんだろーが。

そして……奴らの身体をどうするかつても、オレツちの気の向くままってワケだ。

ある種の好奇心に支配されている彼は、揚々とした様子でぴよんと椅子から飛び降りた。

その軽快な足音は、引き出しがいくつかあるサイドボードへ向かい、用が済むと来た道に胸躍るようなスキップのリズムが刻まれて

いく。

彼は再びデスクトップに向かうと、腰に付けたポシエットから4、5枚の黒いチップを取り出した。

それは今しがた、彼がサイドボードの引き出しから持ってきたものである。

そして彼は……雑多な物で溢れかえる机上の中から、読み込み用のインターフェースを見つけ出すと、その挿入口に無造作に一枚選んだチップの先をあてがった。

この、入れるか入れないか。もしいま誰かに背中を押されたら入れて？しまう？ようなこのスリルが、彼にはたまらなく快感だった。

大丈夫大丈夫、ちゃんと身体の方は治してやつからさア。それも超特急で。

ま、これから色んな奴らの記憶を取り込んで、お前の精神がどうなるかは保証しないけど。

でも壊れちまった時はお前の記憶を消せばいい。たったそれだけで全部済む。

そんなもんなんだよ、……お前らアンドロイドの存在なんて。

小さな悪戯好きの口元は、チップが挿入口へと入っていったことで最高潮に歪んだ。

？ウイイイイン……？とインターフェースの中でチップが読みとられていく音がする。

？厄日？とかって言ってたっけ……？　なんだよ、やっぱり良い一日になりそうじゃんか。

はてさて、どんな結果がモニターに浮かび上がるのやら……。

向かいの小部屋の中で眠っているナナシは、これからちよっとした夢を見る。

今はどうしているか分らない誰かが、その昔に確かに見た現実。脳裏に刻まれた時間。

そんなともすれば？悪夢？と言えるかもしれない映像を送り込ん

だ者が言む館の名は、

？サンドリヨン？と聞いた。

T o C h a p t e r 3



気がつくと、私の身体にはまた、？赤い液体？が付いていた。

それと同じモノが、足元に伏している？ニンゲン？の身体にもある。

ただしそれは？付いている？というような程度じゃない。

この世界には雨が降ると水たまりが出来るが……それと同じ赤い液体の溜まりがある。

そこに首のないニンゲンが身体を沈めている。

初めからこうだったのか？

次の瞬間に私は、それが違っている事に気付く。

初め、ニンゲンにはちゃんと首がついている。

それを私が、クロガネで薙ぐことによって切り離れた。

首が飛ぶ。断面から赤い液体が勢いよく噴出する。ニンゲンは倒れる。首もそこらへんに転がる。

最後に頭と胸が離されたニンゲンが、もう何も喚くことなく赤い溜まりの中にいる。

これが、？死？……？

じゃあ？生きている？という状態は、その逆のことなのか。

私は知った。

首と胸が繋がっていて、声を発することが出来て、両手足を自由に動かすことが出来て、両目から透明な液体を流すことが出来て、私の足元にひざまづくことが出来るのなら、そのニンは生きているってことなんだ。

そして私がそうは出来ない状態に追いやると、ニンゲンは死んだ  
ってことになる。

それは？殺人？というんだ。

ああ、そうなのか。

私のしていることは殺人なのか。

どうしてこんな殺人ばかりを繰り返す？

分からない。

ただ、そうしないとダメのような気がする。

どうしてダメなんだ？

分からない。

でも、そうしないと自分は消える気がする。

消える？ それはどういうことだ？

分からない。

なんで自分があるのかも分からない。

どうして？

分からない。

分からないけど、私はニンゲンを殺している。殺していく。

でも……ある日、小さなニンゲンがいたんだ。

？コドモ？っていうらしい。後から知ったんだ。

私はそいつを殺そうとした。  
他のニンゲンと同じように。そのコドモも両目から透明な水を飛ばしながら喚いていた。  
私はクロガネを振りあげる。いつもと同じように。次の瞬間にはこいつの首が飛んでる。  
……そう思っていたら、一人のアンドロイドが、私の邪魔をしてきた。

アンドロイドが？ お前と同じやつじゃないか。

そうなんだ。

だから訳が分からなかった。

そいつは目の前のコドモを殺そうとしないし、逆に私を殺そうとしてきた。

戦うしかなかった。でも別に要領はニンゲンの時と変わらない。クロガネをそのアンドロイドの首めがけて横に薙ないだ。その瞬間に、私の頭にとある思いが浮かんだ。

今までと違うやつに、刀が通じるかって？

その通り。

刀を振れば、ニンはすんなり斬り裂ける。

鉄骨やコンクリートも試したが、こちらも斬れないことはなかった。

でもアンドロイド相手に刀を振った試しは一度もない。だから思った。

？斬れるのかな？って。

それで？

右から入った刃は、相手の首の真ん中で一度止まった。  
内部の骨組みに引っかけたらしい。

右半分が裂けて、アンドロイドの首はとれかかっていたけど、そいつはじっと見てくる。

私をじっと見てくる。

何て言ったらいいか、とにかく、今までに私が見たことのない目で。

しっかりと瞼まぶたが開かれた目で。

私を、私の目を、貫くように見てくる。

私はどうすればいいのか分らなくて、とりあえず、刀を思いつきり左に振り抜いた。

すると……完全にアンドロイドの首が飛んで、胴体はひざから崩れ落ちた。

死んだのか。

ああ。そうらしい。

そしたらあのコドモが、アンドロイドの下へ駆け寄っていった。

目が開かれたまま口を紡ぐ顔を胸に抱いて、両目から透明な水が溢れでていた。

そのアンドロイドとコドモは、特別な関係にあったんだ。

それは良く分からない……。

だから私は、アンドロイドの首を胸に抱いたまま、こっちを見上げてくるコドモを……

悲しみと憎悪が入り混じった目をしていたはずだろ。その？  
女の子？は。

何もかも分からなかったから、殺したんだ。

そしたら、そのコドモは、もう私を見ていなかった。

たぶん、自分の身体と、それまで抱いていたアンドロイドの顔を見  
てる。

もう何も見えてないよ。お前がそうさせたんだ。

私が……？

殺したんだって、はっきりそう自分で言ったばかりじゃない  
か。

そうだな。私が殺したんだ。

でも、でも、私はその後、同じような二人組に逢った。

その時は殺さなかった。コドモも、白い髪のアンドロイドも。

だから？

え……

お前は何をしてきたんだっけ。

ニンゲンを殺してきた。

その後は？

ニンゲンが殺せなくなった。

その後は？

初めは呼び方が分からなかったが……？仲間？が出来た。

その後だ。

その仲間の一人を……？殺した？

ほら

止めて……っ！ 止めてよ……。  
せつかく、せつかく立ち直れたんだ。

忘れたってことか？

違う。そうじゃない。

忘れるものか。

忘れないって決めたんだ……。

決めたんなら、どうする？

\* \* \* \*

スポットライトの下に、両膝を抱えてうずくまるナナシの姿がある。

その背後の暗闇から、彼女の声が彼女の背中に向かって投げかけられている。

その多くは質問であったり、罵倒であったり、彼女自身の独白であつたりする。

無限に飛んでくる言葉の大群に……彼女はすっかり疲れ果てて、頭を垂らしていた。

そしてまた、彼女の声が暗闇から聞こえる。

結局、何が分かったんだ？

ナナシは答えない。

私たちが何も分からなかったように、お前も何も分からないんだ。

ナナシは答えない。

お前に出来ることなんてあるのか？ 存在する意味なんて……あるのか？

その言葉に、ナナシは左腕の黒い腕時計を見やる。そしてもう使われることがないと思われたその声帯は……静かに震われる。

「お前ら、一体何人いる？」

光の中からの問いかけに、暗闇からの返事はない。

「……何も分からないさ。  
だが、分からない時、私は決まって、目の前の何かを壊してきた。そうするしかなかったから……。  
だから私は、それをまたするんだ。今、ここで」

ナナシは静かに立ち上がった。

白い光の円の中で、彼女の凜とした姿が浮かび上がる。

彼女は掌を向け、スポットライトの光源に向かって右手をのびた。

次の瞬間、まるで光の中から取り出したかのように、彼女の右手には？クロガネ？が握られていた。

そしてそれがスイッチとなったかのように、漆黒の隅々にまで白い光がパツと行き渡った。

> i 8 4 7 3 — 1 2 1 8 <

スポットライトの円の中にいたナナシを一人取り囲むように、彼女と全く同じ容姿をした者たちが何百という数で周りに群がっていた。

暗闇から聞こえていた声は、全て彼女たちのものであった。

ナナシは完全に孤立している状態にも表情を変えることなく、いつもの黒い双眸そつぱうで、前方にいる自分と瓜二つの者の姿を捉えると……クロガネを強く握りしめた。

「全員かかってこい……。一人残らず、ぶち殺す」

何人ものニンゲンを、アンドロイドを斬り裂いてきた、限りなく黒に近い白銀の刀。

それが今、これからまたいくつもの閃きを見せる……。今度は過去の自分たちを？殺す？ために。



「ふぁ…………… 暇だったらありやしねえ。身体がムズムズしてくる」

ハクは小高い砂丘のてっぺんであくらをかき、大きなあくびをした。

いや、？ハク？とは言うものの…………… 名と容姿が同じなだけで、実は全くの別人じゃないかというぐらい雰囲気が一変しているのだが。

その右手には、刃を平たく地面に寝かせるようにして、彼女が散々探し回っていた大剣？リヴォルヴ？が握りしめられている。ごく自然に、しかしもう二度と離さないといった感じだ。

？風？が出てきたな……………。本当は吹いてちやいけけないのによ。ハクはそよ風を身を感じつつ、灰の砂地にベタツと背中をつけ、空を仰ぎ見た。

吹いてくる筈のない風……………いつまでも曇っている空……………恐らくは、彼女とごく少数しか知らないだろうその？理由？

自分の毛色を少しトーンダウンさせたような空を見ていて、彼女はふと追想する。

？お母さん？が言ってたんだけどね、風はビョーキを連れてくるんだって。

？ビョーキ？？ なんだそれあ。

うーん、とにかく、ゴホゴホって咳しちゃう感じ。

セキ……………？ おいおい、あたしの知らないことばっかで困るぞ。

じゃあ？宿題？だね！ 今度までに覚えてくること。

あたしは頭を使うのはニガテなんだけどなあ……………。

ハクの両耳に、少女の声が遠くこだましている。  
瞼を閉じた暗闇に反響するその声を追いかけていくと……突然、  
視界が開けた。

引き留めるべきだった。その光景が目の前を覆い尽くす前に。  
少女の声を追いかけていった自分の背中を。

「エマ?? どうしたんだよ……そんなところで。しかも昼間  
から寝る奴がいるか？」

「それもうつ伏せで? ? ニンゲン? つてのには苦しい寝方じゃない  
のか? おい、エマ。なんか言えよ……答えるよ……エマツ!!」

その時、? ガシャン? ……彼女は右手に握っていた? 大剣? を落  
としていった。

「あ あ ……イヤなこと思い出しちゃった」

彼女は悪夢から覚めるようにバツと飛び起きると……左手で顔を  
覆い、そう呟いた。

風は止んでいた。まるで彼女に悪夢を届けにきて、そして用が済  
んだかのよう。

今のところ、少女が言っていた? セキ? とやらも、そもそも? 宿  
題? つて単語の意味も分かっていない。

ただ一つ、分かったのは……? ビョーキ? というのは、人を死に  
至らせるものだとしたことだった。

「これから? 一戦? やるって時に……あたしの柄じゃねえ。こうい  
うのはあいつの仕事だ」

彼女は左手で三回、気を引き締めるように片頬を? パチ、パチ、  
パチ! ? と叩くと、やおら立ち上がった。

野生の勘という奴だろうか。少なくとも女の勘ではない。もし今  
の彼女の状態が、自分で言った? あいつ? だとしたら、そう表現で

きるのかもしれないが。

ハクは立ち上がって、サンドリヨンへと続く地下の出入り口を見つめた。

恐らくもう出てくるだろう。彼女の勘は野生であれ女であれ、いつもよく当たるのだ。

少女が亡くなっていて、あの時も……。

「よおーっ！ ナナシのあねさん、調子は良くなったかあああああ？」

\* \* \* \*

ほの暗い通路の階段を上り、地上の光が瞳に入り込むのと共に…… ナナシは誰かに呼びかけられた。

特別に視線を移す必要もなく、声の主は正面の小高い砂丘のてっぺんからこちらを見下ろしていた。

ハク……なのは確かだ。メンテナンスを受ける前、カネを持っていないからと黒トエトに断られた時、偶然室内にあった大剣を見て元の人格に戻ったハク。

後は言うまでもなく彼女が黒トエトを脅しつけ、ナナシはメンテナンスを受ける運びとなったのだが……どうもネガティブだった時の印象が抜けず、未だ彼女が別人のように感じられる。

「調子が良い？ 良すぎて困る？ なるほど、そいつあ良かった」

……」

ハクは口早にナナシの返事をでっちあげると……、突然、語尾を引きずったまま空高く跳躍した。

大剣？リヴォルヴ？を天空に突き刺すよう振り上げながら。

「 たなあオラアツ！！」

大きな両刃の切っ先が豪快に地面へと叩きつけられた。

ナナシは突然の攻撃に戸惑いながらも、第一撃をすんでのところで回避。

一方のハクは振りおろした刃をすかさず横に薙ぎはらい、それもかわされると、次から次に息つく間もなく重い刃の連撃を繰り返していく。

「待てっ！ どうしてこんなことをする？ お前と私は ……」

「？お友達？だって言いたいのか？ それは良い。認める。あたしとあんたは友達だ。」

でもな……」

ハクは大きく剣を振りかぶり

「お友達同士で殺し合ったりするのが、あたしたちアンドロイドだろーがああ！」

ナナシめがけて勢いよく振りおろされた刃は、またも対象を捉えることはなく、凄まじい粉塵を巻き上げて灰の砂地に鈍い轟音を響かせた。

「……どうだ？ ちったあやる気になつたか？」

ハクは刃を地面にめり込ませたまま、好戦的な笑みを浮かべてナナシを睨みつけた。

まるで辻斬りの如く、いきなり刃を振り下ろしてくるような戦闘狂の視線を一身に受けるナナシは、何かを覚悟したように瞼を閉じて、ため息を一つ足元に吐き出した。

身体の至るところにあった傷も今や完治。衣服は以前のままなので、全体の印象はそう変わりなく、いつもの無表情で寡黙な佇まいのナナシがそこにいるのだが、頭に明るい緑のラインが入ったヘッドギアが取り付けられている。

どうせ黒トエトの悪戯か何かなのだろうが、今のところは彼女の頭頂部の髪を一束逆さに立てているのみで、それ以外の用途は不明である。

いや、もしかしたら……そのヘッドギアには、装着者にこんな効果をもたらすのかもしれない。

安い挑発に乗ってしまうような、戦闘意欲の向上を。

「……言っておくが、今の私はちょっとばかり殺気立っている。」

ついさつきまで？何百人？と殺してきたばかりだから……」

ナナシは取り出した黒いチップを、同じく黒色の腕時計にベントインした。

「手が狂うかもしれない。

だから、お前はせいぜい、その何百人とやらに加わらないよう気をつける」

進む電光ほくはくしから現れた愛刀の持ち手を、？パシツ？と受け止め握りしめる。

「へえ、こいつあおつかねえ ……」

次の瞬間、二つの双眸と刃とが激しく火花を散らせて衝突した……。

t o b e . . . . .

\* \* \* \* \*

「で？ ブラックロックシユーター ダー、B・R・Sの居場所は掴めたんですか？」

「まあ……居場所はつかめたよ？ つか目の前にいるし」

「じゃあ、何でこのうと無線なんかしてるんですか？」

「なんかわかんねえけど……、白豹と戦ってるんだよね。B・R・Sが」

「どういうことですか？」

「だからしらねえって言ってるじゃん。

とにかく、オイラたちは今4人でその様子を窺うかがってるんだけど……勝ち目なさそうだから、一旦帰ってもいい？」

「しょうがない。戦力を立て直す必要がありそうですしね……ところで、ウロは？」

「サイハテ号が盗まれた場所で、「はーとぶれいくした」とか言っ

てイジけてる」

「なるほど。あのデカブツ、サイハテ号と一緒にハートも盗まれたんですね」

「あー……うん。何か違和感あるけど、うん」

「じゃ、とりあえずこちらはダーたちの帰還を待ちますので。」

ウロはまあ、「ちつ、しょうがね……」と万が一にでも思ったら回収してきてください」

「いや、あんなデックカイ図体を乗せる機体はないよ」

「ざまあみ……じゃない。これは放置せざるを得ませんなあ」

「?歩いてガンバツ!?……とは言っとく」

「そうですね。あとついでに?挫けるマッチョ!?とも言っというください」

「いやもう十分挫けてると思うけど……とりあえず、これから帰還する」

ダーたちB・R・S捜索班は、どういう訳だか激しく刃を交えている二人にその気配を勘づかれぬよう、エア・グライドで静かにその場を去っていった。

二人の動向を見守るよう、団員を一人残して。

.....continued.

&lt;&lt;Chapter 4 &gt;&gt;(後書き)

>>明日更新<<

Rock 4 Side B サウンドトラック?

and more . . . . .

次回 予告

Rock 5? Into The Reactor?

乞うご期待

## Rock・4 Side・B? サンドリヨン?

セントラル北部にある小規模砂漠地帯。

鉛に近い灰色の砂丘が大小何通りかに連なっている無味乾燥とした土地。

その起伏がなだらかで、地のコンクリートがわずかに顔を見せている場所に、三名のアンドロイドの姿と、遠くの場所から、彼らを見つめている？機械兵士？のような風貌の存在があった。

「……？」

三名のうち、黒髪の女がその者の視線を鋭く感じ取った。

足を止めて振り返り、辺りを見渡してみたが、彼女の目には死灰が山積したような砂漠の寒々とした風景が広がるだけだった。

「気のせいだろう。長いことメンテナンスを受けていなかったから、感覚が狂っているのかもしれない」

そう自分を納得させると、彼女は地下へと続く階段の一段目に足をかけた。

この場所はい先ほどまで、長方形の何の変哲もない灰色の板の下に隠れていた。

「馬鹿だと思わないでくださいね？ 約束ですよ？」と不安げに言いながら、ハクがその板を横にのけると、この地下空間への四角い出入り口が忽然と出現したのである。

レンは突如として現れた新たな空間の奥底を、「うおー、なにこれえ？」と感嘆しつつ、首を伸ばしてはしゃぐように覗きこんでいた。

通路は人一人がやっと通れる幅であり、階段、壁と共に灰色のコンクリート製で、外からの光は階段の中ほどまでしか届かず、そこを通り過ぎると暗闇が次第に深まっていった。

先頭のハクが階段を降り切ったようで、それに間を開けずに二人



も降り立つが、通路はどうやら平坦な一本道となるようだった。  
三人の足音が狭い空間に折り重なるようにしてこたましていく。

「あのー……聞く必要もないと思いますけど、お二人とも、この利用は初めてですよね？」

ハクの声が手狭な空間にエコーをかけられて響く。

「オレたちはエクスプロリズムの団員なんだ。ユートピア・タワーっていう専用のメンテナンス機関がある」

ナナシが応答しない代わりに、レンがそれに答えた。

「このメンテマスターである？黒トエト？さんはちょっと変わり者なんです。

だからメンテを受けるにもいくつか決まりがあって……」

「うん」

「まず、エクスプロリズムの団員は問答無用で拒否、だそうです」

「……おい、それはもつと早い段階で言えなかったのか？」

暗闇の中、互いの顔も見えないままにやりとりをするレンとハク。  
ハクの言葉に対してレンが更なる言及をしようとする、前方に  
？パツ？と橙色たいたいの光が灯った。

「うおっ！」

急に埃をかぶったような煤すすけた光が空間に広がって、レンは思わず眉を細めた。

そして視線を前に戻すと、通路の終点にはドアがあった。

「ここなのか？ 変な看板がついてる……」

その渋い茶色のゴシックな造りの木製ドアには、「負け犬たちよ〜」という題の箇条書きで諸注意が書かれた小さな黒板のボードが掛けられており、橙色の小さな照明灯はそれが訪問者に見えるようにボードへ向けられている。

「なにになに……？」

レンが歩み寄って、下からまじまじとボードの内容を確認した。

「負け犬たちよ」

1. カネのないもの立ち入るべからず
2. カネがあってもエクस्पロリズムの団員は立ち入るべからず
3. カネがなくても代用品があれば応相談。あきらめるな負け犬たちよ

4. アンドロイドはメンテマスターに敬意を払うべきである。  
したがって当館では、私の名前を必ず「様」付けて呼び、媚<sup>こ</sup>びへつらうこと。

以上、4項目である。守れない？ なら朽ち果てる、ヴぁーか！

内容はいかにも勝手に<sup>いか</sup>厳めしいが、白チヨークで書かれた文字は子供のように乱雑で、4項目目の「私」の左隣には「オレっち」という書き間違いが二重線で消されている。

「えっと……？ カネ？ ってそもそもなんだ？」  
色々ツッコミたいがそれはさておき、といった様子で、レンは後ろのハクに尋ねた。

「ああ、やっぱり知らないんだ……。？ ニンゲン？ が使っていた紙幣とか硬貨とか言う奴です。黒トエトさんの好みは硬貨オンリーで、紙幣は受け取らないそうです」

「つまり、どんな形なわけ？」  
「実物があると早いんですけど……残念ですけど私、今持っていないですよ。？ お給料？ をまだもらってないですから……。金属の小さくて丸くて、ボタンを無理やり平らにしたみたいな形なんですけど、お二人とも持ってないですか？」

ハクの言葉に、レンもナナシも服のポケットというポケットに手を突っ込んでみる。

「それっぽいのはない」

レンの言葉の後に、

「私もだ」

ナナシも続いた。

メンテナンスを受ける張本人だというのに、あまりに素っ気ない態度である。

「はあ……何となくこうなるだろうなあとは思ってましたけど、見事になりましたね。」

どうします？ この注意書きに書かれていることの何一つ条件を満たせてませんけど……」

ハクは「メンテはもう無理だからさっさと剣の在りかを教えるよ」と言いたいのをこらえているかのように、顔に極力表情を作らず二人に尋ねた。

場にしばしの沈黙が降りる。

「ま、ぶつちぎろーぜ。何とかなるよ、きつと」

一体何のための沈黙だったのか、レンは軽い口調でそう言うと、飄々（ひょうひょう）とした足取りでドアノブに手を掛けた。

「多分無理だと思いますよ、私は……」

ハクの言葉など気にする様子はなく、マグカップの取っ手のような形のドアノブを握り、レンはそれを押してみる。

だがそれでは開かなかつたので、右手に錆びた金属の冷たさを感じながら、今度はドアを手前に引いてみた。

？ギイイイ？……怪しげな風情を感じさせるドアの軋み音と共に、空間が徐々に開けてくる。

そしてドアが案外に重たかつたので、ひと思いに力を込めて開き切ると……。

「……なんだ？ 真っ暗だぞ？」

レンの視界を暗闇が包んだ。

直後、左から深い青色のレーザーライトが入り込んできた。更に右から赤、紫のレーザーライトが差しこまれ、三色はレンの目前で上下に揺れるようにして交錯（くわく）していく。

「う、うお……！？ なんか変なのがいるぞ！」

そのライトによって、レンには奥の暗闇に嘲笑（ちやうじう）を浮かべるドクロ

や、恐怖に歪んだデスマスクがいくつも浮かんでいるのが見え、思わず驚きの声を上げた。

他にも棚のヘッドボードにいくつもの試験管が蛍光色に輝いて並んでおり、その中には眼球や舌などがそのままの形で液体詰めに保管されていた。

「ここって本当にメンテナンスルームなのか……？」

部屋のあまりの異様に、いつもは清潔感に満ち溢れるユートピア・タワーの方でメンテナンスを受ける彼が、そう疑問を口にしてしまうのも無理はなかった。

「ぎゃ、ぎゃああああ！ なんだこの変な？ ツノ？ はあああ！？」

突如、奥の暗闇から男の叫び声が聞こえた。

ナナシとハクも部屋に入り、既に数歩室内に足を踏み入れていたレンと揃って声の方を注視する。

「な、なんだ……？」

レンが隣のハクに言いかけたのも束の間、

「モヤダあああああああ！」

？ダツダツダツダツダ！？ 木目の床に重々しい足音を響かせつつ、男がひどくシヨックを受けた様子でこちらに向かって走ってきた。

そしてレンたちが呼びかける間もなく、彼は脇目も振らず部屋を走り出て行った。

レンが彼とニアミスした際、部屋が暗い所為で良くは見えなかったが、チラッと赤いライトが男の姿を照らした時に……男の二つの乳首から？カプトムシのツノ？のような先端が枝分かれした大きな黒漆の棒が、上へ向かって反り返るようにして生えていた。

もちろん、レンは？カプトムシ？を知らないで、そうは認識していないが、明らかに不自然な物体が男の胸にくっついていているとは思った。

「変なやつ……ここの患者かなあ？」

通路の奥へと消えていく男の背中を目で追いながら、レンは呟いた。

「こここの？洗礼？を受けましたね……彼」

ハクの物言いが引つかかる。

「センレイ？ なんだよ、それ……」

そう質問するも、直後に暗闇から聞こえてきた何者かの声によって、レンの視線と注意はそちらに向けられた。

「気に入ってもらえると思ったけどなあ。？乳首からツノ？が生えてるなんて、如何にも個性的じゃないか。それと何かしらの使い道もあるだろうに。物干し竿とか、物干し竿とか、物干し竿とか……水場もなければ雨も降らないし、そもそもアンドロイドに服の洗濯って概念はないけどネ……」

ヘリウムガスを吸い込んだような甲高い声が、やたらに理屈っぽい独り言を長々と並べている。

？パツ？……直後に入口の照明灯と同じ色の明りが灯った。その電球は天井から縄一本でぶら下げられており、レーザーライトの色が弱まって見えるほど強い光だった。

その光のスポットの中には、まるで発明家が住まう部屋のように、書類や書籍、デスクトップ型パソコンとその周辺機器などで溢れ返った机上の荒れた模様が浮かび上がっていた。

そして三人の目に、オコジヨのような身体付きの全身真っ黒な小ロボットが、スイッチを入れる為なのか、ぶら下がった電球にその身体をへばりつかせているのが見えた。

「それにしても良いものが手に入ったなあ。？大剣・リヴォルヴ？……部屋のどこに飾ろうかな？ やっぱり剣って地面に突き刺さってる姿が一番カッコイイと思うんだよ。うん」

独り楽しみにプランを練りながら、彼は？ぴょん？と軽快に床へ降り立った。

そう、自分の身に危険が迫っているとは露も知らずに……。

「今……なんて言いました？」

ハクがいつもとは表情を変えて、ゆっくりとした足取りで声の主に歩み寄っていく。

「……はっ！」

黒トエトは夢から覚めたように動くのを止め、慌てて声の方を振り返る。

「？大剣・リヴォルヴ？が？　良いものが手に入った？　へえええええええええええ」

冷徹な顔つきでじりじりと歩み寄ってくるハクに追いつめられるように、彼は一步、二歩、小さな両足を交互に動かして後退する。

「ちよ……っ！　いつの間に！」

「おいおい……論点はそこじゃないだろう？　私のリヴォルヴがどうしたって？」

ハクの声は低く、口調までもが大きく変貌している。

一瞬のうちに張りつめた空気に、黒トエトは身の危険を感じて矢継ぎ早に言葉をはやし立てていく。

「あ、えーと？　後ろの二人！　後ろのお二人さんは何なのかな……？　メンテナンス希望なのかな？　注意書きは読んだかいお二人さん！」

二人は呼びかけられるも、とつくに傍観者を決め込んでその場に突っ立っているだけである。

「話をズラしてんじゃないですか……」

まるで二つの人格がせめぎ合っているかのごとく、ハクの口調は男言葉とそれまでのひ弱な敬語喋りとが入り混じっている。

「ここはカネ、もしくはそれに代わるモノがないとメンテは受けられないよ！」

あ、エクспロリズムの団員もダメね！　ん？　あ、カネは持つてるし団員でもない？」

はっは、そんな？　負け犬？　なら誰でも大歓迎さ……」

相手の返事も聞かないまま、ただ話をそらす為だけに話を展開さ

せていた黒トエトの言葉を遮るように……？ドンッ！？という強烈な音を立てて、ハクの右足がその眼前に勢いよく踏み下ろされた。「ヒイ！？」

その衝撃に黒トエトの全身がすくみあがる。「剣はどこなんですか……？ どこなんだ？ さっさと言えよオラア！」

ハクは次第に語気を強めながら、またも？ドンッ！？……今度は左足の鉄槌が黒トエトの眼前をかすめた。

「ヒイツ！」と悲鳴を上げたいのをこらえ、

お、落ちつけ！ こいつはまだ本調子じゃない。今ならまだごまかせる……！

黒トエトは頭の中で自分にそう言い聞かせ、必死に平静を装った。しかしその両足は恐怖にガクガクと震え始めている。

「……という夢を見たんですよ。念願の？大剣・リヴォルヴ？が手に入ったから、それをどう部屋にディスプレイしようかなあ……つてワクワクしながら考える夢をね？」

咄嗟とつぱに口から出た嘘であったが、  
う、上手い……！ これならかわせる！

黒トエトは内心、「してやったり」の歡喜わに沸いていた。

「おや……？ あそこに、何やら大きくてデッカい物が見えますよ……？」  
「えっ！？」

黒トエトは慌てて、ハクの右手の人差し指が差す方を見た。

しかし黒トエトの身長では、電気機器の黒コードが絡まっている机の足の部分あしぶに遮られ、そうでなくてもハクの指さす方は光が届いていないために良く見えない。

それでも黒トエトは、もう全身の血の気がサアッと引いていくような思いだった。

当然のように、自分の体格ではあの太剣を持って移動するのは不可能。とりあえずメンテナンス終了後に、あの男のアンドロイドに

頼んで裏の倉庫に持って行かせるつもりだったが、その男は自分が  
変な改造をしてしまったがためにシヨックのあまり逃走……。

ようするに、自分がした余計な悪戯いたずらが更に事態を悪化させていた  
のである。

そして大剣はチャコールの布で柄から切っ先まで巻いた後、「開  
封厳禁！ 死にたいのか！？」と黒インクで書いた大きめのポスト  
イットを貼り付け、壁に立てかけたままなのだ。

ハクの目線からはその輪郭がうつすらと見えるようで、カツ、カ  
ツと早歩きで大剣に向かって歩き出した。

「あれは何なのかなあ〜？」

「いや何でもないっすよ！？ 暗闇が見せた幻だよ！ 当館自慢の  
光と影のイリユージョンだよ！ お客さん！ イリユージョンって  
のはトリックを暴いちゃいかんですよ！」

黒トエトは体面などかなくり捨てて喚わめき散らす。

「暴くんじゃありませんよ……気になるものは追求するだけですよ……  
見るだけですよ……」

「ああああ！ ダメ、ダメー！」

黒トエトは叫びながらハクを追いかけたが、タコ足配線のコード  
の一本に引つかかって転倒。

その間にハクはスポットから外へ出ていった。

「？ギイギイ？と床が軋む音が聞こえ……？ゴト？という重い物体  
を床から離れた音が聞こえ……？チャキ？というかすかな刃鳴りが  
聞こえ……それらの音から、暗闇の中で何が起きているのかは想像  
に易かった。

黒トエトはうつ伏せになりながら、ハクの姿が消えていった暗闇  
の向こうを見据えていたが、いつそのこと死んだふりをしようと思  
い立つ。

「コードに引っ掛かり、希代のメンテマスター、ここに眠る」

そう頭の中で自分史の最期をでっちあげると、目をつぶり、鼻っ  
先を床に押し付け、全身をぐったりとさせた。



「なあナナシ……あいつ、様子がおかしくないか？」

それまで黙って二人の様子を見ていたレンが、ナナシに話しかけた。

「白豹はくひょうと呼ばれたのは、きつと今のハクの方だろう。

どつりでどこかで逢ったと思っていたが、そのハクもどつやらそつちのようだな」

ナナシの声はいつものように落ちついていてる。

「え、つまり、どういう事なわけ？ 全然理解できないんだけど…

…」

疑問符を浮かべたままのレンの表情に、ナナシは自分の左肩越しに見下ろして言った。

「まあ、見ていれば分かるんじゃないか？」

そう言っつて視線を前に戻す。

スポットの中に、再びハクの姿が浮かび上がった。

しかしその顔は厳めしく、鬼気が静かに宿っているように見受けられ、そしてその右手にはチャコールの布に巻かれたままの大剣の持ち手が握られている。

そして彼女は、それをゆっくりと刃を下に向けて振り上げた。

刃の標準は当然、うつ伏せに死んだフリをしている黒トエトである。

「5……4……」

ハクは低い声でカウントを始めた。

「3……2……」

黒トエトの身体は微動だにもしなかったが ……。

「……1」

「つぎやああああ！」

黒トエトはありつたけの悲鳴を上げて勢いよく飛び起きた。

そのカウントの正式な意味も知らず（この状況下では「0」の力ウントと共に刃が振り下ろされるとしか考えられないが）、あまりの恐怖に耐えきれなかったのである。

「ハア……ハア……くそ、くそお！」

黒トエトは机の足に背中を預け、大きく息をしながらハクの顔を見上げている。

「よお……久しぶりじゃねえか。帰ってきたぜ？ 白豹のハクさんが」

それまでの万の弱気がそのまま強気に変換されたかの如く、ハクの表情は自信に満ち溢れ、唇が足元の小動物めがけて愉快げにひきつっている。

そんなハクの表情はややサディスト染みていた。

鬼！ あるいは悪魔！ ど、ど、どうしよう……そうだ、大剣さえ手から離せば、あいつはまたネガテイヴに元通り……！  
見せてやるぞ、この性格バイリンガルめ！

「あーっと、後ろのナナシのあねさんはなあ、カネも持ってないしエクस्पロリズムの団員なんだけどよ、もちろん、メンテナンスは受けさせてくれるよなあ？」

ハクは余裕の表情を崩さず、そう話し始めた。

「カ……カネがない……？ しかも団員だって？ へっ、論外だねそんなやつは……」

黒トエトは特攻の決心を固め、もうへりくだるような態度は見せなかった。

「あんだと？ てめえ……」

ハクの剣を持つ手に力が込められた。

「あ、いや、嘘ですよハハ……もちろんやらせていただきますよ……」

前言とは打って変わって低姿勢で返事をする黒トエト。

「なんだ、それなら良いんだ……物わかりが良くなったじゃないかハクの表情が和らぎ、右手の力が緩む。

チャンスだ……！

白い髪の悪魔は、自分が何もしてこないだろうと油断している。いつものように言いなりになると思い、自分を都合のよい下僕か何

かのように思っている。

それだ、その慢心を突くのだ。

幸いなことに、ハクの右手首までには障害物がないし、剣も振り下ろされて切っ先が床についている。

「いやいや、本当に、ありがたくメンテナンスをさせていただき

……」

黒トエトは言いながら、悟られぬように跳躍の準備をし、そしてバネのように思いつきりひざを屈めると……。

「……な訳ねええだろ！ 一昨日きやがれオラアアアアアア！」

しかしその決死の大特攻も空しく、

？パシン？……。

ハクは左手で軽く払っただけだった。

「……何か飛んできたんだが……今のは気のせいだよな？」

両目に渦巻を作って伸びている黒トエトに、ハクが歩み寄る。

そして黒トエトが意識を取り戻したのを見計らい、その目と鼻の先に？チャキ？と刃を振り向ける。

その際、結びが弱かったのが、先端の布が綻ほころんで刃の切っ先がわずかに覗けた。

「えーと、あの、その、トエ、と……」

「もう言わなくても分かるよな？ く・ろ・ト・エ・ト・？」

？ジャキ？……銀色にきらめく刃光と鬼か悪魔のような微笑みを目前に、

「はい……喜んで、無償で、ありがたく、メンテをやらせていただきます……」

と、黒トエトはうつろな声で言う他なかった。

こうして、ナナシは無事（約一名がプライドと身体に傷を負った

が)、メンテナンスを受ける運びとなったのである。

## T o C h a p t e r 2

サンドリヨンの出入り口付近。

橙色の小さな照明灯が、煮詰めた水あめのような質感の光を放つ中、大剣を右手に持った白い髪的女と、向かって金髪の少年が立ち話をしていた。

「つまり、ハク、お前の中には二つの性格があるってことなのか？」  
自分を見上げてそう尋ねる少年に、ハクは壁に背を預けて答える。  
「黒トエトの言葉を借りるなら、あたしは？二重人格？ってやつらしい。」

小難しくなるんだが、今のあたしが主人格で、もう一つのネガティブが新たに生まれた人格らしい」

その言葉に、レンは更に頭を混乱させられた様子で質問を重ねる。  
「良く分からねえけど、とにかく、剣を持っている時のお前は強気のハクになって、持っていないと、不気味な独り言を呟きまくる弱気なハクになるってことだな？」

「まあ、そういうことだな」

厳密にはもつと他に加える項目があったが、要点は理解できているようなので、ハクはそれ以上この件に関しては何も言わなかった。  
「ところで、もう一人のあたしが変な約束をしちまつたよな？」

話頭を転じると、レンはそれに食いつくように反応した。

「そうそう！　？くるくるまーくのすごいやつ？の居場所を教えてくださいるって約束だ」

ハクは目線を足元に落とし、少し困ったような表情を浮かべる。

「それは言っちゃならないことになってるんだが……。まあ、約束は約束だしな。」

だけど、お前はあいつに逢ってどうするってんだ？」

嬉々としていたレンの表情が一瞬のうちに曇る。

「？記憶？をさ……。自分の記憶を、取り戻しにいくんだ」

言葉が喉に引っかかるかのように、レンは言った。

「……考えてみりゃ、あいつに逢うってことはそういうことだろうな。」

もう一人のネガティヴは、自分じゃ戦う術がないから、メンテナン  
スホールで抹消したアンドロイド達のメモリーチップをあいつに渡  
すことで、その対価としてブラックのエネルギーと、ここでメンテ  
を受けるための力ネをもらっている。

だから多分、お前のメモリーも？ G n o s <sup>グノス</sup>？の野郎が持つてるだろ  
うよ。」

ハクという言葉の後、暫くの沈黙が降りた。

その間にレンは足元に目線を落としたまま、迷いがあるかのように  
落ち着きなく身体を動かした。

橙の煤けた光に照らされて、少年の影が暗い通路に伸びたり縮ん  
だりを繰り返す。

そしてハクが何か言葉を掛けようとした時、急にレンがバッと顔  
を上げて、こちらに話しかけてきた。

「分かった。オレ、行ってくる！」

この数十秒間、彼の頭の中で何があったのだろうか……。

それを知る意味でも、ハクはわずかな当惑を含んだ声で尋ねた。

「おいおい、急にどうしたんだよ……？ 場所も聞かずにさあ」

「うん、だから教えてくれよ！」

ネガティヴの目を通して見ていた時の、レンの凶々しい態度が目  
の前にあった。

「……まったく、相変わらずなやつだなあ。」

これから場所を教えるけど、行ったところとそこにいるとは限らね  
えぞ？ あいつは風のように点々と場所を変えるからな……。

？ いる可能性が高い？ って場所を教えるだけだ」

忠告染みたハクという言葉だが、レンは全く意に介していない様子で、  
目を輝かせて言葉の続きを待った。

一本気なこの少年は、「これをやる！」と決心すると、もうそれ

以外は何も見えなくなるのだ。

そしてその気質通りに、彼はハクからGnosの居場所を教えてもらうと、「グライドは一つ借りてくからな！」と言い残して、一目散に地上目指して通路を駆けていった。

暗いので階段の一段目でつまづいたが……それでもめげず、地上の光を目指していく。

\* \* \*

どぎついピンク色のエア・グライドを駆り、レンは目的地に向かっていた。

眼下を流れる廃墟の風景が、機体の加速度に合わせてその模様を刻々と変えていく。

ビルやコンクリートといった都市的な廃墟の街並みが、いつしか黄色煉瓦おつしよくれんがの明るく古風なモザイク模様へと変わっていた。

その昔に？芸術の街？と呼ばれた「エインセル」という街の領域に入ったのである。

「？墓場？だ。Gnosはエインセルの墓場にいることが多い。チップの受け渡しも大抵はそこで行われる。相手の方から来ることもあるけどな」

レンは頭の中で先刻聞いたハクの言葉を反芻はんすうしつつ、眼下に墓場を探した。

初めて聞いた単語なので、具体的にどんな場所かは想像しがたいが、ハク曰く墓場の付近には？目印？があるそうである。

ん？ あれか？

レンの目にそれらしき大きな人工物が見えてきた。

今では柱の片方が折れて横倒しになっているが、その凱旋門がいせんもんのようなアーティスティックなデザインの巨大アーチは、恐らくはその

昔、夜には色とりどりのイルミネーションが煌めき、昼には往来する風と車の通り道として、街の観光名所だったことだろう。その名残なのか、このアーチは瓦礫と化してもなお、廃墟の街にひと際存在感を放っている。

レンはそのアーチの近くに、いくつもの？十字？が並んでいるエリアを見つけた。

ここでハクの言葉を思い返してみると、墓場の特徴と一致する。

レンは逸る鼓動を抑えつつ、エア・グライドをそちらに向けて降下させた。

墓場に降り立ってみると、まずレンが感じたのは、この場所の？異様さ？だった。

黒い岩で造られた十字型の墓石がいくつも整然と並んでいる。

それらは錆びれ、曇り、まさしく長い年月が経過したのを不言のうち教えてくれた。

レンは通りがけに墓石を右手で、左手で触れつつ、墓場の中を歩き始めた。

地盤が土ということもあるだろうが、いくら力を込めて歩いても足音は一切立たず、また自分が動いた際にかすかに聞こえる服擦れの音以外に、ここには何の音も存在しなかった。

？空寂？……その言葉がぴったりの、至って無機的で何者の気配も感じられない虚ろな場所。

それがレンにとつては異様さとして感じられた。

初めて来た場所というのもし少なからずあるが、今まで体験してきたセントラルの静寂と、ここにある静寂とは何かが違う。そんな違和感が拭えなかった。

「ん……？」

レンはある墓石の前で立ち止まった。

しっかりと地面に根を張って直立しているその墓石には、かすれた文字で文章が刻まれている。



彼は墓石の上の縁へりに左手を置き、覗きこむように身をかがめてそれを見つめた。

? Len and Lynn in the future? ……完全に意味を飲み込むには時間が必要そうだったが、それでも「レン」と自分の名前が刻まれていたのは真っ先に理解できた。

「なんだこれ? どうしてオレの名前が……それで、? リン? っていうのは?」

彼は混乱しやすい頭で必死に事態を解析、理解しようと務めた。

しかし謎はますます深まるばかり。リン、リン、リン……。誰かの名前であることは分かるし、思えばナナシも「お前、リンはどうした?」とその名を口にしていった。

レンは右手を額の上にあてがった。

疑問が募るだけでなく、不安も比例して増大してきたのだ。

やはり何かある。この名前には何かがある。特別な何かが。

そう思い始めた時、彼は背後に? 気配? を感じた。

「……っ!?!?」

空風が吹いたものだから、単純にそれを何者かの気配と勘違いしたのかもしれない。

だが様子が違った。正体は掴めないが、目の前の空白に何かがある。

「おい、誰だ? 誰かいるのか……?」

しかし応答はなく、風が無言のままに十字と十字の間を通り抜けていくだけだった。

それでもレンは声を上げ続けた。初めはためらいがちだったが、不安へと急ぎ立てられるように声は大きくなり、最後は「誰がいるんだよ! Gnosか!?!」と大声で叫んだ。

変わらず、返事はない。レンの声など初めから発されてはいなかったかのように、辺りは質量のない沈黙の緞帳じゆんちやうによって閉め切られ

ている。

だが、一陣の風が身体を通り抜けたかと思うと、レンの隣に？それ？はいた。

「誰だお前！？」

レンはサッと後ろへ飛び退いた。

自分の身の丈の2、3回は悠とある？機械兵士？のような無骨な風貌の存在が、レンが見ていた墓石の前でそれを見下ろしている。そして西洋鎧のようなガントレットがはめられた右手を墓石の下に突っ込むと……黒い土中から何かを取り出したのか、土に突っ込んだ手を己が目の前で握りしめ、次にレンの方をゆっくりと向いた。？ガシャ？と腰の駆動部分から金属音を立てながら。

「お前、お前が……Gnosか？」

機械兵士は何の反応も示すことなく、レンに向かって歩行していく。

その目は豆粒がそのままはまっているだけのような点であり、唇くちびるはなく、そして何より彼の胸には、血で描かれたような？赤い渦巻？がペイントされてあった。

レンは確信する。

この巨軀で無骨な鎧の機械が？くるくるまーくのすごいやつ？なのだ。

「オ、オレの名前はレン！自分の記憶を取り戻すためにお前に逢いに来たッ！」

こちらへ向かってくるGnosの得体の知れない迫力に物怖じしつつも、それを掻き消すように大声で言った。

対するGnosはレンの前で立ち止まる。

目の前で立ちはだかられると、その巨軀が作り出す影に自分の身体がすっぽりと収まってしまった。

一層の恐怖心が募っていくが、それを堪えてGnosの豆粒の目を見上げていると……突然、右からGnosの左腕が伸びてきた。

その左腕には長方形の液晶版が付けられており、そこには蛍光字

でメッセージが浮かんでいた。

?キオクヲトリモドシタイノカ      ??

G n o s には口がない。

したがって、このような方法で自分の意思を他者に伝達するのだと、レンは足がすくむような恐怖心で支配された頭の中、どうにかそう理解した。

「あ、ああ、オレはそのためここへ来たんだ。ハクに教えてもらってな」

レンがそう言うのも束の間、G n o s が?ガツ?と大きな右の掌でレンの頭を鷲掴みにした。

「ぐ……あああああああああ!?!」

一瞬、何が起きたのか分からなかった。

万力で締めつけられるような痛みが頭のとっぺんから全身へと駆けめぐり、動転する意識の中、レンは自分の両足が地面を離れ、身体が宙に浮くのを感じた。

レンの身体はG n o s に頭を鷲掴みにされ、釣り上げられた魚のように垂直に持ち上げられているのである。

そして意識が朦朧とするレンの目前に、またもG n o s の左腕が伸びてきた。

手首の辺りに付けられている意思表示板が目に入るや否や、奔流するかの如く彼の頭の中に大量の映像が流れ込んできた。

?ナラ、ジブノキオクニウチカツテミセロ?

それが、レンが意識を失う最後に見た言葉だった ……。

t o b e . . . . c o n t i n u e d



Rock・5? Into The Reactor?

俺の周りで、また馬鹿どもが馬鹿な会話をしている。

「ウロさんにぶっ飛ばされたオレの相方は、今頃大丈夫かなあ」  
「大丈夫だろ。何でも、この?チキユウ?ってのは丸みを帯びてるんだってよ」

「だから? またホンとかいう奴から知ったんだろうけどよ、それが何だってんだ?」

「バツ力だなお前。いいか? チキユウってのは丸いんだよ。いいか? 誰かがビュン! ってボールをとにかく空の彼方まですっ飛ばすだろ? するとだな……」

「あ、ああ……」

「一周して戻ってくるんだよ! チキユウは丸いから!!」  
「なにい!?! じゃあウロさんにぶっ飛ばされた奴も大丈夫だな。戻ってくるから!」

「ぐく、いつものことだ。」

俺は団の本拠地である瓦礫がれきの築山つきやまの中央に座し、その周りに手下どもが集まっている。

奴らは斜面に腰かけたり、だらしなく寝そべったりして、各々自由に談笑する。

会話の内容はどれも陳腐ちんぷで、聞くに値しないものばかりだ。だが、そう言ったところで俺にはここ以外に行く当てはない。

聞きたくもない手下どもの言葉の往來の中、日がなここに座し、時間が来ればブラックを倒してエネルギーを得る。

?奴?は……こんな日常に意味などないと言った。終わっているとも言った。

ああ、意味なんてない。ただ、存在しているだけで良い。

ブラックロックシューター  
B・R・S……。

「その何が不満だというのだ？  
「全く、団員たちの会話の幼稚さには呆れますね。団長」  
団の通信士であるタンが、ため息交じりに話しかけてきた。  
「なんだ、自覚してないのか？  
ウロやダーと話すお前も、俺からすればその馬鹿の一員だということ。」

「……つと。団長、通信が入りました。B・R・Sと白豹はくひょうの動向を窺うかがっていた団員からです」

そう言うと、タンは背を向けて通話を始めた。

俺はその会話に耳を傾けるが……、

「ダツハハハハ！ 北のゴンザエモンさんの首が取れたって？」

「バ、バカヤロ……！ 笑い事じゃねえって！ こっちはマジで大変だったんだから。」

何でも「瓦礫へりの縁あこに顎あごだけを乗せて全体重を支えきれるか」ってことにチャレンジしてたらしいんだけど、……」

さっきの二人の、またも馬鹿みたいな会話が割り込んでくる。

俺は少しばかりの苛立ちを感じ、斜面に並んで腰かける二人の背を見やった。

「ねえ、ナナシ。？タイムトンネル？って知ってる？」

「なんだ？ それは」

いつの日だったか。今の手下二人が会話している場所とちょうど同じ位置で、B・R・SとMEIKOメイコが並んで腰かけて会話していた。

B・R・Sは俺を嫌がって団の本拠地付近には滅多に姿を現さなかったが、MEIKOがいたからだろう。

その時は珍しく、俺のいる前でMEIKOと話していた。

無論、俺の存在などそこにはないかのように、だが。

「？過去？と？未来？ってというのは前に教えたよね？」

「ああ、今の時間より前なのが過去で、後が未来って言うてたな」  
過去と未来、か。別に興味はない。

特に？未来？に関して言えば。

「でね、タイムトンネルっていうのは……そのどちらにも行けるの。  
でも私は、未来には行きたくないなあ。何にもなさそうだもん」

MEIKOは苦々しい笑みを浮かべて言った。

なんだ、考える事は一緒か。

「じゃあ、MEIKOは過去に行きたいのか？」

「うーん……過去って言うても、遠い遠い昔の世界に行きたい。

多分、そこには星なんていくらでも見えるし、景色だって今よりず  
っとキレイよ」

「私も興味があるな。過去には？ニンゲン？だってたくさんいたん  
だろう？」

一度、見てみたいもんだ。そいつらと私たちとはどう違っただろうかって  
「ふふ、そうでしょ？ それでね、……」

次の言葉を聞いて、俺は「何を馬鹿な」と思わず苦笑をこぼして  
しまった。

手下どもはいつもかなり程度の低い会話をするが、それで笑った  
ことは一度もない。

だが……、まさかそんな言葉が、よりもよってMEIKOの口  
から出るとは思わなかった。

「私は、？<sup>「ラッシュホール」</sup>廃棄炉がタイムトンネルなんじゃないかって」

仮にそうだとしても、MEIKO、それは笑えない冗談だ。

「団長ツ！ B・R・Sと白豹が動き出したようです」

タンがいささか慌てた様子でKAITOに話しかけた。

「二人は戦闘を終え、今度は打って変わって協力の形を取ったよう  
です。」

更に一機のエア・グライドに相乗りし、どこぞへと飛び立って行っ  
たようで……」

「……向かった場所は分からないのか？」

K A I T O の脳裏に、一抹の不安が過ぎる。

「推測の域を出ませんが、監視の者の報告によると？ ホールフォビア？ に向けて移動しているのではと思われれます。あ、いまその者には二人の後を追わせて ……」

「……全員、今すぐ準備をしる。今回はオレも出る」

「は……？」

タンの言葉を遮って発せられた K A I T O の言葉は、周囲にいた団員達をしばし呆気にとらせた。

馬鹿のように騒いでいた何人かの団員も、こぞって椅子から立ち上がった団長を見る。

「……聞こえなかったのか？ 全員出撃だ。相当のバカを？ 殺り？ にな」

「は、は……っ！ 者ども、今すぐ各自エア・グライドに乗り込め！ ……」

命令は理解できたが、事態は飲み込めていないといった様子で、タンはとにかく団員たちに指示を出した。

まるで怠惰の最中、突然に背中を鞭でひっぱ叩かれたかのように、団員たちはドタバタと慌てて自分のエア・グライドへと駆けていく。続いてタンは、左手首の無線端末からダーに連絡を入れた。

「こちらタンだ。帰還途中ですまないが、もう一度引き返して B・R・S を追ってくれるか？ 詳しい話は二人を監視していた奴に聞いて欲しい」

「ちょ、なんだよいきなり？ 大体あいつらを追ってオイラたちにどうしろと……」

するとタンは、団長に声が届かぬよう右手で口元を覆いつつ、  
「まだよく分からないが、団長の今の様子からだ……？ 攻撃？ しるってことみたいだ」

「は、はあ……？ なおさらムリだって！」

「とにかく足止めでも良い！ ……団長がこれから直々にそちらに



向かわれる」

「マジで……？ わ、分かった。出来るだけのことはしてみるよ……」

周囲が喧騒に包まれる中、唯一、何の動揺も感じさせない佇まいの青髪紅瞳<sup>あかめ</sup>の青年は……その寡黙<sup>かまく</sup>な外見とは裏腹に、頭の中ではにわかにに焦りを感じ始めていた。

ホールフォビア……？<sup>アナザー・トラッシュホール</sup>もう一つの廃棄炉？のある場所……。

ブラックたちとの大規模な戦闘が起こった地……。

まさか、あまりに馬鹿げている。

お前は、あのMEIKOの言葉を真に受けたというのか？ 何の確証もないのに？

恐らく、KAITOの予感は当たっている。

ナナシは飛び込もうとしているのだ。もう一つの廃棄炉に。過去へと遡るために。

問題はもう一つの廃棄炉がタイムトンネルだとか、仮にそうだったとして、彼女が過去世界へ行き着くことでもない。

それも確かに問題ではあるが、何より今一番の問題は廃棄炉の？封印？を解かれてしまう事にある。

封印が解かれればまた何千という数のブラックと戦わなければならない、ろくな戦力も残っていない今のエクспロリズムでは、事態の收拾など到底不可能だろう。

では、そうなる前に……KAITOはそう考えていた。

ついでに言えば、場合によれば？B・R・Sの破壊？も止む無し、とも。

時は少し遡る。

場所はサンドリヨンのある小規模砂漠地帯。

そこで金属と金属が激しくぶつかり合う衝突音が響く中、地面に突き刺さった瓦礫の物陰に、一人の男が身を潜めていた。

「たく、あのガキ……。ウロさんやダーさんに可愛がられてるからって、大きなツラしやがってよお……。団一番の非力のクセして。」

顔に苛立ちを露わにし、ブツクサと不平不満を口先に並べるその男は、ダーに言われてB・R・Sと白豹の動向を見守るよう場に残されたエキスプロリズムの団員である。

別に監視の役そのものに不満がある訳じゃない。ただ、自分よりも身長が低く、二言目には「野球！」としか言わず、武器が木製のバットというふざけたガキが、何故自分よりも立場が上なのか。

そんな不条理に嘆いているのである。

それにしてもスゲエ……。あの二人の戦い……。

いつの間にか愚痴ることも忘れ、彼は完全に見入ってしまった。た。

そのやぼったい目付きが見つめる先では……。戦闘がいよいよ、佳境に差ししかかっていた。

「……。つく！」

尻もちをついたハクの喉元に、ナナシがすかさず刃を突き立てる。「どうする？ 続けるか？」

ハクは自分の喉元で鋭い光を放つ刃の輝きと、次にナナシの顔を見上げた。

この状態から何をすればいいというのか。この危機から脱するためには、彼女はまずこの刃をかわし、立ち上がりざますぐに後方へ

飛び退けばいい。だが、相手はずっと簡単だ。

彼女が少しでも怪しい動きをしようものなら、手首をグツと前に押し、その刃を首元に突き刺すだけでいいのだから。

勝敗は誰の目にも明らかである。しかし、ナナシは勝ち誇ったような笑みを浮かべることはなく、じつとハクを見下ろしてくる。そこには一分の隙もない。彼女の黒い双眸そつぼつを前にしては、希望を抱く余地などない。

絶対零度だ。温めようのない冷気が、その瞳に宿っている。

「……わーったわーった。？負け？ですよッ！あたしの負けッ！」  
ハクはやけくそな口ぶりで言った。

実際、彼女からいきなり戦闘を仕掛けた手前、勝たなければならぬ戦いで負けたのだ。

その恥を最小限に抑えるためには、ハクはこんな宿題に嫌気が差した子供のような言い方をするしかなかった。

「良かった。これで殺さずに済んだ」

ナナシはそう言いながら、刃を下ろした。

すると同時に、その瞳からも冷気が消えた。

傍目はためには、何がどう変わったか分かりにくいのだが。

「何言ってるんだよ？ ハナっからそんなつもりなかったクセに」

ハクは、「あ、いまチャンスかも」と一瞬思ったが……右手に握られた大剣？リヴォルヴ？は、もう振りあげられることはなかった。

「……それで？ 別に私はこだわらないが、？約束？とやらは守るのか？」

「つたりめーだろーが。自分から言い出した約束ぐらい守るさ。

？あたしが負けたら、あんたのやろつとしてることに手を貸す？つてな」

「あんな、戦いの途中でそう言われたら、私がお前を殺す訳ないだろっ？」

ハクは目を点にさせて、しばしナナシの顔を見つめた。

本人は特に自覚してないのだろうが、ハクにとっては彼女が？ッ

ツコミ?を入れてきたことにいささか驚いたのである。

そしてハクは、間をおいてから腹を抱えて笑いだした。

「ッアハハハハハ！ その通りだな！ あたしは「殺さないで！」って自分から言ってたワケか！ でもさあ、迫真の演技だったぜ？ マジで殺すつもりなんだなって思ったよ！」

「…………いや、途中までは本気でそのつもりだったんだが…………」

「アッハハハハハハハハハハ！」

胸の内に隠しておいてもよさそうなことを、ナナシは律儀にも正直に言ったが、それもハクの豪快な笑い声に掻き消され、本人の耳には届かなかったようだ。

なんだなんだ？ 戦いが終わったら、急に仲良くし始めたぞあいつら…………？

それまでの殺伐とした空気が一変、B・R・Sと白豹がこれまでの手合わせを振り返るかのように話し始めた。

先程のハクの笑い声は良く聞こえたのだが、会話の中身までは聞こえない。

男は齒がゆさを感じつつ、二人の様子を見つめる。

「…………で？ 本当にやるつもりなのか？ ？ 廃棄炉に飛び込む？ ？ なのは」

「ああ」

ハクは肝を試す魂胆で凄味を効かせて質問したつもりだったのだが、ナナシの返事はたったそれだけ。

まるで、「当然だろ？」と言わないばかりである。

「あのなあ…………自分が何をやるうとしてるか分かるか？ あたしでも馬鹿げてるって思ってる。ま、ここまできたら何もいわねーけどさ。そんで、あたしは何をすればいい？」

「廃棄炉は塔の中に？ 封印？ されている。鎖にがんじがらめにされた球によつてな」

ナナシはハクの右手に持たれ、その刃を地に向ける大剣を見やっ

「お前にはその剣でもって、その？鎖を断って？もらう……いいか？」

「良いも何も、約束しちまったからなあ。ま、やるんなら早くやるうぜ」

ハクは自分でそう言ってから気付いた。

具体的な場所は分からないが、自分はそのままでどうやって行けばいいのか。

エア・グライドは先刻、レンが乗って行ってしまっただけで一機しか残りが無い。というより、あつたとしても、それに乗ったことが無い自分には操縦できないではないか。

彼女がそう考えている後ろで、ナナシは紺色のエア・グライドに乗り込み、エンジンをかけて浮上していた。

「うわぁー、あたしったらバカだー。あのさ、その場所ってのはここから遠いのか？」

エア・グライドは一機しかないし、つかあたしは乗ったことがないから運転が……」

ハクは照れくさそうに笑いながら、後ろを振り返った。

すると……

「乗れ」

「は……？」

ナナシは上空から、ハクを見下ろしてそう言った。

ちよつと事態が飲み込めない……。相乗りするにしても、機体がああ高度にあつては無理だし、そもそも一人乗るので機上のスペースは一杯一杯である。

疑問符を浮かべてナナシを見上げる彼女の前に、機体の後尾に付けられた「先端にフックの返しがついた縄」が垂れ下げられた。

「あねさん……？ 間違いじゃなければなんだが、これに掴まれと？」

「そつだが？」

まただ。

またしても例の、「当然だろ？」というような素っ気ない返事。

これは「乗る」っていわねえだろ……。

ハクは心底呆れかえりつつ、ある意味ではナナシを尊敬しつつ、フックのかえしを左手で持った。いや、そこには足をかけて体重を乗せるべきであって、左手はあくまで縄を掴んだ方がバランスが取れ……

「飛ばすぞ。落ちないようにな」

「ちょ、まつ！ああああああああ……」

何かと考え足らずな二人が編み出したのは、水上スキーの如く、片方が後尾に縄を付けた機体を操縦し、片方がそれにひたすら引つ張られるという強引な相乗り法であった。

「たつたいま、B・R・Sと白豹の二人が飛び立ちました。」

「一つのエア・グライドに……えーと、？相乗り？して」

タンに報告の無線を入れる男は、まるで実状と合っていないことを言ったが、短い言葉でまとめる必要がある場合には？相乗り？……と、そう述べるしかないのかもしれない。

そして相手の返事を聞き、男は二人の後を追うべくエア・グライドを発進させた。

\* \* \* \*

「ナナシのあねさーん！今さら何だけだよ」

風切り音の合間から、ハクの大声が聞こえてくる。

二人は何事もなく飛行しているが……傍目にはいかにも悪事を働いた者が、ろくな待遇もされずどこかへ強制連行されているように見えなかった。

「あのさー、？レン？って金髪のやつは待たなくてよかったのかよー？」

「ああ……巻き込みたくないんでな。あいつが帰ってこないうちに

事を成し遂げたい」

「えー？ なんだってー？ あいつが帰ってくればよー、あたしはこんな風にならずにすんだんだけどなー！」

ナナシの声は、飛行中の風切り音にたやすく掻き消されていた。

ハクはもう一度質問しようとしたが、自分の左手が掴む縄が地面すれすれのところであまりに揺れるので、左手に力を込めるに集中せざるを得なかった。

そして足元に流れる地面からフックに目を移した時、それと同時に遠くの空にいくつかの？機影？を発見した。

「なんだよ……もう来たってのか？ エクスプロリズムのやつら……」

ハクがそう呟くのと同じく、ナナシもその機影を捉えていた。

戦闘は極力避けたい。ハクもこんな有様であるし……。

彼女は機影から遠ざかるよう舵を左に取るうとした。

しかし、その際に何気なく目をやったハクが、口をせわしく動かし、訴えるような目でこちらを見ているのに気付いた。

「後ろだ！ 後ろに一機いやがる！ つけられてたんだよ！」

その叫び声が耳に入ってきたのも束の間、マシンガンの激しい銃声が後方で響き鳴った。

「……っ！」

ナナシは弧を描くように機体を大きく旋回、銃火は回避できたが、その際に縄一本でぶら下がっているハクは、

「のわあああああああああああ！？」

科学の当然の原理で、振り子のように大きく空を舞っていた。

凄まじい重力を背に感じつつ、その目は後ろのエア・グライドの操縦者の顔を捉える。

野暮つたい目つきに、どこか不満げな表情を浮かべる冴えない男。先程まで二人の動向を窺っていた輩であるが、第二の銃火を浴びせるつもりか、右手一つに操縦桿を握らせ、左手はマシンガンの火口ひくちをナナシに向けている。

「まったくよお……手間かけさせやがるぜこん野郎ッ！」

男は日ごろの不平不満をぶちまけるかの如く、引き金を握る人差し指にありったけの力を込める。

しかし銃弾はその一つも紺色の機体を捉えることはなく、銃弾の薬莖が空しく足元からその下へと落ちていく。

左、左へと大きく舵を取るターゲットを前に、苛立ちが爆発しそうになる彼だが……銃火を一旦止めると、ターゲットが？急に右へ？舵を取った。

すると直後、視界の死角から何かが飛び出してきた。

「う、うおおおお！？ な、なんだお前はあああああああああ！」

「首を切り落とされないだけありがたいと思いなあああああああああー！」

次の瞬間、男の全身を重たい金属の平手打ちが襲った。

マシンガンを発砲する余裕もなく……またどういう原理で先程まで宙ぶらりんだった白豹が自分を攻撃出来たのか……答えを考える頃には、男は意識を失って吹っ飛んでいた。

「どゆわあああああああああー！」

ハクは両刃を平らにして男を殴りつけた勢いのままに、依然降り場のないターザンスクロールの真っ只中。

彼女が男を殴りつけられたのは、それまでずっと左に運動していた機体が、突然バツと反対方向へと動いたことで、縄がしなる鞭のように波打ったためである。

ナナシもハクも打ち合わせなしでこんな芸当をやり遂げた訳だが、危機はまだ去っていない。

今や地上で自分の乗っていた機体と共に伸びている男だが、何だかんだで手間取り、避けようとしていた機影と距離を詰められていたのが一つ。

それと二つ目は、言うまでもなくハクである。

「もう勘弁してくれええええええええええ！」

全身に襲いかかる重力と猛風に、ハクはいよいよ縄から手を離し



た。

投石機のように宙へ放りだされた彼女は、上空で身をねじって反転。

地面に着地する準備を落下までのわずかな時間で完了させると、何とも強引なことに、彼女は？ズドオオオン！？と派手な轟音を響かせながら足元の瓦礫を粉碎しつつ、難なく着地に成功した。

周囲に巻きあがる粉塵に躊躇する間なく、次の瞬間には彼女は猛ダッシュで自分が起こした砂煙の中から飛び出していた。

向かう先は、つい今しがた撃墜したエア・グライドの所である。

「……乗ったことはねえけどよ、宙ぶらりんよりマシだったの…

…」

誰もが頷けるような正論を独り述べつつ、ハクはナナシとは反対方向へと爆走していく。

「ハク……?」

ナナシは機体がやけに軽くなったのと、例の叫び声がなくなったのをいぶかしみ、ふと下に目をやった。

先端にフックの返しをついた縄が加速度に揺れている。そこには誰もいない。

ナナシの脳裏に一抹の不安がよぎる。……が、現実はそのにばかり浸っていられるような暇を与えてはくれなかった。

あれだけ衝突を避けようとしていたエクस्पロリズムの機影が、いよいよその姿を露わにして前方に迫ってきているのだ。

相手の数は3。どうにか出来ない数ではない。

このまま目的地までずっと追いまわされるか、いつそこで撃墜するか……。

一瞬の逡巡しゅんじゆんの後、ナナシは後者を選んだ。

うわ…… 来んな、こっち来んな……!

自分から迫っておきながら、何とも矛盾した考えを巡らせるダー。しかしその気持ちも分からなくはない。元から勝てる気のしない相手が、こちらに進路を変えて真正面からやってくるのだ。

どうやら自分たちを?撃墜する?つもりらしい……。

ダーは心底うんざりしつつ、他の二人の団員に指示を出した。

「お前らいいな……? オイラたちは団長が来るまでの足止めが出来れば良い。

だからヒット&アウェイ戦法で撃ち落とされないようガンバ

……

「死ねやオラアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

部隊長・ダーの命令などまるで聞く耳持たず。

荒くれ者の団員たちはターゲットが射程範囲内に入ったと見るや、すぐさま銃撃を開始した。

片やマシンガン、片やエア・グライドの前頭に付けられた機銃で、昂ぶる戦闘意欲を弾丸に乗せ、ターゲットにありつたけの銃火を浴びせつける。

「お前らさあ……そういう奴が早死にするんだぜ？ まったく……」  
後方から戦況を見つめながら、ダーは呆れるように呟いた。

そしてその言葉は次第に現実化しつつある。

ターゲットの機体は銃火を受けるや否や急上昇。

鋭く三日月の底辺から頂点までを描くように空を駆け上る紺色の機体は、天空で一瞬静止。

次に激しい電光を迸らせながら大波を滑り下りるかのように急降下してきた。

「うおおおおおおお！！」

標的にされた一人が、飛来者めがけて滅茶苦茶に撃ちまくるが、紺色の機体とすれ違った直後、途端に銃火は止み、操縦者の両腕と一緒に縦に真っ二つにされた機体が見るも無残に自由落下を開始していた。

「ほら……言わんこっちゃない」

ダーがそうつぶやく頃には、もう一機も既に同じ運命を辿りつつあった。

下方を飛行するターゲットに機銃掃射で追撃するも、それも徒花に終わろうとしている。

アッパークットを繰り出すかのような深く沈みあがる動きで、紺色の機体は操縦者の意表について目前に出現。

反応する間もなく、長い鉄刀の突きがその肩を貫通する。

「くっ……そおおおあああああああ！！」

後は、典型的な負けパターンよろしく機体と共に地上へ落ちるのみである。

「……はあ。慎重に戦えばさあ、もう少しぐらい時間が稼げたつてのに」

ダーの目線の先で、紺色の機体がひるがえし、その進路をこちら

に向けようとしていた。

次なる標的は明らかに自分。

ダーは肝を冷やすというよりかは、物臭さを胸に募らせつつ、機体のアクセルを限界近くまで踏み込んだ。

今までの奴らのように馬鹿正直に突っ込んでいくのではない。

ダーの機体は空に大きな弧を描いて宙返りすると、その下方に紺色の機体を捉えた。

同じ線上に並んでいる訳ではないが、斜めの線で二つの機体は対峙している。

するとどちらも相手の出方を窺い、戦闘は一旦硬直する。

「オイラが誘うように逃げたって、お前はどっせ追ってこない。その必要がないからな。相手が逃げたらそれまで。後は自分の進路を急げばいい。」

だから、逃げたいところをこっしてわざわざお前の進路に立ちはだかつてるんだぜ？ オイラは……」

ダーはそう言う……前に垂れていた野球帽のツバを後ろにクルっと回し、視界を良くした。意を決したかのように、その幼い目に鋭さが宿る。

そして次に緑色のチップをポケットから取り出すと、それをベルトのバツクルに挿入した。

「インストール……つっても出てくるのは？木製のバット？だけだな！」

宙に出現した木製のバットの持ち手をパシッと右手に受け止めるや否や、ダーはアクセルを力強く踏み込む。

それにやや遅れて、相手もこちらに向かって猛進を開始。

二つの機体が衝突するにはあと2秒もないだろう。

ダーにはもう自分の未来など見えていない。多分、負ける。いや、絶対に負ける。

だが、自分の役目はどうやら果たせたらしい。

何故なら彼の左目に、向かい風に前髪が大きくなびいて視界が開

けたその目に、遠くの？機影？が一瞬映り込んだからだ。

仲間や、団長が……ついに来た。

「うおおおおおおおおおおおおおおお！！」

白虎隊のように、武器を振りあげ特攻する少年は ……

「……っ？」

紺色の機体とすれ違う刹那、こんな言葉を耳にした。

「？コドモ？は……苦手だな」

何が起こったのかは分からない。

ただ、白銀の閃きがいくつも、一瞬の内に輝いたのは感じた。

木製のバットは柄から先端まで綺麗に輪切りにされ、自分の手元から落ちていく。

しかしそれ以外に斬り落とされた物はないし、機体も無傷だし、今や自分は誰もいなくなった景色を目の前に行っている。

あれ、生きてる……？

ダーは慌てて後ろを振り返った。

今しがた斬り合いを演じた（片方は木製の鈍器だが）B・R・Sの紺色の機体が、その背をみるみる内に小さくしていく。

自分も先程の連中と同じ末路を辿るのだとばかり思っていたが……。

ダーは胸をなで下ろすというよりかは、遠くの空に点と化している紺色の機体に、疑問を感じる気持ちの方が強かった。

\* \* \*

「あー………つたくこいつはよお、一体どうすりゃ動くってんだあ？」

横転していたエア・グライドを引き起こしたまでは良いものの……エンジンの掛け方すら分からず、ハクは機体の周りで苛立ちを募らせていた。

「こんなことしてる間にも、あねさんは戦ってるかもしれねえって

のに……！ どんどん突き放されるだろーが！ おいてめえ！ 聞こえてんだろ！？ なんか返事しろやクソア！」

機体はその迷彩柄のボディを艶つや良く見せるだけで、何も語ることはなかった。

黒トエトのように喋ってくれば楽なのに。

ハクはますます焦燥感に駆られ機体のボディを蹴ったり殴ったり、それで自分の拳が痛かったりしたが、幸いなことに、この機体はナシのとは異なり、操縦桿が一本のレバーであるという事だった。

したがってハクは、片手に大剣を持って自我を保ちながら、もう片方の手で運転できるという訳である。

いや無論、操縦法を知っていればの話だが。

「うわやっべえ……何か遠くの空で、ドンパチやり始めてやがんじゃないかよ……」

ハクの見据える空の彼方で、いくつもの機影が激しく交差していた。

もうこうしてばかりいられない。

ハクはとにかく操縦席に座り、左手にハンドルレバーを握りしめた。

その状態で唸ってみたり、怒鳴ってみたりしてみた。……が、当然のように、機体は微動だにしない。

いや待て……レバーを握って怒鳴ったりしてても動く訳ねえ……。落ち着いて良く考えるんだ。

まず、この足元にあるペコペコする鉄板は何だ……？ レバーを握ると人差し指に当たるこのボタンは何だ……？

考える……それぞれの意味を……考える……。

沈黙のまま、5秒ほどが経過する。

「つだああああ！ 訳わかんねえし、もうめんどくせえ！」  
彼女は半ば焼けになりながら、

「これをッ！」

右足に力を込めてペダルを踏み込む。

「こっしてッ！」

人差指でレバーの赤いボタンを押しこむ。

?ギューイイイイン?……

「ドーーーーー……ンッ!!」

ハクの気合の掛け声に呼応するかの如く、機体は猛烈な勢いで発進した。

「ぬおおおおおおおおおおお!?!」

思いもよらない形で鮮烈な初フライトの幕を開けた彼女。

しかしブレーキの掛け方は分からないし、どう機体を安定させるかも分かっていない。

停止なんてもつてのほかである。

前途多難な彼女の初フライトだが、その機体は確実にナナシのいる方へと向かっていた。

凄まじい銃火の弾幕の中を、限りなく黒に近い白銀の刃が華麗な閃きを見せる。

それが過ぎた頃には決まって悲鳴。

銃火は止み、機体を斬り裂かれた操縦者たちは成す術もなく地上に落ちていく。

こんな空中での鮮やかな殺陣を演じているのは……紺色の機体の操縦者、ナナシ。またの名をB・R・Sである。

「……っ！」

3人の敵を倒したところで、ナナシは前方に？メタリックブルー？の機体を捉えた。

そのシンボリックな輝きは、操縦者が誰かを雄弁に物語っている。

「来たな……？<sup>カイト</sup>KAITO？」

青き金属の煌めきは迷うことなくこちらに向かってきている。

無論、ナナシにも迷いなどない。

互いに刀を振りあげ、……そして機体が凄まじい勢いですれ違う。刀と刀が衝突しあい、火花と耳をつんざくような金属音が迸った。しかしその刃の衝撃にうろたえることもなく、二人は機体をひるがえし、再び対峙する。

「インストール……」

白い電光を放ったのは、メタリックブルーの機体であった。

空を斜めに切り裂くよう滑空しながら、KAITOはその左手を巨大な砲身へと変える。

超高出力粒子砲……？エンドレス・エンド？である。

青白き波動の第一波は、紺色の機体の横をかすめた。

続いて第二、第三波を発射する。

そのどれもが見事にかわされていくが、三発立て続けに撃ったところを見ると、どうやらノー・チャージで波動を放ったようである。



しかしながらその反動は凄まじく、K A I T O の機体は自ずと減速した。

「そんなものを早々に使うとは……お前、相当焦ってるな」

「……ふん」

またも機体を密接させ、ナナシはK A I T O に刃を振り下ろす。相手の攻撃が左から来たのに対し、K A I T O は砲身を盾にして攻撃を受け止めた。

アスファルトを鋭利な刃物で斬り走って行くような音をこだまさせ、二人の戦いはいよいよ熾烈しつれつを極める。

「ガキーン!? …… ナナシの愛刀・クロガネが弾かれた。

その手はまだ刀の持ち手を強く握りしめているものの、勢いよくはじき返されたことで上体がのけぞり、バランスを大きく崩してしまった。

「くっ……!」

このままでは機体から落ちると瞬時に判断したナナシは ……

「まだ終わらない……。これからだ」

自分の機体の足場を勢いよく蹴り、空高く跳躍した。

そして上体を逆さにして落ちざま刃を振り下ろす。

その攻撃はかわされ、いや、元々K A I T O を狙っていなかったのだから。

クロガネは、メタリックブルーの機体に突き刺さった。

ここで疑問だが、既に自分の機体を失った彼女は、跳躍後何に着地するのだろうか。

それは遥はるか眼下の地上でもなければ、そもそも足を付ける事さえしなかった。

彼女は機体に突き刺したクロガネをポール代わりにし、落ちないように自分の体を支えたばかりか、反動を利用してK A I T O の顔面めがけて左足で蹴りまで放ったのである。

「ぐあ……っ!」

そして意表を突かれたK A I T O は、もろに回し蹴りを右頬に受

けてしまった。

跳躍後、足をどこかに付けることを着地と呼ぶなら、ナナシはその瞬間に確かに？着地？した。

思いもよらず足場にされたK A I T Oは激昂し、その巨大な左腕を振り回す。

彼女の身体が、右から飛んできた金属の砲身に強く打ち付けられる。

これで邪魔者を機外へと追い払えたか、と思いきや……。

ナナシは砲身の先端で、それを右脇に抱えるようにしてしがみついていた。

更にここでK A I T Oの犯したミスは、砲身を横に払ったはいいが、その後に砲身を上へ向けてしまったことである。

よってナナシの身体は、機外へ落ちるところかむしろ新たな掴み場を得て安定している。

そして彼女はパツと砲身から離れたかと思うと…… K A I T Oの顔面めがけて拳を放った。

「うぐ……っ！」

ナナシの右拳はテンプルをとらえ、K A I T Oはよろめく。

足で踏ん張るのも束の間、K A I T Oは右手に持っていた刀で突きを繰り出した。

……が、それもかわされ、深く沈んだナナシは次の瞬間 ……。

「ぐああっ!？」

刀の突きのお返しか、K A I T Oに強烈な？頭突き？をお見舞いした。

後部の鉄柵まで追いつめられたK A I T Oの目前に……それまで己の身を削って回し蹴りだの、パンチだの、頭突きだの……そんな荒々しい戦いぶりを見せたとは思えない、黒髪ツインテールのしなやかな腰付きの少女が、機上に両足をつけて立っていた。

いや、少女なんかではない……。B・R・Sだ。

今、自分が倒さなければならぬ敵。

これまで幾度となく手を煩<sup>わづ</sup>つてきた厄介者。

「ぶち殺す？…… K A I T Oはその紅<sup>あか</sup>い瞳に燃えるような殺意をたぎらせる。」

「随分と…… 必死じゃないか？ B・R・S」

しかし K A I T Oは内なる殺意の衝動を抑え、あくまで余裕然とした笑みを浮かべる。

「必死の何が悪い？」

その素っ気ないナナシの物言いが、殺意蠢<sup>うごめ</sup>く K A I T Oの神経を更に逆なでした。

「気に入らんな…… その喋り方も、自分は当然の事をしていってた態度も、俺はお前の全てが気に入らない」

これまでの苛烈<sup>かれつ</sup>な戦闘は一旦鳴りを潜め、黒と白の二対の存在が、静かに言葉をぶつけ合う。

「だからなんだ？ だからいつまでも同じ場所に居座って同じ毎日を送るのか？」

自分以外何も気に入らないから、お前はそうやって自分の殻に閉じこもるしかないんだ」

「知ったような口を。俺が自分の殻に閉じこもっているだと？ 馬鹿な。」

俺はただ、自分が生きていだけだ。死にたがりのお前と違ってな」

K A I T Oはそう言いながら、反撃の機を窺<sup>うかが</sup>っていた。

間合いを詰められ、エンドレス・エンドを放つこともできないし、刀も同様。

今や機体は、自分が攻撃をするためにオートマチックで一定の高度を滑空している。だから余程の衝撃がない限り墜落ということは無い。

だが、いずれにしろこの状況を打開するためには、機体を自分の意思で動かす必要があった。

そして機体の操縦桿は、ナナシの背後にあるのである。。

「B・R・S。お前は自分がいつまでも死なないと思っていないか

……？」

「……何が言いたい？」

「だから無茶が出来る。心のどこかで、自分が死なないと思ってるからだ」

K A I T O は言葉で陽動しながら、悟られぬようゆっくりと前進していた。

「違うな。私は多分、いつ死んでも良いと思っただけだ」

「ほう？ 仲間思いのお前にしては意外な返答だな」

ほんの一瞬で良い。操縦桿を、思い切り？下？に向けられればそれで……。

「仲間が死ぬのは嫌だ。だが、自分が死ぬのはそんなに嫌じゃない。おかしいか？」

「ああ……心底そう思う。お前は？馬鹿？だ」

二重の意味を込めた言葉を放った直後、K A I T O は足元を蹴って飛び出した。

ラリアットのようには砲身の付け根をナナシめがけて振り回すが……易々とかわされ、おまけにカウンターのひざ蹴りまで腹にくらった。

その際に右手に持っていた刀が床に落ち、後部の鉄柵に引っかかった。

「だ、だが……ハハハツ……ハ、」

刀はひざ蹴りの衝撃で落としたものではなかった。ついでに言えば馬鹿みたいに身体を前のめりに屈め、反撃覚悟でナナシに突っ込んだのも。

全ては……右手に、操縦桿のレバーを握るために。

そしてK A I T O は、右手で思いつきり操縦桿のレバーを下にグイッと向けた。

すると途端にエア・グライドは機体を垂直にさせ急上昇。

ナナシは思わぬ足場の変化に大きくよろめき、身体が一瞬宙に浮かんだ。

どうにか機体後部の鉄柵に掴まって落下の危機はしのげたものの……今の出来事で、形勢が1から10まで覆されてしまった。

それまで団長とB・R・Sがあまりに密接していたために、攻撃が出来なかった周囲の部下たちも、空を垂直に昇っていく機体を追いかけて、その底部にぶらさがるB・R・Sめがけありったけの銃火を浴びせる。

「ぐっ……！」

弾丸のいくつかが身体をかすめ、メンテしたばかりの身体に新たな裂傷を刻んでいく。

それに痛みを覚え、思わず声をもらしたナナシの目前に、

？ガチャ？……

黒い穴。闇を湛えた口径何ミリかの穴。

そう、この状況下で見る黒い穴とは……間違いなく？エンドレス・エンド？の銃口である。

「？また？……俺の勝ちだな、B・R・S」

右手にレバーを握り、それを頼りにぶら下がるKAITOは、口元を勝利の喜びに歪めつつ、自分が落ちないよう鉄柵にしがみつくほかはないナナシの顔面に、エンドレス・エンドの銃口を突き付けた。

ナナシの視界を覆う黒い穴の奥底で、？青白い光？がその輝きを次第に強めていく。

死ぬのか？ 私は……。

青白い光に見入る彼女の思考は、その全てが？死への恐怖？に包まれていた。

未だかつて体験した事のない感覚。

全身がほんの一瞬のうちに深い闇に包まれ、縛られ、吞まれてい

くかのような無力感。

そんな漆黒の中は走馬灯さえ光を放つ余地がない。ただただ、ひたすらに？闇？なのだ。

前言撤回……。

正確には？死？が怖いのではない。

それを目前にすることが、この世界の何よりも怖いのである。

「ああああああああああねええええさああああああああんんんんん！」

誰かの豪快な叫び声でハツとして、ナナシは振り返る。

驚いたことに、さっきまで自分が乗っていた紺色の機体が、こちらめがけて突っ込んでくるではないか。

操縦者もなしに前頭を向けて機体が飛んでくるこの謎は、その下方にハクが何かを投げた後のような態勢を取っていたのが目に入ると、一気に氷解した。

にわかには信じられないことだが、ハクがエア・グライドを？投げ飛ばした？のだ。

操縦者のいないエア・グライドの飛来に驚いたのは、何もナナシだけではなかった。

K A I T O は機体を回避させることに集中するあまり、引き金を引く事ができなかった。

無論、その隙をナナシが見逃す筈がない。

「？仲間？というのは……不思議なものだな」

ナナシは鉄柵に引っ掛かっていたK A I T O の刀を左手に持ち

……

「その存在で時には私を傷つけたり、苦しめたりするが、最後はやはり、

私を、助けてくれる」

右手で鉄柵を引っ張るようにして反動を溜めると、勢いよく跳躍

した。

「？勢いよく？とは言いが、空中での出来事であるため、その動きはまるでスローモーションのように見える。」

そして彼女は、刀を元の持ち主に返してやった。

ただ手に優しく返したのではなく、右胸に思いきり突き刺して、だが。

「ぐっ……あああああああ！ お、お前……！」

右胸を刃で貫かれてもなお、KAITOはレバーから右手を離そうとはしない。

「お前はもう忘れたかもしれない。」

「あの戦い？が終わった後、お前は私にこう言ったんだ。」

「よくやった……そう、たった一言だけ。」

MEIKOのことなんて微塵も気にかけていなかった。私はそれが許せなかった」

ナナシは表情を頑なに保ったまま、昂<sup>たか</sup>ぶる感情を込めて静かに言葉を紡ぐ。

「死ぬのが怖いか……？ やっぱりな。」

お前は生きたいんじゃない。ただ、誰よりも死にたくない？弱虫？ただだけ」

目と鼻の先で放たれた言葉に、KAITOの顔が激しく歪む。

プライドも何もかもズタズタにされておきながら、自分はそれに対して何の抵抗も反撃も出来ない。そんな悔<sup>い</sup>しさと憤<sup>いきん</sup>りに歪んだ顔。

だが、そんな顔にはもはや一瞥<sup>いちべつ</sup>くれることもなく、ナナシは機体ごと貫通させた刀を先ほどと同じようにポール代わりにして反動をつける、また更に跳躍した。

そして機体前部に突き刺さっていた愛刀・クログネを引き抜き、跳躍の次に自然と生まれる落下の勢いそのまま……クログネを一閃、斜めに振り抜いた。

「終わりだ…… KAITO」

音もなく、クロガネはK A I T Oの右手首を切断した。

それでも依然右手はレバーを握りしめたままだが、その手と繋がりを断たれたK A I T Oは、背を地面に向けてただただ落下していくのみだった。

「この……俺が……うおおおおおおお！」

K A I T Oはエンドレス・エンドを天空に向け、普段の声質からは想像もできない雄叫びを上げながら、意地の一発を高らかと放った。

メタリックブルーの機体と波動とが触れるや否や、それは？ 臨界？ を起こして跡形もなく消失した。

しかしナナシは依然、その姿を見せつけたまま空を舞っている。

負けた……？ この俺が……？

ナナシは、近くを落下していた紺色の機体の後尾につけられた縄を掴み、それを手繰り寄せるようにして……自分と同じように地面へと落下していく筈だった者は、自分がこの手で塵も残さず殺そうとしていた者は、次の瞬間には何事もなかったかのように、エア・グライドによる飛行を始めていた。

死にたがりのあいつが生きて、何よりも自分の生を望む俺が？ 落ちている？ ……？

や、やめろ……死にたくない、死にたくない……！ 俺は、俺は……！

紺色の機体は視界から消え去り、彼の身体はその全てが落下の加速度に吞まれていった……。





私が来た時には、もう面白い見せ物は終わっていた。

B・R・SとKAITOの戦闘……。

中身を見ずに、結果だけを知るといっは何とも歯がゆい気持ちになる。

「団長ッ！ 大丈夫ですか!？」

はるかな上空から地上へと叩きつけられたKAITOの周りに、その安否を気遣う団員たちがこぞって集まっている。

恐らく、間違った行為ではないだろう。それは自分の忠誠心を示すにはうってつけの機会なのだから。

だが、そんな暇にKAITOは追って欲しかった筈だ。

追って、攻撃して、自分の前にその傷ついた身体を差し出して欲しかった筈だ。

そしていらぬ高説をまくし立てながら、優越感に口元を歪め、高笑いを周囲にこだませつつ、ありったけの時間を使って自分との格の違いを見せつけながら、最後はやはり自分の手で息の根を止めたかった筈だ。

B・R・Sの息の根を。命の鐘を。その首を斬り落とすことによつて。

しかし団員たちは、そんなKAITOの心境にまるで気付かない。自分が団から追放されたくないがために、生きたいがために、絶対権力者に媚を売っている。

中には心から彼の安否を心配している者もいるだろうが、それは彼の周りに集まった8人のうち、果たしてどれぐらいがそうなのだろうか？

所詮はならず者の集まり。自分が生きたい、自分だけが生きたい。そんな者が指揮し、そしてそんな者がその下に集まった烏合の集団。それが、？エクスプロリズム？だ。

「……大丈夫です。団長は死んではいません。眠っているだけです」長髪のアンドロイドが、目をつむって仰向けに寝ているKAITOの上半身を引き起こしながら、そう落ち着いた声で言った。

何とも断定的な言葉だが、どこにそう言える根拠があるのだろうか？右手首はなく、背中を激しく地面に打ちつけられた衝撃で？内部の部品？がそこら中に散ってしまっているというのに。

「タンさん、俺たちはこの後どうすればいいので……？」

「決まっているでしょう。団長をトエトのところへ運んでください、今すぐ」

「はっ……！」

3人がかりで団長の身体を運ぶことになり、場には5人の姿が残った。

追うのか？ あの空の彼方へ飛んで行ったB・R・Sを。

仇を討つのか？ 団長のために。

「……現実的に言って、この数を持ってしても今の我々にはB・R・Sとともに渡り合えるような戦力はありません。更に白豹もいるとなつては……」

長髪のアンドロイドの感情に乏しい表情が、見る間に曇っていく。「今回は？撤退？します。……あなたたちも、団長の仇を討ちたいでしょうが……私に出来るのは、これ以上被害を増やさぬよう努めることぐらいです。申し訳ありません」

今やここにはいない団長に向けても言ったのか、彼の言葉には二重の意味が込められているような響きがあった。

「団長の仇を討ちたいでしょうが」……多分、心からそう思っているのは彼だけだ。

それ以外の団員はむしろそう出来なくて心底安堵している。自分が生き残れるから。

だが、顔には出さない。みんな一応は、場の空気に合わせて沈痛な面持ちを浮かべる。

実に面白いじゃないか……？ニンゲン？がしていたことを、そっくりそのまま体现している。

だがかといつて、これ以上彼らを見ているつもりはない。

私の興味は元より、B・R・Sにある。

そしてあの？金髪碧眼へきがんの少年？も……。

さて、そろそろ行かなくては。

彼女たちが何を成そうとしているのか、それを確かめるために。

\* \* \* \* \*

紺色と迷彩柄の二機のエア・グライドが、互いに機体を寄せて空を並行に飛んでいる。

その機体の操縦者は、それぞれ顔を見合すことはなしに言葉を交していた。

「まあ、こいつは気合で動かしたよ。今も気合で操縦してる。何とかなるもんだな」

そう余裕たつぷりに述べるハクは、まるで初めてエア・グライドを操縦しているとは思えないぐらい、安定した飛行を見せている。

一方のナナシは、自分が危機に陥った時にどうしてこの紺色の機体がハクの怒号と共に飛んできたのか、それを本人に尋ねた。

「あねさんのところへ爆進してるとさあ……急に落っこちてきたんだよ。で、あたしは慌てて縄を掴んで機体をキャッチした。そして見上げてみりゃあねさんは大ピンチと来てる。

その時は両手を離しちまっただから操縦なんて出来ないし、かといって剣を離しちまっただらあたしはあたしじゃなくなるだろ？　だから思いつきり？機体をぶん投げる？ことにしたんだ」

「……そうか」

もしも受け答えをするのが彼女でなく、例えばレンだったら「さ

らつとすごいこと言ってるんじゃない！」と鋭い指摘が入るところだ  
るうが、ナナシは淡泊に返事をしたきりそれ以上言及しなかった。

「それであねさんよ、さつき？この世界を壊す？とか言ってたけど  
……具体的にどうするんだ？」

「廃棄炉に飛びこむ」

「……で？」

「それだけが？」

しばらく、エア・グライドの風切り音だけが二人を包む ……。

「ちょ……あたしはそんな無計画なことに巻き込まれようとしてい  
るのか！？」

だからさあ、飛び込んだ後どーするんだっつーの！」

「知らない。何とかなる。何とかする」

「おいおいおいおい……！ 向こう見ずにも程があるんじゃないな  
いか？」

世界を壊すとか言ってる割に何にも当てがないじゃねえか！」

「……じゃあ聞くが、お前は当てのあることしかしないのか？ そ  
れはK A I T Oと一緒だ。

私の一番嫌いな生き方。訳が分からなくても、前には進む。進もう  
とする」

「いや、そういうことじゃなくてさ……はあ」

？何を言ってもムダだ？……そう言わないばかりに、ハクは大き  
なため息を吐いた。

そしてナナシの横顔を見やる。

全く何を考えているのか分からないが、何か強い意思があるのだ  
けは見て取れる。

その必要以上に物言わぬ口に。前だけをキツと見据える黒い双眸  
に。

だからこそ、彼女が何を思っているのか聞きだしたいのだが、無  
理だろうな、そう諦めて視線を自分の足元へ移そうとした時、

「大丈夫……MEIKOが言ってたんだ。」

廃棄炉は？タイムトンネル？だって。飛び込めば過去の世界へ行けるって。

どうだ？ 当てがあるだろう……？」

その言葉を聞いた瞬間、どこか優しさや、懐かしさが感じられるような響きの声が入ってきた瞬間、ハクは全てを理解したような気がした。

？ナシのあねさんは、これだけを思っただけで行動している？ ……

…そんな風に。

「わーっ たよ。具体的なことは何もわかんねーけど、わかったよ。

とりあえず、あたしはあねさんが廃棄炉に飛びこめるよう一肌脱げばいいんだろ？」

「ああ。……とここで見えてきたぞ、廃棄炉が封印されている？塔？が」

廃墟群の中でひと際存在感を放ってそびえ立つ？塔？が、二人の眼下に見えてきた。

塔の頭頂部は、本来の鋭く尖った三角形ではなく、表面にいくつもの？時計盤？をこしらえた大きな球体が、暗い赤色の光を放つ鎖にがんじがらめにされて隙間なく取りついている。

まるで宇宙より落下してきた？月？が、上部を斜めに輪切りにされた塔の断面口にすっぽりはまってしまったかのようなのである。

そんな？月に蓋ふたをされた塔？の上空で一旦静止した後、二人は別行動を取った。

ハクは球体をごんじがらめに縛りつけている？鎖？を大剣で断ち斬るべく、塔の間近へ。

一方のナシは、来る時間に備えてその場で滞空している。

ふと……塔を見下ろす彼女の目に、？戦闘の痕跡？が映り込んだ。塔の横に地平の彼方へまで続く大地の裂け目。それを作ったのは誰か？ そう、B・R・Sを使ったこの自分だ。

彼女の脳裏にあの時の場面が蘇る。巨人人型ブラックと共にこの手で撃ち滅ぼした盟友。

その身体が、心が、あの大地の裂け目のどこかにあるのかと思つて、つい探してしまふ。

当然のようにない。あるのはただ、空風に吹かれる瓦礫、鉄骨、目に見えない小石。

彼女はたまらなくなつて、思わず機体を降下させた。

そのつもりもないのに地上へと降り立って、塔を真正面から見据える。

これから自分がしようとしていることは、本当に正しいのか？  
そもそも過去の世界へなど行けるのか？ たどり着けたとして、自分に何が出来るのか？

何も分からない。具体的なことは何も決めてないし、未来がどうのなんていうのはもつてのほかだ。

ただ、？この世界を壊す？……闇の中、その衝動にのみ、彼女は突き動かされている。

彼女は、左手首に付けている黒い腕時計を見やった。

別に時刻を確認する訳でも、気にしている訳でもない。

そこに盟友が息づいているのを、確かめたかったのである。

もう少しだけ付き合ってくれ。私の意識が、まっとうな形で消えるまで。

頭の中で、彼女は盟友にそう語りかけた。

> i 7 6 7 6 | 1 2 1 8 <

「？ナナシ？だ……これが最後の連絡になる。だが、特に何も言う事はない」

彼女は黒トエトに装着されたヘッドギアで、ハクに最後の連絡を入れる。

「……ああ、礼を言う。じゃあ、そろそろ時間だな。頼む」

ハクの乗ったエア・グライドが、塔の前を彗星の如く横切った。

直後に？鎖？が全て横一閃に断ちきられ、封印を解かれた月がすすかに動き始める。

無鉄砲、ここに極まれり。

無知の女王、暗黒を突っ走る。

全ては今、ここから始まっていく。

t o b e . . . . c o n t i n u e d .



&l t ;&l t ;C h a p t e r 5 &g t ;&g t ; (後書き)

次回 予告

R o c k ・ 5 S i d e ・ B ? 二人の目指した月明かり？

乞うご期待

## Rock・5 Side・B?二人の目指した月明かり?

金髪碧眼へきがんの、瓜二つの容姿を持った少年と少女。

二人は軽快な足取りで近づき合い、少女の方が先に右手を上げると、少年もそれに応じて右手を高らかに上げた。

そしてすれ違いざま、二人はハイタッチをする。

任務達成を分かち合うように。二人で一緒に成し遂げたのだと、証を残すかのように。

この行為は二人にとってはいつもの儀式だった。いや、そんな仰々しい表現をするほどのことでもない。

「ねえ」と呼びかけたら「なに?」と答えるのと同じ、ごく何気ない意思のやり取り。

しかしそんなありふれた会話が出来なくなる時が、ある日唐突にやってきたのである。

二人の終末劇は、天空を突き刺すような超巨大人型ブラックの雄叫びと共に幕を開けた。

金髪の少年……レンは、ボディの黄色が鮮やかなエア・グライドに乗り込み、ブラックの頭上で滞空していた。

金髪の少女も同じカラーリング、タイプのエア・グライドに乗ってレンの近くにいる。

二人は戦闘の際でさえ「片時も」と言って良いほど離れることがない。

二つの欠片が繋がることで一つの大きなハートが築かれ、そこに息づく。

二人は共にいることで大きな力を発揮した。

それを互いに良く知っていたし、またそんな利害以上の感情が二人にはある。

ただ残酷なのは……別れの瞬間というのは、どこにでも無情にや

つてくるといふ事実があることだった。

無数のブラックが互いに融合して誕生した超巨大人型ブラックは、人間ならば聞くだけで失神するぐらいの強烈な産声を上げた後、突然、腰を深く落として？跳躍？した。

付近には、後に？月に蓋をされた塔？と呼ばれる建物がある。そこから間欠泉の如く湧き出た無数のブラックを全滅させるべく、アンドロイドたちはこの？ホールフォビア？の地へと集結した。

その塔と肩を並べるぐらいに大きいブラックの巨軀からは想像もできないモーションの早さに、誰も反応が遅れた。

ブラックの頭上にいたレンを含むエクスプロリズムの一団は、こちらめがけて頭突きをかましてくるブラックをギリギリのところまで避けた。

ブラックは跳躍の最高地点に達すると、天空で太陽を一瞬飲み込んで反転。足を地面に向けて跳んできた道を猛烈な勢いで急降下してきた。

「逃げる……！」

レンの一声で皆が一斉に回避運動を取った。が、一撃目にブラックとニアミスした際、辺りに猛烈な突風が広がって殆どの団員が一時操縦困難に陥っていた。

そんな体勢的に不十分なところを、ブラックの巨軀が容赦もなく通り過ぎていく。

またも大きな衝撃のうねりが辺りに迸はなつたが、幸いなことにブラックの直撃を受けた団員はいないかのように思われた。

「……リン？」

突風を堪え切って機体の態勢を整え直したレンの眼前に、操縦者のいない自分の機と同じカラーリングのエア・グライドがあった。

それは急にプラグを断ちきられたかのように、ごくスローモーションに宙を舞っている。

そしてその機体の下には……ハートの欠片が一つ、ゆっくりと落ちていた。

レンは一目散にエア・グライドを急加速させた。  
空中に投げだされた少女にめがけ、それまで出した事のない猛スピードで風を切る。

初めは何かの冗談かと思った。確かにあれだけ大きな人型ブラックとは戦ったことはないし、まさかあんな風に飛びかかってくるとも思わなかった。完全に意表を突かれたのは認める。

だが、ブラックとは「ただすれちがった」だけだ。

それなのに、これまで何百回とブラックと戦ってきた百戦錬磨の自分たちが不覚を取る？ 猛風に打たれただけで機体のハンドルから両手を離す？ 成す術もなく落ちていく？

しかもよりにもよって……？リン？が？

しかし目の前の現実を疑っている暇も、また冗談であって欲しいと願っている余裕もなかった。

少女の身体はどんどん加速度をつけて地上へと迫っていく。しかもあろうことが、彼女はこのままいけば塔の中にある？トラッシュ・ホール廃棄炉？へと落ちてしまう。

レンはこれ以上踏み込めないほどアクセルペダルを踏み込み、一心不乱に少女を猛追する。

「リン！」

レンは頭から真つ逆さまに落ちていく少女の傍らかたわに機体を寄せ、操縦席から身を乗り出して精一杯に左手を伸ばした。

少女の左手もそれに呼応する。意識を失ってはいなかったようだ。風の渦巻く空中で二人は互いに腕を伸ばしあう。互いの瞳の水晶が点と線で結ばれる。

後少し、もう半分。

瞳の奥にいつもの、二人のいる未来が確かに見えていた。

しかし夢中になるあまり、彼は気が付いていなかった。

地上へと豪快な破碎音を立てて着地した巨大ブラックは、もうもうと巻き起こる砂煙の中から、付近に落下してくる二人の姿を、底に青白い光を湛える空洞の瞳に捉えていた。

ゆっくりと身体をねじり……口元を「ニタア」と歪ませ……まるで気配に気づいていない蚊を押しつぶそうとするかのように……平手にした右腕を音もなく振り上げた。

依然、二人はブラツクの気配に気がつかない。

そして張りつめたピアノ線のように伸びきった互いの手が、ついに二人を結び付けた。

「やった……！」

レンは小さく歓声を上げた。少女の重さが機体に加わったことで大きく前のめりになるも、右手でレバーを操作して態勢を立て直そうとした。

その時、途端に視界が日陰となった。彼の左手にぶら下がってこちらを見上げる少女の顔が薄暗く見えている。

陽を遮ったのは一体何か。彼は一抹の不安を覚えながら恐る恐る顔を上げた。

正面に漆黒の大きな掌が、その長い五本指を広げていた。獲物が近くを通り過ぎるの待つてひたすら口をあぐりと開けている生物のように。

そしてその漆黒の生物は、こちらが逃げようとする間もなく凄まじい勢いで迫ってきた。

空気の渦を巻き起こしながら絶対の質量を伴って、二人を打ち砕こうとする無情の鉄槌。

「二人とも、逃げなさい！」

その声がレンの耳に飛び込むのも束の間、彼の目前で激しい？衝突？が起きた。

「うああああああ！」

直撃は避けられたが、衝突の余波で彼は機体から投げ出されて後方へと吹き飛んだ。

視界も意識も動転して、ただ身体が重力に呑まれていくのを感じる。

だが、同時に左手にも暖かな感触があった。リンの左手である。

彼は絶対に離すまいと思った。

目を開いて下を見てみると、進路は相変わらず廃棄炉の中へと続いていた。

斜めに輪切りにされた塔の断面の、その奥底で青白い光を湛えているのが見える廃棄炉。

このまま落ちても構わない。彼は静かにリンの身体を抱き寄せた。間近で彼女と目が合うと、こんな状況だというのにちょっと照れくさかった。

もしも強い風が自分たちを包み込んでいなければ、彼女の息が鼻先にかかってとてもじゃないが平静など保っていられなかっただろう。ハイタッチは良くするが、互いを深く抱擁ほうようしあったことは一度もないのだ。

鼓動も、瞬きの一つ一つも、そして内心ではかなり恥ずかしがっているのも、二人は互いの体温を通して良く分かった。

この時間はあとどれくらい続くのだろう。恐らく、後10秒とない。

このままあの青白い光の中へと二人揃って落ちていく。

それが何を意味しているのかは分からない。

ただあそこに落ちた者は「死ぬ」と言われている。

しかし、レンは不思議と恐怖は感じなかった。

彼女の体温を感じていられる限り、怖いことなど何一つだってないのだから。

「ちよつと痛いけど……ガマンしてね、レン」

ふと、リンが耳打ちした。

「……え？」

彼女の澄んだ青い瞳を見据えながら、レンは口から疑問符をこぼした。

「うまくいえないけど、その、あー、……今まで、ありがとう」  
彼女が照れくさそうに微笑んだ。

直後、レンは自分の左頬に鋭い痛みを感じた。

鉄の塊をぶつけられたような痛み。その衝撃によって彼はゆっくりと彼女の身体から離れていった。

殴られたのだ。犯人は明白。彼女だ。リンだ。

二人は良く喧嘩もする。ちよっかいが高じて殴り合いにもなる。ただ、その時に受けるような痛みではなかったのがすぐに理解できた。

あなたは生きてという、優しい、優しい、彼女の一撃。

「リイイイイイイイイイイイン！」

そんな悲鳴染みた叫びも空しく、彼の身体は塔の断面の縁に一旦打ちつけられ、バウンドするように今度は地上へと落ちていった。

全身を強く打ち、朦朧とする意識の中で彼が最後に見たのは

……自分たちを助けようとしてブラックの攻撃を受け、半壊となったMEIKOと……そのすぐ間近にそびえる超巨大ブラックを呑みこもつとする？青白い光？の広がりだった。

向こうから、金髪の少女がやってくる。

軽快な足取りで、いつもの満面の笑みを顔に浮かべてやってくる。彼女が右手を上げた。こちらもそれに応じて右手を上げる。

何回目のハイタッチになるだろうか。そんな野暮なことは聞く必要がない。

何故ならこれからもずっと、その回数は膨らみ続けていくのだから。

「…………え？」

彼の右手は空しく宙を過ぎった。

慌てて振り返る。するとそこには、誰もいない空白が静かにあるだけだった。

？パン！？という勝利の福音も、一瞬掌に走る痛みも、感触も、笑顔も、見慣れた光景は何一つそこにはなかった。全てが沈黙と静寂とにすり替わっている。

彼はこの瞬間、失くした記憶の全てを思い出した。

それは一つの物語が終わったことを彼に告げていた。

容姿が良く似た少年と少女。

金髪碧眼という同じ色の下に生まれ、引き合った二人の物語だ。

「バツカじゃないの!？」

「そーゆーお前もな！」

舞台では二人の演者が互いに罵り合っている。

口喧嘩のシーンのようだ。

「…………分かったよ、オレが悪かったよ」

「初めから素直にあやまればいいのさ」



シーンは仲直りへと移行。

「レン、そつちお願いね！」

「任せとけ！」

二人の周りを、黒装束の者たちが躍動している。

どうやら敵らしいが、二人は息の合った連携で次々に倒していく。

「……はあ、疲れた」

「こんなんで？ ま、あんたにしては良くやった方ね」

そう言つて二人は笑顔でハイタッチした。

一人しか観客のいない劇場に、？パン！？という乾いた音がこだまする。

「お、おい、ブラックなんか抱えて何してるんだよ……？」

「うん……今ね、死んじゃったみたい」

一人の演者が全身真つ黒な子犬を抱きあげて、物悲しそうな表情をしている。

子犬はその演者の腕の中でぐったりとし、もう息をしていない。

「変な風に考えるなよ。オレたちは、ブラックを倒さないと生きていけないんだ」

「分かつてるよ。ただ、ちよつと、……可哀想だかつて思っただけ」  
そのセリフは二重の意味にも取れた。

二人の演者は子犬を優しく地面に置いてやると、手を合わせて冥福を祈るのではなく、その掌を子犬に向けた。すると子犬の身体は霧となつて、二人の掌の中へと吸い込まれていった。

「よし、オレが10数える間にお前ら散らばれよ！」

舞台上に数人の演者が集い、これから何らかの遊戯ゆぎを始めるようである。

陽気さを演出するような肌色の照明が舞台をライトアップし、手で目隠しをしていた演者が「……10！」とカウントし終わると、バツと機敏な動きで辺りを見渡した。

左端の袖幕そでまくで人影がうごめいた。

「MEIKOみっけ！」

演者に見つけられ、その人影は舞台袖に引っ込んでいった。

「ナナシみつけ！……んなどころでボーっと突っ立ってさ、隠れる気あつたのか？」

演者は次々に人影を捕まえていく。

「リン、みいーつけた！」

「やば……」

「え、おい、逃げるのか！？」

舞台には瓦礫がれきの街を模したハリボテが設置され、二人の演者がそこを走つたり飛んだりし、賑やかないたちごっこを繰り広げている。

「うおおおおおお……っしゃ！ 捕まえた！」

「え、ちよつと……！」

「あ……？」

逃げていた演者の背中に勢いよく飛びかかる。

しかし追うことに夢中だったあまり気がつかなかったのか、そこが瓦礫つぎやまの築山の先端で、二人はこんがらがるようにして落下した。

「あちゃー……ご、ごめん」

「素直なのはいいけど、早く、……どいてよね」

落下した先で、追いかけて役の演者がもう一人を組み敷くような有様になっていた。

慌てて立ち上がったが、二人とも頬を赤く染めたまま、しばらく何も語らなかつた。

この後も物語は続いた。

場面変化に合わせて何色もの照明が代わる代わる舞台を照らし、演者たちの喜怒哀楽に彩りをつける。

ナレーションも、また音響や効果音もない。

容姿が良く似た二人の演者のセリフ、足音、息遣いだけが劇場に反響しては消える。

そんないつ終わるとも分からない二人の物語を、たった一人の少年だけが観賞していた。

劇場中ほどの座席に着き、その憂いを宿したような青い瞳は演劇に見入っている。

そして場面転換。

二人の演者は見えない糸で宙釣りにされ、互いを深く抱きしめ合っていた。

「ちよつと痛いけど……ガマンしてね、レン」

そのか細い声のセリフに、唯一の観覧人は思わず立ち上がった。

？上演中はお静かに？

どこから聞こえたのだろう。

後ろを振り返ってみるが誰もいない。赤毛張りの座席はどれもこぞって空いている。

それを2秒と見ないうちに、何者かに背中を強く引つ張られるような感覚に襲われて、少年は着席を余儀なくされた。

再び立ち上がったも、何度立ち上がったも、同じことを繰り返すだけだった。

「リイイイイイイイイイイイン！」

劇場内に痛ましい悲鳴が駆け巡る。

それは反響から残響に移ろい、最後は跡形もなしに消え入った。直後、暗転。どこまでも暗転。

舞台の照明が一切落とされ、劇場は一転してただっ広い暗室と化した。

少年は自分が席に座っているのか、また立っているのか分からなかった。

感覚が消えて、意識だけが浮遊している。

このまま暗闇の一部分として同化していくのも悪くはないかもしれない。

そんな諦めが脳裏に浮かんだ時、？パツ？と一筋の光が差し込んだ。

黄金色に近いその白い光は、先程まで舞台だった場所に煌々（こうこう）と降り注いでいる。どうやらスポットライトであるらしい。演劇はまだ続いているのだろうか。

そう頭の片隅で思いながら、少年はそのか細い光の中に誰かが出てくるのを期待した。

背中が現れた。二人いた演者の一人、金髪の少年の後ろ姿が光の円の中に浮かび上がっている。

「あのさ……さっきの？エホン？の話なんだけど」

彼は誰に向けて話しているのだろうか。

独白にしては、その声はやけにかしこまっている。

「メシツカイは最後、王女様の身代りになってシケイになっちゃっただろ？」

二人はさ、良く似てたんだ。色々違うところはもちろんあるけど、見た目はそっくり。

だからメシツカイが王女様の服を着てシケイ台に立っても、誰も気がつかなかった」

彼は暗闇に向かって言葉を紡ぎ続ける。

「……あのエホンを読んで思ったんだ。

オレは、リンの何の身代りになってあげられるんだろうって。

悲しみも、辛さも、何も代わってあげられない。そこに姿が似てる似てないは関係ない」

だから、何が言いたいんだ？ そう心の中で問いかけた。

「あのメシツカイは悲しかったと思う。一番大事なところで身代わりになれなかったから。

王女様も同じぐらい悲しかった。メシツカイと一緒にいられなくなつたから。

オレの言いたい事が分かる？ だからさ……？一緒にいよう？ってこと。いつまでも」

その言葉を聞いて、少年は自分の両の掌を見つめた。

スポットライトの中、ちっぽけな掌の上を埃が渦巻ほこりいている。

ハツとした。今まで舞台上で繰り広げられていたことの全て。そこにいた演者の一人がやっていったこと、喋っていたことの全ては、そっくりそのまま今まで自分がしてきたことだったのだ。自分こそが演者だった。そして意識は既に観客席にはない。この光の中で、今、掌を見つめている。それが自分だった。先程、舞台で行われていたあの演劇は、まさに自分の追憶譚ついでたんだった。

しかし、一つだけ抜けている場面がある。

それはいつかの夜、二人で月明かりを目指した時のことだ。何故抜けているのか。少年は考えなくてもすぐに分かった。

自分はまだ、未完のままであるその場面の途中にいるからだ。「何言ってるのかさっぱりだけどさ、とにかく追いかけるよ！」聞き慣れた声が暗闇から聞こえて、ぎゅっと右手を掴まれた。

しかしその誰かの顔も、姿も見えない。感触だけが右手にある。

自分を照らしていたスポットライトの光が消えた。

また暗闇が視界を覆い尽くしたが、すぐに光は現れた。

ずっと先の方で。

それはまるで月明かりのような儚さで、しんと闇の中に注がれている。

？一緒にいよう？……相手には実にあっさり片付けられてしまったが、自分で言った言葉を裏切らないために、彼女を欺あざむかないために、あの月明かりを目指して、二人、一緒に。

夢が終わった。

永遠のように長く、辛く、しかしごく一瞬の夢が。

「はあ……はあ……はあ……」

金髪碧眼の少年はその場にへたつと座り込んで、肩で大きく息をしている。

全力疾走をしても息一つ乱れないのに、彼の見た夢がいかに悲劇的だったかを物語る。

そんな疲労困憊ひろうこんぱいな少年の前に、Gnosが左腕の意思表示板を差し向けた。

？ソレデモオマエハ、キオクヲトリモドシタイノカ？？

単に無機的なだけの筈の蛍光色の文字が、今のレンには重苦しく感じられた。

思い出すべきことは全て思い出した。だが、それは流砂の滝の如く、掴むそばから掌からこぼれ落ちていく。

Gnosはただ一時、彼に記憶を与えただけなのだ。それは同時に？試練を与えた？という意味でもある。

レンはまだ完全には自分の記憶を取り戻してはいない。束の間の白昼夢を見たに過ぎない。

立ち向かっていくのか、あるいは背を向けるのか……それをまさに、Gnosは彼に尋ねた。

初めから何も知らなければ、それこそ傷つくことは何一つない。辛い記憶はそのまま葬り去っておいても良いのだ。

誰も「思い出せ」とは強制しないのだから。

しかし、レンの目線からはもう迷いが消えていた。何か吹っ切れたような清々しさと、まだ戸惑いや怯えが入り混じっている目。

それでも頑なな決意が窺える目。  
そんな目をした者が紡ぎ出す言葉は、わざわざ聞かなくても決ま  
っている。

「……ああ。オレは、自分の記憶を取り戻したい」

Gnosの平板な顔を見据えながら、彼は静かな声ではっきりと  
言い切った。

それは彼の決意の現れだ。

まだ終わっていない物語の、新たな1ページを刻んでいくという、  
決意。

\* \* \* \*

エインセルの墓場を離れ、彼は小規模砂漠地帯の上空を飛行中  
である。

このエア・グライドのどぎついピンクにもだいが慣れてきた。そ  
れは別に、Gnosの胸に施された？赤い渦巻き？の刻印と比較し  
て、という訳ではない。

「あのさ、この石に書かれてる？レンとリンの未来？っていうのは  
なに？」

つい先刻、レンは？Len and Lynn in the  
future？と刻まれた墓石の前に、Gnosへ尋ねた。

「？ハカイシニイミハナイ？……だって？ え、でもさ、さっきこ  
の下からズボオっ！ってオレのメモリーチップを取り出したじゃん。  
ここってその保管場所なの？」

人間のように？誰かが亡くなったらその遺体を墓場に埋める？と  
いう概念がない彼らアンドロイドにとって、そもそも墓場がどうい  
う意味を持っているのか分からなかった。

だからレンはこのように解釈した。

？メモリーチップ？……つまり、墓場とはアンドロイドたちの記憶を埋めておく場所なのだと。

「？ソウカンガエテモラツテカマワナイ？……あっそ。この墓場全体を作ったのもあんななの？」

Gnosの意思表示板は何も示さなかった。

レンはむくり顔になってしつこく言及し、その結果、一つの答えを得た。

人間の？死？は肉体の終わりだが、アンドロイドは違う。パーツと治してくれる誰かがいれば、その肉体はすぐに修繕される。だから彼らの？シ？とは、？記憶の喪失？にある。私はそれを悲しむ立場でありたい。Gnosは意思表示板を四回に分けて切り替え、レンにそう伝えた。

「はあ……？」

小難しいことは良く分からないのか、レンは素っ頓狂な表情を浮かべた。

これ以上質問を重ねても難解な答えが返ってくるだけ。そう考えたレンは、明確に言われなかったにしろ、この墓場を作って管理しているのはGnosだと勝手に解釈した。

いや、そうしたところで「なんでそんなことしてんの？」という謎が深まるだけだったのだが……記憶を失くしても、またここに来ればそれを取り戻せるのだから、まあ良いか。

と、つい先ほど自分が乗り越えた？試練？のことなどとうに忘れて、彼はそう楽観的にこの墓場とGnosについての考えをまとめた。実に単純な彼らしい思考回路である。

「？オマエハコレカラドウスル？……んっと、そうだな」

Gnosの質問に、彼は鉛色の空を見上げてしばらく考えた。

「……とりあえず？リン？を探しに行く」

レンの返事は短かった。

内容は？とりあえず？の前頭で始められるような軽さではない。

「でさ、物知りのお前に聞くんだけどさ、オレはそのためにもどこ行



けば良いと思う?」

間を置いて、Gnosの表示板にとある言葉が浮かんだ。

「?トラッシュホールニトビコメ?……おい、復活したばかりのオレに死ねって言うのか?」

Gnosは空を見上げた。豆粒のような点々の目で。

そして真顔でこちらを見るレンに、あどけるように首をかしいでから返事を表示した。

?It's joke (冗談だ)?

一時の沈黙をはさみ、レンは笑った。

Gnosの言葉を半分鵜呑みにしかけた自分を嘲る意味の、作つたような空笑い。

しかし本当に笑えるのは……今の自分が、ホール・フォビアの?一もう一つの廃棄炉(アナザー・トラッシュホール?)を目指して進路を取っているということだ。

初めはサンドリヨンに戻って、ナナシらとこれからどうするかを考えるつもりだった。

しかしサンドリヨン付近の上空に來てみると、ナナシが乗っていた紺色のエア・グライドが見当たらない。

更に遠くの地平線では、黒い点として見える火線といくつかの機影が激しく入り乱れている。

それから導かれる答えは一つだった。

ナナシは復活を遂げ、現在はあの場所でエクスプロリズムの団員らと交戦中。

自分がサンドリヨンを発ってどれぐらいの時間が経過したのかは確認のしようがないが、

仮に2時間だとしても、メンテナンスに費やされた時間としては随分と早い。

ハクも一緒についていったのだろうか。そもそもナナシが向かった場所は？

様々な疑問がレンの頭を渦巻く。

サンドリヨンに寄って黒トエトに色々尋問しようかとも思ったが、身体が先に動いていた。

アクセルペダルは踏みこまれ、レバーハンドルは左に舵を取られる。

そう、機体はナナシが現在戦っているだろうあの空の彼方へと向けて。

彼は向かい風を感じながら、いささか高揚していた。

何の根拠もない自信が彼の鼓動を高鳴らせている。

それは？リンが見つかるんじゃないか？？という希望的観測も含まれているような自信。

見つめる先で？青白い光？が灰色の天空へと一直線に放たれた。二つある人影のうち、一つが地上へと落ち、一つは機体の影と重なった。

？ナナシが勝ったんだ……？彼は直感でそう思った。そしてその後を追う。

眼下に流れる景色は次第にその荒れ模様を強め、いつしか？ホルフォビア？の領域へと入りこんでいた。大事な片割れを失った場所。あの戦闘の爪痕が未だ色濃く残っている地。

レンは操縦しながら、目を伏せたいような思いに苛まれた

オレは過去に勝つんだろ？

そう自分に言い聞かせ、両目を見開いて？月に蓋ふたをされた塔？を視界の中心に据える。

するとまるで自分の潜在意識に呼応するかのようになり、塔の断面口を塞ぐ巨大球を縛りつける？鎖？が断たれ、球が地鳴りのような音を立てて地面へと転がり出した。

それからの一連の流れを、レンはしっかりと眼まなこに焼き付けていた。

塔の真正面　そこには南京錠のような形をした大きな出力機から何本もの赤色に発光する鎖が上へ向かって伸びている　を一機のエア・グライドが颯爽と横切ると、直後、鎖が全て横一閃に断ち斬られたのだ。

そしてそれが合図であるかのように、地上から紺色のエア・グライドが勢いよく飛び立った。

蓋を取り除かれた塔の内部から溢れだす無数のブラック。

上空から塔の内部めがけて突入しようとする飛来者に向かってそれは続々と襲いかかり、更には融合して？超巨大人型ブラック？と化した。

レンはその現実離れした光景を、機体を滞空させて呆然と見ているほかなかった。

紺色のエア・グライドの操縦者、ナナシは空中に身を放り出されたかと思えば、武器を手にして次々と敵を薙ぎ払い、その突入降下劇はとかく壮大で無謀極まりなかった。

しかし決死の突入も空しく、ナナシは超巨大ブラックの口に？パクツ？と呑みこまれた。

「ナナシ！……レンは思わず声を張り上げて、機体を急発進させる。

今さら自分なんか行つて何になる？　無駄死にするつもりなのか？　記憶を取り戻したばかりなのに？　脳裏に過ぎるどの理性も、彼を止めるには遠く及ばない。

そして「うおおおおおおお！」と激情に任せて巨大ブラックの横つ面めがけて突撃しようとした時……？青白い光の爆発？が起こった。

彼の視界は激しく拡散する閃光に覆い尽くされ、一時操縦不可に陥った。

再び目を見開くことが出来た時、自分がその横つ面を射抜く筈だった巨大ブラックの姿はなく、辺りは何事もなかったかのように静

まり返っていた。

ナナシは……？　そう自問して分かった。？廃棄炉の中に落ちていったのだ？と。

彼は低速で飛行させるエア・グライドの上で考えた。

いや、直後の彼の突飛な行動を考えると、またも身体が先に動いてしまっていた、と言えるだろう。

？世界を壊す？　ナナシはそう言っていた。それに記憶の中の彼女は、決して自分から命を捨てるような真似はしない。いくら傷つきやすく、悩みやすいとはいえ、だ。

だから彼女は？希望？を見出すべく廃棄炉の中に飛び込んでいったのだと想像できる。

？It's Joke（冗談だ）？

レンの脳裏に、先刻のGnosの言葉が過ぎった。

その冗談に賭けてみよう。

そう思う頃、彼の身体は塔の上空で舞っていた。

向こう見ずの無鉄砲が、ここにもいたのである。

>The First Act/End<

次回 予告【第二部開始】

R o c k ・ 6 ? 歌姫のいる世界？

乞うご期待

【お知らせ】

次回の更新は『19日の月曜19時』となります。  
急な変更、誠に申し訳ございません。  
理由などは活動報告に書きましたので、よければ参照してくださいませ。

## Rock・6? 歌姫のいる世界? (前書き)

本稿では「挿絵」を使用しております。

もしも挿絵表示を「OFF」にしている場合は、「ON」にしてお楽しみくださいませ。

## Rock・6? 歌姫のいる世界?

エインセル。

それがこの街の名である。

煉瓦造りの建物や家屋、どこの通りも石畳といったヨーロッパ的な建築様式を土台に築かれたこの街は、その景観の美しさから? 芸術の街? と呼ばれている。

いくつもの商店が軒を連ねる通りは街の大動脈。

そこに「PIYO MART」という看板を軒先に掲げた小さな花屋があり、その店先で店主と客が立ち話をしていた。

「今日も素敵なお花が買えましたわおじ様。? ヒメノカリス? なんてお花は今まで聞いたことがないですもの」

貴婦人然とした口調で声高に話すその中年の女性客は、格好もやたらに華美である。

花柄のワンピースの上に紅色のパドック・コートをはおり、首元に暗色のスカーフを巻き、手指は金色のバンクルと指輪でしつかり装飾してあって、道行く他の人々と比べるとやや浮いた身なりだ。

「そのヒメノカリスには? 魅惑のささやき? なんて花言葉があるんですよ。」

あなたの華麗な装いにぴったりな意味合いですなあ」

対する花屋の店主は、毛玉が随所に付着した灰色のセーターに店名を記した身繋ぎのエプロンをしただけの質素な装いで、鼻下に筆でちょんちょんと点を二つ付けたような白髭を蓄えた短身小太りの老男性である。

その表情は好々爺風の人懐っこい笑顔であり、老人特有の穏やかで温かな風情が顔全体に刻まれた皺から醸されるようだった。

「まあ! おじ様は本当にほめ上手なこと!」

ひと際大きな声を出した時の仕草で、女性客の脇にこさえられたヒメノカリスのリップが白い包装紙の先で揺れる。

「いえいえ、私は事実を言ったままでですよ」

「もう……いくら上手なことを言われたって、何にも出ないんですからね？」

そう言いながらご満悦の女性客は、ブランド物の黒いクラッチ・ポーチから豹柄じょうけいの長財布を取り出し、数枚のコインを店主にさりげなく手渡した。

「や、こんな物を頂く訳には……」

「そうそう、行く前にあなたのお孫さん？に挨拶をしておかなければね。」

今は店の奥にいるのかしら？」

老店主は言葉を遮おさえられたので、黙って懐にチップをおさめることにした。

「ええ、ちよつと得意先に注文されてましてね。裏で花の包装作業をやらせておったんです。よければ呼びましようか？ あなたの顔を見れば、あの子もよろこぶでしょう」

その言葉に、女性客はまた一つ上機嫌な顔で頷うなづく。

「おーい、ハイネマンさんがお前を呼んだぞー。？リン？ー！」  
のき爺は振り返って店のバックヤードに向かって声を上げる。

すると二つのショーウィンドウの間にある引き戸がガラッと開けられ、その隙間からリボン付きの力チューシャを頭に付けた？金髪へきがん碧眼へきがんの少女？がひよこつと顔を出した。

「……………呼んだあ？」

> i9381 | 1218 <

ブラック ロックシューター - No cry and Dist  
ance - 第二部

On Air!!



?リン?と呼ばれた少女は、こちらに手招きする老店主の隣にいつもの女性客の姿を認めると、やや厚底なサンダルを履き込んで店先まで駆けていった。

「ハインマンさんこんにちわ! 今日も花を買いに来たの?」

少女は天真爛漫な声で女性客に話しかける。

「それと、あなたの元気な顔も見にね」

言いながら、彼女は小遣い代わりに少女へコインを手渡す。

少女は「いいの?」と言って、結局は彼女が強引に渡してくるのももらった。

受け取る際、女性客の人差し指や薬指に付けられた指輪を物珍しそうに見て、

「うわー、すごいピッカピカだね!」

と目を輝かせた。

「あー……これね? 聞きたい? かの有名な?上流階級?御用達のブランド・マダムリリスのオーナーに頼んで作ってもらった1.5カラットの もちろんがんぞう鷹造ではありませんのよ? 夫がわたくしの誕生日のために製作期間1年を費やして もちろん相応の代金もかかりましたのよ? わたくしにプレゼントしてくれた大事な大事な……」

スイッチが入ったかのごとく、女性客はベラベラと自慢話をし始めた。

リンは笑顔を崩さず、話のテンポに合わせて「うん、うん」と首を縦に振っているが、内容はまったく耳に入っていない。

老店主も傍らで相づちを打つが、愛想のよい表情は先程と比べてやや曇ったようである。

「……じゃあ、わたくしは行きますので。ばいばい。可愛い可愛いわたしのリンちゃん」

女性客はリンの左頬をゆるりとなで上げ、颯爽と身を翻して通りを歩きだして行った。

5分は喋り倒しただろうか。

ダイヤの話から夫の愚痴まで話が多方面に飛躍したが、彼女の口ぶりたるやまるで高速タイピストが打ちだす文字列のような目まぐるしさであった。

「おっと……お客さん、言い忘れてましたぜ」

女性客が去るや、老店主は急に怒りを含んだ不機嫌な顔つきになり、

「あんたが買った？ヒメノカリス？だがね……、さっき言ったのは別に？虚勢？？見栄っ張り？って意味もあるんだぜ。？マダムごっこ？もいい加減にしろってんだ」

通りの遠くへ小さくなっていく女性客の背中に毒づいた。

？上流階級？……そうわざわざ言われたことに内心腹が立っていたのである。

「のき爺、なに言ってるの……？」

リンに訊かれたが、のき爺はかぶりを振るだけで特に答えなかった。

「さて、うつとおしい客が消えたところでだ、リン。

得意先への配達を頼まれてくれねーか。いつもの花売りもかねてよ」のき爺の口調が昔ながらの大工風にガラッと変わった。

客がいた時と随分な変わりようだが、これが彼の素の態度なのだろう。

「私もホーソーの作業に飽きてたトコだし、別にいいよ」

「まあ、包装の作業に飽きてなくても行かせるつもりだったけどな。さ、配達用の花と、他に適当なのをいくつか見繕って行っておいで」

リンは狭い店内を小走りに、レジカウンターの下から底の深い玉子型のバスケットを取り出した。

「おっとそつだ。」

お前、また広場ではしゃぎまわって教会前のガーゴイル像を一個壊

したんだってな」

「んー？」

リンは花を選びながら、のき爺とは背中では話をする。

ショーケースの中にあるのは高価な奴だからダメだ、いつかの教えを思い出しつつ、2本、3本、店内脇の値段が落ちついたエリアから一目見て気に入った花をバスケットへ入れていく。

「あのなあ、前も言ったけど常人にはあり得ない高さまでジャンプしたり、目にも止まらぬ速さで駆けまわったりするのはご法度だぞ？ おい、聞いているのか？」

「聞いているよー」

花選びに夢中のあまり、のき爺の言葉などまったく耳に入っていないようだった。

その様子には彼はため息をこぼす。

「まったく、気を付けてくれよ……？ お前は？ 他の人？ とはちよつと違うんだから」

花選びが済んだのか、リンはすつくと立ち上がった。

彼女の左手首に取っ手がかけられるようにして持たれているバスケットの中は、色どりみどりの花々で満杯である。

そして彼女はあっけらかんとした表情で言った。

「だって私、？ ヒト？ じゃないもん」

のき爺の顔がますます曇った。

リンは飄々（ひょうひょう）とした足取りで、ため息が貼りついたような顔をしているのき爺の横を通り過ぎようとする。

「……そんなことは百も承知だったの。」

ま、とにかく帰ってきたら、いつものアレ、くれてやつからよ」

「ほーい」

自分を世話してくれる親切な老人の忠告など気にする素振りはない、リンはどこまでもマイペースな調子で通りを歩きだして行く。

のき爺は行きかう人々の中に紛れていく少女の背中に、

「ほんつとに大丈夫かねえ……」

今度は心配げな呟きをもらすのだった。

\* \* \* \*

丸石を敷き詰めた通りを、人々が陽気に行きかっついていく。

Tシャツにジーンズといったラフな装いが大半だが、この街には尖塔高らかな教会がいくつもあるので、カソック（法衣）をまとった者や黒の燕尾服えんびふくを着た者も散見される。

他にも、通りに出て客寄せをする頭にスカーフを巻いた娘、その後ろのウィンドウの中で練った生地をかまどに出し入れするパン屋のコック、店先をメルヘンなキャラクターとポップで彩った駄菓子屋に騒々しく群がる子供たち。買ったばかりのクールエイドを水に溶かしてジュースを作り、子供たちの一人がそれを飲みながら片手に持っていたサッカーボールを蹴る。

ボールは通りを歩いてきた男性の背に当たってしまった。

その男性が大柄で強面だったので、少年は青ざめた表情で場に立ちつくしたが、顎周りに茶色の髭をたくわえた男はニヤッと笑って「今度から気をつけな！」と気前よく言って少年にボールを返した。すると子供たちはプレゼントをもらって嬉々とするように、一つのボールを取りあいっこしながら通りを元気に駆けだしていく。

今日の日も、街は人情と活気とに満ちている。

リンはそんな街の住人の一人として、人々でごったがえす商店街のメインストリートを慣れた足取りで軽快に歩いていた。

「今日もえらいわねえ。一本いたたくわ」

道すがら、顔馴染みのおばさんに呼びとめられる。

「おカネ？ いららないよ、めんどくさいし」

リンは花を一本手渡すと、すまし顔で歩みを再開する。

「あー、ちよつとちよつと！」

慌てて呼びかけても歩みを止めないので、おばさんは花の代金をリンの持つバスケットの中に入れた。

「うお、リンちゃんじゃないか！」

「リ……リ、リンちゃんじゃねえが！」

今度はカフェテリアで飲食していた二人組の男。片方は長身で青目のアイリッシュ系、片方はぶつくと寸銅のような身体つきで言葉に癖のある巨漢。に呼びとめられた。

「あれ、ジャックとワトンじゃない。二人とも仕事終わったの？ お疲れさま！」

薄汚れた土方作業着姿の二人に、リンは揚々と花を手渡す。

二人は日ごろ、ホールフォビアという工業地区で鉄鋼工場の作業員として従事しており、

現在こうして彼らがエインセルのカフェで飲食しているのは、三日間続いた大仕事のささやかな打ち上げの意味と、ジャックの住まうアパートメントがこの地にある関係だ。

工場の社員寮に住まう選択肢もあるのだが、故郷を愛するジャックはそれを良しとせず、わざわざ街を一つまたいで職場と自宅を行き来している。

一方、ワトンは生まれも育ちもホールフォビアの出身で、貧しい家庭環境は彼に幼い頃からの労働を強いり、一時も学校に行けなかったため読み書きに不自由で口調もたどたどしい。更に、これは生まれつきだが彼は頭があまり働かず、身体がデカいのと怪力だけが取り柄で、いつか同じ職場へ入ってきたジャックに気に入られてから彼を兄貴分のように慕っている。

「え、いいのかい？ おれさ、こいつの分も払わなくちゃいけないから、財布がすっからかんなんだ……」

ジャックは苦しそうに微笑みながら、「これも食えるんじゃないか？」という目付きで手に取った白い陶器の皿をじっと眺めているワトンを横目で見やった。

深緑のアンティークなデザインのテーブルの上は、二人が食べた後で散らかっている。

ジャックの側はティーカップセットとホットドッグを乗せていた

皿があるだけだが、ワトンの側には皿が5、6枚は積み重なり、パンかすと狙いを外したマスタードソースなどで汚れ、二人の性格の違いが窺<sup>うかが</sup>える有様となっていた。

「まー会うの三日ぶりだし、タダであげるよ。そんじゃ、私は用事頼まれてるから」

「おい、ちよ、ちよっと待ってくれ、足りねえかもしれないけど、これ！」

さつと身を翻して歩き出すリンのバスケットに、ジャックは2枚のコインを投げ入れる。

バスケットの底で「ちゃりん」と音が跳ねたが、それに気を取られる素振りもなく、リンは振り返らずに飄々と歩いていくのだった。「いつも悪いなあ、タダで花をもらっちゃってよ」

ジャックは少女の背を見送りながら腰を下ろすと、二本のうち一本をワトンに手渡した。

「……言っとくけど、それは食いもんじゃねーからな？」  
ジャックがそう言う時、ワトンは花のリップを丸のみしようとするのがま口を大きく開けていたところだった。

あれだけたくさんあった花々も、今に見てみれば5本とない。

道中様々な人と出会い、その度に彼女が手渡していくからである。花を手渡す大半の人間が顔馴染みだ。というより、この商店街界隈では知らない人間の方が少ないので、「花売り」と言いながら彼女は花の代金をもらわないのだが、誰もが律儀にバスケットへと思いの額でコインや紙幣を入れていく。

逆に代金を払わないのは、彼女をからかう近所の悪ガキぐらいだ。「やーいやーい、またアクノムスメが花なんか売ってるぞ」

「あいつ、こないだ広場のガーゴイル像を壊したんだ。おつかねえカイリキしてやがる」

駄菓子屋にいたグループとはまた違う少年5人がT字路の入口でたむろし、ストリートを通りかかるリンにお決まりのちょっかいを

出した。

「カイリキじゃないってば。ガーゴイル像がもろすぎんよ、デコピン一発で壊れるとか」

リンはちよっかいを無視することはせずに、彼らにも人数分の花を手渡そうとする。

「な、なんだよ、こんなもんもらったって何にもならねえって」

他の4人に花を手渡した後、グループのリーダー格で最も態度の悪いボサボサ頭の少年に、花を押しつけるようにして差し出した。

彼は悪態について受け取ろうとしないが、その頬はやや赤く色づいている。

「思えば、あんたたちに渡したことないしね。あ、ヴォルタはいらないから」

「ヴォルタ」とはこの世界の通貨の総称である。

リンはぐいっと花をもうひと押し。

少年は目線をそらしてまごついていたが、急にさっと素早くリンの胸をタッチするや、

「……ひんにゆう」

と、不意に一言。

「は……？」

次にパシッと花を奪い取り、呆気にとられるリンにからかいの言葉を浴びせながら足早に路地を駆けていく。

「ひんにゆう！ ひんにゆうー！」

リーダーに合わせて他の3人も同じ言葉を彼女に飛ばすが、彼らの最後尾を走っていた一人が迷ったような足取りの末、彼女の元へと駆け戻ってきた。

グループ内で最も肉付きがよく、かめく寡黙なその少年は、

「ん！」

と無愛想に言ってコインを一枚バスケットに入れ、4人の後を追いかけていった。

リンは自分の胸元に手を当てながら何だか複雑な心境になる。

あの悪ガキ5人をいつものように追いかけてまわしてもよかつたが、彼らが花をくちやくちやくにせずには持ちかえったことを嬉しく感じ、彼女は元の進路へと戻っていった。

彼女の足は、街の名所の一つに数えられる場所へと近づきつつあった。

建物の角から楽しげな音楽が聞こえてくる。

見えない音符に誘われるように角を曲がると、名所と呼ばれる光景が視界に入り込んできた。

つた模様をあしらえた円形の土台に透水をたたえた噴水。

合わさる両手を模した大理石のモニュメントから水が噴き出す様は、見る者に薔薇ひばりのリップが静かに咲き誇るかのような美しい印象を与える。

その噴水の周囲にはストリートバンドがあり、彼ら三人はTシャツ、ジーンズといった格好で特別な装いはしていないが、アコーディオン、パークッション・ドラムス、フルートで陽気なアンサンブルを奏で、街を活気づけるに一役買っていた。

他にもイーゼルにキャンバスを構えた絵描きが客の似顔絵を描いたり、ピエロがジャグリングをしていたり、上裸にブルージーンズの男は口から炎を吐いていたり、それぞれが道行く人々の目を楽しませていた。

リンはこの広場へは日常的に訪れるので、彼らとも交流がある。

先ほど会った二人とは違い、彼らは定職に就かず気ままに生きる所謂ボヘミアンである。

しかしそんなことは誰も気にしないし、リンも当然のように気にしていない。

むしろ彼ら大道芸人がいなくなった噴水広場はどれだけ寂しいことだろう。

そんな暗黙の共通意識が住人たちの間にあり、他の街からの観光客も彼らを楽しみに訪れているので、彼らは誰に咎とがめられることな



く堂々と自慢の芸を披露している。

「やつほー、リンちゃん！」

広場に目をやりつつ、小さな家電屋の前を歩いていると、背後から聞き覚えのある声と共に誰かが勢いよく覆いかぶさってきた。

「わっ！ グ、グミ……？」

> i 1 2 2 5 1 — 1 2 1 8 <

振り返ってみると、リンのよく知る少女の姿が目の前にあった。

緑髪のおかつぱ頭。

瞳はパチつと大きく、私服の上にフリルが肩についた白いエプロンを身につけている。

その？グミ？という名の少女は、この広場のケーキ屋で働くアルバイトの娘で、リンの街一番の友達である。

「今日も花売り？」

「それもあるけど、ニーガンさんのところにこの花を届けに行くのによく見えるように、リンはバスケットをかしがせた。

紫の高級紙につつまれた花が一本、葦よじを幾重にも編んで作られたかごの中で特別の存在感を放っている。

「わたしは材料を買いに行くところ。

新商品の？モザイクロール？が売りきれちゃったんだ」

グミはニコつと誇らしげな笑みを浮かべる。

「リンちゃんも食べに来てね！」

「え？ ああ、うん。楽しみにしてるよ」

リンは不意を突かれたように身じろぎしてから、茶を濁すような響きで言った。

アンドロイドである彼女には、味覚がないのである。

彼女の表情にどこか影があるのを察知したのか、グミは声をかけようとしたが、その時、家電屋のショーウィンドウ内にあるいくつかのテレビスクリーンに気を取られた。

「……また？無差別殺人？だって。初めはセントラルで起きてた事件だけど、このところ被害の範囲がこの街にも近づいてきてる……。なんか、怖いね」

グミは祈るように合わせた両手を胸元に当てて、心許なさそうな声で言う。

その物憂しげな表情にリンも悲しい気持ちになる。

周囲はこんなにも活気に満ちているのに、この街の人々はみんな優しく、温かいのに、どうしてこういう事件が起こるのだろうか。

同じ？ニンゲン？でも、背の大きいヒトと小さなヒトがいるのと同様に、やっぱり違いがあるのだろうか……。

リンはそんなことを頭に思い浮かべながら、テレビスクリーンを見つめている。

テレビはミュートにされており、ニュースキャスターがいくら神妙な面持ちで事件の内容を説明してもその声は聞こえなかったが、事件現場の映像と「またも市内で？惨殺？」というテロップが挿入されるだけで、事件の凄惨さを理解するには十分だった。

「……あっ」

映像が切り替わった。

同じニュース番組内でコーナーが変わっただけだが、やるせない事件を見せつけられた直後に芸能情報を扱うバラエティコーナーが来ると、感情がすぐには追いついていかない。

しかしリンは今しがたのニュースを見ていた時のように、いやそれ以上に関心ありげに見入っていた。

白いスモークがたなびき、赤、青、紫のレーザーライトが激しく交錯する。

画面にはとある歌手のライブステージが映されていた。

くるぶしまであるうかという長さがある青緑色の髪をツインテールにして、襟付きノースリーブにネクタイを付けたミニスカート、ニハイソックスという衣装。頭に装着したヘッドセットで歌うためにマイクは持たず、ステージ上を右へ左へ踊るように動き回って

いる。

屋外のライブ会場へ詰めかけたファンは熱狂の渦を巻き起こし、リンの目に人類全員があ場所にいるのではないかという錯覚を起こさせるくらいの大混雑ぶりだった。

「似てるなあ、いつ見ても」

リンは画面に釘付けになりながら独り言をもらした。

「え？ 似てるってなにが？」

グミがすかさず問いかける。

「うっん、こつちの話。それにしてもすごい人気だよね、？ポーカーロイド・ミク？……」

画面の中では、ツインテールのアンドロイドがステージ上で歌声を響かせている。

そのアンドロイドの髪色が青緑から黒一色に変わり、装いも洗練された未来的なデザインからポロポロのロングパーカー、ホットパンツに変わって、愛くるしい表情から急に感情がなくなり、名も？ナナシ？と改められるのも、リンの中では遅すぎることはなかった。

彼女は画面を見ながらに想いを馳せる。

ナナシたちは今頃、どうしているのだろうか。

彼女は？青白い光？の中にいた。

澄明ちよつめいにあふれる光の幻想的な世界。

頭トランシユ・ホールから廃棄炉へ飛び込んだものの、いつしか落下しているという感覚がなくなり、上下左右のない空間に自分の身体がぴたと停止しているかのような錯覚に陥ってから久しい。

いや、本当に停止しているのではないか。

周りの光がさんざめくだけで、自分はもうどこへもいけないのではないか。

彼女は幾重にも緻密ちみつに重なる光の帯のゆらめきを視界に、そんな疑念が脳裏をよぎって止まなかった。

ふと、彼女は誰かに呼びかけられた気がした。

右からも左からも、はつきりとは聞こえないのだが、何者かの声が耳のすぐ傍そばでうごめいているような気配を感じる。

あちらこちらに顔を向けて見渡してみるも、光の群れが視界を覆うだけで声を発しそうな者の姿を見ることは出来なかった。

この空間自体が喋っている。ほこりが舞うぐらいの極めて小さな声で。

そう考えると変に納得できたが、あまりに非現実的だ。

いや、この光の世界にいて自分が既に非現実的なのだ。

彼女の身体がひと際の輝きを放つ光の輪の中を通過していった。

あまりの眩まはさに思わず目を閉じる。

突然、全身に重力がのしかかった。

白みがかっていたまぶたの裏も暗転のごとく黒々としている。

地面の、アスファルトの冷たい肌さわり。

自分の身体がその感触の上に横たわっているのを感じる。

彼女はおそろおそろまぶたを開けた。

今しがた彼女が通過してきた廃棄炉からこぼれる光を受けて、周

困の環境がほのかな明るみを帯びてぼんやりと見える。

次に頭上を仰ぎ見た。

四方の壁が円筒状に奥へ奥へと続いて吹き抜けとなり、天井にある小さな楕円だえんから銀色に輝く砂粒がいくつも見える。

彼女はそれに見入りながら立ち上がった。

周囲を見渡してみると、右手に階段がある。

彼女は自分の身体がここにはないような感覚で、階段の一段目に足をかけた。

踏んだ時に「カン」という音がした。

そんな金属音にリアリティを覚え、彼女はためらいがちな足取りで二段、三段とゆっくり上り始めた。

壁伝いに螺旋に続く鉄網状の階段。

彼女は階段を上ることに早足になっていった。

身体を動かすうちに、頭が現実には追いつけるぐらいに回転し始め、この場所が半壊となる前の塔の内部だと気付いたのである。

ふと見下ろしてみれば、廃棄炉が底に青白い光を湛たえている。

自分はそのを通ってきたのだ。今さらながらそんな実感をかみしめた。

一方、天窓なのか、煙突で何の敷居もないのかは定かではないが、見上げた先にある小さい楕円の穴から銀色の砂粒が見えている。

何事にも動じない彼女だが、この時ばかりは胸の高鳴りを感じずにはいられなかった。

来た。来られたのだ。過去の世界に。

彼女は塔の頂きを目指して、ついには駆け足になった。

「夜は、満面の空にいくつもの輝く砂粒が見える。それが……？星？なの？」

いつかのMEIKOメイコの言葉が脳裏をよぎった。

塔の頂を一点に見ながら足を動かしていると、階段を上っているのにまるでその楕円の穴に身体が落ちていくような錯覚に捕らわれる。

また落下していくのだ。今度はたくさんの方星？を底に湛えた廃棄炉に。

そこを通り抜けてやっと、真の意味で過去の世界に來られたかどうか理解できるのだ。

落下は止まることなく加速度的に早まる。身体が星の井戸の中に吸い込まれていく。

そして望まれた瞬間がやってきた。

彼女は塔の頂きに立って、恍惚くわうくわうとした表情で見上げていた。

満天の星空を。

いつの日か誰かと探した銀色粒の砂丘を。

> i 9 3 8 2 — 1 2 1 8 <

彼女はただ、圧倒されていた。

黒々とした空間にまぶされた光を放つ粉砂糖。

遠くにはスカイスクレーパー群のネオンライトが眩く連なっている。

それが明確に何なのかは今の彼女にはまだ分からないが、「過去の世界に來られたのだ」という実感がより一層胸にこみ上げてきた。しかし、新たな世界へ來たことの感動に浸っていられるのもそれまでだった。

ブラックの気配を感じたのである。そう、この世界にまでやってきて。

勘違いだと思いたかったが、彼らが近くにいる場合に特有の、胸の奥のざわついた感覚が止まない。

こんな時ばかりは無視してもよさそうだが、ブラックの存在が身近にあるのであれば、それを処理するまで落ちついていられないのが彼女らアンドロイドなのである。

「チツ……」

せつかくの感動が台無しにされたので、彼女は柄に合わず舌打ち

をした。

それほどこの世界に来られたことが、満天の星空の下にこうして立っていることが、彼女にとって大きな衝撃だったのである。

足元に梯子はしこがあつたが、彼女はそれに一瞥いちべつくれることもなく、次の瞬間には跳躍していた。

先ほどまで眼下に見ていた漆黒しっくが突風と共に急速に近づいてくる人間だつたら転落死して当然の高さから飛び降りてなお、彼女は猫のようにしなやかな足取りで着地した。

そして事もなげに立ち上がり、辺りを見渡す。

ポールの先端に現在地が記された標識があり、備え付けの白熱電球によつてそれは照らし出されていた。

『H F 兵器実験第2ブロック』

字を読むことは出来たが、それが何を意味しているかは分からなかった。

しかし自分が過去の世界の「ホールフォビア」にいることは認識している。

終末世界において廃墟だつた都市並みが元の姿に戻つただけで、地理は変わっていない。

あとは自分が現在どこにいるかが分かるような目印があれば、どの街がどの方角にあるかは大体見当が付く。

まずはそれを見つけようと、彼女が一步向き直つたその時

視界が急に眩い光で覆われて、思わず右腕で両目をかばつた。

「け、研究機関の方ですかい……？ それとも、侵入者……？」

彼女の目が光に慣れてきて、目の前にいる人型がおぼろに色を付けて見え始める。

立派な制服を着て懐中電灯をこちらへ向ける男が、心許なさそうに立っていた。

この建物の夜間警備員だろう。

しかし制帽の下で自信なさげな表情を浮かべて「侵入者ですか？」と尋ねる様は、本当に彼が警備員としての資格を持っているのか疑

わしくさせる。

「?ニンゲン?……か」

彼女は男には聞こえない声で呟いた。

ふっと脳裏にいくつかのシーンが浮かんで消えていく。

自らの手を鮮血に染めて殺してきた?ニンゲン?が……今、目の前にいる。

アンドロイドかもしれない、そう思うのは、きっと逃げだろう。

「……はて、あなたのこと、どこかで見ましたかね?」

男はしわがれた声で言いながら、彼女の顔を覗きこむようにして身をかがめる。

どう対応していいか分からず、彼女は視線を足元に落として突っ立っているだけだった。

そして男がまた何事か話そうとした際　突如、けたたましい悲鳴が聞こえた。

「なんだなんだ?　次から次へと」

男が声のした方から向き直った時、既に彼女の姿はそこになかった。

「お、おい、ちょっとあんた!」

慌てて懐中電灯を向けるものの、あまりの俊足にライトを追いつかせることは叶わなかった。

つい今しがた目前にいた女は、とっくにその姿を宵闇よいやみの中へと消している。

「あの動き……人間かあ?」

あつという間の出来事だったので、男がそう素っ頓狂な声で独り言をもらすのも無理はなかった。

\* \* \*

常夜灯の白い光の下、大量の血と共に一人の男がうつ伏せに倒れていた。



先ほど聞こえた悲痛な叫びの主はこの男だろう。

彼女は血だまりに伏す男の姿を見下ろしながら、そう思った。同時にまた嫌な記憶が脳裏に浮かぶ。

それを振り切るようにキッと、彼女は鋭い眼差しを前方の闇に向けた。

黒々とした暗闇の中に、鬼火のようにゆらめく青白い点が浮かんでいる。

「この世界に来て早々、ブラックと会うことになるとはな」

そう口にしながら、胸の内ではそれと相反する感情がふっと湧いて出る。

ブラックがいてよかった　自分が生きるために抱いても仕方のない感情かもしれないが、彼女はそう思ってしまった自分を嫌悪した。

「まあいい。……殺すだけだ」

静かな声に殺意を込めて、彼女はクロガネをインストールした。

白い電光が迸り、その光に闇に紛れていたブラックの姿が一瞬浮かぶ。

口元を嘲笑にひきつらせた人型のブラックがそこにいた。

首がしきりにかきぎ、がにまたでただ突っ立っている姿には余裕さえ感じられる。

そんなこの世界の全てを皮肉るような飄々さで佇むブラックにめかけ、彼女は最初の一振りを浴びせた。

ブラックは素早く反応して彼女の袈裟斬りを回避。

身をひるがえし、後方の闇の中へ飛び去っていった。

彼女はそんなブラックの行動に違和感を覚えた。

「逃げる……?」

いつもなら敵意をあらわにして向かってくるのに、このブラックは逃げたのである。

猿のような軽快な動きで、まるで追って来いと言わんばかりに。

そして何と逃げ足が早いことか、彼女の俊足を持ってしてもその

背中では遠ざかるばかり。

ブラックが工場の裏手にある細い小道に入り、暗闇に軌跡を残しながら流れていくブラックの青白い瞳を目印に、彼女は猛然と追走する。

いくつもの丁字路を曲がり、階段を上り、手狭に入り組んだ裏路地から抜けると、そこは工場の作業場だった。

天井に付けられた橙色だいたいのランプの下で、灰色の作業服を着た男がゴンドラに積み荷を載せている。

黙々と作業に集中し、背後にいるナナシらの存在には気付いていないようだが、ブラックは素早く男の脇を通り過ぎてゴンドラの積載物の上にぴよんと飛び乗った。

男は突風を感じたので何事かといぶかしんだが、それは彼が傍らの柱に付けられた赤いスイッチを押した直後の気付きであり、ブラックを乗せたゴンドラはシャトルロケットのような初速でロープウェイを勢いよく滑り出していった。

駅のプラットホームの構造をしたこの作業場は、隣接した都市に工業物資を送り、また受け取る場所で、荷を届けるために最低限の設計がされた屋根のない鉄製ゴンドラが隣の街と繋がれた高架線に吊り下げられて数台待機している。

ナナシはゴンドラがどうしたら動くのか見て知ったので、男が荷を積むために身をかがめた瞬間を見計らい、その横を三足移動で軽やかにジャンプ。

飛びざま柱の赤いスイッチを押し、ゴンドラは彼女の着地せつなと刹那を違えて発進した。

「うお！ おお……？」

突然の出来事に、作業員は呆気にとられた表情でナナシの背中を見つめていた。

猛烈な初速のために振り落とされそうになったが、彼女は四隅にある鉄線の支柱の一本につきまわり、どうにか堪えることができた。

ブラックの乗るゴンドラがはるか前方を流れていく。

同じ速度なら追いつけないだろうが、それよりも彼女の目を奪っていたものがあつた。

夜空に浮かんだ満月が、その下の海面に映っている。

波の穏やかな動きにゆられ、金色の光が水面をたゆたっていた。

そしてその光の束が海の彼方まで続き、見る者に向こう側の世界を期待させる一本道のようになっている。

都市と都市の間は海上となっており、ゴンドラはロープウェイでそこを通過しているのだが、ナナシにはこの眼下に広がる液体地面の名が分からない。

ただ束の間ブラックの存在を忘れ、夜風よなぎに佇む月と海の静けさに見入っていた。

しかしそんな夜のフライトも終わりが近づいていた。

ブラックを乗せたゴンドラは次なるプラットホームへと入っていく、ナナシのゴンドラがそこに入っていくのも2秒とないだろう。

そうすればまたブラックとのいたちごっこが始まる。現実を引き戻される。

ナナシは月から目をそむけて、前方を鋭く見据えた。

ゴンドラが装置によって速度を落とす、？ エインセル？ の物資搬入口へと入っていく。

街に夜がやってきた。

店先に出していた花壇をしまい、白樫にガラスをはめ込んだアコ  
ーデオンドアを閉める。

そして「CLOSED」と記された横長の看板の紐をピンにかけ、  
リンは店内の時計を見やった。レジカウンター奥の壁にかけられた  
白い丸時計、その黒い秒針は8時ちょうどを指している。

のき爺はレジで今日の売上を確認し、リンは小ぶりな竹箒たけむしを持っ  
て店内の清掃。作業は10分ほどで終了し、のき爺が店内の明りを  
消して本日の営業は終了した。

のき爺は二階の住居フロアへと続く階段を上りながら、

「あー……肩がこつたなあ。年を取ると疲れやすくていかん」  
左手で押さえた右肩を振り回しつつ、吐息交じりに言う。

そして階段を「よっこらせ」と上りきり、壁に付けられた照明の  
スイッチを押してフローリングの廊下に明りをつける。

するとリンが彼の脇をせかせかとした足取りで奥のダイニングへ  
と歩いていった。

のき爺はいぶかしげな目線で彼女の背中を追う。

リンは洋風柄ののれんをくぐると、まず電気を点け、次にサイド  
ボードの端に置いてあったリモコンを手にとってテレビをつけた。

薄型ワイドスクリーンの中心に男のニュースキャスターが現れる。  
「なんだ。今日はアニメじゃないんだな。ニュース番組なんか見て」  
のき爺がからかうように言う。

「ちょっと気になることがあるの。ほら、最近起きてる？無差別殺  
人事件？って」

リンはエプロンを身につけたまま、こげ茶色のローテーブルの前  
に座った。

のき爺用の座イスが傍らにあるが、リンは白いカーペットの上に

そのままである。

いつになく真剣な表情でテレビを見つめるリンに、のき爺は小首をかしげながらエプロンを取り払いつつ、垂れ流すように話し始めた。

「腹が減ったからわしは飯を食うよ。

店に来たお客さんからもらった差し入れのパンだがね。なんでも？ フランスパン？とか言うんだとか。昔、そんな名前の国があったそうなんだけどね」

しかしいつものように、リンは自分の話など聞いていない。

のき爺は両肩をつり上げる仕草を一つ、キッチンへと歩いていくうとしたが、思い返したように向き直ってリンに言った。

「今日は？超VIP？が地下の工房へお越しになられる。

電話では10時とか言ってたけどな、実際は何時に来るか分からんだから先に言っとくけどな、お客様に対して粗相をしたり、この前にみたいにくっそり抜け出して夜のお散歩とかしちゃだめだからな？ 9時には地下の工房に来て手伝うんだぞ？」

のき爺は口をすっぱくして言ったつもりだったが、「ほーい」と気の抜けた言葉が返ってくるだけだった。

そして流しの脇に立つキャビネットの中台から紙袋を取ると、自室に用があるのか、ダイニングから出ていった。

実は、のき爺の本業は花屋の店主などではなく、？何でも改造屋？なのである。

裏世界ではちょっと名の知れた腕のある機械技師であり、報酬さえきちつと出してくれば、依頼内容に口を出さず黙々と銃火器やらロボットやらを仕上げてくれる。

その工房が店の地下にあり、夜になると人目に知らさずひっそりと営みを始めるのだ。

昼と夜とで巧みに二つの顔を切り替えるこの男を、一部では「もぐらののき爺」と呼ぶ。

彼がリンのことをアンドロイドだと気付いたのも、またメンテナ

ンス、燃料の調達といった世話をしてくれるのも、全てこんな二つ名がついているためである。

依然、リンはテレビに釘づけだった。

そして自分の最も感心のある話題が取り上げられると、リンはリモコンでテレビの音量を上げた。

『近ごろ頻発している？無差別殺人事件？ですが、本日、警察が事件に関しての声明を発表しました。』

これまでに発生した事件の被害者はどれも遺体の損壊が激しく、胸から下腹にかけて鉤爪かぎつめで切りつけられたような深い獣傷があるのが特徴で、同一犯の犯行とみて捜査。目撃証言がいくつか寄せられましたが、どれも「犯人は姿が真っ黒だった。人間じゃないみたいだった」と現実味に薄く、有力な手がかりは未だ掴めていません……』

リンはニュースキャスターの言葉を聴いて、「やつぱり」と直覚した。

『……また、犯行が夜間に集中していることから、警察はその時間帯の外出を極力控えるよう住民に呼びかけています』

その言葉が部屋に流れる頃には、リンは夜の真っ只中へと飛び出していった後だった。

\* \* \* \*

リンは店のエプロン姿のまま、人気のない商店街の通りを駆けていた。

通りは昼間の活気が嘘のように静まり返っており、走りざま駄菓子屋のメルヘンチックなキャラクターが今では不気味な怪物に見える。

店のサンダル履きで出てきたのでやや走りづらいが、それでも彼女にはひたすらに街を駆けまわなければならぬ理由があった。

この一連の事件の犯人、恐らくは？ブラック？だ。

いや、目撃証言通りであればその可能性はかなり高い。

人目を避けるよう夜に犯行を集中させるなど、ブラックらしからぬ知的な一面があるのが気がかりだが、何より、リンはこの事件の犯人がブラックでないと困るのだ。

アンドロイドのエネルギー源は彼らブラックである。

リンはこの世界に来てからの半年間、ブラックのエネルギーではなく、工業用のロボットに使われるエネルギー触媒・Am5-2をのき爺からもらうことで生き延びていた。

これが工業用ロボットとは根本的に内部機構が異なるアンドロイドに効果があるのか疑わしかったが、活動そのものの維持に関しては効果があるのが分かった。

ブラックのいない世界で新たなエネルギー源が得られて一安心したリンだったが、日が経つにつれて身体に起こるいくつかの？異常？を自覚し始める。

その最たるが？意識の消失？だった。

短時間ではあるが、ある時からある時までの記憶がそっくり抜け落ちていくことが度々ある。

のき爺にこのことを話して、その時の自分の様子を訊いてみるといつになくぼんやりとしていたそうである。

他にも不意に人間を襲いたくなる衝動に駆られたり、自分が自分でないような浮遊感に陥ったりすることが少なからず起こった。

この世界に来る前はこんなことなかったのに……。

そう考えたリンが導き出した答えの一つが、度々自分の身に起こるこれらの異常はブラックのエネルギーを長らく得ていないことが原因なのではないかというものだった。

リンは密かに恐怖した。自分はこの街の人々を好いている。

もし理性を失って自分が彼らに襲いかかる場面を思い浮かべると、胸が締めあげられる思いだった。

そんなことには絶対になりたくない。

この事件の犯人はブラック、ブラック……。半ば言い聞かせるようにしながら、リンはわらをもすがる思いで部屋を飛び出していつ

たのである。

不意に、視界がぐんにやりと歪んだ。

噴水広場に向かつてT字路へと入りこんだところまでは鮮明に覚えていたが、そこから意識が次第にぼんやりとし始めている。

まただ……。

リンはどうか理性を保とうとした。

「んー？ こんな時間に女の子が一人でなにやってんのぉ？」

見るからにガラが悪そうな男の四人組のうち一人が、裏路地の出入り口に佇む少女に軽々しく声をかけた。

その少女は恍惚ごうごうとした表情で夜空を見上げ、言葉に反応しようとしていない。

「あ、オレこの子知ってるよ。花屋のじじいの孫で、この辺りじゃケッコー有名だぜ」

オーバーサイズのTシャツとズボンを着た色黒の男が言う。

人情味に溢れるこの街も、夜になると人気の少ない裏路地にこうした若者が意味なくたむろしている。

壁には彼らが施したものだろうか、卑猥な言葉やマークなどがカラスプレーによって描かれており、それらは近くの常夜灯によって橙色に照らし出されている。

「へえ。ならユーカイとかしたら、結構いいカネになったりして？」

同じくB・BOYファッションに身を包んだ、グループのリーダー格の青年が冗談めかした笑みを浮かべて答えた。

そして口内でガムをくっちやくっちやくと言わせながら、だらしない足取りで少女に歩み寄っていく。

その時、リンの意識は既に朦朧ぼんぼんとしていた。

かすむ視界の中で深くエコーのかかった男の言葉が反響している。そして目の前で男が急に後ろを振り返ったのを最後に感じて？ プツン？……意識が完全に途絶えた。

必死に理性を保とうとしたのも空しく、彼女の意識はしばらく暗



黒を彷徨った。

ある時、遠くから誰かの声が聞こえ、それが段々こちらへ近づいてくる。

名前だ。自分の名前を呼んでいる。リ…………ン…………リ…………

「リン！」

彼女はその声にハッと目をさました。

視界はやけに澄んでいて、意識もしっかりとしている。

だが、にわかには現状を把握しきれなかった。

黒い双眸そくほうに同じ色の髪をサイドで二本に束ねた女…………ナナシ、ナナシが目の前にいる。

戸惑いを帯びた表情で、自分の両肩を強く握りしめて同じ言葉を連呼している。

それは再会を分かち合おうとするような言葉ではなかった。

ただ、何度も「おい、大丈夫か？」と繰り返し、そして、

「これは、これはお前がやったのか？」

と、記憶の中の彼女らしからぬ強い語気でそう問いかけてくる。

リンは呆然とした表情でゆっくりと首を動かし、周囲を見渡した。人間が四人、あちらこちらで仰向けになって倒れている。

血だまりの中に突っ伏している。常夜灯の橙にその鮮やかな赤を重ねている。

次に気付いたのは、自分の身体にもそれと同じ色の液体が大量に付着していることだった。

「…………リン、お前が、こいつらを殺したのか？」

真っ直ぐに自分の瞳を射抜く彼女の視線に、リンは震える声でこう答えるしかなかった。

「わから、ない…………。でも、そうかも、しれない…………。」

次に彼女の口から嗚咽おんえつが漏れ始め、それは？涙？となって足元の血だまりに落ちていく。

「私が、殺しちゃったの……？ 私が……？」  
ナナシは黙りこむことでしか、彼女の言葉を受け取る術がなかった。

待ち望んでいた二人の再会は……最悪の形となってしまった。

t o b e . . . . c o n t i n u e d .

&lt;&lt;Chapter 4&>&>; (後書き)

次回 予告

Rock・フ?出会いと声と結末と?

乞うご期待

## Rock・7? 出会いと声と結末と?

家々の明りが消えたエインセルの夜。

街の路地裏、橙だいたいの常夜灯の下に黒髪と金髪の二人の姿が浮かび上がっていた。

「私が、殺しちゃったの……? 私が?」

リンは嗚咽おえつ交じりに周囲を見渡す。

暗がりの中で何人かの男が力なく倒れていた。

一人、二人と呆然とした目付きで確認していき、自分の身体に付いた大量の返り血と同じ色の液体がそこら一帯に広がっている。

リンは想像した。

理性を失った自分が、彼らの身体を引き裂いていく姿を。

とめどなく噴出する鮮血に我が身を汚していく様を。

そう考えただけで悪寒がし、ナナシが肩を支えてくれなければ立っていられそうにないほど精神が衰弱していた。

「……誰だ?」

ふと、ナナシが鋭い声を上げた。

それはリンではなく、彼女の肩越しにある奥の暗闇に向かって発せられた言葉だった。

「え、あ、えーっと……」

戸惑いの響きがある青年風な声を伴いながら、人型のシルエットが近づいてくる。

「……き、きみたち、こんなところだなにしてんのかな……?」

人型のシルエットは常夜灯の光を浴びて、くたびれた茶のロングコートをはおった青年の姿に変わった。

必死に愛想を保とうとしているのが表情から窺うかがえるが、当惑を隠しきれないその瞳は、大量の返り血を浴びたリンに焦点がいつている。

ためらいがちな足取りで歩み寄ってくる青年を、ナナシはよく目

を凝らして見張った。

青い髪に長身、何度瞬きをしても、その青年の姿はとある誰かにしか見えなかった。

そう、ナナシの大嫌いなあの男に、青年の容貌が酷似していたのである。

「K A I T O！ なんでお前がここにいる！？」

それまでの寡黙さを一変させて、ナナシは地面に落ちていたクロガネを拾い上げて青年に飛びかかった。

気配の途切れたブラックを探している時、偶然にもリンの姿を見つけ、その悲惨な光景に思わずクロガネを手放してしまっていたのである。

「……っ！？」

黒髪の女が素早く動いたのを感じた次の瞬間には、見慣れない刃物の腹が首の頸動脈にあてがわれていた。

更に端正な顔立ちの女の顔が目と鼻の先にあり、この1秒にも満たない間に仰天と恐怖と照れくさがほぼ同時にやってきた。

彼はとっさに目をそらそうとしたが、刃がクイッと押し上げられたことで、またすぐ彼女の瞳の中に視線が吸い込まれていく。

底に怒りをたぎらせる黒い双眸。

この国では？禁忌？とされている瞳の色合いに、彼は絶句した。

「……お前、瞳の色が違うな。赤じゃない」

いきり立つナナシだったが、青年の瞳の色が青だということに気が付いた。

K A I T Oの瞳の色はサファイアのような深紅である。

それに青年は額から冷や汗が滲んでいるし、また自分のことを知っている様子もない。

そもそもあの戦いのあとだ、自分に追いつくには早すぎる。

ナナシは青年を「K A I T Oによく似ているニンゲン」だと判断し、刀を下ろした。

「ぶっ……はぁー！ 殺されるかと思った……」

大きく息を吐き出し、青年は両膝に手をつけて呼吸を整えた。その人間味あふれる所作に、ナナシは彼がK A I T Oではないと確信する。

「あ、あのさ、色々ツツコミたいんだけど、なんで俺の名前知ってるの……？」

青年は肩で息をしながら、下から見上げるようにして尋ねた。

「お前、K A I T O って名前なのか？」

「ああ。朝霧海人あさぎりかいとっていうんだけど……何で知ってるんだ？」  
その言葉に、ナナシの眉がピクッと痙攣けいれんした。

なんとという偶然の一致だろう。

姿形は似ているにしろ中身は本人ではなく、しかし名前が「カイト」

何か宿命めいた見えない因果を、ナナシは感じずにはいられなかった。

「……つと、そんな質問してる場合じゃないな」

呼吸が落ち着くと、海人という名の青年は周囲を見渡した。

それとなく、目付きが鋭くなったように見える。

辺り一面に広がる血の海、そこに倒れている若者数名。長刀を右手に持った露出度の高い身格好をした黒髪の女と、強い放心状態にある金髪の少女。その幼い身体はべったりと血塗られている。

何とも現実離れたややこしい場面に遭遇そくぐうしてしまったと思いつつ、海人は一人一人の遺体の具合を確認していった。革靴が血だまりに液体音を立てる。

四人の遺体をひととおり見回ると、海人は扉ひに手をつけて息苦しそうにした。

そして背後から視線を感じて振り返り、

「ご、ごめん……こんなむごい死体を見るのは、初めてなんだ」と慌てるように言った。

その表情は青ざめていて、口元に手を当てていないと吐き気に襲われそうだった。

「お前は何者なんだ？」

その問いに彼はコートの内ポケットをまさぐり、金バッジがついた本革の手帳を見せた。

「警察だ」

「ケーサツ……？」

「よく「刑事つぼくない」って言われるけどね、新米だけど俺は一応警察だよ。

だから、さっき君が俺にした行為は公務執行妨害にあたるし、そもそも銃刀法違反だ。

今のご時世、こんな法律半分死んでるようなもんだぜ？」

彼は手帳を内ポケットの中に戻し、次に穏やかな口調を心掛けて話し始めた。

「……まあ、君がなんでそんな物騒なものを持つてるかは一旦置いてくけど、

こんな場所で何してる？ 明らかに怪しいぞ。特に……」

彼の目線が、足元を見つめたまま呆然自失とするリンに送られた。その目の動きを察して、

「リンは殺しちやいない！ そんなことするやつじゃないんだ」

とナナシは声を張り上げた。

「それじゃあ、この中じゃ君が一番犯人に近いつてことになるけど……？」

彼はナナシの持つクロガネを見やりながら言う。

常夜灯の光を鈍く反射する黒に近い銀色の刃。

しかし切っ先に血糊がついていないのを見ると、どうやら彼女も下手人じゃないらしい。

海人の頭は混乱した。

この二人は限りなく怪しいが、今ひとつ決め手に欠ける。

金髪の少女がおびただしい量の血しぶきを浴びているのが特に気になるが、まさか年端のゆかぬ子供が殺人を犯すなど考えられないし、何よりそう考えたくない。

しばらく黙りこんで悩んだ末、彼は意外なことを口にした。

「とにかく、その子の服をどうにかしよう。血塗られたままじゃあんまりだ」

そう言った後に少女へ歩み寄りつつ、言葉が続けた。

「この子を家に帰すのはいいとは言えない。そうだな、俺のアパートに来るといいよ。」

オーバーサイズだろうけど、俺の服を着替えに使うといい」

うつむくりんの前に立った海人にナナシは身構えるが、彼は気にせず続ける。

「犯人じゃないんなら、明日、署の方に来てくれるな。」

俺だって君やこの子が犯人だと思いたくない。だから、この場は見逃してやる」

海人は内ポケットから警察手帳とは違うメモ帳を取り出し、ポールペンで何事か書き始めた。

「だけど、もし明日来なかったら、その時は君が犯人だ。」

この女の子は犯人じゃないんだろう？ だったら、次に怪しいのはそんな物騒な物を持つてる君ってことになる。分かったね？」

メモ帳につらつらと書きつづりながらに言う海人を、ナナシは敵意を宿した眼差しで見っていた。

男のいうケーサツだの、シヨだの、彼女には馴染みのない言葉ばかりである。

ただ、自分とリングがニンゲン殺しの犯人だと疑われるのだけはいやだった。

「……その、シヨっていうのはどこにある？」

「君はこのエインセルの住人じゃないのかい？ 確かに、服装がやたらにその……前衛的っていうか、この街の人っぽくないっていうか……瞳の色も？ 黒？ だしね」

ロングパーカーにブラーつという装いのナナシを見て、海人は途端に頬を赤らめる。

すぐに目をそらしたが、それは職業上、毅然と振舞う必要がある



ためだ。

「噴水広場を1ブロック行ったところにあつて、角の郵便局を曲がった先だ。」

まあ、大きな建物だからすぐに分かると思っけどね。それと、これ俺のアパートの住所を書いたメモと、部屋のカギだ」

メモ帳から紙を一枚切り離し、次に銀色の鍵が二つ付いた輪をナシに手渡した。

「この子連れて行ってやってくれ。ひどくショックを受けてるみたいだから」

ナシは紙きれを明りに当てて見たが、土地勘がないために男のアパートの具体的な場所は分からなかった。

それでも一刻も早くこの場から離れたかったので、リンの手を引いて足早に歩き出していった。

二人の背中がT字路の角に曲がるのを見送つてから、海人は内ポケットから携帯電話を取り出し、署に連絡を入れた。

ざっと現場の状況を説明し、場所を指定すると、5分としないうちに応援が来ると言う。

通話を終え、海人は今一度辺りを見渡す。

こんな血なまぐさい場所に一人佇んでいるのは、胸が詰まるような違和感がある。

この静けさ、光の加減、視界の全てが異様に感じられて、まるで自分の両足が地面についていないみたいだった。

かんしき鑑識が来るので下手に現場を荒らさぬよう、応援が来るまでは極力動かないように決めたが、いかんせん、先ほどの二人を考えると複雑な心持ちになる。

二人が犯人ではないか云々よりも、刑事として事件の重要参考人らしき人物をみすみす見逃してしまった自分の行動を思うと、自己嫌悪と共にやるせない気分になった。

「あんな甘いことするから、いつまでも青二才って呼ばれるんだよなあ……」

海人はがっくりと肩を落として、独りぼやいた。  
その言葉を聞いているのは、暗がりに横たわる四つの屍しかばねと彼自身  
だけである。

\* \* \* \*

ナナシはリンに紙きれを見せ、彼女の言葉と道々にある電柱の標  
識を頼りに歩いていき、

男のアパートメントがある番地までやってきた。

赤煉瓦れんがばりの外装で屋根が三角形というシンプルな造りのアパー  
トメント。

すぐにでもその入口へと入っていきたかったが、ひと組のカップ  
ルが向こうの道からやってくるので、一旦角に隠れて様子を窺うこ  
とにした。

「……リン、少しは落ち着いたみたいだな」

後ろで身をすくめるように佇むリンに、ナナシは小声で話しかけ  
た。

それに彼女は力なくうなづき、申し訳なさそうな目付きでナナシ  
を見上げる。

「ごめんね。久しぶりに会えたのに、こんなことになっちゃうなん  
て」

「まさかお前と会えるだなんて思ってもいなかった。会った時の状  
況は最悪だったけどな」

ナナシはそこで言葉を区切り、また続ける。

「……でも、お前が生きていただけで私はうれしい。リン、会えて  
よかった」

その優しい声の響きに、リンはナナシが暗がりのなかで微笑んで  
いるように見えた。

これまで一度だって彼女の笑顔を見たことがあるだろうか。いや、  
恐らくない。

今だつてちゃんと笑っているかは明瞭に視認できないが、それもリンの気持ちは和んだ。

「うん、ありがとう。私もね、ナナシと会えてよかった。本当に、本当に……」

感極まったのか、リンの言葉の語尾がうわづつてかすれていく。ナナシはそつと左手をリンの肩に置いて、アパートの入口付近の様子を確かめた。

道を歩いてきたカップルは和気あいあいと話しながらアパートを通り過ぎ、二つ先の建物の中へと入っていった。

ニユースを見ていないのだろうか、何とも悠長である。

「リン、もう大丈夫そうだぞ。次に誰かが来たら困るからな、早く行った方がいい」

「え、ナナシはついてきてくれないの？」

「ああ、私はブラックを探してくる。私がこの世界にやってきたのはついさっきのことで、いきなり一体のブラックと出くわしたんだ。そいつを追っていった先で私はお前と出逢ったんだが……」

そこで言葉が呑みこまれる。

リンは彼女の言わんとしていることを察してうつむいた。

「……あのニンゲンたちを殺したのはお前じゃない。恐らく、ブラックだ。」

なんでお前があの場合にいたかは今は聞かない。早くいかなければ。

反応は失せてしまったが、まだそんなに遠くへは行っていないはずだ」

ナナシは鍵とメモ用紙を手渡してやると、リンの背中を軽く押して、その身をアパート沿いの通りへと出してやった。

「大丈夫。明日、またここへ来る。それまでの短いお別れだ」

リンは不安げな表情で振り返ったが、その言葉を聞いて意を決したように小さく眉を細めると、アパートの玄関めがけ一目散に駆けていった。

その姿が四角い玄関口に入っていくのを見届けて、ナナシは宵闇

の奥へと消えていった。

\* \* \* \* \*

鉄製のさびれたドアを開けると、アパートのエントランスは吹き抜けになっていた。

壁伝いに螺旋階段が上階へと繋がり、その構造のために天井が四角く見える。

床にはどす黒い赤の絨毯がしかれ、ところどころに染みがあつて清潔感に乏しい。

玄関横の白熱灯が明滅を繰り返し、フロア全体の壁がクリームがかった白をしているが、築何年も経っているのか薄汚れ、漆喰が剥げ、それらから受ける印象は「ボロアパート」である。

リンは極力足音をたてないようにしつつ、しかし急ぎ足で階段を駆け上がっていく。

くしゃくしゃになったメモ用紙によれば、自分が向かうべき部屋番号は「302」

単純に考えれば三階のフロアにその部屋はあるのだが、何と間の悪いことに、二階のフロアに差しかかった時、奥の廊下から「バタン」と白髪の男が部屋から出てきた。

リンは驚いて足を早めたが、気の焦りから大きな足音を立ててしまった。

「だれだー、こんな夜更けに階段を走ってる奴はあー」

このアパートの大家だろうか、白髪の男の声にリンの焦燥感が加速する。

今、自分の身体は血みどろだ。

暗闇ならいざしらず、この場所ならその姿の異様さは一目瞭然。

リンは足音を気にしている場合ではないと考え、ともかく急いで階段を駆け上がる。

「ったくうるさいぞー！ 階段と廊下ぐらいゆっくり歩け！」

うるさいのはそつちだ、と内思いながらリンは3階に辿り着いた。

この建物の最上階。

階段は二方向の廊下に繋がっており、向かって右の廊下へと走っていた。

そこで部屋番号を確かめると「303」「304」と、「111」には「301」からの部屋がない。

リンは慌てて引き返し、反対の廊下へ走っていった。

白髪の大家が愚痴を吐きながら階段を上ってくるのを背後に感じる。

緊張がピークに達しようという時、ようやく「302」の番号が目に入った。

エプロンのポケットから鍵を取り出し、二つある一つをノブのカギ穴に差し込む。

入らない。どうやら外れを引いてしまったようだ。

大家が「タン！」とスリッパを踏みならす音を聞いたと同時に、もう一つの

鍵をカギ穴に差し込んだ。すんなりと入り、ドアを開けざま中に飛び込む。

ドアを後ろ手に閉め、「っはあく……」と安堵のため息をついた。いつもは大手を振って街の大通りを歩いているのに、今や人目を避けるために必死な自分を不思議に感じた。

そして電気をつけようと暗がりくらがりに手を伸ばした時、「ドンドン！」  
ドアがノックされた。

あの大家だ。リンはピタッと動きを止めた。

「朝霧海人さん、今お帰りですかー？ 廊下と階段はゆっくり歩きましょうね！」

リンは後ろ手に鍵を閉めた。音がしたらもろにバレてしまうが、男のノックに合わせてやったところは我ながら秀逸うまいだと思った。

「……あれ、気のせいかな？ 新しく入ってきたやつだから、まず

はこのアパートのルールつてもんを叩き込んでやろうと思ったのに」  
ドア越しに大家の独り言が遠くなっていく。

どうやら危機は脱したようだが、リンは念のため1分間近くその場で息を殺していた。

大家の気配が完全に失せたところで、改めて「ぶっはあ……」と胸をなでおろす。

今度のため息はひと際大きなものだった。

手探りで照明のスイッチを見つけて電気をつけ、狭くて短い廊下を数歩、暗がりの部屋でまた電気をつけ、その場所のあまりに小さっぱりとした有様にやや拍子抜けする。

6畳とないフローリングと白い壁の空間は、恐らく男の主な生活スペースにして寝室にあたる部屋なのだろうが、そこにはダンボール箱がいくつもあるだけで家具もテレビもない。

まるで引越してきたばかりといった有様。いや、事実そうなのだろう。

荷解きがされていないのを見ると、あの青年はまだこの部屋に入ってすらいらないらしい。

思わぬ形で正規の住人以外の人物を第一に入れることになった302号室だが、その血塗られた衣服を身にまとった少女は、ダンボール箱を適当に開けていってTシャツとジーンズを見つけた。

「デッカい……」

思わず不満が口をついて出たが、今のところは致し方なく、ついでに白のバスタオルも見つけると、それを手に持ってシャワー室を探した。

ボロいアパートなので無いかと思ったが、一人用の狭いシャワールームが洗面所の横にあるのを発見。

返り血がしみ込んだ衣服を脱ぎ去ってほっぺり、顔や手足についた血を洗い流すためにシャワーを浴び、それを終えると洗面所の鏡で全身をくまなく確認してから服を着た。

案の定、青年の服はダボダボである。

リンはジーンズの裾を引きづりながら移動し、ドライヤーとヘアブラシをダンボールから取り出して洗面所で髪型を整えた。

自前のピンで前髪を留めると、元氣のない少女の顔がこちらを見返してきた。

「……もういいや、もう寝る」

ふてくされたように鏡の中の自分に言い捨てると、部屋の壁に立てかけられていた細長いダンボール箱を解き、中身は折りたたみ式の簡易ベッド、それを広げて眠ることにした。

ココロがとても疲れている。もう何も考えずに眠りたい。

それでも否応なしに浮かぶ思念に、暗闇の中で彼女は何度となく寝がえりを打った。

今夜、自分は人間を殺してしまったかもしれない。

胸が締めつけられるような思いと格闘しながら、リンはいつの間にか深い眠りについていた。

薄く開いた目に光を感じる。

朝だ。リンはぼんやりとした顔で立ちあがって、窓を開けた。

昨日と同様に空は一面の晴れ模様。

気象管理庁の予報通りだと起き抜けの頭に思いながら、差しあた  
ってすることもないのでとりあえずベッドに戻ることにした。

水色ストライプのカーテンが春風に揺れる。

ドアの向こう側で階段を下りていく音がする。

部屋の中は至って静かだった。リンも両膝を抱えたままじっとし  
ているので、部屋に元からあるカーテンがはためいていなければ、  
まるで時間が止まっているかのような有様だった。

「……よし」

リンは急に何かを決したように一言、ベッドを飛び降りてドアに  
向かおうとした。が、ダボダボのジーンズが足元までずりおちてく  
るので、まずはベルトを探すことにした。

「よし！」

街の雑貨屋で箱売りされていそうな安っぽい黒のベルトを巻きつ  
け、更にサングラスとスポーツキャップを見つけたのでそれも身に  
付け、改めて意気込んだ。いかにも幼い子供が無理してギャングぶ  
ったような格好になったが、そんな彼女の目指す場所は朝霧海人の  
いるエインセル警察署である。

様々思い悩んだ結果、彼女は昨日の出来事について洗いざらい海  
人に話すことにしたのだ。とはいっても意識を失っていた時間が大  
半だし、自分の正体をばらすつもりもないのだが、とにかく一つの  
場所にじっとしているのだけはいやだった。

\* \* \* \*



「アサギリカイトってヒト、ここにいる？」

窓の框越しかまちにいきなりかけられた言葉に、署の受付嬢は困惑した。サングラスがずれて鼻頭にかかり、ツバが後ろに来るようにスポーツキャップをかぶり、明らかにオーバーサイズのＴシャツのせいで胸元がだらんと開いたこの悪ガキ風の少女は一体何なのだろう。

「えーっと、お名前はなんて言うのかな？」

「だーかーらー、アサギリカイトってヒトここにいる？って聞いているの」

露骨に不審なうえに話を通じないときている。

受付嬢は背後に助けを求めたが、事務室には誰もいないので、どうにか自力でこの色々と勘違いした装いの少女を外へ導きだしてやるしかない。

「お父さんとお母さんはどうしてるの？ おうちには？」

「そんなのいないってば。ってか私の話聞いてる？」

「な、そんな、まさかこのご時世にストリートチルドレンだなんて……」

受付嬢は何を思ったか、一人悲しみ始めた。

「あのさーあ、もしもしー？ おねえさんってばあ！」

「この子は道端に捨ててあった服を拾って着るしかなかった……だからこんな格好なんだわ。学校にもいけず、食事にもありつけず、ひたすらお情けちょうだいの日々……」

受付嬢が一人の世界に入ったところで、奥の廊下から若い男が慌てて走ってきた。

朝霧海人である。玄関付近にリンの姿を認め、共に歩いていた同僚をほつぽってきた。

「……あら？」

「あ、はは、この子は僕の……えと、「おいっこ」ですよ」

リンの手を握り、海人は冷や汗交じりの笑みを浮かべて受付嬢にそう説明する。

「それを言うなら「めいっこ」「じゃなくて？」

「そ、そうでした。僕のめいっこなんですよこの子。ほら、あっち行こう」

海人はリンの手を引いて、背中に受付嬢のいぶかしげな視線を受けながら、そそくさとソファや自販機のあるスペースまで歩いていった。

「急に来るからびっくりしたよ。どうしたの？」

ビニール製のソファに腰掛けるリンに自販機で買ったオレンジジュースを渡し、自分もその隣に座る。

リンの装いに対して二、三言いたいことがあったが、間接的に自分が原因なのだと思い出してグっとこらえた。

「え……っと、昨日のことで、お話ししたくて」

ひざ上に置いた手を見やりながら、消え入りそうなリンの声が言う。

自分からは話し辛いのだろうと察し、海人は努めて明るく話を切り出した。

「リン、って名前だったかな。」

簡単にどこに住んで何をやってるかとか、家族について教えてくれる？」

優しい口調に安心したのか表情が和み、彼女は一度座りなおしてから彼の質問に答え始めた。

「商店街の「PIYO MART」って花屋で働いてる。両親はいなくて、のき爺ってヒトがその代わりな感じ。花屋はここからそんなに離れてないし、一度ぐらい見かけたと思うんだけど」

海人は「あ………」と困ったように宙を眺めて、

「実を言うとき、俺ってこの街に来たばかりなんだ。しかも昨日」とはにかみながら言った。

「え、じゃいきなり変な事件に出くわしちゃったってわけ？」

だから部屋があんなにさっぱりしてたんだ」

リンは腕を組んで口をすぼめ、「納得」というように首を振る。

「国家の首都にある『セントラル署』って公安機関の中でも最高位

の場所で勤務が決まって浮かれてただけ…… たった一週間で人事異動があつてね…… それで昨日、こつちに來たんだ……」

話していくうちに表情がどんどん曇り、ついには「はあ……」と深いため息が出た。

それだけ今回の異動がショックだったのだろう。

彼女は彼の落胆を察し、「どうして異動になったの？」だの言及は控えることにした。

「……えっと、本題に入ろうか」

殆ど抑揚のないその言葉には、何とも言えない重みがあった。

「ズバっと単刀直入にきくけど、昨日はどうしてあそこにいたの？  
しかも血まみれで」

いよいよ切り出された本題に、リンは手の甲においた左手に力を込める。

「うん……それがね、」

リンは一呼吸してから、海人の目を見て話し始めた。

「たとえばだよ？ 私が？ アンドロイド？ だったとする」

「ア、アンドロイド？ 今大人気のミクみたいな……？」

何の話が始まったのかと海人の首がピクリとかしく。

「そう。でね、もひとつ？ ブラック？ っていう怪物がいたとする」

「は、はあ……」

リンは「例え話」という前提で、アンドロイドとブラックの関係性について説明し、また自分がブラックを探し求めて夜の街を歩き、意識を失ってからそれを取り戻すまでの話をした。

あまりに突拍子もない内容に目を泳がせっぱなしの海人だったが、それでも最大限に想像力を働かせて話を理解しようと努めた。

そしてその結果、

「ようするに、アンドロイドは怪物を倒す正義の味方ってお話なんだね！」

彼はこのような結論に至った。

「……うん」

リンは白けた顔で目を伏せた。

暗に自分の正体が本当にアンドロイドで、ブラックのエネルギーを得られないがために変調をきたし、それである若者たちを襲ってしまったかもしれない……ということを伝えたかったのだが、相手が悪すぎた。

この朝霧海人という男、馬鹿が付くほど実直なのである。

「で、話を戻すんだけど、昨日はなんであそこに……？」

その実直馬鹿が同じ話を別の色で二度塗りし始める。

「う、うーん……信じてくれないかもしれないけど、気がついたらあそこにいたの」

自分の正体を明かすのに踏ん切りがついていないため、こうして曖昧に言葉を濁すのが限界だった。

当然のごとく、相手は府に落ちないような反応しかしない。

「それじゃ漠然とすぎてるなあ……じゃあ、最後に自分がどこで何してたか覚えてる？」

彼は何食わぬ顔で聞いてくるが、リンにとっては最も答え難い質問である。

そうして言葉に詰まっているところに、

「おーい、いつまで待たせんだよー！」

廊下で待っていた白シャツの同僚が苛立った声で海人を呼んだ。

リンは心の中でホッと胸をなで下ろす。

「うお、ご、ごめんリンちゃん。話はまた今度な！」

そう言って立ち上がると、一旦は同僚に向かおうとし、振り返ってリンに尋ねた。

「そういえば、昨日の刀を持ってたあの娘は誰なの……？」

「私の友達。言っとくけど、あの娘がやったんじゃないんだからね？」

にらみつけるように海人を見上げる。

「う、うん。俺も君らがやったとは思ってないよ。すごく怪しいのは確かだけど、犯人じゃない気がする。？ 刑事の勘？ ってやつか

な？」

「どこか誇らしげに言うと、彼は同僚の下へと小走りに向かっていた。」

結局、伝えたいことは何一つ言えていない。

相手が海人でなくても急に信じられるような話ではないが、もっとストレートに話していればよかったのだろうか。

のき爺に「人には話すな」と釘を刺されているだけで、個人的には正体がバレても一向に構わないような気がするのだが。

リンは飲めないので封をしたままのオレンジジュースの細長い缶を手にとり、煮え切らない表情でソファから立ち上がって歩きだした。

そして玄関を出ようと受付を通り過ぎようとした際、

「が、がんばってね！ めげちゃだめなんだからね！」

と何かを激しく勘違いしている受付嬢に励まされ、愛想笑いで答えた。

また目線を前に向けると、茶色いコートに同色の山高帽子といった、いかにも刑事か探偵のような厳格な雰囲気の方が玄関から入ってきた。

すれ違いざまに目が合い、鋭い視線が浴びせられる。

男に得も知れない迫力を感じて呼びとめられるかと思っただが、そのまま何事もなかったように目線を外されたので歩みを止めることなく外へ出た。

「おい、海人、ちょっといいか」

リンが警察署を出た後、男は廊下で同僚と立ち話をしていた海人に話しかけた。

「あ、マラン警部！ お疲れ様です！」

お辞儀をする海人が顔を上げるのを見計らい、男は見た目通りの渋い声で言葉を継ぐ。

「聞き込みによると、昨晚、金髪の女の子が通りを走っていたのが目撃されている。」

『殺人鬼が出るかもしれないので外出しないでください』とニュース

が言った夜に、だ。

更に女の子の保護者である爺さんに聞いてみれば、その娘は家に帰っていないらしい」

抑揚に乏しい彼の口調だが、裏に鋭い毒針が仕込まれているような威圧感があった。

「……そこで、なんでその女の子が警察署を訪ねてきている？」

その一言でやっと、海人は彼が何故自分に話しかけてきたかの意図を知った。

「あ、や、それはその……」

「まあ、金髪というだけで同じ人物だと決めつけるのはよくないがね」

ベテラン上司の貫禄かんろくを前に、新米刑事はただ狼狽ろうたいしきりである。

「一つたずねるが、あの娘はお前目当てにやってきたのか？」

「あ、あの娘は僕のお……じゃなくて、めいつこなんですよ」

「随分と変な格好をさせるんだな、お前の家系は」

「いや、あの服装がいま子供たちの間で大人気らしくて……」

「ほーお。で、そのめいつこの名前はなんていうんだ？」

「えと、？リン？っていうんですけど……」

上司に訊かれるまま、新米刑事はまんまと答えてしまった。

彼が地雷を踏んだと分かるのは、もう少し後のことである。

「奇遇だな。昨晚家を飛び出したつきり帰ってない娘の名前も？リン？というんだ」

「え」

「……さて、そろそろじれったいのはやめだ。」

もうひとつたずねるが、お前は殺人現場であの娘と会ってるんじゃないか？」

海人の隣にいる同僚にとっては突拍子もない質問だが、本人はまさに凶星を突かれたといった表情を露わにしている。

大慌てでポーカークフェイスを装うとするも、すればするほどボロが出てしまう悪循環。

後に出来ることといえば、潔く白旗を振るぐらいである。

「警部のおっしゃる通りです……」

「……へえ。デタラメも言ってみるもんだな」

完全に一本取られ、海人は「やはりこの人には敵わない」と肩をすくめた。

彼がこの警察署にやってきたのはつい昨日のことだが、マラン警部には2年前の研修の際に散々しごかれた思い出があり、その時とまた同じような状況になっている。

ただ、今は実際の事件を追っているということと、マラン警部の厳しさにも拍車がかかっていた。

彼はいきなり近くの壁を「ドン！」と横手で殴りつけると、

「何故事件の重要参考人をコソコソかくまうようなマネをする？ お前それでも刑事か？」

確かにあの娘は年端もいかない子供だ。それでお前が見逃してやろうとする気持ちも分からなくはないが、そうすることによってあの娘への疑いは一層増すだけだ。

昨日のことを改めて洗いざらい話してもらうぞ。そして怪しいと分かれば、今夜の巡回警備の際、お前にはあの娘を張ってもらう。いか、青臭いのも大概にしろよ」

館内に響き渡る罵声を浴び、海人はただ突っ立って受け身に構えるほかなかった。

そうして改めて昨晚の状況、自分がリンに施してやったことを洗いざらい話し、また「刀を持っていた黒髪の女性もいた」ということもつけ加えた。

昨晩は「自分が来た時には現場は既にこうなっていた」と言われていただけに、マラン警部補の表情はみるみるうちに険しくなり、再び怒声が響き渡るかと思われたが、彼は呆れるようにため息をして「今夜はその二人をマークだ」と言うだけだった。

無言のまま去っていく警部の背中に、彼は千にも万にも及ぶ罵声の言葉があるのに気付いて、しばらくその場に立ちつくしていた。

そんな彼に

「ま、お前らしいよ」

と同僚が気安く言った。

\* \* \*

海人が署内でこっぴどく叱られていた頃、外ではリンがナナシと会っていた。

彼女によれば、街の様子を見回るのを兼ねて気ままにうろついていたら、署から出てくる変な少年ギャングの姿に身をやつしたリンを見つけたのだという。

そうしてたまたま当初の目的地であったエインセル警察署に辿り着いたのだ。

結果的にはよかったものの、リンを見かけなかったら彼女は どうしていたのだろうか。

「……ニンゲンばかりだな、ここは」

「当たり前じゃん。ニンゲンの世界だもの」

警察署の玄関へと通ずる小さな階段の脇で、二人は言葉を交す。

「わりと平気そうで安心したが……おまえ、その格好はなんだ？」

右の人差指を軽く向けながら、興味ありげにたずねる。

「昨日のK A I T O カイトそっくりのヒトから借りてきたんだよ。似合う？」

リンは口元を甘く開けてポーズを取って見せたが、

「……さあ」

外見に関する感性が乏しいので、ナナシはそう淡泊に答えるしかなかった。

他には「K A I T O」という彼女の中での忌まわしい単語が出たため、少しムっときたのである。

「ナナシもこの世界に来たんなら、ちょっとは？お勉強？しないとね。すぐに正体がバレちゃうよ？ つかさあ、ここに来る前に変



なことしなかった？」

下から覗きこむように見上げてくるお節介染みた眼差しに、  
「私だつてばかじゃない。怪しまれるような行動を取った覚えはないが、何故だかいっぱい話しかけられた。『そのセクシーなねえちゃん、オレたちと遊ばない？』とか」

リンは頭を横に振りながら「分かってないなあ」と右手を額に当て、まるで保護者のような口ぶりで指導しだした。

「まず第一に、そのジッパーをきちんとしめる！へそ出しルックとか刺激的すぎるよ」

ナナシのロングパーカーのジッパーを噛ませ、「ジイ！」と首元まで思いつきり上げた。

「……第二は？」

リンは少し離れてからナナシの頭からつま先までを気取ったような眼差しでチェックし、

「足はどうしようもないよね。まあ、これぐらいのセクシーポイントがあっても大丈夫でしょう」

と一言。

即席のファッション講座はその項目がたった一つで早々と終わった。

ジッパーがあがりすぎてやや不恰好ではあるが、胸も隠れて大幅に露出部分が減り、リンの言う通り足先までの装いと調和しているこれはこれで魅力がある。

そしてリンは手に持ったままの缶ジュースを弄もてあそびながら、話題を転じた。

「これからシヨに入っていくの？疑われたままはいやなんですよ」

「……別に。お前に会うのが一番の目的だったしな」

「今ならいるよ。カイトっていうヒト」

ナナシはピクッと眉をつり上げた。

「この世界に来てまであんな奴の顔を見るとは思わなかった。それと名前まで。」

あれで瞳の色が赤だったら、あの時とつくに斬り伏せている」

彼女の無表情な顔に静かな怒気がこもる。

こうなるのが分かってリンは敢えて言ったのだが、相変わらずからかいようがあると内心嬉しかった。

「結局、昨日は見つかったの？ ブラック」

「いや……だから、今夜また探す必要がある」

「じゃあ、家に帰れそうもないし、夜になるまで街を案内したげるよ。いこっ！」

リンは彼女の手を引いて天真爛漫な笑顔で駆けだした。

昨晚の物憂いしげな表情はどこへいったのやら。

いつもの、ナナシが前に見た時と同じ？リン？という仲間が確かに目の前にいた。

こんな時にかけるべき言葉があったような気がしたが、頭のどこかにつつかえたまま思い出せなかった。

住人たちが寝息を立てはじめた夜、街をうごめくいくつもの人影があった。

「こちらブロックAを巡回中。いまのところ異常なし。どうぞ」

その人影の一つ、朝霧海人は携帯電話を右耳にあてがい、足音に気を配りながら足早に通りを歩いていった。

一連の？無差別殺人事件？の犯人を今夜こそは捕えようと、エインセル署は総力を挙げて街の巡回、警備に当たっていた。

住人への事前告知なしで行われた本作戦は、署員各々が私服を着て民間人に扮することで、これまで辻斬りまがいの凶行を繰り返してきた犯人をおびき寄せる魂胆こんたんがある。

相手の性質を考えるなら効果的な作戦だと言えるが、その分危険が伴うのは明白で、署員は二人一組、常に背後と物陰に注意を払うような緊張感を持って仕事に臨んでいた。

T字路の出口に差し掛かった時、海人とその相棒、ザックは表通りを歩いている二人組を見つけた。

赤いスポーツキャップをかぶった全体的にダボダボな服装の子供、もう片方はスラっとした体型で、ロングパーカーのフードを頭にかぶっている。

「海人、あの片方ってマラン警部補が言ってた女の子じゃないか？」物陰に身を潜め、短髪に白シャツ姿のザックがささやく。

先刻、マラン警部補にこっぴどく叱られている海人をニヤニヤしながら傍観ぼうかんしていたあの同僚だ。

海人は街灯によって仄ほかに浮かび上がる二人の姿に、ひたすら残念な気持ちになった。

こんな夜分に二人揃って一体どこへ行こうというのか。

もし二人の行きつく先が昨晚と同じような場所だったら……それを思うと、海人はいよいよ甘い考えを捨て、キツと鋭く二人を見据

えた。

マラン警部補に叱咤しつたされたことがかなり身にしみている。

刑事である以上、情に流されてはいけないし、あらゆる事態を考  
えねばならない。

外見に惑わされるな。子供だつて人を殺すかもしれない。幼い面  
の皮をかぶつた悪魔かもしれない。もう片方の女だつて並み以上の  
美しい容貌の持ち主だが、？刀？という露骨な凶器を持っていたと  
いう点でリンと等しく怪しい。

惑わされるな、惑わされるな……海人はしきりに目を閉じ、自分  
に言い聞かせた。

ひたすら感情を殺すことに徹し、ザックと共に二人の尾行を開始  
する。

ある時ふと、携帯のバイブレーションが鳴った。

「大変だ、俺の相棒がやられた！ こちらブロックB！ 聞こえる  
か！？」

携帯を耳に当てるや否や男の怒鳴り声が周囲に響き渡った。

海人はとつさに物陰に身を隠す。ターゲットに気付かれやしない  
かと焦つたが、十分に距離を置いていたおかげか、二人がこちらを  
振り返る気配はない。

その姿を視界に留めたまま改めて携帯を耳にあてがい、ライター  
の火を風から守るように手で囲いを作つて話を再開させた。

「や、やられたつて、命に別条はないんですか？ それならよかつ  
た。え、？犯人を見た？？ ちよつと待つてください……。僕たち  
今、マラン警部補が言っていた『要注意人物』を尾行してるんです  
けど」

見る限り、その要注意人物とやらは二人並んで商店街の通りを歩  
いているだけ。

言うまでもなく、誰かを傷つけるようなことはしていないし、ま  
たそんな暇もなかった。

海人は安堵すると同時に、それと入れ替わる形で「じゃあなん

「あの二人は街を？」という疑問が胸に湧いてきた。

「犯人は人間じゃなかった……黒くて犬みたいな怪物……広場の方に逃げた……あ、あの、それってマジで言ってます？ う、すいません！ バカだなんて思っただけですって」

海人は空白に向かってペコペコと頭を下げた。

実際に負傷者が出たものの、聞かされた犯人像が浮世離れしているので明確な危機感を持つことは出来なかったが、「とにかく周囲の警戒を怠らないように」と念を押された。

その言葉に「了解です」と答えたのを最後に通話を切り、尾行を再開する。

つかれ離さず距離を取って二人をつけると、二人は街の名所である噴水広場に入って数歩のところでおもむろに立ち止まった。

いつもより早く店じまいしたカフェテリアのテーブルの下に隠れて動向を窺うが、彼の見つめる先で二人はこんな会話をしていた。

「ナナシ、ブラックの気配とか感じる？」

リンはずれたサングラス越しにナナシを見上げる。

「……かすかに、だけどな。お前はどうか？」

その言葉に首を横に振るリン。

「気配を察知するのはナナシの方が得意でしょ？ 私は全然だめ。

でもさ、一ついいアイデアがあるんだ。ブラックをあぶり出す方法！」

疑問符を浮かべるナナシをよそに、リンは一步前へと踏み出す。

「こーんなに街が真っ暗としてたんじゃ、ブラックは身を隠すところに困らないってわけ。

そんなら、つまり、パアツと街全体を明るくしちゃえばおーけー」

「……確かにそうかもしれないが、具体的にどうするんだ？」

「カンタンだよ、私がこれからやってみせる。……あ、？ 耳は塞いで？ てね」

ナナシは相変わらず府に落ちないといった表情だが、そんな彼女をよそにリンは揚々と前を向き、大口を開けて大量の酸素を吸い込

むと……直後、地面にひびが入るうかという凄まじい雄叫びをあげた。

「っああああああああああああああああ！」

その高周波のような大声は広場全体に響き渡り、突然の騒音に住人たちが飛び起きて次から次へと家々に？明り？が灯されていく。

10秒間ほど続いた彼女のボイスシャウトだが、終わった頃には見渡す限りの建物が全て電気をつけ、何かと外へ出た住人たちがわらわらと広場に向かいだしていた。

知り合いに見つかるとう面倒なので、彼女たちは人だかりが出来る前にその場を後にした。

「つつ……なんなんだあの子は……」

鼓膜が裂けんばかりの大声に耐えしのでいた海人は、ゆっくりと耳から両手を離してよろよろと立ち上がった。もちろん、ドジな彼らしくテールブルの角に頭をぶつけて。

「お前のめいつこすげーな。拡声器として将来有望だな」などと背後でからかうザツクと共に、広場を北に向けて走り出した二人を追いかけはじめる。

二人の姿はぞろぞろと広場に出てきた住人たちに阻まれて見えなくなっではいるが、「あー！ ああああ！ ブラックさんどこですかー！」とリンが絶えず叫び散らしているので、それを頼りに走ればよかった。

「こちら朝霧海人、噴水広場で『要注意人物』がいきなり不審な行動を……ええ、そっちに聞こえた音はその子の声ですよ。そのままこっちに応援に来てくれると助かります。あの二人は犯人じゃないみたいなんです、まったく何がどうなってんのかさっぱりです」

海人は住人を押し分けて走りながら隣ブロックの仲間に連絡を入れた。

彼らのいるところまで届く声とは果たして人間に出せるものなのだろうか。

「たとえば、私が？アンドロイド？だったとする」

ふと署内で聞いたリンの言葉が脳裏をよぎったが、「まさかなあ……」と頭に浮かんだ考えをすぐに打ち消した。

ナナシとリンは広場を抜けて二股に分かれる通りの一つに入っていく、それに遅れて海人のコンビも続いたが、両者の距離はそのまま開いていくかに思われた。

「おっ……と」

不意にリンがふらふらとよろめいた。

ナナシは慌てて振り返って身体を受け止め、「大丈夫か？」と声をかけた。

彼女の表情は高熱にうなされてるかのように朦朧としている。

「う、うん……大丈夫だよ」

ナナシの腕に抱かれる形でもたれかかり、声にはいつもの覇気はきがない。

昨日と同じだ。あの血の海に立っていた時の表情。

今はまだ自我を保っているが、このままいけばどうなるか分からない。

一抹の不安がナナシの脳裏をかすめたが、

「そのまま動くなそこのふたりー！」

見覚えのある声と顔とが追いかけてきて、やむなく彼女はリンをお姫様だっこして高らかに跳躍。

近くにあった二階建ての建物の屋根に着地し、リンを抱いたまま軽快な足取りで屋根から屋根へと飛び移っていった。

こうなると海人たちに成す術はなく、夜空を舞う二束髪の人影の行方をただ呆然と見つめる他なかった。

「……おいおいおい、マジでどうなってるの？」

海人は啞然あぜんとした声で言った。

「なあ、海人、お前って変な知り合い多いな？」

対して、ザツクの声には妙に緊張感がない。

「ああ、お前も含めてな」

駆けだしざまチョンと相棒の肩を叩くと、海人はターゲットへの

追走を再開した。

「って追いかけんのかよ!? あんな人間離れした相手をさ」

「当たり前だろ! 何だかなあ、もう小さなことで驚いてる場合じゃないんだよ!」

ターゲットの姿は建物の陰に隠れてとっくに見えないし、またリンの声も聞こえなくなってしまうが、こうなればもう? 勘? である。

海人らが走っていくのに合わせて、パチリ、パチリと通り沿いの建物に次々と電気がつけられていく。

その様はまるで、疾駆する刑事二人が敷いていく電光の絨毯であった。

ナナシとリン、海人ら警察署員、そしてブラック。

彼らの起こす騒ぎに寝ぼけ眼をこすりつつ、夜の街がにわかにも目を覚まします。

\* \* \*

「あのね…… ナナシ」

屋根から屋根へと飛び移ろうナナシの腕の中で、リンがささやくような声で言った。

それから彼女が力なく紡ぎ出す言葉に、ナナシは足を止めることなく耳を傾ける。

「実は街を案内している時から、ちよつとふらついたりボーツしたりしてたんだ」

「……確かに、様子が時々おかしかった」

「うん。それでね、私思ったんだ。ニンゲンたちは食べ物とか飲み物とかを食べるだけで生きていけるの。でも私たちは、そうするためにブラックと戦わなくちゃいけない。」

どうして? なんて、ごく普通に暮らしていけないの?」

更にそのまま、リンは胸の奥に蟠わだかまっていた言葉を継ぐ。



「この街に暮らしてみても分かった。ニンゲンたちはね、争いなんかしないで、家族や、友達や、近所の人たちや、それまで一回も会ったことがない人でも、みーんな仲良く暮らしてる。私は、この世界でエクスプロリズムのみんなと仲良く暮らしたい。でも、みんなばらばらになっちゃった。舞い落ちる花びらみたいに」

ナナシは返す言葉もなく、ただ着地と飛躍を繰り返していた。

沈黙が降りる。しばらく、風切り音だけが二人を包んだ。

「……レンに、会いたいよ」

不意に、かすかな声がふっと浮かびあがった。

それはずっと堪えていた言葉だったのだろう。ナナシ自身、彼女がレンや他の仲間のことについてあまり言及してこないのを疑問に感じていたが、彼女は寂しさを見せまいと懸命に努めていたのだ。

そんな仲間に対して、ナナシは何か言ってやりたいと頭の中で言葉を探した。

「ニンゲンと私たちアンドロイドの？死？は違うと誰かに聞かされた。

だが、いずれにしろ、生きてさえいれば会えないということはない。私たちがこうして会えたようにな」

無愛想な彼女なりに慰めの言葉として言っただつもりだが、

「うん……そうだね」

リンが微笑んでくれたことで、彼女はこの言葉でよかったのだと安心した。

しかし同時に……自分で言った言葉が、自分に当てはまらないということにも気付いた。

MEIKO。彼女の死と自らが犯したこと。

ふとした拍子に辛い記憶が溢れだして、通り魔のように心を引き裂いていく。

そう、未だに。

「……リン、感じるか？ いるぞ、この近くに」

民家の屋根に降り立った時、ナナシは強烈な胸のざわめきを感じ

た。

辺りの暗闇に全神経を研ぎ澄ませる。

移動している間に二人は商店街から住宅地に入っており、広場の騒ぎもさすがにここまで届いていないようで、辺り一帯は寝静まり、また街灯の本数も少ないために薄暗かった。

からからから…… ナナシの立つ民家の屋根先につけられた風受けのにわとりが回る。

それが回転の速度を遅めてある時、ピタッと音もなく停止した。

直後、

「……っ！」

ナナシは背後に気配を感じるや飛び退き、繰り出された三爪の横払いを回避した。

また別の屋根に着地して、一段高いところから元いた場所を見下ろしてみれば……そこに青白い鬼火が二つ、不気味にゆらめいていた。

その鬱蒼とした輝きは間違いない。

? ブラック? だ。

「リン?」

何の断りもなく、それまでナナシの腕の中でうずくまっていたリンが身を起こし、屋根へと降り立った。

そして呆けた声で、

「ブラック…… ブラック……」

そう繰り返される言葉には、まるで何かに憑りつかれて口を支配されているかのような響きがあった。

いや、事実、彼女は? 本能? に取り憑かれている。

リンは暗闇に浮かぶブラックの双眸を一瞥、おもむろにジーンズのポケットからチップを取り出して、それを左手首のリング型デバイスに挿入した。

黄色い電光が迸り、ナナシの目にブラックの全体像が見えた。

「こいつ、あの時のブラックじゃない……」

一瞬のことではあったが、ナナシに見えたブラックの形は人型ではなく、犬型であった。

昨晚いたちごっこを繰り広げたあのブラックではない。

新たに出現した個体なのか、あるいは単に形を変えているだけなのか……。

そう気を取られているうちに、戦闘態勢を整えたリングがブラックめがけて地を蹴った。

彼女は右腕を大きく振り上げてブラックへと飛びかかる。

ハンマーのように振り下ろされた鉄拳は民家の屋根を叩き割り、それは戦闘開始のゴングと同時に住人たちを叩き起こす轟音であったが、人と獣の影は空中で幾度となく激しく交差し、その都度「バコン」だの「ズドン」だの音を立てて家屋の随所が壊れていった。

本能をむき出しにした両者の目まぐるしい戦いに介入の隙を失い、ナナシはただ見ているしかなかったが、眼下に懐中電灯やランタンを持った人間たちが続々と群がってきている。

「う、うお、なんだあれ!？」

住人の一人が空中を飛び交うリングとブラックを指差し、周りの住人も次々にその存在に気付いて辺りはいよいよ騒がしくなってきた。何本もの懐中電灯が向けられ、家々に明りがつき、窓から身を乗り出す者もいる。

さながら大捕物に興奮する野次馬連中だが、ブラックに不意をつかれたリングがその耳目の真っ只中へと吹き飛ばされた。

「お……お、お嬢ちゃん？　大丈夫？」

はげ頭の男が地面を滑って頭から民家の壁に激突したリングにおそるおそる手を差し伸べるも、割れたサングラス越しにギラッと睨みつける少女のケダモノめいた目付きにおそく、ひつ」と情けない声を上げて道を開け渡した。

ゆらりと立ち上がって肩をならすリングにライトの明りが集中する。

その両手には黄色い流線形の金属製グローブがはめられており、それがパンチの威力を何倍にも引き上げる彼女の武器なのだが、今

のところはブラックではなく家々の破壊にのみ力が発揮されている。一步、二歩、得体の知れないギャング姿の少女が地を踏むたびに住人達はすくみあがる。

更に彼らの目を皿にしているのは、少女の対向線上にいる謎の生物だ。

見たことも聞いたこともない漆黒の、影が命の息吹を吹き込まれてこの世に生を受けたかのような化け物。

両者は互いに適当な距離を保っているが、サングラスが地面に落ちて露わとなった少女の鋭い目付きを見るに、どちらかが今にも飛びかかって行きそうである。

その緊迫感はさながら映画のワンシーンのようで、この状況に早くも順応した若い衆は「やれやれー！」と野次を送ったり、あるいはポップコーンとジュースを手にしたりしているが、皆が固唾を呑む中、また新たな人物が夜空より飛来してきた。

二束髪の女が手にした？刀？を謎の漆黒生物めがけて落ちざま振り下ろしたのである。

それは空を切って対象に当たることはなく、逆に漆黒生物は刃をかわした足で反動をつけて彼女に飛びかかっていった。

むき出しにした爪の攻撃が刀で受け止められるな否や、反撃を恐れたのか、ブラックは身をひるがえして奥の道へと逃げていった。

とっさに後を追おうとするナナシの背後をリンが飛び越えてそのままブラックを追う。

いつの間にか拳を握ってすっかり観戦に熱が入っていた住人の何人かが後を追おうとしたので、ナナシは彼らの前に立ちはだかり、

「……見せ物じゃない。お前ら、斬るぞ」  
横一文に構えた刀をギラッと見せつけて言い放つ。

すると彼らはすんなり蜘蛛の子を散らして家々に帰っていき、美人なのによたらに凄味のある女の姿が消えたと見るや、こぞって外に出て戦闘の行方を追った。

恐るべき野次馬魂である。

一方、ブラックを追ったナナシとリンは商店街へと逆戻りしていた。

二人を待っていたのは賑やかな電光の輝きと、騒ぎに起きたした住人たち……更にそこには海人らコンビもいた。

二人は素性がバレて「刑事さん何が起きてんの?」「つあー例の無差別事件でしょ?」と前髪をカールにしっ放したおばさん連中に質問攻めにされていたが、思いもよらずターゲットが現れたのに気付いてそちらに急行した。

「……なあ、海人よお、お前これでも驚いてる場合じゃないって言えんのか?」

相棒の言葉に海人はぐうの音もでない。

何と反応すれば良いのだろう。

リンが犬の形をした真つ黒い怪物と戦っている。

両手に金属製のナツクルグローブをはめて勇猛果敢に、いや、その一系乱れず何度も怪物に向かっていく姿は、獲物を逃すまいと死に物狂いのような強大な集中力を感じさせた。

更にあの黒い瞳の女も奥に見えている。

海人は半ば混乱していたが、

「おい、発砲許可っておりてたよな!？」

と腰に手を回しつつ相棒にたずね、彼が頷くのを見るやさつとハンドガンを引き抜いた。

「マジで撃つってのか? おまえ実戦で撃つたことないだろ?」

そう言いながら、ザックも銃を引き抜く。

「おまえだつてないだろ! とにかく、変な怪物に市民が襲われている。こういう時こそ使うもんじゃないのか? 銃ってのはさ!」

海人は黒い9mm口径のハンドガンを片手に、激しく入り乱れるリンと怪物の両者に接近を試みた。

そして銃を構えて標準をつける。が、明らかに手が震えていた。

冷静に考えれば戦闘がこう着するのを見計らって、両者が距離を

取ったところを撃てばいいのだが、今の彼は使命感に駆られるあまり判断力を失い、「いますぐ撃たなければ」という思いで一杯になっている。

かといつて撃つたら撃つたでリンに当たるかも知れず、焦りと恐怖が錯綜さくそうして彼をためらわせていた。

そんな彼の姿を見つけたブラックが身をひるがえして突進してきた。

「え……？」

薄気味悪い青白い目と視線が繋がったと感じた次の瞬間、目前には爪を突き立ててこちらに向かおうとする化け物と……それを横から阻む銀色の刃が交差していた。

「邪魔だ」

肩で後ろに吹き飛ばされ、尻もちをついた先で顔を上げてみるとそこには怪物の腹を突き刺して高らかと刀を掲げる二束髪の女の背中があった。

ブラックは串刺しにされて身動きがとれず、ただ四本の足をジタバタとさせている。

ナナシは一瞬の間をおいたのち、グッと力を込めて刀を左斜めに振り下ろした。

途端に黒い液体が四散する。

断末魔だろうか、海人の耳に「キュウ」という小さな悲鳴が聞こえた。

その甲高い声には、小鳥が首を締めつけられて息絶えるのと同じ哀切な響きがあった。

「……リン、終わったぞ」

ナナシがそう言うのも束の間、リンはさっさと駆け寄ってブラックの吸収を始めていた。

地面にひざまづき、まるで貪りつくかのような表情で。

しかし次々と掌に吸い込まれていくエネルギーに理性を取り戻し始めたのか、いつしかポロポロとその瞳から涙の雫しずくがこぼれていた。

何かしきりに声を上げているが、嗚咽がひどくて言葉になっていない。

ナナシは自らの肩越しにへたつと地べたに座り込むリンを見下ろした。

「いくら泣いたって、私たちはアンドロイドなんだ。

だからブラックを倒さなくちゃ、理性の一つだって保っちゃられない」

その言葉にリンは泣きじゃくりながら駄々をこねるように言い返す。

しかし彼女の涙も、どこまでいっても人間ごっこ？機能？に過ぎないのだ。

「分かってるよ！ 分かってるから……分かってるから悔しいんでしょ！」

ナナシはそれ以上何か言うことはなく、リンの次に目線を海人に移し、その身体がビクッとひきつるのを見た後、リンの身体をさらって跳躍した。

辺りには野次馬で人だかりが出来、皆こぞって口を結んで啞然あぜんとしている。

こんな姿を見られなくなかったから、何よりブラックに襲わせたくなかったから一芝居打ってやったのに、ナナシはニンゲンたちの解せない好奇心にうんざりした。

一方、未だに腰が抜けている海人は、別次元の戦いにただうろたえていた自分の不甲斐なさを嘆くよりもまず先に、刑事として云々の自己嫌悪に陥るより真つ先に、

「なんて……なんて、なんてかつこいいんだ……」  
とめどなくあふれだす羨望せんぼうを直覚せんかくしていた。

この彼女に対する憧れは徐々に淡い恋心へと移ろうが、それはまだ少し先の話である。

今はただひたすら、彼は満月に姿を重ねるナナシの背中に見惚れていた。

t  
o  
b  
e  
.  
.  
.  
.  
.  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.



&lt;&lt;Chapter 3>>&gt; (後書き)

次回 予告

Rock・8?鉛色がもたらすもの?

乞うご期待

## Rock・8?鉛色がもたらすもの?

ある時、青白い光がきらめいた。

地球全土を巻き込んだ?世界戦争?のフィナーレを飾るに相応しいその光は、プラトニウムでもウランでもないまったく新たな元素を核燃料とした兵器・クリプトボムの炸裂によるものだった。

従来の核兵器がどれも大きなキノコ雲を伴う爆発であったのに対し、クリプトボムは一種の閃光弾であり、着弾しても青と白の強烈な光が勢いよく拡散するのみである。

しかしその光こそが人々を呑みこみ、草木を呑みこみ、街を呑みこみ、果ては大陸一つ丸ごと消し去った。

これは比喩などという生易しい表現ではなく、事実地球上から一つの大陸が跡形もなく消えたのである。

人々はこの非人道を通り越した行いを「死神の仕業」とし、クリプトボムを開発・使用した国家の人間すべてをのべつ幕なしに「Reaper(死神)」と呼んで蔑んだ。

その国の人間の特徴は……瞳の色が?黒?であるということである。

太平洋沖合に浮かぶ人工島・トランジスタ。

六つの都市からなるこの超巨大水上要塞は複合国家・シンボシスの土壌であり、首都・セントラルを中心にそれぞれ橋梁きょうりょうによって連結され、上空から見ると島の全体像が「」の形に見えることからこの名前がつけられている。

その六大都市の一つ、「エインセル」は過去の文化体系を今に残した「芸術の街」として人気都市の呼び声高く、何より個性と人間味あふれる住人たちのおかげで街全体が活気づいている。

更に約二名の?アンドロイド?がこの街に潜伏しているということも、忘れてはならない。

「こんにちわあ。今日も素敵なお花を買いにやってきましたわ」  
これまた豪勢な身格好をしたマダムが、のき爺の花屋「PIYO  
MART」に訪れた。

「や、これはハイネマンさん。喜んでください、新入荷の花がある  
んですよ」

店を入ってすぐ脇にあるレジカウンターから、のき爺がにんまり  
と笑って話しかける。

「まあ！ 早速見せてもらうかし……ん？」

マダムはふと、店の奥に見慣れない女性がいることに気付いた。  
長い黒髪を二本に結わってツインテールにし、瞳の色は？青？、  
店名が記されたエプロンをしているところを見ると店員らしいが、  
バケツ片手に慥然とした表情でポーッと突っ立っている姿にはまっ  
たく「働こう」という意思がうかがえない。

しかも客に対して「いらっしやいませ」の一言もなく、ただ遠い  
目で天井を見つめるばかりで、そもそもこちらの存在に気付いてい  
るのかさえ怪しい。

マダムはそんな彼女の態度に戸惑いつつ、のき爺にたずねた。

「あ、あの娘はなんですか……？ 新しく雇ったアルバイトさんか  
しら？」

「一週間ぐらい前からね、ちょっとワケありで預かっとするんですよ」  
「それはまあ……にしても、ちょっと教育がなっていないんじゃないな  
くて？」

尖った顎を更にしゃくれさせて、マダムは新たな女性店員の態度  
に不満を募らせた。

「ちょっと変わった子でね、三度の飯より頭にメルヘンを描くのが  
好きなんです。

そんなんだから人と話すのが苦手で……そうだ、リンを呼びましょ  
うか？」

マダムのご機嫌取りのため、のき爺は「リン！」と裏方に引つ

込んでいるリンを呼んだ。

すると店の奥にある引き戸が開けられて、「あー、ハイネマンさんこんにちわ！」とマダムお気に入り少女が元気よく出てきた。

「あらあらリンちゃん、今日も元気で可愛いわねえ！」

マダムは大げさに身をゆすって歓迎のアクシオンを取りつつ、リンの頭をひとしきりなでいつものコインを手渡した。

そしてお馴染みのパターンで、「ハイネマンさん、この指輪はなに？」「ああこれはね旧ローマなら」とマダムのトークショーがやにわに始まるのだった。

店がマダムの独壇場と化しているとは露も知らず、通りを「PIYO MART」目指して意気揚々と歩く一人の青年の姿があった。「ふんふんふん、ふんふん」

この気持ちよさそうに鼻歌を吹きすさびながら通りを謳歌している青年の名は、朝霧海人。それでもエインセル警察署に務めるれっきとした？ 刑事？ である。

「ママー、あの人どうしたのーお？」

「よく目に焼き付けときなさい。気がおかしくなると人はああなるのよ……」

「先日物の騒ぎといい……この街もいよいよ末だな」

道行く人々の白けた目など眼中になく、海人は夢見がちな少女よろしく楽しそうにワルツのステップを踏みながら通りを歩いていた。彼がこうも浮かれているのは、ひとえに？ 恋？ をしたからだ。

「……あなたのお麗しいお名前をお聞かせくれませんか？ この私めの耳に。」

な、なーんちゃってな！ 八八八八八八八八！

人は恋をすると誰もがこのように（終始ニヤついたり、路上でいきなりシャドー告白を始めたなど）なるわけではないが、彼の場合は分かりやすかった。

いや、もちろん事件が解決してから一週間、葛藤がなかったわけ

ではない。

何せ相手は刀で化け物を平然と串刺しにするクールビューティー……いやそうじゃなくて二束髪が風になびいて何とも麗しいクールビューティー……いやそうでもなくてこっちがてんわやんわなの。「ふん……」とまったく動じない瞳が美しすぎるクールビューティー……いやそんなじゃなくて……。

何かと「クールビューティー」という単語と共に彼女の顔や姿が頭を渦巻いて止まないのだが、ようするに、かの事件の重要参考人にして何かと人間離れた相手に対し、刑事として恋愛感情を抱いていいのか？ 大丈夫なのか？ という葛藤がここ一週間あったのだ。

若干ノイローゼ気味になって仕事にも身が入らなかったが（彼女のいる店に聞き込みに行く時は前々夜から気合を入れていた）、あの時の同僚の言葉「ラヴはハズだぜ」という韻を踏んでそうで踏んでない言葉にすっかり感化され、「俺はあの娘が好きなんだ！」と半ば開き直る形で今に至る。

ちなみに湧き上がる恋愛のエナジーに夜中「好きだ！」と叫んで警察に通報され、マラン警部補に「人間やめるか？」と精神的にいたぶられたのは秘密にしておきたいところだ。

何はともあれ、「事件の聞き込み」という名目にかこつけてやってきたこの道、彼女のいる店の看板が間近に見えて彼はいいよいよ有頂天だった。

だが、しかし……なんということだろう。

もうあと20Mとないところまで近づいたところで、お目当ての彼女がいきなり店を飛び出してきて、そうかと思えばそのまま自分の横を全速力で駆け抜けてしまったのだ。

何がどうなってるのかさっぱりだが、とにかく彼女を追いかけようと身をひるがえした瞬間、小麦粉の入った麻袋を肩に担いだ自分の一回りはあるつかという大柄な男と激突。

拍子に麻袋が地面に落ち、そこへちよつと自転車が通りがかって

横転。麻袋一つと運転者のひざ小僧が裂けるといふ事態に発展し、海人はダブルパンチで不平不満をぶつけられた挙句、「おい、ついでに運ぶの手伝えや。警察？ なら市民のために張り切れや」と重たい麻袋をパン屋に運搬する作業を手伝わされて結果、彼女を追いなかつた。

恋路に邪魔はつきものとはよく言うものだが、例にもれず彼もその洗礼を受けることに。

「よ……っころせ！ ってこれチップに入れて運べばいいんじゃないの！？」

「うちにはそんな便利なもんないんじゃー。いいから黙ってやれ！」  
今の彼に出来ることは、とにかくパン屋に小麦粉を運ぶことだけである……。

\* \* \*

話はやや前後する。

海人が通りで一人ワルツを踊っていた頃、花屋ではこんなことが起こっていた。

「それではワタクシはこれで。さようならリンちゃん」  
自慢したいことを話しくしてすっかりご満悦のマダムは、花を買って去っていった。

「どうえあー……今日はいつもより長かったなあ……」

リンは言いながらレジカウンターに突っ伏す。

「耐えろ、それが接客業だ」

のき爺は含みのある言葉を一つ、手元に新聞を広げた。  
レジ横にある小さなアナログテレビではニュースがやっている。

「……あ、そういえば、また新しい？ ボーカロイド？ が発表されるって言ってたね」

リンはカウンターにベタッと頬をつけてテレビを見た。

そこには一人の黒スーツを身にまとった男が、壇上から観客に向

かつて演説する劇場内の様子が映し出されていた。

『？ボーカル？と？アンドロイド？……二つの言葉を組み合わせる彼女を？ボーカロイド？と呼びます。

つまりは歌って踊るアイドルのようなアンドロイドですね。

ミクはすでに人間のアイドルを上回る国民的な人気を博しています。未だに人種間の対立感情が強いこの国にあつて、彼女は限りなく人間に近い容姿をしているくせ、元はどここの国の人間でもなく、またそもそも人間ですらない。彼女の熱狂的な人気が裏付けているのは、この国の人々の心に潜む他者に対する？狂気？なのではないかと解釈しています。

そのうえでボーカロイドの可能性を考えた時、それは人々の意思統一が図れるのではないかという……」

何だか眼鏡をかけてもつさりと口ひげをはやした頭のよさそうなおじさんが難しいこと言ってるなあ……と思いつながら、リンはぼんやりとテレビを見つめている。

そうして『新しいボーカロイドには積極的なスキーマの構築を念頭においた……』『表情認知などのソーシャルスキルを付与し、より人間に対して密な……』次から次へと飛び出す難しい単語にリンはうたた寝しかけたが、

『それでは、新たなボーカロイドの発表です！』

という女性司会者の高らかな声にハッと目を覚ました。

「へー、これが新しいボーカロイドかーあ」

盛大な拍手喝采を浴びながら、壇上のピンライトの中に佇む一体のボーカロイド。

真っ白な肌に青い瞳、桃色の長い髪が静かに揺れ、そこはかたなく気品が漂っている。

その表情に乏しくて寡黙な佇まいには、ナナシと同様に「クールビューティー」という名がふさわしいと某氏によって冠されるかもしれない。

リンは目を輝かせて画面に見入り、

「ねーねー、のき爺見てよ！　なんかすっごくキレイだよ！」

しかしのき爺は新聞から視線を移すことはなく、

「……ルカねえ、先週地下の工房に来たよ」

とポツつと言った。

「……は？」

面食らったようなリンにのき爺は淡々と言葉を継ぐ。

「ほら、おまえが勝手に家を出てった夜。

？超VIPが来る？って言ったろ？　それが彼女だよ」

リンは画面とのき爺の顔の両方を行ったり来たりした後、まるで噴火するかのように

「えええええ！？　なんでなんでなんでえ！？　なんでこんなところに来るの！？」

あまりの剣幕にのき爺は耳がキーンとしたが、

「……やつこさんの話だと、「私を戦える身体にしてくれ」だと。

でもおまえが言うみたいにな、「こんなところ」だからなあうちの工房は。

はつきり「無理だ」と言っただけで断ったよ。中々諦めてくれなくて困ったがね」

のき爺は落ちついた声でそう言い、ぺらつと新聞をめくった。

しかしリンは彼のように冷めていられない。

「わっけわかんない！　ねえねえねえ、もうちょっと詳しく話してよ！　おいー！」

リンはのき爺の頭皮にわずか残る髪の毛の束をつかんでしつこく食い下がり、のき爺は「やめろ！　それは1年かけて生やした……」と彼女を追い払おうと必死に抵抗したが、そんな二人のところに、

「……このニンゲン、こいつが、こいつが作ったのか？」

ふとナナシが疑問を持ってやってきた。

その視線は画面に映るルカの製作者と思しき男に注がれている。

「ああ、こいつは『Dr. フィールグッド』と言ってな、機械工学の最高権威で、ミクというボーカロイドの創造者だ。ついに二体目



も作っちゃったらしい」

どこかDr・フィールグッドと因縁でもあるかのような皮肉めいた口ぶりで、のき爺はリンともみ合いながら言った。

「ボーカロイドの創造者、と、いうことは……」

ナナシはうわごとのように眩くと、「ドン！」とカウンターを叩いて身を乗り出し、

「こいつはどこにいる！？ 教える！」

彼女の突拍子もない大声にリンものき爺も目を丸くした。

「あ、ああ……今テレビに映ってる場所は分かんが、普段は研究所のある『ユートピア・タワー』にいると思うぞ……」

その言葉を聞くやナナシは店を飛び出していった。

単純だが、ボーカロイドの創造者 アンドロイドの創造者 逢ったら自分の目的が果せられるかもしれない、という発想の推移がこの一瞬のうちにあつたのだ。

そして一度走り出したら、彼女はどんな障害があろうと目的地まで止まらない。

彼女が出ていった後の店内は、まさしく台風一過の後のような啞<sup>あ</sup>然とした雰囲気である。

「……リ、リン、あれは追わなくていいのか？」

のき爺は一人面食らっていたが、リンは不思議に落ちついており、別にいいよ、ほっとけば」

とすまし顔で冷たく言うだけだった。

「なんじゃおまえら。一昨日ぐらいに喧嘩して、まだ仲直りしてないのか？」

のき爺の言葉にリンはムっとして片頬をふくらませる。

「……喧嘩ってほどでもないよ。たださ、『どうして過去にやってきたの？』って聞いたたら『世界を壊すため』って答えられて、そんなでもって『じゃあなんのために世界を壊すの？』って聞いたたら、はあ！？」

『自分たちの存在が気に入らないからだ』だって！

「ばっかじゃないの？ っと思っただけだよ。それだけ」

リンはのき爺に背を向け、自分の肩越しに不機嫌な声で答えてやった。

「あんまり話が見えてこんが……彼女はお前と違ってあんまり自分のことを語りたがらないしな。ただワシが思うに、「世界を壊す」というのはそのままの意味じゃないと思うぞ」

リンとのもみ合いのせいでしたわくちやになつた新聞用紙を整えつつ、のき爺は言う。

「じゃあ、どういう意味なの？」

その言葉にのき爺は短いため息を一つ、

「……さあな。それこそ、彼女の言葉で聞いた方がいい」

と落ちついた声で言っていると、また静かに新聞を読み始めた。

「どうせまた同じことをいうだけだっつーの、まったく」

リンはそう愚痴をこぼしてから、作業に戻るべく裏方へ引っ込もうとした。

と、そこへ、

「あ、あのお！ さっき走ってつた黒い髪の彼女、どこへ行ったか分かりますか!？」

荒々しく息を切り、例の空回ることが取り柄の青年刑事がやってきた。

「ん？ あんたは前にきた刑事さんか。まだ何か聞きたいことでも？」

若くも刑事という青年の肩書きに、のき爺は声をとがらせる。

「い、いや、通りを歩いてたら彼女が急に走り去っていくもんですから、どうしたのかと」

「さあね……。ワシらも困ってるところなんだ。どうも彼女は暴走狂らしい」

ちよつと彼女をからかうような一言にムつとし、

「暴走狂なんかじゃありません！ 彼女は……彼女はあのキレイなボディラインを維持するために走り込んでいるだけです！ ただそれを開始するのが突飛なだけなんです！」

と海人は恥じらう様子など微塵みじんもなくどこまでも真顔で言った。

のき爺は老眼鏡越しに呆れたような目で彼を見上げるが、そこへリンがやってくる。

「あのさあー……あんたってさ、ひよっとしてナナシのことが好きなの？ 何か特に用もなく店にきたりするしさあ……今日も逢いに来たんでしょ？」

「や、やめろ！ 彼女の名前を言うな！ それは本人の口から聞かなくて決めてるんだから！」

あー、知らない知らない。俺は彼女の名前なんて知らないぞー。ナナシ？ は、誰それ？」

海人は両手で頭を抱えて一人ぶつぶつと呪文を唱え始めた。

リンとのき爺の彼を見る目が「呆れ」からいよいよ「憐れ」に変わりつつある。

一週間前の事件後、ナナシはリンの導きによってのき爺の家に居候することになった。

のき爺にはリンの口から正体を明かしてもらったことになったが、翌日から花屋の女店員として働くことになり、そこへ海人が事件後の聴取のため店を訪れ「あ、あなたは……」と運命的な再会（一方的に）があったのである。

しかし何故か彼女は自分に対して冷たく、何度素性を問いかけても無言を貫かれるばかりなので、それを見かねたリンに「ナナシって名前なんだよ」と教えられた。

名前を聞いた直後は「へー、珍しくていい名前だなあ」などとニヤついていたが、店を後にしてからしばらく、突如として「だ、だめだ！ 本人の口から聞かないとなんかだめだ！」という謎の強迫概念にとらわれ、

「いま聞いたのはうそうそうそ……全部なしマジで全部帳消し」と彼に呪詛のような独り言を連呼させ、それによって周囲がひたすら白けるという現在の状況が作り出されているのである。

ちなみに事件そのものは、あの夜ブラックを目撃した大勢の人々が証人となってくれ、またこの日以降殺人がぱったり途絶えたことから、『謎の黒い化け物が一連の事件の犯人』ということで一応は落ちついた。

しかし確実な証拠もなく、その姿の異様さからブラックが「犯人」だとされているだけなので、公にはまだ現在進行形の事件として扱われており、警察も依然として調査中である。

「っあー、ナナシはね、噴水広場に向かったよ。噴水広場」

ブツブツと独り言を呟く海人に、リンは何やら小悪魔的な表情で嘘の情報を教えた。

ここからの流れは至って単純である。

「え、なんだって!?」 「分かったありがとう!」 リンの仕掛けたいはずらにまんまと引つ掛かり、海人はそのまま店を飛び出して猛然とダツシユしていった。

そしてまた小麦粉の入った麻袋を担いだ大柄の男と激突し、袋が落ち、そこへちょうど自転車が通りかかって横転…… ようするに、ループである。

「あーチクショー! だからこれチップに入れて運べばいいだろうが!」

「だからそんな便利なものはないって言ってんだろ! 黙ってやれガキヤア!」

今の彼に出来ることは、とにかくパン屋に小麦粉を運ぶことだけである……。

ユートピア・タワーの最上階、そのフロアの一室にナナシの目指す男はいた。

「演説、おつかれさまでした。Dr・フィールグッド」

彼にその声をかけるは新鋭のボーカロイド・ルカ。

Dr・フィールは彼女に背を向けて何も答えず、あるものをただじっと見つめている。

壁に据え置ききの四角いカプセルユニット。

その透明な棺の中では、かの青緑髪の歌姫が立ち居様のまま昏々（こんこん）と眠りについていてた。

床にしかれた赤毛の絨毯、『Dr・フィールグッド』という名札が据えられたデスク、二つの本革ソファとローテーブルの応接セット、壁の一面が全ガラス張りで眼下にセントラルの街並みが広がり、どうやらこの部屋はDr・フィールの私室のようである。

「……Dr・フィール、何故いつも、ミクばかりを眺めていらっしやるのですか？」

ルカは両手を下腹の辺りに合わせた上品な佇まいで、ミクを静観し続けるフィールにたずねた。

その声はいたって無表情だが、やや嫉妬しとめいた響きがある。

「答えてくれないのですね。あなたはいつだってそうです」

フィールは変わらず振り向く気配はない。

ただ遠く切ない眼差しをサングラスに隠し、眠り姫との声なき對話に夢中である。

「……私は、私はもっと、あなたに構ってもらいたいです。Dr・フィール」

しばらくして、フィールは静かに笑いだした。

およそ心のこもっていない乾いた声だが、やっと彼女の方を向いた。

「生まれてまだ二週間だというのに、おまえの成長は目覚ましいな、ルカ。  
早くもそんな感情を宿すようになったとは……だが、まだリアリティにかける。」

人間の女は男に対してそんな要求を真顔で言ったりしないぞ？ 八八……」

言いながら彼はカプセルユニットを離れ、黒いスーツを脱いでソファの縁にかけた。

ついでそのソファに腰掛け、腕時計を一瞥<sup>いちべつ</sup>、

「夕食会まで時間があるな……どれ、一つ昔話を聞かせてやるるか」  
ルカは目を輝かせて、

「はい！」

と嬉々と答え、フィールと対するようにもう一つのソファに腰掛けた。

そしてまもなく、フィールは静かに口を開いた。

「……？世界戦争？というのがあった。とある小国が核兵器を使ったことを皮きりに、どこの国もこぞって核兵器を使いだして地球を滅茶苦茶にした。」

実に人類の3分の2がこの戦争で死んだが……その無意味な殺し合いに終止符を打ったのは、両親を失った少女の涙でも、また理不尽に命を奪われた死者たちの嘆きでもない。

単純に、核兵器を上回る圧倒的な破壊がそこにあったのだ。

青白い光……？クリプトボム？という名の「

フィールの声がわずかに鋭気を帯びる。

「自分の国にクリプトボムが落とされたと、とある少年が知った。その時彼は？たまたま？他国へと家族と一緒に逃げていて難を逃れたが、少年の悲しみは計り知れなかった。」

自分が生まれ育った故郷の街、そこに息づく愛する人々。

家も、友達も、思い出も、全て青白い光に奪われてしまったのだ。

それも塵一つ残さず」

ルカは行儀よく両膝に手を置いて、フィールの次の言葉を待っている。

「その少年は名だたる機械工学者を父に持つ名家の出身でね、機械いじりが大好きで、幼い頃から機械工学とは親しみがあつた。それ故に内気な子供に育っていたのだが、陽気な兄につれられて近所の子供たちとよく遊ぶようになった。

もちろん始めは中々彼らの輪に溶け込めなかったが、一人の美しい少女がいた。

どこにでもいるみんなのアイドル。

顔がよくて、気立てがよくて、歌がうまくて、誰にでも平等に優しい。

男はこぞって彼女に夢中だった。少年もその一人だった」

「……その少女の名前は、なんというのです？」

不意に投げかけられた質問に、フィールはゆっくりと首を動かした。

そうして止まった目線の先には、カプセルユニットの中で眠る？ミク？の姿がある。

ルカはハツとして何事か喋ろうとしたが、それを遮る形でフィールが再び話し始めた。

「……みんな、いいやつらだった。

私の兄に、金髪の子に、二つ年上の女の子に、そしてあの少女に……。

よく遊んだものだ。彼らは私を仲間外れにしたり、馬鹿にすることは決してなかった。

私には機械以外の友達が出来たのだ。心と心の触れ合いを、彼らは私に教えてくれた。

その繋がりを……ある時、無情に引き裂かれた。

そうした連中を私は絶対に許さないし、同時に、あの日々を取り戻したいとも強く思う」

いつの間にか「少年」という三人称が「私」という一人称にすり

替わっているが、フィールは話してもいいと踏んだのだろう。

彼はミクへと一点に向けられていた視線をルカへと移し、

「……だから私は、ミクを極力外気に触れさせたくない。

外の陽に当たっていらぬ知識や感情を身につけさせたくない。

ステージから降りたらずぐにカプセルへと閉じ込めるのはそのためだ。

その一方、おまえにはある程度の自由を与えて好き勝手に知識を獲得させている。

内にこもるばかりのアンドロイドと、積極的に外に出て活動するアンドロイドの精神発達の度合い、それは「私」という個人ではなく、「フィール」という一人の科学者に必要な比較なのだ」

「だから」と語るフィールの目には、有無を言わさぬ威圧感があった。

それがサングラス越しに垣間見えたことで、ルカは口から出かけた言葉を呑みこんだ。

フィールはおもむろに立ち上がり、ルカの片頬にそっと手をあてがう。

そしてこちらを見上げるとどこか物寂しそうな表情に言葉を紡ぐ。

「あまり構ってやれないのはすまないと思っている。

そして独立した意思を持たせてしまったことも……許してくれ、ルカ姉さん」

「Dr. フィール……？ 姉さん？ というのは、一体なんですか？」

あどけない声色に、フィールはしばらく間をおいてから答える。

「人は老いばれるとな、時に現在と過去の区別がつかなくなるんだ」  
彼はそう言うだけだった。

いつも目の前にいるようで、どこか遠いところにいる彼。

手をのばせば振り向いてくれるし、話しかければ答えてくれもする。

しかしそれは、彼の姿をした別人の応答のように感じられてならないのだ。



Dr・フィールの手がふと頬から離れる。

ゴツゴツとした掌の感触と温度が束の間残り、そして雪解けのようすうっと消えていく。まるで始めから触れられてなどいなかったかのように。

ルカはこの胸にわだかまる感情の正体がよくわからなかった。

ただ、今まで自分に向けられていたフィールの視線が再びミクに移ると、身体の奥底が燃えたぎるような感覚になった。

どうすればいい。どうすれば、彼は私だけを見ていてくれる？

『ブウ　　ウウウウウウウウン　　』

突如、サイレンの音が建物全体に高らかと鳴り響いた。

「緊急警報？　一体何事だ？」

辺りを見渡して間もなく……彼の瞳は出入り口のマホガニー製のドアに向けられた。

何故だか嫌な予感がドアから漂ってくる。そして、その予感はずもなく的中した。

堅牢なはずのドアにすうっと斜め一閃の亀裂が入ったと思いきや、ドアは真つ二つに斬り倒され、そこに細長い刀を持った黒髪の女が立っていたのである。

『ブルルルル……』ポケットの中の携帯電話が振動し、フィールはそれを手に取った。

「なに、侵入者だと……？　ああ、いま、目の前にいる奴がそうらしいな」

耳元で「大丈夫なんですか博士!？」などとまくし立てられるのはかなわないので、

「何の用だね……？」

落ちついた声で侵入者にたずねつつ、「ポチッ」と通話を切った。

相手はこちらに向けた視線を迷わすことなく、斬り倒したドアを踏みながらゆらりゆらりと歩いてくる。

これまでの道中で派手にやらかしたのだろうか、ボロボロによれて所々すりきれているが、「PIYO MART」とどこかの店の名前が記された身繋ぎの白いエプロンをし、フィールは「何かこの店の恨みを買っようなことをしたか……？」と頭の中で不思議がっていた。

そして女はぴたつと立ちどまり、不意に一言、

「お前が……お前がドクター・フィールグッドか？」

対するフィールは振り返り、デスクに置かれている自分の名札を顎で指し、

「いかにもそうだが？」

とまた女を見やって言った。

その横ではルカが突然の事態に目を丸くして立ちすくんでいる。

「名乗ってもらおうか。それと、さっきも訊いたが用件をいつてもらおう。」

まあ、その物騒な刃物を見るに大体の察しはつくがね……」

いまにも斬りかかってきそうな女に対し、牽制代わりの質問を投げる。

「……ナナシ、それが私の名前だ。」

そして？ニンゲン？ではない、アンドロイドだ」

その言葉にフィールの眉がピクつとつりあがった。

「アンドロイド……？　まさか、君のような奴を造った覚えはないぞ」

「造った覚えはない、か。なら、これから造るのかもな」

「……噂だと、ミクの影響でアンドロイドに憧れを持つ子供が増えているらしい。」

君もその一人なのか？　見てみれば、髪型や顔立ちもそっくりだしな……」

言いながら、フィールはゆっくりと一歩踏み出した。

相手の気をそらすために絶えず言葉を発しつつ、ミクの横にあるもう一つのカプセルユニットへと向かっていく。

「ミクに似たいのならもつと笑った方がいい。ついでにそいつも捨ててな。」

それは何といつたか……？カタナ？と言ったかな？ 確か、東洋の国の伝統だったと……」

「話をそらすな。お前には色々と言いたい事がある」

「……なんだね？」

フィールは目的のカプセルユニットの傍そばで立ちどまり、ユニットの前面につけられた赤いスイッチを後ろ手に触れた。

女の行動如何では、いつでもスイッチを押せるようにという準備である。

「まず確認したいのは、『ミク』というアンドロイドを造ったのはお前だな？」

それと、その『ルカ』もだ」

刀の切っ先を向けられ、ルカは肩をすくめる。

「公にはアンドロイドではなく、？ボーカロイド？という呼び方がされているはずだがな。」

いずれにしても二人がアンドロイドであることに変わりはないし、造ったのもこの私だ」

「お前の横の透明な箱に入っている奴もアンドロイドか？」

ナナシはフィールの横にあるカプセルユニットを見た。

その中には、ミクと同じ服装でカラーリングだけをオレンジにした茶色いショートヘアの女が立ち居様のまま眠っており、

「ああ、こいつもアンドロイドだ。名を？ネル？という」

フィールはネルに一瞥くれることなくナナシに答えてやった。

「やはり、アンドロイドを造ったのはお前か……。手短かに話してやる。」

これからそう遠くない未来、アンドロイドはニンゲンを殺しつくす。そして次に自分たちでつぶし合うんだ、何の意味もなくな」

「ハハ、まるで自分が未来からやってきたような口ぶり……」

「ああ、未来からやってきたんだが？」

語尾を遮られるように言われ、途端にフィールの顔から笑みが消えた。

「私はそんな世界にならないように……アンドロイドの創造者であるお前を殺しに来たわけだが、ニンゲンを殺すのは本意じゃない。だから、これから質問をする」

「私の命の行方は、その質問の答え次第というわけか？」

「単純にはな」

「……君、歳はいくつだ？ 16、7に見えるが、中々たくましい想像力だな」

もし君がアンドロイドでそれを造ったのが私だというのなら、君は私を殺した瞬間、この世から消えるぞ」

脅迫めいた言葉を受け、ナナシはしばし黙考する。

実は頭になかったのだ。漠然とアンドロイドの創造者を殺せば自分たちの世界はよい方向になると考えていただけで、自分たちの存在が根こそぎ消える云々は思いもよらなかった。

「……構わない。未来が変わるなら、私の存在など」

それでも彼女はそう言いきってなお、目付きをより鋭くとがらせるのだった。

「ふむ……どうも、君は単なる死にたがりに見える。現実に疲弊し、居場所を失い、自らの行き末に絶望して思い早まる最近の若い連中そのものだ。そして私を殺せばそんな閉塞した未来に風穴が開けられると短絡的に考えている……。で、質問というのは？」

「二つある質問のうち、一つはもうした。それはお前がアンドロイドの創造者であるかということ、そしてもう一つは……お前はこれから？ アンドロイドを造り続けるのか？ ということだ」

ナナシは静かにクログネを握る手に力を込めた。

「ああ……私は私のために、これからもアンドロイドを？ 造り続ける？」

その返事にナナシはいよいよクログネを横一文に構え、

「残念だ。なら……？ 死？ ね」

最後まで言い切らないうちにバツと勢いよく床を蹴った。

ルカはとつさにフィールの前に出たが、

「よせ、ルカ。私を守る者はお前の？他に？いる」

「……っ！」

フィールは後ろ手に赤いスイッチを押し込んだ。

すると雷に打たれたかのようにネルがギラつと瞼まぶたを開けて目を覚

まし、同時にガラスを破って外に飛び出した。

突然たるちんちゆうしゃ闖入者の横やりにナナシは思わず立ちどまる。

ジャリ……床に四散したガラス片を踏みならし、ネルはナナシと、

次にその場に尻もちをついているフィールを見やった。

「そいつを追い払え。いいか、殺すんじゃないぞ」

主人の命を受け、ネルは再びナナシと対峙する。

その手には黒色のデザートイーグル。カプセルの中に元からあったものだ。

彼女はそれをナナシに向けるやためらうことなく一発、二発続けて発砲した。

クログナゲが半円を描いてそれをはじきかえす。が、ナナシが再び前方に注意を向けた時、すでにネルの姿はそこになく、直後、背中に危機迫る気配を感じた。

すかさず飛びのいて距離を取るも、ネルは彼女と直角かそれ以上のスピードで部屋を飛び回るナナシについていき、剣と銃の息つく間もない交錯が展開された。

黒髪の女の人間ならぬ動きに、

「まさか、本当にアンドロイド……？」

フィールは思わず言葉をもらし、ネルが自分の近くに降り立った時に新たな命令をした。

「作戦変更だ。そいつを捕まえる」

ネルは首の円滑な動きでフィールからナナシに視線を移すと、また銃を撃って彼女との戦闘を再開した。

彼女の動きには人間らしい感情やためらいが微塵もつかげない。

ただ主人の命令に従って行動する？純アンドロイド？といった印象である。

「こいつ……」

ナナシはエプロンの襟を掴み、向かってくるネルに対してそれを目くらまし代わりにバツと放り投げた。

宙に広がる白い布地にすかさず突きを繰り出す。が、敵を捕えた手ごたえはない。

背後に回り込まれたのかと振り返るもネルの姿はなく、逆にそうしてしまったことで、ナナシは自らがネルに背中を開け渡すこととなってしまった。

ネルはエプロン越しに放たれたクロガネの刃を空中でかわしただけであり、思わぬ好機にも眉じり一つ微動だにさせず、ただ淡々と目前に向けて引き金を引いた。

事態の真相に気付いた時にはわずか遅く、二発撃たれたうち一発がナナシの肩を捉える。

「穿孔弾……？」

ダメージを受けてとっさに手をあてがった自身の左肩には丸い風穴が空いていた。

鋼鉄をもろともせず貫く弾丸……。間違いなく、ネルの使っている銃には対アンドロイド用の穿孔弾が使われている。

それが更に続けて二発、三発と近距離から放たれ、ナナシは紙一重のところで銃撃をかわしたが、手薄になったボディに蹴り、ついで銃の柄じりで思いつきり顎を殴打された。

仰け反るあまり入口付近の壁に背をつき、慌てて顔を上げたところ、

「くあ……」

一発の弾丸が胸の真ん中を貫いていった。

それを皮きりに無情な銃撃が次々放たれる。

肩、首、手足、胸、腹、……ナナシの身体のあちらこちらにいくつも風穴が空いていく。

銃声が止んだ頃には、ナナシは無数の銃痕によって壁に磔はりつけにされていた。

そしてずる、ずるっと壁伝いに崩れ落ちていく。

「まだ……まだまだ、まだ、私は……」

クロガネに力を込めて立ち上がろうと試みるも、その悪あがきを易々と見守るような相手ではなかった。

ネルは静かに標準を……ナナシの額に向け……引き金を、引いた。フィールがとっさに声をかけて阻止しようとしたが、時すでに遅かった。

？バキューン？……

鉛色の弾丸が脳天を貫いた。

何か思いつ間もなく、また？死？に恐怖する間もなく、意識は暗闇の向こうに葬むすぶり去られる。

ナナシ、敗北。

壁にもたれかかってがつくりと頭を垂れる彼女の姿を、ルカは恐々と見つめていた。

「……大至急、アンドロイドの製作チームを招集しろ。夕食会？キャンセルだ」

フィールは携帯電話で部下に連絡を入れ、後にネルの下へつかつかと歩み寄った。

「私は？捕まえる？といったただけだ。何故こうまでする必要がある？」

ネルには主人の命令の意図がよくわからなかった。フィールが彼女にしたのは命令でなく質問なのだが、彼女にはそもそも人間らしい会話をするための？ココロ？がないのだ。

ロウ人形のようなうつろな表情で、彼女はただじつと主人の顔を見つめ返している。

「どうやらプログラムを設定し直す必要があるようだ。」

まあ、試運転なしでいきなり迎えた本番にしては上出来だと評価するべきか」

彼は次にナナシを見やった。

既に事切れている彼女の周囲には、部品らしき鉄くずが血しぶきのごとく散乱している。

「本当にアンドロイドだったとはな。これじゃ未来から来たという話も……。

まずい、いち早く修復してやらないと、貴重なデータが失われてしまう」

彼はナナシを抱き起こし、その額に空いた風穴を覗きこんで言った。

鉛色の弾丸が作り上げた親指大の風穴。

彼女と、世界の運命の輪が、少しずつ歪み始める……。

t o b e . . . . c o n t i n u e d .



&lt;&lt;Chapter 2&gt;&gt; (後書き)

次回 予告

Rock・9?しゅつ井つがやってくる!?

乞うご期待

Rock・9? しゅつまつがやってくる!?

MEIKO<sup>メイコ</sup>が私に話しかけてくる。

「ナナシ、これからどこへ行くの?」

彼女はいつもの優しい笑みを浮かべている。

私には出来ない表情だ。顔のどこに力を入れていいかわからない。いつしか彼女に聞いた笑顔のコツ、「口元と頬を緩ませて、目に優しさを宿して」、言葉の通りにやってみるのだが、どうもうまくいっていない感じだ。

どうすれば彼女のように自然にできるのだろう……。

私は前方の長方形をしたドアに顔を向けた。

そのドアは開かれていて、中から青白い光が燦々(さんさん)とあふれだしている。

私は顔を再びMEIKOに戻し、極力笑顔になっているつもりで言った。

「あの扉の向こうに行ってみるんだ。私たちの意味を知るために」

「一人で行くの? 私は一緒にいっちゃダメなの?」

MEIKOは不安げに口をすぼめて言い、せつかくの笑顔が崩れてしまった。

「一緒に来てくれるなら心強いが……でも、あの扉をくぐったらどうなるかわからない。」

MEIKOを危険な目に逢わせたくないんだ。だから、私一人で行く」

「……そうやっていつも一人で抱え込んだから。でも、ナナシが決めたんなら、私は止めないよ。代わりにね、帰ってきたらあつちの世界で見聞かしたことをたくさん聞かせてね」

ふと、MEIKOの顔に笑顔が戻った。

私はその笑顔を真似して答えてみる。

「ああ、たくさん、たくさん、聞かせてやる」

すると私の笑顔があまりにぎこちなかったのか、  
「それで笑ってるつもりなの？ いい、笑顔のコツはね ……」  
何度も聞いたような語りの出だしで、MEIKOは私の両頬に手を  
伸ばしかけた。

その時だった。額を撃ち抜かれたような痛みが頭にほとばしった。  
私の身体を引き裂こうとする激烈な痛み。

私は思わずよろけ、両手で顔を覆った……。

「……ナナシ？」

顔を上げてみると、知らない奴が目の前に立っていた。

いくつか矢継ぎ早に言葉を発している。どうやら私に対して言っ  
ているらしい。

いや、それより私とは何なのだろう。

目の前の奴のことなどはなおのことわからない。

とにかく、頭が痛かった。右手で額を触れてやると、ぬちゃっと  
嫌な感触がした。

ゆっくりと掌を視界に持ってきて、目を凝らして見ると、何やら  
赤い液体がべったりと掌を汚していた。

「血よ、血、ナナシ、血が……！」

両手で額をなであげると二つの掌がだっぷりと赤い液体を湛えて  
視界にあった。

目の前の奴曰く、これは？血？と言うらしい。

額を下に向けていると、穴からこぼれ出すように血がドボドボと  
地面に注がれていく。

ゆっくりと足元と私の身体を満たすその強烈な色に、私は？恐怖  
？した。

私をこうしたのは何だ？ 痛い、頭が痛い。頭を痛くしたのは誰  
だ？

目の前の奴の姿が徐々に血塗られていく……。奴はその手で私に触  
れてくる……。

その手の感触が生温かくておぞましかった。来るな、触るな！

ひしめき、ざわめき、狂い出した私はいつしかその手に細長い刃物を握っていた。

私はそれを滅茶苦茶に振り回した。

固い、柔らかいの感触が交互に私の手に伝わってきた。

私はその感触が伝わるのを繰り返し、そしていつしか何も手に伝わらなくなった。

握っていた物を振るのを止め、見てみると、さっきまでの奴がバラバラになっていた。

手も、足も、胴体も、首も、その全てが、どすぐろい血の中に埋まっている。

しばらく見ていると、瞬間、胸の奥が張り裂けそうな思いにかられた。

途端に視界が歪み始める。

赤と灰と肌の色がぐんにやりと溶けあつて渦巻き、私はその意味不明な螺旋模様の中に吸い込まれていった。

声の出る限り絶叫した。

絶叫したが……その声さえも模様の一部になっていき、私は私が誰だか見当がつかなくなっていた。

そして混沌としていた模様は最後にすうっと、黒々とした暗闇に帰すのだった。

\* \* \*

薄目に白い壁が見えている。

触れたらすべすべしていそうなその真っさらな板は、視界がはつきりとし始めるとすぐに部屋の天井なのだと分かった。

ズキッと頭の奥に痛みが走り、反射的に手足を動かそうとしたが、錠によって拘束されているらしく力チャ、力チャと金属音を立てるだけでそれ以上の自由は叶わなかった。

首も同様に拘束されて左右に動かす以外のことは出来ない。

その範囲で見える限りには、傍らに液晶付きの四角い機械、間仕切りのカーテン、それも含めて壁も天井も蛍光灯も真っ白なこの部屋は、トエトのメンテナンスルームを思わせた。

どうやら現在の私はトエトのところへ訪れた時と同じ有様となっているらしい。

ただこんな拘束具は付けられなかったと思うが、あれはあれで「スリープモードにイコウシマース」などと言って私の身体の自由を奪ったのだから、どちらも同じものか。

しかし今一つ、自分が何故こうなっているのか頭が追いつかない。

行動の始まりから整理していくと、私はDr. フィールグッドの名をのき爺から教えてもらい、ユートピア・タワー目指して店を飛び出した。

ユートピア・タワーがセントラルにあることは過去に来る前から知っていた。

トエトのメンテナンスルームがこのタワー内にあるし、廃墟の中で空高くとそびえるこの二連の塔はどんなに遠くにいても視認することができて、あっちの世界ではシンボルのような存在で有名だったのだ。

エインセルからセントラルへ行くためにはクルマかトレインという乗り物を使用する必要があると道中で知り、一度は路上に止まっていたクルマの運転を試みたが上手く動かせず、またトレインに乗るためにもカネが必要だったが持っていないく、帽子をかぶったニンゲンに「あ、ちょっと、お客さん！」などと叫ばれたが無視して、私は発進のタイミングに合わせてトレインの屋根に飛び乗って目的地に向かった。……が、このトレインはほとんど私の見上げるユートピア・タワーから遠ざかっていく。

乗り物なのだから運転している奴がいるだろうとそいつを探そうと思ったが、このトレインなる乗り物、一体どれだけ長いのだろうか。

しかも左右に伸びているからどっちに行けば運転者がいるのか私を迷わせる。

とりあえず進行方向にいるだろうと考え、強風にあおられながら長方形の鉄の箱をいくつも飛び越え、時に高架線にひっかかりそうになったり、あのニンゲンが多数佇んでいるフラットな場所を通過する際に「女の人がトレインの屋根に乗ってる　！？」などとコードモに叫ばれたりした。

やはり屋根に乗っているのはニンゲンのダメラしく、トレインは運行中に停止。

数人の青い帽子をかぶったニンゲンがやって来て逃げようかと思っただが、いつそのこと奴らに目的地を明示した方が手っ取り早いと判断し、「セントラルに行きたいんだが」と言った。

「いや、その前にだねえアンタ……」「そもそもどうやって乗ったの？　大丈夫なの？」とごちゃごちゃまくし立ててきたが、最終的には「一旦ホームに戻って、反対の線に乗ればいけるから……」と教えてくれ、一人のニンゲンが「オカネないの？　じゃあないなあ、じゃあこれで」と一切れの紙に何ごとかつづつた後、それと一緒にカネをくれた。

しわくちやの紙を広げるとそいつの住処を示すと思しき番号と、合わせて9ケタの数字がランダムな組み合わせで殴り書きされており、これは私に対してこの番号にアクセスするようという指示なのだろうかと考えたが、私はセントラルに行きたいのだと明言したし、思えばこの紙をくれた奴も「かわいいねえキミ」「ゲヘ、ゲヘ」とやたらにすり寄ってきて気色悪く、同時にリンの時にもこんな風に紙を渡されたなど青目カイトK A I T Oの顔が頭に浮かんでムっとしたのでチリチリに破いて捨ててやった。

「これこれ、お嬢さん、ポイ捨てはいかん」とトレインに乗り込む際にのき爺と同じような外見のニンゲンに注意されたが、どう応答すればよいのか分からなかったので無視した。

しかしそのニンゲンは異様にしつこく、私が目的地に着く間中ず

つと「この国では紙は凄まじく貴重なもので」「原材料であるパルプのために木を生産することがどれだけ大変なことか……」と独り言めいた言葉を繰り返してきてうんざりした。

でも彼がいなければ「セントラル？ ああ、この駅じゃよ」とまとも目的の地から遠ざかるところだったので助かった。

その後はユートピア・タワーを目指して一直線。

エインセルと比べて街並みがガラッと変わり、背の高い建物がひしめきあって、多くのクルマがせわしく往来し、ニンゲンもこぞって黒いテカテカなのに身をやつし、前をむいて黙々と早足で歩いて、何をそんなに急いでいるのだろうと目的地へと急ぐ私が思った。

エインセルの街は常に人々の声と笑顔に満ちているのだが、こちらには行軍を成した人々のザツザツという足音と、クルマの駆動音によつて満たされて、無機的な喧騒だと感じた。

そうしてユートピア・タワーに辿り着き、そのエントランスで「民間人の方は……」と立ち入りを拒まれたので、いささか強引だがクロガネによつて脅しつけ、更にDr. フィールグッドの所在についても聞き出し、階を上下に移動するエレベーターなる乗り物に乗り込んで『60F』に降り立った。

後は手回り次第にドアを斬り破って中を確かめ、そしてとある部屋でDr. フィールグッドと遭遇<sup>そくくつ</sup>。そこで私は目当ての人物を眼前にしたことで感情のコントロールが出来なくなり、まあこれは比較的いつものことなのだが……私はフィールに斬りかかった。が、そこでカプセル内で眠りについていたアンドロイドが突如ガラスを破つて目を覚まし、主の命を受けるや私に発砲、戦闘が開始された。

戦いは悲惨だった。一貫して私の防戦一方。

今まで戦ってきたアンドロイド、ハクもKAITOも、私に話しかけたりするなどしてどこかで手を止めるものだが、今度のは一瞬たりとも攻撃の手を緩めない。

また手加減もなかった。一撃一撃が私を殺そうとしている。

奴には感情もココロもまったくなかった。

なまじそれをわずかでも持つている私は、相手を破壊することに無意識の抵抗があり、それが防戦一方だった原因の一つだと考えられる。他には単純に奴の戦闘能力の高さか。

総合すると、奴は戦闘に関して私より上手だったのだ。K A I T Oを倒した私よりも。

ズキ……頭の奥がまた痛む。そうか、私は奴に殺されたのか。

身体中を穿孔弾せんこうたんで撃たれて（なんで奴が持っていたのか疑問だが）、四肢の力を失い、それでも立ち上がろうと試みたところまでは覚えてる。

後は銃声が聞こえて……今、こうして白い天井を仰いでいる。

それまでの意識の空白、私は死んでいたらしい。

何も覚えていない。死んだという事実を、私は意識を取り戻すまで知覚していなかった。

恐怖も何もない。言うなれば虚無。感情もココロも記憶も色もない空白の無限に、M E I K Oや、他に死んでいった者がいるというのだろうか。

今の私は、たまたまそこから舞い戻ってきたに過ぎない。

自力では到底叶わぬことだから誰かの仕業だということになるが、見当はついている。

コツ、コツ……ドアの滑らかな開閉音が聞こえた後、固い足音が部屋に入ってきた。

間仕切りのカーテンに映えるシルエットに私の感情が総毛立つ。

そしてそのシルエットはすぐに立体の色と姿とを手に入れ、前にリンがしていたのと同じ黒い光沢のある、確かサングラスといったか、それで両眼を隠した顔が私を覗き込んだ。

「……目覚めたか。どうだね、一度死んだ気分は」

サングラス一枚を隔てて奴と視線が合う。

反射的に手足に力がこもり、奴を見る瞳にも敵意による強張りがあった。



「そう暴れるな。君の身体を修復する際に、君の記憶と心を解析させてもらったよ。実に興味深いし、我々にとって非常に有益なデータが得られたと確信している。」

分かるかね、私は好意的に君を迎えようというのだ。花束代わりでもないが、君が欲しがっているような情報をくれてやる」

その言葉に、無為にあがいていた手足の動きが止まる。

「……情報？」

「君の心を解析したが、その模様は絡まり合った蜘蛛の巣のごとく複雑怪奇であり、今だなお細かい部分の解析は続いている。」

だが第一として、君は自分たちアンドロイドが生まれた理由とその起源を知りたいわけだ」

「それを教えてくれるというのか……？」

奴は黙り込み、私の頭の横にある機械の液晶をしばらく見た後、機械の裏に手を伸ばした。『パチ』っとスイッチが押しこまれる音が聞こえ、私の身体から拘束具が外れた。

「君をこれからタワーの最上階に案内する。話しはそれからだ」  
上体を引き起こすと、私の後ろ髪がはらりと肩から胸に垂れてきた。

どうやら髪留めが取られて長い髪が素の状態にされているらしい。ついでに言えば服も取り払われて丸八ダカだ。

「服、ちゃんと着るよ」と不自然に目線をそらしたレンが言った。

私は辺りを見渡し、台の下のカゴに私の装着品一式が入っているのに気付く。

「……なんだ、拘束具を外したら途端に殴りかかってくるかと思っ  
ていたが」

服を取ろうとする手を止め、私は振り返る。

「服を着てから殴ろうと思ってな」

「面白いことを言う。だが、大事な情報のために私を傷つけないほ

うが利口だな」

「……理解しているつもりだ」

こいつの行動や言動の端々には、私を試しているような気配がある。

拘束具を外したら殴りかかってくると思った……身の危険を感じておいてみすみす拘束具を外すのか？ 違う、こいつは始めから私に襲うつもりはないと知っていた。

それがどうも気に入らなかったので、こちらも「服を着てから殴る」とうそぶいたのだ。

「準備は整ったかね？ 言っておくが、武器の入ったチップや読み込み用のリーダー……黒い腕時計などは予めこちらで没収してある。君がカタナを片手に暴れ出すのが怖いのでね」

どつりでいくらかゴの中を漁ってもないと思った。

服を上下着こみ、髪も二つに結わって依然の私が鏡の中にいる。青色だった瞳の色も元の黒色だ。理由はよくわからないのだが、「この国じゃ黒の瞳は Reaper（死神）の証だ。変えないとマズい」とのき爺に言われ、カラーコンタクトというのを入れて瞳の色を変えた。

修復の際に外されたのだろうが、まさか腕時計まで没収されているとは……。

MEIKOからの大事な贈り物が手元になく不安から落ちつかず、私はフィールに苛立ちを込めた目を向けた。

その立ち姿は実に黙然としていて、こいつはアンドロイドなのではないかと思わせる。

「さっさと来ないか。そんな目で私を見ても、君が来ない限りは私も歩けない」

こいつがアンドロイドだったら、一発ぐらい殴っても大丈夫なのではないか？

しかし万が一にもニンゲンだという可能性を考え、胸のあたりま

で振り上げた右拳を下ろし、私は府に落ちない気持ちでツカツカと奴のところへ歩いていった。

奴は肩越しに私を確認すると、静かに一步踏み出してウィーンとスライドする自動の出入り口の向こうへ歩いていった。

廊下は嫌に暗く、足元のライトが等間隔に設けられている以外には特に明りはなかった。

今いた部屋とはずいぶん対照的だなと思いつながら歩いていると、「そういえば、昨日君を尋ねに来た女の子がいると聞かされたな。金髪の青い目で、いくら追い返そうとしてもしつこく食い下がってきたらしい。

ぶしつけな質問だが、その女の子も君の仲間なのかい？」

リンが私を尋ねてきた。いや、あいつにとっては「私を助けに来た」というのが正解か。

いずれにしろ、リンが私の仲間だということを知られるのは避けたい。

「いや、そんなのは知らないな。ところで、私はどれぐらい眠っていたんだ？」

「あの日から丸三日だ。……しかし、君にはつくづく脱帽する。

いや、君を造ったというもう一人の私に、か」

フィールは歩みを止め、こちらを振り返る。

「仲間のために嘘を吐くとはな。分かっているんだよ、その女の子が？リン？という名で、アンドロイドだということも。言っただろう？ 君の記憶を覗かせてもらったと」

私はとっさのことで、言葉が出なかった。

「……だからどうということはない。リンはそのまま見逃してやった。

今の私には、君がいればひとまず充分だからな」

意味ありげに言つと、奴は再び歩みを再開した。

やはり殴つてやるうかとその背中を睨みつけたが、一つの言葉が引つかかる。

『君がいればひとまず充分』……そうだ、思えばどうして私は生き返ったのだ？

奴には何らかの企みがある。私を利用しようというのか？ 一体何に？

それを知るまでは……仕方ない、もうしばらくは殴らないでいておいてやる。

「おや、また殴らないのか。解析によると、君の感情線は衝動犯罪で捕まる奴と似たような推移を……」

「うるさい、早く進め」

「……やはり、データは間違っていないようだな」

堪えてはいるものの、無性にいらいら、いらいらした……。

時を同じくして、こちらはエインセルの噴水広場。

噴水の縁にリンとグミが隣同士腰掛けている。

「どうしたの？　なんか、元気ないけど」

手元に缶ジュースを握り、グミはどことなく元気のないリンの横顔を見やる。

「バリバリ元気だよ、何言ってるの」

ニコッと笑顔を見せてやるも、やはりいつものはつらつさが欠けていた。

「ウソ言っちゃダメだよ。私に話せないことなの？」

「あー……まあ、色々あってね」

「色々って？　あ、もしかして『アレ』ですか」

何を勘違いしたのか、グミの表情が口調と共に愉快げになる。

「アレって？」

「またまたあ……出来たんでしょ？　す・き・な・ひ・と・が！」

リンの顔をまじまじと覗きこみ、溜めをたつぷりに利かせて言うのと、彼女は祈るように両手を合わせて夕空を仰いだ。

他人のことなのに目を輝かせて「ああ、私にも早くそういう人が出来ないかなあ！」とうわごとのように呟く姿はまさに恋に恋する乙女。

リンは宙に手首を彷徨わせて何ごとか話しかけようとしたが、彼女の身边からまんべんなく放たれるメルヘン・オーラに「もういいや」と諦め、適当な場所に目をやった。

噴水広場はいつもの賑わいを見せている。

大道芸人が各々自慢の芸を披露し、小楽団がアコーディオンの陽気な音楽を奏で、そんな人々の愉快的な喧騒を溶けだした琥珀こはくのような色の夕空が包んでいる。

リンはいつの間にかその色の膚うはになって、しばしばんやりと空を

見上げた。

赤と橙だいたいの中間色に作られる雲のさざなみ、柔らかな風が立てる潮騒、東の方に深海の色が見え始め、黄昏の波が微速ながら次第に引いていくのが分かる。

リンは静かにまぶたを閉じ、街の鼓動に耳をすませた。

地面が踊る、空気が歌う、自分が今、この街の一部分として息づいているのを感じる。

スカイスクレーパーの縁からふっと後ろ向きに身体を投げ出して、それでも地上に特級の分厚いクッションがあるから私は平気、目を閉じて落ちていけるの、そんな大きな安心感が全身を優しく包む。

そして安らぎの中に芯から溶け込んでいく刹那、暗い影がぱつと天井を覆う。

ブラックだ。自分はすかさず立ち上がって、瞳に獐猛じやうもうの気を宿し、右か左かと節操なく辺りを見渡して、ブラックを、獲物を狩らなくてはならない。生きたい、という？本能？がそんな脅迫観念を生みだしてココロとカラダの自由を乗っ取ってしまうのだ。

なんとというおぞましい気分だろう。

ココロは戦うことなんて望んでいない。

ただ平穩に生きることを願っている、それは例えばこの街に住まう人々のように。

よく、彼女は夢想する。

アンドロイドの自分を「孫」ということで家においてくれたのき爺、花屋に来てはベラベラと喋り倒す自慢屋マダムの高ネマン、この街を愛する生粋のエインセルっ子のジャック、その弟分、と呼ぶにすれば少々身体がでかすぎる食いしん坊のワトン、他にも何かにつけてちよっかいをだしてくる悪ガキたちや、よく花を買ってくれるおばさんたち。

彼らニンゲンたちとの交流の中に、自分だけではなく、MEIKOやナナシ、そしてレンが一緒にいる日常をごく無意識的に思い描

いている瞬間がある。

この街で仲間のみなどと、いやアンドロイドの全員と仲良く暮らす……理想の情景だ。

その上に自分たちがニンゲンになれたら言うことなしたが、それは流れ星の力を借りても叶わぬ願いだと知っている、だからせめてアンドロイドのみんなと仲良く暮らせたら……この街の人々だったら「人間もアンドロイドもどんぐりの背比べさあ！」と豪快に笑い飛ばしてあっさり受け入れてくれるだろう。「はい、これ燃料」と差し入れにパンではなく全然エネルギーにもならないような謎のオイルをくれるぐらいにはきつと仲良くしてくれる。

そう密かに思っているところに仲間の一人である？ナナシ？がやってきた。

永遠に離れ離れかと思っていた彼女との再会に、一步理想に近づいたのでは？とわくわくしていたら、彼女は「この世界を壊す」と例のひえびえとした表情で急に言いだすのだ。

これにはもう腹しか立たなかった。世界を壊す？あのねガラスか何かの類じゃないんだよ、殴ったら割れるもんじゃないし踏んだら碎けるもんでもない。そもそもなんで壊すの？

「自分たちの存在に嫌気が差したから」

これには「はあく！？」とか「バツカじゃないの！？」というリアクションしか出来なかった。むしろ「そいつはグッドアイデアだね！」と親指をグツと立てて彼女に同意できる奴なんているのだろうか。

「いるわけねえだろ！」

「ど、どうしたのリンちゃん急に……？」

「ああ、べ、別にねえ？ なんでもないよなんでも……」

「それならいいんだけど……」

活きのいい魚のように思わず口からツッコミが飛び出してメルヘン・トランス中のグミを現世に舞い戻してしまっただが、そうなのだ、いる訳がない。

そもそも「世界を壊す」という言葉自体があまりに漠然とし過ぎている。

しかし本人はさも「壊して当たり前だろ？」といわんばかりの真顔で言いきるし、一体どうしてそんな考えに至ったか説明もしてくれない。頑なに「この世界を壊す」を繰り返す。

それには本人だつて自分の言っていることが理解しきれていなく、ただ「私はこうしなくちゃいけない」という強迫観念に突き動かされているような印象を受けた。

ともかく腹が立つたりんは、ナナシが自ら「あんな、りん。これはこういうことで……」とおずおず説明してくれるまでは片方をふくらませて口を利かないつもりだった。……と、その矢先にナナシは店を飛び出してしまい、「いいよあんなやつ！」と徹底無視の構えを崩さなかつたのだが、その夜、帰ってこない。翌朝になつてもナナシはいないままだ。

彼女の向かった先がユートピア・タワー、Dr. フィールグッドを最高権威に据える機械工学機関の巢窟に単身飛び込んだきり帰ってこないのであれば、「もしや謎の改造を受けてるんじゃない……」「まさか粉みじんのスクラップに!？」と想像しないわけにはいかない。

さすがに心配になつて「いやまあ、ちょっとした社会見学だし」とあくまでナナシとは喧嘩中なのだという認識はそのままに、昨日ユートピア・タワーまでニンゲンとして怪しまれない程度の急ぎ足で行ってきた。

「現在は諸事情につき関係者以外立ち入り禁止！」とけんもほろろに門前払いをくらい、「社会見学です!」としつこく食い下がるも立ち入りを拒まれるので、渋々帰ってきた。

本当は今日も行きたかつたのだが、のき爺に「花売りにははずいぶんと時間がかかったなあ?」と無断で遠出したのがばれ、「白馬の王子様かあ、いや王子様なら黒馬に乗ってたつていいの! 私の前に現れないかなあ」と今や再びメルヘンの世界に一人浸つて



いる？グミ？という名の監視役を付けられてしまった。

今日も夕陽が西に沈んで夜がやってこようとしている。それでもナナシが帰ってこなかったら、どんな妨害があったって明日はもう一回ユートピア・タワーに挑んでやるつもりだ。

そしてナナシを見つけてまずは問いださず。

「世界を壊すってどういうこと？」

自分が思い描く理想やらを話すのは、その答えを聞いてからでもいいだろう。

リンは目の前にナナシがいるイメージで「ふん！」と鼻息を吐き出し、表情を引き締め、そう強く思うのだった。

「ああ、今日もこの街は平和だなあ！」

どこからともなく苦労とはまるで無縁そうなのんきな声が聞こえてきた。

聞き覚えのある声だなと顔を向けてやると、そこに陣羽織はかまに袴はかまという変わった身格好の男が立っていた。

その手にマンドリンを携え、紫の長い髪をポニーテールにして中々にハンサムである。

「あ……！」

グミがささず彼の存在に歓喜の表情を示して立ち上がると、直後に、

「キヤー、かくぼさああああん！」

と広場中の女性が殺到して彼をとりまいた。

彼女たちは彼のいわゆる？ファン？である。

不定期ではあるが、現れるとならば決まって夕刻に姿を現すこの和とも洋ともつかない独特な雰囲気を持った彼に心を奪われ、その姿を見るや我先にと殺到した様はさながら餌に群がる小魚団。

グミもどうやらその群れの一匹のようであり、この場でそうじゃないのはリンだけであった。

「風に呼ばれたらまたここに来てしまったよ……まったく、風に好

かれちやったまいたいだ」

そして一瞬で自分の顔が最も格好よく映える角度に調整し、決めポーズよろしく「キラっ」と純白の歯をむき出しにした。

不可解な言動を持ち前の面のよさで立派な意味を持つ言葉として昇華させると、

「きゃあああああああ！」

女性たちは一様に心臓を射抜かれて黄色い悲鳴を声高らかに共振させた。

リンはこれまでも広場で何度か遭遇したこの場面に早くも呆れ気味な表情である。

「おっと自己紹介が遅れたかい？ 誰が呼んだか？ さすらいの吟遊詩人？ とは……」

彼は言いながらに瞳を閉じてうつむく額に手をあて、両足をクロスさせた上に腰をかしがせ、考える人が立ちながらに考えているようなポーズを滑らかな動作でふわっと作ると、

「カムイがくぼ、……このボクのことさ」

語尾に合わせて顔を上げざまカツと目を見開き、本人にとってこの世で最も格好のいい自己紹介がフラメンコのラストタップのごとく華麗に決まるのだった。

「もう知ってるー！」

周囲がそう口をそろえることで、この彼とファンとの間の予定調和が完成する。

この予定調和こそが彼らにとって？ こんにちは？ 代わりの挨拶なのだ。……とどこかの物好きが説明してやっても、リンにはこのらんちき騒ぎの実態が理解できないだろう。

せいぜい「変なヒトの周りに変なヒトが集まっている変なコトをしている」ぐらいの認識しか持てない。

それは彼女がアンドロイドだからという理由では当然なく、この人垣の一步外ではカムイに興味のない人々（主に男性）が寒々とした目付きで一様に「またおまえらか……」と彼らを見つめているの

だ。

しかし当事者たちにとってはこのサークル内が現在世界の全てなのだから関係ない。

カムイはピエロの芸であれば失笑を買っただけのポーズを崩して立ち居を直すと、「まあ別にあと5分ぐらいは楽にポーズ維持出来たけど」とでも言いたげな涼しい表情でぐるりと周囲を見渡してから、高音と低音の中間の声でまたもキザったらしく語り出した。

「……君たちに一つ残念なニュースだ。

ここ最近、ボクのハートをわしづかみにする娘がいるんだ」

その言葉が発されるや「ええっ！」とファンらが一歩彼に歩み寄る。

中にはこの時点で「ああ……」と貧血を起こして倒れる者もいたが、「ハートをわしづかみにしたのは私かもしれない」と期待して固唾を呑む者が大多数だった。

「……もう一つ残念なニュースだ。その娘は今、この中にはいない」  
止めに雷が落ち、希望の丘が一瞬にして灰燼<sup>かいじん</sup>吹きすさぶ絶望の荒野と化する。

「この世の終わり……」「もうお嫁にいけない……」「と奇病がまん延するがごとく次々倒れ、グミもへなへなとリンにもたれかかるが、病原菌であるカムイ本人は気にせず続ける。

「今日はその黒い髪の乙女を見かけた時の感動を歌にしてみた。

聞いてくれ。『君の瞳は100万ヴォルタ』」

吟遊詩人なのかマンドリン奏者なのか、まずその二つの間でさすらっている彼だが、おもむろに弦を鳴らして奏でられるメロディには風と海の心地よい調和を思わせる。

「っあっあー 君がプラスならボクはマイナスウー これで解決ウー」

これでもつと歌詞がまともなら立派なマンドリン奏者として胸を晴れたのだが。

「グミい……だいじょうぶ？」

倒れた理由があまりに陳腐ちんぷなだけに「だいじょうぶ？」と声をかけるのもおかしな気がしたが、グミは噴水の縁に腰を下ろすリンに膝枕をしてもらう形で「うーん……」と顔を向けた。

「あーああ、かくぼさんにふられちゃったあ」

そもそも好きだったのか、と指摘したいのをこらえ、

「いいじゃないじゃん。見た目で好きになるのはよくない！つて前に言ってたじゃん」

「そうだけどさあ……ところで、『黒い髪の乙女』って誰かしら？」

グミは身体を起こし、希望の潰えた女性たちの屍しかばねとその荒野で一人陽気に弾き語るかくぼを横目にそう口にする。

「さあねえ……」

思いつきり心当たりがあるが、リンは敢えて口にしない。

「あれじゃない？ リンちゃんの花屋に新しく来た娘」

「え、そんなわけないじゃん。黒髪だけど、乙女って感じじゃないでしょ？」

ナナシを思い浮かべて、まさに自分の言葉通りなので思わず苦笑する。

「まあ一回話したきりだけど無愛想だったし……っていうかさ、あの娘って前の化け物騒ぎの時にながいナイフで化け物を串刺しにしたんでしょ？ 街中の噂だよ？」

リンはギクつとした。

「ヒ、ヒト違いじゃないかなあ……」

確かにリンの耳にもチラホラと化け物騒ぎの噂は入ってきている。変装のおかげか自分のことはあまり騒がれていないが、ナナシのことはよく耳にする。

彼女も彼女なりにパーカーのフードをかぶって顔を隠していたのに、化け物騒ぎと同時期に新しく街にやってきた、ということに怪しまれているのだろうか。

リンはどう言い繕うかしばし悩んだが、

「でも、あんな強い娘が街にいたら安心だね！」

その底抜けに明るい表情と声に「えっ？」と拍子抜けする。

「だつてさ、あの娘がいたらまた化け物がやってきたってダイジョーブじゃん！」

警察ってなーんか当てにならないし。うわあ、憧れるなあ、戦う女つて！」

そしてグミはまたも空を仰ぎながら頭の中のお花畑へとトリップするのだった。

何かとメルヘン思考なグミらしいといえばグミらしい前向きな解釈だが、

「そうだね…… ナナシがいたら、街も安心だね」

それにどこか感心して頬が緩むリンがいた。

そして傍らでは、我が道を行くといった風情のがくぼの歌声が広場に響き続けている。

「きいみいは一体いずこへ〜 ポケットの中を漁り見るつう〜」

パーカーとホットパンツのポケットを漁り見たが、やはりMEI KOの黒い腕時計はなかった。

チップもない。ただ十の指がジーンズ地のざらついた感触を掴むだけだった。

やはり、こいつに没収されたのか…… ナナシは傍らの男の背を横目に見やる。

「……一つ、君に感心したことがある」

フィールは背中を向けたままおもむろにそう口にし、続けた。

「君の考えには理解しかねるところがある。特に『この世界を壊す』などは……」。

殺戮と争いばかりが繰り返される世界において、君は大事な盟友を自らの手にかけてしまったことをきっかけにこう思うようになったみたいだが、超がつくほど飛躍した考え方だな」

どうせまた自分の頭を解析した結果を喋っているのだろう、ナナシは「おまえに私の何が分かるんだ」とわざわざ怒る気にもなれず、視線をそらして言葉を聞き流すよう努める。

しかし超高層タワーの内部を垂直移動するエレベーターの四角い箱のなかにあつては、不自然に両耳を塞がない限りにはどうしても耳に入ってきてしまうのだった。

そこまでするのも馬鹿馬鹿しい…… ナナシはそう思い、フィールは淡々と話し続ける。

「私が思うに、君の『世界を壊す』という言葉は目的ではなく？ 衝動？ だ。

？ 願望？ や？ 理想？ とも言い換えられるし、君が今ここにいる理由にも繋がっている。

たとえば幼い子供が、戦争かなんかで国家に両親や友達を理不尽に殺され、それで『そんな奴らぶち殺してやる』と復讐心をたぎらせ

るのと同じようなものだ。

始めは一点に向けられていた刃の矛先も、時間が経つにつれて誇大化、無差別化し、最後は『人類全てが憎たらしい』と世界そのものの破滅を望むようになる。

そして本人にとって最も大事なことは復讐が『成功するか否か』ではなく、『やるかやらないか』なのだから、これほど性質タチの悪いことはない」

入口上部につけられた帯状の黒い表示板は「70F」を抜けて、その後の「・・・」というゾーンにライトがついている。

「おまえ、私をほめたいのか、けなしたいのか、どっちなんだ？」

ナナシは棘のある声で不意に問いかけた。

両者黙ってしばし視線のせめぎあいが静かに行われたが、

「……人類に破滅をもたらすというのは言葉にしてみれば呆気ないが、」

フィールはこともなげに視線を外すと、ナナシに背中を向けて言葉を続けた。

「それを瞬時にして行えるのは『神』ぐらいのものだ。神ではない単なる人である復讐者A、先ほどの少年のことだが、彼は人類に破滅をもたらそうとは考えるものの当然ながらその術を会得しえない」

私の質問には答ええないのに自分の話はするのだなといらつきながら、ナナシは何かを諦めるような風情で背を壁につけて腕を組んだ。「ここで彼は二通りの道を歩む可能性を有する。

一つはさまよえる刃がまかりまちがってまったく無関係の人間を襲い、『街の通り魔殺人』などごく小さな範囲で終息する道と、もう一つは本当に力を得て野望に邁進まいしんする二つだ。

端的に言つて人類を破滅させるだなんて不可能極まりなく、両者いずれも途方もない野望の前にもがき苦しむ訳だが、そうやって未来を手探りする少年の姿と君の姿が重なるのだよ。

君がやってきた未来の世界、分かりやすく『終末世界』と呼ばうか、そこからタイムトンネルを通つてこの時代へとさかのぼつて、自分

を創造した、つまりはこの私を殺せば1から10まで野望が果たされる短絡的に思いこんでいる。何の確証もないに関わらず、だ。しかも先ほども言ったように『世界を壊す』、少年の場合には『人類に破滅をもたらす』といったのはそもそも野望でも何でもなく単なる個人の激情に過ぎない。

それを満たそうと必死な君の姿に私は感服した。いかにも？人間らしい？とね」

感服した、と言うフィールの声にはまるで賞賛の色はうかがえず、皮肉めいている。

ナナシは瞳を閉じてうつむいたまま、静かに口を開いた。

「……言いたいことはそれだけか？ お前がいま、そうやってペラペラと喋っていられるのは私がお前から得たい情報があるからだ。その後はどうするか分らないし、それに……」

ナナシはおもむろに一步踏み出して組んだ腕を崩すと、キッとフィールをねめつけ、

「クログナがなくても、ニンゲンぐらい素手でどうにでもなるんだ」  
右手で心臓を握りつぶすような形を作り、脅迫めいた声で言う。

「そんなに怒らないで欲しい。私の悪い癖なんだ。

自分の感情を素直に表現できないという……。君は内面的な感情の起伏は激しいが、それがあまり表に出ないという点では、ある意味で私と同類と言えるかもしれないな。

アンドロイドと同類……我ながら、面白いことを言った」

ニヤ、っと自嘲気味にフィールの口角ががりあがるが、サングラスで目が隠れているせいか笑ったようには見え、単に表情筋の動きが口元で起こっただけのように見える。

対するナナシの表情に変化はなく、ただ右手がぎゅっとまた何かを握りつぶしていた。

ピンポン……ベルが目的階についたのを二人に告げる。

「さあ、君を迎えよう。この国家の？天空？へ」

開かれたドアの向こうは黒々としており、壁伝いに青色の小型ラ



イトがすずなりに並んでいる。

フィールは一言告げるとぱっと白衣をひるがえして、暗い廊下を早足で歩いていった。

ナナシもそれに続き、背後でぎゅうんと静かにエレベーターのドアが閉め切られる。

\* \* \*

自動ドアをくぐると、ふと開けた空間に出た。

弓なりに広がるオペレーションデスクではインカムを付けた二人のオペレーターが手元の計器や入力装置を相手にせわしく動いており、反対にも同じような設備があつて、そこでもオペレーターが二人、計4人がナナシには謎の忙しさを見せている。

「ここは……」

「気象管制室及び対空監視室及び……まあ、ユートピア・タワーの最上部から、地上と空の動きを監視して管理している部屋だと思っ  
てくれればいい」

フィールはそう言うのと近くのオペレーターの下へ歩み寄り、  
「モニターをオールレンジに」  
と後ろに手を組んで指示を出した。

声をかけられるまで多忙に動き回っていた長髪のオペレーターだが、舌打ち一つすることはなしにデスクに整然とひしめき並ぶスイッチを一つ、二つ操作した。

すると部屋が暗転にされ、全方位にぐるっと一周、都市のパノラマが浮かび上がった。

天井の中心に吊り下げられた丸い投射機が、タワーの外に取り付けられたカメラの映像をリアルタイムに反映しているのだ。

その映像の解像度は実際に目で見ているかのように鮮明で、ナナシは壁に手をつけてまじまじと都市並みを見つめた。

地上にいる時は切り立つ断崖に見えたビル群も、タワーの最上階

から見下ろせばミニチュアハウスのようで、人々の姿などはまるで粒子、建物の模様がある線を境に黄土色に移るうのを見るとこれはどうやらエインセルの方角だ。

その先には？海？も見えている。初めてこの世界にやってきた時我が目を奪ったあの液体地面だ。更にそのずっと先には…… ナナシはしばし無心になっていた。

「これぐらいでいいだろう」

オペレーターはその言葉を受けると、パチッとスイッチを切り替えた。

部屋は再び暗転となり、ナナシの手が触れていたのが世界から単なる壁へとすり替わる。

やや残念がった表情でしばらく壁を見つめていたが、

「こつちに来たまえ。本題へ入る前に、君にはまずこの世界について説明する必要がある」

部屋の中心から発せられる声に振り返り、その方へと歩いていく。「その線の外で立っていてくれないか。これから立体のビジョンを出す」

「立体のビジョン……？」

「見ていれば分かる」

ナナシは言われた通り、床に刻まれた円陣の線の外で立ちどまった。

線自体が薄青く発光しており、そこから離れた場所で譜面台のような形をしたタッチパネルの前に立つファイルの図は、まるで魔法陣から何かを召喚させようとする儀式を思わせるが、魔法陣から出てきたのはサタンではなく、立体映像によるトランジスタの全景だった。

ナナシは宙に浮かぶ丸く小さな島を不思議がった表情で見、手のばしたり、顔をすれすれにまで近づけたりして触れようと試みたが、何の感触も得られないのだった。

「人工島・トランジスタ。総人口558011人。全体の面積はア

アメリカのテラウェア州とほぼ同じ。陸地面積5、061 km<sup>2</sup>とは建造物としては言うまでもなく史上最大規模で……いや、資料の棒読みなどはやめよう。

つまり、君が見ているそのビジョンが、現在我々のいる世界だ」

そして私が壊そうと思つた世界だ、とナナシは頭の中でフィールの言葉に付けたす。

「次に人類が何故、こんな大きな鋼鉄島（いそつ）を太平洋の真ん中に作らねばならなかつたかを話そうか。一口には世界全土を巻き込んだ核戦争があつたからだ。

これを人々は？世界戦争？と呼ぶ。

地球全体に放射能という人体に害を及ぼす？瘴気（しょうき）？があふれ返つたために、人々は陸を捨て、透明なドームを張り、その中に築いたトランジスタという世界で生きている。

先ほど558011人と言つたが、これはトランジスタの総人口であるのと同時に、地球上に生き残つた人類の総数でもあるのだ」

そこで一旦言葉を切り、再び続ける。

「ところで君は、この世界に来て何日か経つたと思うが、テレビのニュースで『天気予告』を見たことはないか？」

ナナシは心当たりがなく、小さく首を横に振つた。

「天気予告では『本日は雨の模様です。降水確率は……』という言い方はされず、『本日は雨です』と断定される。つまり、人工的に自然現象を起こしているのだ。だから『予報』という呼び方がされない。気象管理庁という機関が人工的に再現できる範囲で雨など雪などを降らせ、冬だの夏だのの季節をこの国にもたらしている。それは先ほども言つたように、このトランジスタという世界が？ドーム？の中にあるからなのだ」

それでも分らない、といった眼差しでこちらを見るナナシに、フィールは歩み寄り、白衣のポケットから小さなガラス細工を取り出した。

「これは？スノードーム？というものでね、中に雪だるまがあるだ

るう?」

球形のガラス体の中には雪だるまとレンガ造りの家のミニチュアがあり、フィールが揺らすと色とりどりの銀紙がはらはらと舞いあがった。

「このガラスの膜の中にある雪だるまが我々だと思ってくれればいい」

ナナシは顔を近づけてドームの中の真っ白い置物と目を合わせる。「雪だるまってなんだ……?」

フィールは言葉を選ぶように首をかしぐと、

「そうだな、太陽にさらされると溶けてしまう生き物のことだと冗談めかしていった。」

そしてナナシが指先でコツンとガラスを突こうとすると、彼はとっさに彼女からドームを離し、ポケットの中へと大事そうにしまいきこんで元の場所に戻った。

何故そんな挙動をとるのか、ナナシは訝る。<sup>いぶか</sup>

「我々は地球というドームの中にもう一つトランジスタというドームを作って、そこで暮らしているという訳だ。そしてこのドームの一步外、つまりは地球全体だな、そこでは現在何が起きていると思う?」

「またも質問に答えられない自分に嫌気を感じつつ、ナナシはフィールの言葉を待つ。」

「信じられないことに、?黒い化け物?でどこもかしこもあふれ返っているのだよ。まるでファンタジーか何かの世界のようだね」

ナナシは?黒い?というキーワードに鋭く反応する。

「黒い化け物……?もしかして、?ブラック?のことか?」

「君たちアンドロイドの中ではそう呼ぶようだな。記憶の解析によれば、君たちアンドロイドは彼らを倒すことによって生きるためのエネルギーを得ている。まったく、未来の私というのはとんでもないエネルギーシステムを考案し、作り上げているのだな」

「ということ、今はまだ、それは出来ていないということか?」

ああそつだ、とすぐには言わず、フィールは意味深な間を置いた。  
「……話は変わるが」

何故か質問に答ええないフィールにナナシの眉じりがピクつとひきつる。

「もう一度ビジョンの方を見てほしい」

ナナシは向き直り、宙に浮かぶトランジスタを見る。

それがフィールのパネル操作によってみるみる内に変形し、最後は元の形とは似ても似つかない一つの？兵器？となつて完成した。

「ブラック、ロックシューター……」

ナナシは思わず声をもらす。

その黒き鋼はがねの砲塔は大きな丸口の銃口を下に向けて宙に固定され、使用者であつたナナシをひたすら愕然がくせんとさせた。

「見覚えがあるだろう？ 超高出力粒子砲・ブラックロックシューター。」

記憶の中の君は、これを使いブラックを、そして……」

「言うな！ なんで、なんでお前がこれを知っている？」

ナナシは逆上したように声を張り上げた。

そして、の後に続く言葉が恐ろしくてたまらなかつたのだ。

「何故つて、これを作つたのは他ならない私だからな。」

ところで、君の持っていたチップの中にこれはなかつた。

記憶の解析でもその所在が掴めないのだが、一体どうしたのだね？」

「……捨てたんだ。あの戦いの後にな。自分でも詳しくは覚えていないが、恐らく無意識的にどこかへ捨てたんだろう。二度と使いたくはないからな……」

ナナシはうつむき、言葉を足元に落とす。

「二度と使いたくはない？ それは困るな。」

君にはこれを使ってやらねばならないことがあるんだ」

やらねばならない、その断定的な言い方にナナシは戸惑い気味に反問する。

「どついうことだ？ ブラックロックシューターを使ってやらねば

ならないこと？」

「……その答えこそが話しの本題だ。単刀直入に言おう。このドームへとやってくるブラックを……君に撃退してもらいたいのだ」

ナナシは言葉を失い、ただ立ち尽くすしかなかった。

ブラックがやってくる？ さつき見たビジョンの世界に？ それを私が倒す？ ブラックロックシューターを使って？ ナナシの頭は錯綜する情報を処理しきれなかった。

「だ、だって、ブラックロックシューターはもう捨ててしまっ……」

かすれる声の言葉を遮り、

「既にこちらにあるんだ。そしてその開発は君が来てくれたことはいよいよ完成を見る」

フィールは感情のこもっていない声で言い切るのだった。

そしてさっそうとひるがえり、先ほどのオペレーターの下へと向かう。

「？対象？の動向はどうだ？」

また俺かよ、他にもいるだろ、とは言う訳もなく、

「進路は依然としてここトランジスタへと向けられています。」

概算して明日の正午にはこちらへ辿り着くでしょう」

オペレーターは蛍光色のレーダーを見やりながら、やや早口にそう答えた。

「時間にしてあと20時間前後か……兵器の完成を急ごう」

左腕のデジタル腕時計を一瞥、彼は自分に言い聞かせるように言い、更に、

「現在の対象の様子をスクリーンに映してくれ」

「海上の霧が濃くてはつきりと見えるかどうか」

「それでもいい、映せ。」

彼女は見なくてはならないのだ。これから自分が戦う相手の姿をな

「……了解しました。観測台の望遠鏡にアクセスします」

フィールはサングラス越しにナナシを見やりながら言った。

彼女はビジョンのブラックロックシューターを呆然と見つめ、その戦慄せんりつに身体からだの自由を奪われたかのような有様からは、彼女の脳裏に過去のトラウマが過ぎっているのだと容易に想像できた。

「こちらのスクリーンを見たまえ。じきに、映像が浮かび上がる」  
オペレーターがキー操作を終えると、デスク前の壁一面に『LOADING . . . . .』の白文字が浮かび、ナナシはおそろおそろそれを見つめた。

不意に映像が浮かび上がる。

白みがかった灰色の霧が画面全体を覆い、海面がゆらめいているのは確認できるが、それ以外にめばしいものは映っていない。

「やはりだめですね、霧が濃すぎる……」

しかしオペレーターが言うのも束の間、画面の中央に小さな影が見え始めた。

それは単に霧の陰影のように見え、また肩を鳴らして歩く小人のようにも見える。

「もっとズームできないのか」

「次で最大望遠です」

カチ……スイッチが押されると、まるでそれが出現の合図になったかのようだった。

「……っ！」

ナナシは思わず息を呑む。

暗黒の巨人が画面に現れた。

霧のせいでその姿は漠然とはしているが、すぐにそれと分かる長い両腕をだらんとさせ、極めて鈍い足取りで、しかし、一步、また一步と着実にこちらへと迫ってきている。

ズームのせいかもしれないが、見た限りではナナシがこれまで遭遇したどのブラックよりも巨大に見え、強大な力を有しているように感じられた。

こいつと戦う？ 私か？ ナナシは密かに恐怖した。

「……こいつがあと20時間前後でこの島にやってくる。目的不明・正体不明。

しかし、つい最近『無差別殺人事件』があっただろうか？ 君の記憶を見るに、事件の犯人であるブラックは凶暴極まりなく、とてもじゃないがこの島へとやってくる奴もまさか人間と仲良くしに来たとは考えられない。そして君は、その犯人をみごと撃退したわけだ」  
また『君の記憶を』か、混乱する頭の中でも、その苛立ちははっきりと感じた。

「誰も賞賛していないが、君は街を救ったいわば？ 英雄？ だ。  
どうだね、もう一度？ 英雄？ になる気はないか？」

ナナシは聞いていないのか、スクリーンを見上げたまま何も反応しなかった。

「……いや、我ながら陳腐ちんぷな言い回しだった。

君は英雄にならなければならぬのだ。唯一残された人類最後の世界のためにな」

その言葉も聞いていないのか、そう思われたが、ナナシの身体は静かにわなわなしていた。

「私は……私は、私はお前の言いなりになるためにこの世界に来たんじゃない！」

ふと、ナナシの感情が三角錐の部屋全体に響き渡る。

その声が残響になって消えゆく間、部屋にいた全員が一樣に彼女を見つめていた。

「……MEIKO（メイコ）、といったか」

思わず盟友の名を出されたことで、ナナシはハツとした。

「特別に？ 造って？ やってもいい。君が私の頼みを聞いてくれるならな。

それでもう一度会って、許しを乞うなり、再会を分かち合うなり、好きにすればいい。

どうだ？ 悪くはない条件だと思うのだが」

ナナシは足元に目をやって黙り込んだ。



行き場のない感情が爆裂しそうだ。殺してやるか？ この場に  
いる全員を。

しかし現実的には、彼女はただ戦慄いてその場に立ちつくしてい  
るだけだった。

MEIKOを造ってやる、その言葉に惹かれている自分が確かに  
いるのだ。

「……一つだけ、聞いていいか」

ナナシは諦めに満ちたトーンの声で、言った。

「私は、一体何のために生きている……？」

なんだそんなことか、そう言わないばかりに、答えはすぐに返っ  
てきた。

「戦うためだ。今はただ、それだけ」

その言葉は槍となってナナシの胸を貫いた。

次に足元がなくなつて自分の身体が落ちていく感覚にとらわれる。  
手を伸ばすも何かに掴まれることはなく、ただ重力のままに虚無  
の中へと落ちていく。

ふと……顔を上げた。

無力感に打ちひしがれた者が決まっつてするような目付きで、彼女  
は再びスクリーンを見る。

画面の光に影となつて見えたフィールの口元がふと、悪魔の微笑  
みに歪んだ気がした。

t o b e . . . . c o n t i n u e d .

&lt;&lt;Chapter 3&&&gt;&gt;(後書き)

次回 予告

Rock・10?ぼくらの16bit戦争?

乞うご期待

## Rock・10？ぼくらの16bit戦争？

ユートピア・タワー最上階、オペレーションズルームにて。

「……私はこれから兵器の完成を急ぐ。君にも、ついてきてもらおうぞ」

フィールは立ちつくすナナシを一瞥、言った。

「どこへ行くんだ？」

「タワーの地下だ。そこが開発の機関となっている。公には秘密にされているがね」

サングラス越しに見るナナシの横顔は迷いと不安とに満ちていた。本当に、本当にもう一度MEIKOメイクに逢えるのか？」

ナナシはふと顔を上げて言った。

自分はMEIKOと同じアンドロイドを造つてやる、といったただけだが、彼女は動揺のためかそれを『MEIKOに逢える』と解釈している。

ならば好都合か、フィールはそう考え、

「ああ、近いうちにな。君がああブラックと戦い、そして倒してくれたのならば」  
と、大きなスクリーンを指差した。

灰色がかった画面一杯に暗黒の巨人が映っている。

ナナシも指の方を見やるが、どことなく府に落ちないといった表情をしていた。

MEIKOに本当に逢えるか訝しぶかしんでると、元々は殺すつもりだった相手の言いなりになるのが嫌なのだろう、しかし、その心が確かに揺れているのが彼女の目線からうかがえる。

アンドロイドのココロが揺らぐ、か、どこか切なくなる思いで、フィールは説く。

「何を迷う必要がある。いいか、私はな、やろうと思えば君を洗脳することが出来た。」

簡単なことだ。修復の際、君の記憶とココロを完全に消去して、君をネルのようなアンドロイドにすることだって出来たのだ。しかし、私はそれをよしとしなかった。

君は君だから価値がある。心にアンドロイドと人間の垣根はない。私は科学者としても、一個人としても、君という心がどのような未来を選ぶのか、大いに興味があるのだ」

一旦言葉を区切り、ナナシに歩み寄る。

「……私は君の味方だ。君が迷うのなら、手を差し伸べ、光を灯し、進むべき道を示してやる。今は私の言うことが、悪魔のささやきに感じられるかもしれないがね」

ナナシは目線を足元に落とし、頼りなげな声で言った。

「この街にはリングがいる。あいつは強い、強いが、ブラックロックシューターのような兵器は持っていないし、使えない。あのブラックを倒せるのは、恐らく私しかないだろう」

「その言葉は戦う意思だと、解釈していいのだな？」

「……この戦いは私たちが生き延びるためでもある。それだけだ」  
ナナシはフィールと目線を合わせようとしなかった。

その心中を推し量るように、フィールはしばらく彼女の佇まいを静観していたが、ふと踵かかとを返すと、左腕のデジタル腕時計を見やっ

た。  
17時ちょうどになるまで、あと一分とない。

「ブラックが島の外周2km地点に到達するまでをリミットとする。17時よりカウントダウン開始。それでは各人、引き続き作業に尽力してくれ」

その声が部屋全体に響き終わると同時に、カウントダウンは開始された。

部屋を出ていくフィールの背を、ナナシはためらいがちな足取りでついていく。

巨大ブラック来襲まで、のこり18時間。

\* \* \*

ブラック来襲まで、15時間前。

リンはのき爺の家のダイニングで、テレビに釘付けになっていた。それも前のように深刻な顔つきでニュースを見ているのではなく、卑怯戦隊、ウロタンダー！ 第27話 蛇には蛇の道、目には目を の巻！」

ハイテンションな声優のナレーションでサブタイトルが画面に踊ると、リンは「始まった始まった！」と大はしゃぎでテレビの前に腰を下ろした。

卑怯戦隊ウロタンダー、世の子供たちが毎週楽しみにしている人気アニメ番組だ。

内容的には単純な戦隊物の勧善懲悪だが、一つ変わっているところは、ヒーローの3人が「正義のためなら悪も辞さない！」というポリシーをかけた、およそヒーローらしからぬヒールな手段で事件を解決していく点である。

これが歴代のヒーロー番組と比べて「キレイごとがなくていい」と大人たちにもウケ、雑誌の視聴率番付では上位の常連なのだが、リンは特にそんなことは気にしていなく、アニメの内容が単純かつ痛快なので毎週楽しみに観ているのだ。

「おい、リン、ちょっとボリウムを下げてくださいか」

ダイニングテーブルの椅子で夕刊を読むのき爺が間延びした声で言う。

『股関節がガラ空きだぜ！』 『な、なに……！？』 『トウ！』 『グハア！？』

リンはしかし、ウロレットとデンデケ怪人との戦いに夢中である。『お、おまえら卑怯だぞ！』  
股間を抑えてのたうちまわる怪人は、苦しそうな声を上げた。

するとレッド、イエロー、ブルーの三人は待ってしまいましたというかのように、

『卑怯？』『こいつ、いま卑怯って言ったのか？』『はは、わかっ  
てねえようだぜ』

『言っておく。俺たちは卑怯なんじゃない、？合理的？なんだ！』  
お約束のセリフをバシッと決め込むと、三人は素早く怪人を取り  
囲み、

『必殺！ 卑怯ザ・ン・マ・イ〜！』

と口をそろえて必殺技（無防備な怪人をやたらめつたら踏みまくる）  
を繰り出した。

この瞬間はどの家庭の子供もテレビの前で同じセリフを叫んでい  
るのだろうが、無論、リンもその一人だった。

のき爺はしかめっ面をしたのち、ため息を一つ新聞に目を戻す。

『オーマイ……ガッ』

これまたお約束の断末魔が小さく響き、怪人は『ズッドオーン！』  
と爆死した。ストンピングしただけなのに何故爆発するのはなは  
だ疑問だが、リンの顔は清々としている。

「あー面白かった！」

EDが流れ始め、リンは声高らかに言った。

実は今日、ナナシの下へ行けなかったのはグミに監視されていた  
からだ、振り切ろうと思えば出来たのに、敢えてそうしなかった  
のはこの番組があるから……とは内緒である。

「はあ〜……まったく、おまえも良い歳なんだからそんなではし  
やぐのやめろよ」

老眼鏡を外しつつ、のき爺の声は呆れかえっている。

「えー、だって面白いじゃん。のき爺はよく見てないからそんなこ  
とが言えるんだよー」

「はいはい。まあ、お前が喜んでること自体は悪い気はせんから  
いいが」

のき爺はふつと微笑みかける。

そこで次回予告が流れ、彼女は再びテレビに目を戻した。

『次回、卑怯戦隊ウロタンダー！ 災いきたる！？の巻！』

すでに来週に思いを馳せているリンの嬉々とした横顔を、のき爺は本当に自分の孫を見守るかのような温かい眼差しで眺めていたが、そういえばこの家にはもう一人いたなあと無愛想なナナシの立ち姿がふと思い浮かんだ。

そのことで話しかけるのもう少ししてからでいいだろう、とのき爺はテレビを見やり、そして最後の決めゼリフが流れた。

『次回の卑怯もお楽しみに！』

\* \* \*

ブラック来襲まで、11時間前。

朝霧海人は静まり返った職場で事件の書類整理に追われていた。時刻は22時。言ってみれば残業だが、ザックも傍らにいた。

「お前さ、どうよ、あの娘とはうまくいったんの？」

ニヤけた面を浮かべ、ザックは陽気な口調で急に訊いてきた。

「なんだよいきなり……。俺は忙しいんだ」

相手にしてもらえない、といった風情で、海人はペンを片手に書類とにらめっこだ。

「ほお？ そんな口をきくのかい。マラン警部に言っちゃおうかなあ、うちの海人さんいつも同じ場所に聞き込みに行ってますよ、下心マックスで。って」

彼は口をすぼめ、おどけるように言った。

「ちょ、それは反則だろ。大体、あの娘のとこばかり行ってるわけじゃないし」

海人は怖い上司の名を出されて思わず手を止め、ザックの飄々（ひょうひょう）とした面構えを見る。

「まあまあカッコしなさんなって。でもさあ、ちょっと信じられないよなあ」

彼は椅子の背もたれを大きくかしがせ、頭の後ろに両手をあてがって天井を仰いだ。

「確かに見たよな？ あの娘がなっがーいナイフで怪物をグサ！つて突き刺すの」

グサ、つとする動作を右手にしつつ、彼の口元は緩んでいる。

確かに見たな……そう言いたげに机に伏せる仕草をして、海人は「確かに見たな……」と改めて口にした。

「後は屋根から屋根に飛び回るし、とんでもない高さまでジャンプするし……ようするにお前は、とんでもない娘に恋しちまったわけだ。ってかそもそも人間なのかっつー話よ」

「……仕事中だぞ、そんな話しすんなよ」

「仕事中なのはお前だけだろ？ 俺はとづくにすんじまってるし。だから感謝の一言でも頂きもんだ、俺はわざわざお前を待ってやってるんだから」

だったら手伝え、と海人はニヤッと誇らしげに微笑むザックに内心毒吐く。

別に言っやってってもいいのだが、自分の仕事ぐらい自分で片付けねば刑事として失格だ。

刑事として、……これが彼の永遠のテーマである。

「……ま、がんばって彼女に手錠してみろよ」

「はあ？ あの娘は何も悪いことしてないぞ」

「なに言っってた……お前のハートを盗んだ、窃盗犯じゃないか」  
ザックは恥ずかしげもなく言いきってなお、ウインクをかますのだった。

こいつ恥ずかしくないのか？ 海人は半ば呆れ気味だったが、「ラブはハズだぜ！」といい、それぐらい臭いセリフを平然と言えるような度胸がないと駄目なのかも、と思った。

何に関して駄目なのか、それはいまいち不明瞭だが、とにかくそう感じたのである。

\* \* \* \* \*



ブラック来襲まで、9時間前。  
地下の開発セクションにて、フィールはBRSの完成を急いでいた。

そうは言っても管制室からガラス越しに兵器の開発模様を見下ろし、折につけインカムとコンピュータとで指示を出すだけで、実際に作業しているのは機械のアームである。

ナナシはというと、「兵器開発に際してのデータ抽出」という口実で別の部屋で眠りにつかせている。

本当は修復の際、必要だと思われるデータは全て抽出済み、バックアップまで取ってあるので必要なく、単に作戦開始まで大人しくして欲しかったのだ。

先ほどの様子だと暴れたり、逃げ出したりしそうにはなかったが、念のためである。

「失礼いたします。Dr. フィール、少々お時間をよろしいでしょうか」

スライドドアが自動に開かれたのを背後に感じると、部下の声が聞こえてきた。

「……なんだね？」

「国軍の幹部数名がドクターをお呼びです。恐らく、ブラック来襲に関しての話しかと」

「分かった。開発はそのまま、アズルブルーの変動値に充分注意しろ」

傍らにいた作業員に指示を出すと、フィールは歩を早めることなく部屋を出ていった。

呼び出しの相手は国軍の幹部連中。恐らくは政府要人もまじっているだろう。

地球上に国家はここ一つしかないのに、何から身を守り、何と戦う軍隊なのだろうか。

その疑問の通りに国軍の通常業務は人工島の面積拡大、機構の整備・点検が主であり、民間人からは『名ばかり軍隊』と呼ばれ雑用

扱いまでされているが、ブラックという化け物が国家を襲おうとしているにあたって、いよいよ本領が発揮出来るのだろうか。

フィールは廊下を二、三度曲がり、指紋と瞳の認証を済ませると部屋に入っていた。

暗転に閉ざされた部屋の中央につくと、ぼうつと周囲に光が浮かび上がり、それは紋章へと形を変えてフィールを取り囲んだ。

W・A・F. という文字を両手が包むようにしたデザインで、国軍をあらわすロゴマークだ。

それが5、6と闇に浮かび、またそれとは別に『 に斜線を引ただけのマークもあった。

「景気はいかがかな？ Dr. フィールグッド」

フィールの真正面にあるロゴマークから男の低い声が発せられた。

「……特に、これといって」

彼は言葉少なに答えた。

「早速本題に入るが、例の兵器の完成はいつになるかね」

「目下作業を進めています。明け方には完成するかと」

「巨人の来襲には間に合うのかな。」

戦闘に際して、我々は君の兵器とアンドロイドを主軸と考えている。ただ、ネルのたった一体だけでどこまで応戦できるか不安だが」

「……もう一体、新鋭のアンドロイドがいます」

「なに？ それは戦闘用にか？」

「ええ」

「君は戦闘用にはアンドロイドを造らないポリシーではなかったか？ ネルに関しても我々が特注したものだ。技術さえよこしてくれば、こちらで量産出来るのだがね……君はそれを頑なに拒んだ。そして今回、新鋭のアンドロイドを造ったと」

「……ええ」

今度の「ええ」には、これ以上は何も語らないといった威圧感があつた。

「ついでに言わせてもらおうと、兵器を使うのは新鋭のアンドロイド

の方です。

ネルには兵器を使うためのシステムが整っていないのでね」

「……作戦に関して戦闘要員は大いに越したことはない。

だが、君の態度にはいささか問題があるな。どうして一報よこさなかつたのだ」

「一報よこせ、ですか。私はあなたがた国軍や政府の飼い犬になつた覚えはありません。

独立した機関同士、純粹に国家の保全のために協力し合う、ただそれだけの関係です」

ただそれだけ、ファイルはさりげなく強調した。

「故に自分の手の内は明かさないと、つまりそういうことだな？」

「ええ、あなた方と一緒にです」

「君にはいちいち手を焼かせられる……まあ、この件は別の機会にしよう」

「まだ何かこの場で話すことが？」

新鋭のアンドロイドとネルの指揮は私が執ります、つまりは作戦のメインの指揮を。

あなた方の動きや作戦についてはどうぞ身内で話しあってください。我々の邪魔さえしてくれなければ、どうこう文句を言つつもりはありません」

あなた方に出来ることはたかが知れている、そう言いたげな風情で、彼は冷然と言った。

「……実に不快な物言いだな。結果は出してくれるんだろうね」

男の声に怒気がにじむ。

「アンドロイドは、倒せと命令すれば倒します。

人間のように逃げ出すことはしません。私に言えることは、それだけです」

おもむろに踵を返し、彼は出入り口に向かおうとした。

「……君はまだ、我々を憎んでいるのかね？」

その言葉に、ファイルの足が止まる。

そして肩越しに振り返り、W・A・Fという、国軍のマークを睨みつけるように言った。

「少年は今でも憎んでいる。  
自分の友、街、愛する風景全てを奪っていった連中をね」

語尾を言いきらぬうちに歩き出し、彼は部屋の外へと出ていった。彼の皮肉めいた言葉が余韻となって室内に浮かぶ中、マークたちは静かに語り始める。

「別に我々が奴の愛する風景とやらを奪っていった訳ではないのだがな。

奴は「軍」「政府」と聞くだけで拒絶反応を示す。子供染みていることこの上ない」

「しかし我々は、その子供の編みだした技術にすぎるしかない。何とも情けないですな」

「何をおっしゃる。大人には子供のおもちゃを取り上げる力があるのですよ」

「いずれにせよ、人類が再び外の大陸に戻って生活するためには、まず地球上にあふれた黒い化け物たちを掃討せねばならない。放射能という瘴気（きじょうき）の中、その作業が人間にとっていかに至難であるかは多言を要さないだろう。戦闘用アンドロイドを量産し、化け物どもの駆除にあてるのが一番の解決策だが、奴はその製造技術を我々に譲ろうとはせん。

一体何を考えているのか。これ以上奴のアンドロイドの独占が続くとなれば……」

一瞬、場に「言わずもがな」の沈黙が降りた。

「……全ては、人類のために」

「人類のために」

「ために」

リーダー格の男の声に半歩遅れて、皆が一樣に口をそろえた。

「？人類？のために……。」



ブラック来襲まで1時間前。  
ナナシはエレベーターの中にいた。

それも通常のエレベーターではなく、地下から最上階までの直通エレベーターである。

四角い箱の急上昇による引力を身に感じつつ、ナナシはふと右の掌を見つめた。

開かれた五指の中央には黒い小さなチップが一つ、ぽつんと乗っている。

「ブラック、ロックシューター……」

ナナシは思わず声をもらした。

そう、このチップの中には？ブラックロックシューター？が入っているのだ。

過去に幾多の人間の命を奪い、ブラックを倒し、そして盟友を灰<sup>かい</sup>燼<sup>じん</sup>に変えた兵器。

自分が使っていたものとは別物であるとはいえ、チップを見る彼女の心境は複雑だった。

「使い方は教えるまでもないな。君自身がよくわかっているはずだ」  
チップを渡される際、ファイルに言われた言葉だ。

更に彼は続けた。

「作戦にあたって、国家へと来襲するブラックの名が確定された。

その名も？クリプトナス？……作戦中、ブラックを指す際はこの名で呼ぶ。分かったな」

そして彼は右の人差し指と親指に挟んだチップを彼女に差し示した。

視界の中心に据えられたチップを前に、彼女はふと視線をそらす。

「……怖いのか？」

「おまえだって怖くないのか。それを受け取ったら、私は何をしだ

すかわからないぞ」

「脅しになってないな。君は未来を変えに来たのに、また同じ歴史を繰り返すというのかね。委細構わんが、私は君にこれをやるうと  
いうのだ。後は君自身で決めるがいい」

抑圧的なトーンでチップを突きつけられ、ナナシは奥歯を噛んで  
逡巡したのち、ぱつと手荒くチップを奪い取った。

それが先ほど返してやった左腕の黒い腕時計にリードされること  
なく、そのまま拳に強く握られているだけなのを見ると、フィール  
は再び冷静な口調で話し始めた。

「君にはこれから、作戦開始地点へと向かってもらう。

タワー屋上にあるエア・ポートだ。そこに君が作戦時に使用する灰  
色のエア・グライドが一機ある。作戦開始まではそこで待機。何か  
あれば、こちらから連絡を入れる」

そう言いながら、フィールは左のこめかみをとんとんと軽くつい  
た。

ナナシの頭につけたヘッドギアのインカムを指す動作だ。

相手の声を聞くためのヘッドフォンも左耳にあてがわれている。

作戦時のコミュニケーションはこれらの機器を介して行われる訳  
だが、これが頭についているのは首輪をつけられているようで嫌だ  
った。

そして彼女は最上階までの直通エレベーターに乗り込み、エア・  
ポートに向かっている。

彼女を導いているのはその頭に取り付けられたヘッドギアという  
名の首輪だ。

腹立たしくてすぐにでも外してやりたいが、それをしたところで  
何にもならない。

彼女は全身の力が抜ける思いで、背中からべたつと壁にもたれか  
かった。

そう高くもない天井を仰ぎながらに思う。

私は一体、この時代に何しに来たのだろうか……。  
荒廃した未来において、アンドロイドはブラックを狩って生きて  
いる。

だが、それだけだ。生きているだけ。何の目的もなく、ただ生き  
続けているだけ。

それに一体何の意味がある？ 私が私というココロを持ってから、  
ずっと疑問だった。

「あのね、ナナシ」

でも、MEIKO（メイコ）がいた。

他にもリンや、レン、私には仲間がいた。

だから疑問を忘れていられた。

仲間と話す時には、相手の言葉を聞いて、返事を考えなくちゃい  
けない。

そんな時に例の疑問について考えていたら、とてもじゃないが会  
話が成立しないだろう。

でも……私は、MEIKOを、殺してしまった。

リンも、レンも仲間はみんな目の前からいなくなった。

もう私に話しかける者はいない。私はもう返事を考えなくていい。

ただ、その分、あの疑問について考えるだけの途方もない時間が  
のしかかってきた。

私はなんで生きている？ そもそもなんで生まれた？ どうして  
MEIKOを殺してしまった？ 私にそうさせたのは誰のせいだ？

私か？ この世界か？ 疑問が疑問を呼んで渦を巻き、そのが

んじがらめの鎖から逃れようと私は自身の記憶を消そうとした。が、  
その時、MEIKOの言葉が浮かんだ。？もう逃げないよ？と私は  
口にした。

そして胸にうず高く積っていた疑念は、この世界そのものに対す  
る破壊の衝動へと変貌して、私をしゃにむに突き動かした。

MEIKOの言葉からトラッシュユールが過去へと通ずるトンネ  
ルだと聞いて、そこに行きさえすればこの世界は変わるのだと、私



は直感した。そして直感のままに行動した。

しかしその直感の結果が、今の私だ。

一体、何をしている。こともあろうくに殺すつもりだった相手のいなりになっっている。

もう逃げないよ……私はそう誓ったが、今にして思えば、一体何から逃げないという意味なのか、分からなくなってきた。

ナナシは気付けば、左手首につけた黒い腕時計の文字盤に目をやっていた。

これが手元に戻ってきた時は心底安堵した。

BRSやクロガネなど武器の入ったチップをインストールするためのチップリーダーであり、これからの戦闘に欠かせないものだが、何よりこの腕時計はMEIKOの形見なのだ。

チツチツ……かすかな音を立てて、か細い秒針が刻々と時を刻んでいる。

彼女が時計を見ているのは、例によって時刻を確認している訳ではない。

この文字盤を覆うアクリル強化ガラスの中に、MEIKOが息づいているような気がして、落ち込んだ時や行き詰った時は、つい無意識のうちに眺めてしまうのだ。

そして静かに目を閉じると、MEIKOの声が聞こえてくる。

「いい？ ナナシ、笑顔のコツはね」

ハツとした。

思い出せないのだ。

笑顔のコツはね、……その次の言葉が全く思い出せない。

アンドロイドは頭の記憶装置に知識や映像が集積される。

つまり、人間と違ってアンドロイドの記憶はいつになっても色褪せないし、また忘れることは確実がない。記憶装置に異常がない限りは。

ナナシは記憶に関して人間との違いなど分からないが、それでも

何かを忘れる？という経験が今までになかったため、大いにうろたえた。

額に手をあてて「どこだ？ どこだ？」というように何度も首をふる。

ズキ……頭の最奥に痛みを感じた以外は何も見つからず、記憶を探した分の徒労感と、心にぽっかりと穴が空いたような喪失感が彼女を包んだ。

「ウソだ……」

思わず声がもれ、彼女はまたぐったりと壁にもたれかかった。

そして途方に暮れたように天井を見上げる。その目は今にも泣きだしそうだった。

チン、とベルが鳴って、エレベーターが止まった。

目的階についたかと思いきや、開いた扉の向こうに誰かが立っている。

ルカ。彼女はすぐにその名を思い出した。肝心の記憶は思い出せないのに。

ルカは桃色の長い髪をゆらりとなびかせつつ、ナナシには一瞥もくれずエレベーターに乗り込んできた。

そしてボタンの近くに立つと、控えめな所作で『閉』のボタンを押した。

「……このエレベーターは直通だと聞いていたが」

エレベーターが動き出して間もなく、ナナシはいつもの冷静な調子で訊ねた。

「フィールの私室があるフロアには止まれるようになってるの。というより、このエレベーターは、通常は地下とフィールの私室を繋げるためのものよ」

ルカは振り返らず、ボタンと液晶のついたステンレスの板を見つめたまま言った。

その声はナナシと同様にいたって淡泊である。

「どうして乗ってきた？　もしかして、お前も戦うのか？」

「……別に、なんだっていいでしょ」

語尾に棘をつけた言い方をされ、ナナシはそれ以上言及しなかった。

相手に気を使った訳では当然なく、単に「なんだっていいのなら、なんだっていいのだろう」と思ったからだ。ただでさえ面倒な考え事をしている最中、余計な疑問を増やしたくなかったというのもある。

沈黙が降り、グユイイーン……というエレベーターの上昇音が場を包み込む。

ルカはステンレスの表面を凝視してミステリアスな雰囲気をかもし、ナナシは白い床に目をやって思案にふけっている。  
と、

「あなたはいいわね」

ルカは変わらず顔を向けることなく、ナナシに話しかけた。

「……何がだ？」

声にやや遅れて、ナナシは彼女の後頭を見やる。

「あなたは戦えるんですもの。私には出来ない」

「それが？」

「うらやましいのよ。ミクにはね、もう歌を取られてる。」

私はフィールにとって、私だけの価値を得たいの」

「よくわからないが、お前が戦えるようになったって、私やネルの二番煎じじゃないか？」

ルカはとっさに振り返った。

二番煎じ、その言葉が頑なに固定されていた彼女の首を突き動かした。

そしてナナシを見る目は鋭さを帯び、今にも喰ってかかりそうな気配さえある。

「分かってるのよ、そんなの。」

でも、戦える身体になったら、フィールを守ってあげられるじゃない

い！

他のことだつて出来る。私は私の力で、なんだつてフィールにしてあげられるんだわ」

寡黙かむくな表情を崩し、ルカは興奮した口ぶりで一氣にまくしたてた。対するナナシは話が読めず、どんな返事をすればいいかと言葉を探している。

「フィールは、お前にとつてそんなに大事なのか？」

「そうよ、私のパパだもの」

「パパ……？　ますます分からん。リンが「ババ抜きしよう！」つて言ってきたことはあつたが、それとは違つのか？」

「……もういいわ」

ルカは相手にならない、といった風情で向き直り、また元の姿勢になつた。

なにがなんだか、ナナシは不思議そうに彼女の後姿を見ていたが、ふと入り口上部の階層を示す表示板が目に入った。

豆電球の形をしたライトは右から数えて二番目が光り、間もなく次のライトが灯つた。

チン、エレベーターが止まり、ドアが自動に開けられる。

「おまえ、降りないのか？」

廊下へと出ていこうとする際、ルカが一步も動こうとしないので声をかけた。

「……これ、下りのエレベーターだと、思つて……」

ルカは恥じらうようにうつむいて言い、

「別に、なんだつていいでしょ」

と顔を上げて言い直した後、すかさず『閉』のボタンを押した。

「下りの、エレベーター……」

閉じられた銀幕模様のドアに向かい、ナナシはルカの言葉をぼそつと復唱するのだった。

\*\*\*

エレベーターを出た奥のところ、外の光が彼女を待っていた。彼女は気の進まない足取りで光に向かい、外へと出る。

エア・ポートの中心には自分が使用することになっている灰色のエア・グライドがあり、隣にはオレンジのエア・グライドと、そして操縦者であろうネルが機体の横に立っていた。

ナナシはゆっくりと歩み出していきながら、辺りを見渡す。

左右にはユートピア・タワーの尖塔部分がそびえ、片方の塔の先端は管制室となっており、フィールはそこから彼女を見下ろしていた。ふと彼女がこちらを見上げて目があったが、本人は気付いていないだろう、すぐに視線を前に戻した。

そしてナナシは自分の機体の横で立ちどまり、ちらとネルを一瞥<sup>いちべつ</sup>。ネルはまるでナナシなど意に介さず、表情のない横顔を見せたまま佇んでいる。

もう一度ちらと見やるが、同じことだった。

「……いいか、ナナシ」

急に左耳から声がし、ナナシはハっとした。

「誰だ？」

「フィールだ。これより作戦について確認しておく」

フィールには名前で呼ばれたことがなかったので、ナナシは誰が語りかけてきたか一瞬分からなかった。

「……確認、といっても小難しいことは何もない。

相手の1km圏内までエア・グライドで接近し、BRSをインストール。

後はそれでクリプトナスを撃ちぬくだけだ。ただし、BRSのチャージは5を限界とする」

「分かっている。経験上、それ以上のチャージは自分に危険だからな」

「それだけではない。次元に干渉するのだ。厳密には7以上のチャージからだ……」

「次元？」

ナナシが疑問符を発するも、フィールは黙って答えなかった。

「とにかく作戦自体はいたってシンプルだ。その分、確実に成功させてもらおう。」

他に聞きたい事は？」

「……そういえば、エア・グライドでこの島を出る訳だが、ドームはどうするんだ？」

あれがある限り、外には出られないんじゃないか？」

作戦に関係しないことは答えてくれないだろうと思ひ、ナナシは違う質問をした。

「ドームは開ける。瘴気は何分、何時間という単位でなく、長期間に渡って浴び続けると身体に害を及ぼすものだ。ほんの数分ならドームを開けても問題ないし、それに民間人を屋内に閉じ込めておくいい口実になる。『ドームが故障しました。瘴気に触れますので、家の外には出ないください』とアナウンスすれば、気味悪がって誰も外には出ない」

フィールは淡々と回答した。

「さて……予定時刻より30分ほど早いけど、これより作戦開始だ。どこかの気の早いお偉い方が、もう民間に向けて『ドームが壊れた』とアナウンスしてしまつたらしい」

「済ますなら早い方がいい。とっとと終わらせる」

「いい返事だな。では、武運を祈る」

回線が閉じられ、ナナシは背後を振り返つた。

自分が使うエア・グライドは、終末世界で使っていたのとまったく同じタイプだった。

これも自分の記憶を見たフィールの計らいだろうか……ナナシは頭の片隅でそんなことを考えつつ、エア・グライドに乗り込み、おもむろにエンジンを入れた。

ほんの少し上昇すると、地面のさえぎりがなくなつて都市並みがよく見下ろせた。

前方を見ると、黒い点が水平線に溶け込んでいる。よく目を凝らしてみないと判別できない程の小ささだが、それが今回の目標？クリプトナス？だ。

ナナシのツインテールが風を受けて静かになびきはじめた。

ドームが開かれ、外からの風が入ってきたのだ。

ナナシはエンジングリップを限界まで絞り、後はペダルを踏みさえすれば発進出来る。

そして左耳に声がした。

「……いけ」

フィールの声を合図に、ナナシはエア・グライドを急発進させた。クリプトナスを視界の中心点として、以外の景色は猛スピードで後ろに流れていく。

もっと早く、早く、スピードメーターの針はとっくに振りきれていたが、それでも中々縮まらない距離にナナシはじれったさを感じた。

ネルが飛び立ったのかもろくに確認していない、いやどうでもよかった。

どうせBRSの引き金を引くのはこの私。ならとつと引いて終わらせる。

ナナシは半ばやけくそな気持ちで機体に鞭を打った。

発進からものの1分足らずで島の外へ出、液体地面に目もくれることなく直進する。

判然としなかったクリプトナスの点が次第に輪郭を持ち、人型となり、そして、

「射程圏内だ」

フィールの鋭い声が左耳に聞こえ、とっさに急ブレーキをかけて機体を停止。

ついでBRSのチップをホットパンツのポケットから取り出して腕時計にリードする。

「インストール！」

チップを入れる時は敢えて迷わなかった。

一度ためらえば、永遠にリード出来ないと感じたからだ。

白い電光がほとばしり、左腕が光の中で急速に形を変えていく。

覚えのあるずっしりとした重量感が左腕にもたらされる。

そして次の瞬間には、黒き砲塔が自分の身体の一部として出現していた。

ナナシは握った拳を相手に向ける要領で左腕を振り上げ、砲塔を構えた。

狙いはクリプトナス、クリプトナス……その筈だが、MEIKOの姿がちらついて止まない。

その幻覚を振り切り切るように身体の奥に力を込め、BRSをチャージする。

砲塔の側面に10つけられた小窓が一つ、二つ……と灯っていき、それが五つに達すると、彼女の左目に？蒼い焰？がぼつとゆらめき始めた。

そして改めて銃口を対象に向けて集中する……。

MEIKOとクリプトナスの姿がどうしても重なって彼女をためらわせるが、これ以上撃たずにいるとチャージの段階が5を超えてしまう。

ナナシは止むなく……MEIKOに向かって引き金を引いた。

すると、MEIKOの姿はふつと消えた。

BRSから放たれた波動は？ズオオオオ！？という轟音を伴って対象へと直進していく。

そして着弾、と思われた刹那、

「……っ！」

クリプトナスは自身の身体をバラバラに分解し、そればかりか、ちりぢりとなった黒い破片がそれぞれ意思を持ったかのように猛烈な勢いでナナシめがけて押し寄せてきた。

逃げる間もなく彼女は黒い破片の無数なる大群に飲み込まれた。



が、特に攻撃されることはなく、大群の狙いはあくまでトランジスタのようだった。

大群が全て自分の身体を通り過ぎていくと、彼女はすぐに後を追った。

失敗した。自分は失敗した。

街が、リンが、世界がブラックに飲み込まれていく場面が思い起こされる。

フィールから特に連絡がないのも不気味だった。

世界を壊す、そんな言葉も、無我夢中でアクセルを踏む今の彼女の頭にはない。

t o c h a p t e r 3

「ドームが故障したあ？」

料理番組の途中に割り込んできた臨時ニュースを聞きつけ、のき爺は店先へと出た。

外へ出ると「ウウ〜」という物々しいサイレントと共に、『ドームが故障しました。瘴気に触れますので、速やかに屋内へと避難してください。繰り返します、ドームが……』と女性の声でアナウンスが流れた。

往来の人々はしばらくぼかんとしていたが、「きゃあああ！」という女性の金切り声を皮切りに、みんなドタバタと一斉に動き出して近くの店々に駆けこんでいった。

「入れてくれ！」

「うちはもう満杯だ！ あ、そこのお前どさくさに紛れてパンに手を出すんじゃない！」

「ママー、コシヨウってなーに？」

「ほら、早く行くよ！ 外の風は毒を運んでくるんだから！」

いつもの平和な通りが一変、あひぎょうかん阿鼻叫喚の喧騒にあふれかえる。

しかしのき爺はかくものんきに、老眼鏡のつるに手を当てて空を見上げていた。

目を凝らして見るも曇り空が広がっているで、ドームの状態がどうなのか分らなかつたが、「そもそも透明なんだから見えるわけないわな」と内心呟いた。

そして首の疲れを感じつつ顔を戻すと、「おっ」とある二人組に気付いた。

「ジャックとワトンじゃないか、久しぶりだなあ」

「ああ、二連休もらったんで、昨日家でぐっすり休んだから今日は街を散歩しよう……っと思ってたらこれっすよ」

ジーンズに柄シャツというカジュアルな格好をしたへきがん碧眼の青年は、

のき爺に負けず劣らずの悠長な口ぶりで話す。

傍らには彼の弟分であるワトンが口をだらあっと開けて通りの向こうを見ている。

相も変わらず、ボウリング玉に申し訳程度に手足がついたような体型だ。

「店ん中入れてもらえますか？ 外にいるのはなんかヤバそうなので」

「構わんぞ。ちと狭いがね」

のき爺は道を開けてやるために脇へどいた。

ジャックが一足先に店内へ入って、ワトンもそれに続くこうとする。のき爺はそのでかい図体が当たって店先に出している花壇のセットが倒れやしないかヒヤヒヤした。

結果的には何事もなく彼は店内に入ったが、彼の常にぼうつとしている様から「別に外に置いて野ざらしにしても大丈夫なんでは？」とのき爺はなんとなく思った。

そして自身も花壇のセットを「よいしょっ」と持ち上げて店内に引っ込もうとするも、入口を横一杯にワトンの巨体が占領していた。それものき爺の背丈からは彼のお尻がちょうど顔の位置に来る。

「あ、おい、ケツ！」とのき爺は花壇の重みと格闘しつつ声を上げ、「もつとつめてくれんか」と先頭にいるジャックに言った。

しかし当の本人は、

「あれ、グミちゃんじゃないか！」

と緑髪の可愛らしい先客の姿に気を取られていた。

ついで奥には、貴婦人風の中年女性がスツールに足を組んで腰掛けている。

いつも店に来るお喋り屋のマダムだ。

ジャックは一礼しようとしたが、彼女が「ふん！」と鼻を鳴らしていかにも不機嫌そうなので止め、顔を再びグミに向けた。

後方ではのき爺がワトンのケツに何度も体当たりをかましては弾かれている。

「奇遇だなあ。今日はどうしてここに？」

「あ、それよりジャックさん……」

グミは入り口付近を指差し、ジャックはその方を見るやさっと身体を奥へやった。

するとワトンが一步進んだタイミングと、のき爺がシオルデータックルをかますタイミングとが重なり、のき爺はタックルの勢いそのまま「いでえ!？」と豪快に転倒。

大人しくしていれば起こり得なかったハプニングに、

「元氣なじいさんだな」

と、遠からず転倒の原因を作った張本人が素知らぬ顔で呟いた。

「まったく、散々じゃわい……」

のき爺は愚痴を言いながら花壇のセットを店へとしまい込む。

ちつとは手伝わんか、と説教を垂れてやろうかとジャックを見た。

「今日はリンちゃんと広場で一緒に花売りしてたんです。」

のき爺さんにも『リンを見てくれ』って言われてたので

「ふーん、で？」

「そしたらちよつと目を離れた隙にいなくなって、探しても見当たらないから店に帰ったのかなつとここへ来てみたらさっきのアナウンスが……」

「ドームが壊れたとか言ってたな。ぶつちやけ瘴気とか実感湧かないけど」

二人は店内左奥の花のショーウィンドウの前に立って会話している。

リンのことが心配なのかグミの表情は暗く、声にもいつもの張りが無い。

こんな雰囲気です説教するのも気が引ける、とのき爺はドアを閉めようと振り返った。

「ん？ どうしたんじゃ、ワトン」

ワトンが玄関の溝に立ち、「あー」と大口を開けて空を見上げていた。

不思議がったのき爺も空を見上げてみると……ぎよつとした。

「な、なんじゃあありゃあ……」

空一面が無数の？黒い点？によって覆い尽くされている。

それらは空に浮かんでいるというよりは、透明な仕切り板に張り付いているといった印象で、点の一つ一つがあたかも生き物のようにうごめく様は見るからに異常な光景だった。

のき爺は「ドームが閉まっているんだ」と気付くや、

「降ってくるだーあ」

状況にそぐわないワトンの緩慢とした声を聞いた。

はるかな頭上から点状の黒い物体が落下してくる。

それは近づくにつれて大きくなり、のき爺の目にはぶるぶるとしてゼリーの水玉に見えた。

そしてポットンというぐんにやりとした響きの音を立ててのき爺らの前に落ちてきた。

のき爺は反射的に両腕でガードする構えを取ったが、身に何も起こらないので構えを崩しておそろおそろ水玉の様子を見てみると……それは横になった卵のような丸から、表面がぐにやぐにやと波打って二本の足が生え、腕が生え、顔が出来て獣の形となり、「お……お……」とわななくのき爺を見て、ギラツと黒光りする牙を剥き出しにした。

「のわあああああああ！」

のき爺は思わず絶叫する。

「ど、どうしたんっすか!？」

驚いてジャックが店先へと出るのも間もなく、

「うおおおおおおお!?」

彼ものき爺と同様に絶叫するのだった。

一見して毛並みが黒すぎる犬かと思っただが、二本足で直立した上に十本指に爪らしき鋭利な刃を突き出して今にも襲いかかってきそうな気配に満ちた犬がいるだろうか。

それに全身の力で「ノー!」と答えるかのごとく、ジャックはと

つさに腕を取つてのき爺を店の中に引つ張り込み、「どけ！」と怒鳴ってワトンの前に立つと、両腕を広げてアコーデオンドアの取っ手を掴んだ。

そして化け物が地面を蹴った刹那、大胸筋を内側に使つて勢いよくドアを閉める。

ズドン！ と化け物はドアに頭突きをかます破目となり、そのダメージに化け物が怯んでいる隙にジャックは急かしい動作ながらどうにか錠を下ろすことが出来た。

「あ……あぶねえ……」

とジャックが安堵しているのも束の間、ドン！ ドン！ と化け物が体当たりしてドアを突き破ろうとしてきた。

「先ほどから一体何の騒ぎですか！？」

マダムが慌てた面持ちで身を乗り出してくる。

「い、犬みたいなのが暴れてんです！ 俺にも何が何だか！」

ジャックはワトンと共にドアに体重をかけて化け物の猛攻をしのぐのに必死だった。

「犬があゝ？ どれどれ……」

マダムは二人の横から外の様子を見ようと顔を出した。

見ない方がいいですよ、とジャックが言おうとしたのも間に合わず、

「きゃあああああああ！……ああ」

ガラス越しにキラツと化け物に睨まれ、マダム、失神。

「言わんこつちやない……グミちゃん、頼む」

厳密には言えてないので筋違いな物言いだ、ジャックは背中中でドアを押さえながら、店の奥で不安げな表情で突っ立っていたグミに言った。

グミはこくつと頷くと、床に倒れているマダムの傍に駆け寄った。「そ、そついやあ、のき爺さんはどうしたんだ？ 姿が見えねーけど」

背中へ受ける衝撃が段々に強くなっているのを感じつつ、グミを

見下ろして言う。

「さつき何も言わないまま裏に行っちゃいましたけど……」

「まさか逃げたんじゃねーだろうな？ あのじいさん」

続いて「このままだと突き破られちゃうぞ」と言うともまもなく、彼の目に店の奥から出てくるのき爺の姿が見えた。

その手には？ ショットガン？ が持たれている。

「……の、のき爺、それ使えるんすか？」

驚いた顔で言うも、のき爺は「やるしかねえだろ」と言いたげな険しい表情で答える。

「じゃあ、俺が3秒数えたらここをどくんで、ドアごとかましてやってください！」

彼はくるつと反転して横でドアを支えているワトンの肩を叩くと、「3秒数えたら横の花壇に飛び込むんだ」と耳打ちし、「さん……にい……」とカウントし始めた。

のき爺がガチャツとショットガンの銃口を向ける。

「……いち、ゼロッ！」

言いつけ通りにワトンは脇の花壇に向かってダイビング。

彼の背中をクッション代わりにしてジャックもダイビングし、無防備となったドアは化け物の体当たりを受けて大きくかしぎ、今にも突破されかねなかった。

そこへのき爺は落ちついてショットガンを構え 何かカツコイイことを言おうとしたが思いつかず 指先に力を込め、引き金を引いた。

ズバン！ あまりの反動にのき爺は後方へと吹き飛んだ。

尻もちをついた先には両耳を塞いで戦々恐々としていたグミがおり、彼女は「いてて……」と頭を押さえる彼に「大丈夫ですか？」と声をかけつつ、ドアを見やった。

ドアのガラスが砕け散り、硝煙が舞い、火薬の匂いが充満し、辺りは嵐が去った後のような異様な静けさに包まれている。

「やったのか……？」

ジャックはやおら立ち上がり、ガラスの破片を踏みながらおそるおそる店先を覗いた。

化け物は銃弾を食らって通りの半ばまで吹き飛ばされ、身体をぴくぴく言わせている。

どうにか倒したらしいが、彼は目を疑った。

化け物がうごめきを止めたかと思うと、溶けだして黒い液体と化していくのだ。

え、なんだよ、これ、……そんな声を漏らすにもあたわず、彼はただ息を呑んで化け物が黒い液体となっていくのを見つめていた。

続いて辺りの様子が目に入り、彼は戦慄した。

目の前にあるような黒い液体のしずくが続々落ちてくるかと思うと、それらは獣の姿となって通り一帯を占拠していくのである。

「おい……みんな、店の奥へと逃げた方がいい……こいつあやばい……」

「ど、どうしたんですか？」

グミが驚いた様子でたずねる。

「通り一杯、いや、この分だと街全部だ！ 化け物が空から降ってきてやがるんだよ！」

ジャックは怒声半ばに振り返り、まず花壇の上で伸びているワトンの尻にビンタを一発。

巨体がのそつと動き出すのも確認せず、グミに膝枕をしてもらう形で仰向けになっているき爺に話しかけた。

「立てますか？ 早く避難した方がいい。また今みたいなのが襲ってくるかも……」

「ああ、大丈夫だ。避難するなら二階よりも地下の工房がいいかもしれんな」

「地下の工房？」

「……説明は後だ。マダムを連れて、さっさと逃げ込もう」

ジャックはマダムをおんぶし、

「ワトン、行くぞー！」



と上半身を起こしてぼうつとしているワトンに言った。

巨体で花壇を押しつぶしたせいだろう、身体中に土や花びらをつけている。

あの時「どくんだ」というよりも「飛ぶんだ」と言った方が理解してくれるだろうと思っただけでそう耳打ちしたが、クツシヨン代わりにしたことも含めて悪いことをしたなとジャックは思った。

そしてのき爺が先頭となって皆を地下の工房へと案内する。

店内とは一枚の引き戸で仕切った裏の作業場。

そこには二階へと続く階段もあり、実は階段脇にある床が地下へと続く入口だった。

一見すると他と変わらないリノリウムの床だが、その部分にだけ取っ手があり、ハッチ式に床が開くようになっていた。

「すごいな。秘密基地みたいだ」

のき爺が四角いハッチを開き、地下へと続く階段が現れるとジャックは思わず言った。

「さあどんどん行ってくれ。地下に着いたら柱のところに照明のスイッチがある」

それじゃあ、とジャックを先頭に階段を降りていく。

通路が狭く、ここでもワトンの図体が問題だったが……どうにか収まった。

それでももつつかえながら進んでいるので、のき爺は木目の引き戸とワトンの背中を交互に見ながら、いつ敵の襲来があるか緊張しっぱなしだった。

しかし遠くで物騒な音がする以外は何もなく、彼は階段を下りるときとさとハッチをしめた。

「さっきのシヨットガンといい、のき爺さん、あんた何者なんです？」

マダムを近くにあった椅子に座らせ、部屋を一通り見渡してからジャックが言った。

ログハウスのような壁や床の作り、書類と工具とで散らかった製

図机に、部屋の奥には物々しい機械が数点、暖炉まであつてさながら発明家が隠居暮らしする山小屋の有様だった。

「まあちよいと裏稼業でね。正直に言つと、あんまり触れられたくないな」

階段をゆつくりと降りながら、のき爺は苦笑いを浮かべて答えた。ジャックも詮索を止め、とりあえず危機を脱した安堵でため息がこぼれた。

と、

「リンちゃん、大丈夫かなあ……私のおじいちゃんやおばあちゃんも」

グミが伏し目がちに言葉をもらした。

その目は今にも泣きだしそうな光を宿している。

「……俺がひとつぱしり見てみようか？」

「なにを言つてんだ！ 外はさつきみたいな化け物であふれてるんだらう？」

「そうですね、そのショットガンがあれば……」

ジャックは振り返つてのき爺の持つショットガンを見やった。

「駄目だ」

「だつてリンちゃんのこと気にならないんですか？」

「あいつは大丈夫だ、だつて……」

アンドロイドだから、と言いつうになるのをこらえる。

「今頃はきつと誰かの店か家にかくまつてもらつてるよ。あいつは街の人気者だからな」

「そうだといいんですけど、やっぱり心配ですよ」

「行くんなら、せめて騒ぎが落ちついてからにした方がいい。今外に出ていって君に何かあつたら、それこそリンになんて言つたらいいか。とにかく、今はここで耐えてくれ」

「……分かりました」

渋々言つて、ジャックは壁に腰を下ろした。

彼の弟分であるワトンは、製図机の上にあるものが珍しいのかし

げしげと眺めている。

「あんまり触るなよ」

のき爺は腰かけた階段の上からワトンに言い終えると、当てのなさそうに宙を見た。

リン、早く帰ってきてくれ、見上げる天井に心の中で呟いた。

\* \* \*

街は謎の黒い化け物たちに占拠されつつあった。

人々は屋内に籠城して直接の被害を避けていたものの、あわれ一人の女性が路上に取り残されてしまっていた。

一匹の化け物に行く手を阻まれ、恐怖のあまり足がすくんで動くに動けない。

化け物はシャキンッと鋭い爪を突き出し、二本足でジリジリ、ジリジリと歩み寄る。

屋内からその様子を見ていた人々はこれから最悪の事態が起きるのだと想像し、視線をそらすのと同時に無力感を覚えた。

そして化け物が飛び出す構えをとり、女性の命運ここまでかと思われたその時！

「まーてまてまてまてーい！」

化け物はピタッと立ちどまり、声のした方を仰ぎ見た。

人々も同じように反応し、「あれっ！」と一人の女性が指差した先には誰かが民家の屋根の上で仁王立ちしている。それもまさに？ヒーロー？といった風情で。

しかも人々を驚かせたのは、そのヒーローが年端もいかない子供だったことだ。

「子供、子供だ！」

「確かにな……っというか」

一人の男がガラス越しに目を凝らす。

「あれ、？リンちゃん？じゃないか……？ 変なシルクハットと仮

面をつけてるけどさ」

ヒーローは「PIYO MART」と店名の記された白いエプロンを着て、マジシャンがするような黒いシルクハットを頭にかぶり、更に顔の上半分を奇怪な羽毛のマスクで覆っている。

それらはヒーローのパワードスーツとして戦闘を円滑に行うための重要な意味が……あるようには到底見えない奇抜で統一感のない格好で、人々の首を一樣にかしがせた。

「誰が呼んだか知らないがッ！ 卑怯と叫ぶたらこの私ッ！」

ヒーローはバツ、バツとキレ味鋭くポーズを決めながら啖呵を切っていく。

どこかで聞いた台詞だな……と人々が顔を見合わせるのも束の間、化け物が注意を再び女性に戻して、今にも襲いかかるうとしていた。「卑怯戦隊ッ！ ウロ ……」

「えっ！？ ちょ、待ってよ！」

ヒーローは慌てて飛び出し、女性に襲いかかるうとした化け物に飛び蹴りを一発。

屋根からジャンプした拍子にシルクハットが取れ、ヒーローの金髪頭が露わになった。

ガシャン！ と化け物は店のガラスに叩きつけられ、窓際にいた人々は慌てて退く。

「最後まで聞けオラァー！ ……まあ、もういいや」

ヒーローは礼儀知らずな化け物を一喝、次に落ちついた所作でポケットからチップを取り出した。

そしてバツと大げさに腕を広げ、

「インストール！」

左腕のリング型デバイスに勢いよく挿入した。

黄色い電光がほとばしり、彼女の両手に星をも砕く金属のグローブがはめられた。

「……さあて、かかってこい！」

右手でクイ、クイツと化け物を挑発すると、ゆるやかにステップを刻み始める。

化け物はゆらりと立ち上がり、一步、二歩と助走をつけるや飛びかかってきた。

常人には目にも止まらぬ速さでもヒーローにすればカタツムリ同然の動きで、

「甘い！」

と化け物の繰り出した爪の攻撃を左にスウェイ、ついでカウンターのアップパーを見舞い、宙に浮かび上がったところをフックで仕留めようと右腕を振り上げる。

「必殺　　！」

言ったはいいものの適当なネーミングが思いつかず、

「　　とりあえずパーンチッ！」

ズッドゴオン！ と強烈な右フックが化け物の横っ面に炸裂した。

化け物は地面に叩きつけられ、ぴくぴくと言って虫の息である。

人々は「オオー！」とこそぞって歓声を上げ、ヒーローの勝利を讃えた。

「あ、あんたは……」

ヒーローに命を救われた女性が、まだ恐怖の抜けきらない表情で言った。

「……リンちゃん？」

「ウロイエロー！」

ヒーローはビシつと人指し指を向けて呼び間違いを指摘した。

「いや、リンちゃんです」

「ウロイエロー！」

ヒーローは頑として認めないが、しかし、彼女はどう見ても？リン？なのであった。

t o b e . . . . . c o n t i n u e d .

&l t ;&l t ;C h a p t e r 3 &g t ;&g t ; (後書き)

次回 予告

R o c k ・ 1 1 ? 君の名前は？

乞うご期待

次回の更新は8月28日になります。

## Rock・11？君の名前は？

エインセルは上空より飛来してきた多数のブラックに占拠されていた。

指揮官のいない黒き暴徒たちは、家屋を壊し、通りを荒らし、その一体一体が好き勝手に暴れ回っており、優雅で活気あふれていた芸術の街は今や荒涼の最中にある。

ブラック襲来直前に緊急警報が発令されたのが幸いして、住人はブラックが来るより前に屋内へと逃れることが出来、まだ人命にかかわる被害は出ていないものの、ブラックの凶暴性からすれば籠城もいつまで持つか時間の問題であった。

この事態にエインセル警察署は武装、戦闘要員の少なさから国軍の一個師団が来るまで本庁から待機の命を受けていたが、近くの民家から『怪我人が出た』との一報を受け、本格的なブラックの駆逐作戦に先立ち、何名かの署員を救出隊として編成して送りだすことになった。

「なあ海人、刑事になる時さ、？化け物？を相手にするなんて考えてたか？」

助手席に座るザックが、いつもの陽気な表情をやや強張らせて訊ねてきた。

作戦開始を前に緊張しているのだろう。目の前のシャッターが開かれれば、自分たちは化け物の群れの中に突っ込んで行かなければならないのだから。

「いや、全然。だって刑事ドラマで化け物を相手にする奴なんてあったか？ 普通そういうエイリアンみたいなのと戦う時は、いつも軍隊が頑張ってただろ」

緊張をほぐそうと、車のハンドルを任された海人は努めて多弁になる。

「確かにな。エイリアンに手錠をはめる映画なんて観たことねえ」

「っていつか、エイリアンに手錠をはめても、すぐに壊されると思う」

「ああ、まったくだな……」

二人して頭が真っ白になっているので、会話が意味不明になってきた。

そこで車の無線に連絡が入る。作戦の臨時指揮官を任されたマラソン警部補からだ。

「そろそろ車庫のシャッターを開けるぞ。外から確認してみたところ、すでに化け物どもが殺到している。シャッターが開くのと同時にアクセル全開でぶっ飛ばして行け」

いつもなら「ぶっ飛ばして行け」なんて物騒なことと言わないだろうに、と思いつつ、海人は真剣な面持ちで「はい」と答える。

「お前らが向かう場所はすでにカーナビの方にマップデータを送っている。それに従って行けばいいが、距離にして200Mとない。

だが……この世で一番長い道のりだと思え」

釘を刺すような低い声音で言われ、海人は固唾を呑む。

「……それでは、健闘を祈る」

無線が切られ、車内に重苦しい沈黙が立ちこめる。

「まったく、教習以外で車の運転なんてこれが初めてみたいなものだよ」

気晴らしに海人が口を開いた。

「まあ、刑事に車の免許は必須とは言え、この平和な街じゃ犯人とのカーチェイスなんてあり得ないし、俺たちは車買えるほど給料良くないしな」

口元を二つとさせて、ザックは無理やりに微笑む。

「さつとと……シャッターが開くぞ」

海人がそう言うと、相棒も口を結んで前方に集中した。

シャッターが徐々に持ち上げられていき……光が差しこんでくるのが見えた途端、ズボ、ズボツと黒い触手のようなものが続々と入りこんできた。



「お、おい、海人、なんか早速やばくないか……」

シャッターの隙間にそつて横一列にずらりと並ぶ黒い触手。

それが手招きするかのごとく一斉にうようよとごめく様は不気味を通り越して戦慄さえ覚えた。

「オートメーションを解除……操縦をマニュアルに……」

海人は呟きながら、傍らにあるタッチパネルを慣れない手つきで操作する。

この時代の車にはどれも高度なコンピューターが搭載されており、マップ上で目的地を指示するだけで完全自動操縦で運んでくれたり、運転者が操縦する際も、法定速度に乗っ取ったスピードしか出せなくしたり、目の前に障害物があると緊急停止したり、運転者と同乗者の安全なカーライフを全面的にサポートしてくれる。

しかしあくまでもプログラムなので、融通が効かず、運転者がしたいように操縦するには

邪魔になることが多く、公共機関が用いる車に限り、コンピューターの制御機能を完全にシャットアウトしてその過保護気味な束縛から逃れることが出来るのだ。

それを？マニュアル操作？といい、海人は先ほどから操作の切り替えを行っているのだが、普段パトカーを使う機会など一切ないため、完全に手間取っていた。

「おいおいおい、マニュアル操作をするためのマニュアルが必要だな、ってくだらないシャレを俺に言わせたいのか？」

「ま、待つてくれ、教習時代と仕様が変わってるから分かんないだよ」

タッチパネルの前で人差し指を彷徨わせ、「うーん」「えーっと」などとしきりに唸る姿は、機械音痴の老人がパソコンを前にしているのと同じだった。

「あ！出来た！よし、これで準備は……」

オーケー、と続けるつもりだったが、その言葉は顔を上げるや声となる機会を失った。

シャッターが中ほどまで開けられたところで、外に殺到していた小型トラックがわらわらと入りこんでくる光景が海人の目に飛び込んできたからだ。

「は、早く！ 海人！」

「分かってるって！ よし、ちゃんと掴まって」

アクセルペダルを踏み込むが早いか、四輪がうなりをあげて高速回転を始めた。

「ろっ！？」

初速の反動で二人は盛大に前へとつんのめる。

車はトラックを蹴散らしながら猛進、半開きだったシャッターに激突して勢いを失うも、海人はトラックが窓際まで群がってくるのが怖いのか、それともマラン警部補に怒られるのが怖いのか、開き直ったかのようにアクセルペダルを踏み込み、そのまま強引に突き抜けていった。

シャッターは下の部分がひしゃげて見る影もない、これでは彼らの給料から弁償代が差し引かれるのは請け合いだろう。

しかしまさしく危険走行中の二人にそんなことを嘆く余裕はなく、

「あー！ いきなりコースから外れてんぞ！ こっちだこっち！」

「こっちってどっち！？」

とコントさながらのせわしいやりとりを繰り返すのだった。

\* \* \*

「た、助けてだれかー！」

ヒーローは弱き民の悲痛な叫び声を聞きつけ、その方へと急行した。

エインセルの広場一帯からはすでに黒き化け物たちの姿は消え失せている。

代わりに、屋内で身を寄せ合って怯えているほか術のなかった住民たちが一斉に外へと出、目にも止まらぬ速さで化け物どもをせん

滅し、そして次なる救いを成すべく飛び立って行ったヒーローの背中に惜しみない敬意と賛辞の眼差しを送っていた。

その一人がこう呟く。

「俺の商売道具、勝手に持って行かないでくれよ……」

シルクハットと仮面を持って行かれ、今や黒マントしか魔術師の名残がない若はげの彼である。

一方、ヒーローはその自慢の脚力でとっくに現場へと到着していた。

女性がほうきを持って、二階の窓にまで這い上がってきた悪しき化け物めらに必死の抵抗を続けている。

「おお、なんと健気な民よ、我ゆかん、その儂き命を散らせぬため！  
「まーてまてまてまてまてーい！」

歌舞伎役者よろしく盛大に啖呵を切り、若はげの彼から拝借してきた黒いシルクハット、羽毛作りの仮面を装着し、更に花屋の白いエプロンを身につけた統一感皆無のヒーローが、「格好なんて問題じゃない！」と言い張るがごとく颯爽と参上した。

「誰が言ったか知らないが、卑怯といえばこのワタシッ！」

ヒーローは切れ味鋭く次々に正義のポーズを決めていく。

「参上！ ウロイエ」

そこで女性のほうきがへし折られ、「こりやまずい」と思ったヒーローはすかさずジャンプ。

そして「せっかく最後まで言えそうだったのに！」という技名なのか、それとも別の意味なのか、そんな言葉を叫びながら二匹の化け物をしなる鞭のような蹴りでまとめて吹き飛ばした。

攻撃後はもちろん、タンツ、と見事な着地を決め、カツコよさへの気配りも忘れない。

「大丈夫ですかー？ ケガはしてないですかー？」

素早く振り返り、二階の窓越しに姿の見える女性に声をかけた。

ヒーローの華麗な救出劇に言葉を失っているのか、女性は震える声で言った。

「あ……あんたって、もしかして花屋の  
「ウロイエロー！」

ズビシッ、とヒーローはレイピアのごとく人差し指を突きつけた。  
「ま、まあいいわ、とにかく助かった、ありがとう」

「えっへん！ ヒーローですから！」

「後ね、さつき警察を呼んだの。実は、うちの主人が怪我をして…  
…」

得意げだったヒーローの表情が急変した。

うちの主人が怪我をして、と悲しげに言う女性の言葉に正義センサーが反応したのだ。

ヒーローはおもむろに顔を……先ほど吹き飛ばした二匹の化け物に向けた。

「さあて、どうしてやるっかなあ？」

ヒーローは両拳にはめたグローブの甲同士をガチンッ、とぶつけ、不敵に微笑む。

対する化け物は体勢を整え、その鋭い目つきと牙とをギラつかせた。

相対する正義と悪。一触即発の張りつめた静寂が場を占める中、先に攻撃を繰り出したのは化け物の方だった。

しかしヒーロー、まったく余裕の佇まい。

二重に襲いかかる爪の攻撃を華麗にかわし、すり抜けざまに一発、二発、強烈なカウンターパンチをそれぞれのボディに決めた。

続いて後方宙返り……するまでもなく、決着はすでに今の一撃でついたようである。

二匹は激痛に地面をのたうち回り、一匹がよろよろと立ち上がった。

そこへヒーローはすかさず走り込み、化け物の胸倉を掴み上げて

「メガトンパンチ！」

と左足を踏みこんで全体重を乗つけた渾身のストレート。

化け物といえどあわれ不運、とりあえずパンチ、からそれなりに意味のある技名に昇華した必殺技を顔面にぶちこまれ、その身体は勢いよくぶつ飛ぶや豪快に四散した。

ついでヒーローは足元にうずくまっっている化け物を見やり、

「メガトン……」

ニタアと暗黒的な笑みに口元を歪めながら、ゆっくりと右腕を振り上げた。

いかに暴れまわるしか能のない化け物もこれには恐怖し、潤んだ瞳で「命だけは……」と訴求した。

「あれ、目にゴミが……これじゃあブラックに逃げられちゃうなあ、困ったなあ」

ヒーローはわざとらしい口調で言い、振り上げた拳で目をさすった。

無論、演技である。心優しきヒーローは化け物に改心のチャンスを与えたのだ。

しかし次にまぶたを開けた時、化け物はこちらを見上げて平然としており、かつヒーローの不意を突こうと満々の気を放っていたので、

「逃げなかつたお前が悪い！」

と化け物の脳天めがけてメガトンパンチ。

黒い身体が液体となっってはじけとび、ここにヒーロー伝説がまた一つ作られたのである。

「あ、警察！ あなた、助けがきてくれたわよ！」

窓越しに立っていた女性が歓喜の声を上げた。

高らかにサイレンをならし、屋根に赤い交閃灯を乗せたパトカーが通りの向こうからやってきたのである。

ヒーローは「私がいるのに」とでも言いたげな風にやれやれと両手を上げ、パトカーが民家の脇に止まるのを待った。

そしてパトカーから出てきた男と目線が合うや、二人は「あっ…

…」と口をそろえた。

「……リンちゃん、だよね？」

「ウロイエロー！」

何度でも叫んでやる、この誇り高き正義の名を。

「なんだかね、また君とナ……じゃなくて、あの黒い髪の子がいる気がしたんだ」

「なんでわざわざ言い直すの？ ナナシって言えばいいじゃん」

「それはだめだ！ まだ彼女自身から名前を聞いてないからな！」

海人はズビシツ、と人差し指を向けて威勢よく言った。

ナナシの名前の件について、彼は「たとえ他人に聞かされて知っているとしても、本人から聞かない限りは知らないふりをする」という自分ルールを厳守しているのだ。

「おい、海人、まずは怪我人の救助からだ。迅速にやらないと、あの気味の悪い化け物がまたいつ襲ってくるか分かんねえぞ」

ザツクに諭され、海人は民家の入口へと向かった。

ヒーロー、もといリンに「あの黒い髪の子はどこへ？」と訊ねたかったのだが、その疑問はひとまず胸にしまっておいた。

「どうぞご安心を。救助が済むまで、私が見張ってあげるから」シルクハットをつばを掴んでかしがせながら、リンは得意げに言う。

「……なんて言ったら、もう集まってきた」

ブラックが一匹、二匹、目の前の家の屋根に続々と降り立ってリンを見下ろしている。

リンはため息交じりにガチンと拳を鳴らせ、戦闘態勢をとった。

が、次の瞬間 遠くから魔人の雄叫びが街にとどろき渡った。

その「ヴォオオオ！」という声は空を切り裂き、建物の窓を揺らし、リンは思わず両耳を塞いだ。この声には聞きおぼえがある。

ブラックだ、それも巨大型の。

そして雄叫びが響き終わるや、まるで今のが何らかの合図だったかのごとく、周辺にいたブラックが声の方へと向かって一斉に動き

出した。

「ど、どうなってんの……？」

リンはしばし、自分に目もくれず通り過ぎていくブラックの姿を見つめていた。

何かが始まるうとしている　ヒーローの予感だろうか、リンはブラックの後を追おうとしたが、ふと思い出したように振り返った。海人とその相棒がパトカーに怪我人を運びこんでいる。

「なんだったんだ今のは？　警報にしちゃ、やけに物騒だったような……」

そう顔を見合わせる二人の横を通り過ぎ、リンは後ろに停車していたもう一台のパトカーに駆け寄っていった。

「おじさん、これ貸して！」

「な、なんだ君は！？」

運転席の窓を開けるなりそう言われ、中年の警察官は面食らった。

「んもー、急いでるんだってばあ！　大ピンチなの！」

何べん言っても聞いてくれないので（当然だが）、リンは強引に扉をこじ開け、「うおお！？」警察官の肩口を引っ張るや外へと追い出した。

そして運転席にドカッと座り、一言。

「っていうかこれどーやって動かすの！？」

まるでわがままなお姫様のような振る舞いだが、本人はそれどころではない。

そこへ海人が慌ててやってきた。

「す、すいません！　僕の姪っこがまた粗相を……」

「姪っこ？　この娘が、お前の……？」

警察官は海人とリンを見比べるようにしながら、いぶかしげな表情で言う。

それもそのはずだ。

少女は黒いシルクハットを頭にかぶり、顔半分を仮面で覆い、身体には白いエプロンをつけ……先ほどの身体に見合わない怪力とい

い、ともすると化け物より奇怪な存在である。

「リンちゃん、早く車から降りて、ね？ お願いだから」

海人は内面の必死さを押し殺した穏やかな声でリンに耳打ちする。

「あ、そうだ、あんたが運転してよ！」

しかし相手は聞く耳を持たないのだった。

「ちよ、ちよっと……マジで頼むよ、後ろの方は俺の先輩なんだから……」

「そんなこと言ってる場合じゃないの！もしかしたら、すんごくでかいブラックが現れて、街を踏みつぶしちゃうかもしれないんだよ！？」

「ブラック……？ それ、さっきの化け物の名前？」

「そう。いいの？ あんた刑事でしょ」

挑発的な眼差しで「刑事でしょ」と言われ、海人はムツとした。

「あのなあ、俺たちの仕事は化け物を倒すことじゃなくて、市民の安全をだな……」

「だから、倒すことがみんなの安全に繋がるんでしょーが」

「ま、まあそりゃそうかもしれないけど……」

あっけなく説き伏せられ、海人は言い淀む。

「それに……もしかしたら、ナナシが来るかもしれない」

「え？」

ナナシ。

これ以上になく、彼の琴線に触れる言葉だ。

「なんか、嫌な予感がするんだよ。ナナシは強いけど、すごく大きなブラックが相手だったら負けちゃうかもしれない。だから、私も一緒に戦わなきゃ」

「ま、待つて待つて！ 戦う……？ リンちゃんが？ あの黒い髪の子が？ でかい化け物と？」

海人の頭はにわか混乱し始めた。

背中に浴びる上司の視線が痛い、早くこの茶番を収めてくれと苛立っているのが分かる。



そしてリン……彼女が言っていることも、完璧ではないが大体把握した。

とにかく、街がピンチだから私が化け物を倒すために戦場まで送り届けると。後は自分が戦ってどうにかする、あの黒い髪の子？ ナシ？と一緒に。

つまり、自分はタクシードライバーを努めればよい訳だ。

しかし如何せん府に落ちないのは、どうして二人が戦わなければいけないのか。

確かに二人が化け物と戦うのは前に見た。強烈過ぎる思い出だ。

上司の視線、リンの願い、その二つに身体を挟まれて、海人は顔を伏せて身悶えた。

「……街の平和を守る。あんた、刑事でしょ？」

再び繰り返された言葉が、海人の心の天秤を一方向へと傾けた。

もついいい、どうにでもなれ　海人はやけくそな気持ちでハンドルに手をかけ、言った。

「分かった、俺が運転する！」

その言葉にリンと上司の二人は啞然とした。

そこまでは一緒だったが、リンは歓喜、上司は大慌てと、二人は正反対の反応を見せた。

「あ、おい、おい！ 海人！」

海人はリンを助手席に移動させ、運転席に座るやすかさずドアを閉めた。

それでももう自分の心を惑わす上司の声は聞こえない。

そして車庫から車を出したのが同一人物とは思えないくらい、海人は素早くキーを回し、エンジンを稼働させると、そのまま上司の制止を振り切って車を発進させた。

場には一人、上司が呆然とした表情で取り残された。

「あゝ……つと、こつちの車、乗りますか？」

かけるべき言葉が見当たらないといった風情で、ザックが声をかけた。

それに上司は険しい表情でうなづき、二人はもう一台のパトカーまで歩いていった。

「あいつ、今度こそクビかもしれないっすねえ……」

t o c h a p t e r 2

ナナシはエア・グライドを急がせていた。

前方にはトランジスタへと向かった大量のブラック群。

まるで数千羽というカラスが群体飛行しているようだ。

カラスたちは透明なドームの上に降り立ち、その鋭いクチバシで膜を破り、続々と街の中へと侵入していく。

ナナシにはその光景が、黒い砂が受け皿に向かって流れ落ちていく風に見えた。

「ナナシ、聞こえるか、ナナシ」

ふと左耳にはめ込んだイヤフォンから声が聞こえた。

高速飛行のために風がけたたましく吹きすさぶ中でも、声の主がDr・フィールだということはすぐに分かった。

「……見事に失敗してくれたな」

まさかブラックが着弾直前で分離するとは思っていなかった、と怒号を上げたい情動に駆られるも、ナナシはぐっとこらえる。

「こちらでは緊急処置として、ドームの閉鎖、および予め配備しておいた 私の意思に関係なくだが 軍隊を各都市に出動させ、ブラックの応戦に当たらせている。被害状況はもつか把握中だが、如何せん混乱がはなはだしく、具合的な数値は得られていない。ただこの様子からすれば、死者は確実に出ているだろうがね」

フィールの声は相変わらず冷静だが、どことなく焦りや怒りが宿っている風に聞こえた。

「ここで君の失敗を責めたり、我々の読みと対策の甘さが云々言っても仕方がない。

これから君がすべきことは、ひとまずドームに群がっているブラックどもの一掃だ。

今一度放て、ブラックロックシューター BRSを」

ナナシはハツとする。

何故この兵器の存在を忘れていたのだろう。

相手に抜き去られた動揺から追いつこうという焦りばかりが心中を占めていたからか、あるいは「もう使いたくない」と無意識のうちに思っていたのかもしれない。

その名が呼ばれたことよって、ナナシは改めて左腕に兵器の重量感を思い出す。

ナナシは減速し、ドームに群がるブラックに向けてBRSを構えた。

後は先ほどの要領でレベル5までチャージし、ココロの中で引き金を引くだけだ

「どうした、何をためらっている?」

ナナシはBRSを構えたまま静止していた。

「……事態は一刻を要するのだ。君がそうやっている間にも、ブラックはどんどん都市へと入りこんでくる。君がその兵器で撃とうとしているのは盟友ではない、我々を殺す敵だ」

そうだ、敵だ、私が撃とうとしているのは? 敵? なんだ。

ナナシは頭をからっぽにするように努めた。余計なことは何も考えなくていいように。

砲塔の火口に青白い光が収束し始める　ナナシの左目にも同じ色の焰が灯り、そして、波動は放たれた。

密集するブラックの群体を呑みこむ閃光。

その光が地平線の彼方へと通り過ぎていった後は、大きな黒い塊だったのが数えるほどの破片となって散り散りに落ちていった。

ナナシはおもむろにチップを取り出し、「アンインストール」とささやくように呟いて、チップの中に兵器を収めた。

引き金を引くたびに、ココロをちぎっていかれるような痛みにも似た不快感が襲う。

こんな感覚は二度と味わいたくはない。

ナナシはハンドルを握り、エア・グライドを静かに発進させた。

「……ドームに張り付いていたブラックはほぼ殲滅した」

「ああ、管制塔から見ていた。やはり凄まじい威力だな」

「私はこのあとどうすればいい？」

ナナシはいささか弱った声音でたずねた。

「トランジスタ全域にブラックが侵入し、收拾がつかない状態になっている。」

軍隊も一息にせん滅したいところだが、街中で強力な重火器を使う訳にもいかず、小型機関銃などで一匹ずつ倒していく戦法を取らざるを得ない。君が戦列に加わったところで同じことだ。街中でBRSを使う訳にはいかないからな」

ナナシは密かに安堵した。

もう使わなくていい、この忌々しい兵器を。

「君にはこれから島の南にある都市、サン・パライーソから反時計回りに各都市を回ってブラックを殲滅して行ってもらおう。ネルはすでに逆ルートから殲滅に向かわせている」

フィールは一息挟み、続けた。

「実弾系の銃火器がブラックにも有効だと分かった今、軍隊もまったくの無力ではなくなり、そこに君とネルが加われれば、後は時間がかかるにせよ殲滅は可能だと見ている。」

現時点でそれなりの被害は出ているが、実際のところ相手は体長1〜2メートル弱で武器として牙と爪を持つ程度、街中に大量の野犬が放たれているようなものだ。時間がかかっても壊滅的な事態には至らないだろう。現にタワー近辺の敵はすでに一掃できたしな」

フィールがそう言い終えた頃、ナナシの機体は島の上空に入っていた。

BRS発射時、ブラックごとドームの上半分を吹き飛ばしたので、遮りがなくなっていたのである。

眼下の街並みには、そこかしこで銃声が響き、煙と一緒に火の手が上がっている。

フィールの言っていた「軍隊」と思しき人間たちが、車体後部に機関銃を装備した四輪駆動の大型車に乗ってブラックを銃殺し、一

方的に狩りを続けていた。

予想にもせず、実際には圧倒的に人間側の優勢だったのだ。

ナナシは拍子抜けな思いをすると共に、ふと一つの疑問が頭に浮かんだ。

「一つ、訊きたいことがある」

「なんだね？」

少し遅れて、フィールの声が返ってきた。

「ブラックはどこから来て、一体何が目的でやってきたんだ？」

「それは今聞くべきことか？」

「……私が気になるのは、お前がそれを知っているのかということだ。私は今まで漠然とブラックを倒してきた。が、ここに来てあいつらが一体何なのか、改めて疑問に思えるんだ」

フィールは黙り込んだ。

沈黙の間、ナナシは漫然と遠くを見据えながら返事を待っていた。初め、それは何の変哲もない建物だと思った。

ホールフォビアの辺りだ、黒々とした平たい物体が工場群の中に建っている。

それは風を受けるゼリーのように震え、こころなしか大きくなっているように見えた。

目の錯覚か？ ナナシは目をこらすも、やはり違和感が拭えなかった。

「ブラックに関しては我々も調査中だ。しかし長年の研究で一つだけ彼らのことで分かったことがある。ただ、これは我々の中でも限られた人間しか知らない極秘事項だ、それに知ったところで何のプラスにもならない事実でもある。マイナスにはなり得るがね」

ナナシは半ばフィールの言葉を聞いていなかった。

意識が前方に集中している。黒々とした平たい物体はみるみるうちに巨大化し、工場群の中でひと際高くそびえ立つと、ナナシの目にその正体を露わにした。

超巨大ブラックだ、いや、クリプトナスと言い換える必要がある

かもしれない。

初見の時よりはいくらか小さくなっているが、それでも充分脅威に思える大きさだった。

「フィール……質問の答えは、後で聞かせてもらえるか？」

「どうした？」

「クリプトナスだ、また現れた」

イヤフォンの向こうで、フィールが息を呑むのを感じた。

続いて彼が何事か言いかけた刹那　クリプトナスが高らかな産声を上げた。

島全域にとどろき渡る殺人的な雄叫び。

それはかまいたちとなつて襲いかかるようで、ナナシは機体がひっくりがえるのではないかと一瞬思った。

雄叫びが止むと、眼下にいたブラックたちが　翼を持っていたものはそれを広げ、持たないものは四本足で地を駆け　クリプトナスに向かって一斉に大移動を開始した。

今の雄叫びは散り散りになった仲間達を集める合図だったのだ。

再び？融合？を図ろうとしている　ナナシはそう直感し、こちらには目もくれずに翼をはためかせる黒い翼獣たちに紛れ、エア・グライドを急行させた。

どうやら、本当の戦いはこれからのようである。

海人が運転するパトカーは、インセルからホールフォビアへと続く橋に入っていった。

例の緊急警報があつたことにより、トンネル内は閑散としている。

「……………で、リンちゃん」

海人はふと助手席のリンに話しかけた。

彼女はドアの縁に両手をおいて外を眺めている。

トンネルの壁に連なる電球が延々続く単調な景色が彼女の瞳を流れていく。

「いつまでそれつけてんの？ もう正体バレバレなんだし、取つても良いと思うんだけど」

「ん……………ああ、そつか」

振り返つて、リンはシルクハットを取ろうとした。

「でもなー、あんたはいいけど、他のニンゲンにウロイエローの正体がバレるのはなー」

「もうとつくにバレてるって……………」

海人は呆れ気味に言った。

「つていうかさ、海人」

言葉半ばにシルクハットと仮面を取っていく。

「こんなことして大丈夫なの？ 運転を頼んだ私が言うのもなんだけど」

「うん、本当にリンちゃんが言えたことじゃないよね……………今回はさすがにヤバいかも」

走行中に冷静さを取り戻したのか、海人は自分がしでかした事の重大さに気付き始めた。

にわかに顔が青ざめ、「短い刑事人生だった……………」と今にもため息がこぼれそうである。

「……………まあでも、衝動的だったとはいえ、一度始めたことなら最後



までやりきるよ」

「最後まで?」

リンは口をすぼめて繰り返す。

「親父によく言われたんだ。自分が言ったことを最後までやりきらない奴は最低だって。」

教えを守るって訳じゃないけど、確かにそんな奴になっちゃ俺も最低だと思うからさ」

ふと視線をリンに寄こし、疲れ気味に微笑んで見せた。

「ふーん、あんたってエラいんだね。あっちのカイトとは大違いだ」

「あっちのカイト?」

「ううん、こっちの話し」

さっぱりと答えて、リンは座り直した。

シルクハットに仮面、エプロンを取り、後部座席にほっぽって、ショートパンツにTシャツ姿のごく一般的な少女の装いとなった。

「あー……つと、これは前からずっと訊きたかったことなんだけど」「なに?」

「あのさ、君たちって一体何者なの? なんか、色々人間っぽくないよね……?」

海人は遠慮がちに訊ねた。

リンは彼の横顔を一瞥いちへつしたのち、手元に視線を移して答えを考へる。

「もう言ってもいっつか。前にチラッと話したけど、私たちは? アン드로이드? なんだよ」

訊きづらい質問だっただけに、あつけない口調で答えが返ってきて海人は拍子抜けした。

アンドロイド……子供の頃にSF漫画を読みふけて名前も知っているし、どんなのかも頭に入っているが、いざ隣に座っている少女がそうだと思うと、実感が湧かなかった。

「それで私たちはブラックを倒してそのエネルギーで生きてるワケ。なんであいつらがエネルギーになるのか知らないけど。でも、それ

以外はニンゲンと変わらないよ」

まるで自分がそう思い込みたいかのように、リンは言った。

「……確かに、言われるまで誰も気づかない。それに人間って自分の都合のいいように解釈するし、君たちの人間離れたトコとか見ても、『一風変わってるのね』ぐらいにしか思わないから」

海人は言葉に困って、なんとなく解説めいたことを言った。

しかし、それにしても、彼女らはアンドロイドなのか。

インクがスポンジに染み込んでいくように、今さら実感がじわじわと押し寄せてきた。

「つてことは、……あの黒い髪の子も、人間じゃないんだな」

やや残念がった声で言う。

リンはそれを聞いて、「やっぱり言わなければよかったか」と黙り込んだ。

「でも、」

不意に、海人が言葉を継いだ。

「君たちってほとんど人間じゃん。俺は気にしないよ」

海人はあっけらかんと笑って言った。

無理やり平気なのを装っているだけかもしれないが、リンは少し救われた気になった。

トンネルを抜け、フロントガラスに外の景色が広がった。

「な、なんだあれ!？」

海人は思わず声を上げた。

前方左斜め、暗い灰色の防護壁越しに全身真っ黒の巨人がそびえ立っているのが見える。

それはビルや工場といった建物の類ではないことが一目瞭然であり、こちらに横顔を向け、長い両手をだらんとぶら下げたまま、緩慢な動作でのろのろと歩いていた。

先ほどから感じるズシン、ズシンという震動は、走行する車ではなく、この巨人が一歩ずつ大地を踏みならしていくのが原因だった

のだ。

更に数百羽はいそうな翼の化け物たちが巨人めがけて飛行し、道路を駆ける何匹かの化け物たちも同様の進路を取っているようで、海人はさながら怪獣映画の中にいる気分だった。

「リ、リンちゃん、本当にあんな奴らと戦うの？」

海人は震えた声で言う。

「まー、そういうことになるよね」

対照的にリンの声にはまるで危機感がない。

どうしてそう落ちついていられるんだ……海人はみぞおちの辺りがきゅゅつと締めつけられるような違和感を覚え、今にもハンドルの切っ掛けをうたいたい衝動に駆られた。

今、目の当たりにしている光景は明らかに常軌を逸している。

無数に飛び交うカラスの大群に、車と同じスピードで地を駆ける四本足の獣に、極めつけは暗黒魔人とも呼べそうなあの巨人……それに曇天模様という空の不穏な色合いが重なって、海人にはここが魔界か何かのようにしか思えなかった。

そして車は魔界へと続く道を直進中。

今ならまだ引き返せる！ 頭の中で警告が鳴るも、海人はハンドルを切ることもブレーキをかけることもなく、ただそのままアクセルを踏み続けていた。

どうしてだか彼自身疑問だが、そもそも彼の身体は何かの危機に對して、背を向けず立ち向かうように出来ているのかもしれない。足がどんなにすくんで、何の役にも立てそうにないと分かっている。でも。

「あ、あれ！」

急にリンが大声を出して何かを指差した。

海人もその方を見やる。

暗黒魔人に迷いもなく突っ込んでいく一つの機影。

海人はエア・グライドと正式な名前を知らないが、そのエア・グライドは魔人に接近するやその頭部に銃火を浴びせ、やにわに戦闘

が始まった。

魔人は機銃掃射などもろともせず悠然と右腕を振り上げ、エア・グライドめがけて一閃。

その攻撃を何なくかわし、エア・グライドは機銃を放ちつつ魔人の背後へと抜け、旋回するや今度は小型のロケットミサイルを二発立て続けに発射した。

着弾後間もなく凄まじい炸裂音が迸り、魔人の肩口から盛大に爆炎が上がって

「やったか!？」と海人は歓喜の声をもらすも　もうもうたる煙から再びその姿を現した魔人は一切のダメージも受けた様子はなく、またおもむろに攻撃を再開した。

「ナナシ……じゃない、やっぱり」

「え?」

「あのエア・グライドに乗ってる奴だよ。初めはナナシかと思っただけど違うみたい。もしかしたら私たち以外のアンドロイドかも……」  
リンはエア・グライドの主は誰かと考えるような思案顔で、戦闘の行方を見つめていた。

「……いいか、ネル」

もっかクリプトナスと戦闘中のネルに、耳に差したイヤフォンから主の声がした。

「クリプトナスの狙いは定かではないが、その足は兵器実験区画に向かっている。奴の狙いが?ホール?のあるタワーに辿り着くことだとして、もし辿り着いてしまった場合にはどんな反応が起こるか分らない……。ナナシが来るまで、どうにか時間を稼げ」

言葉を持たないネルはクリプトナスに向けて急速に旋回することで返事とした。

何度目かのクリプトナスとの対峙。

エア・グライドに装備した二つの兵器のうち小型ミサイルはすでに使い果たし、ネルは最後に残った機関銃を相手の腹から胸にかけ

て掃射、しかし弾丸は相手の身体にめり込む形で吸収され、傷一つつけられない。

いよいよ機関銃の弾も底を尽き、彼女に出来るのはまわりつくように飛び回って相手をかく乱させることだけだった。

しかしそれもある時　クリプトナスはそれまで手刀、腕のなぎ払いといった単調な攻撃しかしてこず、どれも難なく回避できていたのが、相手の背後へ回った瞬間、背中から剣山のように幾本もの鋭い触手が伸びて彼女を襲った。

一発、二発とかわすも三発目が機体底部に突き刺さり、身動きが取れなくなった。

クリプトナスはゆっくりと振り返り、大きな右手で機体ごと彼女を一握りにすると　そのまま水面に石ころを放つ動作で鋭く投げつけた。

勢いよく宙を流れるネルの身体はこともあるうに海人らが乗るパトカーに向かっており、

「お……おい、こつちにすっ飛んでくるぞ!？」

海人はこちらに向かってくる流星の存在に気付くやすかさずブレーキ。

そして車は平衡状態を失って脇の防護壁に激突した。

運転席側の車体側面がへこみ、ボンネットがひしゃげて白煙が上がる中、

「ねえ、大丈夫？　海人、海人つてば!」

リンはハンドルに額をつけて失神している海人の身体を揺さぶっていた。

ゆっくりと目を覚ました海人は、「あたっ」と後頭部に鋭い痛みを感じて、その部分に手を当てながら、ぼんやりとした表情で周囲を見渡した。

「俺、生きてるみたいだな……」

気の抜けた声で言い、後頭部に当てた掌を見て血がついていない

ことに安堵した。

身体をひねろうとして腰に痛みが走ったが、これといった外傷もなく、どうやら打撲程度で済んだらしい。

「よかったよ生きてて。ニンゲンはもろいから心配しちゃった」  
そう言うリンは至ってピンピンしている。

何だか拍子抜けする思いだが、車体がべしゃんこになって使い物にならなくなったので、海人はひとまず外へ出ようとリンに促した。穴ぐらから這い出るようにして車から降りるや、暗黒魔人の姿が正面に飛び込んできて、それと同じ地面を踏んでいるという空恐ろしくなる感じを覚えた。

ついで彼はふと周囲の変化に気付く。

上空を覆い尽くしていたカラスの化け物の姿が激減しており、辺りには獣の姿もなく、こころなしか魔人が先ほどより大きくなっていくように見える。

気のせいだろうか。海人は不審に感じつつ、歩き出していった。そして三步と進まぬうちに、彼はリンの身体越しにある光景を見つけて息を呑んだ。

女と思しき誰かが一人、防護壁のくぼみに埋まるようにして倒れこんでいる。

周囲からは薄もやの煙が火薬っぽい匂いと共にたちこめ、まるで巨大な鉄球がぶち当たったような形に歪んだ防護壁のくぼみは、恐らく激突時に出来たものだろうと理解した。

だが、巨大な鉄球の代わりとなったのが人間なら、血しぶきが辺り一面に散り、本体は目も背けたくなるような惨状を呈しているはずではないだろうか。

しかし辺りには一滴の血もなく、その代わりとばかり金属片で散らかっている。

海人は恐々とした足取りで、リンの隣に並んだ。

「リンちゃん、これって……」

「うん……やっぱり、アンドロイドみたい」

リンの言葉によって、海人は確信を得た。

そして一歩踏み出そうとした時　ガシャ、目の前のアンドロイドがうごめいた。

動作不良気味にぎこちなく手足を動かし、アンドロイドは一度立ち上がるも、右ひざがガクッと折れて地面にひざまづいた。

仲間として見ていられないのか、リンは駆けよって肩を貸そうとする。

「……ダメだよ、あなたはここで休んでいた方がいい」  
間近で損壊の具合を目の当たりにし、リンは言った。

左の眼球がつぶれているのだ。これでは敵と戦うどころではないだろう。

それでもアンドロイドは無理やり立ち上がるうとする、まるで強い使命に突き動かされているかのよう。

「喋れないの？　ねえ、私の声、聞こえてる？　ねえ、ねえってば！」

「リンちゃん……そつとしいた方がいいんじゃないかな、そいつは」

君たちと何か違う、そう言葉を続けようとした瞬間、不意にこちらを向いたアンドロイドと目が合った。

海人は慄然りっぜんとする。

今まで見えなかったアンドロイドの顔のもう半分は、根こそぎ人工皮膚が剥げて内部の金属がむき出しとなり、到底人間の顔をしていなかったのだ。

アンドロイド……彼はその言葉の意味を真に理解すると同時に、ナナシを想起した。

次にリンの背中が目に入る。

一皮むけば、彼女たちもこんな風に金属で出来ているのが分かるのだろうか。

しばらくの間、彼はリンとその横のアンドロイドを直視できなかった。

「海人、……私、もう行くからね」

「え、行ってくつてどこに？」

「あのバカでかいブラックのところに決まってるでしょ。」

私はこの子と仲良くないし、初対面だけど、仲間をこんな風にする奴は許せないから」

呼びとめる暇もなく、リンはホールフォビアの玄関口に向かって駆けだしていった。

後には立ち上がるうと試みてはひざまづくを繰り返す、半壊のアントロイドが海人の前に残された。

リンは？これ？の事を仲間といった。

？仲間？……その言葉がひたすら、二人を人間だと思いたい海人には重かった。

途端、後方から爆音がした。

思わず両耳をふさぐも、立て続けに大気が震える衝撃が伝わってくる。

顔を上げてみると、エア・グライドではない戦闘機が魔人に攻撃を仕掛けていた。

国軍がやつと来たんだ　そう思うと、海人の傍らを一台の大型車が走り抜けていった。

それに続いて二台、三台、と何台もの大型車が列を成して走っていく。

軍の戦闘車だろう、車体後部に機関銃を装備している。

この非常事態だからか、軍人たちは海人に声をかけるところか目もくれない。

気付いていないか、あるいは勝手に逃げると思っているのだろう。が、しかし、海人はそんな彼らの思惑とは裏腹に　走り出していた。それも戦闘車と同じ方向に。

リンと、そしてナナシを止めたいのだ。

軍隊が頑張るから、？人間？の君たちは戦わなくていいと。





遅かった。

翼獣型のブラックの群れに前進をはばまれ、そこから抜け出でど  
うにかクリプトナスに接近出来た時には　　わずか及ばず、ネルが  
投げ飛ばされた後だった。

目測だが2〜300Mは悠に吹き飛んだだろう、あの勢いで橋の  
防護壁に叩きつけられ、果たして無事なのかどうか……。

しかしこちらも悠長に考えている場合ではないらしかった。

ネルの戦闘続行は不可能と判断したのか、フィールから連絡が入  
ったのである。

「ナナシ、クリプトナスの近くにいますか？　BRSを使え」

フィールの注文はいきなりのものだった。

「街中だぞ？　それにさつきは使うなと」

「あれは市街地をうろつく小型のブラックに関しては、という意味  
だ。

今は不測の事態、手段を選んでいる場合じゃないだろう」

言葉を遮られる形で言われ、それに半ば正論だけにナナシは言  
い返せなかった。

クリプトナスはこちらに背を向けたままゆっくりとしたペースで  
前進を続けている。

まるで目的地までの一本道を歩くかのように、他には目もくれず。  
ナナシはポケットからBRSの入ったチップを取り出した。取り  
出したが、掌の上に置いて見つめるだけで、一向にインストールし  
ようとはしなかった。

「こんなもの使わなくなつて……！」

強気な口調で言い、彼女はBRSのチップをしまふのと同時にも  
う一つのチップを取り出した。

やにわに機体を発進させ、

「インストール！」

その右手に？クロガネ？を掴む。

クリプトナスの背中めがけて特攻をかけるつもりだ。

この時の彼女は「BRSを使いたくない」という思いに執着するあまり、それを使ってさっさと事を終わらせた方がいいとは考えつかなかったのである。

そして自分の感情を優先した結果は見るも無残なものだった。

ネルが攻撃を受けたところを見ていたにも関わらず、彼女はがら空きだと踏んでクリプトナスの背中に攻撃を仕掛けた。が、背後に何者かの接近を感じたクリプトナスは、また剣山のように幾本もの触手を繰り出してこれをけん制、

「くっ……！」

ナナシは触手の攻撃が当たる直前に急上昇した。

「脳天なら……！」

彼女はクリプトナスの頭上で一旦静止したのち、勢いよく急降下した。

脳天なら今のようにつ手の攻撃は受けないだろう。そう思って左手に操縦桿、右手にクロガネを振り上げて脳天から真つ二つにする魂胆ではあったが、予想だにせず、前頭から触手が伸びてまたも彼女の進撃を阻んだのである。

進路を変えて今度は胸に攻撃を仕掛けようとしたが同じことだった。

ナナシは一旦距離を置き、次なる戦法を考えた。BRSを使うのが一番手っ取り早いのに。

「……君は、私にまた同じことを言わせたいのかね？」

ふと、ファイルの低い声が聞こえてきた。

「同じこと？ 私が撃つのはMEIKOマイクじゃなくて敵つてことをか？」

「分かってるじゃないか。なら、さっさと使え。それで全て終わる」

ナナシは返す言葉を失った。  
頭を垂れて、意味もなく足元を見つめる。

左手がポケットの中に行きかけては止まり、その衝動と制止を胸のうちに数度繰り返す。

「私は……私は……」

やはり、BRSを使わなければいけないのか？

MEIKOを殺したこの兵器で？ そうすれば敵は倒せる、街は守れる。

だが、これを使うとココロがめぐり取られるような気持ちになる。戦いだった。言うならば彼女の罪悪感と、BRSに頼りたい気持ちとの。

しかし不意に脳裏を過ぎった心の声が、彼女にチップを取らせた。もう、何度も使ってきたじゃないか。それは諦めに満ちた声で言われたように感じた。

ナナシはチップを左手の人差し指と中指の間に立てるようにして、BRSと向き合った。

手はかすかに震えている。

そしてインストールするために右手に持ち替えようとした時正面で爆発が起きた。

国軍が戦闘機によるクリプトナスへの爆撃を開始したのだ。一発の小型ミサイルがクリプトナスに着弾し、その爆風が彼女を襲って……彼女はチップを落としてしまった。

不思議と身体は動かなかった。

地面に向かって真っ逆さまに落ちるチップの行方を見つめてしまっていた。

チップが落ちていったのは工場が密集する地域を走る十字路の上だ。

取りに行けるかもしれない、その思いが脳裏をかすめたが、従うことはなかった。

「お前が攻撃をしないから国軍が動き出した。ナナシ、聞こえてい

るか、ナナシ、」

フィールがしきりに話しかけてくる。

もつわずらわしくて仕方なかった。

「……うるさい」

左耳に差された小型イヤフォンを取り出し、ぎゅっと握りつぶした。

破片を風に流し、彼女は決意に満ちた瞳でクリプトナスを直視する。

もう、彼女を惑わす者は誰もいない。

「倒して見せる、BRSを使わなくて」

クロガネを今一度ふりかざし、ナナシはアクセルペダルを踏みこんだ。

国軍の戦闘機はクリプトナスの身体から出る剣山にやられて次々撃墜されている。

地に堕ちた戦闘機が爆発し、火が工場に蓄えられていた燃料タンクに引火、至る所で爆発が生じ、火柱が上がり、辺り一帯が黒煙と熱波の灼熱地獄へと豹変した。

ナナシは臆することなくクリプトナスへと直進していく。

正々堂々という信念がある訳ではないが、真っ向から勝負を挑む。クリプトナスの胸から先の尖った幾本もの触手がナナシを襲った。彼女はそれを回避することはせず、クロガネで弾いて行きながらあくまで直進を続ける。

その首を横一閃になぎ払おうという魂胆だ。

しかし近付くにつれて触手の本数が増えて次第に対応しきれなくなり、不意に下から一本、二本と同時に機体の底部を突きあげられ、それに体勢を崩した直後、彼女めがけて一本の触手が伸びてきた。

当たる……！ そう直感した彼女はとっさに身をひねったが、回避しきれず右肩に突き刺さり、宙に持ち上げられてぶんつ、と投げ飛ばされた。

コンクリートで出来た工場の壁面に叩きつけられ、「がっ……」

あまりの衝撃に声をもらす。

そして攻撃はこれに留まらない。

クリプトナスは触手に突き刺したままのエア・グライドを、ナナシの現在地を確認する動作もなく、ただ同じ方向に向けてぶん投げた。

その進路は壁にめり込んだナナシに向かっている。

そして鉄の塊の追撃が彼女を襲おうとした刹那、

「ナナシィッ！」

リンの声だ。

彼女は右手にはめた金属のグローブですっ飛んでくるエア・グライドを横から殴りつけ、どうにか間一髪のところまでナナシを助けることが出来た。

「ナナシ！ ナナシ！」

地面へと落ちたナナシに歩み寄り、リンは彼女の両肩をゆさぶって懸命にその名を呼ぶ。

「……………リン？」

ふと目を覚ますと、視界一杯にリンの顔があった。

「ああ、よかったあ。もう、さっきみたいな子になってたらどうしようかと思った！」

彼女が目を開けたことに心底安堵したようにため息をつき、リンは大声で言った。

「さっきみたいな子……………？」

「もう一人のアンドロイドだよ。さっき、橋で……………」

そこでリンは言い淀む。

「ネルのことか」

「知ってるの？」

「ああ、一応な」

言葉少なに答え、ナナシはゆっくりと立ち上がった。

背中と腰に痛みが走り、視界が眩む、壁に叩きつけられただけで相当のダメージだ。

だが、まだ戦える　　ナナシは周囲にクロガネを探して、壁の近くに落ちているのを見つけると、それを取りに行こうとした。

「待つて。ナナシ、私もあいつと戦う」  
ふと呼びとめられた。

「それは助かるな。お前と一緒に戦えば、きっと」  
「た・だ・し・！　一つだけ訊きたいことがあるの」

リンは人差し指を立て、強気な口調でナナシの言葉を遮る。  
「訊きたいこと？」

「ナナシの返事次第じゃ私は一緒に戦わないから。一人で戦うから」  
「……何が言いたいんだ？」

いずれにしろ戦うつもりなのだ、と思いつつ、ナナシはリンの次なる言葉を待つ。

「あのさ『世界を壊す』ってどういうこと？」  
ナナシは一瞬、何を言われたのかわからなかった。

「前に言ってたじゃん。私が高んてこの世界に来たのって聞いたら、ナナシはこう答えたんだよ。で、私は怒った。喧嘩した。ナナシには喧嘩のつもりはなかったみたいだけど……。でも何度訊いても詳しく話してくれないから、私は一度、ナナシが嫌いになった」  
「嫌いになった？」

長い付き合いの仲間に面と向かっていわれ、ナナシはややショックそうに繰り返す。

「……だから、今また訊いてる。それでも答えてくれなかったから、嫌いのままだよ」

リンの表情は頑なだった。  
眉を寄せ、口を結び、しかめっ面になっている。

ナナシは何故彼女がそんな顔をしているのか考え、すぐに自分の所為なのだと気付いた。

「分かった、話す。話す、……自分でもよく整理出来てないんだ」  
心許なさそうに断りを入れてから、ナナシは話し始めた。  
世界を壊す、その言葉の真意について。

「元の世界にいた時に、ちょっとだけ話したかもしれない。

私はあの世界が気に入らなかつた。K A I T O <sup>カイト</sup>の命令の下、ブラッ  
クを狩つて、それで生きて、毎日ずっとその繰り返し。何のため  
に自分が存在しているのか分からなかつた。そこで？もう一つの廃  
棄炉（アナザー・トラッシュ・ホール？封印作戦の時に、私はM E  
I K Oを……殺してしまったんだ」

ナナシは伏し目がちに、罪悪感にかすれた声で言葉を紡ぐ。

「それで何もかも嫌になつた。周りの連中も、K A I T Oも、誰も  
M E I K Oが死んだことを気につけない。誰も私を責めない。これ  
じゃまるで、M E I K Oが最初からいなくなつたみたいだ。

そんな風流れる世界がどうしても許せなくて、分からなくて、色  
々な感情があふれ出してきつと？世界を壊す？って言葉になつたん  
だと思う」

リンは黙つてナナシの言葉に耳を傾けていた。

彼女がこんなにも喋る姿は、未だかつて一度も見たことがない。

「……でも、私はこつちの世界にやってきて、また詰まってしまう  
た。

簡単にいえば、世界を壊す力なんて私にはないと気付かせられたん  
だ。

だから、何をしたいか分からなくなつた。

そもそも世界を壊したところで、M E I K Oは帰ってくるのか？

私は私の知りたいことを全部知ることが出来るのか？ 多分、何も  
変わらないんだ。本当に世界を壊したところで……」

ナナシはそこから何も言わなくなつた。

続く言葉が見当たらないのだろう。

彼女が迷いに迷っているのが、リンにはありありと感じられた。

「ナナシは言い間違えてる。世界を壊す、じゃなくて、世界を変え  
る、でしょ？」

「え？」



「だってこんな世界は嫌なんですよ？ でも、知りたいことは山ほどあるし、MEIKOにだってもう一度逢いたい。なのに世界を壊しちゃったら何にもならないじゃん」

そういうことになるのか？ ナナシはふと胸の中でリンに訊ねた。「……私はさ、この世界で、出来れば またみんなと仲良く暮らせたらっと思う。」

帰ってこない仲間もいる。だけど、私はアンドロイドのみんなと仲良く暮らしたい。

あんまり好きくないけど、ウロ・タン・ダーとか、クソKAITOとか、もちろんナナシもだよ？ 後は、レン。こっちの世界で一緒に暮らせば、きっと楽しいと思うんだ」

リンはナナシのところへ静かに歩み寄っていく。

「だから、世界を壊すなんて言わないで。守る、とか、変える、っていうなら、私はまたナナシの仲間になってあげる」

リンはナナシを見上げて、にっこりとほほ笑んだ。

優しい表情だ、ふとMEIKOの面影が重なる。

この二人に言われたんじゃ、背を向けるなんて出来ないな……

「……分かった。世界を守ろう、今は」

「今は？」

「ああ。ただ、もう世界を壊すなんて言わない。それは約束する」

「じゃあ、指切りげんまんだ」

リンは右手の小指を出した。

指切りげんまんとは何なのか、ナナシは分からなかったが、リンに左手を握られて、

「こうするの」

強引に指切りげんまんの形を作られると、リンはすかさず小指を絡めた。

ナナシもやつと要領を得て、ぎゅっと握り返す。

「ゆーびきった！」

完全にはこの儀式について知らないのか、ハリセンボン云々の下

りは飛ばし、リンは二、三度腕を大きく振ってパッと不意に指を離した。

ナナシは何が何なのやらといった表情だが、リンが大喜びしているので、これできつと約束は交されたのだろうと思った。

そして同時に、交した約束は守る、とも。

「これで私はナナシの仲間に戻った。さあって」

ナナシとリンは並び、クリプトナスの背中を見上げた。

「ぶっ飛ばすよ」

ナナシはすでにクロガネを手にとり、リンはガチンッと両拳をぶつけた。

本当の戦いの第二幕が、そこかしこで上がる爆炎の中で静かに始まるうとしている。

t o c h a p t e r 5

「そういえばナナシ、BRSは？」

リンはナナシの横顔を見上げた。

「ああ、あれか……」

一つ目のBRSはすでに捨て、今使っているのは二つ目だということもリンは知らないが、ナナシはこのことを特に説明する必要はないと思った。

「……さっき飛んでた時にどっかに落とした」

「え、お、落とした！？ BRSが入ったチップをとってこと？」

たじろぐリンに、ナナシはこくっとうなづいて見せる。

「どこに落としたか覚えてないの？」

「確か、あつちの方角だったと思う。自信はないが」

クリプトナスの背中を正面にして、ナナシは右手の方角を指差した。

手前の平たい建物を越えた先にあるという意味なのだろうが、そこかしこで火の手が上がっているし、あんな小さい物を探し出すのは絶望的だとリンは悟った。

「はあ……結構当てにしてただけだなあ」

リンはため息交じりに言う。

「悪いな。だが、あつたとしても、私はBRSを使うつもりはない」

「どうして？」

「言っただろう。私はMEIKOを殺してしまったと。それは、BRSで……」

「ま、待って、殺してしまったって、助けられなかったとかそういう意味じゃないの？」

リンは歩み寄ってナナシの顔を覗き込む。

「違う。私が撃ったんだ。ブラックごと、MEIKOをな」

リンは息が詰まったような顔をして、後ずさった。

次に彼女が口を開く時は罵声を浴びせられるかもしれない、それなら甘んじて受けようと、ナナシはリンを見つめる。

「……今のでまた色々訊きたいことが増えたよ。でも、いい、ひとまず置いとく」

意外な反応だった。

「あいつを倒すことに集中しよう、今は」

そう言っただけクリプトナスを見上げる。

彼女の横顔は、怒り半分、寂しさ半分のように見えた。

「あいつを倒したら全部ちゃんと話す」

「……約束だからね」

ふてくされた顔で釘を刺すように言う。

指切りげんまんはいらないな、とナナシは思った。

二人のクリプトナスを倒すための作戦は、速やかに決行された。

作戦の内容は次の通り。

当初は今いた場所の近くに落ちていたエア・グライドを使おうとしたが、機体の損壊がはなはだしく使い物にならないと判断。そこでナナシは、

「私がクリプトナスの片足を切り落とす。相手はひざまづいて、攻撃を加えた奴、つまり私に注意を向けるはずだ。そして私が相手を充分引きつけたところで、リンはあいつの顔面めがけて一撃、ひるんだところを私が首を切り落として終わりだ」

淡々とした口ぶりには大層な内容だが、リンはこの提案に二つ返事で同意した。

というより、エア・グライドを失った今、これぐらいの作戦でなければ相手の頭部に攻撃を届かせるのは至難、二人が祈るのは作戦の成功と、首を切り落としたところで本当に終止符が打たれるかどうかである。

ナナシはクリプトナスの進路を先回りし、道路に面した高い建物の非常階段を上って最上階付近で息をひそめていた。

逸る気持ちを抑え、クリプトナスが横を通過する瞬間を今か今かと待ち伏せている。

狙うのは左足だ、その巨木の幹を思わせる極太の足は道幅一杯を占め、歩くごとにアスファルトが陥没し、奴が蹂躪して行った跡はナナシに終末世界の光景を想起させた。

先ほどまでは国軍の戦闘機が幾度となく爆撃を仕掛け、戦闘車両も道すがらいくつも見かけたが、どれもあっけなく撃破、退散し、今やクリプトナスの進行を食い止めるものは何一つない。

そもそもクリプトナスはどこへ向かっているのか？

ナナシは奴が向かっている先を見た。

そう遠くないところに、？もう一つの廃棄炉？を底にたたえた煙突状の大きなタワーがある。あそこを伝えて未来から過去へとやってきたので、

彼女にとっても感慨深い場所である。

このルートからすれば他に目ぼしい建物はなく、クリプトナスの狙いはあの場所なのだと推測出来た。が、如何せん辿り着いたところで何をしたいのかが腑に落ちない。

ホールを伝って過去か未来へ行くつもりなのか？ 何のために？ 疑念は尽きないが、いよいよ彼女の間近にクリプトナスの左足が迫ってきた。

人間に例えるなら脛すねに当たる部分だろう、ここなら先ほどのように触手は邪魔してこないかもしれないし、そもそも頭上はるかにあるクリプトナスの顔が足元にまったく注意を向けていないのは明らかだった。

行ける　ナナシはクロガネの柄を両手で握り、横に構えると、クリプトナスの左足がちょうど自分の真正面に踏みこまれる瞬間を見計らい、高らかと跳躍した。

そしてクロガネを横に一薙ぎ。危惧していた触手の妨害はなく、あっさりと刃が足に食い込んだので、ナナシは全力を込めて斜め下に振りぬいた。

着地後すかさず走り出し、もう半分を切り落とすべく建物の壁を三角飛びの踏み台にすると　今一度同じ要領で斬撃を加えた。完全に真つ二つにすることは出来なかったが、足の左右半分ずつが抉り取られ、クリプトナスは左足からなだれ込むように体勢を崩した。

続いてナナシは垂直に飛びあがり、残された足の部分をトドメとばかり切り落とした。

左右に二撃、中央に一撃、計三発の斬撃で前言通りナナシは足を真つ二つにしてみせた。

暗黒の化神にも痛みはあるのか、耳に耐えがたい高音の悲鳴を上げるや、ひざまづいた体勢のままキョロキョロと、せわしい顔の動きで犯人を探し始めた。

見つけた。顔の位置からははるか後方にいる。

骨格や関節といった縛りのないクリプトナスは、蛇のような不気味な動きで急速にナナシめがけて顔を近づけていく。

「スーパーウルトラハイパーミラクル」

クリプトナスの顔がナナシの目前に迫った瞬間、陳腐な言葉を並べながらリンが横から飛び出してきた。

「メガトンパン　　ンチッ!」

そして忌々しい横つ面に渾身の一撃。

凄まじい打撃音と共にクリプトナスの顔がぐるっと反対側へと向いた。が、

「……っ!？」

すぐさまギョロつと顔を戻し、リンをねめつけた。

青白い光を奥底にたたえた空洞のような瞳。背筋が凍てつく感覚が身体を走った時にはすでに遅く、クリプトナスは右腕をそのまま伸ばす形でリンを殴りつけた。

「リンッ!」

ナナシが叫ぶ間にリンはいくつも建物を貫通しながらぶっ飛んでいった。

次にクリプトナスはその双眸そごうでナナシを睨む。

彼女が驚く暇もなく、五指を開いたクリプトナスの平手打ちが振り下ろされ、咄嗟に飛びのいたのがよかったのか、ナナシは運よく指と指の間に立つ形で事無きを得た。

すかさず反撃の一振り指を切り落とす。どこの指かなど認識している余裕はない。

クリプトナスはその痛みで反射的に右手を上げ 手の甲でナナシを打った。

防御も間に合わず吹き飛ばされる。またどこかの壁面に背中から叩きつけられ、クリプトナスは何事もなかったかのように歩き出す。信じ難かったのは、切り落としたはずの部分が再生していたことだ。

一步、また一步、ナナシの朦朧もうろうとする視界から、クリプトナスが遠ざかっていく。

「あたたたた……」

ぶっ飛びにぶっ飛び、リンは路上に放り出されていた。

今まで貫通してきたいくつもの穴が正面に見える。次に建物の上  
にクリプトナスが悠然と進行を再開している姿が目につき、ナナシ  
は大丈夫かな……、一抹の不安が過ぎった。と、

「リ……リンちゃん？」

聞き覚えのある声がして、リンは振り返った。

そこには走ってきたのか両膝に手をつけて息あらく呼吸をし、コ  
ートをすすだらけにした海人が立っていた。

リンは大いに呆れた。

「あんたつてさ、どこにでも現れるよね……」

ふう、と深いため息を一つ。

「で、何しに来たの？ あのまま逃げればよかったのにさ」  
言葉半ばで、リンはあることを思いつく。

それは役立たずのこの男を最大限に活用する天啓のような閃きだ

った。

「そうだ！ あんたになら頼めるかもしれない！」

「ちょ、ちょっと待って！ 俺は君たちが戦うのを止めに」

「あのさ、チップを探してきてくれない？ それがあればきっと倒せるんだ！」

例によって、リンは聞く耳を持たなかった。

「チップ……？ 一体何の？」

「BRSっていう、あーっと、うまく説明できないけど、あのクリブなんちゃらって奴を一発で倒せるすごい武器だよ。ね、今すぐ探してきて！ お願い！」

海人は再び待ってくれ、と言いかけたが、両目を輝かせて願いを乞うこの少女を前にしては無駄だと思い、一通り話を聞いてやることにした。

「一応聞くけど……そのチップってどこにあんの？」

「うーんっと、確かナナシが言った時にはあの変なタワーも見えてたから、あれを基準にすると……」

リンは思案顔で考えた末、

「あ、きつとあっちの方角！」

と高らかと指差した。

リンの指差した方角はそこかしこから黒煙と火柱が上がり、灼熱地獄なのが明白である。

対して、現在二人のいる場所は国軍の爆撃もなかったために火の手が回っておらず、割と穏やかであった。

「あっちの方角って、まさかそれだけ？」

「それだけ」

リンはあっけなく言い切る。

「こちとら今まで火の海を潜り抜けてやっこのことここにいるんだぜ？ それでまたあそこへ突っ込んで行けって俺を殺す気かよ……っていうか、それだけの情報じゃそもそも探しになんていけないよ」



「うーん、他に情報があるとしたら、ナナシは『落とした』としか言っていないから……多分、道端か何かに落ちてるんだと思う」

「……待て、いま？ ナナシ？ って言ったのか？」

鼻っから諦めに満ちていた海人の表情と口ぶりが一変、急に真剣な顔つきとなる。

「うん。BRSを使うのは私じゃないもん、ナナシが使うの」

「ナナ……いや、あの黒い髪の子が使う武器か……」

ここで海人の頭の中で、「ナナシが武器を使えなくて困ってる」

「自分が見つけ出して届けてやる」「恋愛成就」という実に子供じみた図式が成立した。

すると彼の行動は早い。

「分かった、今から探してくる」

思いもよらなかつたのか、リンは面食らい、すぐに歓喜の色を露わにした。

「ほ、ほんとに！？ だって大丈夫なの？ ニンゲンって火に当たったら熱いんでしょ？」

「言い出しっぺは君だぜ？ まあ、何とか探してくる。男に二言はない」

「じゃあ任せたからね！」

そう言っつてぶっ飛んできた道に向かおうとし、リンは思いなおしたように振り返った。

「やっぱり私も一緒に探しに行く！」

「え、大丈夫なの？ あの黒い髪の子は」

「きつと大丈夫。私はナナシを信じてる」

それ以上の言葉はいらない、とばかり勇んだ足取りでリンは海人のところへ歩み寄った。

「あの車、使えるかなあ……？」

リンが指差した方向には、路上脇に屋根なしの小型バギーが停車してあった。

恐らく工場間の人員移動の際に使われる乗り物だろう。

「どうだかな。一応見てみようか」

海人はそう言って、二人はバギーに向かって歩き出していった。確かに徒歩のまま火の海を進むのは心許ない。足となる車でも使えれば理想的だが、まさか本当にバギーが使える状態にあったとは思ってもよらなかった。

運転席を覗き込んで見るとキーが差しこまれたままだったのである。

きっと工場員はキーを外す余裕もないほど大慌てで逃げ出したのだろう、乗り捨てずにそのままバギーで逃げればよかったのに……間抜けともいえるその大慌てぶりに、海人は深く感謝した。

「しっかりと掴まってね、飛ばすから」

ハンドルやギアのあるところを見ると、運転の要領はパトカーと大差ないようだった。

海人はハンドルを握って深呼吸を一つ、リングが助手席側のドアの縁に両手でしがみついたのを横目で確認すると、やにわにアクセルペダルを踏みこんだ。

予想以上のスピードが出る。加速度に合わせ、海人の希望も膨れ上がっていった。

チップが見つけれられるかもしれない、という根拠のない希望である。

ユートピア・タワー、管制室にて。

オペレーションデスクの前に大画面でクリプトナスの様子が映し出されていた。

地上のあらゆる物を蹂躪していった奴の足取りは、？もう一つの廃棄炉？があるタワーを前にしてびたつと停止した。

「クリプトナスが？ホール？に到着します！」

長髪のオペレーターが後ろを振り返って大声を上げる。

目線の先には、作戦の指揮官であるDr・フィールグッドの静かな佇まいがあった。

「……軍隊の抵抗もむなしく、ナナシは使い物にならず、結果このざまか」

言い捨てるように、フィールは呟いた。

「私が直々に赴く。エア・グライドの準備をしろ」

「は？」

突然の言葉に、オペレーター全員がフィールを見て一様に啞然とした。

「今やナナシへの連絡手段は断たれた。なら、直接言い聞かせてやらねばならないだろう」

「し、しかし、それはあまりに危険では……」

「手段を選んでいる場合ではない。それは私とて同じことだ」

フィールは白衣をひるがえし、出入り口に向かって歩み始めた。それに慌ててオペレーターの一人がついていく。

彼はナナシがBRSのチップを落としたことを知らない、またもつかそれを探している彼女の仲間たちがいることも。

フィールが出撃の意を表明した同時刻、海人らは灼熱地獄を走行していた。

すでに何度も同じ場所を行ったり来たりしている。黒煙がもうもうと立ち込め、熱波が吹き荒れて皮膚を照り、水分と意識が徐々に失われていく中、二人は地面に目を凝らしていきながらチップを探していた。

路上は建物の倒壊によって瓦礫片や塵で散乱し、視界は一様に赤く染まっているので、この中からほんの小さな黒いチップを探すのは海原に捨てた貝殻を探すのに等しかった。

リンはこの劣悪な環境下でもピンピンしているが、海人の方は意識が朦朧としていた。

喉が焼ける、目がかすむ、ハンドルを握る手に力が込められなくなり、息は絶え絶えで、車をただ真っ直ぐに進めることすら難しくなってきた。

「だ……………じょ……………ぶ？」

横からリンの声が聞こえてくるが、何を言っているのか鮮明には聞き取れない。

俺、死ぬかも　　思えば何故、彼はこんな面倒なことに首を突っ込んだのか？

ことの始まりはごく感情的な理由だった。それはいいとして、人間である彼は、橋の上でアンドロイドの真の姿を見た時に引き返すべきだったのだ。

それを彼は「二人を止めるため」という身の程知らずな大義名分を掲げて走り出してしまった。第二の失敗である。

そして現在、彼は死にかけている。

二人を止めに来たはずなのが、結局はまた感情に流れられてしまった。

ナナシに振り向いて欲しいから？　リンに「探して！」と頼まれた時、真っ先に彼を突き動かしたのは確かにそんな下心だ。が、もう一つ大きな理由として、彼は二人をアンドロイドだと認めたくない思いと、結局は彼女たちに戦いをゆだねるほかない無力感を、自分が少しでも役に立つことで紛らわせたかったのだ。

気持ちの矛盾が傍目には無謀な形で行動に表出するという点では、彼もナナシと似たような性質だと言えるのかも知れない。

そんな無謀な彼はとうとう意識を失って、バギーは建物に側面をぶつけて横転した。

二人は宙に投げ出され、海人はアスファルトに額を強打。彼の意識が完全に途絶えた……。

ザックだ。

いつも刑事らしからぬ陽気さで海人とコンビを組む相棒。

「あなの？ この俺が恋人を選ぶ基準を教えてやるつか」

また例によつて自分の恋愛哲学を語ってくる。

海人はうんざりする心持ちで、一応は聞いているふりをしてやった。

「ズバリだな……？ 運命の赤い糸？ で繋がれているかどうかだよ」

誇らしげに鼻を鳴らすザック。

自分が如何に恥ずかしいセリフを吐いているのか自覚はないのか

……海人は引き気味にザックを見る。

「例えば俺がトレインに乗っていたとする。向かいの座席にはキレイなお姉さんが座ってる。で、とある駅でお姉さんは降りるんだが、なんともまあ忘れ物をしているワケだ。

忘れ物はペンケースでもチップでも何でもいいんだが、こりゃいかんと思つて俺はそれを持って慌てて駅を降りる。そして忘れ物を渡してやるうとお姉さんに声をかけ、彼女は振り返る……瞬間、俺はその美貌に改めてノックアウトされる。

お姉さんもお姉さんで俺を見て頬を赤らめてる、いわば恋の始まりだな。

ほら、彼女が忘れ物をしなかつたらここまで行きつかないワケだろ？ つまりだな、忘れ物が二人の運命の赤い糸だつたつてオチよ」

分かるような分からないような話をされ、海人は「あ………」と間延びした声を出す。

対してザックは意気揚々として、海人にこんな言葉をかけるのだ。  
った。

「お前も見つけられるといいな、あの子との運命の赤い糸をよ」

「あ……れ……？」

漠然とした視界の中央に、何やら黒くて小さな物体がある。

海人は何の気なしに手に取り、息が苦しいので仰向けに体勢を変えてから、手に取った物の正体を見極めようと目をこらした。

しかし視界は一向によくならず、これは一体何なのだろうとぼんやりいぶかしんだ。

「か……海人……あんたが持つてるそれって……」

誰かの声が遠巻きに聞こえてくる。

リン、たぶん、リンだろう。自信はない。

「チップだ！ BRSの入ったチップ！ あんた見つけたんだよ！」  
チップ……？ チップ？ チップを見つけた？

鈍重な意識に冷水をかけられ、海人ははつきりと意識を取り戻した。

身体を起こそうとしてもうまく力が入らないし、関節のそこかしこが痛んで満身創痍だが、そんなことは気にならなかった。

「ほら、きつとこれだよ。きつとこれ！」

リンは薄く開いた海人の目にチップを近づけて見せた。

「……それじゃなかったら、もう、神様の所為だよ」

息も絶え絶えに、海人はやっとの思いで声を絞り出した。

「早くナナシに届けに行こう！ 運転は私がするから！」

出来るの？ と聞こうとしたが口が開かず、何だか遠くでガシャガシャと騒がしい音が聞こえ始めた。恐らく横転したバギーを使える態勢に戻しているのだろう。

他にも独り言が聞こえる。これは使えるかだろうとか、うん、使えそうだな、とか自己完結しているのだろう。

彼は自分の身体が持ち上げられる感じがした。恐らくリンの両掌

に乗せられているのだろう、すごい力持ちな子だな　海人は再びぼんやりとし始めた意識の中でそう思いながら、身体をゆだねられる安心感を覚えた。

「ええつと……とりあえず、このペダルを踏めば進むんだよね？　後はハンドルで操作……なんだ、エア・グライドと大して変わらないじゃん！」

助手席に海人を座らせ、リンは意気揚々とハンドルを握った。

次に彼女はアクセルペダルを踏んで豪快にスタートを切るのだが、ここで幸運だったのは、脇のギアが「後進」ではなく「前進」となっていたことだった。

「ぶつちぎりにしてやんよ！」

リンは思いつきりアクセルペダルを踏みこみ、言葉通りの加速度でバギーを発進させた。

もし横転の衝撃でギアが後進になっていたり、壊れていたり、そもそも車が動かなくなっていたりしたら、彼女は前進することさえままならなかっただろう。

これはチップの何万、いや何億分の一ともいえる確率での発見にも言えることだ。

こうした幸運の連続を……後はナナシへと繋げるだけである。

クリプトナスはタワーに到達していた。

ナナシはタワーの壁面にかかる梯子を使い、四、五段飛ばしにしてさながら階段を駆け上がっていくように軽やかに頂上まで登っていった。

頂上の縁に立ち、ナナシはクリプトナスを対峙する。

前にここでこうして立った時は満面の星空を見て感動に打ちひしがれたのに、現在目の当たりにしているのは不気味に青白く輝く二つの瞳であった。

「……お前は一体何が目的で？<sup>トランシュ・ホール</sup>廃棄炉？　まで来た？」

答えは返ってこないと分かっているながら、ナナシはそう訊かずに

はいられなかった。

クリプトナスはいぶかしんでいるのか嘲笑っているのか、口元を引きつらせたまま眼下の人型をまじまじと凝視している。

そしておもむろに左手を上げ　人差し指をナナシに向けた。

否や人差し指が鋭い針となってナナシを襲い、彼女はとっさに跳躍してこれをかわす。

針の先端はそのまま内部の壁に突き刺さった。

頭部への思わぬ進路が出来た　ナナシは着地と同時に人差し指に飛び乗り、そのまま猛然と腕を駆けあがっていった。

触手が薄気味悪くうごめいて敵の侵入を阻もうと総毛立つ。

ナナシはそれから追われるように走って走って走り抜けた。が、触手の追走に足を取られ、あわや全身が取り込まれようという時、彼女は一息に飛びあがった。

空中でクリプトナスの瞳と対峙する、当然ながら斬撃が届く距離ではない。

それなら、と彼女はクログガネを槍のように持ち直して、そのまま勢いよく投げつけた。

刃の切っ先はストン、と見事に鼻っ面に突き刺さり、クリプトナスは思わず仰け反った。

直後、自由落下を始めたナナシは奇妙な静寂を感じ取った。

嫌な予感だ　それは最悪なことの中し、クリプトナスは仰け反った頭をそのまま元に戻す形で？頭突き？を彼女にお見舞いしたのだ。

ナナシは勢いよく地面にたたきつけられた。

凄まじい衝撃が背中から彼女の身体を押しつぶし、意識が一瞬激しく明滅して、激痛に指一本動かせないと身悶える頃には、巻き起こる粉塵越しに漫然と前を見つめている。

この体験と感覚は今日で何回目だろう、三回目だったか。

しかし四回目はなさそうだった。クリプトナスが彼女を踏みつぶそうと、大きな足を振りかざしたからである。





海人は衰弱し切っていたが、彼女の手前努めて冷静に、かつこよく振舞った。

ナナシは彼の顔を黙って見つめている。どうしてこんなにボロボロになってまで、こいつは私にBRSのチップを持ってきたのだろう。ナナシは不思議でしかたなかった。

ふと右手を伸ばしてチップを受け取り、ナナシは今一度灰にすすけた海人の顔を見る。

「お礼が欲しい……って訳じゃないけど、名前を覚えてくれない？君の名前は……」

そうしてゆつくりと、海人は地面に顔を伏せた。

「リンが連れてきたのか？ こいつを」

上体を起こし、前方で倒れているリンの姿を見ながら呟いた。

右手にはBRSが握りしめられている。

不意に悟った。二人が命を削って、私にこれを届けにきてくれたのだと。

「……インストール」

ためらいはなかった。

気がつけば立ち上がり、気がつけばBRSのチップをインストールしていた。

左手に白い電光が迸り、黒い砲塔がその姿を現す。

不快な気分になるどころか、今は妙に落ち着いた気分だった。

チャージ1……2……3……左目に蒼い焰が灯り、銃口に青白い光が収束していく。

クリプトナスは塔を破壊しようと両拳でハンマーを作って何度も殴りつけていた。

頭上から次々と瓦礫片が降り注いでくる。

チャージ4……5……銃口の輝きがひと際大きくなった。

クリプトナスは足元で起きていることによりやく気付いた。

青白い光を束ねた銃口がこちらを向いている。

クリプトナスは慌てた様子で顔を近づけ、発射を阻止しようとし

た。

「お前の負けだ」

チャージ？6？……ファイルに言われた臨界点を一つ越え、ナナシは引き金を引いた。

そのココロの中で。これほど迷いもなく放てた一撃は今までにな  
い。

何故ならリンと指切りげんまんをしたばかりだからだ。

この世界を守る、と。

青白い波動はクリプトナスの顔面から胴体、足元に至るまで瞬時のうちに呑みこみ、最後ははるか天空に一筋の輝きを放って消失した。

クリプトナスは指一本残すことなく完全に滅し、後には降って湧いたような静寂が辺り一帯を満たすばかりだった。

ナナシはおもむろに歩き出した。

その足を地面に横たわる海人に向けて。

何故初めにリンではなく彼だったのかは たまたま、リンのところへ向かう途中に海人が倒れていたからである。

「……おい、お前、私の名前がどうか言ってたか」

ブーツの先で肩口を小突きながら、ナナシは冷やかな口ぶりで話しかけた。

「借りを作られたから今返す。私の名前は」

海人の眉がピクッと動いたが、意識を取り戻したわけではないら  
しかった。

「？ナナシ？だ。二度は教えないからな」

ナナシは海人の顔を見下ろして言った。

その瞳は一向に開く気配はない。

それでもナナシは「これで借りを返した」と、足早にリンの下へ

向かって行った。

不意に、ナナシの周囲が陰で覆われた。

見上げてみると、一機のエア・グライドが滞空している。

長方形の形をした屋根付きのエア・グライドはゆっくり高度を落としていき、ナナシの前へと着陸した。

「フィール……」

自動でスライドしたドアからは、白衣を身にまとったDr・フィールグッドが降りてきた。

ナナシは強気な表情で歩み寄ってきたフィールと面対する。

「何か用か？ 私はやるべきことは果たした、文句を言われる筋合いはない」

「ひどい言われようだな。せつかく直々に君の戦果をほめたたえに来たというのに」

落ちついた声で言いながら、フィールは辺りをぐるっと一周見渡した。

遠くに火の手や煙がいくつか上がり、この付近一帯も建物の倒壊によって散々に荒れており、まさしく？戦火の跡？といった有様である。

「……で、答えてくれるのか？ さっきした私の質問には」

辺りを眺めるフィールに声をかけ、彼は今一度その顔をナナシに向けた。

「今こうして面と向かっているからにはな。話せるだけ話してやる」

より険しい表情を見せるナナシに、フィールは重たげに口を開いた。

話の途中、強い突風が吹いた。

クリプトナスが耳をつんざくような咆哮を上げた時にも、確かにこんな風が吹いていた。

ナナシの二束髪は揺らぎ、フィールを見る彼女の瞳孔は大きく開かれていた。

思いもよらぬ事実を聞かされたからである。

「簡単に言えば、ブラックの正体は死んだ人間のなれのはてだ？  
魂？と言い換えた方が分かりやすいだろう。ブラックを倒してきた  
君は……つまり、人間を殺してきたことになる」

希望に満たされ始めていた彼女のココロに、ぴきつ、亀裂が入っ  
た。

>The Second Act/End<

t o b e . . . . The third Act .

&lt;&lt;Chapter 6&&>> (後書き)

これにて『第二部』は終了となります。

次回の更新については、『第三部』準備のため少々日を頂きます。

詳しくは活動報告に書きますので、お手数ですがそちらをご参照くださいませ。

and more . . . . .

次回 予告

Rock・12? 孤児院・スーパーノヴァ?

乞うご期待

あいつは行っちゃった。

心底清々する、あいつとはまったく馬が合わなかったからな。

今回だって、俺は工場がたくさん並んでる地域にある？タワー？を  
目指そうと言ったんだ。

分からねえ。ただ、あそこから誰かに呼ばれてる気がする。だから俺は行きたかった。

時間は夜。どうもこの身体になってから、俺たちはほとんど太陽の光に弱くなったらしい。

それに人間どもに発見されても困るしな。まあ、そんなときゃ殺っちゃまえば済む話だが。

とにかく、俺たちは夜が更けたのを見計らってタワーを目指した。ところが道すがら、若い工場員の男を見つけると、相方がうずきだしちまったらしい。

こいつはすぐに人間を殺したがるんだ。それこそ血欲しさのべつまくなし、TPOなんてどこへやら、欲望の赴くままに相手の身体を引き裂いちまう。

その行為自体を悪いとは言わない。俺だって元々は死刑囚だからな、強盗殺人の。

でも俺はあのタワーにいちはやく行きたかったし、「ここはやめておけ」と言った。が、案の定というか、あいつは殺っちゃったね。俺の制止もむなしく……自慢の爪でグサリ、とだ。

あーあ死んじゃったよどうしてくれる、とか呆れながらも、結局は俺も楽しんでた。

楽しんで男の身体を引き裂くのに加わっていた。相方は身体の右半分を担当し、俺はもう左半分で、二人交互に腕を振ってまるで髪をかき乱して踊る女さながらに。

それでも俺たちに気付いた時に男が悲鳴を上げたもんだから、暗

闇から誰かがやってきた。警備員だかサツだか知らねえが獲物が増えたみたいだぜ、なんて相方と言い合っていると、こいつは奇妙だ、現れたのは女だった。

歳は17、8ぐらいか？ 結構な上玉だ。長い髪をサイドに束ねてよ、ツインテールっていうのか？ そんな髪型で、へそ出しルックにブラーっつっていう挑発的な格好で、相方はちくしょう俺の股に一物ついてりやな、なんて残念がってたが、俺は気に入らなかつた。可愛げがないからだ。この女はとんでもなく冷たい眼をしてやがった。

映画に出てくる非情な女スパイかつーぐらいお力強い雰囲気にも包まれてる。

俺はこの手のタイプは好きじゃない。なんでかって？ 考えてもみる。優しく撫でてやって気持ちよさそうにしない犬とか猫が可愛く思うか？ ま、ブスっとしてる方が好きっていう変態がいるのが世の常だが、俺は理解に苦しむね。犬猫は可愛くなけりゃあな。

その点、俺たちの前に現れたこの女は野良犬な感じだった。それも孤高の。

そんで驚いたのは、この女はちっこく何かを呟いて左腕を右手でパシッと叩くような動作をすると、途端に白い電光が迸った。

俺はこの時代 何年だか知らないが に舞い降りて、人間どもの生活を見ていたんだが、どうもパソコンに使うような小さなチップをヘンテコな機械にぶっこんでやると、どこからともなく物質が現れる。原理は知らないが、便利な時代になったもんだ。

で、女もそれをやってのけた。取り出したのは……ナイフ、じゃない。思い出した、カタナってやつだ。JAPANの。

そして女はそれを構えた。ほんの一、二秒目線を突き合わせたけど、ピリっと感じたね。

この女、俺たちを殺すつもりだと。

相方はやつちまえばいいじゃねえか、と軽々しく言うが、こいつは本当に馬鹿だ。



危険を察する能力つてもんがねえ。俺も社会的には馬鹿の一員だったし、自覚もしているが、身に迫る危険を嗅ぎとる嗅覚には自信がある。

女にただならぬ殺気を感じた俺は、相方の言い分を無視して一目散に逃げた。

すると女も追ってきたんだが、その脚力は明らかに人並み外れでいやがった。

フェンスも壁もことごとくひとつ飛び、いくら走っても息一つ切らす様子もないし、ガキの頃に映画館に忍び込んで盗み見たターミネーターよろしく執拗しつように追いかけてくる。

こいつ、人間じゃねえだろ。

相方が身体をコントロールしようとするのを抑えて、俺は逃げて逃げて逃げまくった。

海上を渡って隣の街に着いても、俺たちと女の追いかけっこは続いた。

住宅街の路地に入り込んだ時　　粹がった悪ガキ三人組が金髪のおチビちゃんにたかっているところに遭遇した。

ガキはともかく、なんでこんな夜更けにチビがうるついてんだ？とかいぶかっていると、油断した。

俺は身体の主導権を相方に奪われた。

すると奴は姑息な悪党どもを成敗する正義の味方気取りになって、人生の先輩として教え込んでやらねえとなあ、と舌舐めずりするみたいに言つと、ほんの二、三瞬の間に悪ガキどもを全員殺しちまった。

例によって自慢の爪でな。研ぎもしないのに常に鋭い状態に保たれてるから頼りになる、こんな行きすぎた説教をする時にも。

場にはチビが一人残された。

目はこつちを向いているが、俺たちの姿にびっくりしすぎてんのか、まるで魂が抜かれたみたいにはうつと突っ立っている。

この焦点のあってねえ迷子をおうちへと親切に送ってやるか？

まさか、相方はそんな奴じゃない。すでにチビに向けて爪を立て、牙さえむき出しにして打ち震えている。

殺るんならさっさとやれよ　そう急かそうとした時、向こうから足音が聞こえてきた。

あの女が来たんだ。

俺はまずいと直感し、身体の主導権を相方から奪って早々にずらかった。

あの感情のなさそうな女のことだ、血まみれの死体を目にしたところで足を止めるようなマネはしないだろう　と思って振り返って見たら、奴は追ってきていなかった。

ちよいと気になって来た道を引き返し、誰かの家の屋根からおそるおそる下を見てみると……、意外な展開、あの女とチビは知り合っていたらしい。

やがてコートをはおった若い男もやってきて、女とそいつは初対面だったみたいだが、ま、この隙を逃す訳はないわな、俺たちはその場を後にした。

適当なところまでやってくると、相方がまたがやがやとうるさく言いだした。

こいつって野郎はまだ殺し足りねえらしい。

俺の意思はタワーへと向かっていたが、相方が逆の意思を発するので、俺たちの身体は逆向きに乗り合った二人乗りの自転車みたいにどちらへも行けなかった。

さすがに嫌気が差して、もうコンビは解消しようぜ、と俺は言った。

相方も勇んで同意する。

ああ、てめえみてえなビビりはママのおっぱいでも吸ってな、と。だけど俺たちは二つの、？魂？とでもいおうか、一つの身体に二つの魂を共有させてるから、何をしたってコンビ解消は無理だった。馬鹿だのクソだの罵り合ったのち、俺はため息を吐くみたく、「身

体がバラバラにならねえかな」と独り言をもらした。

するとだ、神つてのはいるもんだな。その願いがたちどころになえられたんだよ。

俺の目の前に犬だか狼だが四本足で立つ全身真っ黒の獣が現れた。ついでに俺の頭ん中がサアッと静かになっていてのを感じた。

一瞬のうちに悟ったね、ああ、目の前の獣は相方なんだと。

気持ち悪い眼をしてやがる、まるで顔面に光るアメーバが張り付いてるみてえだ。

そんで奴は俺に顔をよこすと、清々したぜ、とでも言うように鼻を鳴らし、そのまま暗闇に消えていった。

清々したのはこっちだって同じだ、これで俺は好き勝手に行動できるんだからな。

それにしてもクソが付くほどしょうもない奴だった。

俺のいたところじゃこんな奴は珍しくない。ジャラジャラとアクセサリーを身に付け、意味もなく威張り散らし、街中で肩に触れた奴は片っ端から イライラしてる時は触れてなくてもだ ぶっ飛ばすような野郎、ただし、仲間がいる時か銃を持っている時だけだ。

それ以外は何かにつけ吠えてはいるが、大人しくしてる。小心者ほど力を持つと大きく出る、ってな言葉を小耳にはさんだことがあるが、奴もその典型。今は銃の代わりに獣という新しい身体を手に入れて、爪も牙もないひ弱な人間どもを襲うことに喜びを感じている。

はなはだむしずが走る野郎だ、なんであんな奴と俺がコンビになっちまったかというところ……これが初めっからだっただ。

今でも覚えてる。

目隠しをされ、手足に枷かせをつけられて電気椅子に座らせられたのを。

神父がこの罪人を云々の祈りを神に捧げた後、「最期に言い残す

ことは」と訊ねてきた。

俺は潔い性質たちなんでね、死ぬのは怖くなかった。

だからこう言っちゃったのさ。

「早くやってくれねえかな、俺あ地獄に行つてとつと好き勝手やりたいんだ」

そしたら刑務官だろうかね、遠くで足音が聞こえて　周囲は蚊一匹の気配もしないほど静まり返つてた　すぐだった、俺の身体に高圧電流が流れた。

ビリッと一瞬だけ強烈な痛みを感じただけだったが、どうやらそれで、俺のクソみてえな生涯は幕を閉じた……善だったのが、どういふ訳か、俺は目覚めていた。

暗がりの中で。

ここはどこだ、俺あ刑務所において、ついさっき死刑にされたんじやなかったか？

次第に目が暗闇に慣れてきて、ここがビルとビルの間路地だつてのが把握できた。

何らかのミラクルがあつて俺はいつものブロンクスに戻ってきたんだな、とのんきに考えて、いきつけのバーで女を囲つて出所祝いの酒でもたらふく浴びようと表通りを目指した。

が、どうも身体の具合がおかしい。

酒の飲み過ぎで胸がむかつかつとか、胃の中ですっぱいものが渦を巻いてるっていう類の体調不良じゃねえ。言うなりや違和感、つてやつだ。俺の身体が俺のもんじやない感じの。

おかしいなあ、とおもむろに掌を見してみると、腕が真っ黒くなつてやがる。辺りが暗いせいだろうと思つたが、明らかに指の形がおかしい。ちっこくて細長くて、俺の指はもっとゴツゴツしてたのに、なんでこんな魔女の指先みてえになつてやがるんだ？　ムシヨのメシはまずい上に健康によさそうなもんじやなかったのは確かだけだよ、しかもたまに芋虫入り。

俺、知らないうちにヤクでも盛られたのかなあ……と首をかしげ

ていると、声がした。

おい、お前、お前、というしゃがれた男の声。

ハッと仰天して辺りを見渡してみるが、誰もいない。

しかもこの声は頭の中で鳴ってるみたいな感じだった。

誰だよお前？ と冗談半分に心の中で念じてみると、たまげた、すぐに返事がきた。

こつちが聞きてえよ、いきなり割って入ってきやがってよ、この身体は俺のもんなんだぜ。

田舎者なんだろうか、相手はひどく訛った言葉でやたらにまくし立ててきたが、俺は何が何のことやらさっぱりだった。

俺たちはしばらく心の中で言葉の応酬を繰り返した。

だが相手は耳糞がたまってんのか俺の言葉を聞き入れず、自分が喋りたいだけ喋り、会話はまるで成立しなかった。

それでも俺がしつこく食い下がるので、相手はついにブチ切れて、しやらくせえ！ って怒号が脳内に響き渡ると、何が起きたのか、俺の身体は勝手に走り出していた。こんな感覚は生まれて初めてだ、全自動で動くロボットの目になった感じ。

そんでオートメーションに動く俺の身体は表通りに出た。

街は白と銀のネオンに彩られて、俺はその汚れのないきらきらした輝きに目がくらんだ。

スラムに暮らしてる俺が言うのも説得力がかけるが、メインストリートにビルが立ち並んで一様に光を放つ光景はとんでもなく豪華で美しかった。

しかし人っ子一人おらず、車も一台も走ってなく、今までバリバリに活気づいていた街から忽然と人々が姿を消した後みたいな静けさだった。

さつき首が動いた時、遠くにチラッと超高層タワーが見えたが、この街並みからするとエンパイアステートビルでもなさそうだし……どうやらここはブロンクスでもニューヨークでもないらしいかった。じゃ、一体どこなんだ？

それに俺は自分の身体の異変にも気付き始めていた。

街灯に照らされて俺の身体が視界の下にちらつくんだ。黒。それも肌が黒いとかそういう次元じゃなく、ひたすらに真っ黒。

俺はもう悪夢を見ている心地だった。身体も制御が利かず勝手に動き回るし。

通りを疾走していた身体がぴたりと止まった場所は……どこぞのブランドショップのショーウィンドウの前だった。

ほれ、ここでようやく自分の身体を見ておきな、と心の中で声が出た時には、俺はもうとっくに見ていた。

ショーウィンドウの中にはシルクのカーテンが下ろされ、それが街灯の光を受けてスクリーンの役割を果たしている。そしてそのスクリーンに浮かび上がっているのは、人の形をした？サタン？だった。

全身隅から隅まで黒く、顔面には青白い目が二つあるだけ、背はひよろつと高く、人の形をしてはいるが、一目見て人ではないことが明らかだった。

俺はいよいよ発狂しかけたが、薄々感じていた異変の正体が目に見えて分かったところで、もう騒ぐ気力もなかった。悪い夢の最中だろう、と心のどこかでたかをくくっていた。

でだ、今に至る。

悪い夢は未だに続いている。

いや、実を言うと悪い気はしていない。むしろ、今はこの状況を楽しんでさえいる。

それにお邪魔虫ともおさらば出来たしな、俺は晴れて？自由？になっただ。

あの後、俺たちは口論の末、時間を決めて交代制で身体の主導権を持つことにした。

まあ社会のルールさえろくに守れなかった俺たちだ、決まりはも  
の一日で破綻したが。

あいつが人間だった頃に何をしでかしたか、詳しくは聞いてないし興味もないが、加えて胸糞悪くなるほどム力つく奴だったが、短い間でも同じ身体を共有していたよしみで、例の女に殺されないよう祈っとく。

さて、そんなことを考えてるうちに　いよいよ着いた。

俺は今、煙突の形をしたタワー頂上の縁にたつて、中を見下ろしている。

奥底には丸いプールみたいな器が青白い光をたたえている。

あそこから声がする、それは何枚もの隔壁をはさんでくぐもつた風に聞こえるが、その隔壁の向こうには何万、いや何億って人間がいる気がした。

俺らの博打の的だったアメフトのプレイヤーは、満員の観客で埋め尽くされたスタジアムに入る時、きつとこんな気分を味わってんだな　そんなことを考えながら、俺はダイブした。

雁首がんくびそろえて俺を待つ観客の中へと突っ込んでいくんだ。

ドツバアン、ってな音がするかと思ったら、俺の身体は静かに光の中へ入っていた。

予想した通り、右から左から人々の声が聞こえて俺を包んだ。

喚いていたり、呻いていたり、泣いていたり、うらやんでいたりする声で、鮮明に聞こえる声もあるが、大半の声はごちゃごちゃとしたノイズにしか聞こえなかった。

そんな？ 奴ら？ の言葉を聞いていて、俺はピンと閃いた。

こいつらは魂なんだと。いつぞやに死んじまって、俺のようにサタンの姿になることも出来ず、ただ精神体となってここに溜まっている魂。

だからもう一度人間の姿に戻りたいし、そうでなければせめて俺みたいになりたい。

「私を、私を連れてってくれ」

「どうなってるの、僕は一体どうなってるの」

こんな風に奴らは言ってる。

ああ、そう、残念だったね、死んじゃって。

俺がうらやましいかい？ そうか、だったら俺はてめえらの分まで楽しんでやるから、だから、俺にまわりつくな、しつげえんだよ。

俺が何度そう言っても、奴らは聞く耳持たずだった。

出口だろうか、目の前にひと際大きな光の輪が見え 俺の視界

は、青と白の強烈な輝きに覆われた。

t o c h a p t e r 2



終末世界。

茫漠ぼうぼくと広がる廢墟群の中に、威勢よく声を上げる一人の大男がいた。

愛用のトマホークを握りしめ、小型のブラックめがけて力任せに振り下ろす。

いたいけな断末魔がこだまするや、ブラックは身体を真つ二つにされて辺りに飛び散った。

「あんなザコ相手に、まったく大げさな……」

後ろで呆れた声を発したのは、大男が全力で小物を狩る様子を見ていた？タン？だった。

その近くには？ダー？もあり、上空に向かって野球のボールを投げては左手のグローブでそれをキャッチしている。

相変わらず野球が好きなようだ。

「ああん？ よく言うじゃねえか、シシはウナギを狩るときも全力でどつどつよ」

得意げな笑みを浮かべ、？ウロ？はタンを見やる。

「うそおっしやい。彼女がいるからカツコイイとこ見せたいんでしょ……」

タンはふとウロの背後を指差す。

なだらかな瓦礫つみきずま（がれき）の築山の上に立ち、風に白い髪をなびかせる女の姿があった。

地面に大剣を突き刺し、それを手の置きどころにして、彼女は遠くを見つめている。

その背中には百戦錬磨の戦士のような気風さえ漂っていた。

「ハクさあああああん！」

ウロは踊るようなスキップで軽快に斜面を登りつつ、彼女の名を高らかに呼んだ。

「ん、終わったのか？」

振り返り、どこか退屈げに彼女は言う。

「はっはっは、このウロにかかればどんな敵も瞬殺。ハクさんの手をわずらわすまでもありません」

胸に手をあてがいつつ、ウロは気取った口調で言ってキラツ、と白い歯をちらつかせた。

そして横目にこっそりと彼女の胸を見やる。彼女が身をねじった際にそれは本人の意思が至らぬところでぶるんつと小さく揺れ、ウロは内心ラッキー、とほくそ笑むのだった。

「……おや、ハクさん、何だかとても退屈そうに見えますが」

彼女がやぼつたい目付きになっているのに気付き、ウロは言った。「まあな。ナナシの姉さんが行っちまってから、なんつーか張りがなくなっただってどうか」

「ブラツクもほとんど倒しちゃいましたからね。残ってるのはさつきみみたいな小粒ばかりですし」

彼女のご機嫌を取ろうと、ウロは愉快げに言葉を継ぐ。

「それにしてもあの時のハクさんの戦いぶりはすごかった。このウロは昨日のことのように覚えておりますよ。デカイブラツクを三体相手に、その大剣で次々とぶった斬っていったんですからね。さすがこのウロのはーとをぶれいくするだけのことはある……」

彼は再びハクの胸を見やったが、今度は揺れなかった。

そして彼女はおもむろに身体の向きを変え、ウロからは乳が見えなくなった。

まるで「お預け」にされた気分、だが、そういうのもいい。

そんなことを考えて身悶えるウロは、このところすっかり？すけべ？になっていた。

「はあ……つまんねえなあ、なんか面白いこと起きねえかな」

ハクはため息を吐き、ぼんやりと曇天の空を仰いだ。

ナナシを？アナザー・トラッシュ・ホールもう一つの廃棄炉？へと送り出した後、大量に出現し

たブラックたちの相手をしたのはハクだった。

一振りの大剣を武器に、エア・グライドを駆って数千はくだらない数の敵を手当たり次第に斬り裂いていく様は、例えではない真の一騎当千そのものだった。

その鬼神のごとき強さにブラックは集合して三体の巨大人型ブラックに分かれるも、ウロたちエクスプロリズムのメンバーがおおずやってきた頃には、ハクが一体につき一振りの斬撃で続けざまに敵を倒し、ちょうど戦いが終わっていくところだった。

ナナシは塔の封印を解いた際に溢れ返ったブラックの後始末をどうするか懸念していたが、結局のところはハク一人でこと足りてしまったのである。

その戦いより現在に至るまでの二週間は、方々へ逃げたブラックを掃討すべくエクスプロリズム総出で狩りを進めている。

しかし相手はどれも小物で、アンドロイドの中にナナシのような好敵手もないし、戦闘狂のハクにとっては物足りない日々が続いていた。

「何か面白いこと、ですか……」

ウロは顎に手を当てつつ、思案げに呟いた。

ふとハクの右手に持たれた大剣・リヴォルヴが目につく。

彼女の注意が薄れている今なら、ひょいっと取り上げられるかもしれない……ウロの脳裏によこしまな考えが浮かぶ。

「ああ……面白いこと、そうですね」

わざとらしく言いながらさりげなくハクの背後に忍び寄り、彼女が振り返ろうとした瞬間　ウロは素早く彼女の右手からリヴォルヴを奪い取り、それを築山の下にほっぽった。

「ふえ………?」

鬼の気性を抜き取られ、ハクは寝起きのような顔できょとんと佇む。

困惑気味に辺りを見渡し、状況を把握していくにつれて表情が不安の色にかげってきて、つい先ほどまで百戦錬磨の戦士の気風を漂

わせていた彼女は、今やすっかり寝ている間に荒野へほっぴり出された迷子同然になっていた。

「ワイルドなハクさんもいいけど、俺はやっぱりこっちの方が……」  
ウロは顔がにやけてしようがなかった。

ちなみに彼女がウロに対して正面に身体を向けていたので、その間中ずつとウロの視線が例の場所に集中していたのは言うまでもない。

そして彼は存分に谷間を満喫すると、彼女の注意を引くように咳払いし、

「お困りですか？ お嬢さん」と声音を変えて救いの手を差し出した。

「あ……その、ここはどこですか？」

「そう聞かれたら、私はこう答えるしかありませんね。

あなたと私との、再会の場所である、と」

またもやキラッ、と白い歯を見せて決め台詞風に言い切るウロ。

「真面目に答えてくれますか？」

「はっはっは、私はいつだって真面目ですよ。見てください、この目を」

まぶたを全開に広げてウロはググつと顔を近づける。

ハクはとっさに両手で遮りを作って目をそむけた。

「あ、あの、そんなに顔を寄せられても困るんですけど……」

「なに、遠慮はいらないですよ。納得のいくまでご覧ください」

しつこく食い下がってくるので、ハクは横目でウロの面構えを確かめた。

眼球がはみ出そうなくらい開かれた双眸、横一文にがっちりと結ばれた唇、顔面岩のごとき威容さと暑苦しさ<sup>いよう</sup>と不気味な迫力に満ちたその面構えに、

「きめえ……」

とハクは声をもらすのだった。

「納得していただけましたか？ 私が常に真面目で全力な頼れる男

であるということ。」

ああ、納得したよ、その気味の悪さをな、ハクは内心毒吐く。

「それではこの頼れる男に何なりとお困りの件について申してください」

そう言つて力強く胸を叩くウロ。

なんて頼れる男なの、という意味の安堵ではなく、ハクは身に迫る顔の脅威が離れたことに小さく、しかし心から安堵のため息を吐いた。

続いて例のネガティブスイッチが起動し、なんでこいつは私に付きまとうんだろう、私が負のオーラの塊だから？　ちくしょう今すぐにも空が落ちてこいよ……と青ざめた顔を足元に向けつつ、ブツブツと呟き始めるのだった。

「ダー、ちよつとお願ひがあるのですが」

一方、二人の様子を後ろで見ていたタン。

彼の言葉に一人キャッチボールを止め、ダーは「なに？」と顔を向けた。

「彼女の大事なものですから、あれを返してやってきてくれますか？」

ダーは瓦礫の斜面に横たわっている大剣、続いてその上のウロとハクを見てタンの言わんとしていることを察知し、「りょーかい」と大剣を取りに向かった。

「……なるほど、大剣をまたなくしてしまつて困っている、そうですか」

ウロは今にも泣き崩れてしまいそうな表情ですがつてくるハク（本人は詰問きつもんされて渋々言つただけだが、彼にはそう見える）の？お困りの件？について聞き、紳士風な口調で相談に乗つてあげていた。「あなたはその剣がないと困る、それは分かりましたが、しかし、そんなものはもう必要ないのではないですか……？」

「え？」

何言つてやがるんだこの歩く岩盤野郎、と内心思っているなどは微塵みじんも感じさせないあどけない表情で、ハクは言つた。

「何故なら、この私が、あなたの剣となり、盾となるからです」  
言いながら、ウロはおもむろに身体の向きを変える。

語りモードに入ったのだ。こうなると彼は頭の中に用意されている台詞を喋り尽くすまでは周囲のことなど一切目につかない。

後ろに手を組んで静かに歩き回り、言葉の節々でオーバーな身振り手振りを加えつつ、自分にさもスポットライトが当てられているような気持ちでハクの騎士役を熱演するのだ。

「言うなれば私の頑強な両足が剣の柄に当たり、堅牢な腰回りがつばに当たり、この鍛え上がられた上半身が刃に当たり、どんな岩をも砕く自慢の石頭が切っ先に当たるわけです。

つまり、あなたはもう剣をなくして残念がったり落ち込んだりする必要はないのです！

何故なら……そう、この私を愛用の剣として、大切に携えていければいいのですから」

そしてさっそうと振り返り、人差し指を向けてポーズを取る。

完璧に決まった　ウロは内心誇らしげになるも、すぐさま異変に気付く。

ハクが右手にリヴォルヴを持って、不敵な笑みを浮かべているのだ。

「言い残すことはそれだけか？」

「え、あ、いや、ちよ」

大慌てに慌てるウロ。

ダーが両手を頭につけてからかいのポーズを取る姿が視界の端に見え、瞬時に事の全貌が理解できた。

「このあたしからリヴォルヴをくすねるなんざ見上げた度胸じゃねえか。……覚悟はできてんだな？」

「そ、そんな、あなた様から大事な剣を盗むなんてめっそもも」  
「うっせえオラァ！」

ハクはウロの足元めがけて勢いよくリヴォルヴを振り下ろした。辺りに瓦礫片や塵が舞い上がり、「ひいひい！」だの「お助け！

！」だの叫びながら、ウロは鬼神相手にただただ逃げていくのだ  
た。

「G」<sup>グッシュヨブ</sup>です、ダー」

「ちよろいもんよ」

事を仕組んだ二人は、作戦成功の合図として親指を立てた。

「ところでさあ、タン」

ウロがハクに追いかけられているのを尻目に、ダーは言った。

「団長の様子はどうなの？ 今訊くのも変だけど」

「ああ、私が今朝うかがった限りでは……」

タンは宙を見上げながら話し始めた。

遠くではどがん、だの、ずどん、だの、ウロの悲鳴交じりに音がしてあちこちで地煙が上がっている。

「トエトのメンテナンスによって肉体的な損傷は完全に治っていました。ですが、」

オウム返しに言ってタンを見上げる。

「未だに寝台から起き上がれず、昏々と眠り続けているんですよ。

損傷箇所は全部治ってもう充分に動けるはずなんです、精神的な問題かもしれないとトエトは言っていました」

「精神的な問題か……<sup>ブラックロックシューター</sup> BRSに負けを喰らったのが、相当ショックだったのかもな」

ダーはそう言って、再び一人キャッチボールを始めた。

「今は私が団長の代わりとしてエクस्पロリズムの指揮を執<sup>と</sup>っていますが、団長があのままずっと眠り続けてたら……と思うと、今後が不安で仕方ありません」

落ちついた声で言うタンは、眉間にしわを寄せてどこか遠くを見つめていた。

彼らから離れたところで、その様子を静観する者がいた。

? Gnos<sup>グノス</sup>?である。今日も自分に与えられた任務をまっとうす

べく、彼はアンドロイドの傍観、映像の記録に徹している。

ふと近くに何者かの気配を感じた。

目をやってみると、小さいながら人型のブラックがいた。

斜め倒しになった瓦礫に身を潜め、偵察するような目でアンドロイドらを見ている。

Gnosは何らかの手段を用いて、彼らにこのブラックの存在を知らせてやろうかと考えた。

しかしそれは傍観者の立場から逸脱する行為、やはりやめておこうと思改めているうちに、ブラックはさつとその場から離れ、そのまま走り出していった。

ブラックの向かう先にはユートピア・タワーがそびえている。

KAITOカイトの様子を見に行くついでだ、Gnosはブラックの後を追うことにした。

この時点では、誰も知らない、Gnosさえも気付いていない。

アンドロイドの未来を揺るがす運命の歯車が……少しずつ回り始めていくことに。

t o b e . . . . c o n t i n u e d .



## Rock・12？孤児院・スーパーノヴァ？

穏やかな太陽の日差しの中、子供たちのあどけない歌声が聞こえる。

彼らのばらばらになりがちな音程を秩序あるものに導いているのはピアノの旋律だ。

陽気に音と拍とを刻むピアノに合わせ、子供たちは負けじと声を張る。

それが建物の外まで和やかに響き、「やっといつもの平和が戻ってきたわ」と、孤児院の前の通りを犬の散歩コースにしている老淑女は思い、再び歩き出す。

今日日、？クリプトナス来襲？から約一カ月後だ。

「さて、今日のおんがくの授業はこれでおしまい」

彼は耳馴染みのよい声で言っ、ピアノ椅子から立ち上がった。黒いスーツに黒いストラックス、シャープなフレームの白縁眼鏡をかけ、均整の取れた顔立ちで子供たちに優しく微笑みかける姿は、若いながら人間として完成された雰囲気がある。

冰山キヨテル（いそがみやま）、この孤児院で子供たちに音楽を教えるピアニストだ。

「せんせー、もうおしまいなのー？」

「ああ、先生は午後から用事があるんだ。ごめんね」

茶髪を三つ編みにした少女に言い寄られ、キヨテルはにんまりと答えてあげた。

他にも続々と子供たちが彼の元に集まってくる。

容姿端麗な上に温厚な人柄、この手の先生が子供に嫌われることはまずない。

「っだー！ はなせ、さつきからお前らしっこいぞ！」

音楽教室の入り口手前、いつものやんちゃ坊主たちが金髪の少年にたかっている。

彼はつい一週間前に孤児院にやってきた新顔で、歳が14、5前後（正確には分からない）であるため、歳が二桁にも満たない子供が多い中ではすぐにお兄ちゃんとなった。

しかし慕われるというよりは、むしろ子供たちの体のよいちよつかい相手、もとい遊び相手にさせられているのが実情で、今回も三人のやんちゃ坊主の「くらえ、かいじんバナナはくしゃくつ！」と半ばサンドバッグにされている。

「こらこら、お兄ちゃん困ってるだろう？ はなしてあげなさい」キヨテルは歩み寄りつつ、穏やかな口調で言った。

少年の両手足にしがみつき、腹やら胸やらぽかぽかし放題だったやんちゃ坊主は途端にしおらしくなり、「はぐい」と渋々そうに少年から離れていった。

「すげー。いつもならあんな簡単に離れていかないのに」

少年は目を丸くして、子供たちの群れに戻っていく坊主たちの背中を見やる。

普段と違ってあまりに聞き分けがよいので、少々驚いた。

「いつもはもつとしつこいんですか？」

キヨテルは笑って、上品に訊ねた。

少年に対して敬語なのは、別段意識してのことではなく、こちらの方が彼にとって自然だからだ。

「ああ、他の……センサーっていうの？ そいつらの言うことはまるで聞かないんだよ」

「先生を？ そいつら？ とはよくありませんね。せめて？ あの人たち？ と呼びましょう」

思わぬ指摘をされ、少年はいささか戸惑い気味だ。

ただやんわりとした口調なので、腹立つどころか照れくさい気持ちだった。

「安心しましたよ。君と逢うのはこれで二回目ですが、もうすっかり孤児院に慣れたみたいで。」

あ、改めて自己紹介しますが、僕は氷山キヨテル。君は確か

少年は胸にあてがって例の優しい笑みをたたえるキヨテルを見上げていた。

その特徴的な？青い瞳？で。

「レン君、であってますよね？」

> i 1 2 2 4 9 — 1 2 1 8 <

ブラック ロックシューター      N o c r y a n d D i s t  
a n c e      第三部

O n A i r ! !

トランジスタ東南に位置する都市、サン・パライソ。

？人々の癒し？を念頭に都市開発がなされ、アミューズメントパークやプールなどの享樂施設、有名ホテルが多数あつてレジャー盛んなリゾート地である一方、？水と緑と太陽の調和？が都市デザイン的前提となつており、人工ではあるものの緑と水場が多く、太陽光を返すミラーポールが随所に建てられ非常にきれいな街並みとなっている。

その景観の豊かさから病院や老人ホームといった療養施設も多く点在し、レジャー地としての一面と併せ、街全体が都市開発の念頭そのままに機能していると言つていいだろう。

？スーパーノヴァ？は、サン・パライソにある数少ない児童養護施設の一つである。

そこへ週に二日、子供たちの音楽講師として出入りする若きピアニスト、冰山キヨテルは海沿いの通りを歩いていた。

本日は快晴。

海面に陽光が反射し、それは水のたおやかなゆらめきと共にぱちぱちと弾けている。

閃光花火みたいだ、そう連想するキヨテルの横を、ジヨギングするタンクトップ姿の女性、サイクリングを楽しむ親子が次々通り過ぎていき、いつもの平穩なサン・パライソの日常が戻ってきたのだと、彼は改めて安堵した。

国家全土を恐怖に陥れた？クリプトナス来襲？、世の通り名としては「Black monster Incident（黒いバケモノ事変）」がつい一か月前に起きたとは想像もつかない。

ほぼ全壊となったドームもわずか一週間と及ばず完全復旧した。それを可能にしたのは？チップ・イン？技術だ。ドームを形成し

ていた特殊素材の透明版をアンインストールしてチップに収め、後は損傷個所に合わせてインストール　　ばんそうこうを張っていくみたいな要領だ　　作業としては単にこれの繰り返しであり、手間と人手はかかったものの、国家全土を覆う規模の建造物を直すにはたつた一週間。

チップ・インという技術を生み出せてなかったら、果たして人類はどれくらい？瘴気？に晒された生活を強いられただろうか。などという記事を今朝の新聞で読んだのを思い出していたところ、ふとキヨテルは堤防間際に立つ男の姿が目に入った。

大半が誰かと連れだつて和気あいあいと楽しげに歩いていくのに、その男は傍らに小さな付き人を一人おいて、水平線の彼方を見据えたまま黙している。

内にいながら、さも人類全体を外から眺める傍観者のように。

あるいは、世俗に馴染めない世捨て人のように。

いずれにしても場にそぐわない孤高な佇まいだった。

傍らの付き人は頭からすっぽりフードをかぶり、ミニスカートにハイソックスという格好からは少女のようだが、なるほど、とキヨテルは二人の背中に歩み寄つていった。

「お久しぶりです、Dr. フィールグッド」

いつも子供たちに向ける声とは違う、やや改まった口ぶり。

孤高の男は振り返り、サングラス越しに彼を見やる。

「……君は？」

「これは失礼しました。一時、あなたの研究機関でメカニックのアシスタントをしておりました、氷山キヨテルです」

言われてから二、三瞬、フィールは頭にある人名図鑑をめくる時間を要した。

「非礼を詫びるのはこちらの方だ。すまないね、君の名前と顔がすぐに出てこなかった」

「いえいえ、私がああなたの研究機関でアシスタントをしていたのはほんの一週間程度ですし、その間に一度も話したことがないので、

お覚えでないのは無理もないですよ」

フィールはそこで再び間をおいた。

今度は記憶を引つ張り出すというよりかは、相手の言葉と自分の記憶の食い違いを探すという風に。

「私は確かに君を知っているが……君が私の研究機関にいたとは初耳だな。私が君を知っているのは？別件？でだよ」

「別件、と申しますと？」

「白々しいことを言う。あれだけセンサーショナルな論文を仕上げ、拳句に学界から追放されたんだ。？異端児？とは、君に対しては言い得て妙だな」

「お褒めの言葉とありがたく頂戴しますよ」

愛想良く笑つて、キヨテルは相づちを打つ。

その笑顔には子供たちに見せるような人柄の良さは薄れ、彼の別の一面が表れていた。

「君はいま、何をしているのかね」

「児童養護施設の音楽講師をやっています。これでも幼いころからピアノを習っていましたね、そのおかげでいい食いぶちを見つづれましたよ。フィール博士は、今日は休暇をとってこちらに？」

「まあ、そんなところだ」

「先には黒いバケモノ事変もありましたしね。大変な激務が続いていたとお察しします」

こんなありきたりな挨拶ぐらいの用件なら　それも相手は過去に学界から永久追放という仕打ちを受けた？元？がつく科学者だ

さつさと立ち去つて欲しいとフィールは内心思っていたが、「とここで……」と言われると、彼は軽く身構えた。

若干ではあるが、急に鋭くなった顔つきからはお決まりの社交辞令を聞かされる雰囲気は消えていたからだ。

「こちらにいる女の子は、博士のアンドロイドですか？」

それにフィールが黙して答えなかったので、キヨテルは少女を振り返らそうと、黒いパーカーのフードをすっぽりかぶった頭の上に

手を置こうとした。

「触れるな」

ほとんど即座に、フィールは手を出して制止した。

「おやおや、どうやら凶星のようで。こんな変装にもなっていない格好で、外を連れまわしていいんですか。？ミク？には多くの熱狂的ファンがいるのはご存じでしょう？」

悪びれるどころか、今や彼の口ぶりや表情にはどこか相手を見下した感じがあった。

因縁、というところまでフィールは彼と交流した覚えもなく、こうして面對するのですら今が初めてだが、それでも知らず知らずのうち誰かの嫌悪を買う立場に自分はある。

フィールは直感した。彼も一方的に自分を嫌っている一人なのかもしれない、と。

「研究室にいた頃、もっぱら語り種だった噂は本当だったんですね。ミクは博士の初恋の人をモデルに造られたと。すなわち、博士はご自身の過去を復元しようとなさっているわけだ」

「……何が言いたい？」

「いえ、未来を創造する立場の科学者が、それもよりによってフィール博士が　後ろばかりをお気になさっているのは、いかなるものかと思ひましてね」

長い間。

フィールは大海原を向き、さも今まで話していなかったかのような風情を決め込む。

「用件はそれだけかね。私が一体何をして君の反感を買ったのかは分からないが、君はすでに学者としての地位を失った身だ。そんな者の言うことに逐一耳を傾けてられんな」

相手を見ず、フィールはいつもの寡黙な口ぶりに棘を仕込んで言った。

「嫌悪や反感などの類は抱いておりません。ただ、アンドロイドは表向きには、前史より続く機械工学の結晶として、ある意味プレゼ

ンテーションの向きで造られたことになっている。このことに学会の連中も、まして民間などは誰も疑問に思わない。そこに歌って踊れる、可愛らしい？エセ人間？がいれば結果それでいいのですからしかし、僕にはいささか不透明に思えてならないのです。博士がアンドロイドをお造りになった、本当の理由が」

フィールに答える気配はない。

その目はただ、かもめも鳴かない水平線の遙か彼方を見据えるばかりだった。

「生意気に失礼しました。博士のおっしゃる通り、今の僕に物言い出来る資格はありません。もつとも、あのまま科学者だったとしても、博士と僕では雲泥の差、同じことですけどね」

キヨテルは浅く一礼し、踵かかとを返した。

「……君は、確かに」

フィールが低い声音で喋り出すと、キヨテルはやがて立ちどまつた。

「突出した才能の持ち主だった。君が学界から追放の仕打ちを受ける原因になった論文を読ませてもらったが、あれほど精度が高く、前衛的な考察がなされた論文は、10年に一度あるかないかだった。ただ、君にはその？若さ？が命取りになったな。私自身は年齢、性別問わずの實力主義だが、学会の体質はそうではないのでね……」

「ええ、それはこの身がよじれるほど思い知らされましたよ」

「今後、その頭のおよぎるところを表に出さないよう心掛けるんだな。君はどうも、お喋りが過ぎる」

「……ご忠告、感謝いたします」

言葉少なに答え、キヨテルは歩いていった。

お馴染みの白衣ではなく、黒いスーツを着込んだ彼は、本当に音楽講師などやっているのだろうか。

論文や学会づてにどんな人物かは前もって心得ていたものの、いざ目の前してみると、

その若さに似合わぬ聡明さと才氣とに気圧される思いだった。



それにあの口ぶりから、学会で？禁忌？とされている研究領域に  
ずけずけ踏みこんでいった強かさも損なわれていないようだし……  
もし彼が何らかの野心をたぎらせて、それを持ち前の頭脳で果たさ  
んとしているのであれば、フィールは空恐ろしくなる。

彼が研究していた分野、すなわち、学会で禁忌とされていた研究  
対象だが　それは？四次元の構造真理？についてだ。四次元は？  
チップ・イン技術？の要であり、これがなければこの技術はまった  
く成立しないといっている。

彼はかの論文で、この次元の構造を完璧に紐解いてしまったのだ。  
いや、？正体を暴いた？が的確な表現だろう。

そしてフィールや、四次元の正体を知る一握りの者にとっては？  
暴かれた？のである。

だから彼は学界から放逐された。しかし、それはうかつだったか  
もしれない、我々は彼を学会に縛り付け、監視しておくべきだった。  
何故なら彼は、その気になれば四次元をいかようにも？悪用？で  
きるのだから。

「……いらぬ心配をさせているようだな、ミク」

長らく考え込んでいた主人の横顔を、ミクは静々と見上げていた。  
黒いパーカーのフードをすっぽりかぶり、深い陰影の下にある、  
頼りなげな唇、不安そうな瞳は、主人を心配しているようにも、自  
分は誰で、ここはどこなのか、というようにも見取れる。

フィールは前者をとった。

途端、先ほどキヨテルに言われた言葉　あなたは後ろばかりを  
お気になさっている、が脳裏をよぎった。

確かにその通りだ、否定の余地はない。凶星を突かれたことが年  
甲斐もなく悔しくて、反論の一つでも言ってやろうとしたのだが、  
とつさに面子を保とうとする心理が働き、かえって彼を賞賛、年輩  
者として忠告する形になってしまった。

それ自体はささいなことであるものの、彼に凶星を突かれ反論し  
ようとしたことに、まだ自身の過去を復元しようとしていること

彼の言葉を借りれば、前史より続く機械工学の結晶を注いでだに徹しきれていない自分がいた事実が、何よりシヨックだった。するとここにこうしてミクといることが、急にむなしく思えてくる。

「ここ、サン・パライソという場所は、私が子供の頃に本当にあったリゾート地の名前が冠されている。都市のデザインも当時の街並みをモデルにしている。機械工学者として都市の設計に携わった際、私がそうするよう自ら進言したのだ」

ふと、風が吹き出した。

ドームにまだ穴が空いているのか、とフィールは一瞬不安になったが、これはリゾート地として海辺の潮風を演出するためにウィンドクーラーが定期的に作動しているのだとすぐ思い返した。

機械自体はどこにあるのか知れないが、肌心地なめらかな風、磯の香り、遠い昔に海で感じたものが丸々彼を包んで、その眠っていた思い出を優しくゆり起していくのだった。

「私と君は約束したのだ、いつかサン・パライソへ遊びに行こうと。」

しかし、その約束は果たされることはなかった。あれから幾十年、私はすっかり老いぼれたが、君とここへ来ることが、私の長きに渡る念願の一つだった」

その念願は、今まさに、果たされている。

果たされているが、微塵の嬉しさも感じない。

そればかりか、水面に反射する光がやけに虚ろに見えてきてならなかった。

「そろそろ行こうか。仕事人間が休暇を取っても、ろくに使いこなせないな」

彼は自嘲気味に呟いて、やにわに踵すねを返した。

そそくさと歩き出した主人の後をミクは慌ててついていく。

フィールは彼女の姿を肩越しに見て思った。

本来なら、追いかけていくのは自分の方なのに、と。

t  
o  
  
c  
h  
a  
p  
t  
e  
r  
  
2

こちらは孤児院・スーパーノヴァ。

夕食の時間となり、子供たちは食堂に集まっていた。

彼らは食事を受け取るべく、厨房一体型のカウンターの前で列を成している。

殆どが十歳前後の子供たちのなか、ひと際背の高い金髪碧眼へきがんの少年。  
年。

レンだ。

無邪気な声の乱反射とも言つべき喧騒に未だ慣れず、困惑気味な表情を浮かべている。

「はい、レンにいちゃん。きょうはね、わたしがこのソテーの盛り付けをしたんだよ」

「あ、そうなの……？ え、ええと」

カウンターに立つ白衣にマスク姿の少女から膳を受け取り、レンはしどろもどろする。

料理をするのはもちろん大人のコックだが、スーパーノヴァでは教育の一環として、盛り付けや皿洗いなどの軽い手伝いを子供たちにやらせているのだ。

「もらったら、ありがとう、でしょ？ じょーしきだよ、じょーしき！」

そう得意げに言われたところで、レンには「じょーしき」という単語の意味すらよく分かっていない。

後ろの子供に押されるように列から出て、レンはお盆を持ったまましばし立ち往生した。

テーブルは六人掛けのが五つあるが、別段どこに座れと指定されている訳でもないし、誰かと仲がいい訳でもないし……ここにきて一週間がたつても、彼は未だ集団生活（ニンゲンの生活）の要領が掴めずにいた。

とりあえず人気のないところを見つけ、彼はテーブルの一番端に座った。

お盆に乗っているのは、右からウィンナー入りのスープ、少女が盛りつけたという魚の切り身とセロリのソテー（形が崩れてお世辞にもきれいとはいえない）が真ん中にある、左にはブレッドが一つ、同じ皿にマーガリン入りの小さなパックがついている。

それら料理を目の前にしても、レンは食欲はおるか、何なのこれ、といった感じだった。

アンドロイドだから当然と言えば当然だが。

それでもこの一週間、彼は正体を隠すためには？食べる？しかなかった。

フォークの使い方から一切、完全に子供たちの見よう見まねで。

咀嚼そしゃくというのも初めは分からず、ただ口にほうばってそのまま飲みこむだけだったが、「よくかまない」と一人の子供に諭され、そこで初めて歯の使い道を知った。

ニンゲンの世界に来て驚いた発見の一つだ。

ただ、味覚が備わっていないので子供たちの言う「おいしい」「まずい」は分からない。

そもそも「こんなものを身体につつこんで大丈夫なのか？」とさえ心配していたのだが、特に不調が出ないのを見ると、体内の何らかの機関が食物を？異物？として処理してくれているらしかった。

「隣、座つてもいい？」

顔を上げてみると、ピンク色の髪をしたレンと同年代ぐらいの少女が笑っていた。

こちらが答える間も与えず、彼女は早々と椅子に腰かけた。

さらさらのストレートというよりは、全体的に膨らみのあるボブがかつた髪を背中まで垂らし、その強烈なピンク色でそもそも他の子供たちから浮いた外見だが、彼女を更に奇抜な存在たらしめているのは、肌の随所に施されたボディペイントだ。

二の腕から手首にかけて一本の黒いラインが引かれ、関節には機

械の継ぎ目のような模様があり、「A2」と右肩に彫られているばかりか、胸には「」のマークまである。

まるでフィギュアのような外見だ。

柄のない素朴な白いワンピースを着ているのがせめて彼女をまともらしく見せているが、その他のパーツだけで充分に彼女が奇怪なセンスの持ち主であるのがうかがえる。

レンは思わずじろじろと見てしまっ、さすがにこれは普通じゃないと感じたからだ。

「なに？　もしかして、わたしのこと、好きなの？」

彼女はいぶかしげな目つきで、脈絡もなく言いだした。

「？スキ？って……？」

「とぼけちゃってさ。そうだよ、わたしってば、カワイイもの」  
彼女はきっぱり言っ得意げに微笑んだ。

「っていうか、お前は確か」

「うーん、わたしもあんたのことはキラいじゃないよ。ルックスは合格点。でもね、なーんか、あんたって物足りない感じなのよね」

「いや、ちよつと待ってくれ」

「あ、ねえねえ！　アンタはさあ、あの青く光る井戸から来たじゃない？　ちゃんと聞けてなかったんだけどさあ、アンタは違う世界のヒトなの？　教えてよ、そこ大事なトコ！」

彼女はぐぐいっ顔を寄せ、目を輝かせる。

相手の話を聞く気などさらさらないらしい、レンはふと？リン？を思い出した。

「聞き覚えのある声だなあって思ってたら、やっぱりお前、あいつだったのか」

「あいつって？」

「オレがこの世界に来て一番初めに逢ったニンゲンだよ。青く光る井戸から来たって知ってるってことは、やっぱりお前なんだな」

すると彼女は「あっ」と手で口を覆い、照れくさそうに再び甲高い声を喋らせた。

「バレちゃった。べつにいいけど。その代わり、あんたのことも教えなさいよね」

「オレのこと？ いや、その前に？ 約束？ はどうなってるんだよ」

「あ……約束、ね」

「それがあるからオレはここに一週間もいるんだぜ？ 見つかったのかよ、リンは」

不機嫌そうにじいっと見つめるレンをよそに、彼女は片頬を人差し指で押し上げたまま答えない。明らかに白を切るつもりだ。

レンは小さなため息を一つ。

リンといい、女の子といえば、彼は振り回された思い出しかない。

\* \* \* \*

ナナシが？ アナザー・トランシュ・ホールもう一つの廃棄炉？ へと入っていったあと、レンも同じく飛び込んでいった。

青白い光に包まれ、彼もナナシとほぼ似たような体験をした。

そしてひと際まばゆい光の輪をくぐり抜けると……彼はいよいよ過去へとやってきた。

「いたたた……」

ホールから勢いよく飛び出し、地面に尻もちをついた彼の開口一番。

続いて「ガシャツ」と、何やら不穏な音が耳に入り、おもむろに顔をあげた。

暗がりで見界は悪いものの、誰かが手に持った懐中電灯のおかげで、彼はさっそく自分が窮地に陥っていることを知る。

顔にガスマスクをつけた小柄な者ども数名に囲まれ、いくつもの銃口？ がこちらを向いているのだ。

「どうなってるのこれ……」

状況を把握するや、彼はそう呟かずにはいられなかった。

とりあえず両手をあげ、自分に危険がないことを示す。

「あんだ、いったいどっから出てきたの？ 始めからここにいたの？」

それは変声期に入る前の少女の声だった。

背丈から察するに、ここで扇状にレンを囲っているガスマスクの集団は全員子供らしい。

彼女はレンの真正面におり、他と同様に小型機関銃の銃口を彼に向けている。

「たぶん、後ろのホールから来たのは間違いないと思うんだけど」

レンは自信なさげに言った。

「後ろのホールって、その青白く光る井戸みたいなところから？」

ウソでしょ？」

「んなこと言われたって、オレにはそうとしか言えねーもん」

すると彼女は振り返って、近くの仲間を呼びよせた。

彼女は彼が井戸から飛び出してきた瞬間を見ていないようで、それを見た者がいるかどうか確認を取っているらしい。

そして確かな目撃者がいたことを知ると、彼女は改めてレンを向いた。

「あのお、宇宙人の方ですか？」

どういふ道理だか分からないが、彼女は急に敬語で喋り出した。

「うちゆうじん……？ あおさ、変な顔してっけどお前らは？ニン

ゲン？だよな？ 言っとくけど、オレは？そうじゃない？から、ち

よっと何言ってるか分かんない」

「に、人間じゃないの……？ 待って待って、これはあいつに報告

しとかなきゃ」

たじろぐように言って、彼女は腰に携えたポーチから携帯電話を取り出した。

レンは徐々に暗がり目目が慣れてきて、彼女や他の者たちが、長袖ロングパンツといったミリタリー装束なのが視認できた。

「あ、キヨテル？ わたしだけど。なんかね、変なのと遭遇しちゃって……」



少女は小声でひそひそと電話口に話し始める。

謎めいた集団に銃口を向けられ、この状況は確かに窮地といえは窮地なのだが、少女の日常で使うような声が空間に響いていることで、どことなくのんきな雰囲気であった。

レンは緊張が解けたのか、こいつらみんな似たような顔してる、とか、それがガスマスクであるとは露も知らず、あれこれ考え始めた。

もっとも、毒ガスやら煤煙ばいえんやらとは無縁そうなのこの場所で、どうしてガスマスクを装着しているのかがそもそも謎なのだが。

「よし、決まった。あんた、わたしたちについてきて」

携帯電話をポーチに収めると、彼女はまた元の口調で言った。

突如として青白く光る井戸から出現したこの少年は、少なくとも宇宙人でないことが電話で分かり（というより諭され）、かしこまった喋り方をしなくていいと判断したのだろう。

彼女が銃を下ろすと、他の者もこぞって警戒を解いた。

どうやら彼女はこの集団のリーダー格らしい。

「ついてこいって、一体どこに連れていくつもりなんだ？」

「べつに、あんたを解剖するとか、仲間をおびき出すために利用するとかじゃないよ。安全な場所につれていってあげるだけ」

機関銃を片方の肩にかけ、ゆっくり歩み寄りつつ、彼女は言った。その口ぶりから、まだ少年のことを宇宙人か何かだと見なししているようだ。

「なんつーかそれはありがたいけど、オレは他に行きたいところがあるからさ」

「どこ？」

「いや……特に、決まってるわけじゃないんだけど」

レンは頭をかきながら、困った様子だ。

「決まってるわけじゃないんなら、来た方がよくない？ 食べ物も寝る場所もあるとこだし」

「オレは、ある奴を探しにここへ来たんだよ。一応訊いとくけど、

「リン？って名前の奴、お前は知ってるか？」

言って、レンは目前に立つ彼女を見上げる。

彼女は「うーん……」とうなっているが、表情のないガスマスクと少女の甲高い声の組み合わせはかなり不自然に思えた。

「わたしの周りじゃ、そういう名前の子は知らないわね。他に特徴は？」

「金髪で、青い瞳で、オレと同じぐらいの女の子だ」

すると彼女はしばし黙り、マスクの下でくすくす笑っているらしかった。

「あんた、もしかしてふられちゃったんだ？」

「は？」

「それで遠路はるばる来たのね！。感心しちゃう。でも、しつこい男は嫌われるよ」

彼女は一人分かったような口ぶりで、「男」などとませた言い方をした。

「ふられた」の意味は分からないものの、どうも小馬鹿にされているらしいのは分かったので、レンは立ち上がると、不機嫌な様子でツカツカ歩き出していく。

「知らないんなら、もういいよ。オレは勝手にいくからさ」

小脇を抱えていた彼女も、慌てて後を追う。

「ちよっと待ってたら！ わたしはあんたを連れていけないと怒られちゃうの」

「そんなん知らねー」

「分かったわよ。わたし、いや、わたしたちがその？リン？って子を探してあげるから！」

するとレンは、思いなおしたように立ちどまった。

振り返り、肩越しに言葉の真偽を問う眼差しを向ける。

「本当か……？」

「約束する。それにリンって子を見つけるだけじゃなくて、ついでに二人が寄り戻せるように手伝ってあげるから。ね、それでわた

したちについてきてくれるでしょ？」

声が食事をねだる仔猫のようになり、ガスマスクがいよいよ不気味さをなくす。

そればかりか、腰をくびらせ、胸のあたりで「おねがい！」と両手を合わせている姿は、もはやどこにでもいそうな少女の有様だった。

「あー……」レンは天井をみやって思案声をあげつつ、こいつの言う通りどこに行くか決まっていないうし、そもそもここからどうやって出るかも分からないし、としばし考える。

そして顔を彼女に戻すと、レンは照れくさそうに言った。

「分かった。お前の言う通りにしてやるよ。ただし、約束は守れよな」

彼女はマスクの下でウィンクしているかのように、軽快にうなづいてみせた。

これからレンは、彼女の導きによってスーパーノヴァへと行くことになる。

まず建物から出て（この時すでにクリプトナス来週から三週間が経過し、タワーはすっかり以前の状態に戻っていた）、頂上からはしごを使って地上へ降り立つと、例の少女が4WDの車をチップ・インストール、それを移動に用いた。

むろん、タワーの頂上に立った時に視界一杯に広がった満天の星空、地上が高低差もなく均一な平らであることや、その他もろもろ、廃墟の世界しか知らないレンにとっては衝撃の連続だったのは言うまでもない。

もっとも、まず驚くべきは、車を運転しているのが年端もいかないう少女であることなのだ。

「あ、そういえば、まだ訊いてなかったんだけど」

「なにー？」

平然とハンドルを左に切りながら、少女は悠長な声で言う。

それも未だ、ガスマスクを装着したままだ。

「お前たちって一体何者なんだ？　ちなみに、オレの名前は？　レン？　っていうんだ」

助手席からの眺めをひとしきり堪能し、レンはふと思い出したように素性をたずねた。

答えはあっさりと返ってきた。

ごく一般的な人間なら、誰もが驚愕する内容で。

「うーんとね、わたしたちはスーパーノヴァっていう、？　テロリスト？　だよ」

\* \* \*

「……で、お前の名前は確か、？　ミキ？　っていったっけか」  
再びスーパーノヴァの食堂にて。

レンはあの夜に出逢い、現在の自分を導いたガスマスクの少女が目の前にいる人物であると知り、その名を確認した。

少女はにっこり笑ってうなづく。

「なんつーか、すごい変わりようだな」

「変わったって、なにが？」

「顔だよ、顔。別人みたいだ」

言ってから数秒、「ぷぷ……」と少女は小さく噴き出し、やがて大笑いしだした。

「ばっかじゃないの！？　あんたってば天然？　あれはガスマスクっていつて、顔がバレないようにかぶってたのよ。潜入の基本よ、基本」

彼女は得意げに言うが、顔を隠すのが基本であるにせよ、他に適した道具があるだろう。

「あー……じゃあ、今のお前の顔が本当の顔なんだな？」

「そう。ってか、そっから分からないの？　不思議ね」

彼女は肩をすくめてみせた。

「んでもさ、今のお前も？　へん？　だよな」

「え……？」

彼女は固まった、まるで信じられないものを見聞きしたように。

「腕とか関節とか、その模様はなんだ？ 他のニンゲンはそういうのしてないみたいだけど、そういうの、お前だけなのか？」

何気なく言い続けるレンの前で、ミキは密かに肩を震わせていた。そしてレンが次なる言葉を言いかけた時 急に飛びかかって、その喉をしめつけた。

「もういっぺん言ってみなさいよ！」

突然のことに驚き、レンは一瞬冗談か何かかと思ったが、彼女の両目に宿った光を見て、これは純粹に怒っているのだと知った。

「わ、悪かったって、あ、あやまるから！」

喉輪をしめつけるミキの両手首を握りながら、レンは大慌てで言葉並べる。

いくら首をしめられてもダメージはないが、彼女に明らかかな？ 殺意？を感じ、とっさに口に出してしまった。

まもなく解放され、安堵するも、何が彼女を怒らせたのか不可解だった。

あんなにつるさかった周囲の子供たちは騒然とし、二人に注目を集めている。

「悪かったよ……けど、オレ、何かまずいこと言ったか？」

「？ヘン？って、言ったじゃない」

乱れた前髪が両目に垂れ、彼女の声は先ほどまでとは違って冷やかだった。

「一体どこがヘンっていうのよ。わたしは、わたしがこの世で一番きれいだと思うの人のまねをしてるっていうのに」

「まねしてる？」

「どうせあんたは知らないわよね。？ルカ様？のこと。あの方はね、美人で、クールで、気取らなくて、歌もうまいし、もう、完璧なの！ わたしは好きになり過ぎて、髪の色から肩のペイントまで、ぜんぶマネした。でも腕とほっぺたのラインはあの方にはないよ。」

そこはわたしのね、あの方に近づきたいって思いがあるから、わざとそうしたの」

情緒不安定気味に話すミキの姿に、レンは思わず固唾を呑む。

ごく普通の明るい少女かと思えば、突如として猟奇的になり、拳の今は、まるで悪魔に憑かれたような呆けた口ぶりですらすら喋っている。

奇抜だの不可解だのを通り越し、レンはおぞましい暗黒の気配さえ感じるのだった。

「だってあの方は、すごく人間らしいけど、？アンドロイド？だもん。わたしはね、アンドロイドになりたいの。人間なんてクソみたい。だから、それっぽいペイントとかすれば、わたしは人間をやめられる気がするの」

言ってからしばらく、彼女はけらけらと意味もなく笑いだした。

レンも含め場は凍りついたまま、彼女の力ない笑い声だけが不気味にこだましていく。

まもなく、入口の引き戸が勢いよく開けられた。

かもい鴨居をくぐって入ってきたのは、短い髪を逆立てた屈強な男。

彼がその鋭い眼差しで一同を見渡すと、子供たちは誰ともいわず席についていった。

「アッハハハ……」子供たちが一斉に椅子を引く音が止んで、後の静寂に響く彼女の声。

「おい、ミキ」

場の雰囲気を感じたレンが、小声で彼女に注意を促す。

本来なら周囲にいる他の子供たちがその役になるはずだが、彼らは背筋をぴんと張り、視線を微動だにも動かさず、まるで隊列を乱さぬよう訓練された兵士のようなだった。

先ほどまで騒いでいた子供と彼らが同一人物だとは、とても信じがたい雰囲気である。

何が彼らを別人たらしめているのかは……一目瞭然、部屋に入ってきたあの屈強な男だ。

やがて男の存在に気付いたミキはぴたっと笑うのをやめ、男は一同をねめつけながらゆらりと歩いていくと、近くにいた少年の前で立ちどまった。

そして少年の卓に置かれた膳の内容を見下ろし、おもむろに口を開いた。

「ウインナーの入ったポトフに、ブレッド一つに、魚の切り身のソー……いい物を食べているじゃないか。なあ？」

低く、しゃがれた声で、男は全体に問いかける。

「俺や幹部の連中がいなかったこの一週間、てめえらは随分楽しめただろう。が、明日からはまた通常に戻す。一日一食、中身は？ キューブ？ 一個。分かったな」

場は蚊の羽音さえ許されない、厳粛な空気に包まれている。

「返事は？」

「Yes, Sir!!」

子供たちは一様に口をそろえ、指揮官への忠誠を示した。

慣れていない子供もいるのか、声に張りがなく、他に遅れて言った者も何人かいた。

「ミキ、どうなってるんだよ、これ……」

レンはたまらず耳打ちで訊ねるも、ミキは先ほどの状態が抜けていないのか、答えない。

この緊張感はなんだ？ さっきまでの騒がしさは？ 突然大声を上げて、後ろに手を組んで歩いていくあの男は？ これが果たしてニンゲンの世界の？ 普通？ なのだろうか、しかし、レンは違和感を覚えてならなかった。

恒例の「いただきます」もなく、かの指揮官が「食べ」というと子供たちは黙々と食べ始める。

食器がかちゃかちゃ音を立てる以外は、まったく葬式のような雰囲気だった。

夕食が終わり、子供たちはぞろぞろと各自の部屋に戻っていった。いつもなら遊戯室のテレビのチャンネル争いや、館内至る所で鬼ごっこが繰り広げられるのだが、今日に限っては彼らの表情は険しく、唇を結んではしゃぐ様子などまるでない。

やはり例の男がいるからだろう、彼は食堂の戸口に立って廊下を歩いていく子供たちの背中をまるで監視するような目付きで見送っていた。

子供たちの流れに乗って食堂から出ようとしたレンを「待て」と呼び止め、「これから氷山の執務室へ行くように」と後ろに手を組んで敵めしく言った。

レンより二回りほど背が高く、グレーのTシャツがはちきれんばかりの筋肉隆々。

その隙のない冷然な眼差しで見下ろされると、レンはGnos<sup>グノス</sup>を前にした時と同じ威圧感を覚え、また頭をわしづかみにされるのではないかと身構える気持ちになった。

「ここから向かって左に階段、それを上って二階へ行き、奥から数えて二番目の部屋が、氷山の執務室だ」

きびきびとした軍隊調で言いながら、男は子供たちの流れとは正反対の方を指差した。

蛍光灯がリノリウムの床を照らし、奥に非常出口があるだけで閑散としている。

あまりに早口だったので「もう一回言ってくれない？」と思わず声にしかけたが、男がとくに子供たちに視線を戻し、取り合ってくれそうな雰囲気ではないので、レンは諦めて歩き出した。

やがてミキが食堂から出てくるのが目に入るも、気にしないことにした。

彼女に「ヘンだ」と言っただけ、彼女は下界との繋がりを一切



絶ったかのごとく、自分の世界に閉じこもって、こちらが何を言ってもうんともすんとも応答しなくなったからだ。

現に子供たちの後を歩いていく彼女は、天井を見上げてぼんやりとしていて、その足取りは寝ながら歩く夢遊病者のよう。

ヘンと言われて、まさか本当に？ヘン？になるとは。

「一体全体、何がどうなつてんだよ……」

レンの口から思わずの呟きもれた。

彼女も、男も、いや、この施設全体だ、不思議だらけで半ばうんざりしているのだった。

まもなく男の言った階段が左手に現れると、レンはそこで自分の呼ばれた？執務室？という場所がどこなのか気付いた。

この施設へとやってきた翌朝、冰山キヨテルに案内されてすでに一度行った場所だ。

改めて？執務室？などと呼称されると、何やら物々しい場所に来るよう指示されたみたいでしばらく分からなかった。

前回、その執務室で冰山キヨテルとやりとりした内容は次の通り。

まず、例の物腰柔らかな口調で訊かれた「君は人間じゃないそうだけど」という問いに、レンは単純、「オレはアンドロイドなんだ」とあっさり正体を明かしてしまう。

別に正体を隠すよう誰かに言われているわけでもないし、アンドロイドであることに負い目も感じていないため、それに物事を深く考えない彼だ、本人としてはごく何気なく言っただけだった。

だが、これにはさすがの冰山キヨテルもしばし驚きを隠せず、「本当に？」「証拠は？」といったもの調子を崩して、あれこれ矢継ぎ早に質問してきた。

証拠といつても何を見せればいいか分からず、レンはとりあえず未来世界での出来事をかいつまんで話した。「えーっと、ブラックって奴がいて、そいつらをオレたちは倒して」といった論理的におぼつかない感じで、その時はまだ、冰山キヨテルは完全に信

用した様子ではなかったものの、「正体を隠すよう、人間として振舞いなさい」と言った。

どうして、と訊くと、君の身が危ない、と即答され、この一週間、彼はとりあえず言いつけ通りにしてきたのである。

しかし、それも近ごろは我慢の限界が来ているところだった。

そもそもミキが？リン？を見つけてくれるという約束と引き換えに、レンはここにいる。

にも関わらず、先ほどのミキの口ぶりでは約束なんてまるで忘れていたのだ。これでは初めから独自に探し回っていた方がまじだった。

施設に来てからの一週間、何だかとてもなく時間を無駄にした気がしてならない。

ずんずん、ずんずん、彼は苛立たしげに階段を上り、2階の床を踏みしめると、氷山キヨテルに案内された記憶を辿って執務室へと向かいだした。

自分に何の用があるかは知らないが、もうこんな謎めいた場所にいる気はさらさらしない。

氷山キヨテルからリンの手掛かりと、彼女のいそうな目ぼしい都市への行き方を聞きだしたら、とつとつここから出るつもりだ。

オーク材の堅牢な茶色い扉、見覚えがある。ここが氷山の執務室だ。

レンは手短かに用事を済ませたいので、ためらいなくドアノブを回した。

「やあ、急な呼び出し、すみませんね」

デスクに立ち、キヨテルはにこつと微笑んだ。

施設全体が無機質な造りのなか、床はビロードの絨毯、重厚な木材の書棚、デスク、中央の応接セット、どれもアンティークな風情漂い、ここだけ古めかしい洋館にある客間のような造りだった。

これも部屋の主であるキヨテルの趣味なのだろうか、そんなことは一切構わぬレンは、

「で？」と不機嫌な様子でいきなり切り出した。

「本来なら、食堂まで僕が行ってあげればよかったんですけど、ちよつと子供たちに顔を見せるのは気が引けてね」

「だから、そんなことはどうだっていいっつの」

「まあまあ」キヨテルはなだめつつ、本題へと移った。

「君を呼びだしたのは他でもない、ミキから聞かされた？リン？つて子のことです」

「え？」

ふと、貧乏ゆすりをしていた彼の右足が止まる。

「調査をしているうちに分かったのですが、これが少し、厄介なことになっていてね」

「お、おいおい、いきなりなんだよ。ってか、リンが見つかったのか？」

「ああ、見つかったは見つかったんですが」

デスクから一歩出て、彼はややトーンダウンした声で続ける。

「捕まっちゃったんです。？グラジオラス？という都市にある刑務所に」

一瞬、レンは言葉を失った。

先ほどまでの苛立ちはなく、それは今や丸ごと驚きになり変わっている。

「ま、待ってくれよ。オレに分かるように説明してくれ。捕まっちゃって、どういうこと？」

「一言で言うなら、彼女の正体が公にはれてしまった。それが人々の間で危険とみなされ、彼女は国家唯一の刑務所？アン・ヴェルグ？に捕えられてしまったんです。ちなみに補足しておく、刑務所というのは端的には、悪いことをした人を閉じ込めておくところですよ」

「悪いことって……リンは、そんなことする奴じゃないぞ」

「そう、そこが人間の世界の不条理。？悪？や？正義？というのはね、結局は人間の概念でしかないし、概念というのは、いわば思い

込みなんです。彼女がアンドロイドというだけで、人々は彼女を自らに危険を及ぼす害悪とみなし、恐れ、ならいつそのこと、もう外の光を浴びさせないように閉じ込めてしまおうと考えた。殺すには忍びないし、という、自らの潔癖さは保とうとするちんけなプライドの上でね。だから、彼女は悪いことはしていない、していないけれど、あたかもそうしたかのように思い込まれてしまっているんです」

幼い子供に絵本を読み聞かすような口ぶりで、キヨテルは話した。レンは啞然<sup>あぜん</sup>とした表情。

うつむく彼を見、キヨテルは一瞬、不敵に笑みを浮かべて、また穏やかに口を開いた。

「大切な友達が捕まっているとすれば、君も黙っていられないでしょう？　ここは一つ、僕たちと」

言いかけた時、「音が聞こえる」とレンが呟いた。

「音？　おかしいな、僕には何にも聞こえませんが」

「……部屋に入ったときから、下から聞こえるんだ。『パン、パン』って、銃声みたいな」

ほとんど即座に、キヨテルの顔から笑みが消えた。

まずいことを知られた、というふうだ。

しかしすぐにまた笑みを取り戻すと、キヨテルは言った。

「そういえば、君はアンドロイドでしたね。人間の僕よりも耳がいらしい。」

さて、では見に行ってみますか？　音の正体が、何なのかを」

歩み寄るキヨテルに、レンは少々たじろぐ。

「オレはもうこんな場所にいたくないんだ。リンを探しに行きたい。お前の言うように捕まっただとしたら、それこそ早くいかないよ」

「だから」

キヨテルはおもむろに声をかぶせた。

「僕たちに協力しませんか。実を言うと、僕たちもアン・ヴェルグ

に？仲間？が捕えられているんです。君がリンって子を？大切な仲間？だと思つように、僕たちもそれは同じ。

だから暗くて、臭くて、一日だっているには耐えない地獄のような場所から、僕たちは仲間を救い出したい。どうです、目的が一致すると思いませんか？ 僕たちには君のアンドロイドとしての力が是非とも欲しいところだし、逆に君にとっては、単独で猪突猛進に突っ込んでいくより、集団で力を合わせて事を運んだ方が救出の成功率は飛躍的にあがるでしょう。

考えてみてください。僕たちと、力を合わせてみないですか？」

彼はほのかに真を込めて言った。

「力を……合わせる……」

レンはキヨテルの言葉を咀嚼するふうに呟き、しばらく考え込んだ。

単に？協力してくれ？ではなく、そこから別の言いまわしをされると、むげにできない頼もしさを感じる。

「……答えを言う前に、訊いておきたい。お前らは、本当は一体なんなんだ？」

どうにか「分かった」と言つのをこらえ、彼にしては珍しく理性的な対応を見せた。

ここで納得のいく返事が得られなければ、今までの話は丸ごとなし。

レンは真剣な面持ちで答えを待つが、対称的にキヨテルは涼しげな顔だった。

「口で説明するのもいいですが、見た方が早いんじゃないかと」

言つて、彼はドアの方へ歩き出し、レンを手招いた。

「見た方が早いって？」

「君に聞こえた？銃声？の正体です。いつもはこんな時間に？訓練？なんてしないんですけど、君はさつき強面の男と会いましたよね？ たるんだ子供たちのきつけに、どうやら彼がけしかけたみたいだ」

聞いているうちにますます、レンには彼の言葉が不可解でならぬい。

「分からないでしょ？ だから、見た方が早い。これから地下の訓練場へ君を案内します」

オーク材の渋いドアが静かに開けられた。

レンは一呼吸する間をおき、そして歩き出す。

これから向かう場所が、施設の未知なる部分の更なる向こうであるとは露も知らずに。

t o c h a p t e r 5

「そういえば、あの？ミキ？ってやつのことなんだけど」

道中、リンや施設の子供たちについて触れた流れで、レンはおもむろに訊ねた。

「どうしてあいつは他のやつと違う見かけで、またあるとき急に？  
へん？になるのか、と。」

「彼女はね、少しばかり心を病んでいるんですよ。普段はごく一般的な明るい女の子ですが、ささいなことでも心を傷つけられると、しばらく放心状態になってあれこれ取り留めもなく考え込んでしまふ。そんな時は、しょうがありません。そっとしておくのが一番です」

一階へ降り立つと、レンには足元から聞こえる銃声の響きと振動が強まって感じられた。

キヨテルが向かったのは、子供たちの部屋があるのとは逆の方。

「どうやら非常出口の蛍光サインが掲げられた扉が、地下へと通ずる入口であったようだ。」

「ココロを傷つけた……か。今度会ったら、謝った方がいいかな？」  
廊下を並んで歩きながら、レンは少し悪びれたふうにした。

「その必要はないと思いますよ。彼女はやや健忘症気味なところがあってね、一夜寝たら翌朝には忘れてるんです。ただまあ、君が謝りたいのなら、そうすればいい」

言い終わるとはほぼ同時に、二人は灰色がかった銀の鉄扉の前に立った。

キヨテルは傍らに備え付けられている鉄製の小箱のレバーを取り出し、ふたを開けると、中にはカードリーダーらしき端末があった。ポケットから取り出したICカードを挿入させ、端末が次に「音声認証を」と女性の機械的な音声で促す。

「囚われの同志、？アレツチェド・フランシス？のために」

「音声認証、ロックを解除します」

がちゃん、鉄扉の内側で解錠の音がなり、キヨテルはドアノブを回した。

暗がりのなか地下へと続く階段。

レンはふとサンドリヨンの出入り口を思い起こした。

空間の成り立ちも似ているし、このまま進んでいけば黒トエトがいるのではないかと。

そこにはナナシも、ハクもいて、……しかし、リンはきつといないだろう。

何故ならサンドリヨンへ行ったとき、一緒にいたのはこの二人だけなのだから。

「どうしたんです？ さあ、入っていきましよう」

「あ……悪い、ちょっと考え事してた」

身振りで中に入っていくよう促され、レンはキヨテルの後を続いていった。

仲間との思い出が瞬間、脳裏をかすめ、ほんのすこし感傷的な気持ちになってしまったが、それもこの階段を下りていけば、彼に協力すれば、また仲間に出会えるのだろうか。

とことんサンドリヨンへと続く地下通路に似ている暗がりのなか、階段を一步、一步と下りていきながら、レンは密かに淡い期待を抱くのだった。

「見た方が早い、とは言いましたが、我々の組織・？スーパーノヴァ？について、軽く話しておきましょう」

こつん、こつん、彼のローファーがせせこましい空間に音を立てる。

「しかし組織の全容に触れる前に、まず、？Reaper（死神）？と呼ばれる人々について説明しておかなければなりません」

「リーパー？」

すぐには答えず、キヨテルは間をおいてから、静かに話し始めた。「その昔、？クリプトボム？という兵器の青白い輝きが世界を覆い



ました。

それによつて大陸が一つ？ 跡形もなく？ 消失し、？ 世界戦争？ という長きに渡る地球規模の戦争に終止符が打たれました。

現在の我々は、その戦争の残り火である核汚染、俗に？ 瘴気？ と呼ばれている人体に害を及ぼす物質から身を守るため、透明な膜で保護をかけたこの人工島に生活の途をつつした。

最大で100億はくだらなかつた人類も、核兵器を多用した世界戦争においていちじるしく数を減らし、またかろうじて生き残つた人々も、この人工島に来るまではあたわず、瘴気のなかでひっそりと絶命していった。すなわち、この人工島には、世界戦争を耐え忍び、また辿り着くことのできたごく一握りの、そして世界全土の人々が集結しているのです。

人種も思想も様々、このトランジスタが国家として正式に稼働した当初は、まずはその対立をいさめ、文化や価値観の違いを埋めるところから始まり、差別思想の全面禁止、言語の統一など、あらゆる人種の？ 共存？ を大前提とした政策がなされていったのです。

かなりの時間を要しましたが、人々の間に共存という考え方は着実に浸透していき、絶えることのなかつた人種間の対立、デモ運動、暴動も次第になくなっていきました。

しかし、

階段を下り、キヨテルのローファーがひと際高くコンクリートの地面を打ちならした。

「クリプトボムを使った国に属していた人々の敵対感情だけは、今になつても根強く人々のなかにあるのです。クリプトボムの製造から使用許可まで、兵器にかかわつた国家の人間は軒並み超A級戦犯として死刑台にかけられましたが、それでも大陸一つをかけらも残さず抹消するような兵器を使用されたことの怒りや恐怖は消えず、その国家に属していた人々 瞳の色が純然たる？ 黒？ であるのが特徴です に？ Reaper？ という蔑称うやこをつけ、島からの放逐運動に乗り出すいわゆる？ 反Reaper組織？ がいくつも生まれ

ました。そのほとんどが言葉やデモ行進によってのみ、政府に Reaper を島から追い出すよう訴えていましたが、中には武装し、過激なテロ行為によってそれを訴える組織も出てきたんです」

通路は一本道となっており、奥に四角い長方形型の出口が見えてきた。

レンはキヨテルの言葉を半分も理解していなかったが、あてずっぽうに質問してみた。

「でもさあ、そのリーパーってやつらが、なんちゃらボムを使ったわけじゃないんだろ？」

「その通りです。彼らはクリプトボムを使った国に属していたというだけで、いわれなき差別を受け、それを避けるために瞳の色を変え、Reaper であることをひた隠しにしながら島での暮らしを送っているんです」

「なんつーか……よくわからんけど、それって、あんまりいいことじゃない気がする」

「まあ、本人たちからしてみれば、国家のお偉い方が勝手にやってきたことの尻拭いをさせられているわけですから、いい迷惑ですよ。彼らの心中は察しますよ。でもね、やはり、彼らはこの人工島にいてはならないと思うんです」

「いちやだめなのか……？」

「戦争には、被害者も加害者もない。誰もが罪人です。」

それは直接には戦争に関わらず、むしろ被害をこうむってばかりの国民にもいえること。

人々はクリプトボムに直接関係した戦犯たちが肅清されると、その収まらぬ怒りの矛先を今度は彼らの国に属していた国民に向けた。

仮に彼ら Reaper を島から追い出しても、一度火のついた感情を鎮めるには遠く及ばないでしょう。だから彼らのいない日常を築くことで、せめてもの心の安堵を得たいんですよ」

「うーん……お前の言い方だと、リーパーとか関係なく、ニンゲンみんな悪いんじゃない？ って感じなんだけど」

レンは歩きながら腕を組み、しきりにうなづいて腑に落ちない様子だった。

「先ほども言ったように、？悪？も？善？も？人間それぞれが決めること。我々スーパーノヴァは、Reaperを素性を隠した人間も含め、一人残さず島から？除外？するのを？善？とし、これまで活動を行ってきました。一時は数ある反Reaper組織のなかで最大勢力を誇り、同時に過激派として名を馳せものの、その行き過ぎた行為の数々をとがめられ、今は児童養護施設を隠れ蓑にするまでに力をそがれてしまった。

リーダー？アレッチェド・フランシス？を筆頭に、幾人もの仲間が<sup>たは</sup>拿捕され、グラジオラスの刑務所にて生き殺しの目にあっている。僕たちの当面の目的は、彼らをそこから解放してあげること。そして組織を、再び立ち上がらせることです」

キヨテルは立ちどまり、力を込めて言い切った。

ところがここにきてもやはり、彼はうっすらと笑みを浮かべている。

組織に忠誠を誓った身であるならば、同胞が囚われ、組織が破綻しかけていることを口にする場合、もつと怒りや、憎悪をたぎらせた表情で言うものではないのだろうか。

というのは、レンには考えもつかず、キヨテルの口ぶりが不自然だとは思わなかった。

「軽くと断っておいたのに、つい話しこんでしまいましたね。僕は歴史が好きで、それを語る時はつい本腰を入れてしまっんです。さて、先を急ぎましょうか」

するとキヨテルは早足に歩き出し、レンは慌ててついていく。

どうやら話をするために、これまでゆっくりと歩いてきたようだ。

出口が近付いてくるにつれ、先ほどからくぐもって聞こえていた銃声は、よりはっきりとした音となって耳に入ってくる。

何らかの目的で銃が使われているのは明白だ、しかし、あの子供

たちが？

いつも無邪気に笑って、ちょっかいを出してくる子供たちが、銃を乱射しているのか？

レンは銃がどのような目的で使われるかぐらいは知っている。

だから子供たちが険しい表情でそれを使っているとは、にわかには信じ難かった。

しかし、出口を一步、またぐと、それは確かな？現実？として目の前に現れた。

「これは……」

四方を壁に囲まれたコロシウム型の丸い場所で、子供たちが次々現れるホログラムを相手に自動小銃を撃っている。

音は大層だが、空砲なのか、実際に弾は出ていない。

二人一組で編成された彼らは、ホログラムの相手を終わると次のペアに交代し、列に戻ってまた自分たちの番を待つ。

彼らの後ろに教官よろしく立っているのは、食堂の空気を一変させたあの屈強な男。

レンは二階の石堤越しに彼らを見下ろし、固唾を呑んだ。

「現在やっているのは、映像装置によってランダムに出現するホログラム・ターゲットを片っ端からやつつける、いわば？モグラ叩き？ですね。しかし、ホログラムは単にやられ役というわけではありません。子供たちが全員、防弾チョッキのようなものを身につけているでしょう？ あれには受信装置がしこんであって、ホログラムがそれに向かってレーザー信号を放つんです。ようするに、その信号の送受信がホログラムの？攻撃？であり、子供たちはホログラムをいち早く倒さないと、攻撃を受けてゲームオーバーになってしまうんです」

レンの横に並び、キヨテルはすらすらと解説する。

「あ、子供たちがホログラムを倒す場合も同じですからね。ただ、臨場感を出すために、銃にどんぱち鳴るよう細工してありますが」  
思い出したように一言加えるも、レンはまるで聞いていない様子

だった。

というのも、子供たちのなかに？ミキ？がいたからだ。先ほどの放心状態とはまた違い、彼女は鋭い雰囲気だ立っている。そんな彼女とペアを組まされているのは、彼女とは対照的に気弱そうな男の子。

まだ組織に入れられて日が浅いのだろう、自動小銃を胸に抱えることさえおぼつかない。

そして前のペアが終わり、二人の番がやってきた。

地面に置かれた円盤型の映像装置が「3……2……」とカウントダウンを表示する。

ミキは銃を構え、相棒などまるで頼りにしていない様子だった。

「1……0」？モグラ叩き？、スタート。

正面に一体目のターゲットが現れるが早いか、彼女は飛び出しており、難なくこれを撃破。次に後方左に現れたターゲットも振り向きざまに一撃、すかさず反転し、三体目にも銃声つきのレーザー信号を命中させる。

彼女が一人奮闘している後ろで、相棒の男の子はスタートラインから動けずにいた。

足が震え、涙があふれ、嗚咽が止まらない。

このまま彼女に任せておいてもなんら問題はなさそうだが、ホログラムが突如、彼の目前に現れた。

しかし悲鳴をあげる間もなく、ホログラムは出現した次の瞬間には消えていた。

始めからそこに現れるのを知っていたかのごとく、ミキがその後頭部めがけて引き金を引いたのだ。

男の子は安堵のあまり尻もちをつき、当分立ち上がれそうにない。「すげえ……」

すっかり観客となったレンは、ミキの戦いぶりに思わず嘆息を吐く。

が、次に現れたホログラムに、ミキは完全に背後を取られてしま

った。

気がつきが一瞬遅れ、ホログラムはすでに発砲の兆しを見せていたが、ミキは小機関銃の銃口を勢いよく地面に突き刺すと、その反動で後方宙返り、ホログラムの背後に着地するや、かちゃ、後頭部に銃口を向けて、発砲した。

銃声がひと際高く響き渡り、場は一時静まり返る。

放たれているのはレーザー光線で、それはレンの目にも見えないが、ホログラムが消える瞬間、彼には天井を斜めに走る薄灰色の弾道が見えた気がした。

「な、なあ、キヨテル？ あいつつてさ、本当に何者なの……？」  
たまらず、レンは訊ねた。

「彼女は確かに精神的にはもろいのですが……戦闘に関しては、飛び抜けた力を発揮するんです。アンドロイドの君が驚いてしまうほどの、人間離れた身体能力をね。ほとんどの子供が？ 兵士？ としてまだ使い物にならないなか、彼女の存在は頼りになりますよ」

その言葉を聞き、レンはふとミキがガスマスク集団のリーダーであることを思い出した。

「へいしつて？」

「ああ、言うのが遅れていました。彼ら子供たちもね、我がスーパーノヴァの立派な？ 戦闘員？ なんですよ。年端もいかない子供を動員するほど、組織が人手不足である証ですが、何より、実際にテロを行うのが子供だと色々都合がよいものでね」

微笑んで言うと、

「まあ、もっか？ 育成中？ ですが」と言葉を付け足した。

「おい、どこ行くんだ？」

おもむろに踵を返し、出入口に向かいだしたキヨテルを呼びとめる。

「君はこのまま訓練に参加してください。強面の彼、ヴァーリーには話を通してあります」

振り返ることなく、キヨテルは言った。

「お前はついてきてくれないのか？」

「僕はまだ、子供たちにとつて？優しいピアノの先生？なんですよ。このこ出ていって、そのイメージを壊してあげたくないのですね」

肩越しに微笑みを投げ、彼は再び歩き出した。

レンはしばし名残惜しそうにその背を見ていたが、ふと、罵声が聞こえた。

声を発したのはかの男、ヴァーリーだ。

怖気づくあまり、地べたに座り込んだまま立ち上がれない男の子を罵っている。

男の子は立ち上がるどころか、より一層恐怖の色を強めていくばかりで、とうとう見かねたヴァーリーは、男の子を胸倉を掴んで起きあがらせると……強烈なビンタをかました。

インパクトの瞬間、レンは思わず目をつむった。

次にまぶたを開けた時、男の子はヴァーリーに胸倉をつかれたまま頭を垂れていた。

頬に受けた平手打ちの衝撃のあまり、失神してしまったようである。

しかしヴァーリーは彼をいたわることとはせず、そのまま突き倒すように手を離れた。

まるで使い物にならなくなったマネキン人形を扱う手つき。

そして顔を上げ、レンを一瞥<sup>いちべつ</sup>。

まんまと目が合い、彼はその冷酷な眼差しが何を語っているのかを察した。

このまま出入り口へ逃げ出す手もあったが……彼の足は、階下に向けて動き出していた。

リンを助けるため、リンを助けるため、そう何度も自分に言い聞かせながら。

t o b e . . . . c o n t i n u e d .

&l t ;&l t ;C h a p t e r 5 &g t ;&g t ; (後書き)

次回 予告

R o c k ・ 1 3 ? 方向音痴?

乞うご期待



## Rock・13? 方向音痴?

「ブラックを倒してきた君は……つまり、人間を殺してきたことになる」

クリプトナス撃破後、フィールに言われた言葉がナナシの? ココロ? をむしばんでいた。

あの戦いから悠に一カ月は経つのに、未だ頭から離れない。

彼女の記憶は一度更新されている。

一度目は誕生から、ハクをかばい命を落としたところまで。

そして現在の彼女の記憶は、一人の人間もないアンドロイドだけの世界に生まれ、今に至るまで。

すなわち、彼女は更新された記憶のなかでは人間を一人も殺めていないのだ。

しかし、黒トエトによつて第三者の記憶を流しこまれた彼女は、人間を見境なく殺していた時期が自分にあるのを知り、人を手にかける罪悪感、特に? 子供? を殺してしまった時の恐怖と精神的苦痛を思い出し、よほどの事態でない限り人間は殺さないと誓っていた。そこで知ることとなった、ブラックは? 人間のなれのはて? であるという真実。

フィール曰く、人間の? 肉体? と? 精神? は別物であり、後者の器である肉体が生命活動を停止すると、精神は居場所を求めて? 浮遊? を開始する。

そして彷徨の果てに辿り着く場所が、? 四次元? ということは異なる次元だそうだ。

その理由についてはフィールは触れなかったし、ナナシも特に気に留めなかった。

彼女にとつて何よりの関心だったのは、肉眼では捉えようもないクオークと電子の塊と化した精神、すなわち? 魂? が目に見える形に具現化したのが? ブラック? であるという。

「家を引っ越しただけで、中に住んでいる人間は同じ」とフィールはこの現象を例えた。

ナナシやアンドロイドがブラックを倒し、そのエネルギーを活動の糧としているということは、朽ちて灰となった人間の肉体からブラックという新たな変化を遂げた魂を吸収、言い換えるならば、彼女たちは人間の魂を？喰らって？生きていくということになる。

この現象の科学的な原理解明はフィールにも出来ていないのか、原理を明かすことはなかったが、それを聞かされずとも？現実には確かに起こっている？という一言だけで、ナナシのココロをずたずたに引き裂くには充分だった。

私はもう、ニンゲンは殺さないと誓っていたのに。

私だけじゃない。エマを失ったハクヤ、この世界でニンゲンと仲良くしているリンも、荒廃した未来世界にいるアンドロイドはすべて、自分を生かすためにヒト殺しにならざるを得ない。誓いも想いも関係なく、存在している、ただそれだけで、ヒト殺し。

彼女は自分たちに仕組まれたこの？生のシステム？によって、自分や、他の仲間たちの人間に寄せる想いがぼろぼろに踏みじられた気がしてならなかった。

そしてそのシステムを強いたのは、紛れもなく目の前にいる男、Dr. フィールグッド。

ふつふつと湧きあがる怒りと共に、彼女は今一度、激烈に思った。どうして私たちは、こんな生き方しか許されないのだ、と。

「断っておくが」

対して、フィールは冷静だった。

「現時点では、私は君のようなアンドロイドのライフ・システムを設計していないし、そもそも考案さえしていない。君たちを作り上げたのは、別の時間軸にいるもう一人の私だ。

これを聞いてなお、この私に怒りをぶつけるというのなら、自衛のために敢えて言おう。

「人違い？だ」

ナナシは奥歯を噛みしめ、ただただ矛先のない怒りに打ち震えるほかなかった。

それにクリプトナス戦のダメージが全身をむしばみ、立っているのさえ辛い状態。

リンも同じくメンテナンスを受ける必要があるだろう、他でもないこの男に。

「君たちを作ったという、そのもう一人の私の思考回路は当の私ですえん不可解だ。」

なぜ、人間の魂なんかを動力源に選んだのか、また、そうする発想、技術はどこから生まれたのか。実に不可解極まりないが、同じ私が生じたことだ。それでも私が君たちから出来る償いは、そのライフ・システムを可能にする機関を君たちから排除してやるのと、そして、そのシステムを今後作らないと誓うだけだ」

「本当に……本当に、私たちのなかからそれを取り除いてくれるのか？」

「ああ、それは確かに、約束しよう」

彼がそういうと、ほとんど即座に、ナナシは軽く折り曲げた小指を差し出した。

「なんだ、それは」

「リンから教えてもらった。約束をするときは、こうするのだと」

「指切りげんまんか。ふん、子供のすることだな」

すげなく言っつて、彼はうしろに待機している、横長いゴンドラ型のエア・グライドへと歩き出す。

リンはすでに彼の部下数人の手によって機内へと運ばれていた。

後はお前だけだ、というように、フィールは身ぶりでナナシを招く。

どうしようか逡巡した末、結局は歩き出していた自分を心底憎らしく思いながら、彼女はエア・グライド内、座席に横たえるリンの閉じられた眼に問いかけた。

アンドロイドと、ニンゲンと、お前が言うような？ 仲良し？ にな

ど、本当になれるのか、と。

\* \* \* \*

それから一カ月経った今日、ナナシの拘束が解かれることとなった。

これまではフィールの監視下に置かれ、ユートピア・タワー内での単独行動さえ許されず、地下のメンテナンスルームに事実上閉じ込められていた。

全身のリペアが完了したあと、彼女は一度目覚めたものの、「クリプトナス襲来のほとぼりが冷めるまで、この部屋から出るな」とフィールに言われ、「なら、ほとぼりとやらが冷めるまでいっそのこと眠らせてくれ」と彼女は頼み、フィールはこれを許可、彼女は再び眠りについた。

起きていてもすることなんてないだろうし、それに、人間やらアンドロイドのことやら否応なく考えさせられてしまるのが嫌だったからだ。

眠りに落ちる寸前「もう目を覚ましたくない」と思ってしまったぐらい、彼女の精神は疲れ果てていた。

ところが、今の彼女はまた、白い蛍光灯がまばゆい天井を見上げている。

彼女はまた戻ってきたのだ、この謎々だらけの世界に。

やがて、誰かが部屋に入ってきたかと思うと、

「おまえは……」

それは？ルカ？だった。

右手に茶革のポストンバックを持っている。

「お目覚めね。調子はどう？」

ナナシは目をそらし、答えなかった。

呆れたふうに肩をすくめてみせると、ルカはポストンバックを床に置き、彼女の両手足の枷かせを解いた。

「服はね、これを着て」

そういつてバッグのなかから、白のスニーカー、ブルーのスキニージーンズ、ベージュ色のパーカーなど衣類一式を取り出し、寝台に身体を起こすナナシにほおるように手渡した。

「前に私が着ていた服は……？ いや、それより黒い腕時計はどうした？」

「全部バッグのなかに入ってるわ」

「よこしてくれ、黒い腕時計」

「そんなに大切なの？ まずは下着をつけた方がいいと思うけど」  
ルカは前にナナシが着ていた衣服やら、他に生活雑貨などの入ったバッグを漁り、透明なケースから黒い腕時計を取り出した。

彼女が振り返って渡そうとすると、ナナシはぶんどるように彼女の手から腕時計を取り、左手首に巻き始めた。

大切な親友の形見。

自分の仲間の手にあるならいざ知れず、そうでない者の手にあるのは忍ぶに耐えない。

「まるで子供ね」

ルカは冷淡に言った。

「それで、私はこれを着なくちゃいけないのか」

腕時計をはめ終わり、ナナシはベージュのパーカーを広げる。

「フィールからの支給品よ。なるべく？地味な？格好をするようにって。確かに前に見たときあなたの格好は、なんていうか、アイドルの衣装よりも前衛的だったわ。しかもぼろぼろ。私だってあんな、胸を大きく開いた格好でステージに立ったことなんてないもの」  
かくいう彼女も、一般の目からはステージか仮装の衣装にしか思えない金縁の黒いチャイナドレスを着て、それにニーハイソックスをはいた足をなまめかしく覗かせている。

前回ナナシが逢った時と同じ装いで、やけにセクシーな格好という点では、お互い様だ。

「着てみた感じはどう？」

「特に何も……若干、動きづらいというのはあるが」

「それって全部、レディースの有名なカジュアルブランドのものなのよ。フィールはお金持ちだから何着買ってやったって困らないけど。大事に使ってよね」

ルカは抑揚のない口ぶりのなかに、さりげなく主人の自慢を込めた。

パーカーの下に着たTシャツやスキニージーンズの慣れない感触を試しているのか、ナナシは身体をひねらせたり、新しく履いたスニーカーの爪先で地面を叩いたりなどしている。

腕時計以外には特に衣服にこだわりはなかったものの、改めて別の服を着てみると、やはり前の服装の方がしっくりくるように思えた。

「さて、支度は出来たわね」

ルカは水色のチップを取り出し、手首につけたディスプレイ付きのデバイスに挿入。

インストールする際に必要な保管IDが新たに書きこまれると、再び取り出したチップをポストンバッグに向け、チップの表面にある小さなスイッチを親指で押しこんだ。

「アンインストール」

白い電光とともにポストンバッグがチップの端子部分へと瞬く間に吸い込まれていく。

バッグのアンインストールが完了すると、ルカはそのチップをナナシに手渡した。

この時代ではバッグの代わりとしてチップが運用されているが、物資のIDナンバーの都合から一つのチップにつき一つの物資しかアンインストール（保管）出来ないため、多くの物を一つのチップにまとめておきたい場合は、こうしてバッグなどのケース自体のIDを取ってアンインストールするのが一般的である。

バッグ自体をチップに収められる状態にしておけば、後から取り出すのも、別の物を新たに詰め込むのも、バッグの中身を自由に変

えて持ち運べるからだ。

「今さらだが、どうしてお前が来た？」

部屋から出て、二人は足元に青白いライトの続く廊下を歩いていった。

ルカから新たなゴムをもらい、ナナシはすっかりお馴染みの髪型に戻っている。

「フィールに逢いたかったの？」

ルカは冗談めかして言う。

「別に。ただ、まさかお前が来るとは思ってなかったからな」

「クリプトナス襲来のほとぼりが冷めて、スタッフのほとんどが休暇を取ったの。」

フィールも今日は休暇を取って、サン・パライーソに出かけたわ」

一瞬、間を置き、

「……ミクと一緒にね」

と、彼女は嫌みっぽく言った。

「それで、お前が来たわけか」

「勘違いしないでね？ 私だって暇じゃないの。夕方から歌番組の収録があるわ。この日にあなたが目覚めるから、ニンゲン社会で生活するのに必要なものを持って行ってやれって、前々からフィールに言われてただけよ。あのヒトは読みが鋭いから、あなたが目覚めたらここを出たがるって知ってるのね」

「確かにそれは間違いない。ところでリンの姿がないんだが、あいつはもう戻ったのか？」

「ああ、あの金髪の女の子？ そうよ、一週間前に帰っていったわ。スタッフから聞いた話だと、『ナナシと一緒にかえるーっ！』ってわめき散らしたらしいけど。元気な子ね」

「そうか、あいつは帰ったんだな。安心した」

「フィールが変なことをするとも思ってた？ まさか、そんなヒトじゃないわ」

言って、ルカは微笑んだ。

こいつも笑えるのか、ナナシは暗がりには彼女の横顔を見、思った。「そうそう、大事なことを言いそびれてただけだ」  
一階へ行くエレベーターを待つ間、ルカが思い出したように口を開く。

電光版を見るに、エレベーターが降りてくるにはまだ少し時間がある。

「あなたの記憶装置、ひいては頭脳そのもの、あなたが眠っている間、再度丹念に調べてみたけど、どこにも異常はないそうよ」

初め、ナナシには何のことか思い出せなかったが、それが眠りにつく前、自分がファイルに訊ねた質問の答えなのだと知った。

クリプトナス襲来の直前、彼女はMEIKOマイクから聞いた？笑顔のコツ？を思い出せなくなっていたのを不安に思い、自分の内部構造をよく知るだろうファイルに訊ねたのだ。

答えは、頭のどこにも異常はない。

それではなぜ、今、思い出せないのか。

本来ならよろこぶべき結果でも、彼女の不安をより駆りたてるだけだった。

「あなたは、これからどうするの？」

エレベーターが到着し、入口越しにルカは訊ねた。

このフロアにまだ用事が残っているのか、彼女は乗らないらしい。

「そうだな。まずは、リンのところへ行く」

「それから？」

思いがけない質問に、ナナシは戸惑った。

リンのところへ行ったあとの、それから？ まったく考えていなかった。

「何にもないのね。あなたの思考回路の解析、私も見させてもらったわ。」

色々大変ね。自分が生まれた意味だとか、そんなのばかり考えちゃって。

私はアイドルだし、色々な人から必要とされてる。望まれて生まれ



てきたのよ。

だから、あなたの悩みがよく分からない。でも、こういうことって、『これをしたら解決する』っていうのがないから、何をしたらいいか分からないわね」

彼女の口ぶりは明らかに相手を皮肉った感じがあった。

「……お前も、一緒じゃないのか？」

「え？」

「前に逢った時、言ってなかったか。？私はフィールにとって、私だけの価値が欲しい？。」

お前に私の苦悩が分からないというのなら、お前はきっと、それを見つけたんだな」

しかし、ルカの表情からは余裕が消えていた。

いくらボーカロイドとして人々の人気を得ても、ミクの上に立つことはできないし、それにミクからフィールの独占を奪うことも出ない。

ナナシと同様、彼女も自分という存在に価値を見出しきれてはいないのだ。

「私は、あなたなんかとは違うわ。戦うことしかできないあなたとは」

至ってクールに、彼女は強がってみせる。

「お前は、そんな私をうらやんでいたんじゃないか」

「あれは、ちよっとした気の迷いで言ったのよ。あの時は生まれて間もなかったから、色々と分かっていなかったの」

「そうか。ただ、お前の言う通りだ。私は戦うことしかできない。それは変えられない。なら、何のために戦うのか……私がこれから見出すべきは、どうやらそれらしい」

すると、エレベーターの扉がゆるやかに閉じられた。

ルカはしばらく動けない。ナナシの力強い瞳と声が頭に残っているからだ。

？何のために戦うのか？……そうだ、自分も歌うことしかできな

い。

なら、何のために歌うのか。形は違えど、彼女にも見出さなくてはいけないものがある。

言うなれば、二人はこれからの道に迷う？方向音痴？という点で共通していた。

「……誰？」

ふと、背後に人の気配を感じた。

振り返ってみると、白衣を着た男の姿がエレベーター付近の電灯によって浮かび上がっている。

男はにやつと口元に笑みを作ると、ルカに歩み寄って、名刺を一枚、差しだした。

「W・A・F……？ 国軍？ だってあなたは、この機関のスタッフじゃない」

彼女の前に、一本の道がおぼろげに姿を見せ始める……。

「？内通者？ね。私としたことがうかつだったわ。フィールはあなたたちが大っきらいなのに」

ただし、その道は、

「一応聞いておくわ。どうして私をここへ呼び出したの？」

光さす道ではなく、更なる？暗闇？へと続く道だった。

「ええ……かねてよりあなたの望みだった？戦闘用への改造？を、

W・A・Fの方で施して差しあげようかと」

「ああー……落ちつかないなあ」

リンはレジカウンターにあごをつけて、間延びした声で言った。  
「ナナシのことか？」

ほうきとちりとりを持って店先のはき掃除をしていたのき爺が、  
ふと振り返る。

「うん。今ごろ変な改造とかされてたり思うと……ああ、最悪スク  
ラップ!？」

リンは両手で頭を抱えて一人パニック状態。

彼女の傍らでは小型のブラウン管テレビ（一か月前の事件で壊れ  
たので、二台目だ）がニュース番組を垂れ流している。

女性キャスターが伝えるは、Reaper組織？ヴァノー・パ  
ース？のリーダー・？アレッチェド・フランシス？、他メンバーの  
アン・ヴェルグ収監が正式に決まったとのこと。

黒いバケモノ事変、もといクリプトナス襲来のかげに隠れてあま  
り騒がれていないが、もしあの一件がなければ、間違いなく国民の  
耳目を一点に集める大ニュースだっただろう。

彼らはReaperの島外追放を訴えるためには手段を問わない  
過激派として知られ、国民にその名を広く知らしめることとなった  
のは、ユートピア・タワー前での爆発テロだ。

幸いにも未遂に終わり、このことでリーダーを含め組織の中枢を  
担っていた幹部連中が次々拿捕<sup>たは</sup>、取り調べの過程で彼らがReap  
erの反対運動だけでなく、組織拡大のために麻薬密売、武器製造  
に手を染めていた事実が明るみとなり、国民の関心を引いていた。

それでも現在、国民の関心は一カ月経っても明かされない黒いバ  
ケモノの正体に向いており、のき爺もはき掃除のBGM代わりぐら  
いにしかニュースを聞いていない。

とはいっても、のき爺は裏稼業で一度、彼らに関わったことがあ

るのだが。

「死ぬまで刑務所暮らしか。ま、妥当なところだな」

そんなことはすっかり忘れているのか、彼はニュースを聞いて他人事のように呟いた。

「のき爺、やっぱり私がはき掃除やるうか？」

手持無沙汰から、リンはふとのき爺に提案した。

「いや、前の一件で自分の身体がいかになまくらだったかを思い知らされてな。

万が一に備えて、毎日少しづつでも身体を動かしておきたいんだよ」

と言っている傍から、「いたっ!？」ときつくり腰に悲鳴をあげるのき爺。

「はあ〜……」とリンにため息を吐かれつつ、敢えなく交代することに。

「こんにちはー」

リンがはき掃除を始めようとした折、背後で聞き慣れた声があった。

「あ、海人じゃん。今日もヒマしてんの？」

「あのねリンちゃん……俺はいま？ 謹慎中？ なの。好きで暇人してるわけじゃないって」

海人は頭をかきながら呆れ気味に言った。

上下紺色のスウェットに、サンダル、口の周りに無精ひげを生やし、さっそう暇を持って余して街をうろつく不真面目な大学生。

「ナナシさんは今日もいないみたいですね」

「ああ、まだ帰つとらん。よかつたな、そんな腑抜けた顔を見られなくて」

海人は苦笑する。

ナナシにBRSのチップを渡したあと、彼は意識を失った。  
ブラックロックシューター

次に目を覚ました時は病室の天井を眺めており、そのまま療養のため三日間入院。

そして入院中に見舞いへ来たマラン警部補に言い渡されたのが、二か月の謹慎処分。

やはりというか、やはり事件時の身勝手な行動がとがめられたらしい。

こんな長期の謹慎はお前がエインセル署始まって以来だ、と相棒のザックに失笑された。

「にしてもリンちゃん、有名になったよな」

「なにが？」

「ほら？ウロイエロー？ってやつ。街のあちこちで耳にするよ、花屋のお子さんがすんごく強いって」

「ちっがー！」

リンは声を張り上げる。

「だって見てごらんよ、街の人の君を見る目がさ……」

リンは外に目をやってみると、道行く人々が何やらひそひそ話しながら歩いている。

特におばさん連中は露骨で、リンを見て「あの子がっ！？」と大声を出す始末。

リンが花屋へ帰って来てからというもの、別に花をかうでもなく店に訪れたり、リンにサインをもらいに来たりする者が現れ、本来ならリンに任せている雑用諸々をのき爺がするようになったのは、リハビリ以外に彼女を表に出したくない思いがあったからだ。

「はあ、やっぱり、のき爺にやってもらおうかな」

リンはのき爺を見やるも、彼はレジカウンターに引っ込んで苦悶の表情だ。

腰痛がよほどひどいのだろう、ならいっそ海人に店先の掃除を任そうかと考えていると、

「あ……」

通りの向こうに、馴染みの姿が往来にまじっているのを見つけた。

いつもと違う装いでこちらに向かっているが、あの特徴的な髪型には見紛うことはない。

「ナナシーツ！」

ほづきとちりとりをほっぼって、リンは彼女の下へと一目散に駆

けだした。

そして面食らう彼女に勢いよく飛びつく。

両頬を胸にすりつけ、まるで主人の帰りを待ちわびていた仔猫のようだ。

「お、おい、リン……」

「よかったあー、ちゃんと帰ってこられたんだねっ！」

それは果たして彼女がスクラップにされなかったことなのか、単に道に迷わず帰って来られたことを指しているのか、とにかくリンの表情はこの上なくよろこびに満ちていた。

「リン、一つ、訊きたいんだが」

「なに？」

「この一ヶ月、ブラックのエネルギーを摂っていないかったら？  
身体に異常はないか？」

ナナシは耳打ちで訊ねる。

「前みたいになふうにはなっていないよ。あの戦いでたくさんブラックのエネルギーを摂ったから、それがまだ効いてるのかもしれない」「いや……恐らく、フィールが約束を果たしてくれたんだろう。何と名前がついているのか分からないが、私たちのなかから、ブラックを欲しがる？本能？を取り除いてくれたんだ」

そう言つと、リンは目を丸くして驚いたのち、「よかったあー！」と再び抱きついた。

しかし、まだ安心はできない。

そもそもフィール自身から確認を取ったわけではないし、それにブラックのエネルギーを得なかったことで、リンに変調が出始めたのは彼女がこの街で暮らし始めて半年ほど。

まだ一カ月しか経過していないのであれば、リンの言うように大量摂取したブラックのエネルギーが身体に残っているのかもしれない。もつと言うなら、フィールが自分たちを解放したこと自体があまりにも素っ気なさすぎる。

ナナシはリンに抱きつかれながらも、あらゆる考えを張り巡らし

ていた。

「ところでさ、ナナシ、なんでいつもと違う格好なの？」

リンは不思議そうに彼女を見上げる。

「これもどうやらフィールの計らいらしい。私をあんまり目立たせたくないんだとか」

「ふーん。でも、なんか、ナナシっぽくないなあ」

リンはナナシから離れて、彼女の装いを足元からしげしげ見ている。

ベージュのパーカーのチャックを締め、胸元がやや開いているのが唯一の露出であり、彼女本来の雰囲気と併せると地味な女子大生といった感じだ。

「ま、確かに、これなら目立たないよね」

そう言って微笑むや、ぱちぱちぱち、周囲から拍手が聞こえた。

「よかつたなあ、また逢えたみたいで」

「感動的ね、よくは知らないけど」

そこに感動的な再会シーンがあるのを見て、人々が惜しみない拍手を二人に送っている。

陽気なこの街の住人特有、事情はさておいて一人が笑ったらみんなで笑えの精神の現れだが、ナナシにとっては早くも多くの人間に顔を知られる結果となってしまった。

「なんか……ごめん」

リンはナナシと顔を見合わせ、ぽつり、呟いた。

「わあ、ナナシさん帰ってきたんだねっ！」

ふと人々の間からグミが出てきた。

フリル付きのエプロンに、小さな手提げ袋、店で買い物頼まれた途中らしい。

「リン、こいつは……？」

「ナナシが店番してたときに話したじゃない。グミちゃんだよ、私のもとたち」

「前に話した？ 私とこいつが？ 覚えてないな……」

彼女は一瞬、また記憶が自分のなかから抜け落ちているのかと疑ったが、前にグミに話しかけられたとき、彼女は考え事をしていて単に周囲が目に入っていないだけだった。

「店に来る？　ここじゃ何だしさ」

周囲の人ばかりを見て、リンは二人と連れだって店へと向かった。「あれ、海人は？」

店内に入ると、リンは海人がいないことに気付いた。

「この下におるぞ」

のき爺はあごでくいと、いじわるめいた表情でレジカウンターの下を指す。

ナナシにだらしなな格好を見られたくない海人が隠れているのだ。

「あ、こ、これは、お久しぶりですね……」

渋々立ち上がり、海人はしどろもどろしながらナナシに挨拶する。

「お元気そうでなによりです……」

「あの時は、ええと、どうもっていうか、どうも……」

あたふたと言葉を並べる海人をナナシはしばし静観していたが、不意に一言。

「お前……なんか、変わったな」

海人は心臓に槍が突き刺さるのを感じた。

もう、取り返しがつかない、もう、立ち直れない。

ふらふらとよろめく海人は、ほとんど呻き声でのき爺に耳打ちした。

「さつきあれほど……？　ひげそりかしてください？　って頼んだのに……っ！」

ありつたけの怨念を込めて言うと、彼はぶつぶつとネガティブな呟きを開始した。

その壁にもたれかかって陰鬱そうな雰囲気な彼を見、ナナシはハクを思い出すのだった。

「ちわーっす」

店に新たな客人。



私服姿のジャックとワトンだ。

「おお、お前たちか。今日は休みか？」

「そうっす。昨日、やっとこさホールフォビア全体の復旧工事が完了して、今日は一日休みなんです。さっきまで泥のように寝てたんですけど、暇になっちゃって、ここへ」

ジャックはいつもの飄々（ひょうひょう）とした笑みを浮かべる。ワトンは、何やら物欲しそうな目付きでナナシのツインテールの一束をじっと見ていた。

「どうも、食えるのか食えないのか考えているらしい。」

「彼女は？」

「ナナシっていうんだ。うちの店員の一人だよ」

「へー、変わった名前っすね」

言って、ジャックはナナシに会釈する。

無愛想だけど、きれいだなあ……と思っていると、ワトンがあらんと口を開けて今にもナナシの髪に食いつきそうだった。

「それは食いもんじゃないっ！」

すかさず声を張り上げ、ワトンはびくつと肩をすくめて中断。

ナナシは何のことかさっぱり分からず、皆がくすくす笑いだすますます謎だった。

「ほら、ナナシも笑ってごらん？」

リンに促されるも、顔のどこに力を入れていいか見当もつかないそれに、どうしてここで皆がそんな表情になるのかも不可解だった。

疑問符を浮かべていると、「あいたあっ!？」と海人の叫び声が聞こえた。

彼は床で仰向けになっている、どうもすっころげたらしい。

「おい、あんた……なにやってんだ？」

彼がすっころげる過程を見ていたジャックが、白けた顔で訊ねた。ジャックが見ていた限り、海人はおもむろに歩き出すや、一人突然すっころげたのだ。

周囲が黙って見つめるなか、海人は身体を起こし、顔を真っ赤にして答える。

「い、いや……彼女を、笑わそうと思つて……」

彼女どころか、他の一人も笑っていない。

完全に場が白けてしまったが、グミだけは海人の行動が想いを寄せる女性に対して行つた？ 勇気ある行動？ だといち早く見抜き、彼に向けた瞳を輝かせている。

「お前、やっぱり、変な奴だな」

ナナシは海人を見下ろし、抑揚なく言つた。

海人の心臓にまた槍が突き刺さる、今度は歓喜の意味での。

これまでしたアプローチのたいがいが無視か、それ以前に気付いてさえもらえなかつたので、彼女の反応を得られたのがこの上なく嬉しかったのだ。

しかし嬉しがる海人の表情を見て、ジャックは傍らのリンの肩を叩く。

「なあ、こいつ、ひよつとして？ M<sup>エム</sup>？ なのか？」

クリプトナス来襲から一カ月、エインセルはすっかり元の明るさを取り戻している。

暗室に「W・A・F」というロゴマークの立体映像がいくつも浮んでいる。

それらに囲まれながらも、Dr・フィールグッドは毅然とした態度を崩さない。

「先のクリプトナス襲来から、今日に至るまでの激務に次ぐ激務……まことにご苦労だった。今日の休暇は、満喫できたかね」

マークの一つが、老人の偉ぶった声で言う。

「ええ、まあ」

フィールは言葉少なに答えた。

まことにご苦労だった、などと、W・A・Fはまだ自分のことを飼いだだと思っっているらしい。

それも自分が指揮を執る機関の活動を全面的に休止し、自分も含めて？休暇を取った？ということは極秘にしてあるはず。にもかかわらず、さも旧友のような馴れ馴れしさで休養の具合を訊ねてくるあたり、自分の懐に内通者がいるのは明白だった。

「今回の呼び出しは、そのようなねざらいをするためですか」

「それもあるがね、君には一週間後に予定されている国の？復興式典？の開会スピーチを頼みたいのだよ。今や国民的アイドルとなったボーカロイド・ミク、ルカの製造者として、君はほとんどの国民に認知されている。それにボーカロイドの製造はあくまで君の仕事の一端。このトランジスタの建造計画から、今日の国の暮らしを支えるテクロノジーを牽引してきたのは君だ。国の新たな出発を飾る復興式典の開会スピーチに、他に誰が務まる？」

「我々は突如としてやってきた正体不明の巨人に蹂躪され、壊された都市機能を正常に戻してやっただけです。それを？国の新たな出発？とは、いささか大げさではないかと」

「今さら野暮なことを言う。国民は開催を告知された時点からひど

く楽しみにしているようだぞ。なにせ、あの日は誰でも無条件に、ミクとルカの歌声を生身に堪能できるのだから」

「確かに二人の起用を許可したのは私ですが……それも、先の混乱で自分たちの行く末に不信感を抱いた国民を思つてのことです。あなたがたのためではありませんな」

「復興式典そのものが、君のいう意味を持つているのだ。ミクとルカが出るというのに、そこへ製造者たる君が出ないのでは締まらない。大衆の前に立つて、一つ会釈するだけでもよい。国民は君を筆頭とする、テクノロジーを担う各機関のありようを見ておしなべて確信するだろう。我々人類の未来は？安泰？だと」

そこで沈黙が降りる。

復興式典は一見、先のクリプトナス襲来で肉体的にも精神的にもダメージを負い、これからの生活に不信感を募らせる国民を勇気づけるための目的があるようだが、その実、会場にはテクノロジー関連の企業がこぞってブースを出す予定で、自社製品をアピールするコンペティションの場として体よくかこつけるのがこの？復興式典？という大義名分なのだった。

フィールは国や企業の重鎮たちが純粹に国民を思つてのことではなく、自分たちの売名の

ために国の一大イベントを利用せんと目論んでいるのが分かつていたので、それに加担させられるのが悪事の片棒を担ぐみたいで嫌だった。

「表に立つのは好かんのですがね。まあ、国民が望むのなら、そうしましょう」

確かに彼らの言いなりになるのは嫌だが、国民を落胆させるよりはましだと考えた。

その心理につけこんでくる連中の狡猾こつかうさに、フィールは改めて呆れる。

「さて、今度は私からあなた方に質問があるのですが」  
フィールは鋭い声音で訊ねる。

「私のアンドロイド……？ネル？を、どこにやったのです？」  
マークは誰ひとりとして応答しない。

「彼女には発信機が内蔵されている、他のアンドロイドと同様に。  
彼女は大破した時点ではエインセルからホールフォビアへと続く橋きょう  
梁りょうの上うへにいた。

それが戦いが終わってみると、元の場所にいない……完全に消息を  
絶っている……。

私は、あなた方W・A・Fが混乱に乗じてネルを連れ去ったものだ  
と確信しているのですが」

言い終えてから数秒、「くっくっ……」と押し殺した笑いが聞こ  
えた。

「とんだ誤解だな。海にでも落ちたのではないか」

「水に濡れてなかの発信機が壊れるほど、私は彼女に野暮な設計を  
した覚えはありませんが」

「知らないものは知らんよ。さて、用事が出来た。今回のミーティ  
ングは以上にしよう」

言って、マークは次々と回線を切っていった。

光源が消え、黒く塗りつぶされた空間に一人、フィールだけが残  
される。

老人の態度はあまりにも白々しかった。間違いなく、ネルは連中  
に捕らわれている。

これは連中にとつて、ほとんど？アンドロイドの設計図？を得た  
と云って過言ではない。

フィールはにわかにに焦りを感じつつ、部屋を後にした。

\* \* \*

とつぷりと陽がくれた夕刻、フィールは私室にて食事をとつてい  
た。

向かいのテーブルにはミクが座り、フィールと同じメニューを前

にしている。

ぎこちない手つきでナイフとフォークとを動かし、しきりに主人の顔をうかがいながら、食べ物を中心に運んでいる。

「おいしいか？」

ミクは口に入れた一切れのステーキで片頬をふくらませながら、につこり微笑んだ。

彼女に味は分からない。味覚というのは口に入れた物の科学的特性に応じて認識される感覚で、その器官を人工的に作り出すのは難しく、フィールにもまだ実現できていなかった。

それを重々承知している上で、彼は「おいしいか？」と訊ねたのである。

「私は、ミク、君を……現代へとよみがえらせた」

フィールはおもむろに口を開いた。

手はフォークとナイフを使ってステーキを切り分けている。

結構な厚みがあるのに、それはさつくりといとも簡単に刃を通す。「君をボーカロイドという？歌姫？にもした。それが君の夢だったからね。でも、本来なら君は人間のアイドルとしてステージに立つはずだった。夢を叶えるだけの才能も魅力も君は備えていたし、君はあのまま生きていけばそうなるはずだった」

今日のメニューは、ホテルの一流シェフに作らせたフレンチのコース。

この肉料理、すなわち、材料となる牛は、セントラル北区の屋内牧場で飼育されているランク一級の？クローン牛？である。

庶民には最もランクの低い三級のクローン牛でさえ滅多に手に入らず、二級から上となれば社会的地位の高い人間しか口に出来ない。それを味も分からない、そもそも人間ですらないアンドロイドに与えている。

アンドロイドの動力源は別にあるので、口に入れた物が何であろうと、それは？異物？として腹部にあるシュレツダー機関が跡形もなく処理してしまう。

本人のエネルギーにもならなければ、排泄物として肥料にもならない。

とんだ資源の無駄だな、W・A・Fの老人たちが鼻で笑う声が脳内にこだまするも、しかし、フィールはこのミクとの会食をやめようという気にはならないのだった。

「君の身体を人間と寸分違わぬ構造にしてやるのには、まだ時間がかかる。当面は君に、せめて味覚を与えたい。食は人の心を豊かにする。おいしい、まずい、というやりとりは、人と人の基本的なコミュニケーションだ。それに欠如したままで、ミク、君の魂を？ 定着？ させたくはない。私はまだ、君の身体をより人間に近づける必要がある」

全面張りのガラスから夕陽が差しこみ、部屋を琥珀色に近いオレンジに染め上げる。

食器が音を立てる以外には静かで、フィールとミク、二人だけの時間が深々と流れていく。

それこそまるで、琥珀のなかに二人が閉じ込められているみたいに。

「ミク、口の周りがソースで汚れているぞ」

フィールは傍にあったナプキンを手に取り、それでミクの口の周りを拭いてやった。

急に口元にナプキンがあてがわれたので、ミクはしばらく呆気にとられた表情だったが、フィールの手が離れると、またにっこり微笑んだ。

自分に何が起こっているのかも分からずに、彼女はまた意味もななく微笑んでいる。

早く、この笑顔を意味と心あるものにしなくては。

フィールは改めて決意し、食事を再開した。

「フィール……」

入口の扉を薄く開けて、ルカは二人の様子をずっと眺めていた。そして寂しげに呟いたのち、ポーチから携帯電話を取り出す。

ルカはミクと違って箱入りにされず、自立した生活を送っているため、事あるごとに機関のスタッフやフィールに連絡できるよう携帯電話を持たせられている。

ほとんどの場合はフィールに電話をかけるのだが、今回、彼女は違う番号を呼びだした。

先ほど地下で逢った人物、機関のスタッフを装った？ W・A・F？の関係者だ。

「考えさせてもらったけど、決まったわ。私を……？ 戦闘用に改造？ して」

おもむろに踵を返し、ルカは廊下を歩いていきながら言う。

歌姫としての私も、愛される者としての私も、それは全てミクに取って代わられている。

このままの私ではだめ。私だけにしか出来ないこと、私だけの価値を生み出さなきゃ。

フィールに振り返ってもらったため、ルカが選択したのは、自分が？ 戦闘用アンドロイド？ となって彼の役に立つことであつた。

しかしその選択が……のちに、フィールに牙を剥く結果となる。

t o b e . . . . c o n t i n u e d .



&lt;&lt;Chapter 3&>&>;(後書き)

次回 予告

Rock・14? 囚人の都?

乞うご期待

Rock・14？囚人の都？

ナナシがPIYO MARTへ帰って来てから三日目、彼女はすっかり店の看板娘になっていた。

しかし、店の主にとってはあまり喜ばしくない意味で。

「なんて愛想のない店員なこと……」

そう彼女に嫌みを吐くは、店の常連客であるハイネマン夫人。

対するナナシはぼうつとした目で、その鋭い三角の顔を見下ろしている。

「お前……なんだか、」

不意に、ナナシは口を開く。

「顔が真っ白だぞ」

数秒、場が凍りつき、傍らのリンが陽気に言った。

「あ、これはね、？厚化粧？っていうんだよっ！」

リンはこれを褒め言葉だと思い込んでおり、場を収めるために言ったのだが、

「リ、リ、リンちゃんまで、なんてことなの……っ！？」

夫人の怒りの爆発を誘発する決定打となってしまった。

レジカウンターで戦々恐々と様子を見守っていたのき爺が、慌てて間に入る。

「あ、いや、ハイネマンさん、ナナシもリンも悪気があって言ったわけじゃ……」

「まったくこんな屈辱を受けたのは初めてですわちよっと教育がなっていないじゃないのしかもわたくしはこの店の常連であるというのに信じられない仕打ちですわ云々……」

火ぶたが切って落とされたかのごとく、あれこれ不満をぶちまけ始めるハイネマン夫人。

その怒涛の勢いは止む気配なく、しばし道行く人の目を楽しませた。

「っはあゝ……やつと終わつたか」

頭から蒸気をふかしながら早足に歩き去っていく夫人の背中を見送ってから、のき爺はレジカウスターにぐったり頭を垂らした。

夫人は黒いバケモノ事変収束後、特に外傷を負つた訳でもないのに病院へと赴き、そこで入院療養の必要性を訴えるも断られ、それから三週間ほど自宅療養していたらしい。

黒いバケモノ（ブラック）のおぞましい姿が脳裏から離れず、外へ出るのが怖くてたまらなかつたらしいのだが、今日、久々におめかしをして、主人に頼んで買ってもらつた豪華なよそ行きの服を身にまとい、勇んで行きつけの花屋へ行つた結果、こつなつたわけだ。あんたがバケモノだよ……、とのき爺は思わずにはいられなかつた。

「まったく、お前らがそろつてからろくなことがないよ」

のき爺はおそろいのエプロン姿の二人を見る。

リンは舌を突き出して「やっちゃつた」とでも言うようにあどけてみせ、ナナシに至つては何がどうなつているのか分からない様子であり、いずれにしる二人の辞書に？悪びれる？という言葉はないようであつた。

はあ、のき爺が深いため息を吐くのも無理はない。

「ウロイエロー、こんにちはっ！」

「ナナシちゃん、もつと笑つた方が素敵だぞーっ！」

店先を行きかう人たちが口々に声援を送ってくる。

どうしてナナシにまで声援が飛んでくるのかといえは、リンがウロイエローとして街の有名人である関係で、なまじ本人の容姿がいろいろもあり、いつもリンと並んで店先にいるナナシを皆が気に留めるようになったのが始まりだ。

それも彼女は、前に街で騒ぎを起こしたブラックの一件でその姿を一部の住人に知られていたこともあり、たつた三日店先にいただけで今やリンに次ぐ街の有名人になつている。

躊躇なくバケモノに刀を突き刺し、消滅させた姿から、ウロイエ

ローとナナシが協力して黒いバケモノ事変を収めたのではないか、と巷ではもっぱらの噂だ。

「お前らがここにいと、店がうるさくてかなわん。花売りにでも行つてくれんか」

街の有名人を二人も抱える店主は、穏やかに商売が出来ないのでうんざり気味だった。

「ほーいっ！ ナナシ、行つてこよっ！」

底抜けに明るい声で言つて、リンはナナシの手を引く。

通りに出ると、彼女はチップをリングに挿入して事前に用意していた花売りかごセットをインストール、どうやらこうなることを見越していたらしい。

はあ、頼杖をつき、二人の背中を見送るのき爺は何回目か分からないため息をついた。

「郵便でーす」

頭に帽子をかぶつたポストマンが、エアロ・スクーター（地上版エア・グライドのような乗り物）に乗つて店先に訪れた。

「郵便……？」

「ええ、リンさん宛てにお手紙が一つ」

朝刊と夕刊、他に家賃や裏稼業で使う諸々の請求書以外に手紙など届けられたことがないので、のき爺はいささか驚いた面持ちで手紙を受け取る。

続いて老眼鏡をかけ、差出人を確認した。

「……？レン??？」

\* \* \*

「うつひゃあ……もうなくなつちやつた」

噴水広場の手前まで来たところで、花売りかごのなかはすっからかんになっていた。

街の有名人がそろつて出歩くとどうなるか、それを雄弁に物語つ

ている。

「あ、」

二人の周囲に出来ていた人だかりがはけていくと、そこに朝霧海人が立っていた。

無精ひげはそられ、Ｔシャツにジーンズ姿という、カジュアルな装い。

前回の失敗から学び、最低限の身なりを整えるようしたようだ。

「おー、海人じゃん。今日も暇してんだねっ！」

陽気に話しかけられ、海人はリンに目をやる。

彼女はさっそうとこちらに駆け寄ってくるが、

「だめ、リンちゃんっ！」

どこからともなくグミが現れ、「えええ？」と戸惑うリンを強引に引っ張っていった。

「それじゃ、私とリンちゃんはちょっと用事があるから。またね、海人さん！」

パチ、っと意味ありげなウィンクを送り、グミはリンを連れてそそくさ去っていく。

場にはナナシ、海人、二人つきりだ。

「ちよつとお……グミ、これってどういうこと？」

襟首を掴まれて引きずられていくリンは、不機嫌な口ぶりで訊ねた。

「あのね、リンちゃん。海人さんはナナシさんのことが好きなんだよ！？ それでね、人の恋路を邪魔するのは最低なこと、逆にお手伝いしてあげなきゃ！」

久しく眠っていた恋に恋する乙女心に火がついたのか、グミは熱気を込めて言う。

また始まったよ……とリンは呆れ気味だったが、ふとナナシの姿が見えた。

彼女がグミの意図を察するわけがない、リンが連れ去られたので追いかけてきたのだ。

「どうやらまだまだ、私の手助けが必要みたいね」  
振り返り、ナナシの姿に気付いたグミは、意気込んで一歩踏みこむ。

「あーっ！」

大げさにナナシの後ろを指差し、彼女がそれに気を取られている間に全力ダッシュ。

ナナシが視線を元に戻した時には、二人の背中を通りの遠くに消えかかっていた。

誰かが隣に立って、小さく息を切らせているのに気付く。

ナナシを追って走ってきたのだらう、海人だ。

「え、あ、えーっと……」

ナナシを前に、例のごとくしどろもどろする海人。

こいつ、いつもこんな調子なのか？ とナナシは内心いぶかる。

ブラックロックシューター

BRSのチップを渡してくれた時とはまるで別人だ。

あの時はもっと、目に見えて死にかけてではあったが、迷いのない？ 覇気？があった。

それが今では「えーっと」「あー……」と唸ってばかりの軟弱ぶり。

相手にするのは時間の無駄だ、そう直感したナナシは、またリンを追おうとした。

「ま、待ってください！」

海人が意を決したような大声をあげる。

どういうわけだが、思いつめた表情だ。

「そ、その、僕と……」

「私に言いたいことがあるんなら、さっさと見え」

ナナシはじれったいあまり、苛立たしげに促す。

「そこらへんを……そこらへんを、僕と一緒に歩いてみませんか？  
！？」

内容の小ささとは裏腹に、海人はがっつと両目をあげて威勢よく声を上げた。

周囲の人は立ちどまり、有名人のスキャンダルらしい光景に顔にやつかせている。

ナナシはしばし考え込むような間をおいたのち、おもむろに歩き出していった。

それもリンの走っていった方向ではなく、噴水広場の方へと。すなわち、海人の誘いを受けたのだ。

たったのこれだけで卒倒しそうなほど嬉しいが、しかし、海人のなかに緊張が迸る。

そもそも急な出来事なので、何を話したらいいかさっぱり分らないのだ。

「……で、私はどこまで歩いてやったらいいんだ」  
しばらく黙ったまま歩いていると、ナナシがおもむろに口を開いた。

「リンに言われたんだ。？ヒトには親切にしろ？と。これも親切のうちに入るのか？」

それがどうやら、彼女が海人の誘いを受けた理由らしかった。

海人は落胆すると同時に、頬をほんのり赤くし、額に冷や汗を浮かべて狼狽していた自分が、急に馬鹿らしく思えてきた。

というより、そもそも、ナナシ、彼女は……。  
「ずっと、訊きたかったんですけど」

海人は急に落ちついた声になった。

浮かれまくっていた心に落胆という冷や水を浴びせられ、半ば投げやりな心境だった。

「ナナシさんは……人間じゃなくて？アンドロイド？なんですよね」  
ナナシは海人の横顔を見やり、素っ気なく答える。

「そうだが」  
あとは沈黙しかなかった。

ただ、噴水広場へと続くメインストリートの雑踏を、一切の言葉も交わさず歩いた。

前もって知っていたことだったが、本人の口から断言されると、

何も言えない。

海人のなかで急速に心が冷めていく。しかし、一方のナナシは、自分のよく知るKAITOカイトが、あの自分の生に固執してばかりで、眉じり一つ動かすことのない男が、こうも一喜一憂し、刻々と表情を変える様に、無自覚ながら興味を抱いていた。

「今日もナスがおいしいー 君が作ったからさーるんるんー」  
噴水広場に着くと、カムイがくぼがマンドリンの弾き語りを披露していた。

メロディの心地よさとは裏腹に歌詞がくだらないのは相変わらずだが、彼の盲目的な女性信者が人だかりを作って黄色い声をあげているのも相変わらずだった。

「センキューツ！ 僕はナスって野菜が大好物なんだけど、これが庶民には滅多に手に入らない代物のもんだから、それに対する切なさ交じりの怒りがきっかけで出来た曲さ。」

聞いてくれてセンキュー、僕の愛しのエリーたち！」  
そして輪をかけて色めき立つエリーたち。

かくぼは続けて二曲目の演奏に入ろうとしたが、

「……あ、あれはっ!？」

エリーたちの後方にナナシの姿を見かけ、目を丸くした。

「まさか、再び出逢えるとは……これはもう運命テストイヤーだね」

ステージにしていた噴水の縁から飛び降り、腰を軽快に揺らしながら歩いていく。

エリーたちは思わぬ恋敵の出現に顔を見合わせ、憎しみに口元を歪めつつ、かくぼの後ろをぞろぞろついていった。

「ハイハイハイ！ いつぞやに僕の心を盗んでいったその黒髪乙女っ！」

マンドリンのヘッドをナナシに向け、かくぼは声高らかに言う。

ナナシは何のことかと、困惑気味に海人の横顔を見上げる。

「……ん？ なんだい、君の隣にいる、そのふにゃったらしい青年は」



「ふ、ふにやったらしい!？」

「まあ、どうでもいい。ところで黒髪乙女、僕の次なる言葉を聴いてくれないか。」

僕は君のことが好きになってしまったんだ。どうだい、君も僕のエリーにならないか。」

それもただのエリーじゃない、特別なエリーに」

並びのよい白い歯を陽光に反射させ、がくぼは一文字の詰まりもなく言い切った。

場は異様に静まり返ったのち、「ああ……」とあまりのショックに貧血を起こすエリーが続出。

海人も「い、いま、なんて……」と、まるで自分が愛の告白を受けたかのごとく、身体をわななかせていたが、やがて、真剣な面持ちでがくぼの前に立ちはだかった。

しばし暗黙のうちに視線のつばぜり合いを演じる両者。

するとまもなく、「ふっ……」がくぼは口をほころばせた。

「おいおいおい、そんな怖い顔するなよ。どうも、彼女には先約があったらしい」

がくぼはおもむろに踵を返す。

「お、おい、お前」

「僕にとって恋愛とは、誰かと争って勝ち取るものではなく、一方的にさらっていくもんなんだ。だから、そのふにやったらし、彼女を任せたよ」

右手をぶらぶら振って、がくぼはそのままステージへと戻っていた。

彼にとって恋愛とは一方的に消費するものであり、こちらの分が悪いと見れば、さっさと手を引くポリシーのようだ。

風のように現れたかと思えば、また風のように去っていくがくぼの姿に、海人はしばらく呆然としていたが、ふと、ナナシの声が聞こえた。

「……お前は どうして、私のために必死になる？ クリプトナスの

戦いの時も、今だって私を守ろうとした。あんな奴に襲われても、私は痛くもかゆくもないが」

海人は答えに詰まり、やがて、言った。

「僕、いや、俺は……昔から、親父に感情の波が激しい奴だと言われてた。自分でもコントロール出来なかった。今になってもそんなんだから、……だから、ですかね」

敬語で喋るのか、それとも普段の口調で喋るのか、そもそも一人称がどうなのかさえ、ナナシの前ではおぼつかない。

チップを渡した時の口調は、あれはある意味で火事場の馬鹿力だった。

男として風上に置けぬ感じがするが、さっきの男の口軽さも見習うべきなのかもしれない……と海人は思って、自嘲気味に微笑んでみせた。

「笑った…… K A I T O、お前が」

ナナシの口から思わず声がこぼれた。

いま目の前にいるのが、自分の知る K A I T O ではないとすぐに気付いたものの、一度感じた驚きを消すまでには至らなかった。

そして二人はこのあと……特に喋りもせず、広場を遊覧していた。

\* \* \* \* \*

一方、リンとグミは P I Y O M A R T にいた。

自分宛てに届いたという手紙をのき爺から受け取り、リンは一通り目を通した。

一行一行読んでいくごとにその表情を驚愕に変えていくリンを見て、つい今しがたまではしゃいでいたグミは不安の色を浮かべ、のき爺も真剣な面持ちのまま押し黙っている。

通りの陽気な雰囲気とは対称的に、店の中は緊迫していた。

「のき爺、これって……」

「ああ、お前も見た通り、差出人は？レン？となっている。言うまでもないが、その字はレンのものだろう」

「で、でも、レンは字なんて書いたことないし」

「しかし、字を読めることは読めるんだろう？ お前だって読めるんだから。」

なら、書くのはそこまで難しいことじゃないはず。学習能力のいいアンドロイドだったらなおさらな」

リンは動揺した様子で、目線を再び紙面に落とす。

字は黒のボールペンで書かれ、丸みがかかっていて小さい。

男の子の筆跡というよりは女の子が書いたように見えるが、レンが初めて字を書いた、という前提で考えるならば、その字の幼稚さがかえって説得力を与えていた。

そして手紙の内容は……？おれはいまグラジオラスってまちのアン・ヴェルグってところにつかまっている。たすけてほしい？とたつたこれだけで、他にはなかった。

「あ、ナナシさんたちが帰ってきた」

グミの一言で振り返るや、リンは駆け出ししていく。

ナナシはまた抱きつかれるのかと身構えたが、彼女の表情からそうではないと悟った。

「……助けてほしい？ レンが？」

手紙を読み、ナナシは険しい表情でうつむくリンを見やる。

彼女は今にも仲間の危急に飛び出してしまいそうな雰囲気だった。

「のき爺、グラジオラスってどこ」

案の定、リンは行く気であるのか、いささか怒った声音で訊ねた。「待て、リン。お前の気持ちは分かるが……これは？ 畏？ かもしれんぞ」

のき爺は眉間にしわを寄せて答える。

彼を前にして、リンも同じ表情だ。

「グラジオラスは、一言に言えば？ 監獄都市？ だ。トランジスタの都市の一つだが、本島とは橋でつながっておらず、完全に孤立して

いる。だから真つ当な民間人では出入りすることさえ無理だし、そもそもアン・ヴェルグに収監されている者から手紙が送られてくること自体おかしい。聞いたところによると、あの場所では手紙を書く自由さえないらしいからな」

「……罨って、誰の罨なの？ レンが私を罨にかけるわけない。誰がなんていったって、私は、レンを助けに行く」

リンはエプロンを取り払って、レジカウンターのところへ放り投げた。

一歩、二歩と強気な足取りで踏みだす彼女には、もう何を言っても無駄なようだった。

「おい、リン……行くにしたって、どう行くんだ？ 橋がかかってないんだぞ」

舌打ちを一つまぜて、のき爺は彼女を追いかける。

「それについては、私に考えがある。あまり好ましくない手段だがな……そうもいつてられる事態じゃないらしい」

言いながら歩き、ナナシはリンの横に並ぶ。

「どうやら、彼女も行く気であるようだ。」

「ひとまずは、ユートピア・タワーへ行こう。フィールの力を借りるんだ」

ナナシとリンは顔を見合わせ、力強くうなづく。

途端に走り出した二人をのき爺は追いかけてよとするも、ナナシが脱ぎ払ったエプロンに視界をふさがれ、ひるんでしまった。

「ナ、ナナシさんっ！」

それまで緊張した面持ちで様子をうかがっていた海人は、俺も行く、とでもいうように身を乗り出し、ナナシの名を呼んだ。

するとナナシは足を遅めて、やがて立ちどまった。

「私の名前に？さん？は付かない。……またな」

肩越しに言って、ナナシは再び走り出していった。

肩に マークの入った、裾がボロボロのロングパーカーに、ホットパンツ、膝下まであるロングブーツ……彼女お馴染みの装いであ

り、戦装束でもある。

海人は前面のチャックがどうなっているのか気がかりだったが、見えずじまいだった。

「？またな？……って、か、海人さん！？」

ひどくショックを受けた様子で、グミは海人の右腕を引っ張ってゆする。

何故なら、本人は彼女以上にショックに打ちひしがれ強い放心状態であるからだ。

「ねえねえねえ！ うまくいったんだね！？ なにがあつたの？ 教えてつてばあ！」

「は、はは、……俺、もう、死んでもいいかもしれない……」

頭のなかでは分かっている、ナナシがアンドロイドであることは。しかし心の、感情の、どうしようもない部分で、やはり、海人は彼女が好きなのだつた。

氷山キヨテルの執務室。

キヨテルとレンが、マホガニー製のデスクを挟んで面對している。

「？Am5-2？の補給はすませてきましたか？」

キヨテルはいつもの微笑みをたたえる。

「朝一番に飲まされたよ。ドロドロ真っ黒くて、気持ち悪い液体だな」

「三日前、君が訓練中に倒れたと聞いた時はびっくりしました。幸い、僕が事前に用意していた工業用ロボットエネルギー触媒・Am5-2のおかげで事無きを得ましたが……、レン君、やっぱり、君はアンドロイドだったんですね」

「信じてなかったのかよ」

「いえ、君がアンドロイドだという可能性を考えて、僕はAm5-2を手元に抑えておいたんです。それはまあ、君は見かけには人間そのものですから、100%信じていたのかと言われれば、答えに困りますが」

キヨテルの背後にある二連窓からは、昼下がりのぼやけた陽光が差し込んでいる。

照明をつけなくても、その光だけで部屋は充分に明るい。

やがて、ドアが静かに開き、ノースリーブの白いワンピースを着たミキが入ってきた。

後からぞろぞろと、ミキと同じ鋭い顔つきの子供たちも入ってくる。

「部隊？ラヴ？、これで全員集まりましたね」

キヨテルは手前のレンを含め、入口側に並んだ一同をゆっくり見渡す。

みな10歳前後の少年少女で、14歳であるミキがリーダーであり年長者だ。

レンはあの夜、自分を包囲したガスマスク集団の正体を一人一人の当たりにして、「こいつだったのか」と驚かされる気持ちだった。

「予定通り、本日、これより4時間と30分後の夜7時、作戦を決定します」

子供たちからみれば逆光のなか、キヨテルは左腕の腕時計を一瞥、言った。

レンは自然と口元が引き締まり、真剣な面持ちになる。

今宵、スーパーノヴァはグラジオラスに捕らわれた同胞の救出作戦を決行する。

もちろん、レンにはリンを救出するという目的がある。

そのため彼は一時的な組織の一員として、ミキがリーダーを務める子供部隊ラヴと共に現地へ乗り込み、与えられた任務をこなしていきながらリンを助けることになっている。

ちなみに部隊の名前をつけたのはリーダーのミキだ。

その彼女はリーダーとしての自覚がそうさせるのか、口元をきつと結び、迷いのない視線を真っ直ぐに向けて、キヨテルの次なる言葉を待っている。

「何週間も前からしつこくシミュレーションを重ねてきましたが、今回新たにレン君も加わるので、本作戦における君たちの動きについて最後の確認をします」

言うてから、キヨテルはおもむろに歩き出し、デスクに埋め込まれたトラックボール型の映像装置のスイッチを後ろ手に押した。

するとグラジオラスの地理情報が透明な蛍光色がかった長方形のボードとして映し出され、キヨテルは胸ポケットから取り出した万年筆を指示棒代わりに、説明を始めた。

「アン・ヴェルグのF1からF2までの各2層、君たちは二人一組に分かれ、楯円構造の取られたフロアの支柱に二か所ずつ？C・B？を設置。完了後は速やかに？安全エリア？であるC地点まで退去……ここまでが、作戦の大まかな流れです」

ラヴの面々にしてみれば耳が痛くなるほど聞かされたことなので、今さら質問も何もないのだが、「あれー？」レンが素っ頓狂な声をあげた。

「今回の作戦ってさ、オレはリンを、お前らは仲間を助けるんだよな？」

「はい」

「なのにC・Bを設置だの、安全エリアまで逃げろだの……誰も助けてくね？」

ともすれば阿呆に聞こえるその一言で、場の緊張感がどこことなく和らぐ。

「もちろん、救出が最優先ですよ。これからその部分について解説していきます」

レンは「ふ〜ん……」と言うものの、いまいち腑に落ちてない様子だった。

キヨテルが彼をほとんどラヴの一員とみなし、現地で単独行動を取らせないのは、彼がいて部隊が6人になり、余りなくペアが成立するからである。

もつとも、それは取るにたらないことで、他に大きな理由があるのだが。

\* \* \* \* \*

ミーティング終了後、ラヴの各々は作戦開始の1時間前まで自由行動となった。

部屋を出て廊下をツカツカ歩いていくミキを、レンは呼びとめる。

「……なによ」

ミキは肩越しに振り返り、露骨に不機嫌な様子で言う。

「あのさー……結局、さっきの話がいまいち呑み込めなかったんだけど」

「そんなのキヨテルに聞けばいいじゃない」



すげなく言って、ミキは歩き出す。

「ちよつと待ってって！ 聞いたけどさ、あいつ、変にもつたいぶつた言い方するんだよ。」

だから、こうしてお前に ……」

「しつっこいわね！ だ・か・ら、私たちはアン・ヴェルグ中に？ 爆弾？をしかけてドカーンとぶちかます！ それが任務！ 分かった？」

レンの言葉を遮り、ミキはずいっと顔を寄せて声を荒げる。

「だ・か・ら！ それは分かってんの。仲間を助けるのが目的なのに、なんでそうする必要があんのかって聞いてんだ！」

レンも負けじと声を張り上げ、二人はしばし顔を突き合わせる。

「ふん」ミキはふと顔をそらし、腕を組んでレンを見ようとしなかった。

レンは強引にでもこちらを向かせようと、彼女の左肩に手をかけようとしたが、

「……バカバカしい、アンドロイドのあんたこんなことするなんて」

妙に冷やかな響きのある声が聞こえ、ふと思いとどまった。

「なんだよ、急に」

「訓練中に、あんたは突然倒れた。駆け寄ってみたらさ、まぶたが開いたままで、まるでマネキン人形みたいだった。結局のところ、アンドロイドって電池で動く人形なんだね」

「お前は、そんなオレたちに憧れてたんじゃないのかよ」

鋭く言い返して、レンはミキの両腕に彼女が意図して施してもらったという幾何学的な模様を見る。

「アンドロイドに憧れてるなんて一言も言った覚えはないわ。私が憧れてるのは？ルカ様？よ。あんたじゃない。アンドロイドだったら、誰でもいいなんて思わないで」

そんなこと聞いてない、とレンが言い寄ろうとしたのとちょうど、ミキはすり抜けていくように歩き出していった。

長髪の尾を弾ませて歩く背中には、明らかにこちらを拒む意思がある。

ルカだって自分たちと同じ、彼女の言葉を借りれば？電池で動く人形？なのに。

レンは苛立った手つきで頭をかきむしりながら、踵を返した。

別にどこか行く当てや、暇をつぶせる当てがあるわけじゃない。

ただ、この場はとにかく、彼女と正反対のところへ行きたかったのだ。

\* \* \*

午後6時30分。

ラヴの面々は、高さ10メートルの外壁から細長いロープを使い、壁際に寄せられている小型艇に乗り込んでいた。

今はドームの外が冬であることもあり、陽が落ちるのが早く、また付近が住宅区であることから、ぽつぽつ家々の明りや街灯がある他には辺りは暗く、静まり返っている。

「よっ……と」

石堤に引っかけたフック付きのロープを伝ってレンが降りたのを最後に、船上にメンバー全員の姿が揃う。

施設から車で5分足らずのこの海岸線までは、道行く人に怪しまれないよう、遊び帰りの子供グループを装って徒歩で来た。小型艇は組織の他のメンバーによって予めこのポイントに来ることになっており、子供たちは小型艇に降りていった者から順に作戦用の黒いボディースーツに着替えていった。

「はい、あんたもこれに着替えて」

船尾に降り立ったレンに、ミキがボディースーツを放り投げるようにして手渡す。

床に埋め込まれたLEDライトの青が仄かに船上を照らし上げ、おぼろげながら互いの表情が分かるぐらいには視界が確保されてい

る。

「ちよ、ちよつと待って！」

「あ？ なんだよ今度は」

レンがやにわに上着を脱ごうとするので、ミキは慌てて声をあげた。

静寂を切り裂く声に、船頭で操縦桿を握る坊主頭の男がキッと二人をねめつける。

ミキは「あつ」と手で口元を覆い、近寄ってレンに耳打ちした。

「あのね……ここにはレディが二人もいるんだから、ちよつとは考えなさいよ」

「はあ？ 何言ってるんだか」

レンは要領を得ない様子で言って、再度シャツのホックを緩めにかかった。

ミキはさつと振り返る。その先には、もう一人の？レディ？であるおかつぱ頭の少女が その名を？スアン？という ミキと同じくさつと目をそらした。

レンがアンドロイドだということはこの小型艇に乗っている全員が知っているが、それでもやはり、彼を自分たちと同じ人間として見てしまうのだった。

「よし、出発するぞ」

男は低くしゃがれた声で言い、小型艇の推進力であるホバーエンジンを稼働させる。

このエンジンはエア・グライドの反重力装置の応用であり、これを使って船体を浮かせ、水面を滑るようにして前後進する。そのため駆動音がまったくなく、元から隠密行動を想定して造られた訳ではないにしろ、それをするには適した乗り物だと言えるだろう。

「なあ、ミキ」

縁に腰掛け、船の緩やかな速度に髪をなびかせるミキに、レンは小声で話しかけた。

「なに？」

「オレらつて、これから本当に仲間を助けに行くんだよな……？」  
ミキは「またか……」というようにため息をつく。  
そして質問に答えようとはせず、ただ夜の暗闇にざわめく黒々とした水面を見つめた。  
ふと、彼女の脳裏に先刻の出来事がよみがえる。

\* \* \* \* \*

レンと別れたあと、ミキは自室に戻った。

特にすることもなく、しばらくベッドに寝っ転がっていると（ミキにはルームメイトはいなく、個室が与えられている）、勉強机に置かれたデジタル置時計の表示が午後4時になろうとしていたのに気付いた。

？注射の時間？だ。

ミキはそれを思い出して立ち上がり、机の一番上の引き出しを開ける。

なかから注射器と液体の薬剤が入ったケースを取り、薬剤を注射器に注入。

いざ左腕の静脈に針を刺そうという時、階下からピアノの音が聞こえた。

この下はちょうど音楽室、キヨテルがピアノを弾いているのだろう。

ミキは彼の演奏が見たくなり、注射器を持ったまま部屋を出ていった。

音楽室の鉄扉を開けてみると、先ほどまでくぐもって聞こえていたピアノの音色がより鮮明になってミキの両耳を満たした。

なかに子供たちの姿はなく、キヨテルが個人的に演奏しているらしい。

思えば、こういった何らかの作戦がある時 前は自分たちがホ

ール・フォビアに行かされた時だ　　キヨテルはこうしてピアノを弾くことが多い。

心を落ち着かせるためだろうか。そんなことを考えながら、ミキはピアノの近くに歩んでいって、しばらく彼の奏でる切なくも、時に激しいワルツ調の音楽に耳を澄ませていた。

「いたんですか、ミキ」

演奏を終えるや、ぱちぱちぱちと拍手が聞こえ、キヨテルはミキに気付いた。

「すごい！　プロ並みの腕前だね、キヨテル」

「幼い頃、両親に教え込まれてね。何回か発表会で賞をもらったこともありますよ」

どことなく誇らしげに言いながら、キヨテルは立ち上がる。

口ぶりに変化はないが、いつもの優しい笑顔はない。

「ところで？　注射？　はしたんですか？」

キヨテルは腕時計で時間を確認する。

「うん、これからする。でも、ちょっと訊きたいことがあって」

ミキは左手に持った注射器をキヨテルに見せつつ、二の句を継ぐ。

「？　リン？　に私が書いた手紙を送ったでしょ？　ねえ、今回の爆破つて、メンバーだけじゃなくて、アンドロイドも巻き込むつもりなの？」

「ミキ、そういうことはあまり大声で……」

キヨテルは反射的に入口に目をやり、誰かの目がないか警戒するような素振りを見せる。

見たところ鉄扉やベランダに通ずる窓はどれもがっちり閉められていて、誰かが覗いてそうな気配はない。

彼はこの空間が自分たちだけの密室であることを確認してから、改めて口を開いた。

「ミキ、？　僕の目的？　については追々ちゃんと明かします。それまでは僕を信じて、黙って言う通りに動いてくれますか」

「けど、やっぱり気になって」

「大丈夫、」

キヨテルは不安げなミキの声に言葉をかぶせた。

「僕は君たちの？味方？ですよ。そう、絶対に裏切ることはないね。君がホールフォビアに行ってくれたのも、リンともう一人いるだろうアンドロイドをおびき寄せるために手紙を書いてくれたのも、そしてこれからのことも……僕はとても感謝している。君たちがいてくれるからこそ、僕は僕の目的に邁進できるんです。それを裏切るなんて、僕にはとても出来ませんよ」

言って、キヨテルは優しく微笑みかける。

その表情には嘘偽りなどないように見え、ミキは心から安堵する。「う、うん、分かった。信じるよ」

ミキは遠慮がちに言った。

普段はおてんばな彼女も、自分に優しくしてくれ、信頼してくれるキヨテルの前ではしおらしくなる。

まもなく、キヨテルはズボンの右ポケットから携帯電話を取り出した。

誰かから着信が入っているようだ、彼の手のなかでバイブレーションがなっている。

「……誰からだったの？」

キヨテルは電話に出るや「はい」「ええ、では指定した場所へ」としか言わず、ものの10秒たらずで通話が終了したため、ミキには通話の相手が誰か見当がつかなかった。

大方は組織の幹部級のメンバーだろうと推察するが、

「今回の作戦には、外部の組織が我々に協力してくれることになってるんです。喜んでください。強力な？助っ人？が、あなたたちラヴに手を貸してくれますよ」

とキヨテルの答えは意外なものだった。

「助っ人……？」

「おっと、ミキ、注射を忘れてませんか？」

意図したのか、たまたまなのか、キヨテルは話題を転じた。

「ああ、うん」

キヨテルに身振りで促され、ミキは注射針を左腕の静脈にあてがう。

黒い幾何学的なボディペイントによって目立たなくなっているものの、同じ場所につっすら無数の注射痕がうかがえる。

「……っ」

一瞬の痛みをこらえ、ミキは薬剤を注入していく。

器のなかの液体はみるみるうちに彼女の体内に入っていく、やがて器は空になった。

彼女は注射針を刺したまま、天井をぼうつと見上げてしばらく放心状態。

さながら麻薬中毒者のような有様だが、あながち間違いではない。彼女がしていることは、薬物によって身体的・神経的な能力の向上を図る、すなわち？ドーピング？である。

だから彼女は訓練中に見せたような、アンドロイド顔負けの人間離れた身体能力、瞬時に的を射抜く研ぎ澄まされた感覚を持っているのだ。

これは施設の子供全員ではなく、精鋭部隊であるラヴの面々だけに行われている。

しかし薬物には中毒性があり、隊員の子供たちにはまだ依存症状などは出ていないものの、その身体は薬の副作用によって確実に蝕まれている。

そう、注射痕が増えていくにつれて。

「ね……ねえ……キヨテル？」

意識が混濁しているのか、ミキは呆けた声で話し始める。

「これを、すればさ……わたしは……人間を、やめられるんでしょ……？」

ミキは緩くなった口元からだらしなくよだれをたらし、両膝がぶるぶる笑っている。

「そうです。僕の？言う通り？にしていれば、必ずね」

キヨテルはミキの身体を支え、そして、また優しく微笑みかけた。

\* \* \*

「おい、ミキ！」

耳元で強く言われ、ミキははつと我にかえる。

目の前にレンのいぶかしげな顔があるが、それよりも彼女の目を引くものがあつた。

船の進行方向で豆粒ほどの小さな赤い光が一定間隔で明滅を繰り返している。

ミキはすぐにそれが位置を知らせるサインだと気付いた。

船頭に立つ坊主頭の男は懐中電灯を持ち、サインの方を照らした。白い光の円のなかにいたのは、ボディースーツを着た女性。

スーツの色も、シヨートにしてある髪の毛の色もライトの明りのせいで判然としないが、

彼女は眩しそうな素振りもなく、ただ頑なな表情で小型艇の船尾に立っている。

赤い光は、彼女の足元から発せられているものだった。

「あれが、キヨテルの言っていた？ 助っ人？ ……」

ミキはふと呟く。

女性はおもむろに振り返って操縦桿のところまで歩き、小型艇を発進させた。

どうやら一人で来たらしい。

ラヴの小型艇は懐中電灯を消し、暗闇に明滅する赤いサインライトを追っていく。

もう目と鼻の先に？ グラジオラス？ がある。暗がりにそびえるその都市の形は、ミキたち子供らにファンタジー世界の魔城を彷彿とさせた。

その魔城の中央からは？ 閃光弾？ がいくつも上がり、夜空に煌々と輝きを放つ。



「侵入のサインが出ている。やつら、首尾よくやってくれているよ  
うだな」

坊主頭の男が静かに呟く。

この作戦はグラジオラスの？なか？にいる者との協力がなければ  
成功しない。

あの閃光弾はグラジオラスの内と外で予め打ち合せていた、ミキ  
たちに都市侵入の好機を告げる合図なのだった。

都市の外壁に小型艇を寄せ、例の女性が都市の外周を囲う？鉄条  
網？をよじのぼり、その一か所を焼き切って侵入のための入口を作  
った。

鉄条網を焼き切る際に使われたのは？ヒート・ナイフ？と呼ばれ  
る物で、一見普通のサバイバルナイフだが、柄にあるスイッチを押  
すと刀身が赤みを帯びるほどに高温を持ち、こういった鉄条網、ま  
たはガラスを焼き切るといった用途に使用される。

予定ではスアンがこれを使って鉄条網を焼き切るはずだったが、  
単にそれを行う人間が変わっただけだ。

「いよいよ、ね……」

上から垂らされたロープを掴み、ミキは固唾を呑むように言う。

女性はすでに先行しており、あとはラヴが続くだけである。

リーダーであるミキを先頭、しんがりをレンに、ラヴはグラジオ  
ラスへ潜入を開始する。

トランジスタ西南の都市、グラジオラス。

俗に？監獄都市？と呼ばれるこの都市は、その名の通り、犯罪を犯した者、またはその？危険性のある？者を拘束し、管理する、いわば刑務所が丸々街になった都市だ。

故に他の都市とは橋梁で繋がれておらず、また国家憲法ではなく都市独自のルールが適用されており、本島とは交流を絶った？孤島？で、鉄条網が都市全体を円筒状に覆っている様から？ヘル・イン・ア・セル（網のなかの地獄）？という別称がつけられている。

この島に住まう者は管理者を除けばすなわち？囚人？であり、上下灰色の囚人服の着用を義務づけられている上、犯罪、人格の？危険度？別にLEVEL1～4の区画に分けられ、シエルターハウスに三人一組で生活、労働に服している。

ちなみにこの時代に？死刑？や？刑期？というのはなく、彼らはLEVEL問わず無期限に囚われている。囚人たちがこの島から出るには日々の労働や生活態度で管理者に更生を示し、入獄当初に決められたLEVELを0に下げ、社会復帰の許可が下りるまでは永遠に出られない。

そのためLEVEL1～2の囚人はまだ社会復帰の見込みがあるが、3～4になると相当な努力をしないとLEVELを下げられず、またLEVELを下げることで自体に膨大な時間を要するため、この都市で泣く泣く生きることを承諾した者が、もしくは自ら命を絶つ者が殆どである。

したがってこの都市を囲う鉄条網は脱獄防止ではなく、実際的には囚人が海に飛び込んで入水を凶るのを阻止するために存在していると言っている。

そして？アン・ヴェルグ？とは、簡単にはLEVEL4以上の危険度を持った囚人を収監し、一人一人を独房に閉じ込め、キューブ

による日に一回の食事のほかは一切の自由を禁ずる、いわば刑務所のなかにあるもう一つの刑務所だ。

このようにグラフィオラスは前時代からの名残で？刑務所？とは呼ばれているものの、囚人たちの更生を目的にしているというより、国家の平和を乱す、または乱す危険性のある者を強制的に切り離し、殆どの場合が死ぬまで幽閉しておく都市なのである。

「いよいよだぜ」

「ああ、一発派手に暴れてやるか」

晩の食事を受け取る列に並んだうちの二人が、隣同士そう囁き合った。

列は二つあり、片方はLEVEL1、もう片方がLEVEL2の囚人たちの列で、無精髭の男がLEVEL1、頬にサソリの入れ墨がある男がLEVEL2の列に並んでいる。

二人が食事を受け取る番がやってきた。

「本日は特別に肉料理が供される。」

ランク3のクローン牛に余剰が出たらしいのでな、よく味わって食べることだ」

一人の眼光鋭い刑務官が後ろ手に組んで立ち、一同に聞こえる声で言った。

「ハウスにいる他のやつらも喜んでますよ。毎日毎日キューブ一個だけってんじゃあ、ちよいと楽しみがなさすぎますからねえ」

無精髭の男はにっと微笑んで、かけた前歯を見せた。

刑務官は「早く取るように」と身振りで促すも、その口元は心なしか綻んでいる。

「ああ、だから残念だ」

配膳カートの取っ手に手をかけ、無精髭は意味ありげに呟いた。

「久々の人間らしい食事がさ、おシヤカになっちまうんだから」

刑務官が異変に気付いて身構えるのも束の間、無精髭はカートの上にある膳の乗ったトレーを刑務官に投げつけ、ひるむ彼の顔面めかけ右の拳を浴びせた。

「な、なにをする!？」

まもなく入れ墨の男も加勢し、二人は両腕をかなぐり回して抵抗する刑務官を組み敷き、彼の腰からリボルバー型のピストルを引き抜いた。

「おまえらあ! 準備は出来てるかあああ!？」

ピストルの銃口を高々と夜天に向け、無精髭は声を張り上げる。

他の囚人たちは彼の呼びかけに「うおおお!」と血気あふれる声で呼応する。

そして無精髭は撃鉄を引き、引き金に力を込め、

「シヨータイムの……始まりだあああつ!」

盛大な雄叫びと共に引き金を引いた。

銃口から勢いよく閃光弾が放たれ、それは風切り音を立てながら急上昇、「パンツ!」と花火のような音を立てて真っ白な輝きを夜空にまき散らした。

これは通常、広い範囲を少数の刑務官が監視するにあたって、何か異変が起きたときに仲間にそれを知らせるためのものである。

更に続けて2、3発、他の区からも閃光弾が上がり、これから始まる?囚人たちの反乱?というナイト・カーニバルの開会を高らかに告げた。

シエルターハウスに待機していた他の囚人たちが一斉に飛び出し、所々にいる刑務官に数人がかりで襲いかかる。

ある者は彼らから奪い取った閃光弾をめちゃくちゃに放ち、ある集団は区画を分けるコンクリート塀を作業場から調達したハンマーで破壊し始め、これは事前に用意していたのだろう、なかに火薬を詰め、導火線をつけた小さな紙筒の手投げ爆弾を監視塔めがけて投げ、いくつもの爆発音が轟いた後に火の手が上がり始めた。

日々厳しい秩序の上に成り立っていた監獄都市・グラジオラスは、暴動の始まりからものの10分で火の粉と黒煙が吹き荒れ、囚人たちの怒号が飛び交う無法地帯と化した。

「こ、こんなことをして、お前らに一体何の得がある……?」

先ほどの刑務官が声を振り絞った。

彼は複数の囚人によって地面に押さえつけられ、顔は青あざと腫れがひどく、受けた殴打の凄惨さを物語っている。

「俺らに得？ まあ、明かしちまうと、俺らは？ プタ小屋？ に入れられてるフランススってやつを助けるのに協力したら、ここから出してもらえるって言われてんだ」

余裕からか、無精髭は飄々（ひょうひょう）とこの暴動の真相について説き始めた。

刑務官を見下ろす彼の表情は愉悦と皮肉とに満ちている。

「だけども…… そんなんは俺も含めて誰も期待しちやいねえ。ただここから出れたらラッキーってことで、俺たちはお前らにひと泡ふかせてやりたかったのさ」

言って、無精髭は刑務官から取り上げた警棒を振り上げる。

「こんなふう」

そして刑務官の顔面めがけて一振り。

彼はぴくぴくと痙攣したのち、動かなくなった。

「さて、と……ん？」

向き直った無精髭の目に、ふと夜空を一筋に流れていく物体が映り込んだ。

黒雲の欠片が風に流されてるのかと思ったが、それにしても早すぎる。

「なあ、ありやなんだ……？」

無精髭は近くにいた入れ墨の男に話しかけるが、彼も分からないらしい。

手を額に当ててジエードにし、二人は「ん？」と唸り声を上げて目を凝らす。

その？ エイ？ のような形をした物体は彼らの頭上を横切っていく、？ アン・ヴェルグ？ のある方へと向かっていった。

「あ……」

入れ墨男が何か思い出したように言う。

「分かったのかよ？」

「？エア・グライド？だ。生で見んのは初めてだけだよ」

これで一旦は疑問が晴れたものの、「そんなもんがなんで？」と新たな疑問が生まれ、二人は顔を見合わせるのだった。

\* \* \*

LEVEL 4以上の危険度を持った囚人を収監する施設、アン・ヴェルグ。

俯瞰するとまるで大きなホールケーキの上にもう一つ小さなホールケーキが乗ったような二重の楕円構造であり、外壁は煉瓦造り、窓は独房に位置するところに必要最低数しかなく、その堅牢な外観は見る者に難攻不落の要塞を思わせる。

「とっつ！」

アン・ヴェルグ上空の飛行物体から、何やら威勢よく飛び降りていく一つの影が。

15Mはあろうかという高さから影は建物の屋根にすた、華麗に降り立ち、

「ウロイエロー……仲間を救いにただいま参上ッ！」

決め台詞と共に人差し指で高らかと夜空を突き刺した。

「リン、急ぐ気持ちは分かるが、もっと落ちついて行動してくれ」

エア・グライドをゆっくり下降させ、屋根に着陸してからナナシは言った。

機体はクリプトナス戦で用い、大破したのを改修したものである。「だってさあ、あのグラサンオヤジのところに行ってから軽く3時間は待たされたんだよ！？」もどかしさで頭がおかしくなりそうだったもん。だから、早く行こ？」

「まあ、こういうことに奴が力を貸してくれただけでも上々だろう」リンは駆け寄り、もう一秒だって待ってられないといった様子でナナシの腕を引っ張る。

しかし彼女がエア・グライドをチップに収めようとするので、リンは「ねえ早くう！」といよいよ地団駄を踏み始めてさながらおもちや売り場で駄々をこねる子供のようになった。

「待て。行くと言っても、一体どこへ行けばいいんだ？」

エア・グライドをチップに収納し終えたナナシは、次に辺りを見渡す。

遠くで点々と火の手が上がっている他に光源はなく、またアン・ヴェルグという建物全体が黒一色で塗りつぶされているため、余計に暗く感じる。

自分がどこに足をつけているのかさえも把握し難い。

「この下がアン・ヴェルグってところには間違いないんでしょ？」

ふと、リンが何やら思いついた様子で訊ねた。

「ああ、フィールからもらった地図を頼りに来たんだ。それは間違いない」

「だったら、簡単じゃん」

言って、リンはナナシから離れる。

「ぶっ壊しちゃえばさ、どこだって？入口？になるよっ！」

暗がりによく見えないが、ナナシにはリンがこちらに向かって微笑んだように感じた。

そしてリンはチップをインストール。愛用の金属製ナックルグロブを装着するや、「お、おい！」というナナシの制止には耳も貸さず、

「スーパーウルトラメガトンパンチッ！」

と高らかに必殺技名を叫びながら、自分の足元めがけ右の拳を振り下ろした。

途端に砕け、パズルのピース状となつてばらばらに舞い上がっていく足場の煉瓦。

ナナシはとっさに身構え、崩落が収まったのを感じて防御を解いた。

「リン……？」

もちろん、自分の足場を壊したのだから真つ先に落ちるのは自分である。

なかにある照明だろう、リンの作った穴からは白い光がぼんやり放たれている。

ナナシはもろくなった足元に注意を配りつつ、おそろおそろ穴を覗き込んだ。

すると瓦礫に埋もれたリンが頭をさすりながら顔をあげ、ぐっと親指を立ててみせた。

「まったく、強引なやつだ」

呆れるように言つて、ナナシもなかへと飛び降りる。

「この施設のどこかに？レン？がいるんだな」

ナナシは座り込むリンに右手を差し伸べた。

「うん。絶対、助けてあげなくちゃ」

リンは力のコもつた声で答えて、ナナシの手を握って立ち上がる。

ナナシは何気なく腕時計を見やった。

この時点で、午後7時15分。

ミキラ子供部隊ラヴが施設に到着する、わずか5分前のことだ。

t o b e . . . . . c o n t i n u e d .



&lt;&lt;Chapter 3&&>> (後書き)

次回 予告

Rock・15?ヘル・イン・ア・セル?

乞うご期待

## Rock・15?ヘル・イン・ア・セル?

ラヴの面々はアン・ヴェルグを目の前にしていた。

ゲートにいるはずの刑務官は囚人たちの暴動のため出払っているらしく、詰所のなかには白い蛍光灯の光がまばゆく満ちているだけで誰もいない。

ミキはタッチパネル型の携帯端末を腰のホルダーから取り出し、時刻を確認する。

午後7時20分、到着予定より10分も早い。

というのも、あの謎の助っ人がぐんぐん先行し、遭遇する刑務官や障害物を手際よく排除してくれるので、ラヴは何もせずただ彼女の後についていくだけでよかったからである。

そして現在、彼女はヒート・ナイフで三重になっている鉄条網のゲートを焼き切っているところで、ラヴの面々はそれが終わるのを待っていた。

「なあ、ミキ。お前さ、あいつのこと知ってるか？」

レンが助っ人の背中を指差しながら、ミキに訊ねる。

「知らない。キヨテルは助っ人だって言ってたけど」

「ふーん。なんかさ、あいつは強そうっていうか、人間っぽくないっていうか」

その言葉に、ミキはとっさにレンの顔を見る。

例によってラヴのメンバーは全員がマスクを装着しているため、彼女の表情はうかがい知れないが、恐らく「あんたがそれを言うな」とでも言いたげな表情をしているのだろう。

ちなみにレンはリンと逢った際に一目で自分だと分かるよう、ガスマスクはつけておらず、ついでに言えば他のメンバーのように自動小銃も装備してなく手ぶらである。

これは都市侵入の際、彼が「チップに自分の武器を持っている」と言ったためだ。

「あ……終わつたみたいだぞ」

助つ人は自分の背丈より少し大きめの長方形に鉄条網を焼き切り、ラヴを振り返ることなくさっさと進んでいた。

ミキが歩き出したのをきっかけに、他の子供たちもその後を追う。ゲートをくぐり、アン・ヴェルグの敷地内に入り込むと、いよいよその要塞然とした建物が間近にそびえ、ラヴの面々は圧倒される思いだった。

脱獄者が出るなどとは想定されていないらしく、建物の外周を照らすサーチライトなどはなく、アン・ヴェルグはまるで寝息をたてる巨大な怪獣のように宵闇に溶け込んでいる。

ラヴは怪獣を起こさぬよう足音を殺し、かつ迅速に動いて建物の入口である大きな鉄扉の前までやってきた。

これはさすがにヒート・ナイフでは歯が立たない。

そこで助つ人は扉横の煉瓦の壁に、ポーチから取り出した？ある物？を張りつけていた。

そして適当に距離を置き、ポーチから今度は細長い円筒状の棒を取り出す。

「あ、危ない、みんな離れて！」

ミキが助つ人のしようとしていることが何なのか勘づき、メンバーに退避を促すのも束の間、盛大な爆発音が辺りに轟き渡った。

「まったく……やるんならやるって言ってからやりなさいよね」

とつさに身体ごと地面に伏せたミキが、火薬の匂いと煙が立ち込めるなか顔を上げる。

見てみると壁に穴が開いており、助つ人の姿はもうなかった。

彼女が壁に張りつけたある物とは、？チューニング・ボム（C・B）？と呼ばれる小型爆弾で、その名の通り壁や地面に張りつけ、起爆スイッチを押すと爆発する仕組みである。

これはこれからの作戦でラヴも使用することになるが、そちらはより大型の特別製であり、今のように壁に穴を開けるぐらいならペットボトルのふた程度のサイズで済む。

「みんな大丈夫？ 耳とか痛くない？」

リーダーらしく、ミキは小声でメンバーに呼びかける。

ヘルメット型のガスマスクを装着した甲斐があったのか、それが耳栓代わりになったらしく、みな耳は元より身体のどこにも異常はないようで、各々うなづいてみせた。

「それじゃ、これから潜入していくわよ。みんな決められたペアに別れて」

リーダーを中心にメンバーが円陣を組み、ミキは潜入前に作戦の確認をする。

「ちよつとあんたっ！ 勝手に行かないでっばー！」

「だって早くいかないでリンが！」

「あんたは私と行くのっ！ ちよつと話を聞いてったらー！」

さつさと穴に向かおうとするレンの腕を引っ張り、ミキは無理やり円陣に加える。

彼は1秒でも早くリンを助け出したいのか、ミキが話している間中はあちこち目をやって落ちつかなかった。

「……いいわね？ 作戦、開始」

リーダーの力強く、そしてほんのわずか緊張のうかがえる声が作戦開始を告げた。

潜入の第一陣はスアンと少年のペアで、施設の二階にC・Bを設置する。

第二陣は一階にC・Bを設置、ミキとレンは一階の別のポイントにC・Bを設置する手筈だ。

「なかに入ったら、あんたはリンって子を探しに行っていていいわよ」

先の二組が潜入し、二人の番がやってきた。

ミキは穴の縁に手をかけ、振り返って彼に言う。

「ほんとか！？ でも、さつきは『あんたは私と行く』とか言ってたのに」

「あれはみんなの前だからよ。C・Bを設置するだけだから一人で出来るし、それに……」

「それに？」

「別に、なんでもない」

結局言わないまま、ミキはなかへと入って行ってしまった。

何を言おうとしたのか気になったものの、レンはリンを助けることに頭が一杯で、なかへ入ってリノリウムの廊下に降り立つ頃にはすっかり忘れていた。

そして勇んで歩き出そうとした瞬間、突如、彼の視界は暗闇に包まれた。

「お、おい、ミキー！？ これどうなってんだ！？」

レンは慌ててミキを呼ぶも、空間に反響する自分の声が返ってくるだけだった。

実はラヴとは別の部隊がグラジオラス中の電力を断ち、そのためアン・ヴェルグの照明も全て消えたのである。

これは管理側の目を暗ますのと、監視カメラに自分たちの姿が記録されないようにするため予め組織内で打ち合わせされていたことで、ミキもつい先ほど「暗くなったら、銃のライトで照らしながら進むように」と言っていたのだが、レンは見事に聞いていなかった。仮に聞いていたとしても、レンは自動小銃を持っていないので同じことだが。

「しょーがねえなあ……リンー！？ いたら返事してくれー！」

レンは探し相手の名を叫びながら闇雲に走り出し、「あたっ！？」と早速どこかの壁に勢いよく額をぶつけるのだった。

\* \* \*

「な、なに！？ 急に暗くなっちゃった……」

暗闇のなか、リンはきよろきよろと辺りを見渡す。

すぐ傍らにナナシがいるのだが、その姿が視認出来ないほどの暗さである。

「……静かに。足音が聞こえる」

「え？」

ナナシは慌てふためくりんを鎮め、暗闇に耳をすませる。つい先ほど、階下から爆発音のような音がくぐもって聞こえてきた。

何が起こったのか考える間もなく、見計らったかのような直後の暗転。

「畏かもしれんぞ」

ナナシの脳裏にのき爺の言葉が過ぎる。フィールも似たようなことを言っていた。

こうして警戒心を巡らす間にも、足音は徐々に大きくなってきている。

何者かがこちらに接近しているのだ。

それがレンであるといいと願いつつ、ナナシはポケットのなかのチップに手をかける。

「レン、レンなの！？ 返事をして！」

二人の前の暗闇に、懐中電灯の明かりだろうか、直径の小さい白い円の光が見えだした。

それは緩やかな曲がり角の向こうから手探りするように壁を伝っていき、二人を向いた。

白い光は暗闇に慣れた二人の目に鋭く突き刺さり、二人は思わず腕で顔を覆ってしまふ。

「レン……なの？」

リンはゆっくりまぶたを開いていきながら、今度は心細げに訊ねる。

相手がレンでないかと内心分かったからだ。彼なら一度目の問いで答えてくれたはず。

そして相手の顔が光源のすぐ横に見えたことで、その思いは確信へと変わる。

「あ、あなたは……」

「……？ ネル？ か？」

相手の正体に気付いたタイミングが重なり、リンの問いかけに偶然ナナシが答える形になった。

ネルは自動小銃の照準器を覗き込む体勢で、二人に銃口を向けている。

懐中電灯だと思われた光は、銃身の上につけられたピンライトだった。

「リン……お前は、一人でレンを探しに行け」

「な、なに言ってるの？」

「はやくっ！」

直後、けたたましい銃声が暗闇に鳴り響く。

ナナシはとつさにリンの身体を抱きかかえて壁際に転がり込む。

「どうして私たちを撃つの！？ あなたって、前に橋の上で逢った……」

その叫び声もすぐに次の銃声に掻き消された。

「リン！ あいつは私たちを殺すつもりだ。戦闘は私に任せて、お前は行け」

「で、でも……」

「目的を忘れるな。お前はレンを助けに来たんだろう？」

暗がりのなか、ナナシの声が目と鼻の先で聞こえる。

銃弾を回避するために地面に伏せたことで、ナナシがリンを組み敷く形になっていた。

リンは渋っていたが、こうしている間にも銃弾が飛んでくるかもしれない。

「絶対後からついてきてね！」

リンは釘を刺すように言い返し、ナナシを退けて走り出した。

すかさず背後で銃声が鳴り、ナナシの安否が思われたが……振り返らなかつた。

「銃に刀じゃ……分が悪いか」

一方、ナナシは立ち上がりざま銃弾を回避し、反撃に移ろうとしていた。

ズボンのポケットからチップを取り出し、その動作の流れのまま  
インストール。

ほとばしる白い電光の向こうから銃弾が飛んでくる。何発かがパ  
ーカーの裾、頬をかすめていったが、ナナシはひるむことなく相手  
に銃口を向けた。

彼女がインストールしたのは？クロガネ？ではなく、？黒い拳銃  
？だったのである。

自動小銃の隙間なく連なる銃声、拳銃の断続的で、かつ一発一発  
が重い銃声が共鳴し合い、そして硝煙が静かに漂う頃には、「がち  
や」武器を取り落としたのはネルだった。

ナナシも右肩、左の腿を貫かれているが、相手のダメージの方が  
深刻であるらしい。

「到着早々鉢合わせるとは、まるで私たちがここに来ることを知っ  
ていたみたいだな」

しかし、ネルは倒れてはいなかった。

主の足元に落ちた自動小銃のピンライトが地面を照らし、うつす  
らと暗闇に佇むネルの輪郭を浮かび上がらせている。

「この部分を銃弾が射抜いたのかは分からないが、恐らく手首や  
腕に命中したのだろう。」

「フィールから聞いた……お前は、W・A・Fとかいう組織に？盗  
まれた？のだと。お前が私たちを狙う理由はなんだ？ いずれにし  
る、お前がここにいるという時点で、W・A・Fが関わっているの  
は確かだな」

ネルに話を聞こうとする素振りはなく、足元の自動小銃を拾おう  
としている。

その動きに気付いたナナシはとっさに飛び出し、自動小銃を拾い  
上げた手を回し蹴りで一蹴。自動小銃は地面に転がっていき、ナナ  
シは蹴った足を逆再生して戻すかのごとくネルの顔面にかかとを浴  
びせた。

「あの時のようにはいかないぞ、ネル」



ネルの身体が大きく後ずさる手ごたえ。

続けて連撃を加えたいところだが、ピンライトの光が届かない暗闇のなかで相手の動きは把握し難く、それにネルはもうナナシの目の前にはいなかった。

「……っ！」

背後に気配を感じて身を捻り、赤みを帯びた刃が空を突く。

ネルはそのまま刃を左になぎ払い、更に逆袈裟、袈裟斬りと続けて攻撃する。

ナナシは名前を知らないが、ネルが振るうは？ ヒート・ナイフ？ だ。

ネルはナナシの攻撃を受けて後ずさった直後、近くの壁を蹴ってナナシの頭上を飛び越え、その隙にヒート・ナイフを点火、反撃に移ったのである。

ナナシは寸でのところで刃をかわしていくも、ネルの猛攻に銃を撃つ隙はなく、いよいよ壁に背がついてしまった。

あの時の、脳天に銃弾を撃ち込まれた寸前の記憶がよみがえる。

そしてネルは彼女の額めがけて突きを繰り出した

「……言っただけだ、あの時のようにはいかない」と

ヒート・ナイフは壁に突き刺さり、ナナシはネルの腹に銃口をあてがう。

ひと際大きな銃声が響く。腹に風穴が開いただろうネルは、よろよろと後ずさった。

続けてナナシは銃口を 視認出来ないの？ 感覚？ でだ ネルの頭、額に向け、引き金を引こうとした瞬間、ネルはヒート・ナイフを投げつけた。

拳銃がナナシの手から勢いよく弾き出される。

こちらの姿が見えていなければ出来ない芸当だ。

その目は暗闇のなかでも利くのかとナナシがいぶかしんでいるのも束の間、ネルの腰辺りからオレンジがかった赤色がうつすら浮かび上がってきた。

二本目のヒート・ナイフである。

武器を失ったのなら、クロガネがあるこちらに分があると思っただけに、ナナシは落胆というより半ば呆れた。

「まだ戦えるのか……しぶとい奴だ」

言って、ナナシはクロガネをインストール。

白い電光のほとばしりが、？第2ラウンド？の開始を告げた。

t o Chapter 2

ミキは携帯端末で施設の俯瞰図を確認しながら、一人暗い廊下を進んでいた。

独房にいる囚人たちが異変に気付き、「おい！早く助けてくれ」だの口々にわめき散らし、なかには「この世の終わりだあ！」と半狂乱の者もいたが、ミキは全て無視した。

アン・ヴェルグの構造は至ってシンプル。

外観がホールケーキのような楕円なら、内部も同じで、建物を支える巨大な柱（二階へ続く螺旋階段を内臓）を中心に空間が一周し、壁伝いに等間隔で独房が配置されている。

その数は2階と併せて20戸。

施設が巨大である割に独房数が少ないのは、そもそもLEVEL 4以上の認定を受ける囚人が稀であるため、今でも5戸の余りがあるぐらいだ。

ちなみに囚人らは外出を完全に禁じられており、日に一度栄養価の高いキューブを食べて運動しないため、ここにいる期間が長い者ほど？肥えて？いる。

そのためアン・ヴェルグは他の囚人たちの間で？ブタ小屋？と呼ばれているのだ。

「そこにいるの、だれ？」

ミキは前方にうごめくものを見つけ、自動小銃のピンライトを向けた。

小太りな男が眩しそうに立ち竦んでいる。服装から察するに囚人のようだ。

「オ、オレだよ、オレ！」

「オレって言われても、わたしはあんたなんか知らないもん」

「お前ら？ヴァノーパス？のやつらだろ？ フランススを助けに来たんだな？」

「いまのわたしたちは？スーパー・ノヴァ？。そこ間違えないでよね」

男は警戒を解いて、「まあどっちでもいいけど」と気さくに言いながら歩み寄る。

「どうしてあんたみたいのがいるワケ？　ここの囚人ってふうでもなさそうだし」

「ああ、オレはLEVEL2だ。たまーにだけだな、オレたちがブタ小屋の連中に食事とか、他に雑貨品を届けたりするのさ。もちろん、シャバに出るためのポイント稼ぎだけだな」

「なるほどね……あんたみたいなのが独房にいるメンバーと、外のわたしたちとを繋げてたワケか。やけに情報筒抜けだなんて思ってたら、そういうカラクリだったんだ」

男はその通りと言うようにうなづく。

「お前らが来るのを待つてたんだ。フランススの独房はすぐこの先に……」

「ねえ、あんた、？カルミダ？って男の独房がどこにあるか知らない？　ここに出入りしてるんなら、知ってるでしょ？」

ミキは男の言葉を遮る。

その声について今までの飄々さはなく、どこか殺気立っていた。

「カルミダ？　あの女囚人を？やって？ここに入れられたやつか？」

「……そいつの独房の場所、教えて欲しいんだけど」

ミキの声音はいよいよ脅迫めいてくる。

それもガスマスクの顔で言うので、男は余計に恐怖を感じた。

「カルミダの独房はフランススの独房の二つ先だ。あいつも組織の一員なのか？」

「ぜんっぜん違うわ。あんなクソツタレが組織のメンバーなわけないでしょ」

ミキは嫌味つたらしく言い、おもむろに歩き出す。

「あ、おい！　カルミダのところへ行くのか？　あいつに何の用があるってんだよ」

「……？殺す？のよ」

ミキを追いかけようとした男の足がすくんでしまう。その振り向きざまの一言に、彼は突然に心臓を射抜かれるような衝撃を受けたのだ。

「こ、殺す……？ お前がか？」

「あんたには関係ない。フランスのところには、じきにわたしの仲間がやってくるわ」

ミキと共に、男の前から光源が遠ざかっていく。

そして緩い曲がり角へ消え、男を再び深い暗闇が包む。

後を追うことも出来たが、？カルミダを殺す？、その言葉の底に潜む彼女の憎悪、悲しみが、男を暗闇のなかに留まらせたのだった。何かことが起こらぬうちに、と彼はあっさりフランスへの協力を捨て、自己保身の足が出口へと伸びていった。

\* \* \* \*

母親とはいつも、面会室のなかでしか会えなかった。

上下灰色の囚人服、ぼさぼさに伸び放題の茶色髪に、吸い込まれそうな黒い瞳。

母親は？<sup>リーパー</sup>Reaper？だった。

「ママー、わたしね、いま、おともだちがたくさんできたの」  
陽気な呼びかけに、母親は口元に手を当てて微笑んでみせる。

やせこけた頬、薄赤い唇、上品な仕草とは裏腹に母親は憔悴していた。

「サン・パライソの児童施設で、うまくやってるのね。お母さん安心したわ」

「うんっ！ センサーも、ともだちも、みんなやさしいのっ！」  
二人の時間はあっという間に過ぎていく。

これまでであったことの三分の一も話せないうちに、背後の刑務官が面会終了を告げる。

友達と鬼ごっこをした、おままごとをした、自分の誕生日をみんなが祝ってくれた、話したいことは山ほどあるのに、少女にはどうして、母親との会話に時間制限があるのか不思議だった。そしてどうして、ガラス越しに話さなくてはいけないのかも。

「8歳のお誕生日おめでとう、ミキ」

去り際、母親がガラス越しに手を振った。

少女はうれしくなって元気一杯に手を振り返す。

母親の優しい笑顔、言葉が、少女には最高の誕生日プレゼントになった。

それから一週間後か、もっと早かったか、正確には覚えていない。母親が死んだ。

優しい先生は「病気で亡くなった」と言っていたが、のちに聞いた話では、母親は？自殺？したらしかった。

同じハウスの囚人が労働を終えて帰ってくると、首を吊った彼女の身体が天井にぶら下がっていたという。

あの笑顔も、言葉も、みんな嘘だったのか。

ミキは一度確信したはずの愛が？裏切られた？気がしてならなかった。

同時に母親を失った深い喪失感、絶望が、少女の心を闇色にむしばんでいった。

\* \* \* \*

ミキの足音は段々にゆっくりとなり、やがて止まった。

ミキは鉄格子のなかにピンライトを向ける。

壁に深々と背もたれた男が、別段驚くわけでもなくこちらに視線を寄こした。

「カルミダ」

ミキは「やっと見つけた」というように、小さく呟いた。

次にポーチから円盤型の光源装置を取り出し、鉄格子の間から部屋の壁に取り付ける。

そしておもむろに手をガスマスクにかけ……後ろ髪を振り乱すと共に、その顔を光源装置のダークブルーに浮かび上がらせた。

そこらに投げられたガスマスクがこん、こんと転って音を立て、場はまた静まり返る。

「……誰？」

カルミダ、と呟かれた男は低すぎでもなく、また高すぎでもない中音域の声を発する。

標準的な体型、髪の毛はウェーブがかっており、両足を地面に伸ばしてだらしなく座り込んでいる割に、どこか相手を見下した高圧的な雰囲気身をまとっている。

それがダークブルーにぼんやり照らされ、ミキにはより男が闇の住人めいて見えた。

「ミキって名前、聞いたことない？」

「なんだやぶからばうに……知らねえなあ」

怒りのこもった瞳でこちらをねめつける少女の顔に、男は見覚えがないようだった。

「じゃあ、？アンジエ？って名前には？」

一瞬の沈黙をはさみ、「くっくっ……」男はやがて、笑いだした。「もしかして、お前あの女の娘か？」

嘲笑を浮かべながら、男はゆらりと立ち上がる。

ミキは答えず、ふてぶてしく歩み寄ってくる男の顔をにらみつけたままだ。

「証明してみる」

鉄格子越しミキの前に立ち、男はミキの片目を指差した。

ミキは静かに左手を持って行き、瞳に入れていたカラーコンタクトを取った。

すると普段、あずき色であるはずの彼女の瞳は？黒？に変わった。ダークブルーの光の中でもはつきりと分かる完全な黒。

男はうすら笑い、蛇口がひねられたかのごとく「あっはっはっは！」盛大に声を上げた。

「お前、Reaperか！ 違いねえ、あの女の娘だ！」

ミキは狂ったように笑う男を前に、ただ冷然と突っ立っている。

「あの女の娘……ってこたあ、なんだよ、？俺の娘？ってことじゃねーか……なあ」

ミキは答えず、静かに自動小銃の引き金にかけた指に力を込める。ただし、銃口はまだ床を向いたままだ。

「それで？ 俺に何の用だ？ パパに会いたくなつたのか？ ガスマスクをつけて？ そんな物騒なもんを持つてか？ 俺あは幸せもんだア……こんなに愛されてるんだからなあ」

「……わたしは殺しに来たのよ、あんたを」  
その声にはどれほどの高温でも温めようのない冷気がこもっている。

「なーんでそんなことされなくちゃいけないのかねエ……もう死んでるようなもんよ？ このブタ小屋じゃ食っちゃ寝る、ただそれだけ。飼い殺しもいいトコだぜ」

「それは自業自得でしょ。あんたが、あんたが、わたしのママを、」  
「わたしのママを、……どうしたって？」

言い淀んで顔をそむけるミキに、男は半ば愉快げに詰問する。

「言わなくたって、あんたが一番分かっているはずでしょ！」

あんたが、わたしのママを殺したのよっ！」

ミキは声を荒げ、自動小銃の銃口を勢いよく突きつけた。

「おっと……まあ、こうなるのもしゃーねえか」

男は途端にしおらしくなり、両手をあげた。

あまりに呆気なく観念するので、ミキは面食らってしまう。

「なんとなくよ、お前の気持ちかわかる。自分の生い立ちを呪ってるんだろ？ そりゃそうだ。両親共に囚人、しかもお前は？強姦？で生まれちまつた、いうなりや望まれない命。

あいつを犯した俺を殺したいって感情は分かるし、筋も通ってる。



お前には俺を殺す資格があんだよ」

男は次第に俯き加減になっていく。

「……そうか、俺はここで死ぬのか。仕方ねえ、自分が今までしてきたことのツケが回ってきたんだ。だから、最期の言葉ってやつを言わせてくれ。こんなろくでもない父親で、？ミキ？、本当にすまなかった」

そして男は黙り込み、ただ肅々と最期の時が訪れるのを待つ。

ミキは銃口を向けていながら、ためらっていた。

頭の中で？ミキ？と呼ぶ男の声が繰り返し反響している。

腹が立った。一瞬でもうれしいと感じてしまった自分の心が。

それで引き金が引けず、ただしどろもどろしている今の自分が。

目の前にいるのは、間違いなく、自分の父親だ。初めて逢ったのに、どうしてか、その実感ばかりがふつふつ湧きあがり、強迫観念となつて心をがんじがらめにする。

もしかしたら、話せば分かり合えるのかもしれない、仲良くできるのかもしれない。

それはミキが確かに思考したことではなく、？感情？……すなわち、両親の愛を得たいという彼女の潜在的な期待、意識が揺り起こされたのだった。

ミキは銃口を下げ、「ねえ」と無意識のうちに言葉がでかけた。

「……なんつてな。俺が、そんなこと言つとでも思ったか？」

「え？」ミキは思わず閉口する。

「俺がお前のママを殺したア……？ あいつ、自殺したんじゃないかっただけ？」

男の口ぶりは一変し、より毒々しく、相手をそしるような響きを持ち始めた。

「仮に、あいつが俺に無理やり犯されたのがショックで自殺したにしてもだ。お前が生まれて7、8年だっけか？ よく知らんが、まあ、あいつはそれぐらい生きてわけた。

俺の所為で自殺したにしちゃ、あんまりにも遅すぎるんじゃないのかねエ……」

男は身体をぶらぶら揺らしながら、悪びれた様子もなく言葉を連ねる。

そして不意に、鉄格子の間からミキの面前にその悪魔めいた顔を突き出してみせた。

「きつと、あいつはお前のことでアレコレ悩んでたんだよ。聞き分けの悪い子、とかア、望まれてもいないの生まれて、こんなにはしゃいでるなんて、それも獄中にいる自分を尻目に。とかさア……あいつにとって負担でしかなかったんだよ、お前の存在は」

男はミキの顔を舌舐めずりするかのごとく、したり顔であれこれ喋くった。

それらは男の身勝手な妄想に過ぎない。

しかし、ミキのなかで何かが……決壊し始めていた。

「分かるか？ お前の母親が死んだのは、自殺したのは、」  
自動小銃を持つ両手が激しくわななく。

鞭に引っ叩かれるように早鐘を打つ心臓、呼吸の間隔が著しく短くなり、乱れ、冷や汗があふれ出し、立っているのも、ここに存在しているのも困難なほど、意識が大きく歪む。

絶対に、絶対に言われたくない。

あの言葉の続きを。お前の母親が自殺したのは

「お前の？ せい？ なんだよ、ミキ」

「うあああああああああああああああ！」

絶叫が無数の弾丸となって暗闇にほとばしった。

何秒、何十秒、いや、何分、引き金を引き続けていたのか分からない。

ただ全ての弾丸を使い果たし、なおも引き金を引く自分に気付いた時には……ダークブルーの辺り一面に血しぶきが広がり、返り血が我が身を汚して、そして男は、ほとんど原形を失って床に倒れていた。

「ああ……ああ……」

ミキは呻き声をもらしながら、ゆっくりと崩れ落ちていく。頭のなかは真っ白だった。しかし一つ、大いに自覚していることがある。

自分は、たった今、実の父親を殺したのだ。

「ミキ……ミキか？　そこにいるのは」

レンだった。

リンを探して一階を周回していた彼は、ミキの絶叫と銃声を聞いて駆けつけたらしい。

「さっきの叫び声はやっぱりお前だったんだな……これ、どうなってるんだよ」

独房のなかでヒトが横たわっている。

レンには一見、内臓物を露わにしたアンドロイドの死体に見えたが、すぐに人間なのだと思いなおした。

辺りにぶちまけられている液体は血だ。

光源装置によって青々としているのが不気味である。

「……お前がやったのか？」

ミキは地べたに座り込み、両手で頭を抱えて何事か呪詛のように呟き続けている。

ショックなことがあって？　へん？　になってしまったのだろう、そしてそのショックなこととは、この鉄格子の奥に倒れているニンゲンと関係がある……とレンはすぐ察しがついた。

こうなると言葉では解決できないと判断し、レンは足元に落ちていた自動小銃を拾い、ミキの左腕を引っ張って強引にでも立たせようとした。

「レーーーーンッ！　いるのー？　いたら返事してー！」

ふと、そう遠くないところから聞き馴染みのある声が聞こえてきた。

レンは驚いて、声ができる方を注視する。

駆け足のこだまが次第にこちらへ近づいてくる。

まさか、リンが？ 本当に？  
そして。

「レ……ン？」 「リン？」  
ほとんど同時に声がこぼれ、二人は目を丸くして互いを見つめ合  
う。

何もなければこのまま、二人は恒例儀式だったハイタッチをして、  
待ちに待った再会を喜びあうはずだった。

「レン……あなた、何してんの？」

しかし、リンは元気に駆けだすことはなく、

「その子は誰？」

高らかと右手を振り上げることもなく、

「ニンゲンが死んでる……！？ これ、これ！ あなたがやったの  
！？」

ただただ、失望と恐怖が入り混じった表情で、悲鳴じみた声を上げ  
るのだった。

「ち、違う！ オレがやったんじゃない……」

レンはリンの視線が独房の死体と、自分が手にしている自動小銃  
に向けられているのに気付き、それを慌てて手放した。

「本当にそう言い切れるの！？ あなた、本当にレン……？」

「本当だって！ 信じてくれないのかよ！」

リンは興奮のあまりレンの胸倉を掴み、鼻先が触れあうまでに顔  
を近づけた。

「離してよ。わたしの、？ 仲間？ なんだから」

「あなたの……なか、ま？」

強い放心状態であったミキがゆらめく影のように立ち上がり、冷  
たい口調で言い放つ。

そして足元に落ちていた自動小銃の銃身を掴みあげるや、銃尻を  
バットの芯に仕立てて振り向きざま力一杯にリンを殴りつけた。

リンはその一撃を左頬に受け、弾かれるように後ずさってしまふ。

「リン！？ おい、何やってんだよミキ！」

「カッタイわね……アンドロイドなんだ、やっぱり」

彼女のなかでどんな変移があったのか、とにかく彼女の口調は普段通りになっていた。

しかしその目は限りなく虚ろで、横から見ても明らかかな？異常？がうかがえる。

それはレンが彼女を制しようとする手を思わず引つ込めてしまうほどだった。

「なら……これでどう？」

言っ、ミキは腰に携えていた？手榴弾？を取り出し、ピンを抜いてリンに投げた。

この至近距離でそれを使えば投げた本人も爆風に巻き込まれる。

ミキは一見平静を取り戻したようで、頭は簡単な判断も出来ないほど錯乱していた。

とっさに危険を察知したレンが、慌ててミキに飛びかかって地面に伏せる。

「レン……」

自分ではなく、真っ先に誰とも分からない少女をかばうレン。

その光景を目の当たりにし、寂しいとも、嫉妬ともつかない感情に駆られるうち、リンは防御の構えを取ることさえ忘れていた。

その気になれば相手に手榴弾を蹴り返すなりなんなり出来たが…

…無論、しなかった。

閃光が走り、耳をつんざく爆音が空間を激しく揺さぶる。

レンは無意識のうちにミキの上に覆いかぶさり、爆炎も衝撃もその背中に受け止めた。

続いて壁や天井が崩落する音がし、それが止むと一変、辺りは異様に静まり返った。

レンは刃物で切り裂かれたような痛みを背中に感じつつ、ゆっくりとまぶたを開ける。

「リン……リイイイイイイン！」

その名前が自ずと叫びになって口からあふれ出した。

「おまえ、おまえ……っ！ ふざけてんじゃねえぞ！」  
「だって……だって……」

レンは組み敷いたミキの顔面に湧きあがるままの怒りをぶつける。独房のなかにあった光源装置は無事だったようで、辺りに光はあるものの、煙と塵とが覆って視界は不明瞭、せいぜい目と鼻の先にあるミキの顔がつつすら見えるぐらいだった。

その顔は涙でぐちゃぐちゃで、しきりに嗚咽が交っている。

レンは勢いよく拳を振り上げるも、「くっ……」ミキを殴ることは出来なかった。

「ごめん……なさい……あなたの友達に、わたし、大変なことしちゃった……」

「謝って済む話かよ！ 早く、リンのところへ行かないと……っ！」  
立ち上がるうとするレンを、ミキは一身に抱き寄せる。

「ねえ、助けてよ、レン、わたしを助けてよ、壊れそうなの！」

「なに言ってるんだ？ おまえ、メチャクチャだぞ！？」

「大丈夫だよ、リンって子はアンドロイドでしょう？ 爆発なんかで死んだりしない。でも、わたしたち人間は違う！ もうここが爆発するかもしれないの、早く逃げなきゃ！」

支離滅裂なミキの物言いに、ふとレンの脳裏に今回の作戦内容が過ぎる。

施設に潜入してからどれぐらいの時間が経っただろうか。

今ごろはもう施設の各所に散ったメンバーがC・Bを設置し終わっていてもおかしくはない。

キヨテルがラヴもろとも施設を吹き飛ばす訳はないと思うが、そもそも爆破の目的さえ明らかにされていないのだ、どうなるかは分からない。

そしてミキはひたすら、恐怖から逃れようと必死に母親にすがりつく子供のように力一杯レンを抱きしめている。

レンは舌打ちした。怒り心頭なものもあって、一体何をすべきか混乱したからだ。

そのなかでもやはり強く思われるのはリンの安否。

レンはミキを突き離し、リンの下へ走っていった。

「こんなのってありかよ……ちくしょう、ちくしょう！」

こともあろうに、リンへの道を崩落した瓦礫が塞いでいた。

レンは狂ったように瓦礫のなかに手を突っ込んでそれを取り除こうとする。

「むだよ、何をしたってむだ！ 早く、早く逃げようよ！」

「お前のせいでこうなってるんだろ！」

声を荒げるレンに、ミキは背後から再び抱きしめにかかる。

「ねえ、わたしが死んでもいいの？」

その言葉に、彼女を振りほどこうとしていた彼の拳動が止まった。「リンは悲しむよ。だって、あんたが人間を殺したと勘違いした時、すぐ怒ってたじゃない。わたしを死なせたらきつと怒るよ、嫌われるよ。だから、わたしを助けなさいよ」

「歩けるんだろ？ お前は一人で行けばいい！」

「無理だよ……あんたを残して行けないよ。それにね、わたし、心が壊れちゃったかもしれない。一人じゃ歩けないの。ねえ、助けて、わたしを助けてよ！ あいつと、あんな奴と同じところで死なせないでっ！」

不条理な彼女の物言いに、レンはとうとう堪忍袋の緒を切らして振り返った。

そして殴りかかろうとした刹那、ミキはその唇を、レンの唇にかさねた。

完全に虚を突かれ、レンの拳は空中で止まった。

「ねえ……お願い、わたしを、助けてよ」

彼女の瞳は深く煙ったダークブルーのなかで弱々しく潤んでいた。レンは同情したわけでも、ましてや口づけされたことをうれしいなんて感じていない。

そればかりか空中で止まったこの拳を突き動かして、彼女の顔面を殴りつけたい気分だ。

しかし、何故か、そう出来ない。彼女を放っておけない。  
レンは泣く泣く拳を下ろし、歯ぎしりが鳴るほど奥歯を強く噛みしめながら、

「リン！ 聞こえてるか！ オレの声が聞こえてるか！？」  
ありったけの声で叫んだ。

「この建物はもうすぐ爆発する！ ちょっと時間はかかるかもしれないけど、必ず、絶対に、そっちに行く！ リンを助けに行く！ だから、ほんの少しだけ、待っていてくれ！」

レンはそう言うなり、ミキの腕を引っ張って走り出した。

ミキを施設の外へ連れ出したのち、別のルートからリンのところへ向かう魂胆だ。

もはや苦肉の策である。

しかし二人を助けるためには、そうする他に手段が思い浮かばなかった。



男は暗闇に息を潜めていた。  
しかし感じるのは不安や恐怖の類ではない、むしろ歓喜である。

ヴァノーパース……いや、現在は？スーパー・ノヴァ？か。  
彼らとこの囚人たちが首尾よくやってきているようで、私は  
まもなくここから出られるだろう。

その暁には組織を再編成し、4日後に迫った？復興式典？の会場  
にテロを仕掛けるのだ。

国家、引いてはトランジスタの国民たちは今や？Reaper？  
の存在を忘れかけている。

何故なら奴らは瞳の色を変え、正体を隠し、うまく日常に溶け込  
んでいるからだ。

過去にあれだけの大罪を犯したにも関わらず、日々笑い、泣き、  
のうのうと生きている。

あの死神どもにこれ以上人間のような振る舞いを許していいのか  
？

否、断固として？狩り？である。死神は闇を住処としていてこそ  
死神。

誤って光のなかに出てきてしまったのなら、ドームの外という闇  
に葬り帰してやるまで。

そのためにはまず、国民のReaperに対する怒り、憎悪を再  
び奮い起さなければならぬ。

国民の注目が一点に集まる復興式典はまさに格好の舞台。そこで  
我々スーパーノヴァは光の権化となりて群衆に呼びかけるのだ、「  
Reaperは徹底排除するべきである！」と。「同胞を失った悲  
しみを思い出せ！」と。「死神にこれ以上心を許すな！」と。

満腔まんこうの怒りを持って、いざ、我々は地の底から再び決起するのだ。

その瞬間は近い。足音が聞こえる、ほら、助けがやってきたようだ

「遅かったな。さあ、私を早くこの暗い穴倉から出してくれたまえ」  
しかし、ガスマスクの二人は銃口とピンライトを向けたまま、呼びかけに応じない。

何故かといぶかしんでいると、一人がタッチパネル型の携帯端末を寄こしてきた。

男はその携帯端末が？通話中？になっていることに気付き、ゆっくりと耳にあてがった。

「同志、？アレツチエド・フランシス？……調子はいかがですか？」  
「キヨテルか？これは一体、何の戯れかね」

「敢えて言うのなら、あなたに？お別れ？を告げに来たんですよ」  
キヨテルの何気ない物言いに、フランシスの表情が一変する。

「今、なんと……？」  
「端的に申し上げると、これからアン・ヴェルグはその建物ごと爆破、崩壊します。

あなたを独房のなかに閉じ込めた？まま？でね。言っていることの意味、分かります？」

電話の向こうで、キヨテルはきつと勝ち誇ったような顔をしているに違いない。

皮肉めいた口ぶりがフランシスにそれを伝え、彼はキヨテルの？裏切り？を直覚し、「ぎり」っと音が聞こえるほど強く奥歯を噛みしめた。

「貴様……何を血迷った！？自分のしていることが分かっているのかあ！」

「言つときますが、僕は初めからこうするつもりでしたよ。ユートピア・タワーを追いだされて、あなたに拾われた瞬間からね。僕には僕の、？目的？があるんですよ」

「目的？ するために我々を利用したというのか……？」

「あなたは元々W・A・Fの人間だった。結局、Reaperへの苛烈な排他的思想が仇となって結局追い出されましたが、組織内であなたに同調する上層部の人間は少なからずいた。

そこで僕はあなたのコネクションを伝ってW・A・Fにパイプを作ることが出来、今では協力関係にあります。組織の活動に必要な武装にも、そして僕の目的に必要な？研究材料？の調達にも困らなくなりました。本当に、あなたには何てお礼を申し上げたらいいか」「ふ、ふざけるな……私を殺し、その後どうするつもりだ！？目的とはなんだっ！」

「耳元でわめかないで頂けます？ これだから？野蛮人？は」

キヨテルは吐き捨てるように言う。

「くっ……貴様、貴様あ……っ！」

フランシスはいよいよ激昂する。

全身の血が沸騰したかのごとく、ピンライトに浮かぶ彼の両目は血走っていた。

そんな彼を手玉に取るように、キヨテルの声は至って涼しげだ。

「おっと、そうだった。建物の爆破には特別製のC・Bを使っていますが、それでももしあなたが生き残ってしまったては困る。子供たち、聞こえてますか？ この野蛮人を、早々に撃ち殺してあげてください」

戦慄が走り、フランシスはその拳動の一切が停止した。

一方の子供たちは二人して顔を見合わせ、「お前がやれ」というようにためらっている。

「しょうがないですね、指名してあげます。スアン、あなたがやりなさい」

この場を映し出すカメラなどないのに、キヨテルは全てお見通しらしかった。

彼の一言で大いに肩をびくつかせた子供兵、スアンが、緊張した足取りで鉄格子の前に立ち、震える手で自動小銃の銃口をフランシスに向ける。

「や、やめろ……っ！ 私はここで死ぬべき人間ではない！ お前らは、大変な、人類にとつて大変な存在を失おうとしているのだぞ！ それもみすみす、お前らの手でっ！」

「言葉がなつてませんが大丈夫ですか？ あなたはよくやってくれたと思いますよ。僕が好きで観る昔の映画の典型的な？ やられ役？ としては、ね」

「やめろおおおおおおお！」

フランシスは血相を抱えて後ずさり、拍子に携帯端末が手から床へと転がりおちる。

その追い詰められ、独房の壁をよじ登るようにあがく様は、まさしく映画のやられ役が往生際に見せるそれと同じだった。

しかし、スアンは中々引き金を引けないでいる。

ホログラムの人間を撃つたことはあれど、実際の人間を撃つのはこれが初めてだからだ。

「銃声が聞こえませんか……やはり、人を殺すのが怖いですか？」  
床に落ちた携帯端末から、半ば呆れたような声が辺りに響く。

「撃てないのであれば、C - Bを設置してください。そこが？ 設置場所？ になつていないはずですからね」

スアンは胸をなで下ろすように、銃口を下げてポーチに手を伸ばす。

辺りが暗いので、彼女はC - B設置前に円盤型の光源装置を付近の床に置いた。

ミキが使っていたものと同じだ、レン以外のメンバーは作業用に所持しているらしい。

「キ、キヨテル、考えて直してくれ。そうだっ！ 私も君の目的とやらに力を貸そう！」

Reaperを放逐するのだろうか？ それなら、我々の目的はおな

「違いますよ」

キヨテルの声が横薙ぎの刃のように、鋭くフランシスの声を断ち

切る。

「これから死に行く人に目的を教えたって時間の無駄です。ただ、一つだけ言っておくと、僕はあなた方の組織に潜り込み、そこで目的を果たすに必要な人材、物資を手に入れた。ここまでくれば、あなた方の存在は僕にとつて？ 邪魔？ でしかない。」

組織のメンバーには全員、消えてもらいます。子供たちを除いてね」  
「Reaperを放逐するのが君の目的ではないのか……？」

フランスは氷水に全身を浸しているかのごとく、歯をがちがち言わせている。

そして「ああ、言っておきますが　」キヨテルの次なる言葉が、彼のなけなしの理性を破壊するトドメとなった。

「僕はね、実は、Reaperなんですよ」

フランススの瞳孔がこの上ないほど開き、彼はがっくりと項垂れて何も言わなくなつた。

失望のあまり意識を失つたのか、それとも単なるポーズなのか、とにかく、その廃人然とした姿には彼が二度と再起することはないだろうということをお子兵の二人に告げている。

「お、お前らあ　ッ！」

突風が過ぎ去るのを感じてスアンが振り返ってみると、暗がりに入型の影が二つある。

レンだ。

ダークブルーの光に照らされて、隊長・ミキがレンにおんぶされているのが分かつた。

「ライト！ そのライト貸してくんない！？　急いでるんだ！」  
スアンが口出す暇もなく、レンは光源装置を急かしい動作で拾っていきや、ミキをおんぶしたまま再び猛然と走っていった。

出だしの勢いで辺りに突風が吹き荒れる。

先ほどの突風も、彼の全力ダッシュによるものだろうと、二人はガスマスクの下で驚いている顔を見合わせた。

C・Bの設置はキヨテルが話している間に完了しており、独房内

に転がっている携帯端末の回線は切られているようで、手も届かないので、二人は回収せずに出口へと向かった。

「Reaper……あいつは、？死神？だったのか……」

後の暗闇には、抜け殻同然の男が、何事か呟いていた。

\* \* \*

「現在7時46分。ラヴのうち一組はすでに施設を出てこちらに進行中……他は施設の出口に向かっているところか」

キヨテルはラヴが乗ってきた小型艇の船尾に腰掛け、ノートパソコンを操作している。

画面に映っているのはグラジオラスの俯瞰図と、九つの赤い点。

その点の動きはレンを含めたラヴの全員と、ネルの所在を示している。

ボディースーツに仕込んだ発信機によって、彼はラヴの動きを把握していたのだ。

ネルの点は先ほどから殆ど同じ場所を行ったり来たりしている。

俯瞰図だけでは彼女が施設のどのフロアにいるかまでは不明だが、察するに何者かと戦闘しているようだ。

恐らく、相手はリン、あるいは？ナナシ？と呼ばれるアンドロイドだ。

キヨテルはW・A・Fの状況提供により、そのアンドロイドの姿、性能を知っていた。

もちろん、クリプトナスを打ち倒したのがナナシであることも。

例の？ブラックロックシユウターBRIS？を使われればひとたまりもないだろうが、ネルの点が長らく消失していないのを見るに、彼女はここでそれを使うつもりはないらしい。

「ラヴ全員の施設外への逃避を確認。レン君だけは引き返した、か……」

キヨテルは小声で独りごちながら、不敵に微笑む。

画面のバックライトに浮かぶその表情は、暗がりのなかにあつて一層の不気味さがある。

これでアン・ヴェルグ、いや、？ 舞踏会場？ には旧スーパー・ノヴァのメンバー、それとミクとルカを除く、確認している限りのアンドロイドが全員そろった。

しかしキヨテルのなかではもう一組、会場に招く予定の？ ゲスト？ がいる。

それは現在、アン・ヴェルグ付近の監視塔を占拠して、そこに陣営を構える現スーパー・ノヴァの幹部クラスの間で構成された、ヴァーリーが指揮を務める組織の別同隊だ。

キヨテルはおもむろに携帯端末を取り出し、ふうっと一息吐きだしてから、ヴァーリーの携帯端末にコールをかけた。

連絡の旨は言わずもがな、これから爆炎に包まれる舞踏会場への招待？ である。

「こ、こちら、キヨテル、想定外の事態です」

回線が繋がるや、キヨテルは急に動揺した口ぶりで話し始める。

もちろん、臨場感を出すための？ 演技？ だ。

「ラヴが同志、アレツチエド・フランシス以下メンバーの救出に失敗。施設内にいた刑務官に取り押さえられた模様です」

「なに？ 奴らは武装しているし、そもそもアン・ヴェルグに看守はいないはずでは……」

「作戦が相手に漏れていたのかもしれませんが。かなり複数の敵が待ちかまえていたようで、今回が初めての实战になる彼らでは歯が立ちません。僕が彼らを過大評価しすぎたせいです。やはり初めの話の通り、あなた方に救出に当たらせていけば……」

「ふん。俺が心配していた通りのザマになったか。だが、しのこの言っても仕方がない。」

これから我々がアン・ヴェルグに向かう。ただし、同志の救出が最優先だ。

場合によっては、お前の可愛いガキ共は置き去りにする。いいな？」

キヨテルのうすら笑いたくなる気持ちは最高潮に達し、思わず破顔してしまう。

皮肉と憎悪とを極上の優越感がかき混ぜたような表情。

そこに子供たちに慕われる？優しいピアノの先生？の面影は微塵もなく、ただただ悪魔めいている。

つい笑い声までこぼれてしまいそうだが、キヨテルは抑え、声を震わせ応答する。

「お手を煩わせませぬ。同志を、我らの同志を、よろしくお願いしま

す」  
相手は自分の失態を知って苛立っていたのだらう、やにわに回線がぶつつり切られた。

「あは、は……あははははははは！」キヨテルはいよいよ可笑しくてたまらない。

こんな子供でも思いつく幼稚な手に、あの屈強な身体つきの、それも軍人ぶってやたらに威厳を振りまく男が、あっさりと、何の疑いもなくひっかかる。

それがこの上なく滑稽こっけいで、彼は笑いが止まらないのだった。

「こ、この、裏切り者め……っ！」

小型艇の操舵を務めていた坊主頭の男が、恨めしげな声を出す。

彼は甲板に伏せ、苦悶の表情だ。

何故ならキヨテルと合流した際、彼は自分の小型艇からこちらに乗り移ってくるや、いきなり右の太ももを拳銃で撃ち抜いたのだ。

「だから、さつきも言ったように僕は初めからこうするつもりだったんです。

それって裏切りとは言わないんじゃないですか？ あはは！」

「くっ……！」

坊主頭の男は血がにじむほど強く唇を噛みしめる。

そんな彼を尻目に、キヨテルは自分の思惑通りに万事が運んでい

るのをノートパソコンの画面から知って、火に油が注がれるように

哄笑うっせうするのだった。



まもなく、アン・ヴェルグを先に飛び出したラヴの一組が侵入口（小型艇の真上）にやってきて、それから5分後の8時2分、ミキが帰ってきた。

「ごくるうさまでした。？レン君には？、首尾よくやってきてくれましたか？」

キヨテルはロープを伝って小型艇に降り立つミキに話しかけるも、彼女は視線を彼に向けることはなく、それは甲板に伏せたままの男の坊主頭に注がれている。

「ねえ、こいつもさ、殺すんでしょ？」

「我々に与する意思はないようですからね。我々の正体を知る者には、死、あるのみです」

「じゃあ、なんで生きたままなの？」

男はしきりに痛々しい呻き声をもらしている。

そうやって男の命が未だ明滅していることをいぶかり、ミキはあざとく訊ねた。

「知ってるよ。キヨテルさ、殺せないんでしょ」

キヨテルは一瞬、驚いたような顔を床に埋め込まれたLEDの光源に浮かべる。

「凶星だったのだ。」

相手の機動力を削ぐために太ももは撃てても、急所に撃ち込む勇氣はなかった。

ミキはおもむろに、メンバーが近くに置いた自動小銃を抱え、

「じゃあさ、キヨテル、わたしがやってあげる」

と、いまだ面食らったままのキヨテルを肩越しに見やり、怪しげに微笑んだ。

「さあ、みんな、そいつを起こしてちょうだい。ミキちゃんの公開処刑を始めますっ！」

語尾に音符がつきそうなほどミキは軽妙に言い、周囲はしばし啞然とする。

やがて、メンバー四人がおろおろ男の四肢を掴みにかかり、無理



「……ああ、そうだ。キヨテル。レンにはね、ちゃんと？つけてきた？わよ」

やにわに話しかけられ、キヨテルは肩をすくめる。

「これでさ、あんたの作戦は全部完璧ってわけね。ほめてよ。わたしのおかげなんだから」

「あ、ああ……」

キヨテルはまだ呆気にとられた様子だったが、やがて平静を取り戻した。

「アンドロイドの破壊は作戦の副次的な目的でしたが、それもどうやら果たせそうですね。」

「しかしよかったですか？ ミキ、あなたはレン君と仲がよかったですしょう」

「自分からわたしに頼んどいてなに言ってるの？ わたしが女で尊敬しているのはルカ様、男だと、かろうじてあんたかな？ どっちも一人だけ。あんなやつどうなってもいいわよ。」

それにアンドロイドのくせに仲間思いなトコとか、気持ち悪すぎだし」

すっぱいものでも込みあげてきたような顔をして、ミキはキヨテルに歩み寄っていく。

腰を左右に揺らし、まるで相手を魅惑するかのような足取りだ。

「ねえ、そろそろいいんじゃない？ ば・く・は・つ」

ミキはキヨテルの横に座り、その身体をすりよせて、変に色気を出して言う。

「ヴァーリーの部隊が施設に侵入。」

そしてレン君がネルに近づきました。ネルと戦闘しているのであれば、他のアンドロイドもネルの近くにいたりということ……爆破のタイミングは、確かに、今がベストですかね」

キヨテルはスーツの胸ポケットからシリンダーを手に取り、キャップを開けてC・Bの起爆スイッチを抜き出す。

彼はこんな時でさえも、いつもの黒スーツ、黒ストラックスという

装いだ。

「怖くない？ スイッチ押すの。銃の引き金も引けなかったのに」  
キヨテルの手に持たれた円筒状の起爆スイッチを見ながら、ミキは意地悪そうに微笑む。

「見くびらないでください。今さら？ 人殺し？ なんて、僕がためらうわけがない」

安全弁を外し、透明なカバーを開け、キヨテルは親指をあてがう。  
「相手の姿が見えないからじゃないの？」

そのせせら笑うような声に反発するかのように、キヨテルはぐつと、親指に力を込めた。

パソコンの画面が右端に小さく表示している限りでは、彼がスイッチを押したのは？ 8時10分？ のことである。

宵闇に金属のぶつかり合う音がこだましている。

ナナシとネルはフィールドをアン・ヴェルグの屋根に移し、未だ戦闘中であつた。

「右腕を切り落とし、胸も貫いた……それでもまだ動けるとはな」  
一定の距離を置いて対峙し、ナナシは暗闇に慣れた目で相手をねめつける。

うすら広がる月光にほんのり浮かぶ、せきわん 隻腕の女。

残された左手に赤めく光を帯びたヒート・ナイフを持ち、何色かうかがい知れない双眸は、人間なら絶命していて当然の傷を全身に受けてなお、獲物を逃がそうとはしない。

まだ終わりそうにないな、ナナシはそう頭の片隅で思い、クロガネを構えようとする。

「ナナシッ！」

リンの声だつた。

見てみると、施設侵入時にリンが開けた穴の近くに彼女が立っている。

どうやらナナシを探して再びここに戻ってきたようだが、その傍らにレンの姿がない。

ナナシは何事か察したふうに、小さくため息をこぼす。

「レンは、いなかっ」

最後まで言い終わらぬうち、ネルが飛び出した。

6、7メートルほどの距離をたった二回地面に足をつけてナナシとの間合いを詰め、逆手に持ったナイフで逆袈裟、横薙ぎと続けて繰り出す。

これほどの深手を負つてもなお正常時と変わらぬ機動力だが、自動小銃を失い、右腕を失い、たったナイフ一本。他にあるといえば、彼女の行動理念の全てである、どこかの誰かにインプットされた？

ナナシとリンを破壊しろ？という命令だけ。

ナナシが負ける理由など、現実的にも、そして心の面でも、どこにも微塵もなかった。

「いささか、私たちの戦いは長すぎるな。？あの時？から含めて」  
ナイフの横薙ぎをかわし、すかさず振り下ろしたクロガネがネルの左腕を切り落とす。

「だが、それもここで終わりだ」

そして風を切る真一文字。

分断されたネルの胴体、下半身が宙を舞い、やがて地に落ちた。  
首を切らなかつたのは、無意識のうちに生じてしまった？情け？であつた。

「レン……？」

ナナシはリンの後ろにダークブルーの重たい輝きを見る。

その光が黒スーツの人型が手に持っている装置から発せられていると気付くより先に、彼女はその人型が？レン？だということに気付いた。

リンもすかさず振り返る。

「二人とも、ここにいたんだな……」

レンは言つて、慌てて目をそらしたリンの背中を見る。

「リン、さっきのは」

「言い訳なんて、聞きたくないから」

言葉をさえぎられて、レンは言い淀む。

せつかくの再会なのに、場の空気は喜ぶどころか、沈黙のどん帳に閉ざされ、重苦しい。

暴動は収まったのか、火の手は上がっておらず、また停電のため都市全体が暗かった。

そもそも囚人たちの暮らすシエルターは全戸コンクリート製であり、木材や植物といった可燃性の物資が都市に殆どないおかげで、火の手は洗濯場や都市を見回る車が炎上したなどのごく狭い範囲に留まり、早々に鎮火されたようである。

何事が言いあぐねていたレンが、口火を切ろうとリンの肩に手をかけようとした時、

「リン、危ない！」

ナナシの大声が聞こえた。

驚くべきことに、ネルは左手に握りしめたままだったナイフをリンに投げつけたのだ。

弾丸のように一直線に空を横切る刃。

リンが気付いた時には遅く、刃の切っ先がもう彼女の目の前にあった。

「っ！」

思わず閉じたまぶたをおそるおそる開けると、

「いってえ……リン、大丈夫か？」

よく知った少年の横顔が、少し強張った笑顔が、そこにあった。

「だ、大丈夫って、それはこっちのセリフっ！」

「腕に刺さっただけだぜ？ ちいっと痛いけど、全然ヘーキだよ」  
本当は痛いし、とてつもなく熱いのをこらえて、レンは右腕半ばに刺さっていたヒート・ナイフを引き抜き、無理やり笑みを作って見せた。

リンをかばった拍子に取り落としてしまい、光源装置は彼女の後ろに落ちていく。

光はまるで足元から昏々と湧きあがってくるみたいに、二人の半径数メートルを満たす。

リンの頬や首元の皮膚は所々がはがれおちている、手榴弾の爆風を間近で受けたせいだ。

その後、レンは階を一周してリンのいた場所に駆けつけたが、そこに彼女の姿はなく、代わりに天井に開いた？穴？を見つけた。リンはここを伝って階上へ行ったのではと考え、レンもそこを潜り、そして静寂に響く金属音（ナナシとネルの戦闘だ）に導かれて今に至る。

もっと早く駆けつけていれば、いや、手榴弾が投げられた時、真

っ先に彼女をかばっていなくちゃならなかったのに……レンはダークブルーに照らされるリンの傷を見て、後悔と自責の念に駆られた。  
アナザー・トラッシュ・ホール  
？もう一つの廃棄炉？封印作戦の時、彼女の手を離してしまった瞬間のシーンが蘇り、自分がまた同じ過ちを繰り返してしまった気がしてならなかった。

「いいから。もう、いいから」

リンはうつむくレンの頬を優しくなでる。

手の感触と、その懐かしいような温かさ、そしてちょっとくたびれてはいるものの、底に明るさが湛えられた声を聞いて、レンは安堵と同時に確信する。「リンに逢えたんだ」と。

二人の様子を遠巻きに眺めていたナナシは、ふと振り返った。

「お前の相手は、私じゃなかったのか？」

そしてクロガネを振りかざし、地面に仰向くネルの眉間に切っ先を尖らせる。

図らずも、そこはナナシが銃弾を撃ち込まれた場所。

柄を握る手にぐっと力を込め　しかし、ナナシはやめた。

「さっきの一撃でお前はもう死んだ。二度殺すことに、意味はないな」

ネルの双眸は猫のように暗闇にうごめいているが、結局トドメは刺さなかった。

ナナシはクロガネをアンインストール、次にエア・グライドのチップを取り出す。

それをインストールしようとした折、腕時計が目に入った。

光源装置の明りを仄かに受けて、時計盤は現在の時刻、？8時8分？を告げている。

もちろん、ナナシたちは知る由もない。

キヨテルが起爆スイッチを押した時刻が、これから？2分後？であることを。

「あれ？　レン、背中に？何か？ついてるよ？」

エア・グライドをインストールし、二人を手招くナナシのもとへ



向かおうと歩き出したレンの背中に、リンはひし形の黒い物体が張り付いているのに気付いた。

その盛り上がった中央部分でごく小さな赤い光が一定ことに明滅している。

「な、なにこれ!? 全ツ然取れないんだけど!」

「え? え? い、痛い、痛いって!」

ヒルが吸いついたようにぴったりとレンの焼けただれた皮膚に張り付くひし形を、リンは指をねじ込んで強引に隙間を作り、やっとの思いで剥がすことに成功した。

力の反動でリンは後ろがけに転びかけるも、寸でのところで踏ん張った。

「なんだろう、これ?」

リンが頭上に掲げるそれを、二人そろって「なんだろう?」としばし疑問符を浮かべていたが、レンの脳裏に稲妻のごとくある閃きが走る。

アン・ヴェルグ侵入時、ラヴの助っ人<sup>ネル</sup>が壁に仕掛けた物体、キヨテルがミーティングの際に映像ボードで実物を紹介してくれた物体……間違いなく、これは? C-B? だ。

レンの表情が一瞬のうちに青ざめる。

「そういえばすっかり忘れてただけど、ここって爆発するんだっ  
たよね? さつき、あんたが大声で言ってた」

「リ、リン……早く、早くそれを、どっかに放り投げるんだ」

「え?」

「ああ、もう!」

リンの手から強引に横取りし、レンはそれを遠くへ投げようと振りかぶったが、

「な、なんだ!? 手から離れねーぞこれ!」

ひし形の一角が右の掌に張り付き、離れなかった。

C-Bの裏面には強力な磁石が4隅に配置されている。

これで鉄筋の入った壁に張りつけるわけだが、レンはアンドロイ

ド、全身金属である。

ちなみに煉瓦など金属以外の材料が使われた物には、角の内側に収められた先端の尖ったフックを開くことで対応し、もしこのフックによって張りつけられていたら、レンはもつと早い段階、いや、張りつけられた時点で気付くことが出来ただろう。

レンのなかで誰が張りつけた犯人なのか目星はついているが、今はそれどころではない。

「よ、よし！ やつと取れた！」

明確に磁石だとは分からないにしろ、ある部分を触れると手に吸いつくのは分かったので、レンはそれに注意しつつ、両手持ちのオーバースローでC・Bを遠くへ投げた。

すかさず振り返り、何事かといぶかっているナナシに声を張り上げる。

「ナナシ、エア・グライドを出して！ 今すぐ！」

「な、なんだ、急に……」

「いいから早く！」

レンはリンの手を取って走り出し、飛び込むようにエア・グライドへ乗り込む。

ただならぬ事態を察したナナシは操縦桿を握り、アクセルペダルに体重を乗せた。

エア・グライドは急発進　そして、二、三瞬のち、大気をつん

ざく爆音が轟いた。

「うあああつ！」

爆炎と熱波が大津波のようになって押し寄せる。

あらゆる風の奔流にのまれ、エア・グライドは空高く吹き飛ばされた。

「あつ」

機体が大きくかしい拍子に、リンの手が操縦席の付け根から離れる。

元々一人用、戦闘用なだけに、機上は狭く、手すりなどはないの

だ。

その代わりに掴んでいた場所から手が離れ、足が浮き、リンの表情が凍りつく。

背中が重力にひっぱられる感覚、何もすぎる物がない空中に放り出される不安、絶望　彼女を包む全てが？あの時？と寸分たがわず同じだった。

しかし結果だけは違った。

この手を、レンが掴んでくれていた。

「今度は離すかよっ！」

操縦席の付け根に腕を回し、ほとんど垂直になった機体にぶら下がるようにして、レンは左手でリンの手を握りしめている。

もう離すまいと、ひたすら強く。

その表情は必死で、鬼気迫るものがあつたが、リンにはこの上なく、頼もしく見えた。

まもなく機体は体勢を整え、飛行が安定し始めた。

遠くでは勢いよく火柱が吹きあがり、太陽のプロミネンスのような輝きが闇夜を照らす。

その燃えるオレンジを背景に、レンはぎゅっとリンを抱き寄せた。リンは何も言わず、ただ目をつぶって彼の胸に頬をゆだねる。

今にも安らかな寝息が聞こえてきそうなほど、彼女の表情は安堵に満ちていた。

\* \* \* \*

ナナシの眼下に、セントラルの夜景が広がっている。

ユートピア・タワーのエアポートに向けて飛行中だ。

背後からは楽しげに話すレンとリン、二人の声。

なんだか仲間との日々が帰ってきたような気がして、ナナシは内心喜ばしかった。

同時に、MEIKOメイコはレンのように帰ってはこないのだろうと

も思う。

「でさー、しいびい、だっけ？ いつ張りつけられたのよ」

「うーん……いちおう心当たりはあるんだけど」

レンはあぐらを組み、腕を組んで、しかめっ面で考える。

自分の背中にC・Bを張りつけたのは間違いなく？ ミキ？だ。「助けて！」だの意味不明な言葉を並べたて、やたらに抱きついてきたり、不意に？ 口づけ？ をかましてきたり……接触の機会が何度もあって、どのタイミングでつけられたのかは断言できないが、レンは唇を重ねてきた時だろうとぼんやり目星をつけていた。

でなければ、あの突拍子もない行動の意味が分からない。

レンは唇を重ねる、つまり口づけの意味するところを理解していないので、単に不審な行動としか考えておらず、今のところ彼のなかで口づけに相当する行為は？ 抱擁？ であつた。

だから彼は口づけよりも、ミキに抱きつかれたことの方がよっぽど驚きだつた。

「っていうか、フツー自分の背中につけられたら気付くでしょ。相変わらずバカね」

「う、うっせえなあ！ 無我夢中で気付かなかつたんだって！」

「まあ、もう解決したからいいけどね」

言つて、レンはにこつと微笑む。

その天真爛漫な顔を照らしているのは、眼下の街並みに連なるネオンライトの数々だ。

微弱な光も数があることで輝きを帯び、夜空をほんのりと照らし上げる。

「でも、？ 仲間？ だつて言つてたのに、どうしてミキはオレを殺そうと……」

短い期間ながら同じ屋根の下で暮らした間柄であるために、レンは少なからずシヨックだつた。言葉に出なかつたものの、他の子供たち、そしてキヨテルにも同じ感情を持った。

レンはその悲しげな色を、彼にしては珍しく思索しているふうな

表情から読みとり、

「ほら」

励ますように言って、おもむろに右手を上げた。

レンは何のことかと一瞬、呆気にとられた顔をする。

「忘れちゃったの？ もしかして」

するとレンは思い出したようで、高らかに左手を上げた。

二人は見合い、口元をほころばせる。

「作戦、大成功っ！」

福音が鳴った。

欠けたハートが再び一つになる、福音が、月明かりの下で。

t o b e . . . . . c o n t i n u e d .

&l t ;&l t ;C h a p t e r 4 &g t ;&g t ; (後書き)

次回 予告

R o c k ・ 1 6 ? 終わりの始まり?

乞うご期待

( 次週の更新は筆者の都合のためお休み致します。  
詳しくはお手数ですが、筆者の活動報告をご覧ください。 )

## Rock・16？終わりの始まり？

「フィール、一つ、訊きたいことがある」

ナナシは早足に歩いていくフィールの背中を呼び止めた。

「それは今でないといけないのか？」

白衣の裾をひるがえし、フィールは肩越しに言う。

ナナシたちはグラジオラスから帰還した。

全身傷だらけとなり、？レン？という新たな仲間を連れて。

エアポートには、フィールと共に数名のスタッフが三人を待っていた。

リンとレンの傷の具合がひどく、二人はスタッフに付き添われる形で先に行った。

現在、エア・ポートには、周囲のまばゆい夜光を浴びてナナシとフィールの姿しかない。

「私の傷は大したことはない。

それより、フィール、どうして私たちに協力してくれたんだ？」

「傷は大したことはない、か……」

フィールはサングラスの下で、まじまじとナナシの足先から頭までを見渡す。

銃痕だろう、肩と太ももに風穴が空き、露出した胸や頬には切り傷が複数走っている。

これは戦闘によって出来たものだと想像に易い。アンドロイドの彼女にこうしたダメージを与えられるのは、普通に考えれば同じアンドロイド。

ふと、フィールは？ネル？を想起する。

しかし事の詳細は、彼女たちをメンテナンスホールに入れ、記憶を解析すれば分かることなので、フィールはここでそれを聞くことはしなかった。

「私の質問に答えてくれ」

「……単純だ、あれ以上エントランスを？荒らされて？はかなわんかったからな」

フィールはいつもの冷静な態度を崩さないが、その声にはどこか呆れがこもっている。

というのも、ナナシらがグラジオラス突入の折、その足としてエア・グライドを借りようとフィールを訪れた。しかしフィールは学界の講演会で不在、代わりに彼の研究機関のスタッフに申し出るも「博士の許可がなければ無理」と却下され、電話も通じないという。グラジオラスへは海を渡らなければならず、乗り物がなければ水の上でも走れない限り行くのは不可能だ。アンドロイドの二人にもさすがにそこまでの能力はない。

そこで二人はフィールが帰ってきた夕方6時近くまで約3時間待つことに。

ただ待つだけの苛立ちと焦燥感のあまり、リンは「早く帰ってこいよチクシヨ ツ！」などと喚き散らしながら、タワーのエントランスの壁、フィールの銅像、ほかモニュメントを手当たり次第にぶち壊し、警官隊が駆けつけるほどの騒ぎを起こした。

そしてエントランスに帰ってきたフィールが目当たりにしたのは、いつも見慣れた銀に近い灰色の清潔な空間が粉塵に汚染され、大理石の床が所々陥没し、自分の銅像が真っ二つに砕けて横倒しになって、どういいうわけかナナシとリンが戦っている光景だった。

自分の姿を見つけると二人は戦闘を止め、リンが開口一番、「エア・グライド貸せよっ！」と叫んできた。

彼女はいきり立っていて話にならないので、ナナシに事の発端を聞いてみると、自分が長らく帰ってこなかったせいでリンが暴走してしまっただけで、それを止めるためにナナシは素手で彼女と戦っていたのだと。

その場にいた人間はフロアの隅に身を寄せ合うようにして啞然としており、また外部の人間である警官の姿もあった。



それに対して早々に口止めも必要であるし、何よりタワー始まって以来の？珍事？を早く収めたい。

フィールは二人の申し出を聞くにつけ、すぐ許可を出した。

このように致し方なしの対応であったため、フィールは二人がグラジオラスへ行かなければならないのは理解したが、その理由など、詳しいことはまだ知らない。

「あれは……すまなかったと思っっている。リンは一度暴れると手がつけられないんだ」

フィールは何も言わず、彼女の次の言葉を待つ。

「だが、本当にそれだけか？ 今回の件はお前らとは何の関係もない。

完全に私たちだけの問題だ。だから、協力はしてくれないだろうと思っっていた」

「確かに、リンがあんなふうに暴れていなければ私はもつと慎重に考えていただろう。

だが、結果的には、私と君たち、完全に関係がなくなったとは言いが難くなった」

「どういうことだ？」

「グラジオラスの炎上、それはセントラルからも視認できた。

今ごろは速報のニュースで国中大騒ぎだろう。それも当然気になるが、私は君に傷をつけたのが誰なのか、そっちの方がよっぽど気になるな」

「……ネルだ。私はいつと戦い、そして破壊した」

フィールは「やはりか……」と呟き、しばし黙考した。

「ということは、W・A・Fが今回の事件に関わっているのは明らかだ。グラジオラスの炎上もやつらが仕掛けたことなのかもしれないが、狙いが分からない。とにかく、今は情報が欲しい。君も早くメンテナンスホールに入ってくれないか」

「私たちの頭から、また記憶を抜き出すのか？」

「抜き出すのではない。解析して複製を作るだけだ。

おっと、これはするにしても、本人の前で口にすることはないな」  
フィールは踵を返し、顎でナナシについてくるよう促す。

彼の皮肉めいた口ぶりに、ナナシは苛立ちと、そして見えない？  
壁？を感じた。

フィールは確かに自分たちに協力してくれ、傷も癒してくれるが、  
味方とは思えない。

アンドロイドとその生みの親という切っても切れない縁で繋がっ  
ているだけであって、子は親のすることに反発し、疑心暗鬼になり、  
親は子のこと全てを知りたく、問答無用に土足で部屋に上がり  
込む。その癖、自分の手の内を見せようとはしないのだ。

だから互いにどこか牽制し合っていて、水と油のように相容れな  
いのである。

\* \* \* \*

ナナシらが帰還してから1時間後、フィールは地下10階のアン  
드로이드研究機関のコントロールルームにいた。

隣がメンテナンスルームになっており、今はリンとレンがメンテ  
ナンスを受けている。

設備から言って一度に二体までしかメンテナンス出来ないため、  
比較的傷の浅いナナシは別室に待機させている。

例の、事あるごとに彼女が目を覚ます、人間でいうなら病室にあ  
たる部屋だ。

「やはり、彼にも？ある？ようですね」

オペレーションデスクに座るスタッフの男が、後ろのフィールに  
向けて言った。

黒い背景に蛍光色の線で、立体モニターにはレンのスキャン図が  
表示されている。

メンテナンスルームのCTスキャンのようなポッドに入れられた  
レンの身体をレーザー光線がくまなく読みとり、その情報がこちら

のモニターに送られているのだ。

実際、施術の指示を出すのはコントロールルームからで、メンテナンスルームにいるスタッフは、彼らの指示通りに動いてメンテナンスにあたるのである。

「ナナシとリンにあったように、どうやら未来世界のアンドロイドには全員備わっているらしいな。ブラックのエネルギーを自らの生命力に変換する装置、？アライヴ機関？」

モニター上では、その円盤型の小さな装置はレンの胸の中央に位置している。

そう、アンドロイドがブラックを欲する本能を作り出す、ナナシらにとっては自分たちの生き方を束縛した忌まわしき機関だ。

「どうしますか？ ナナシとリンのように、彼のアライヴ機関も取り除きますか？ その場合、最低でも丸二日は費やすことになりませんが」

「構わん、そうしてくれ。あの二人もそう頼んでくるに決まってるしな」

二人の会話から見て、フィールはナナシとの約束通り、彼女たちのアライヴ機関を除去してくれたらしい。そして今回はレンも。

三人はようやくブラックの呪縛から逃れられる。ただ、それはブラックを狩ることが一つの使命、生きる目的であった彼らにとってある意味で存在理由の消失だともいえるのだ。

それがのちに、ナナシを苛ますことになる。

「しかし、謎が多いですね。未来世界のアンドロイドは」

長髪を真ん中で分けたオペレーターが、机上のタッチパネルにタイピングしながら言う。

それによってメンテナンスルームに指示を送っているのである。

「未来世界のアンドロイドは、もう一つの時間軸にいる私が造り出したと推測している」

「確かに僕もそう思います。ですが、フィール博士は戦闘用にはアンドロイドを作らないはず。それに、こんなアライヴ機関なんて装

置を生み出した理由が分かりません。

もしかしたら、フィール博士以外の人間による設計なのかも……」  
その可能性はフィールも考えていたが、しかし、確実に違つと断言できる理由があつた。

他でもない？リン？と？レン？である。容姿、性格、行動パターン、全てひっくりくるめて彼らという存在を創造するには、フィールの手によつてでしか成しえないのだ。

何故なら、その二人もまた……ミク、そして？ルカ？のように、フィールが過去の？世界戦争？で失つた、大切な人たちであるからだ。

すなわち、もう一つの時間軸にいたもう一人の自分は、この二人をアンドロイドとして復元したのである。しかもアライヴ機関を組み込み、？戦闘用？として。

現在の自分は彼らの復元には着手していないが、構想はある。

ただ、その場合も先の二人のようにボーカロイドとしての復元だ。何故、もう一人の自分は彼らを戦闘用にしたのか……クリプトナス襲来のと、リンをメンテナンスし、その記憶を解析した時から  
の疑問である。

「そうか……思い出した」

フィールは嘆息をもらすかのごとく、小さく呟いた。

二人が戦闘用である理由の答えは、他でもない少年時代の自分の記憶にあつたのだ。

彼の声が耳に入り、オペレーターは疑問符の張り付いた顔で彼を振り返つた。

「いや、何でもない。ただ、リンとレンを作りだしたのは、もう一つの時間軸にいる私で間違いない。彼もまた、自分の思い出に？忠実すぎる？ようだ」

意味深な言葉に、「はあ……」とオペレーターはますます疑問を深めるようだった。

「では、引き続き作業を続行してくれ。私は一旦席を外す」

「どちらに行かれるのですか？」

「ミーティングルームだ。このところ、ルカと連絡がつかない。もしかしたら連中にさらわれたのかもしれない、ネルと同じくな。」

他にもグラジオラスの一件を含めて、老人たちには聞きたいことが山ほどある」

言つて、ファイルは白衣の裾を翻す。

老人たちとは、いわずもがな、例のW・A・Fのロゴマークが発する声の主たちのことだ。

\* \* \*

グラジオラスの一件から三日が経つた、昼下がりのエインセル。

P I Y O M A R Tではのき爺がレジカウターのスツールに腰掛け、「うーむ……」と小難しい顔でテレビとにらめっこしている。

その両隣には海人、グミの顔もあり、三人はしばしテレビのニュースに釘づけだった。

この3日間、テレビや新聞でも国中が？アン・ヴェルグ爆発？に騒然としていた。

アン・ヴェルグはほぼ全壊し、W・A・Fが救助隊を編成して施設跡の調査にあたっている。

救助隊、といっても名ばかりで、実質的には？遺体回収部隊？だ。アレッチェド・フランシスを筆頭とする元ヴァノー・パースのメンバーらと、そして謎の武装集団の遺体が発見されたと、現時点の報道では伝えられている。

本来なら？人間ではない者の遺体が見つかった？としてネルのことも発表されて不思議はないのだが、W・A・Fが遺体の回収に来た以上、その存在が明るみになることはないだろう。

単にまだ瓦礫に埋まっているか、秘密裏に回収されたか、あるいはW・A・Fがマスコミに圧力をかけて口止めしているのか、そのいずれかである。

「このアン・ヴェルグの爆発って……一体、誰がやったんでしょうね」

「一説では囚人たちの仕業だとか言われとるな。あの夜、LEVE L1から4までの全ての囚人が暴動を起こし、その後に爆発が起きた。偶然にしては出来過ぎてる。現在は暴動を起こした囚人全てに取り調べが行われているそうだが……」

「遺体となって見つかった謎の武装集団の存在も、無視できないと海人がのき爺の言わんとしていたことを先取る。

どこことなく、その顔は推理を働かす刑事の顔つきになっていた。

「その通り。現に囚人たちはみな口をそろえて爆破については「知らない」の一点張り。」

まったく、誰がやったんだかね」

「本当に……誰がやったんでしょうかね」

二人は意味ありげに見合わせる。

二人とも？ ナナシ？ と？ リン？ の姿を思い浮かべたのだ。

「はは、まさかな」

のき爺が破顔したのをきっかけに、二人は苦笑する。

何事か分からず、グミは二人の様子を不思議そうに見ていた。

「あの……ちよつと、いいですか」

グミは遠慮がちに二人を呼びかけた。

「どうしたの？ グミちゃん」

「リンちゃんとナナシさんって、グラジオラスに行っただんですよね？ 刑務所にいる友達から手紙が届いて、それを二人して助けに行っただ……私もいたから、それは知ってるんです」

どもりがちに喋る彼女の言葉を聞くにつれ、海人とのき爺の顔に気まぐさが浮び始める。

二人はナナシとリンがアンドロイドなのを知っているが、グミはまだ知らない。

ただ、二人のこれまでの行動から、？ 普通の人間ではない？ というのは理解しているし、それはグミ個人に限ったことではなく、二

人を知るエインセルの住人すべての認識であり、また疑問だった。「でも、そもそも助けに行くことがおかしいんです。それに、あの二人は前に黒いバケモノたちを何匹もやつつけたし……？ふつう？じゃないですよ、あの二人」

グミは訴えるようにして言って、うつむいた。

ふと沈黙が降りる。

通りを歩きかう人々の声、足音が何枚かの壁に挟まれたように聞こえて、ニュース番組の女性キャスターの品のある声がしばらく店内に響いていく。

「それで、私のおじいちゃんが言ってたんです。あの二人はボーカロイド・ミクみたいに、人間じゃなくて、もしかしたら、？アンドロイド？なんじゃないかって……。」

他の街の人も、大勢そう言ってるんです。二人はどう思ってるんですか？」

海人とのき爺は困ったように目を見合わせる。

「ふうっ」とのき爺は大きく一息吐きだし、やがて口を開いた。

「昨日の夜、ユートピア・タワーにいるリンから電話で連絡があったな。4時にはこっちに帰ってくるそうだ。あと30分かそこらだな……どれ、一つ話してやるっ」

「の、のき爺さん！」

海人が慌てて機先を制す。

のき爺が何を言わんとしているのか察したのだ。

「別に構わんだらう？ この子は真実を知って、それで誰かを嫌いになるような子じゃない。そのことはこの街に住む皆に言えることだ。それに、これから話すことはお前さんにとっても初耳になるはずだ」

疑問符を浮かべる二人をよそに、のき爺はナナシとリンの正体、

それから二人がPIYO MARTにやってきた経緯を話し始めた。

初めはばつの悪そうな感じの海人だったが、自分の知らない事実ナナシとリンが？アンドロイドだけが生きる未来世界？からや

ってきた　　を聞かされてからは、グミと同じく驚きを露わにして、のき爺の話に聞き入った。

そういえば、自分が知っているのは彼女たちがアンドロイドということだけだ。

誰に生み出されたとか、どうやって今まで生きてきたのか、どうして正体を隠して人間の暮らしに溶け込んでいるのか…… ナナシとリンについては何もかも知った気になっていたが、海人はあふれる疑問と一緒にその殆どを知らない自分に気付かされたのだった。

ちなみにリンが『もし私がアンドロイドだったら』と仮定の話という前提で自らの経緯について話したことはあるが、海人は子供の空想だと思っ、今はまともに覚えていない。

のき爺はリンから聞かされた限りの範囲で話を進め、最後に二人がグラジオラスへ行つた理由を自分の憶測を交えて説明すると、一息に喋って疲れたのか、喉仏をつまむようにして数回さすった。

「そうだったんだ……リンちゃんとナナシさんは、やっぱり、アンドロイド……」

グミは沈痛な面持ちでうつむく。

海人も同じだった。それに数分の間であまりに多くのことを語られたので、頭の処理が追いつかず、しばらく呆然としていた。

そんな彼の横顔を覗き込み、

「ねえ、海人さんはこのこと知ってたの？　知ってて、ナナシさんが好きなの……？」

とグミは心細げに訊ねる。

「だって、アンドロイドだよ？　人間じゃないんだよ？」

更に、その一言を付け足して。

「いや、それは、えっと」

不意にナナシの名前を出され、海人は顔を真っ赤にしてしどろもどろになる。

実はこの質問、自分が二人の正体を知っているとのき爺に話した時もされた質問だ。



ナナシが帰ってくる前日のことである。

クリプトナス襲来の時について話している流れで、思わず喋ってしまったのだ。

その時は彼のなかで迷いがあり、言い淀むばかりで答えられなかったのだが、今は違う。

「逆に聞くけどさ、リンちゃんが帰ってきたら、君はどうするの？ 仲良しの友達が実はアンドロイドだって知って、いきなり赤の他人のふりでもする？」

「そ、それは……」

「しないだろ？ いや、出来ないんだ。初めっからアンドロイドだって知ってたら違ったのかもしれないけど、後から知ったんだぜ？ 簡単には変えられないよ、感情は」

言い終えてから、海人は自分が夢中になってそう断言していたことに気付いた。

「一途だねエ……」とのき爺がからかうように笑っている。

海人は恥ずかしさに身体が熱くなるのを感じつつ、あいつに感化されたのかな……と何かにつけてキザな同僚、ザックの顔を思い浮かべるのだった。

「さて、もう4時過ぎだ。そろそろ帰ってきてもいい頃だろう」

のき爺はサンダルを履き、いそいそと店先へ向かう。

海人も出ると、その後ろから遅れてグミがついてきた。

まだ心にわだかまりがあるらしく、うつむいている。

「おー、いたいた。まだわしらに気付いていないようじゃがの」

「なんか？ 一人？ 増えてませんか……？」

「彼のことなら、昨日リンから聞いたとるよ。また騒がしくなりそうだ」

のき爺は苦笑しつつも、どこかうれしそうだ。

通りの遠くに、人の往来に時折隠れるようにして、ナナシとリン、そして新たに加わった仲間の、三人の姿が見えている。

彼らは並んで歩き、互いに喋っているのでまだのき爺たちには気

付いていないようだ。

「海人、さん」

「なんだい？」

グミが海人の横へ来て、何か言いたげな光を瞳に宿している。

「海人さんの言う通りですよ。私だって、リンちゃんといつまでも友達でいたいんです。」

だって、せつかく逢えたんだから……無駄にしたいくないんです、その出逢いを」

「だったら、笑顔で迎えてあげなくちゃ」

海人が口元をほころばせると、グミも微笑んだ。

まだ完全には心のわだかまりが取れたではないにしろ、清々とした顔つきだ。

「あー！ のき爺たちだーっ！」

三人の姿に気付いたリンが、大きく手を振って駆け出した。

底抜けに明るくて、見ているだけで元気になれる、リンの姿。

彼女がのき爺に抱きつき、次に自分の下へやってくると、グミは言った。

「リンちゃん、おかえり！」

今までと何一つ変わらない、とびっきりの笑顔で。

「あー……っと、オレの名前はレンっていうんだ」

三人に自己紹介するようリンに背中を押され、レンはそっぽを向いてぎこちなく名乗る。

相手がアンドロイドだったら難なくこなせるのだが、人間相手だと妙に気構えてしまって、挨拶の一つスムーズにこなせなくなるのだ。

元からサバサバした性格で、人間社会でいうところの愛想だの礼節だのをまったく知らないというのもあるが。

「よろしく、でしょ！ それと、ちゃんと相手の目を見て言って！」  
思いつきり背中を叩かれ、「あたっ!？」と声を上げるレン。

リンはさながら彼の保護者役のようだ。

「ったく、しょうがねえなあ……」レンはぶつくさ言いつつ、  
「よろしく」

とまるで鼻でもほじりながら言うかのように挨拶した。

すかさずリンの第二打が背中を襲い、やり直すはめになったのは言うまでもない。

「二人は兄妹なの？　すごく似てるし」

ひとしきり自己紹介が済むと、グミが真っ先にそう質問した。

二人は顔を見合わせたのち、

「？きょうだい？つてなに……？」

リンの思わぬ反問に、場に沈黙が降りる。

一番困ったのはグミだ、リンとナナシがアンドロイドである以上、レンもそうだろう。

我ながら変な質問をしてしまった、グミは言葉に詰まって顔を伏せる。

「あ、そ、そうそう、きょうだいだよ！　私たちはきょうだい。ね、レン？」

場の空気を繕おうと、リンは意味も分からないまま調子を合わせる。

「は？」と解せない表情のレンを肘で小突き、

「あ、うん。オレたちきょうだい」

と言わせた。ほとんど棒読みだ。

あまりに不自然だが、事情を知る三人は特に言及しなかった。

「私、用事を思い出したから帰るね。リンちゃん、ナナシさん、帰ってきてよかった。」

レン君も……これから、よろしくね」

呼びかけようとしたリンの声を振り切るように、グミはいそいそと店を出ていった。

彼女の笑顔はいつもと変わりないように見えるが、どこことなくよそよそしい。

「やはり、言ったのはまずかったか……」

のき爺がぼそつと独りごちる。

「どういうこと？ グミちゃんに何か言ったの？」

「実は……」

のき爺はリンに二人の正体を明かしてやったことをかいつまんで話した。

そのことでレンの正体にも見当がついただろうということも。

「言っちゃったの！？ 私たちがアンドロイドだってこと」

「ああ、彼女になら大丈夫だと思って……それに、お前らは有名になりすぎたしな」

「私は自分の正体がバレたって全然いいんだけど。のき爺に止められてたから誰にも言わなかっただけで。でも、さっきのグミちゃん、ちよつと様子が変わった……」

グミのどこか他人行儀な態度の原因を知り、リンは寂しげにうつむく。

さっきまでの元気が失ってしまった彼女を見て、レンも落ちつかないようだ。

「そういうことって、やっぱり、本人の口から言った方がいいんですよね。きっと」

海人が口を開く。

「俺だって、リンちゃんたちがアンドロイドだって知った時はショックだったし。」

いくら笑顔で受け入れようとしても、聞かされたばかりじゃ、気持ちの整理つかないよ」

口では「リン」と言っているながら、その目はナナシを見ている。顔まで向けると露骨なので、横目でさりげなく、だ。

彼女は話にあまり興味が無いのか、空に目をやって何やら考え事をしているふうである。

寡黙で、同じ空間にいながら今一つ手が届きそうにない雰囲気は相変わらず。

装いは前に会った時と同じだが、今はチャックを締め、大胆な露出は控えている。

彼女の姿を一目した時、心底安堵して、リンよろしく駆けよって抱きしめて格好いいセリフの一つ華麗に決めてやりたがったが……結局、それは脳内の妄想に留まった。

彼女も彼女で特に話しかけようとはしてこない。

先の一件で仲良くなった気がしたが、それはどうも思い込みらしかった。

「私、ちょっとグミちゃんを追いかけてくる。いいよね？ レンが代わりに話すから」

「え、話すってなにを？」

「すまないな。あの娘には、なんというか、悪かったと伝えておいてくれ」

「あ、おい、リン！」

レンの制止もかなわず、リンはグミの働いているケーキ屋の方へ一目散に駆けていった。

レンも後に続こうとしたが、

「おっと、君にはリンから聞くはずだった？ グラジオラスでの出来事？ について話してもらいたい。大丈夫、あいつはすぐに帰ってくるさ。今追っかけて邪魔すると、彼女に殴られるところの騒ぎじゃ済まなくなるかもしれんぞ？」

にかつと笑う老いたニンゲンの表情。  
名を？ ノーキー？ といい、みなは彼のことをのき爺と呼んでいる。悪いニンゲンじゃなさそうだ、レンは迷った末に話すことにした。「どっから話せばいいんだ？ とりあえず、オレがこの世界に来たところからだ」

レンは言葉を一つ一つ探すようにしながら、のろのろ喋り始める。

5分が経ち……10分が経ち……黙ってうなづいていたのき爺が、ようやく口を開いた。

「すまん。分からん。もう一度初めから話をしてくれんか？」

語幹が少ないのと直情的な性格のためか、レンは説明するのが大の苦手なだった。

\* \* \*

時を同じくして、こちらは孤児院・スーパノヴァ。

いや、この呼び名ではもう語弊があるかもしれない。

何故なら組織は完全に崩壊したからだ、氷山キヨテルの謀略によつて。

「注射はしてきましたか？」

場所はキヨテルの執務室。

彼は自分のデスクを挟み、ミキと面対する。

彼のトレードマークとさえ言える例の笑みだ、元組織のリーダーを手にかけようとした時の狂気はない。

「していない？ もう時間である16時を過ぎてしばらく経ちますか」

弱気に首を振ったミキに、キヨテルは優しく諭すように言う。

この三日間というもの、ミキにはいつもの覇気がなく、口数も少ない。

あの夜とはまったく別人だ、まるでしぼんだ風船のようである。

「だって……もう、しなくてもいいでしょ？」

消え入りそうなミキの声。

少し強い風が吹いただけで掻き消されそうなほどか弱く、ドアと窓に閉ざされた空間、静寂のなかでなければ、キヨテルはきつと聞きとれずに「え？」と反応していただろう。

「どうしてそう思うんです？」

「わたしはもう人間じゃなくなったはずよ。

だって、わたしは、あの夜に……パパを……」

ミキの身体がわななき始め、激烈な記憶が呼び覚まされているのか恐怖の光が瞳に宿る。

彼女はここにいない、今、まさに父親を殺したあとなのだ。

「安直な発想です、ミキ。僕たちは何をしたってどこまでも人間なんですよ。それは変わらない。変わるとすれば、？心？です」

「前と言っていることが違うわ、キヨテル。

わたしがどうして人間じゃなくなりたいか、あなたは知ってるでしょ……？」

なんか、あの夜から、急に冷たくなった。キヨテル、冷たくなった「ミキは静かに唇を噛みしめる、歯がゆそうに、さびしそうに。

彼女の心のなかでは様々な感情が渦を巻き、ぐちゃぐちゃに結んだ紐のように解けなくなっていた。

「これは、申し訳ない、ミキ。ただ、僕は」

言葉半ばにゆっくり歩き出して、キヨテルはミキの前髪をかきあげた。

ついで彼女のあごに手をやり、悄然とつつむく顔を上げ、目を合わせる。

やつれた眼下にたたえられた雫、ミキは今にも泣きだしそうだ。

「君や他の子供たち、この世界に生きる人たちみんなを幸せにした  
い。」

そのために頑張ってる。だから忙しくて、あまり君に構ってやれな  
いのはとても心苦しい。

でも、僕一人の力じゃ無理だ。ミキ、君の力がないと、僕の願いは  
果たせない。

僕は今夜、忌まわしい大人たちが消えたこの館の中心で、ある誓い  
を立てるつもりです。

子供たち全員を集めてね」

「わたしたちに、何を誓うの……？」

「それは後のお楽しみです。ただ、僕は君たちを必ず幸せにする。

この約束の代わりに、ミキ、今しばらく、僕に力を貸してはくれま  
せんか」

キヨテルは口元をほころばせ、優しく微笑みかける。

だまされている、きつと、だまされている。

そう心の奥底では感じていながら、ミキは頭を優しくなでくれ、  
そつと涙を受け入れてくれる彼を疑ったり、裏切ったりなどは絶対  
に出来ない。心がそれを許さない。

そして、彼女はためらいがちにうなづくのだった。

「そろそろ夕食の時間ですね。行ってきなさい、ミキ。

夕食後、院のエントランスに子供たちを集めてください。僕から話  
があります」

キヨテルは気弱な子供を勇気づけるような口ぶりで言い、ミキを  
送り出す。

ドアを開け、退室しようとしたミキに、「あ、そうそう」彼は思  
い出したように言った。

「夕食前に？注射？を忘れないでくださいね」

ミキが部屋から出て行ってまもなく、キヨテルは一人笑いだした  
くなる気分だった。



「この館の中心で、ある誓いを立てるつもり」などは、我ながらよく言ったものだ。

自分の組織となったスーパー・ノヴァのこれからの方針、計画について話すだけなのに。

組織の名前がこのままなのは癪に障るが、下手に孤児院の名前を変えて怪しまれるのも面倒だし、それに名前に意味はない。呼ぶ時の記号として機能してくればそれでいいのだ。

よって、名前はこのまま。ただ、中身はこれから180度違った方向へと転回する。

冰山キヨテル、そう、彼の思うがままの舵取りによって。

幼き船員たちはみな従順だ。ミキがいい例だが、誰も彼も両親の愛を充分に受け取れず、心に傷を追い、社会に憎しみやら羨望やら、何らかの感情を抱き、苦悩している。

だからいいのだ。つけこみやすい、扱いやすい。

彼らをせいぜい使ってやって、自分は宝島に到達してやるのだ。そのための第一関門はすでに突破し、今や第二の関門が待ち構えている。

いや、関門とはいえないか。

場合によつてはそうなるかもしれないが、完璧に成し遂げられる自信はある。

明日に行われる？復興式典？、その開会スピーチに任命された？ Dr・フィールグッド？。

うすら笑いたくなる、偉大な彼の名前を思い出すと。

何故ならその名前はじきに……？過去の遺物？と化すからだ。

「明日、一つの時代が終わる。フィールグッド博士」

嘲笑めいた呟きがこだまし、妙に余韻を残して空間に消えていった。

彼の時代が、始まるうとしている。

\* \* \* \*

誰かに呼ばれたような気がして、フィールは目を覚ました。

ミクが後ろのテーブルにつき、日課の？折り紙？をやっているが、彼女が自発的に喋ることはない。きつと、まどろむなかで聞いた声の幻だろう。

フィールはソファに横たわる身体を起こし、ローテーブルの上のサングラスを手取る。

その傍らにはやりかけの書類と、明日の開会スピーチの原稿が別々に置いてあった。

研究室での仕事もつかえている。先日抽出したレンの記憶、思考回路のパターンデータの解析が主で、他諸々。寝ている場合じゃないのにな……彼は仕事の合間にほんのわずか目をつぶったつもりが、すっかり眠ってしまっていたことを悔やみつつ、書類に取りかかる。

しかし、どうも眠気が抜けなくていけない。

最近の論文で『人は5分ほどの睡眠が健康にいい』などというのが発表されていたのを思い出したが、確かに、自分のような日夜仕事に追われている人間には気休めになる内容だ。

ただ、それで眠気がすつとんで頭が冴えても、心身の疲労は取れない。特に心の方は。

彼は万年筆を持つ手を止め、ふとガラスに目をやった。壁一面がガラス張りで、その長方形の枠にネオンきらめく街の夜景が収まるという、言うなら？成功者？のための景色だ。

ただし、彼はそれを見てはいない、透明度の高いガラスに映える自分の姿を見ている。

深々と感じるものがあつた。すっかり老いてしまっているのだ、自分は。

背後ではせつせとミクが折り紙を折っている。

アンドロイドに指の精密な動きを覚えこませたり、データを取る目的でやらせているのだが、それは今や重要なことではなくなった。

紙のすれる音、折り目をつけるために力を込めたりして、ダイニングテーブルの脚が微妙にずれる音や、長椅子ががたがた動く音が断続的に聞こえてくる。

それは静寂のなかにあつて、とても心地の良い音楽に思えた。

自分とミクの、二人だけの空間。

自分と初恋の人の、二人だけの時間。

そう感じられるからだつた。

「ミク……すまないが、頼みがある」

主人に呼びかけられ、ミクはきよとんとした表情で振り返る。

両手は紙に折り目をつけたまま止まったまま、どうも鶴を折っている途中らしい。

他に蟹やイルカなど色とりどりの生物が、彼女の手元でおとなしくしている。

「一曲歌つてくれないか？ 曲は……君の歌いたいものでいい」

ミクは口元に人差し指をあて、しばらく考え込むようにしたのち、静かに歌い始めた。

子守唄のように緩やかなメロディ。温かで、切なくもある歌詞。

ミクの優しい歌声がゆっくりと時間を満たしていく。

フィールは目を閉じ、ふかふかのベッドに身体を横たえるように肩の力を抜いた。

少年だつた自分も、こうやって彼女の歌声に耳を澄ませていた。

身体を、心をゆだね、あとはゆりかごのなかの赤ちゃんのように、ただ母親のささやきにあやされながら安らかに息づいているだけがいい。

とても心地がよかつた。本来なら、やるべき仕事がある、のしかかる現実がある。

本来、彼はそれらから目をそむけるような人間ではない。

ただ、この夜ばかりはどうしてか……ミクの歌声をひたすら無心に聴いていたかつた。

家々の窓から明りが消え、街が寝息を立て始めたころ。

ナナシはPIYO MARTの屋根に膝を抱えて座り、ぼつと夜空を見上げていた。

どういふわけか、考え事に疲れたときは一段でも高く空に近い場所にいたくなる。

あの真つ暗な天井に点々とする星の、そのか細い輝きにさえ心は救いを求めてしまつらしい。

「ここにいたんだね、ナナシ」

両手を屋根の縁に引っかけ、リンがひよっこりと顔を出した。

声の感じからすると、その表情は探しものを見つけて安心したように微笑んでいるのだろう。彼女が歩み寄ってくるにつれて、彼女の着たパジャマの模様が次第に分かつてくる。

街灯の光もわずかにしか届かないので色までは不明だが、大きな水玉模様だ。

「メンテナンスを終わてからさ……ナナシ、元気ないよね？」

ここに海人やレンがいたら「元気はいつもないんじゃないか？」

という感想を抱くのだろうが、リンのナナシに対する「元気ない」はまた違ったニュアンスがある。

「ずっと考え事してるみたいだよ。」

何かでまた悩んでるの？ 悪いことなんてなかった気がするけど。

レンも戻ってきたし」

ナナシはぼんやりとリンの顔を見てから、また星々に目を移した。

しばらく沈黙が続いたのち、やがて彼女は口を開いた。

「正確には、クリプトナスの戦いが終わってここへ帰ってきた時から薄々思っていた。

？アライヴ機関？が私たちの身体から取り除かれたことについてな」

「アライヴ機関って、私たちがブラックを欲しがっちゃう装置のこと？」

ナナシは小さくうなづく。

「レンを連れて三人でここへ帰ってくるとき、フィールに言われたのを覚えてるか。」

『お前たちのアライブ機関は全て取り除いた』と。はっきりあいつの言葉で聞かされて安心したが、同時に、私のなかの疑問も膨らんだ。アライブ機関を取り除かれたということは、私たちはもうブラックのエネルギーでなくても生きていけるということだ。

あのAm5-2とかいう黒い液体でな」

「それで何か不満でもあるの？ 私たちが望んだことじゃない」

「不満はない。ただ、私たちは未来の世界で、ブラックを倒すことだけが日々の使命だった。目的だった。でも、それを失ったんだ…… 私たちは」

リンの顔が不意打ちを食らったようになるのが分かった。

そう、ブラックを狩って生きることが一つの存在する目的であったアンドロイドにとって、それをもうしなくてもいいということは、大げさに考えて存在意義の消失。

そしてナナシは、物事を深く、しばし極端に考えがちな性格である。

「おかしな話だ。ブラックを倒して、ただ生きるだけの日々に興味はなかったが、それをしなくてもいいという日々にも、意味がないように思える。それを考えるために、私が私である意味を知るためにこつちへ来たのに、余計ぐちゃぐちゃになった」

「考えすぎだよ、ナナシ」

リンは戸惑い気味に口元をほころばせる。

「考えすぎ、か。分かっている、分かっているんだ。そんなことは」

自分に言い聞かすように、ナナシは三度目の「分かっている」を言う。

彼女は自分に何ができるかをよく知っているが、何をすべきかは知らない。

だから、こんな地図を持っているのに立ち往生するかのような言

葉が出る。

目的地にはマークがつけられているのに、そこへ行くための道が空白になっているのだ。

「そういえば」ふと言いだして、ナナシは続ける。

「あの、グミ……とかいうやつとは、どうなったんだ？」  
意外だった。

ナナシはこんなふうに 結論のでない話を続けて場が行き詰ったときに 気分転換のために話題を変えるような器用さはないはずだった。

純粹に疑問に思っ て訊ねてきたのか、それとも一緒に悩ませてしまった自分を気遣ったのかなのか グミとのわだかまりを彼女が気にかけていたことも含めて、リンはかすかな驚きを胸に感じていた。

「仲直りできたよ。別に喧嘩してたわけじゃなかったけど、色々話してさ。

これでやっと本当に？友達？になれたって感じかな。それでね、明日セントラルで復興式典があるでしょ？ グミと一緒に行く約束をしたの。

ミクとルカのコンサートが観たいんだって」

「ふっこうしきてん……？ 私たちがユートピア・タワーを出たとき、何故だかタワーの周辺がにぎやかだったが、なにかあるのか？」

「あれはパレードの準備をしていたんだよ。グラジオラスのことで中止かもって言われてたけど、予定通りやることになったの。グラジオラスは元々、独りぼっちって感じだったしね」

リンは宵闇のなかでも、すぐそれと分かる笑顔を浮かべる。

独りぼっちって感じ、というのは、グラジオラスが本島とは文明的、政治的に繋がりの絶たれた孤島だということを、彼女なりに表現したのだろう。

「レンも連れていくことにした。

ナナシも行くこうよ、変なことで悩んでないでさ。それに、私との？

約束？忘れたの？

ニンゲンとアンドロイドのみんなが仲良く暮らして、そのために世界を守るって約束」

「約束？」

強烈な動揺がナナシの心をゆさぶった。

覚えていないのだ、リンのいう？約束？を。

また記憶が抜け落ちていく。

いくら思い出そうとしても、見えないベールに隠されて見つかることが出来ない。

ナナシは空恐ろしくなった。

こうやって記憶がどんどん消えていったら、最後はどうなってしまうのだろうか。

仲間と過ごした日々も、誰かとの大切な約束も、笑顔も、声も、自分が生きていたことさえも……全て、なかったことになる。自分は初めから存在しなかったことになる。

そしてゼロになった自分が、世界のどこかで何も分からず立ち尽くしているのだ。

うつろに佇む自分の姿が脳裏に過ぎり、ナナシはいよいよ肩が震えだしたのを感じたが、リンはすぐに返事がくると思っていたのだろう、長らく間が続くので「どうしたの？」とでも言いたげなように、その笑顔が戸惑い気味になっている。

ナナシは焦った末に、「あ、ああ」とだけ返事をした。

「ナナシと私には、またブラックが襲ってきたりしたときに、『この世界を守る』っていうじゅーだいな使命があるんだよ？ だから、悩まないで。ね？」

この言葉も、笑顔も、いつか全部なくしてしまう時が来るのだろうか。

セントラル、ワールドターミナル。

ここはグラジオラスを除く他4都市へトレインが走る、いわばセントラルの玄関ともいうべきターミナル駅だ。各都市へと4方向に懸垂式モノレールで路線が敷かれている性質上、駅構内は島の形と同じく「」型で、また色んな都市の人間が出入りするため広大である。

駅舎は透明なガラス製のアーチ天井を持ったドーム状の建物で、ビジネスや政治の中心地であるセントラルにあつては、唯一の観光場所といえるショッピング街が駅構内に広がり、全ての都市の品々が一通りあるので「ワールドバザール」という別称がついている。

駅舎の中央にあるのは巨大な球体型のモニュメント・クロック。重厚な銅の表面に大小いくつもの時計盤が設置され、そのどれもが等しく時間を刻んでいる。

これは世界戦争によって様々な人種が一堂に集結したトランジスタにおいて、「我々の時間は等しく流れている」という？共生？の意味が込められた島の象徴だ。

しかしナナシたちにとって、そのモニュメントにはまた別の意味がある。

そう、未来世界で？もう一つの廃棄炉？に通ずる塔に蓋をしていた？月？……それがどうやら、あのモニュメントらしいのだった。

「ナナシ、あれってもしかして」  
リンが台座に置かれたモニュメント・クロックを指差す。

「ああ、間違いない。まさかこんなところで見ることになるとはな」  
そのモニュメントは、トレインを利用する者なら通りがけに必ず目にする。

エインセルからここワールドターミナルへ降り立ったナナシたちも同じだった。



ただ、本日は復興式典がユートピア・タワー前の広場で行われるため、ターミナル内の混雑は尋常ではなく、心を落ち着けてじっくり眺めていられる余裕はないのだが。

「おい、おまえ！」

肉の壁に挟まれて身動きの取れなくなったグミは、ほとんど涙目で自分の胸を抱えるように立ちすくんでいた。

レンは彼女の左手を掴み、やや強引に引っ張った。

「ぼさつとしてるとはぐれちまうぞ？ ほら、二人においてかれちまった」

「う、うん。ごめん……」

手を握られてグミはかっとな頬をあからめる、その熱気に涙は蒸発したようだ。

恋に恋する乙女の彼女だが、実は同年代の男子と話す機会はほとんどなく、ましてや手を繋ぐなどはこれが初めてと言っている。

彼女は祖母が経営するケーキ屋で日々働き、勉強は教育機関から送られてくるテキストをこなしたり、パソコンの液晶越しに授業を受けたりしている。

このように通信制の教育がこの時代の主流であり、学校もあるにはあるものの、それは一部の限られた子供 例えば両親がエリート実業家とか、名だたる政治家とか だけが実際に足を伸ばして通っている。

そのため、グミは自分よりずっと年下か、年上の男としか日ごろ交流がない。

ちよっぴりドジだけでも、一途に感情を貫く海人に胸のときめきを感じていたが、レンと出逢ってからそれも変わった。彼は自分と同じ14歳であると聞く。

アンドロイドなのも聞いた、聞いたが……強引に人混みをかきわけて突き進むレンに手を引かれる自分、という現在の状況が、グミには城から逃げ出した駆け落ち中の王子と姫のように感じられてならなかった。

(ああ、ダメよ。お城に戻らなきゃ……)

妄想はあふれ出し、とつくに蓋がきかなくなっていた。

(城なんて狭苦しい世界にいるくらいなら、オレのところに来てですって?)

(お父様も小うるさい教育係もみんなオレがぶっ倒してやる！ですって?)

どうしてそこまでしてくれるの……?)

(ああ、もう言わなくても分かるわ……感じる、あなたの？愛？を。どこまでも、世界の果てまでも私を連れていってくださいまし。あなたのいるところが私の生きる場所ですわ！)

幾本も読んで憧れた中世時代の恋愛ファンタジー小説のヒロインに、自分はとうとうなったのだ。グミはレンに手を引かれながら、うつとりした表情で一人盛り上がった。

「なーにニヤニヤしてんだおまえ……気味悪いぞ」

王子は振り返り、引き気味な声で姫に言った。

\* \* \*

四人はようやく人混みから抜け出て、ターミナルの出入り口付近にいた。

「あーんもうっ！くっつくなー！」

リンは大声を上げる。

グミがレンの左腕に絡まり、離れようとしないのだ。

しかも彼女は困惑した表情のレンをよそにすっかり恋人面で微笑んでいる。

リンが躍起になるのも無理はなかった。

「どうして私たちの仲を裂こうとするの？リンちゃんはレン君と兄妹なんですよ。」

だったらレン君が誰と付き合おうと、それをやめさせる権利はないはずよ」

グミは勝ち誇ったような顔で言う。

いつもの大人しく、友人思いの彼女は今や？女？になっていた。

「うぬぬぬ……」

反論できず、リンは爪が食い込むほど強く両手を握りしめて身体を震わせた。

「ねえナナシ！ これなんとかしてったらあ！」

後ろで黙っていたナナシに、リンはとうとう声を荒げて助けを求め。

ナナシは呆れるように鼻を鳴らし、「何が何だかよく分からないが……」と言いつつ、三人に歩み寄っていき、グミの前で立ち止まるやポケットから黒いチップを取り出した。

「リンを困らせたたり悲しませたりしたら……容赦しないぞ」

そしてクロガネの入ったチップを腕時計にかざして、一言。

「はいもう離れますごめんなさいもうしません」

ナナシの鋭い眼光にただならぬ？殺気？を感じ、グミはあっさりリンから離れた。

その後、リンとグミは「ごめんね！」と言い合って仲良く歩き出し、一件落着、という感じだったが、

(オレが困ったり悲しんだりするのはいいのか……?)

リンはナナシの物言いに心のなかで首をかしげるのだった。

「にしてもよー……どこを見てもニンゲン、ニンゲン。うんざりするよなあ」

リンは頭の後ろに両手を回し、ため息を吐くように言う。

ユートピア・タワー方面の出口を出て、歩いて10分もすれば復興式典のメイン会場へと辿り着くのだが、そこに至るまでの車道は本日に限り全面封鎖。そこを乗用車やトラックの代わりに大勢の人々が道幅一杯に行列を成してのろのろ進行している。

上から見下ろせばそれは無数の人の頭が織りなす川の流れた。

小休止を取った四人も、再びその流れに加わっていく。

「確かにすんごいヒトだよ。のき爺は来なくて正解だったかも」

のき爺は「老体に人混みは辛い」と言っただけで来なかった。ちなみに海人も？ 謹慎中？ という立場を考えて来ていない。

しかも会場全体の警備にはセントラル署があたっており、万が一エインセル署の人間も動員されていたら、出くわしてしまったときにどんな顔をすればいいのか。

それに復興式典の様子はテレビで生中継される。

ナナシがいるので行きたいのはやまやまだったが……彼はいまごろ、会場近辺の空を飛びかうエア・グライドに乗ったテレビ局のカメラクルーが中継する映像から、ナナシを見つけ出そうと必死になっていることだろう。

「のき爺…… 本当の名を、ノーキー・フィール・グッド」

二人の後ろで、ナナシはぼつと呟いた。

周りの喧騒にその声は掻き消され、誰の耳にも届くことはなかった。

前日に「きょうだい」という単語を聞き、のちにその言葉の意味を知った彼女は、すぐにフィールとのき爺のファミリーネームが同じであることに勘づいた。家族、という概念に乏しい彼女でも、のき爺はテレビのニュースでフィールの名前や顔が出るといぶかしげな表情をしてチャンネルを変えたり、やけに馴れ馴れしく名前を呼ぶのを不審に感じて、二人には何らかの繋がりがあるのではないかと思っていた。

しかし本人に訊ねてみても適当にあしらわれるだけ。

今、リンにそのことを聞こうとしても、彼女はグミと一緒にセントラルの近未来的な街並み 特には、復興式典に合わせて企業のアド・バルーンが上空に浮かんでいたり、両脇のビルにボーカロイド二人の垂れ幕ポスターが下がっていたりしている を見て大はしやぎしているので、何も言わないことにした。

ちなみにリンはぶすつとした表情で、折につけて訊ねられるリンの「ねえ、アレすごくくない!？」といった問いに「ん、ああ、そだな」と淡泊に答えている。

ナナシがのき爺に質問したときも、大体こんな感じだった。

「はあく……あと10分で開会式が始まっちゃうのに、これじゃ広場につけないよ」

グミは復興式典のパンフレットと右手の腕時計を交互に見やる。

女の子らしい白とピンクの時計盤が示す現在の時刻は9時50分、この調子だと10時の開会式までにメイン会場へはたどり着けそうもない。

ミクとルカのコンサートを間近で観たかっただけに、グミは残念そうな表情を浮かべる。

「開会式って、あのグラサンオヤジがくっちゃべるだけでしょ？」

ミクとルカのコンサートはその後だから、きつと間に合うって！」

「う、うん……でも、こんなに人がいるんじゃないかと会場には入れないよ。」

もつと早く来ればよかった」

「でもさあ、ステージとかどうすんだろね。」

昨日、広場を通ったときにはそれっぽいのは見なかったけどなあ」

「チップからドーンって出すんじゃない？ どっちにしても前にいる人しか観れないよ」

ため息と共にグミがつつむきかけたその時　花火が一発、二発、

青空に打ちあがった。

周囲のざわめきが途絶え、みな一斉に空を見上げる。

「あ、リンちゃん、あれ！」

音を立てて弾ける水色とピンクの花火の向こうから、一機のエア・

グライドがこちらにやってくる。グミが大声でそれを指差すころには、その場にいる全員が気付いていた。

ミクだ。

エア・グライドに吊り下げられた鳥かごのような形をした乗り物のなかにミクがいる。

そして大音量で鳴りだすエレキギターのサウンド。

ファンなら誰でも知っているミクの有名なロックナンバーのイン

トロだ。

恐らくはビルの屋上や周辺のどこか、人目のつかないところに音響機材を設置しているのだろう、街そのものがミクのステージと化したのである。

プログラムにはないサプライズに人々はどよめき、それまで「暑い」だの「汗臭い」だの愚痴ばかりがこだましていた気だるさが一変、歓声や絶叫が落雷のように大気を震わせた。

歌姫がマイクを口元に寄せ、ドラムのフィル・インと共に歌い始めると、人々の盛り上がりはいよいよ最高潮に達する。

ミクの乗り物は間奏の間に人々の頭上すれすれを飛びかい、彼女が伸ばした手に運よく触れて大興奮する人、「パンツ見えたか!？」  
「あともう少しだった!」だのミニスカートの秘密に迫ろうとする人など、彼女の一挙手一投足が火に油を注ぐかのように熱狂が渦巻き、失神する人まで出る始末。

ミクはまさしく国民的アイドルであった。

「ふーん。あれがミクか。テレビで観た時から思ってたけど、やっぱりそっくりだな」

「ほめてるのか？ それは」

この場で平常心でいられるのは、恐らくナナシとレンの二人ぐら이다らう。

グミは憧れのアイドルを一瞬でも間近に見られて顔を真っ赤にしているし、特にミクのファンではないが友達や周囲のニンゲンが踊り狂っているのを見てリンも大はしゃぎだ。

いや、しかし。

「ん……?」

「どうした、レン？ 私の顔に何かついてるのか?」

このある種の大パニックというべき状況下で、落ちつき払った人物が、もう一人いた。

「いや、やっぱり気のせいだったみたいだ。知ってるやつを見た気がしてな」

レンはナナシの肩越しにどぎついピンク色の髪の毛を見た。それはすぐに人混みに掻き消えていき、また周囲の人間が押し合いへし合いしてくるので、気にかけるどころではなくなった。ただ、レンの予感したとおり、そのピンク髪の持ち主は？ ミキ？ であるし、更にその隣には？ キヨテル？ もいるのである。

\* \* \* \*

「まったく……お祭り騒ぎというより、ある種の地獄絵図ですね、これは」

キヨテルは人混みから歩道へと抜け出て、襟元を正しながら辺りを見渡す。

両脇の歩道は混雑を予期して休憩、避難用のスペースとして空けられている。

警備員が等間隔で哨戒しているほか、救急隊員もテントを張って待機している。

歌姫の登場に狂喜乱舞して失神した人や怪我人が続出しており、どこもてんわやんわだ。

人々の歓声がひと際高鳴り、共鳴して天空を突き抜けた。曲が終わったのだ。

ミクは笑顔で手を振りながらユートピア・タワーの方へと遠ざかっていく。

場が静まるまでのあいだ、キヨテルは顔をしかめて両耳をふさいでいた。

まったく、これだから大衆音楽というのはやかましくてかなわない。

心静かに聞いているのが音楽だろう、まったく、まったく……クラシック好きなキヨテルは周囲の狂騒がばからしくてたまらず、「まったく」という言葉が何度も口をついて出た。

「ルカ様はどうしたのよお、ミクなんてどうでもいいってば！」

人々が惜しめない拍手と声援をミクに送るなか、ミキだけはブーイングを飛ばしていた。

キヨテルは彼女の顔を見下ろして、また「まったく」と言いかけそうになる。というのも、ミキの身体にボディペイントが増えたのだ。両頬に彫られた「Y」字の黒い線。いよいよアニメやゲームに出てくるようなアンドロイドキャラクターの顔つきになってきた。

昨晚、ラヴのメンバーに頼んでやってもらったらしい。

ミキ曰く、「ルカ様にあつたとき仲間と認めてもらうため」とのことだ。

「ルカはじきに出てきますよ。？スペシャルゲスト？としてね」

キヨテルはやけに意味深な言い方をして、「そういえば」と肩越しに振り返った。

ミキもそれにつられ、のろのろと進行を再開した行軍に目を向ける。

まだ興奮冷めやらぬといった印象で、わいわいはしゃいだ声が所々から上がっている。

「やはり、彼ら三人は生きていましたね。もう一人いましたが、あれは調べたところでは？グミ？という人間の少女。彼らアンドロイドは人間として社会に溶け込んでいるようだ」

キヨテルはグミがリンたちをアンドロイドだと受け入れた上で、彼女たちに接していることを当然知らない。

だからグミがだまされていると思ひ込み、失笑とも嘲笑ともつかない顔をする。

「レン君のボディスーツに仕込んだ発信機のポインターは、あるとき急速な勢いで画面から外れていった。恐らくエア・グライドで移動したのでしょうね。行き先はユートピア・タワーでしょう。ということは、フィール博士に我々の存在が知られているかもしれない。レン君の記憶を紐解けば容易に分かることです。僕としたことが失敗でした。」

欲張ったのがいけなかった。組織連中の始末に彼らアンドロイドも



巻き込もうとしたのがね……まったく、彼らは彼らで別の機会に葬  
つておけばよかったです。失敗だ、本当に」

言葉では自虐しているものの、表情は自分を責め、悔やむ時のそ  
れではなかった。

腕一本で崖の縁にしがみつき、必死に踏ん張っている人間を見下  
すときの表情。

もっと怯えてみる、命乞いをしてみる、と哄笑しながら手の甲を  
踏みにじるときの表情。

そう、彼は自分の失敗など微塵も気にしていない、いや失敗とさ  
え思っていない。

「だから、フィール博士には……」

彼は口元を歪める。

アレツチエド・フランスに死を突きつけたときの、死神の笑顔  
だ。

「いよいよ死んでもらわなくてはならない。僕たちのこれからのた  
めにね」

言って、キヨテルはミキの頭にほんと手を置く。

前髪をなでられながら、ミキはいささかきよとんとした表情だ。

「キヨテルがそれをやるの……？ フィールを、あんたが？」

「いや、僕たちはただ見ているだけでいい。見物人さ。時代の終わ  
りを間近に見るんだ。」

下手人は君のよく知っている人ですよ。あ、そうだった、？人？じ  
やなかったな」

直後、爆発のような歓声があがった。

ミクの登場と同じぐらいか、それ以上の轟きだ。

もう一人の歌姫、ルカ。

彼女はエア・グライドに単身乗り込み、淡いピンクの髪を切る風  
に乱す。

それに気付いたミキはもはや発狂に近い雄叫びをあげて歌姫の降  
臨を出迎えた。

しかし、ルカは予想だにもしない行動を取った。

エア・グライドから飛び降り、群衆の真っ只中へと飛び降りたのである。

そしてどよめきは一瞬、途絶え、鼓膜をつんざく女性の？悲鳴？が周囲に響き渡った。

虚空に舞い上がる鮮血、血しぶき。

ルカは両手に持った？双剣？で人々を無差別に斬りつけ始めたのである。

「あらら……これじゃ本当に？地獄絵図？じゃないですか」

歌姫の暴走に阿鼻叫喚し、逃げまどい、無惨に斬り刻まれる人々。

血染めの幕が上がり、始まったのだ。

時代の終わりが。

t o b e . . . . c o n t i n u e d .

&lt;&lt;Chapter 3&&&>> (後書き)

次回 予告

Rock・17?ワンコール・ラヴコール?

乞うご期待

## Rock・17?ワンコール・ラブコール?

意識を取り戻したとき、こんな言葉が即座に思い浮んだ。

? Dr・フィールグッドを殺せ?

それは神の下した絶対的な?命令?のように思考を蹂躪し、支配した。

抗いようのない強迫観念。

頭のなかに仕掛けられたいくつものスピーカーが大音量で繰り返す。

? Dr・フィールグッドを殺せ!?

逃れようとすれば強烈な頭痛が襲ってくる。

まるで四方八方を茨でがんじがらめにされた檻のなかへ閉じ込められてしまったかのようだ。鉄格子の隙間に伸ばした手に棘が刺さり、痛みが全身を貫いて、かろうじて棘の先端が届かない檻の中央で大人しくしているほかない。

でも、檻のなかにいるのは嫌だ。ここから早く出たい、そんな葛藤。

朦朧とした意識のなか、男の声が遠巻きに聞こえてくる。それも何人かの。

初めはくぐもってそれが人間の声だということさえ不明瞭だったが、もやがかった視界が晴れていくにつれ、音が次第に輪郭を持ち始め、認識できる言葉として彼女の耳に届いた。

「起動確認。思考回路にノイズ。」

「精神パターンを無視したプログラミングが原因かと思われます」

「構わん。時間がない。?剣?を使った戦闘モデルのインプットは完了しているか?」

「完了しています。各機動部、機関、共にオールグリーンです。ただ、精神バランスが」

「任務さえまっとうしてくればよいのだ。人間でもないやつ」の心

の安寧などどうでもよい。早急に準備を整え、出撃させる。フィールの開会宣言が始まるうとしてしている」

「……了解」

研究員らしき男の顔が二つ、まばゆい白の光のなかに浮かんでいく。

私はどこにいるのだろう。W・A・Fのエージェントにとある施設の一室に連れ込まれ、衣服を脱がされ、寝台に寝かされ、身体に至る所にプラグを差し込まれ……そこまでは覚えている。

改造は完了したらしい。だから、こんなに苦しいのだろうか。

嫌だ、殺したくない、やめて、フィールを、パパを殺してなんて命令しないで。

そこから幾度となく「嫌だ」と「やめて」を頭のなかで繰り返し、彼女はいつの間にか深い眠りに落ちていた。

次に目覚めたとき、彼女は全身に風を感じていた。

うつすら開いたまぶたに、男の声が入り込んでくる。

「作戦開始地点に入ります」

操縦桿を握るその男は、いつも歌番組の収録などで出演しているテレビ局のロゴマークが入った腕章を左腕につけ、左耳にあてがった携帯端末で誰かと交信している。

確か、復興式典で自分は歌を披露することになっていた。

しかし、手元にあるのはマイクではない。

十字状のつばがついた鉄製の細長い刀身を持つ剣がある。それも左右の手に一つずつ。

初めて目の前にする物なのに、どういう訳か自分はそれの使い道を？よく？知っている。

マイクのオンとオフを切り替えるのと同じぐらい、簡単に扱えるのだと分かる。

ただ、何故知っているのかは分からない。これも戦闘用への改造がもたらしたものののだろうか。周囲を流れるセントラルの高層ビ

ル群をぼんやり眺めながら考えていると、

「立て。これから先はお前が操縦するんだ。

ハンドルを握れば自ずと操縦の仕方が頭に浮かぶはずだ、それと自らの目的もな」

突風に流されないよう男は大声で言い、足元のハッチを開けてパラシュートを取り出す。

「どこへ行くつもりなの……？」

男はパラシュートの入ったバックパックを背中に装着している。

この手際の良さ、テレビ局のスタッフとは思えない。恐らくそれになりすましたW・A・Fのエージェントだ。

「このシナリオの？悪？は全てお前一人ということになっている。では、グッド・ラック」

茶色がかった短髪にサングラスをかけたエージェントは、ためらうことなく飛び降りていって、人気のないビルの陰へと落下傘を開いていった。

彼女の脳裏にエージェントの意味深な言葉が反復される。

？このシナリオの悪は全てお前一人？

マニュアル操作にしまじなしの機体はパイロットを失って大きく斜めにかしぎ、彼女は慌てて操縦桿を握った。すると、エージェントの言葉通り、初めてパイロットとして乗り込んだにも関わらず、足元のペダルとレバーの意味することが分かり、これから向かうべき場所も分かった。全ては頭脳回路に？インプット？されているらしい。

人々の歓声が聞こえてくる。

機体は見慣れたユートピア・タワーの裏手を横切って玄関前の広場上空へと到達。

眼下には人の大群が絨毯のように扇状の広場の形に沿って広がり、大波小波を打っては声を共鳴させて大気を震わせている。耳が痛いぐらいのけたたましい騒ぎだ。

その人混みの中央に特設された円形のステージ。

今、一人の黒いスーツを着た男が短い階段を上っている。

「あ……あ……」

男の姿を一目見た彼女は、苦しそうにうめき声をもらした。

まただ。あの声だ。？Dr・フィールグッドを殺せ？

壇上が上がって大衆を見渡しているのは紛れもなく？フィール？  
だ。私のパパだ。

それをみんながよってたかって？殺せ！？と命令してくる、強制してくる。

人類の豊かな暮らしを支えてきた大科学者へ送られる大衆の惜し  
みない賛辞、声援は、今の彼女にとって脳内に鳴り続けるのと同じ  
言葉に聞こえている。

？Dr・フィールグッドを殺せ！！？

操縦桿から手が離れ、ずるずると床に片膝がつく。

彼女は戦っていた。思考を支配する声、言うなれば？神の宣告？  
と。

「うあああああああっ！」

戦いの果て、彼女のなかの何かが砕けちった。

静かに立ち上がり、また静かに操縦桿を握り、機体の飛行体勢を  
整える。

まるで何事もなかったかのような振る舞い。しかしその双眸は、  
洗脳された少年兵のような純粹な？殺意？に満ちている。そう、W  
A・Fが彼女の頭に仕組んだ神の宣告たる？Dr・フィールグッド  
を殺せ？というプログラムと、彼を慕い、一途に思い、また彼から  
の愛を渴望する彼女の心とがぶつかって火花を散らせ、結果、彼女  
のなかには誰ともなく人を殺せばいいという迷える殺意だけが残っ  
た。

？暴走？である。

エア・グライドで直進した先、彼女は足元に置いた双剣を握って  
やにわに飛び降りた。

フィールから離れた場所で降下したのは、彼女の理性が一片でも

残っていたからだろう。

しかし、群衆のなかへ降り立った後は悲惨だった。

彼女は周囲にいる人間という人間を、大人も子供ものべつ幕なしに斬りつけ始めた。

今や彼女の視界に映っているのは人間ではない。

とめどようもなくあふれ出す殺意を満たすための道具か何かにか見えていなかった。

しかし、一人、二人、三人……何人斬りつけ、返り血がいくら我が身を汚そうとも、殺意が一向に晴れる兆しはなかった。

「このばつきやるー！」

上半身、右側に突然の衝撃。

盛大に吹き飛ばされて全面ガラス張りのビルの入口に突っ込んだ。まるで巨大な振り子の鉄球と激突ような衝撃だ。しかし、痛みはない。

彼女は碎け散ったガラス片を踏みならしながら、かまち框越しに正面を見据える。

悲鳴を上げて逃げ去っていく人々の空白に、どこかで見たような金髪碧眼へきがんの少女がイエローのラインが入った鉄製のグローブを両手に「カン！」とならしている。

続いて、その横に颯爽と舞い降りるツインテール。

リン、そして、ナナシだ。

「おまえ？ルカ？だな……？何のつもりだ」

静かに怒りを湛える澄んだ声、眼底を射抜く鋭い眼差し。

通常精神なら気圧されて怯んでしまうところが、感情の一切が殺意によって麻痺した今のルカにとっては、ナナシは新たな？標的？にしか見えなかった。

彼女は一足飛びに框を飛び越え、急速に間合いを詰めてナナシめがけ剣を一振り。

難なくかわされ、続けて左手の剣で突きを繰り出そうとする。

「いい加減にしろお！」



えぐられるような衝撃が背中から身体を宙へと押し上げた。

リンが例の必殺パンチをアップパー気味にお見舞いしたのだ。必殺技の名前を叫ばない辺り、あれが幼稚なことと気付いたのか、あるいはその余裕がないほど頭にきているのか。

彼女の表情を見る限り、後者のようだった。

「ぐあ……っ！」

リンの表情が痛みに歪み、宙を見上げるような格好になる。

彼女の攻撃で宙に身体が浮いたルカは、背後へそのまま直進的に足を伸ばしてリンの顔面を蹴りあげたのだ。着地後、ルカはさすがに反転すると共に横薙ぎの斬撃を繰り出す。

金属音が高らかに響く。慌ててガードしたリンのグローブと剣が激突し、完全に左半身がから空きとなったところへ、ルカは左手の剣で勢いよく突きを繰り出した。

夜空を横切る流星のような刃の閃きはリンの右肩を貫き、ルカはそのまま急加速して先ほど自分が突っ込んだビルの壁へとリンを叩きつけた。

「リン！」

ナナシだけでなく、周囲にいるレン、グミも一様に声をそろえた。傍から見ているそれは、人間なら内臓がつぶれていておかしくない光景だったのだ。

ルカは苦悶に歪む彼女の表情を見て楽しもうなどという気配はさらさらなく、半歩後ろへ下がって距離をとるや、その胴体めがけ袈裟がけに剣を振り下ろそうとした。

途端、何か強力な力が働く。そのせいでまったく腕が動かない。まるで斜めにかざした刃が天井の柱か何かに引っ掛かってしまっているかのようだ。

「リンから離れる」

肩越しに振り返ると、そこにはあの瞳があった。

刃の先端が彼女の右手によってきつく握りしめられている。強力な力とはこれだった。

ルカは即座に腰を落として彼女の腹に肘打ちを放ち、「……っ！」  
怯んだところへ振り向きざま横一文に刃を振るったが 相手の身  
体は弧を描くように宙を舞っていた。

「同じアンドロイドのよしみだ。初めは手加減してやろうかと思っ  
ていたが」

ナナシはズボンのポケットから黒いチップを同時に？二枚？取り  
出す。

「もう容赦しない」

そのうち一枚をインストール、続けて腕時計の反対側の挿入口に  
二枚目のチップを入れ、普段よりひと際大きな白い電光のほとばし  
りと共に駆けだした。

相手が二刀を振るうのなら、こちらもちからの流儀で二刀を振る  
うのみ。

右手にクロガネ、左手に拳銃を握りしめ、新たな戦いの始まりを  
二連射の銃声が告げる。

ルカはかがんで一発を回避、もう一発を刀身に受け流し、走り出  
す。

まるで何年も修羅場を戦い抜いてきたかのように分かる。相手と  
の間合い、攻撃を繰り出してくるタイミング、反撃の機、二手、三  
手先の相手の動きが。

彼女の身のこなしは到底？歌姫？とは思えないのだが、艶つやのきら  
めく桃色髪を振り乱し、時に宙を舞い、時に反転し、スリットの入  
ったチャイナドレスの裾をひるがえして斬撃の応酬を繰り広げるア  
クロバティックな姿は、いつもステージで見せるそれと何ら遜色そんしょく  
のない美しさがあった。それはナナシ、彼女にも言えることだった。

「おい、リン！ 大丈夫か、リン！」

「リンちゃん！」

二人が目まぐるしい戦闘を繰り広げる傍ら、レンとグミの二人は  
壁に背をつけて座り込むリンの下へ駆けよっていた。

「大丈夫、私の傷は大したことない。それより」

リンは二人に心配をかけまいとして、いつもの笑みを浮かべてみせる。

ついで銃声と金属音を上げてぶつかり合う二人を見やった。

「ルカ、一体どうしちゃったんだろう。こんなのって……」

道端には点々と、ルカに斬り刻まれた人々がうめき声を上げて横たわっている。

救助隊も二人の戦闘があるために近寄れない様子だ。

グミは辺りに散らばる血しぶきと動かなくなった人とを見て、思わず口元を覆った。

「あいつもアンドロイドなんだよな」

「うん。それとあのグラサンオヤジが言ってたんだけど、一週間ぐらい前から行方が分からなくなってたんだって。だぶりゅーなんちやらとか、そこに連れていかれたのかもって」

続けて言いかけようとしたとき、リンはリンの表情の変化に気付いた。

何かを一点に目を丸くし、愕然がくぜんとしている。

「どうしたの？ レン」

「あ、あいつだ……？ キヨテル？」

「だれ？」

レンは問いかけに答えず、また「ちょっと、どこ行くのよ！」という制止も振り切って走り出した。向かいの歩道に黒いスーツを着た男がビルとビルの間道の道に入っていた。

一瞬しか見ていないが、あれは間違いなくキヨテルだ。

グラジオラスでの一件で彼に裏切られたレンは、いてもたってもいられなくなって駆けだし、ガードレールを超えて歩道へと入ろうとした。瞬間、目の前を？弾丸？が横切った。

「レーンくん」

驚いて急停止した彼の耳に、聞き覚えのある声が入ってくる。

振りむいてみると、そこには？ミキ？が立っていた。

デザートイーグルの銃口をこちらに向けて。

「お久しぶり。そして、さよなら」

ミキは無邪気な表情で撃鉄を引き、次に引き金さえ引いた。

何のためらいもなく。とっさに身をひねったのが幸いし、弾丸は頬をかすめていった。

「あーらら。外しちゃった」

銃口からあがる硝煙越しに、ミキは語尾に音符が付きそうな軽さで言う。

「お前がいるってことは、さっきのはやっぱりキヨテルなんだな」

「そ。あんたが邪魔しそうだったから、飛び出してきちゃったの。それに……」

ミキはレンの背後で宙を舞うル力を見やる。

この緊迫した状況とは似つかわしくないほど、うっとりとした？ファン？の表情で。

「ル力様がこんな近くで戦ってるんだもの。いてもたってもいられなくなっちゃったわ」

レンはじりじりと足を動かし、逃走を図ろうとしている。

「動かないで！ 今度は当てるよ？」

あっさり看破し、ミキは口端をつりあげる。

しかし、その小悪魔じみた表情に疑問符が一瞬張り付き、やがて再び笑みが浮かんだ。

レンの肩越しに、先のグラジオラスの一件で散々いたぶってやった女　リンが歩み寄ってくるのが見えたのだ。

「行っていいよ、レン。こいつの相手は私がする」

「そんな怖い顔しちやってどうしたの？ あ、もしかしてやいちゃってるんだーあ。」

だってわたし、レン君と？キス？しちゃったもんね」

リンの眉じりがびくつと動いた。

キスが男女の間で何を意味する行為なのか、彼女はグミとの交流のなかで知っている。

何のことやら、と微妙な面持ちのレンをよそに、リンの表情に怒

りがみなぎり始めた。

「っへええええ。あんた、あいつとキスしたんだ？」

「えっ？ な、なんのこと？」

ただならぬ殺気をリンから感じ、彼は「そんじゃあ任せたからな！」と半ば逃げ出すように走り去っていった。

リンは小声で「あいつ帰ってきたら……」ともらし、次にキツとミキを見据えた。

「ちよつと何なの？ わたしを殺すつもり？ 人間だよ、わたし」

「別に殺すつもりはないよ」

リンは跳躍して緩やかに右の拳を振り上げ

「ぶつ飛ばしはするけど」

見た目通り？鉄拳？を振り下ろした。

右肩に痛みが走る、先ほどルカに受けた傷だ。

「あらあら…… 本当にわたしを殺すつもりだったんだね」

ミキが立っていた部分のアスファルトが砕け、陥没し、小さなクレーターが出来る。

驚きはそこに向けるべきではない、人間のミキが今の攻撃を難なくかわした点にある。

「やっぱりあんた、タダモノじゃない」

「あんたみたいなの？お子ちゃま？にほめられてなーんもうれしくないわ」

「お子ちゃま……？」

「お子ちゃまよ」

両者、しばし静止。

「やっぱりぶっころすー！」

普段の陽気さからは想像もつかない過激な発言と共に、リンは飛び出していった。

\* \* \* \* \*

「つくそ！ あいつ、どこ行きやがったんだ！」  
ビルが乱立する十字路を、レンはキヨテルを探して走り回っていた。

普段はビジネスパーソンが行きかう場所なのだろう。十字路の間は広く、街路樹やベンチのある小さな広場がある。

「こちらキヨテル」

レンがあさつての方へ走っていくのを見計らい、キヨテルは建物の陰から歩み出てきた。

右耳に携帯端末をあてがい、W・A・Fのエージェントと交信している。

「計画はとん挫しかけています。」

本来なら、ルカが開会宣言を始めたフィールの前へと降り立ち、その首元を斬り裂くはずだった。自分が設計したアンドロイドが暴走し、ライヴの演出のために持たせていた剣で殺されるという、皮肉たつぷりのショーになる予定が……彼女は本当に暴走してしまった。次の一手、W・A・Fの老人たちはどうするつもりなんです？」

道を挟んで四方に並ぶ高層ビルが太陽光をさえぎり、辺り一帯はうす暗い。

その静寂に響く、「ああ」「そうですか」というキヨテルの相槌。そして。

「計画は下手人を変えて続行ですか……僕にやらせてください」「スピーカーから「は？」という声がもれる。」

「聞こえませんでしたか？ その下手人、僕に引き継がせて下さい。あの方には直接会って色々と訊ねたいことがあるんですよ」

「大丈夫。彼の近くに潜りこめる当てはありません。」

僕も昔、あのコートピア・タワーにいたことがあるのでね。通行証、捨てずにとつてあるんですよ」

キヨテルはおもむろに歩き出した。

「フィール博士の現在地を教えてください。これから向かいます」

「

t  
o  
  
c  
h  
a  
p  
t  
e  
r  
  
2

開けてはいけない扉だった。

ユートピア・タワーの地下、アンドロイド研究機関。

公には秘密にされているブロックだ。

そのなかでも更に嚴重なセキュリティがしかれた特秘エリア。そこに研究機関のリーダーであるDr. フィールグッドと、彼に許可された一握りの人間以外は立ち入りを固く禁じられた部屋がある。

氷山キヨテルはその部屋の扉を前にしていた。

生の心臓にナイフをあてがわれているような慄然りっぜんとした面持ちで。

白衣を着た男が指紋、虹彩、カードと考えられるあらゆる認証をすませ、扉のロックを解いた。氷山キヨテルをこの？パンドラの匣はこ

？の前へと誘った人物。研究機関発足当時の古株にして、W.

A. F. のエージェント。

すなわち、？スパイ？である。

彼は勝手知った我が家に招き入れるかのように、部屋のなかへとキヨテルを案内した。

照明は足元と天井に小さなライトが深い蒼を放っている以外はほとんど暗闇。

キヨテルは一足先に暗闇のなかへ吸い込まれていった男の背中を追った。

日々焦れていた？真理？へいよいよ辿りつくのだという、期待、不安、それらが早鐘を打つ心臓に圧縮されて彼の呼吸を荒くし、両足の動きを急かせた。

Dr. フィールグッドは彼にとって憧れだった。かの世界戦争後の技術革新？インストール・チップ？の発明、物資保存のシステムを構築し、他にエア・グライド、トランジスタの都市開発に携わるなど、常に機械工学の第一線に立って人類に貢献してきた。

彼という？天才？がいなければ、そもそも人類はこの太平洋上に



トランジスタを築くことさえままならなかつただろう。仮に出来たとして、物資の置きどころや廃棄物の処理に物理的な限りのあるドームのなかでは、人類の前途も長くはなかつた。そこを彼が？四次元？という新たな次元を切り拓いたことで、人類の未来も同時に拓かれたのである。

その天才の生き様を手本にし、目標にしているのは、当然、キヨテルに限ったことではない。分野を問わず多くの科学者たちが彼を慕い、国民からも厚い信頼を受ける。

そうして常に人類の生活に革新的な機械技術をもたらし続けてきた彼が、近ごろ、？アンドロイド？の製造に着手した、と発表した。公には？ボーカロイド？と呼称されたその人ならざる人の開発は、すでに完成手前の域に達しているという。過去に軒並みあつたSF映画の内容がいよいよ実現するにあたり、国中が諸手をあげて歓喜に酔いしれた。

彼らをより興奮させたのは、記者団の前で発表して見せたボーカロイドの完成モデル。

等身大の3Dパネルで投影された、実際の人間と寸分たがわぬ容姿、それも？絶世？がつくほどの美女。これが完成後には？歌姫？として天使のような歌声を響かせるというのだから、その実現に国中の誰もが期待を寄せるのはごく自然のことだった。

多くの者が彼の発表に賛意を示すなか、ごく少数ながら、倫理観やボーカロイドの人々の暮らしにおける実用面での運用といった問題から、反感を持つ者もいた。

冰山キヨテルはその一人。彼には？アンドロイド？という存在そのものに生理的な嫌悪があるのだが、腑に落ちないのは、Dr. フィールは何故アンドロイドの製造に着手したのか。

『人々に？共通の希望？をもたらすため』

Dr. フィールは会見の席でそう言った。

確かに、人種問題が絶えないトランジスタにあつて、人ならざる人であるボーカロイドは人類共通のマスコットになる素質を十分に

秘めていると言える。だが、本当にそれだけなのか。アンドロイドの製造なんて一朝一夕で発想から着手にまで至れるはずがない。

これは長い歳月を要して構想されたDr. フィールの？生涯をかけた計画？なのだ。

そしてそこには並々ならぬ計画成就への？執念？がある。

キヨテルは研究室のテレビの前で、それをありありと感じ取った。これまで一片たりとも私欲をちらつかせず人類の発展に尽力していた大天才が、目標にしていた人物が、時代を超えた人々の夢であるとはいえ、実利的な用途が明らかでない物を開発した。

何故だ。

冰山キヨテルは疑念を晴らすべく、分野違いのフィールのアンドロイド研究機関に、製造スタッフのアシスタントとして潜り込んだ。そこでスパイまがいの行動を繰り返しているうち、本物のスパイと遭遇したのである。

しかもそのスパイはフィールの信頼を得、？アンドロイド計画？の真相が全て詰まった部屋に出入りを許された数少ない人物の一人であった。

その彼の手引きによって、今、キヨテルは？真理？を目の当たりにしていた。

コントロールパネルやオペレーションデスクの置かれた円形状の部屋。水族館にあるような大きな水槽がぐるっと部屋を一周し、暗闇にしつとりと？青白い光？を放っている。

水槽のなかにいるのはマグロなどの魚類では当然ない。水さえも入っていない。

あるのは、ただ、光。青白い光。それが水槽一面に満ち、静かにゆらめいている。

キヨテルは光に魅入られ、恍惚じゆうじゆうとした表情でガラスに手を触れようとしたりした。

「おっと、気をつけてくれよ」

キヨテルは寸でのところで手を止めた。

「そのガラスは通常の防弾ガラスよりも分厚い特殊素材で出来ているから、たとえ爆発が起きたって壊れることはないがね……ただ、念のためだ。」

そのガラス一枚隔てた先は、もう我々のいる？三次元？ではない」

キヨテルは肩越しに男を見ながら、一步、二歩、ゆっくり退いた。

「……？四次元？が広がっているんですね。このガラスの先は」

男は小さくうなづく。

いつも不敵に微笑んでいるのが、この男の特徴だった。

「四次元という空間は我々には視認、体験することの出来ない絶対不可知の領域。」

君の専門分野だ。多くを語らずとも分かっているだろう」

「ええ。ですが……何故、こうして目の前に見えているんです？

？青白い光？として」

「それは？人の魂？さ。彼らが光を放っていることで、我々はこうして四次元という空間の広がりを目の当たりにしている。ただ、あくまで？疑似的？にだ。」

四次元空間のなかは多元的で複雑な構造をしている。いや、そもそも決まった形などない。我々の物理法則が当てはまらない世界だからな。ただ、三次元にいながらその空間を見る分には、こちらの物理法則に則って視認の処理が行われるようだが」

直後、「無駄なお喋りだった」と男はおどけるように手を振った。

キヨテルは依然として真剣な面持ちを崩さない。

「人の魂とアンドロイド計画……何か、関係があるんですね」

「ああ。むしろ、魂という存在があるからこそ、フィール博士はアンドロイドの製造に着手した。というのも」

研究者の間ではもっぱらの噂だった。

Dr. フィールグッドがボーカロイド？ミク？を製造したのは、過去の世界戦争で失った初恋の人をよみがえらせるためだという。そこには彼の天才ぶりに嫉妬する研究者の僻<sup>ひが</sup>みが多分に含まれているので、情報源の曖昧さと相まって信憑性には乏しいが、しかし、

あながちあり得ない動機とも思えない。

キヨテルはこの説を受け入れたくはなかったが　　男は言った。  
例の軽々しい口調で。

「初恋の人にそっくり似せたアンドロイドに……初恋の人の魂を？  
定着？させる。これがアンドロイド計画の真相。博士は失った人々  
を、そっくり現代によみがえらせるつもりだ」

失望した。

キヨテルのフィールに寄せる尊敬、羨望せんぼうは、この瞬間を持って碎  
け散った。

どこまでも自分のための計画。自分のため？だけ？の計画。

これまでの姿勢と相反する計画動機に、彼は「裏切られた」とい  
う気がしてならない。

科学者は人のため、社会のために日々研究に勤しんでいるのだと  
世間は思っている。

しかし、実際は違う。科学者はただ、自分の好奇心を満たしたい  
一心だけである。

歴史に名を残す科学者はおしなべてそうだ。決して他人のために  
科学の世界へ足を踏み入れたのではない。人々の暮らしを豊かにす  
るテクノロジーは、彼らが好奇心の果てに生み出された？副産物？  
なのである。

それを冰山キヨテルは重々知っていた。

だから、フィールの「世のため人のため」という姿勢に並々なら  
ぬ尊敬を抱いていた。

しかし、彼もまた、独り善がりな科学者の一人に過ぎなかった。  
彼の革新的な発明の数々を思い返すたび、憎悪にも似た怒りが膨  
らむ。

四次元を活用して物資の出し入れを可能にしたインストール・チ  
ップの技術も、所詮は彼がアンドロイド計画を進めていく過程で四  
次元を見つけたから生まれた技術。エア・グライドにしろ、トラン  
ジスタの都市開発にしろ、全ては彼がアンドロイドの生体構造を構

築していくにあたって得た技術を応用したに過ぎない。

するとまるで、このトランジスタというドーム自体、彼が過去に失った人々ともう一度住まうために彼が用意した世界のように思えてくる。

極端な発想だ。フィールは完全な独善でこれまで身を粉にしてきたわけではない。歴史に名を残す数々の科学者たちも。どこかで自分の力を社会のために役立てたいと思っている。

しかし、フィールに寄せる多大な尊敬が一から十まで怒りに変貌した今のキヨテルには、そう穏便に考えられる心の余裕などなかった。

「初恋の人の名前は……やはり、？ミク？というんですか」

彼の声は無理やりに感情を押し殺しているが、瞳の光がそれをありありと代弁している。

「恐らくはな。そこまでは知らされていない。四つあるうち、計画は第三段階に達した。

魂を受け入れる？器？としてのアンドロイドの完成というな。もうじき、計画は最終段階に入る。だが、これが途方もない時間を食いそうだな……」

「……魂を探すんですね、初恋の人の」

キヨテルは振り返り、青白い光で満たされた水槽を見やる。

まるでおたまじゃくしのように先に細い尾ひれをつけた青白い球形が、そこかしこで泳いでいる。キヨテルはその一つにじっと視点を定めた。

もしかしたらそれが、フィールの求める魂なのかもしれない。

「理論的には、四次元にはこれまで死んだ人間の全ての魂があるはずだ。

そのなかから特定の魂を見つけ出すなんて、まるで大海原に落とした小銭を探すようなものだ。効果的なサルベージ方法も見つかっていないしな。

博士の生きているうちには、計画は成就しないかもしれない」

博士の生きているうちには、という言葉が意味しているのは、この計画は博士亡きあと誰かの手に引き継がれ、成功の瞬間まで進められるということなのだろう。

キヨテルはぎりつと奥歯を鳴らす。そこまでして？過去？を取り戻したいのか。

「たとえ博士が生きているうちにサルベージ方法が見つかって、計画が成就しても」

キヨテルはおもむろに歩き出し、男の横を通り過ぎていく。知りたいことは知った。これ以上この部屋にいるのは耐えられない。

胸に湧きあがる怒りが抑えられなくなるからだ。

彼は一つ言い残して、部屋を後にした。

「あるのはひたすら？むなしさ？だけです。死んだ人間は、何をし たつて元には戻らない」

それから彼が？四次元解明？と題した論文でユートピア・タワーから追い出されたのは、まもなくのことだ。

\* \* \*

あれから一年と数カ月。

キヨテルは再び？扉？を目の前にしていた。

マホガニー製の重厚な茶色による、アンティークチックなドア。

Dr. フィールグッドの私室である。

「ここにフィール博士はおられるのですね？」

キヨテルは道案内のために連れてきた研究機関のスタッフの一人に問う。

背中に銃口を押し付けられて、スタッフはわななく身体に冷や汗を流している。

「ごくろつさまでした」

男の恐々としたうなづきを確認すると、キヨテルは銃尻で男のう

なじに一撃。

気を失って床に倒れた男をまたぐように、キヨテルは純金のドアノブに手をかけ、ゆっくりと開けた。

彼と似たような黒のスーツ、サングラスをかけたW・A・Fのエンジニアエント二人も後に続く。

「だれだ！」

部屋に入っすぐの一声。

半秒遅れるように銃声が二回、三回と続けて響いた。

白衣を身にまとった研究員らしき二人が、血しぶきを吹き上げながら床へと倒れる。

引き金を引いたのは、キヨテルの両脇に立つW・A・Fのエンジニアエントだ。

「こんな事態だっというのに、高見の見物ですか？ フィール博士」  
フィールはいつもの寡黙かまくな雰囲気を少しも崩さず、窓際に立っていた。

目の前で銃弾を受けた部下の返り血が紺のスーツとスラックスにかかっている。

キヨテルは彼と目を合わせたのち、その手に携帯端末が握られているのに気付く。

「誰かに電話をかけるところだったのですか？ 相手は……ルカ」  
うなづくでもなく、フィールは新たな言葉を発した。

そのサングラスのなかでは、瞳が一点にキヨテルが右手に持つ拳銃に向けられている。

「ここからは会場の様子がよく見えるのでね。あまり、目にしたい光景ではないが」

フィールにはまるで動揺した様子など見受けられない。

この状況から自分がどうなるかを悟って諦めているのか、あるいは現状を打破する策でもあるのか……どんな理由であれ、キヨテルは面白くなかった。

期待していた反応が得られなかったからだ。

もつと怯える。命乞いをしろ。

いささか齒がゆい思いをしているうちに、フィールがおもむろに口を開いた。

「今回の件は、ルカの暴走を含めてW・A・Fが仕組んだことなのかね？」

「今回の件、といいますと？」

「それを私に言わせるのかね。これから君が殺すはずの相手に」

「分かっているじゃありませんか」

あざけるように鼻を鳴らし、キヨテルは続ける。

「そうです。僕たちはあなたを殺しにきたんですよ。W・A・Fはアンドロイド製造のノウハウを手に入れ、量産体制に入ろうとしている。もうあなたに用はない。むしろ、これからの計画の邪魔になる。だから、あなたは死ななくちゃいけないんです」

キヨテルは静かに、フィールへ銃口を向ける。

「僕の手によつてね」

しばし、間。

床で腹を押さえてうめき声を上げる人間の顔を、ミクは不思議そうに眺めていた。

もう一人はうつ伏せになったまま、微動だにしない。

「……ミク」

彼女はフィールの小さな呼びかけに反応し、顔を上げた。

いつものきよとんとした、私は誰で、ここがどこなのか、皆自分からないという表情。

フィールは歩み寄り、静かに彼女を抱き寄せた。

「見ていられない……」

キヨテルは苛立つようにいって、顔をそらした。

恐らくは自分の運命を悟り、最期に初恋の人の感触を確かめたかったのだろう。

まったく馬鹿げている。

相手は初恋の人に似ているだけの、？エセ人間？に過ぎないとい



うのに。

「……全てが終わったあと」

ミクは主人の胸のなかで、彼のささやく声を聞いていた。

「これを……私の？ 兄？ に届けてくれ。君が折った紙の動物たちと一緒にな」

ミクのスカートのポケットに、フィールは持っていた携帯端末を滑らせるように入れた。

キヨテルは嫌悪感から顔をしかめてそっぽを向いたまま。フィールの背中に隠れ、エージェントたちもその模様は見えていなかったようだ。

「お別れは済みましたか？」

フィールと面對し、キヨテルは改めて銃口を向け直す。

その手に携帯端末がないことに気付いたが……スーツのポケットにしまったのだからと、深く考えはしなかった。というより、これから引き金を引くことに関して、心臓が徐々に鐘を打ち始めて冷静でいられなくなってきていた。

対して、フィールはただ黙々と立っている。

表情にも特に変化は見られない。冷や汗一つつかげない。

何故、どうしてだ？ どうしてそんなに落ちついていられる？

処刑人の方が平常心を失いつつあった。その事実がキヨテルをより怒らせた。

親に何を訴えても足下にされる子供が感じるような、そんな敗北感が募ったからだ。

一年を経てもなお……自分と天才との間には、埋めようのない？ 差？ がある。

「僕はあなたを尊敬していた……。あなたが、アンドロイドの開発を発表するまでは。

不透明な開発理由に疑問を抱いて、僕は真理に近づき、そして得た。最後に聞きたいことがあります。

あなたはアンドロイド計画を果たすために、科学者になったのです

か？」

しばらくの沈黙ののち、やがて、フィールは言った。相も変わらず、キヨテルにとっては忌まわしい、あの厳かな口調で。

「君がそれを知る必要はない。引き金を引け。君にあるのは、それだけだ」

抑えていた怒りが殻を突き破って全身にほとばしる。

銃声があったことすら、引き金を引いた本人は気付かなかった。

「はあ、はあ……」

辺りに漂う硝煙と火薬の匂いに鎮められ、彼はようやく落ち着きを取り戻し始める。

それでも止むことのない心臓の高鳴りだけが聞こえるなか、気付いた。

たったいま、自分は、Dr・フィールグッドを殺したのだと。

一方、ナナシとルカの戦闘は続いていた。  
力の拮抗していた両者であったが、形勢はナナシに傾きつつあった。

弾丸を放つ。最後の一発だ。

それはルカの左手から剣をはたき落とす、ナナシは拳銃を捨てるのと同時にクロガネを両手もちにして勢いよく振り下ろしにかかった。

突き抜けるような金属音が火花と共に飛び散る。

ルカは片方の剣でかろうじて斬撃を受け止めたが、がら空きとなった腹に回し蹴り、体勢を崩したところへ今度は顔面に蹴りが飛んできた。

よろめくようにして吹き飛ばされ、ルカは全面ガラス張りのビルの壁に背中をぶつける。

ゆっくりとナナシを見据える瞳には、捨て猫が見せるような光が宿っていた。

猛々しく攻撃を繰り出してきた先ほどまでの勢いは失せ、もう戦いたくないのに、強大な力がそれを無理強いしてくるような、今のルカにはそんな消極的な雰囲気がある。

ナナシは思う。ルカは理性を取り戻し始めたのだと。

「そろそろやめにしないか。お前はもう、戦いたくなんてないはずだ」

「……あなたなんかには、私の何が分かるっていうの!？」

ルカはやけを起こしたように走り出す。案の定、空回り。

袈裟がけに放った斬撃を軽々かわされ、足を引っ掛けられて転倒した。

なんてざまだ。

彼女は非情な剣士から、凶器を持ったただけの歌姫に戻っていた。

数多の戦いを経てきたナナシと張り合える力など、もう一片も残っていないかった。

「決着、だな」

両膝をついてうなだれるルカのうなじに、ナナシはクロガネの切っ先をとがらせる。

長く垂れた髪に隠れているが、彼女の表情は悔しさと自責に歪んでいるに違いなかった。

「そこまでだ！」

ナナシたちの頭上に小型のエア・グライドが三機、滞空している。機体の底部に『W・A・F』の印字。全身黒づくめの戦闘服にヘルメット、ゴーグルをかけた何人かの隊員が、ほふくの体勢でスナイパーライフルをかまえている。

その全ての銃口がルカに向けられていた。

「ルカ様！」

ミキは弾丸を使い果たしたデザートイーグルをほっぼって、ルカの下へ駆けよっていく。

彼女の身体には、そのノースリーブの白いワンピースや露出された肌に石灰の汚れがついているだけで外傷はない。一方、彼女と交戦していたリンも同じだ。

いくらミキが人間離れしているとはいえ、アンドロイドから見れば致命的な傷を負わせるチャンスは何度もあった。散々からかわれて頭にきていたリンであったが、道路のアスファルトにいくつものクレーターを作った以外には何も傷つけなかった。

「そこどいて！」

「なんだ？ おまえは……」

「ルカ様、大丈夫ですか！？ 立てますか！？」

上空のエア・グライドに気をとられていたナナシをつき飛ばし、ミキは声を張り上げる。

舗装された道路のなめらかな表面。それがルカのしているものだった。

聞き覚えのない女の子の甲高い声が、すぐ耳元でうるさく響いている。

ファンの子だろう。あたかも自分の下僕か召使いかのような大慌てぶりだ。

唐突にルカはあることを閃く。歌姫として、それはやってはいけないことだった。少なくとも自分を慕ってくれるファンに対しては彼女はゆっくり顔を上げ、そして自分と同じ髪色の女の子と目を合わせると

「来るな！ 私に何かしたら、この子を殺す！」

素早く女の子の背後に回ってその口を腕の関節辺りで覆い、右手にした刃の腹を頸動脈にあてがった。

突然の事態にミキはもちろん、周囲は啞然あぜんとする。

「おまえ、何をして」

「来ないで！ この子がどうなってもいいの！？」

伸ばされた腕を振り払うように、ルカは刀身に鈍い光を反射させて威嚇いかくする。

こうされてしまっただけはナナシは動けない。人間の子供には、彼女は特に弱いのだ。

「ん〜！ ん〜！」

ミキは「どうして？ どうして!？」とでも言うかのようにもがき声をあげ、その瞳はきよるきよる動いてせわしない。

本当にあのルカ様が自分にこんなことをしているのか、と確かめたいかのようだ。

「……フィールに、パパに」

自分のしていることがいかに暴挙甚だしいかを自覚しているのだろう、彼女は沈痛な面持ちで、申し訳なさそうな声で要求を開始した。

「？電話？をかけさせてちょうだい。あのヒトの声が聴きたいの。

そうすれば、収まるかもしれない。この、どうしようもない気持ち  
が……」

張りつめた沈黙のなか、彼女の寂しさを帯びたハスキーな声がか  
だましてしばらく。

ミキは肩にかけているハート型の小さいポーチから、パネル型の  
携帯端末を取り出した。

その縁でこん、こんとルカの腕を叩き、彼女はそれを受け取る。  
あとは一心不乱に、彼女はフィルの携帯ナンバーをダイヤルし  
た。

「はやくすませてくださいよね。いまのルカ様、見てららないです」  
ミキは冷淡な声で言い捨てる。

その表情には憧れの歌姫に抱かれたうれしさや上気など微塵もな  
く、あるのはただ、軽蔑。裏切られた、失望した、それを通り越し  
て冷気さえまとった軽蔑の色。

何気なく目をやった先に、地べたにへたりこんでいる緑髪の女の  
子と目が合い、彼女ははつとして即座に目をそらした。恐らくあれ  
が？グミ？とかいう女の子だろう。

すぐに、怯えきった様子の彼女の下へリンが駆けよっていったが、  
どうでもいい。

今の彼女にとっては、全てが、この世の、地球の、宇宙の、全て  
が、どうでもよかった。

「あれ？ どうして出ないの？ パパ……」  
ルカの動揺した声が後ろから聞こえるたびに。

「私なんてどうでもよくなっちゃったの？ ねえ、早く、出てよ、  
ねえ……」

苛立ちが膨らんで、右に作った握りこぶしに爪を立てさせるのだ  
った。

同じじゃないか。ママに愛されたかったわたしと。

もしこの手に銃があるのなら、ミキはすぐにでも振り返ってその  
額を撃ち貫いてやりたかった。まるで自分を映し出すその鏡を、粉  
々に砕いてやりたかった。

「パパ、パパ……」

トゥルルルルル。繋がらない電話。  
ルカの耳に、何度も、何度も、コール音がむなしく響き続けてい  
った。

\* \* \*

キヨテルは呆然としていた。  
ついにやった。一人の天才、時代が、終わったんだ。  
僕の手によって。  
しかし。

「どうした……？ わたしを、殺すつもりじゃなかったのかね」  
フィールは片膝をつき、弾丸で射抜かれた左肩を押さえている。  
そう、キヨテルは急所を外してしまったのだ。

彼は激しく動揺する。なぜ、どうして、ちゃんと心臓を狙ったの  
に。

狼狽する彼を弄もてあそぶかのように、フィールは皮肉めいた口ぶりと言  
った。

「君はW・A・Fと手を組んだ。レンの記憶を読み解いた限りでは、  
グラジオラスの一件も君が仕組んだことだろう。アン・ヴェルグの  
爆発でヴァノー・パースの幹部を皆殺しにし、ナナシヤリンたちア  
ンドロイドも巻き込もうとした……。しかも、君は年端もいかない  
？子供？に殺人行為を行わせている。そこまでは出来るのに……人  
を直接、殺しは出来ないのだな」

凶星を突かれ、キヨテルは心臓をわしづかみにされたように凍り  
つく。

銃を握る手に力がこもる。一旦は鎮まった怒りが再燃し、抑えが  
きかなくなる。

「黙れ……黙れ黙れ黙れ！ あんた、自分が置かれている立場が分  
かっているのか！？」

死ぬんだぞ！？ どうして冷静でいられる？ あんたには果たした

お願い、計画があるはずだ。もっとあがいてみせる、命乞いをしろ！ なぜ、死をそう簡単に受け入れられる？」

もはや彼はいつもの氷山キヨテルではなくなっていた。

銀色の拳銃を振りかざし、唾を飛ばして怒号を上げ、顔に脈々と血管が浮き彫りになり、それはまるで追いつめられた野良犬が見せる必死の抵抗のようだった。

「……君は、私の計画の何を知っているというのだね？」

「全てだ。失った人々の魂を四次元のなかから見つけたし、それを失った人そっくりに作ったアンドロイド、すなわち？器？に定着させる。言うなれば、死んだ人間を現代によみがえらさせること。それがアンドロイド計画だ」

彼の声が止むと、ふって湧いたように沈黙が場を占めた。

やがて、フィールは両足で立ち、何か悟ったかのように口を開いた。

「……私は？過去への扉？を探していた」

彼は振り返り、ミクと目を合わせる。

サングラスは右肩に銃弾を受けた際、床に落としてしまった。

何のフィルタも挟むことなく、フィールの瞳にはミクのあどけない佇まいが鮮明に映っている。

「あの？青白い光？が私の愛する人々、景色を奪っていったその日から。もう何十年も前の話になる。私はもう一度、彼らに逢いたかった。暮らしたかった。伝えられなかった想いを、伝えたかった。

そのために四次元を切り拓き、アンドロイド器を作り、ブラックロックシユーターBR Sという兵器まで作った。だが、扉はどこにも見当たらなかった」

フィールはやはり、アンドロイド計画のために科学者になったのだ。

それは彼の言葉の節々から読みとれる。だが、どついう風の吹き回しだろう。

一度は拒んだはずの質問に、彼はいま、天井を見上げて淡々と答えている。



そこで「いや、違う」とキヨテルは気付く。

彼は質問に答えているのではない、ここにいない誰かに向かって、喋っているのだ。

「だが……その扉のすぐ前に、どうやら私は、辿り着いたようだ」  
フィールは首をかしがせるようにして、ふと、キヨテルに視線を寄こす。

彼ははっとした。その青い目に宿った光が、何を言わんとしているかに気付いて。

彼のなかに強烈な悔しさがこみ上げてくる。どこまで行っても、この天才には敵わない。

こつちが生殺与奪を握っている今でさえ、フィールは勝っていた。彼はどこまでも勝利者だった。

キヨテルは唇を強く噛みしめる。

今一度、銃声が鳴った。

胸の真ん中辺りに一瞬、稲妻に貫かれたような痛みが走った

急速にせばまり、かすんでいく視界。井戸の底に落ちたかのように鼓膜が閉塞し、呼吸や周囲の音がうち聞こえになり、身体が言うことを聞かなくなる。喉の奥で血の味がする。

しかし、苦しみはそこまでだった。

彼の視界に純白の世界が広がった。太陽の柔らかい光が差し込み、彼のなかの痛み、苦しみ、悲しみを全て優しく消していった。そしてそこには、愛する人々の笑顔があった。

待ってたよ。早く行こうぜ。遅かったじゃない。何してたの？  
彼らは口々に言う。

ああ、いま、いくよ。彼は少年となつて、みんなの下へ帰っていた。

金髪碧眼へきがんの双子、桃色髪のきれいなお姉さん、そして、初恋の人。  
ただいま。

「……過去への扉は、？死？にこそあったというのか？　それがあなたにとつての救い。」

どこまでも、さびしいひとだ」

キヨテルは負け惜しみを言うかのように、憎々しく、さびしく、言い捨てた。

フィールは床に大の字となつて、うつろな瞳でただぼうつと天井を見据えている。

死の間際、彼は何らかの？幻想？を見たようだった。それが彼の言う過去への扉なのか。

ただ、はつきり分かっているのは、さっきのフィールの青い目が自分に言っていたのは……？早く殺してくれ？ということだった。

だから彼は落ちついてた。

死ぬことがむしろ、埋めようのない悲しみから抜け出す？救い？になることを知っていたのだ。

「ミクの処理はどうしますか？　一部始終を見られている。ここで壊すか、あるいはW・A・Fの研究機関に持ち帰った方が得策かと思われませんが」

キヨテルは二人のエージェントのうち、茶色がかった短髪の男の方に話しかける。

先刻、ルカに「グッドラック」といった男だ。

キヨテルがうちなる動揺、平常心の乱れをひた隠しにしているのはありあり分かっていたが、彼は何ともなしに会話を続ける。

「このまま放置して構わないだろう。フィール亡きいま、このユー・トピア・タワーをW・A・Fが掌握するのも時間の問題。わざわざ持ちかえらずとも、ミクは我々のものになる」

「し、しかし、その間にこいつの記憶が読み解かれてもしたら……」  
「ミクの記憶には？ロツク？がかけられている。それはフィール博士にしか分からない。」

そのロツクを解けない以上、ここで持って行つたってしょうがない。荷物が増えるだけだ」

腑に落ちないといったキヨテルの肩に、彼は手をおいて「ここは退こう。それに今回の件はバックに政府がかまえている。どうにでも捏造出来るさ」

そして彼は、おもむろに歩き出す。

「今までの歴史が、そうしてきたようにな」

エージェントたちは一足先に部屋を出て、キヨテルもあとに続いた。

去り際に彼は、血まみれの死体となったフィールを見た。

「僕は絶対に……あなたのようににはならない。あなたが作った世界を壊し、新たに創造し、一つに繋ぐ。それが僕の、これからすることだ」

そしてドアは閉められた。

全てが終わったあとの静寂に、ミクは一人、ぼつねんと残された。一体、どうしたのだろうか。ご主人さまは何も言わない。まん丸と両目を開けて、赤い液体のたまりに浮かんでいる。一体、どうしたのだろうか。

ただ、もう自分の名前を呼ぶことはないのだろうか、というのは、なんとなく分かった。

ポケットのなかで何かが振動している。

フィールが入れた携帯端末のバイブレーションだ。

ミクはそれをおずおずと取り出してみるも、何をどうすればいいか分らない。

ディスプレイには「ルカ」と相手の名前が表示されている。

画面左端にある受話器のアイコンが上下に動くので、ミクは人差し指で押してみた。

「フィール？ フィールなの！？」

途端、聞き覚えのある声が大音量で鳴った。

ミクはひるんでしまうも、また目を開けてディスプレイを見つめた。

この四角い機械が喋っているのかな？ あの、ピンク髪をしたヒ

トと同じ声で。

とても言いたげなふうには、ミクは不思議そうな表情だった。

「ねえ！ 返事をして！ ねえ、フィール、パパ、ねえ！」

主人の名前がしきりに叫ばれ、ミクは彼を見やる。

呼吸一つしている気配はない。立ち上がって、自分の名前を呼ぶ気配も。

そこでミクは、主人の命令を思い出した。

『全てが終わったあと、これを私の？ 兄？ に届けてくれ。君が折った紙の動物と一緒にな』

あのヒトの声があったことだから、従わなくちゃいけない。でも、いつもみたいに笑ったり、歌ったりするのと違って、分からない。でも、やらなくちゃ。

ミクはしばらく、立ち尽くしていた。

\* \* \*

「どうしてずっと黙っているの！？」

ルカは狂ったように声をあげた。

いよいよ耐えきれなくなったミクは、彼女の手から強引に携帯端末を取り上げた。

「もうやめてよね。ばっかみたい」

そう言い捨て、ミクはその場から歩き去っていった。

沈痛な面持ちでうつむくルカを、ライフルを持ったW・A・Fの隊員が数人がかりで囲む。

どうやら彼女を機関に連れ戻すつもりらしかった。

「おまえも一緒に、きてもらおうか」

隊員の一人がナナシに銃口をつきつける。

ナナシはふと視線をずらし、その瞳の動きに隊員が気を取られているうち、ナナシはクロガネを一閃。「ひいっ！？」 隊員の持っていたライフルの先端を輪切りにしてみせた。

周りの隊員が異変に気付き、ナナシに向けて引き金を引こうとする。

それを阻止したのはリンであった。彼女は目にも止まらぬ速さで、一人、二人と全ての隊員の手からライフルをはたき落していった。

「ぶっ飛ばすんなら、手伝うよ、ナナシ」

リンはナナシの背後に立ち、拳を構えて軽くステップを踏む。

しかし、ナナシに彼らと戦う気はないようだった。

彼女はライフルを輪切りにしてやった隊員の顎先に刃を突きつけ、冷然と言い放つ。

「エア・グライドをよこせ。私たちは家に帰る」

次に、彼女は肩越しにルカを見やった。

「こいつを連れてな」

結果、要求は呑み込まれた。

二機のエア・グライドにナナシ、リンとそれぞれ乗り込み、惨劇の起こった場所から飛び立っていく。リンの方にはグミが同乗し、ルカはナナシの方に乗っている。どちらも疲れ果てているようで、特にルカの方は頭をたらしたまま死んでいるかのようである。

ナナシとリンは上空で機体を寄せ、いくつか話した。

低速で飛んでいるため風の抵抗が少なく、大声でなくても会話が出来た。

「そういえば、レンはどこへ行ったんだ。探しにいかなくていいのか？」

「大丈夫だよ。一人で帰ってこられるって。それに、定員オーバーで乗せられないし」

言って、リンはレンのいるだろうセントラルの街並みを振り返る。「どうして、こんなことになったんだらうね……」その呟きのあとは、ただ静かだった。

エインセルの上空に差し掛かったとき、「ねえ」とルカが何事か呼びかけた。

消え入りそうな声だったので、ナナシは空耳かと思ったが 彼

女が次に語った言葉を聞いて、ナナシは返事に困った。出来れば、空耳のままにしておきたかった。

「私はどうして、生まれてきたんだと思う?」

>The Third Act/End<

t o b e . . . . The Four Act .

&lt;&lt;Chapter 3>>&gt; (後書き)

次回 予告

Rock・18?冷たい旋律?

乞うご期待

Rock・18?冷たい旋律? (前書き)

本稿では「挿絵」を使用しております。

もしも挿絵表示を「OFF」にしている方は、「ON」にしてお楽しみくださいませ。



## Rock・18?冷たい旋律?

AAC28、12月10日。

AACとは「After After Century (アフター・アフター・センチュリー)」の略称であり、人類がここトランジスタに生活圏を移してからの年号である。

その日は国中が静まり返っていた。

鈍色の重厚な雲が空を覆い、地球そのものが息絶えたかのような沈黙が漂っている。

たった一つ、足音が響き続けていた。喪服を着た人々の行列が立てる、無機質な足音だ。

やがて、その不揃いだった足音は芝生の上でぴたつと収束した。

辺りには一面に白い十字の墓石。ここはサン・パライソにある国立霊園。

人々のなかにはのき爺の姿がある。前日に慌てて買った喪服を着、右手には黒一色の折り畳み傘。ただでさえ小柄で会衆のなかに埋もれてしまっているのに、伏し目がちなその表情は、心がもうとつくに深い井戸の底に落ち切っているのを知らせている。

四、五段の短い階段を上り、胸に十字マークが刻み込まれた法衣をまとった牧師が壇上に立った。

人々は誰ともなしに彼を見上げた。牧師は息遣いすら聞こえない張りつめた沈黙のなか、眼前一色に染まる黒という黒を見渡し、そのうつろな瞳を見渡し、厳かに口を開いた。

「これより四日前、この世から偉大なる魂が天へと旅立っていきま

した」

牧師は子供をあやすような口調で会衆に語りかける。

教会堂で鳴る鐘の音のような、厳粛でありつつ、心にすつと入り込んでくる声。

それに呼応するかのよう、人々は泣き崩れ、涙をこぼし、嗚咽

をかみ殺す。

のき爺はそのどれでもなかった。足元に視線を落としていながら、焦点は定かでない。

どこか遠くの、彼の瞳のなかにしかない光景を目の当たりにしているかのようだった。

「 精霊の御名において、アーメン」

「アーメン」

人々がおうむ返しに答えた。のき爺と泣き崩れて声も出せない人を除いて。

彼もそうだが、Dr・フィールグッドは無宗教者だった。この国は世紀末に至った今なおイエス・キリストの信仰が強く、葬儀は一般的にキリスト教の法に則って進められる。

それに異議を唱える者はいない。信仰者もそうでない者も死後は等しく迎え入れてくれる天上の神々に対し、人は誰しも潜在的に畏敬の念を抱いているのだ。

のき爺もその例外ではないが、反面「こつという時だけ神様か」と思う気持ちもあった。

「それでは皆様、？傘？のご用意を」

祈祷を終えた牧師は、よく通る声で群衆に促した。

人々は手に持っていた傘を 大小の違いはあるが、総じて？黒？だ 天に掲げ、一人、また一人と、パネルが一齐にひっくり返っていくかのように傘が広がっていった。

やがて、雨が降り始めた。のき爺は柄を握る手に雨の一粒一粒の重みを感じ始める。

雨脚は次第に強まっていき、場を冷たく覆っていった。

「涙はいずれ止むものです。今はただ、泣きましょう」

両手を広げて一身に雨を受けながら、牧師は言葉を紡ぐ。

「……そして雨が止んだその時は 太陽の光と共に、強く、歩んでいきましょう。」

ハレルヤ！」

人々が呼応する。「ハレルヤ！」

階段を上り、一人の少女が牧師の横へやってきた。

同じく法衣を身にまとったその少女。

エメラルドグリーン<sup>①</sup>の髪を雨に濡らしながら、一息を入れて、彼女は歌い始めた。

降りしきる雨の冷たい旋律に合わせ、彼女はフィールが一番好きだった歌を天に捧ぐ。

これは彼の生まれ故郷に古くから伝わるララバイであるという。フィールと同年代の人のなかには、涙ながらに歌詞を口ずさんでいる人もいた。のき爺も同じだった。

傍目には分からないほど小さく唇を動かし、ほとんど心のなかで歌っている。

懐かしい、少年の日のメロディ。長らく眠っていた弟や友達と一緒に過ごした七色がかりの思い出がゆり起こされ、彼は歌の名前を思い出す。

母親がおやすみの代わりに歌ってくれたこのメロディの名は

Dear.  
あなた

時間がゆつくりと流れていくかのようだった。あの頃とまったく変わらない姿、歌声。

ミク。遠い眼差しで彼女を見つめているうち、その名が思わず口からこぼれてしまった。

即座に彼女はミクであってミクでないのだと気付くも、しばらく見惚れてしまっていた。

Dr. フィールグッドは、いや、弟は、大変な過ちを犯したのかもしれない。

一度死んだ人間を現世に蘇らせるなどと。時計の針は何周したって元には戻らないのに。

しかし同時に、深い罪悪感に見舞われた。自分は弟のやろつとしていることに気付いていながら、止めようとはせず、それどころか人生のとある境からずっと忌避<sup>いひ</sup>し続けてきた。

血の繋がりのない兄弟だからか？ 彼の天才的な才能に嫉妬して  
いたからか？

どれも間違いではないが、正解でもない。

のき爺は余命宣告を受けた末期患者のように、やつれ、皺しわが寄り、  
一層老けこんだ表情でうつむいていた。

そつと手から傘が落ちていった。

雨が彼の小さな背中を打つ。しずくが頬をすうっと伝っていく。  
思い出の歌は、もう、終わっていた。

\* \* \* \*

> i 1 4 8 8 9 — 1 2 1 8 <

ブラック ロックシユーター - No cry and Dist  
ance -

The Final Act On Air . . . . .

\* \* \* \*

Dr. フィールグッドの眠る棺が埋葬されていく。

牧師が祈りを捧げる。周りに集った会衆者は一様に意気消沈して  
いた。まるで歴史ある豪華客船が海に沈んでいくのを埠頭ふいとうから眺め  
ているしかないかのよう。

近くの教会堂では聖歌隊による讃美歌斉唱が行われており、パイ  
プオルガンの荘厳な音色が雨音に紛れて聞こえてくる。会衆者のな  
かにいたキリスト教徒がささやくように歌い出すと、それは広がっ  
て、信仰者でない者も讃美歌を歌い始めた。努めて明るく。死者が  
現世のことが心配になって夜な夜な土のなかで目覚めることがない  
ように。

のき爺は何となくいたたまれなくなつて、小柄を生かし足早に会衆の群れから出た。

人と人の間にちらと見えた、弟の棺。両方から土をかぶせられていた。その近くには喪服姿になつていたミクがいた。何もかも分らないといった表情で、ぽかんと佇んでいた。

のき爺はサン・パライソの駅ターミナルへと歩き出した。

何十年ぶりの再会がこんな形になつてしまつたのが悔しくてたまらず、自分への憤りがしゃにむに彼の両足を動かした。

ターミナルへと続く道の途中、一人の男がこちらに接近してきた。霊園から出ていく際、自分の後を追うように葬列から離れていった男だ。

のき爺はしきりに横目で確認する。男が傘の下でちらりとこちらを見たのが分かつた。

すると男は足を速め、のき爺の横に並んだ。

二人はそのまま先を競い合うかのようにターミナルへ一直線。そして入口のところであつた。「待つてください！」男が声を上げた。

落ちついた声質だが、若者特有の甲高い響きが含まれている。

「……お前さんか？ わざわざ手紙を寄こしてわしを呼んだのは」「ご足労かけてしまつて申し訳ありません。それも葬儀の途中だといふのに……」

早足で数分歩いたからか、男は息を整えながら言う。

「お前さんの待ち合わせまではあと一時間もある。」

わしの勝手さ。あの場から抜けていったのはな」

年齢からしてのき爺の方が数倍疲れているのに、彼はそれをおくびにも出さず答えた。

「雨のなか、というのもなんですし……」男は身ぶりで駅のなかを示す。

葬列に遅れて加わろうと小走りに急ぐ数人以外は、駅構内は閑散としている。

のき爺は険しい表情を崩さずうなづき、二人は切符売り場近くの屋根の下まで歩いた。

「で？ 確か手紙には、お前さんは弟の研究機関の一員だと書いてあったが……」

のき爺は傘の水滴を弾きながら、険のある声で訊ねた。

「改めて、自分はユウキ・シタラと申します。

主にタワーの管制室で、デスクオペレーターを務めておりました」  
きびきびとした口調で言い、男はダークスーツの内ポケットからタワーの入局許可証を取り出した。

「……そんなもん、W・A・Fならいくらでも捏造出来るわ」

長身痩躯、切れ長の目に、髪を額の中央で両頬に垂らしたいかにも真面目そうな男、ユウキ・シタラ。彼はのき爺の意地悪そうな微笑みに面喰らいつつ、話を続けた。

「お呼びしたのは他でもありません。フィール博士の？ 後継ぎ？ についてです」

「手紙にも書いてあったな。

何でも、W・A・Fがタワーにある研究機関の全権を握ることになってるんだとか？」

「ええ。確定事項です。このままだと、秘密にしていたフィール博士のアンドロイド研究機関、それに関連する組織も全てやつらの手に渡ってしまいます」

「確定事項って……今さら、わしに何の用がある？」

「詳細はタワーに向かいながら話しましょう」

言って、ユウキは切符の自動売り機の前に立つ。

画面上のパネルを押そうとしたところで「あ」と肩越しに振り返り、真顔で言った。

「ここは、私のおごりで」

切符は大人一枚160ヴォルタ。言うまでもなく高い買い物ではない。  
ない。

彼にとっては自然な振る舞いなのだろうが、のき爺は思わず噴き

出しそうになった。

同時に、ほっと安心する。

こんな冗談を地でやるような生真面目人間が、うそをつけるはずがないと。

\* \* \* \*

銀線に濡れる窓外の景色。ガラスに雨粒がすうつと筋を作る。

のき爺の瞳はその一瞬の動きを追い、そしてガラスに映った半透明の自分と目が合った。

「それにしても、弟の葬儀にあれだけの人が集まるとはな……」

さりげなく目をそらしつつ、のき爺は向かいの席に座るユウキに話しかける。

自分の顔はこんなに憔悴しやうすいしていたのかという驚きを密かに感じながら。

「この国を築き、支えてきた偉大な功労者ですからね。ミクのことでも追悼式が行われているようですよ。」

「国中があいつの死を弔っている……。幸せ者だな、あいつは」

「それだけのことをしたんですよ」

のき爺が失笑気味に微笑むと、ユウキもぎこちなく笑った。

車内には二人を除いて誰もいない。モノレールのなだらかな走行音が静かにこだまし、一繋ぎの大きな車窓が写すパノラマの色も相まって、車内にはそぞろ寒いような空気が広がっている。

「……ところで、話というのは？」

長い沈黙のあと、のき爺が口を開いた。

ユウキはためらいがちに視線をさまよわせ、やがて意を決したように答えた。

「まずはこれを、聴いていただきたいのです」

ユウキがダークスーツの内ポケットから取り出したのは、パネル

型の携帯端末。

エインセルの街ではあまり見かけないが、セントラルで仕事をする人間はみな当たり前のように持っている。

のき爺はその四角いコンパクトなフォルムを物珍しげに眺めた。

「これは？」

「フィール博士が生前使っていた物です。この端末のなかには音声記録機能……つまり、ボイスレコーダーが内蔵されています」

ユウキの声が次第に沈みがちになっていく。

「……フィール博士は記録していたんです。亡くなる直前の、？事件中？のやりとりを」

のき爺は電流に打たれたかのように表情を一変させる。

「事件……？ 弟は確か、ルカが暴走したショックで心臓発作を起こしたと」

「それはあくまで国が公に発表したものです。？ 真実？ は違います」

ユウキはしばらく携帯端末を両手で弄んだあと、のき爺の目を鋭く見据えた。

いよいよ話の核心に迫るのだな、とのき爺は固唾を呑む。

「流しても構いませんか？ かなり、いや、相当、酷な内容になります」

「覚悟は出来たつもりだ」

「……流します」

ユウキのパネルを操作する親指が止まると、まもなく、端末から音声が流れ始めた。

ノイズ交じりの汚い音声。しかし、ありありと真実を告げる音声。のき爺の目は大きく開かれていた。まるでメデューサにでも睨まれたかのように。

そして列車が網目状のトンネルに差し掛かり、網模様の影が車内を通り過ぎて行った頃。

音声は終わっていた。

ユウキは殴られるか悲鳴を上げられるかと思って、頑なに目をつ



ぶっていた。

「……紙の、動物たち」

思わず口からこぼれたような呟き。

ユウキはおそるおそるまぶたを開け、のき爺の表情をつかがう。

驚愕がありありと現れていると同時に、落胆と、そして怒りが瞳のなかでたぎっていた。

「殺されたんだな、弟は」

「……恐らくは、W・A・Fの手の者に」

ユウキは心が痛んだように顔をしかめた。

「この携帯端末はミクから渡されたのか？ あいつの話から察するに、そのようだが」

「ええ。ミクは博士の身に何かあった時、第一に我々の下へ来るようプログラムされています。私たちは彼女から携帯端末を得、そしてW・A・Fから隠してきた」

「紙の動物たちについては？」

「見当はついていますが、博士の私室は荒らされないよう、今は我々の手で閉じ切っています。ノーキーさん、あなたも、紙の動物たちについてお心当たりがあるのですか？」

「あいつは幼い頃、何か伝えたいことがある時、それを書いた紙をよく動物にして相手に送った。例えば、ラブレターを千羽鶴にして相手に送ったりとかな」

実際あったことを例にしたらしく、のき爺はどこか遠い目をして言った。

「ということは、博士がその紙の動物たちに？ 秘密？ を書いて遣した可能性が高いですね」

「100%間違いないだろう。そしてあいつは、その携帯端末と併せて……その秘密を、兄であるわしに託したというわけか」

「急がなければなりません。W・A・Fは今夜行われる記者会見でタワーの全権を継承することを正式に発表します。そうなれば、我々の抑えも利かなくなるでしょう」

列車はプラットホームへと入る最後のトンネルにさしかかった。

「……お前さん方は、わしに何をしろと？」

「すでに察しがついてるかと思えます。フィール博士の後継ぎを、あなたにお願いしたい」

列車は止まり、ドアが一斉に開けられた。

乗ってくる人はいない。少なくとも、二人のいる車両には。

「わしに何を期待している？ わしはあいつのような偉大な科学者でも、天才でもない。

あいつと幼き日を共にしただけの、ただの花屋の店主だ」

のき爺は伏し目がちに言った。

列車が完全に止まっていると、辺りの静けさが一層身に迫って感じられた。

「？フィールグッド？の名前を持つのはこの世であなた一人になった。知っていますよ。ナナシたちの記憶を解析したり、博士から断片的にですが、あなたのことをうかがって」

「？裏稼業？のことか？」

「……ばらされたくはないでしょう。ただの花屋の店主の日常を、失いたくなければ」

一拍、息の詰まるような沈黙のあと、「ふっ」のき爺は苦笑いをこぼした。

唇を真一文字に結んだままのユウキの額には、玉のような汗が浮かんでいる。

彼を口説くのに相当骨を折っているらしい。

「生真面目だけが取り柄のやつかと思っていたが、言っね、お前さん」

「博士仕込みですから」

言いながら、二人は並んで列車を降りていく。

閑散としたホームにベルが鳴り、静かにドアが閉められた。

「わしは勝手に、あいつとの関係は終わったと思っていた。世界戦争が終戦を迎えたあと、考えが真っ向から食い違ったの境に、わし

とあいつの繋がりは完全に断たれたのだと。

しかし、あいつは、あれから五十年以上もわしを？兄？だと思いつけてくれたんだな」

言って、彼は失笑する。「見た目も中身もまったく似てないのに」「受け取ってください。これは本当は、私たちではなく、あなたに託されたものですから」

ユウキはフィールの携帯端末を差し出した。

「ろくに兄貴らしいことをしてやれなかったが……、いや、もう何も言っまい」

のき爺は携帯端末を受け取る。力強く、ぎゅっと。

列車はサン・パライソに向け、再び走り出した。

このモノレールのどこかにも、弟の技術が生きている。

のき爺は眉を細めて遠のいていく列車を見送った。

まるで六車両あるうちの一つに、弟が乗っているかのように。

「どこもこのニュースばかりだね……」

リンは沈みがちなトーンで言い、リモコンの電源ボタンを押した。ブツッと消えた小型テレビの画面に、リンとその後ろのナナシの姿が映る。

「フィールが死んだ、か」

階段脇の柱に腕を組んでよりかかるナナシは、足元に落とすように呟いた。

復興式典から四日間、ナナシたちはのき爺が裏稼業で使う地下工房に身を潜めていた。

ルカを追うW・A・Fから逃れるためである。フィール死亡の騒ぎがあるためか直接的な行使はないものの、居所は知られていると考えて間違いないだろう。その証拠に、地下にやってきた初日は自宅の電話が朝晩問わず鳴り続け、のき爺がたまらず電話線を切ったほどだ。

「そういえばなんだけど」

製図机に腰掛けるリンが、おもむろに話しかけた。

足元には書類や新聞が散乱しており、のき爺のおおざっぱな性格がよく現れている。

「なんだ？」

「ほら、グラジオラスにレンを助けに行く前に、私さ、タワーで暴れちゃったじゃん？」

そんな時に、あのヒトの、ドーゾー？ っていうのかな。粉々にぶっ壊しちゃったじゃん……」

「あいつの銅像を壊したから、なんだ？」

「……なーんか、いやなカンジなの」

リンは失笑気味に微笑みかけた。

フィールの銅像を壊してからまもなく本人が死んだという偶然が、

自分が彼を手にかけてしまったかのような錯覚を引き起こしてしま  
うのだろう。

「あなた、馬鹿にしてるの？」

冷めた声が二人の間に入ってきた。

「ル、ルカ？ 寝てたんじゃなかったんだ」

ルカは工房の奥にある寝台から身体を起こし、つかつかとリンの  
下へ歩み寄っていった。

その瞳は永久凍土のように凍りつき、なかに大きな怒りが閉じ込  
められてある。

「馬鹿にしてなんかないよ！ いやな気分させちゃったら、謝る  
けどさ」

「……別にいいわ。フィールはもういない。あなたが謝ったって、  
何をしたって、もう帰ってこないのよ」

ルカは鋭い視線をナナシに向ける。

「何度お願いしたか分らないけど……殺して、私を」  
気づまりな沈黙が続いた。

ナナシは一つ息を入れ、答えた。

「私の答えは変わらない。殺しは絶対にやらない。特に理由のない  
殺しは」

「理由ならあるじゃない。私が死にたがってる。フィールが死んだ  
のよ？ もう、生きてたってしようがないわ」

「あいつが生きてたってお前の存在理由は曖昧なままだったんじゃ  
ないのか？ 今と変わらずな」

「……あなたなんか何が分かるっていうの？」  
鼻っ先が触れあうほどの近さで、視線をぶつけ合う両者。

リンが慌てて仲裁に入る。

「ちょ、ちょちょちょちょ、だめ、だめーっ！ いい加減仲良  
くしてったら！」

無理やり突き離されると、「ふん」ルカは高飛車に鼻を鳴らして  
そっぽを向いた。

ナナシも同じように不機嫌な表情で視線をそらしている。

まったく、W・A・Fが追ってこなければこんな気まずい場所にいることなんてないのに……。 「はあ」とため息をついたリンは、そろそろ外の新鮮な空気が吸いたいのだった。

「ん？ 足音がする。のき爺が帰ってきたのかも！」

リンの表情が一気に晴々とした。

口では「のき爺かも」と言っているが、実はレンが帰って来ていることを期待している。

リンは無邪気に階段を駆け上がり、出入り口のハッチを勢いよく開けた。

「おかえりなさい……」

「発見！ 目標と思われるアンドロイドを発見！」

続々と集結する顔をマスクとゴーグルで隠した黒づくめの人間たち。

どう見ても自分たちを捕えに来たW・A・Fの部隊だろう。狭い空間にひしめきあってライフルの銃口を向けてくる彼らを前に、リンは自分の迂闊さを呪うばかりだった。

彼女から最も近くにいた隊員がパネル型の端末を取り出し、画像と照らし合わせながら彼女が目的のターゲットかどうか確認し始めた。

「間違いない。ターゲットナンバー03・リンだ」

「……ちがうよ」

リンは伏し目がちにぼそつと言った。

「私は……そう、ウロイエラー！」

ズビシ、とリンは人差し指を突きつける。

一瞬、場が凍りついた。

「……捕えろ」

二人の隊員がリンの身体を掴もうと手を伸ばしてくる。

「しょーがない。ヒーローの言葉を信用できないようなやつらは……」

……

リンは左手に包んだ右拳をぐつと引つ込めると。

「おしおきだーっ！」

隊員の額めがけて勢いよく？デコピン？を繰り返した。

見た目は地味だが威力は絶大。隊員は後方へすっ飛び、更に「とっつ！」リンは前に立ちはだかつていた二人の隊員を素早くデコピン葬にしてやった。

「ナナシーっ！ 逃げるよ！ ル力を連れてきて！」

階下に向かって叫んだが、反応がない。

その間に襲いかかってきた一人をまたもデコピンで撃破すると、

「またせたな」

ナナシが階段を上がってきた。

その肩に「離して！」とじたばたもかくル力を担いで。

「……どーしたの？」

「言うことを聞かないんでな。無理やり連れてきた」

「下ろしなさい！ 私はいつらと一緒に行くわ！」

「本当にいいのか？ もしあいつらのところへ行つて、また暴走するようなことがあったらその時は 容赦しないぞ」

ルカは悔しそうに唇を噛みしめる。

「？フィールを殺せ？というあの忌々しい命令を思い出したのだ。

テレビのニュースでフィールが死んだという報せを受けた途端に脳内から消えていったが、あの時の胸が引き裂かれそうな苦痛は二度と味わいたくはない。

ルカは身体をだらんとさせた。抵抗する気力はもう失せたようだった。

「と、とにかく、早く逃げよっ！」

リンはライフルの引き金を引こうとした隊員を突き飛ばし、そのまま店の外へ。

「追えー！」「逃がすなー！」

通りに人の姿はない。フィールの葬儀や教会堂で行われる追悼式のために住人たちのほとんどが出払っており、通りは閉園した遊園

地のようにがらんとしている。

追っ手の怒号を後ろに、二人は降りしきる雨のなかを駆けていった。

「しかし、どこへ行くんだ？」

「んー……」

そこで銃弾がリンのすぐ横をかすめた。

銃身にサイレンサーがつけられているのと雨音のせいで銃声はほとんどしなかった。

二人は民家の路地に入り込み、その狭い道を真っ直ぐ走りながらリンは言った。

「そーだ！ イイトコ思いついた！」

「いいとこ……?」

「ついてきて、こっちだよ！」

怒号、水たまりを蹴散らしていく音、雨のなかの逃走劇は続く。

\* \* \*

「ごんごん、ごんごんごん。」

鉄製のドアがけたたましくノックされる音で、朝霧海人はぼんやり目を開けた。

大家さんか？ 家賃ならきちんと払ったし、ここ最近廊下も走ってないんだけどな……。

怒られるようなことは何一つしていないのに、と起きぬけの頭に考えながら、「はい」海人は青ポーターのトランク스에 白のタンクトップ一枚という格好でドアを開けた。

「おじゃましまーす！」

海人の眠気が一気に覚めた。

「リ、リンちゃん！？ え、え!？」

反射的に壁に背をついた海人の横をリンが慌ただしくすり抜けていく。



まさに突風のようだった。一体どうしたのかと思案する間もなく、「あ……」

海人は続いて入ってきたナナシと目が合った。

雨に濡れた黒髪、毛先からしたたり落ちるしずく、湿った衣服、頬に伝う水滴。

普段の数十倍も色つばいその姿に、海人はしばらく釘づけになった。頭が真っ白になって、彼女の肩に担がれているのが誰なのかなど考えもつかなくなる。

瞳の水晶が交錯する間はまるで時間が静止したように感じられ、彼女の美しさが音もなく、見えない視線のラインを通って彼のなかにしつとりと流れ込んでくるのだった。

「いつまで見てる。そこをどけ」

「あ、す、すいません……」

彼女の冷淡な一言で、止まっていた時間が動き出す。

海人はびしゃ、っと頬を叩いてみたが、まだ夢心地のような気分が抜けない。

しかし視線を落として自分がトランク스에タンクトップ姿なのに気付くと、現実が一気に押し寄せてきた。

「ああああ！　ち、違うんだ、これは違うんだよナナシさん！」

こともあろうに、彼女を振り向かせてしまう。

「なにが違うんだ……？」

「いいからこつちを見ないでくれ！」

海人はあたふた声を上げた。

いつもは敬語交じりのおぼつかない口調になるのに、今は緊急事態だ。

「大声で呼んだと思ったら、今度は『見ないでくれ』……？　分かるんやっただ」

一方、ナナシはいぶかしげな表情。

しばらく見ていると、海人は慌てた様子で手前の角を曲がっていき、直後「つめた！」という大声が聞こえ、出てきた時にはTシャツ

ツにジーンズ姿だった。この間わずか一分。

自分のように雨にさらされたわけでもないのに、どういうことが衣服が濡れている。

「はつくしよん！」海人は大きなくしゃみを一つ。

今朝洗って浴室に干していた衣服はまったく乾いていないのだった。

\* \* \*

一通り話が終わると、青いチェックのカーテンに覆われた窓の向こうの雨音が強調されて部屋に響き始めた。海人はフローリングに直置きされた小型ブラウンテレビの上にある、銀縁のデジタル時計を見やった。十九時二十分。彼女たちがこの六畳もない狭い空間に居座り、海人の心をやたらにどぎまぎさせ続けて三時間が経過しようとしている。

キューブで食事を済ませているためにゴミは少ない。部屋の中央にあるガラスのローテーブルの上にくっつか飲み物の空き缶があるだけだ。ベッドはしわくちやの黄ばんだシーツの上に読み散らかしたマガジンが数冊。リンはうつ伏せに寝ながらそれを開いている。

気まずい話をした後には必ずといっていいほど現れる沈黙を紛らわそうとするためだろう。

ナナシはベッドの側面に背中を預ける形で腰掛け、カーテンを半分開けて窓外を見やっている。リンが話をしている最中もずっとそうしていた。遠い目。心ここにあらずの横顔。

それと似たような表情をしているのは、部屋の出入り口付近の壁に腕を組んでよりかかっているルカだ。くの字に折られた足がスリットからはだけ、海人は慌てて視線をそらす。

女性しか持ち得ない肉体の武器をよりよく映えさせる金縁取りのチャイナ風のドレス。

テレビの歌番組などで観る時とまったく同じ衣装だ。

ナナシが自室にいることがそもそも夢のような状況だが、それに加えて？超？がつくほどの国民的アイドルの御目麗しい姿もある。しかも彼女は先日の復興式典で？暴走？したつきり行方知らずになった国中のお尋ね者。そんな彼女を連れて二人がどうしてここにやってきたのかをリンの口から知り、それなりに時間も経過してルカがこの部屋にいること自体は慣れてきたが、まともに直視できないのは変わらなかった。かといって振り返ればナナシの姿があるので、海人は先ほどからずっと目のやり場に困っている。

しょうがなく漆喰<sup>しっくい</sup>が所々はげた壁と天井の染みを数えたり、テレビの横に縮こまるようにしてあぐらをかく自分の足に目をやったりしていた。頭にいくつかのシーンが過ぎる。どれもつい先ほど、この部屋で起きたことだ。

部屋にやってきた三人に白いバスタオルをやった。使っていない新品が一枚余っていて心底よかつたと思う。初めにリンが身体を拭き終わり、金色の髪をボサボサにしながらバスタオルをナナシに渡そうとした。そこでルカがバスタオルを横取りしたのだ。「私が先よ

「何だ……？」「何よ」二人が視線の火花を散らせ、リンがささず止めに入った。

海人はしばらく呆気にとられていたものの、うるさい三人を見ても思わず笑みをこぼした。

無口で無愛想なナナシが、子供のようにムキになって口喧嘩しているのが意外だったからだ。吐きだされる言葉は相変わらず鋭いナイフのように刺々しかったが。

それから、海人はつきり三人が着替えを要求するものだと思つて内心焦っていた。しかしリン曰く「私の服はそんじょそこの安物と違って特殊なカガクセンイとかで出来ているからすぐ乾く、つてのき爺が言つてた。私が広場の噴水に服のまま飛び込んだ時に」海人の脳裏にのき爺が呆れた表情でリンに説教する光景が浮かんだ。

それにしても『そんなじよそこらの安物』とは……干してから悠に七、八時間が経過し、悪天候のために部屋干しであるとはいえ、未だ水気を含んだままのグレーのTシャツ。

海人は胸のあたりでそれを引っ張り、「どうせ安月給ですよ」と小さく独りごちた。

ナナシとルカの服も『特殊なカガクセイイ』とやらで出来ていらしく、みるみるうちに乾いていくのが分かった。それはそれで安心する気持ち反面、何か貴重な場面を見逃したような気持ちにもなった。

その後、三人は代わりばんこに洗面所を使って髪を乾かした。リンがナナシの髪をセットしたのだが、いたずら好きな彼女らしくナナシの長い髪を数個のお団子にしたりやたらに巻きつけたりして遊んでいた。それでもナナシが無表情だったのが印象的だった。

この時点ではまだ「遊びに来たのか？」と思っていたのだが、最後に洗面所から髪を乾かして戻ってきたルカの深刻そうな表情を見事態がリンほどにお気楽でないことを知った。

「で？ どうして俺ん家なんかに来たのかな？ それも国中のお尋ね者を連れてさ」

事情の説明はリンがしてくれ、足りない分はルカが渋々といった様子で補ってくれた。

彼女の話す一字一句に驚きを感じつつ、頭では刑事らしく推理を働かせていた。

W・A・FはDr・フィールグッドの国葬で街の住民が出払っているところを狙ったのだろう。

だから彼女たちの居場所を知りつつも、復興式典から四日の間を置いた。しかも、どうやら狙いはルカだけでなくナナシとリンにも及んでいるらしい。

海人は足場が消えてすとんと落ちていく気持ちだった。

W・A・Fは国が所有する軍隊。軍隊は端的には他国の脅威から自国を守る、または逆に征服するためにあるので、地球最後の国家

であるトランジスタにそもそも軍隊があるのはかねてからの疑問だった。それに先の？黒いバケモノ事変？でW・A・Fが重火器や装甲車などれっきとした兵器を有していることが判明。

一体、何のために？

これではまるで初めから黒いバケモノと戦うのを想定してW・A・Fが組織されたかのようである。

国民のなかには異議を唱える者もいたが、W・A・Fは『変事の備えを使ったまで』と言い張るばかり。あまりにも見苦しい言い訳だったが、事実、それで国家の平穩が保たれたのは間違いなく、国民の異議や疑問はいつまでも続かなかつた。

しかし、リンの口から話されたことが国民の知るところとなったらどうだろう。

ルカの暴走が実はW・A・Fが仕組んだものと知ったら？ 街中で発砲してまでアンドロイドを追い回したと知ったら？ 何か水面下で巨大な陰謀が渦巻いているように考え、恐らく海人と同様の反応を示すだろう。何とも言えない感情で、拳が強く握り締められるのだ。

「あいつらが何を考えているのか、ゼンツゼン分かんないけどね」  
リンのその言葉を持って、座は沈黙に移ろい、今に至る。

「……止まないな、雨」

ナナシがぼつねんと呟いた。

「明日の未明にかけて降り注ぐみたいですよ」

海人は緊張を押し殺して話しかけた。答えは返ってこなかった。

この雨は気象管理局が降らせている人工雨。国の偉大な功労者の死という国民の感情を表し、そして雨が止んだらまた歩き出そうという前向きな意味が込められている。

「あーあ、もう寝ちゃおうかな」

薄いマガジンをほっぺり、リンは仰向けになりつつ言った。

「まだ八時にもなってないよ？」

「アンドロイドは好きなときに好きなだけ眠れるの。」

まぶたを閉じてリラックスするだけでね」

リンは海人に目配せし、ナナシの背中に視線を移した。

次にちょうど反対にいるルカへ目をやった。何やら意味ありげに口角をつりあげて。

ルカは察したのか、ため息を一つ。

「シャワーを借りるわ」と言っただけ振り返った。

「え、さつき髪を乾かしたばかりなのに……？」

立ちどまり、ルカは海人を見下ろす。突き刺すような眼差しで。

「あなたの部屋にいと、何だかゆくなるのよね」

ツララに心臓を射抜かれたような痛みを感じつつ、海人の疑問は膨らむ。

アンドロイドでもそんな感覚に見舞われるのかと。しかしリンに「じゃあ寝るから。後は二人つきりでね」と言われると、ルカの行動の意味が把握できた。

リンが寝息を立て始め、シャワーの音が遠巻きに聞こえ始めると、海人は焦った。

大いに焦った。部屋には事実上、ナナシと二人つきりなのだ。

冷や汗が額からあふれ出し、心臓が早鐘を打つ。何か話すべきなのか？ でも何を？

「あ、雨、止まないですね……」

言うに事欠いてナナシと同じことを言う始末。

何言っただ、と海人は心のなかで自らの頬を平手打つ。

ナナシは我関せずといった風情で窓の外を見やっただけだ。

「……お前は、行ったのか？」

「はい……？」唐突に言われ、海人は一瞬それが誰に対する問いかけか分からなかった。

「ニュースで聞いた。今日はフィールの？ソーシキ？というのがあったのだと」

「あ、ああ……Dr・フィールグッドの葬式ですか。僕は行きませんでした。喪服も持っていません。今朝、テレビの前で黙とうを捧

げただけで、また眠っちゃいました」

まるで幼稚園児が昨日の行動を先生か親に報告するようかのよう  
な口調。

海人は改めて自分を情けなく思った。

一人称が？僕？なのも敬語使いなのにも未だ直せそうにない。

「ルカにソーシキの意味を聞いたんだ。ろくに答えてくれなかった  
が。何でも？テンゴク？とやらに行く魂を見送る儀式とか言ってい  
たな。そうなのか？」

「ま、間違いではないと思います。あの人は、少なくとも地獄に行  
く人ではないだろうし」

どもりがちに海人は答える。

「テンゴクもジコクとやらも知らない。ただ、そのどちらかに行っ  
たということは、フィールはもうこの世界のどこにもいないんだな」  
しばし、間。

「……あいつが死んだのは、仲間を失うのとは違う。ココロにぽっ  
かりと穴が開くでもない。かといってうれしいわけでもない。？私  
はどうして生きているのか？？それを自分に問いかけて、答えが得  
られなかった時と同じ気持ちになる。言うなれば？むなしさ？だ」

ナナシは虚空に弧を描くようにゆっくりと、海人の目を見据えた。  
「お前は どうして生きている？」

海人の心臓の高鳴りはそこでぴたっと鎮まった。

どうしたのだろう、こんな多弁な彼女は初めて見る。

海人の視線はさまよい、ベッドの上にかけられたお馴染みのコー  
トで止まった。

「？Reaper？つてご存知ですよね」

「？黒い瞳？が特徴の……人々の嫌われ者だつて、のき爺が言っ  
ていた」

「……そいつは、Reaperだつた」

最近袖を通していない茶色のコートに視線を定めたまま、海人  
は静かに話し始める。

「……子供の頃はよく、黒い瞳のせいでいじめられました。『この人殺し!』ってね。」

そいつは何にもしていないのに。生きていくのが途中で何度も嫌になった」

「そいつは、いま、どうしてるんだ?」

二人は一瞬、視線を交錯させる。

海人は再びコートに目を戻して、続けた。

「友たちがいたんです。同じReaperのね。彼は絶対にいじめや差別に屈しなかった。堂々と生きていた。『俺はReaperだ』って。その姿に、そいつも頑張つて生きようつて思った。」

そしてこの世界からこんなくならない差別はなくしてやるうつて思った。警察官だった親父に憧れていたのもあつて、そいつは刑事になつてそれをやってやるうつて決めたんです」

海人はゆつくりと右目に人差し指をあてがった。

「ナナシさんのそれ……カラーコンタクト、ですよね」

「ああ。のき爺に『この国じゃ黒の瞳は忌み嫌われる』と言われて渡されたんだ」

ナナシの瞳はブルーマリンのように青く澄んでいる。本当なら黒い瞳であるはずなのに。

海人は彼女と出逢つた時にそれを知つて以来、今まで訊けないままだった。

「僕のこれも、カラーコンタクトなんですよ」

海人は眼球を覆い隠した指を静かに下ろしていった。

すると魔法がほどこされたかのように、青かった瞳は?黒?に変わっていた。

Reaperの証。人々に嫌われ、おけず蔑まれる禁忌の色。

「お前、Reaperだったのか」

「あなたと初めて逢つた時は、おどろいた。だってコンタクトをしていなかったから。」

そのあと、あなたは超人的な力で、あの謎の怪物　ブラックでし



たっけ？ あれを刀で串刺しにして、宙を軽々飛んで、風のように走って……本当に？死神？かと思いましたよ」

「お前は私のことを、自分と同じReaperだと思ってたんだな？」

「はい。でも実際は、全然違いましたけどね。悪い意味で言ってるんじゃないですよ？」

ナナシのなかで点と線が繋がる。

海人が「そいつ」と言っていたのは、他ならぬ彼自身のことだったのだ。

「……刑事って仕事は親父の代に比べたら暇なんですよ。必要のない仕事かもしれません。この国はもうReaperの騒ぎも収まって、社会保障も充分に行き届いているから、犯罪を起こそうなんてやつは今時いない。二年前に刑事になって張り切ってた俺に待ってたのは、ひたすら平和な街の巡回。事件があつたつて、どここの子供が迷子になったとか、そーいうのばかり。昔の映画に出てくるような刑事の日常とはまったくかけ離れてた」

「お前はいてもいなくても、どっちでもいいってことか？」

凶星を突かれ、海人は苦笑した。

「極論すればね。でも、本当に何かあつたとき、俺たちはいなくちゃいけない。皮肉な話だと思う。だってさ、言っちゃえば、悪人がいなきゃ俺たちのいる意味がなくなるんだから」

そこで慌てて、海人は素の口調で話している自分に気付く。

「す、すいません、何か偉そうに話しこんじゃって……」

「どうして謝る？ お前はうれしいんだらう。自分が？ケージ？であることが」

海人は一瞬、虚をつかれたように口を半開きにして、やがて言った。

「はい。出来れば死ぬまで、刑事でありたいですね」

ナナシはうらやましく思った。

この片方でそれぞれ目の色が違う男は、自分の存在に理由を持つ

ている。

それに何の疑念も抱いていない。だからこうやって、自信ありげに笑えるのだろう。

ナナシはうつむいた。自分が笑えないのは、そういう機能が備わっていないからではなくて、単に自分の存在に確かな理由を見出せていないからではないか？

「……寝る」

ナナシはやにわに立ち上がった。

急に冷やかな態度になったナナシに、海人はさっきの話で機嫌を損ねてしまったのかと焦ったが、声をかけるのは寸でのところでやめておいた。

ナナシはリンの横にどさっと仰向けになると、そのまままぶたを閉じた。

もう眠ってしまったのだろうか。アンドロイドは人間と同じように夢を見るのだろうか。寝言を言うとしたら、それはどんな言葉なのだろうか。様々なことに思いを巡らせながら、海人はしばらく彼女の寝顔を見つめていた。決して心地よさそうではないその表情。まるで誰かに追われていて、心からは眠りにつけないような。

海人は思う。いつかこの手で、彼女の心を解き放つことが出来たらと。

「そのオンナの、一体どこが良いって言うの？」

不意に、横からツララのように冷たく鋭い声が飛んできた。

海人は慌ててコンタクトを元に戻す。

彼女にならばれても構わないのだが、反射的に身体が動いていた。私には理解できないわ。そんな無愛想で無口なのを好きになるだなんて」

君もじゃないか？ 海人は言いかけそうになったのをこらえた。ル力はぐしゃぐしゃとバスタオルで髪を拭きながら、唐突に言った。

「私ね、死のうと思ってるの」

海人は一度ナナシに戻しかけた顔をルカに向けた。  
水気を含んだ瑞々しい桃色髪を頬に張りつけた顔が、こちらを鋭く見つめている。

「い、いきなり何言っただ……？」

「愛するヒトが死んだの。これで分かるでしょ？ でもね、まだ、死ぬのは先。

フィールが私に生きていて欲しいと望んでいるのなら……私は、生きる」

どこからどう見ても、海人には彼女が人間にしか見えなかった。

外見だけでなく、心も。それはリンにも、ナナシにも言えることだ。

それなのにどうして、人間とアンドロイドっていう、境界線があるのだろうか。

海人はふと、ナナシの寝顔を横目に見下ろす。

「もし、望んでいないと分かったら、その時は？」

「……馬鹿みたいなこと言うのね。私の話聞いてたの？ もついいわ。今の話は忘れて。」

気の迷いで、言っちゃったことだから」

ルカは立ち上がり、振り返ることなく洗面所へ歩いていった。

凜となびく彼女の髪からシャンプーの香りが宙を舞う。

普段は自分が使っている安物なのに、それはまるで高級なシャンプーの香りに思えた。

「いてもいなくても、いい、か」

再び静まり返った部屋で、海人はナナシに言われたことを小さく復唱する。

気付けばまた、ナナシの寝顔を覗き込んでいた。

その柔らかい唇に吸い込まれそうになる。

前髪をかきあげたり、優しく抱き寄せたくなる。

全ては、彼女を愛おしく思う気持ちからだ。

込みあげる衝動の何もかもをぐっとこらえて、海人は窓辺に立つ

た。

雨が降りしきっている。薄いガラス一枚の向こうで、音もなく。  
ナナシは水浸しになった夜空を見上げて、何を想っていたのだろ  
う。

t o c h a p t e r 3

真っ白な空間に、一人の男の背中があった。

靴のかかとにまで及ぶ白衣を着ているせいで、彼の姿は空間に同化しているふうに見える。

ナナシは訊ねた。もう何度も自問し、いつになっても答えの得られない質問。

私はどうして、生まれてきたのか。

男は答えない。そこに静止しているだけなのに、何故か奥へ奥へと遠ざかっていく。

ナナシは走り出した。声を上げた。

しかし、まるで透明な壁が二人の間を隔てているかのように、男との距離は一向に埋まらない。

不意に男が肩越しに振り返った。何事が言っているらしく、唇が小さく動いている。

なんて言っているんだ？ そう聞こうとするのも束の間、男の姿はぼつかりと開いた黒い穴に消えていった。ナナシはその名を叫ぶ。フィール、と。

「ナナシ……？」

急に開けた視界に、あどけない表情でこちらを見下ろすリンの顔があった。

「どうしたの？ うなされてたみたい」

「いや……何でもない」

「よかった。そうだ、ナナシ、テレビ見て」

リンの人差し指の先には、床に置かれた小型のブラウン管テレビがあった。

寝たままだとガラスのローテーブルが邪魔になって見えないので、ナナシは身体を起こした。そこで気付いたのは、海人も、出入り口近くの壁に寄り掛かっているルカも、二人して息を呑んでテレビを

見つめていたということだった。

どうしたのだろう、ナナシがテレビに顔を戻すのもまもなく。

「わし……じゃない、このわたくし、ノーキー・フィール・グッドは」

一瞬目を疑ったが、その顔に見紛うことはない。

というか自分で名乗っている。のき爺だ。

のき爺が四角い箱のなかからこちらを見ている。いささか挑戦的な眼差しで。

「弟、クライス・フィール・グッドの遺志を継ぎ　この度、彼のポストに就任するものであります」

カメラのフラッシュが弾幕のように彼を襲った。

灰色の背景から察するに、タワー内の一室で行われたと思しき記者会見。

国中が見守るなか、彼は堂々と言い放った。Dr・フィールグッドの遺志を継ぐと。

「あの爺さん、Dr・フィールグッドのお兄さんだったんだ……リンちゃん、知ってた？」

「ううん。今知った。のき爺、どういうつもりなんだろう……」

リンは顔を手で覆って「はぁ」と大きくため息をついた。

他の二人は特に大きなアクションはないものの、目を丸くして驚いた表情をしている。

ナナシはいまいち事態が呑み込めず、ただぼかんとしていた。

「さしあたって、わたくしの初仕事は」

日頃のぶっきらぼうな大工の親方口調が抜けないのか、彼の口ぶりはどこかぎこちない。

「先日の復興式典で暴走し、そのまま行方を暗ましたルカを探し出すことです」

『彼女の処分についてはどうお考えなんですか！？』記者が一齐にまくしたてる。

それもそのはず。あの騒ぎでは負傷者が20名以上も出、うち2

名が死亡した。

前代未聞の重大事件。アンドロイドが人を殺した。もはや国民は彼女を歌姫としては見ていない。血ぬられた刃で持って人類を裏切った悪魔のように捉えている。

ルカは身体こそテレビに向けていたが、視線は足元に落ちていた。「処分については現在検討中です。一つ断っておきますが、彼女はアンドロイド。

我々人間の手によって生まれた存在です。

彼女の犯した罪は、同時に我々創造者の罪でもあります」

『被害者遺族の心情は！』 『もつと具体的に言え！』

記者団の言及は熾烈しれつを極める一方だったが、のき爺は意にも介さない様子で続けた。

「もしかしたら、ルカがこの記者会見を見ているかもしれないので、この場を借りて彼女にちよつとしたメッセージを送ろうと思います」ルカの片眉がびくつと反応する。

リンと海人はちらりと彼女を見やり、ナナシは横目に彼女の様子を確認した。

会場スタッフが騒ぎ立てる記者団を静めると、のき爺は咳払いを一つ、話し始めた。

「あー、見ておるか、ルカ。クライス、いや、フィールと呼んだ方が親しみがあるか。

あいつから？手紙？を預かっている。生前、あいつがお前宛に遺した手紙だ」

「手紙……？ フィールが、私宛に？」

静かな会場に響く彼のしゃがれた声が、若干エコーがかってスピーカーから聞こえる。

ルカは壁から離れ、信じられない物を目の当たりにするかのよう  
に画面に見入った。

「今夜、タワーで待っている。言っておくが、これは強制じゃない。別に来なくてもいい。フィールの手紙が欲しくなければ、な」

のき爺はにやりと笑った。

「あー、言い忘れておった。？お友達？もちゃんと来るようになるー」  
また会場がわあとなったのに合わせ、リンはテレビの電源を消した。

暗転した画面からブツブツと静電気が音を立てるだけの静寂が部屋を占める。

「その……」言いづらそうにして口を開いたのは、リンだった。

「ああいうトコに立っても、のき爺はのき爺だったね」

場を和ませようと敢えて言ったのだが、ルカの険しい表情を見るに効果はないらしかった。

「うーん……」リンが次の言葉を探すように唸っていると、

「私、行くわ」

ルカが言った。決意に満ちた、力強い声で。

「あの時使ったエア・グライド、チップに収めてあるわよね」

「ああ、今も一枚持ってる」

「別にあなたには聞いてないわ」ルカはナナシをにらみ、リンに視線を移した。

「持つてるけど……もしかして今から行くの？ まだお昼前だよ？  
テレビの上のデジタル時計の表示は十時三十二分。」

「私は今すぐフィールの手紙が読みたいの」

「気持ち分かるけどさ、きつと忙しいと思うよ。のき爺」

「私はノキジイとかいうのに会いに行くんじゃないわ。手紙をもらいに行くのよ」

リンは呆れた表情でルカを見上げた。

ルカの表情は頑なで、もう何を言っても無駄だろう。

そう察したリンは、ナナシを手招きしつつ玄関の方へ歩き出す。

「私も行くのか？」

「のき爺は？お友達も来い？って言ってたよ」

「こいつと友達か……」「誰かと友達になんてなった覚えはないわ。  
特にあなたとは」



ナナシとルカはまたにらみ合う。

「こいつと二人きりになりたいんなら、別に来なくてもいいけど？  
私は行くから」

呆れたように言っつて、リンは海人を指差した。

「……行く」

海人はがっくりとうなだれた。

「つていうか、俺は行っっちゃ駄目なの!？」

「駄目とは言わないけどさ……入れてくれないんじゃないかなあ」

「部外者は原則立ち入り禁止。刑事つて言っても無駄よ」

「そもそも来たところで何の意味があるというんだ」

三人に完膚なきまでに言われ、海人は渋々家に留まることになっ  
た。

玄関先で三人を見送る際、彼はナナシに声をかけた。

別に何か伝えたいことがあつたわけでもなく、しかしこのまま別  
れてしまうのも惜しい。

そんな微妙な心境から苦し紛れに出た言葉。

「い、いつてらっしやい」

「……ああ、いつてくる」

思いがけず、ナナシは応答してくれた。

相も変わらず無愛想だが、前よりも、心の距離が縮まった気がし  
た。

\* \* \*

ユートピア・タワーのヘリポートに降りる直前、ナナシたちはと  
ある人物に気付いた。

「おーい！」レンである。

陽気に手を振るレンを見るや、リンは機体から飛び降りていつた。  
かしく機体を慌ててルカが操縦桿を握る。

「あ、あんた……どうしてこんなところに？」

「まったくひどいよ！ オレを置いて帰っちゃうんだからさあ！」  
レンは勢いこんで声を上げた。

ぽかんと目を丸くするリンの後ろで、ナナシとルカの機体が着陸した。

「分かった。あんた、帰れなかったんでしょ」

「そうだよ！？ 結局、キヨテルは見つからなかったし、人がうじやうじや押し寄せてマジ勘弁って感じだったし、そんで帰ろうって思ってもトレインに乗るカネがないからダメとかでさ……三日間ぐらい、セントラルをほっつき歩いてた」

「で、エネルギー切れになりそうだったから、このタワーに来たんだけ？」

レンは口をとんがらせてうなづく。リンは笑いをこらえるのに必死だった。

「ごめんごめん。きつと帰ってくると思ってたからさ」

「カネもくれなかったし、帰り方も教えてくれなかったのか？」

「だから、ごめんって言うてるじゃん！」

「お前はいつつもそうだ！ ごめんっていえば何でも許されるって思ってる！」

「うぬぬ……！」と顔を突き合わせる二人のところへ、ルカがやってきた。

「あなたの名前……まあ、何でもいいわ。

ノキジイっていうのに言われて、ここで私たちを待っていたんでしよう？」

「ん？ あ、ああ、そうだけど」

ルカに答えている隙を突かれ、レンは胸倉を掴まれる。

「なにすんだちくしょう！」「なによ！」

威勢の良い二人を見て、ルカは「子供の喧嘩ね……」と呆れ気味にこぼす。

それがリンの耳に入ったのか、彼女はきつとルカをにらみ、

「あんだだっけ子供みたく喧嘩してたじゃん！」

と一喝。

ルカは完全に意表を欠かれ頬を赤らめた。「ふ、ふん」と強がりっぽく鼻を鳴らす。

もう一人の当事者であるナナシは、三人に背を向けてはるかな地平線を眺めていた。

思い出しているのかもしれない、クリプトナス襲来の時を。

「どうでもいいから、私は早くファイルの手紙が読みたいわ」

ルカの声音が一層の真剣さを帯び、二人はじゃれ合うのをやめた。レンは一步前に出て、後ろのポケットから長方形の白い封筒を取り出した。

「のき爺は『夜つていつても、どうせすぐ来るだろうから』とか言つて、オレをここで待たせたんだ。で、お前が来たら、これを渡せつて」

レンは手紙をルカに差し出す。

それを受け取る彼女の手は、震えていた。

「……読まないのか？ いいんだぞ、開けても」

ルカは手紙を大事そうに胸に押し付けたままぶたを閉じている。レンの声は聞こえていないようだった。

「怖いのか？」

ふと、ナナシが彼女の背後へと歩み寄ってきた。

「何が、怖いつていうの……？」

「その手紙とやらを読むのがだ」

「怖くてなんてないわよ。私は知りたいの。ファイルの、私に対する本当の気持ちを」

ナナシの挑発じみた言葉に後押しされたかのように、ルカは封筒から手紙を取り出した。

それを静かに広げ、ルカは緊張した面持ちで読み始めた。

「やっぱり、約束通りには来なかったみたいだな」

「のき爺……」リンは振り返り、第一に彼が白衣姿であることに驚きを覚えた。いつもはボロボロ毛玉のついたセーターを着ているの

に。しかしそれよりも、彼の隣にもう一人の歌姫がいることの方がよっぽど驚いた。ミク。彼女はいつものステージ衣装を身にまとい、あとはマイク一本あればたちどころにここが彼女のオンステージと化しそうであった。

その場にいる全員が一様にミクを見た。手紙を読むのに夢中なルカを除いて。

「管制室からお前らが来たと報告を受けて、無理やり時間を作ってきた」

言って、のき爺は二連にそびえるタワーのうち片方に目をやった。つられて見上げたリンとレンの目の先に、ペントハウスのように出っ張った箇所がある。

そこが管制室らしい。

「のき爺、色々と説明してほしいんだけどさ……」

「分かつとるよ、リン。だからお前たちに集まってもらった」

次にのき爺は、横目でルカを見やった。

「あいつが読み終わるまで、ちょっと待ってくれんか」

微笑みかけるのき爺に、リンはこっくりと頷く。

思えば彼も、ファイルの訃報をニュースで聞いて死人のような顔になっていた。

弟が死んだ。グミに『兄妹なの？』と聞かれたことがあるが、自分もレンが死んだらあんな顔をするのだろう。希望も何も失った、さながら廃人のような顔を。

それが今、大きな使命を受けたかのように彼の表情は活き活きとしている。

事情を説明しろとは言ったものの、リンにとっては、それだけで十分な気もした。

「あ……一つ、気になったから聞いてもいい？」

リンは耳打ちした。

「きょうだいつてさ、私たちがみたいなことを言うんだよね？」

あのさ、のき爺とファイルってさ、ゼンツゼン似てないよね」

のき爺の後ろにいるユウキはその言葉を聞き、傍目には分からないほど小さく笑った。

しかしのき爺は目ざとくそれに気付く。

「なんじゃ……まさか、ユウキ、お前もそう思っていたのか？」

「い、いえ。確かに、ご兄弟にしてはすさまじい身長差だとは思っておりましたが……」

のき爺の額に血管が浮き出る。まるで漫画に出てくるような怒りのマークだ。

「わしとあいつは兄弟だが、血の繋がりはない。まあ、それについても後で説明する」

ため息を吐くように言っ、のき爺はルカを見据えた。

怒りのマークは消え、それと代わるように親が我が子を見守るような光が瞳に宿った。

ルカは手紙を読み終えていた。何かか吹っ切れたように腕をだらんとさせ、昨日と打って違って変って晴々とした青空を仰いでいる。そして、不意に、雨が降った。大粒の雨だ。

「ルカ……？」リンは歩み寄り、ルカの手に握られた二枚綴りの紙を見やった。

再度ルカを見上げたのち、リンは静かにその手から手紙を取って、読み始めた。

「電話に出られなかったことを、まず、謝りたい。一度ならず、これまで何度も。」

君の気持ちにうまく応えられなかったのは、恥ずかしく思う。だが、知っていて欲しい。

君は私にとってかけがえのない存在であったことを。心の支えであったことを。

同じく、ミクもだ。私は君たちの存在を支えに生きてきた。

その二人のどちらも、私は失いたくはない。ミクはプログラムと外からの命令で生きている。君のように自分で判断して生きることが出来ない。そこでお願いだ。

ミクと仲良くして欲しい。君がミクを、正しい方向へ導いていつて欲しい。

これは君にしか出来ないお願いだと思っている。よろしく頼む」

「P.S.I love you.」言い終わり、リンは真つ先ののき爺を見た。

いぶかしげな眼差しを送られ、のき爺はばつの悪そうに顔をそらした。

「何、読んでるのよ……」

「ご、ごめん、つい」

ルカは震える声で言い、リンの手から手紙を取り上げた。

そして一同に背中を向け、また手紙をぎゅっと胸に押し付けてうつむいた。

「フィールは、お前を泣けるように造った」

言葉ながらに、ナナシは嗚咽をかみ殺すルカの背中に歩み寄っていく。

涙を見られないようにルカはそっぽを向き、肩で「来るな」と言っている。

「だったら、お前は笑うことだって出来るはずだ」

「……私に笑えて言っているの？ 馬鹿じゃない？」ルカは自嘲気味に微笑んだ。

「いま、笑ったぞ」

ルカは「あつ」というように口を覆った。

「私はフィールに『戦え』と、たったそれだけ言われた。お前のように泣けるようにも、笑えるようにも造られていない。これでもお前は、私を『うらやましい』と言うのか？」

ナナシはルカに対して複雑な感情を覚えていた。それは？嫉妬？と言えるかもしれない。

歌姫としてフィールや人々に望まれる形で生み出されているのに、も関わらず、本人はその想いを拒絶し、誤った道へと歩き出した。その結果が復興式典での？惨劇？を生んだ。

ナナシからすれば、どれも彼女のわがままに過ぎない。

彼女に対してやたらに喧嘩腰なのはそんな反発があるからだ。しかし、同じアンドロイドとして、そして同じく道に迷う者として、ルカには光差す方へ歩いて行って欲しいという想いもある。

そのためには自分の後押しが必要なのだと、ナナシは直感していた。

「どうして自分が生きていくか分らないと言うのか？ 見る。答えはあそこにある」

ナナシの指差す方を、ルカはおそろおそろ目をやった。

ミクがきよとんと突っ立っている。捨てられた仔猫のように、誰かを待っている。

「無理よ。仲良くしろだなんて……今さら……」

「戦わなくていいと言われることが、私にどれだけの価値があるかお前は知らないんだ。

行けよ。フィールが言ったんだぞ。お前に。お前だけに」

ナナシに背中を押され、ルカはつまづきそうになりながら前へ出た。

二、三瞬、迷ったように視線を泳がせ、やがてゆっくりとミクを真正面に見据えた。

フィールの愛情を独占していたミク。歌姫としても、彼女には敵わなかった。

言うなれば嫉妬、憎悪の矛先。

しかしフィールに『愛している』と言われた今は、それも少し和らいでくる。

ルカはためらいがちに歩き出し、ミクの前に立った。

「……いい？ これから、私の言うことには何でも従うこと。分かっただわね」

ルカはあくまでも突き離すように言った。

「第一の命令よ。手、出さない」

ミクは右の掌をいぶかるように見つめたあと、その手をおすおす

と差し出した。

ルカはその小さく、白い手を握った。今はまだ、ぎこちなく。

\* \* \*

「ねー、あの手紙ってさー」

タワーの内部に続く出入り口へと向かう途中、リンはのき爺に言った。

「のき爺が書いたんでしょ？」

のき爺の両肩が激しく反応する。「ぎくっ」と聞こえそうなほどだ。

「ば、ばか、聞こえたらどうするんだ！」

慌ててリンの口を押さえ、のき爺は振り返る。

ルカは心ここにあらずといった様子でうつむき、今は聞こえていないようだ。

その両隣にはナナシ、ミクの姿がある。

何だか奇妙な絵面じゃなあ……とのき爺は口元をほころばせた。

「やっぱりね。あの手紙の字、のき爺の字だったもん」

「まあ、弟はあんな手紙を書くようなやつじゃないしな……」

のき爺は観念したように言った。

「なんか残念だなあ。だって、ウソついたってことでしょ？」

「ウソも使いどころだよ。人間には希望が必要だ。それは心を持ったアンドロイドも同じ。わしは、ルカに生きる希望を持ってほしかったんだ」

「ふーん……。でも、手紙に書いてあった？電話に出れなくて？とか、どこで知ったの？」

「あいつの携帯端末の着信履歴を見た。どれもルカからで、ほとんど出ていなかった」

のき爺は複雑な笑みを浮かべる。

「ルカはわたしが子供の頃に近所に住んでいた女性の名前だ。歌



がうまくて、街の人気者だった。ミクは彼女の影響で歌手を志すようになっただ。わしたちにとつてルカはお姉さんで、何でも相談出来たり、甘えたり出来る人だった。そんなもんだから、弟は接し方が分からなくなってしまうたんだろ。甘えようとしていた人に、逆に頼られて」

「のき爺……一体、何の話してるの？」

「あ、そうか。お前たちは知らないんだ。ボーカロイド二人の、生まれた理由を」

のき爺は出入り口の敷居の上に立ち、おもむろに振り返った。

ルカはうつむいてはいるものの、悲しげな表情はしていない。

その手には大事そうにファイルの 自分がねつ造したのだが  
手紙が握られている。

彼女のことはもう心配なさそうだ。筆跡でねつ造がばれないかが心配だが。

続いて、のき爺はナナシに視線を移した。

両足が機械的に歩いているだけで、まったくうわの空といった様子。子。

のき爺はそのほとんど無表情に近い横顔に、寂しさや空しさがあるのを認めた。

「今度はあいつに……希望を持たせてやらないとな」

一行をなかに入れると、のき爺は扉を締め、列のしんがりについて歩き出した。

水先案内人はユウキ・シタラが努めている。

これから話すことは山ほどある。

例えば、紙の動物たちに書き遺されたファイルのメッセージについて。

そしてナナシたちがこの時代へとやってくるのに通った？ タイムトンネル？ は、ファイルが？ ブックロックシユウター BRS？ を使って作りだされたものであることについて。

\* \* \*

「お、おっほん！」

累々とする瓦礫のなかでも平らなものを選び、男は巨漢に似合わないぼろい紙きれを両手に持って何やらかしこまった様子で咳払いを一つした。

彼の前には太ももをしならせるように貧乏ゆすりを続ける白髪の女の姿がある。

「この？ウロ？より……っ！　？ハク？さんに発表がありませんっ！！」

ウロの声にはまさに一世一代といった気合が込められていた。

亀裂が入っていた瓦礫の壁が音を立てて崩れるほどの大声に、ハクは両耳をふさぐ。

その後ろには同じく両耳をふさいでいる大小二つの人影。背の小さい方は野球帽を目深にかぶり、ひよる長いもう片方は特にこれといったアイテムは持っていない。

「なー、？タン？。あのテガミ？　っていったっけ。あれってお前が書いたんだよな？」

「はい、？ダー？。タワーの一室で偶然にも紙を見つけまして、ニングンの文化を知る意味で？らぶれたー？というのを一書こさえてみたのです。もちろん、ウロ仕様からね」

「ふーん」と相槌を打ったダーは、斜めに切れた柱の荒い表面に腰掛け、愉快げにウロの様子を見つめた。

「拝啓。親愛なるハク様へ。乳がでかいのと凶暴なのが取り柄といえ取り柄のあなたに、私は大いに魅かれたものであります。私も頭と身体が無駄にでかいのと短気なのが取り柄といえ取り柄なので、あなたとは相性がいいのではと思……」

意気揚々と手紙を読んでいたウロの声が段々尻すばみになっていく。

自分が言っていたのとまったく違うことをタンが書いていたこと

に気付き、彼の方を慌てて振り返った時にはすでに遅し。

「なんだあの発表は……？　？ぶち殺されたいんです！？って言うてるのか、ああ！？」

「い、いえ、そんなつもりはこれっぽっちもな、」

リヴォルヴの分厚い両刃がウロの足元に振り下ろされる。

「お望み通りにしてやるよ！」

「ぎゃあああああ！！！」

もはや恒例となったハクとウロの追いかけてこが始まった。

仕掛け人であるタンはにやりとほくそ笑う。

「ん？」

「どうしたんだ、タン？」

「いえ。何者か、近くにいたような気がしたんですが……」

「気のせいだろ」

きよるきよると背後を見渡すも、廃墟の風景が取り留めもなく広がるだけだった。

気のせいか……と思う彼の目に、朽ちかけたユートピア・タワーが映り込む。

「ぶっ殺す！」「お助けええ！」という声を遠くに、タンはそれを何気なく見上げていた。

瞬間、？青白い光？がタワーの下の階から斜め一閃、天空へ放たれた。

何の前触れもなく。タンは息を呑み、茶番を繰り広げていた二人も足を止めた。

「お、おい、タン。今の見たか……？」

「……間違いありません。あれは団長の、？エンドレス・エンド？の光」

タンは立ち上がって、おそおそ歩き出した。

ウロとハクも顔を見合わせ、一行はそろそろとタワーへ向かい始める。

行きつく先が？破滅？であるとも知らずに。

t  
o  
b  
e  
.  
.  
.  
.  
.  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.

&l t ;&l t ;C h a p t e r 3 &g t ;&g t ; ; (後書き)

次回 予告

R o c k ・ 1 9 ? 破滅?

乞うご期待

いま、彼の目の前には優れた？身体？が無防備に横たわっている。五体満足なのは言うまでもない。

端正な顔立ち、青がまぶしいさらさらの髪、容姿もいい。

ふらつと街を歩けば大多数の女が振り返ることだろう。なかにはしっぽを振って寄ってくる尻軽もいるに違いない。ようするに、こんな甘いマスクに筋肉質でスマートな身体を持ち主になれたのなら女には困らないってことだ。

一方、今の自分はどうか。

ふらつと街を歩けば大多数の女が　男もだろう　悲鳴を上げて蜘蛛の子を散らすこと請け合いだ。それについてはこんな全身真っ黒の、まるでガソリンで出来ているような化け物になる前とあまり変わらないが。あつちは全速力で逃げだされるのではなく、早足で避けられる。それだけマリファナと酒の臭いを全身から放っていた屑人間であった自覚はある。

ただ、？チャンス？だけは常にあつた。金もない、魅力もない、道徳も良心もない、しかし、神が誤って自分という存在を生みだしてしまったことへの穴埋めと言わなければかり、？ツキ？だけはある。目の前のこれもきつと神からの贈り物なのだろう。

人間は思う。自分にはない物を持っている他人になれたとしたら？例えば、両足を失った男は車椅子を流しながら公園で無邪気に走り回る子供や、ジョギングを楽しむカップルに憧れる。恋人のまぶしい笑顔を独占する彼氏になりたいと思う。

普通、自分は自分のままだ。一生、いや死んだ後でさえも。それは墓石に刻まれた碑文が証明してくれる。この骸骨は土に埋まる前、両足を失ってひたすら悲しかった男なのだと。

しかし、彼には？権利？があつた。

揚々と両足を動かして恋人と並走する彼氏になれる権利が。

彼はその木の根のように先細りした短い腕を伸ばし、まさしくいま自分に与えられた権利を行使せんとしていた。男は悪夢にうなされていような寝顔を向けたまま起きる気配はない。カラスの足のように三つ又に分かれた指をあてがい、彼は小さく開かれた唇のなかを排水溝に落とした指輪を探すようにぎろつと覗き込む。薄暗い口腔内、喉の奥へ奥へと通ずる闇こそが自分の収まるべき場所であるのだと彼は直感した。

男の唇に全体重を乗せるようにして開かれた闇に焦点を絞り、彼は強く念じる。

俺はこの男になりたいのだ。この男になってしかるべきなのだ。すると闇は呼応した。彼の視界は闇に吸い込まれてそのまま喉の奥を突き抜けた。

激しい拒絶反応があった。この男の意識だ。自分の身体が？乗っ取られる？寸前で覚醒したらしい。敵に追いつめられた歩兵が理性もプライドも全て弾丸に変えてマシンガンを乱射させるかのような思念の抵抗があったが、やがて鎮まり、彼は男の意識が消失したのを認識した。

「死にたく……ない……」という声なき断末魔が直接心に入り込んできたからだ。

視界がぼんやりと開けてくる。全身に感覚がみなぎっていくのを感じる。両手を開閉させ、小指から一本一本連ねるように折りたたみ、広げるのを繰り返し返す。足も同様に。

続いて半身を起こし、彼は人間の衣服を身にまとった下半身がすらりと視界の上辺に伸びているのをしげしげ眺めながら、深く息を吸い込んだ。

吸ったのと同じ時間をかけて吐き切ると、彼は改めて自覚した。俺は？アンドロイド？の身体を手にしたのだ、と。

彼はさっそうと寝台からリノリウムの床に降り立ち、首を左右にねじって身体の具合を確かめた。アンドロイドの身体だから関節が硬かったり、視界にコントロールパネルのようなものが浮かんでく

るのかと思っていたが、人間とほとんど変わらない。いや、意識しなければ自分がアンドロイドだということを忘れてしまうほどだ。

このことは彼に大きなよろこびをもたらした。

続いて彼は壁にかけられていた二足の、黄色のラインが入った黒のアーミーブーツを手に取り、卒業アルバムのパージをゆっくりめくっていくかのように紐を結んでいった。何となく懐かしい気分だ、金がなくて十歩おきに紐がほころぶようなボロいスニーカーを履き続けるしかなかったあの頃を思い出す。

ブーツを履き終わると、彼は悠然とした足取りで歩いていった。黒く矮わいく躯な化け物であった数分前の自分に「俺は生まれ変わったんだぞ」と見せつけるかのように。

肌を覆う衣服の感触、かかとから地面に触れ、音を立てるアーミーブーツの硬質な音に優越感にも似た安堵を覚えながら、彼は部屋の片隅にあった姿見の鏡の前に立った。

中程のところでは亀裂が入っているものの、自分がいかに？新たな可能性？を手にしたかを確認するには充分だった。背伸びをしてようやく覗くことの出来た凹凸一つないなめらかな頬、重く閉ざされていたまぶたは、いま自分の意思一つで自由自在に動かせる。

百面相を演じる鏡のなかの自分を、彼はより黒みを増した？深紅？の瞳で見つめていた。

こんな悪党の目をしたやつの名前は誰だ？　ロビン・ケンウッド？　違う。それは過去の名前だ。今の自分の名前は？　K A I T O カイト？　というらしい。

彼はK A I T Oの身体を手にするのと同時に、その記憶や知識も全て受け継いでいた。

分かる。こいつがいかに強大な存在であったかが。それは？　ナナシ？とかいう女のアンドロイドによって地に墮ち、今まで深い眠りのなかにあつたが、堂々よみがえったのだ。

俺という新たな？魂？を迎えて。

真っ白だったロングコートは夜の森に広がる闇のような黒に塗り



つぶされ、瞳と同じ色のラインが全体を縁取るように走っている。黒い化け物である自分が持っていた暗黒のエネルギーが身体に入り込んだ際にもたらした変化なのだろうか。理屈はどうでもいい。彼はこの不気味な妖気をはらんだコートに全身をくまなく覆われていると？帝王？にでもなった気がしてすこぶる心地がよかった。

では何の帝王であるか、これから証明してみせよう。

そう言わないばかりに彼は鏡のなかでにたりと笑い、？ある物？を探し始めた。

寝台の付近にそれはなく、彼は小部屋を仕切る水色のカーテンを勢いよく開けて、メンテナンス用の機械類が置かれてある広間に出た。

部屋の中央と出入り口付近にトエトが二体、かすかに黒い煙を上げて力なく伏している。

ここへ入ったときに彼がやったのだ。オコジョのような小動物が甲高い声で人語を喋るものだからおどろいたが、その身体を鋭い爪でぱっくり切り裂いてみたら単なるロボットであることが分かった。

彼は様々のスイッチがびっしりと並んだ四角い機械のトレイに、探し物を見つけた。

まるで誰かが自分のために気を利かせてくれたかのように、チップとインストール用のデバイスがセットにして置いてあった。

彼は無線やディスプレイのついた小型デバイスを左手首に装着し、続いてチップの入られた透明なケースを開けた。三枚あるなかから彼は？朱色？のチップを取り、新たに手に入れたピストルのデイトールを楽しむかのようにしげしげと眺め始めた。

やがて、彼はチップをデバイスの挿入口にあてがい、一拍おいてから、ぐっと差し込んだ。ほとばしる白い電光。刻々と変貌を遂げていく右腕、徐々に強くなる重量感。

ロビン・ケンウッド本人は未経験の感覚であるが、K A I T O の記憶がそうさせるのだらう、懐かしさと共に心の奥底にわだかまっていた感情が一気に放出されていくような解放感が胸を占めた。

彼は今一度せせら笑う。白銀に輝く？砲塔？と化した己が右腕を眺めながら。

ただ、あまりに大きすぎて少々窮屈なのは否めない。

簡単さ。道は作ればいい。

エンドレス・エンド…… K A I T O の記憶が彼にこの砲塔の名を教えてくれた。

続いてその使い方も。

なんだ、基本はピストルと変わらない。

弾を込め、安全装置を外し、撃鉄を引き、最後に狙いを定めてトリガー。

唯一違っているのは、照準を合わせる以外のことを頭のなかで行う点だ。

砲身には左右に十の小窓がある以外は撃鉄もトリガーもないからだ。

彼は体内のエネルギーを右腕に注ぐイメージをし、すると砲塔がうるような音を立て始めた。エネルギーチャージ。？青白い光？が小窓を五つ満たした辺りから脳内で警告音が鳴り出したが、彼は構わずチャージを続けた。

六つ、七つ……全身が強い重力を受け、徐々に太陽に接近していくかのような尋常でない暑さが内臓を焼き始め、彼はいよいよ耐えられなくなつて心のトリガーを引いた。

瞬間、堰<sup>せき</sup>を切つたように青白い光の束が勢いよく放たれた。視界は一瞬で青白い閃光に覆い尽くされ、彼は今までに体験したことのない盛大なカタルシスに我を忘れる。

夜の営みのなかで絶頂に達したとき以上のエクスタシー。最上の解放感。

彼は埋もれた瓦礫<sup>がれき</sup>のなかで腹の底から湧きあがる哄笑<sup>うらやみ</sup>を止めることが出来なかった。発射の際に広がった光によって部屋は粉みじんと化し、足場も消え去って彼は六階から下の階に落ちて、崩れた天井が落ちてきた。

彼は左手で瓦礫を除け、よるめきつつも立ち上がった。

コンクリート片に頭をぶち抜かれたって、いくら粉塵が肺に入り込んでいったって、アリー一匹ほどにも気にする必要がない。

人間を超越した存在。で、ありながら、人間でもあることの出来る存在。

彼は開け放たれた窓に立って天を仰ぐ。神様ありがとう！ と。

最高の身体、そして最高の？玩具？をありがとう！ と。

ふと、彼はこちらに向かって小走りに急ぐ数体のアンドロイドに気付いた。

彼の口元が裂けんばかりに吊りあがる。

あたかも殺人狂が夜道を一人で歩くか弱い女性を発見したときのように。

\* \* \* \*

一部始終を見ていた。

二日前になる。いつものように馬鹿をやるアンドロイド四人組を傍観していた折、近くにいた小柄なブラックが一匹、はるか遠くのユートピア・タワーへ向かって頼りなげな四肢を動かし始めた。

気になって後をつけてみると、ブラックは一日がかりでタワーへ到着。もう半日をタワーの探索に費やし、その足取りはまさに？好奇心の赴くまま？といった感じだった。あわやアンドロイドに発見されそうな場面も何度かあったが、いずれもうまくやり過ぎた。

そしてもう半日後、つい数分前のことだ。

あのブラックはメンテナンスホールに眠っていたK A I T Oの身体を乗っ取った。

他の部屋にも昏睡状態こんすいのアンドロイドは数体いたにも関わらず、ブラックロックシユータよりもよってエクスプロリズムの団長である彼を、？B R S？のいない現在、間違はなく？最強？である彼の身体を我が物にした。

そして彼を最強たらしめる最大の由縁である？ エンドレス・エンド？を…… 生誕の祝砲代わりと言わんばかりにほとんどフルチャージに近いエネルギー量を天へと放った。

元の持ち主でさえよほどのことがなければ使わないのに、やつはあるつことか屋内でそれをやった。しかもためらうことなく、嬉々として。

実にとんでもない輩がK A I T Oの身体を乗っ取ってしまったと思う。

どういう原理が働いて本来なら狩られる立場にあるブラックが、狩る側であるアンドロイドの身体を支配することが出来るのかは不明だが、ああいった光景を目の当たりにするのはこれが初めてではない。まだ多くのアンドロイドがK A I T Oによって統べられる前一匹のブラックが瀕死の重傷を負ったアンドロイドの体内に口から入り込んでいった。

明らかにブラックの体躯と口の大きさが釣り合わないにも関わらず、まるで吸い込まれるように。K A I T Oのときもそれは同じだった。

言わずもがな、これは未曾有みぞうの危機である。アナザー・トラッシュ・ホール？から無数のブラックが湧いて出たとき以上の危機がこの世界に迫っている。

そして、私は決断を迫られている。傍観者の立場を貫くべき私がこの事態をアンドロイドの誰かしかに知らせることは立場と矛盾する行為だ。しかし、それは？ レン？に記憶を渡した一件でどうの昔に揺らいでいる。だから意固地になることもないし、それに観察対象が丸ごといなくなってしまったのでは元も子もない。

先ほどやつが放った一撃から身を守るべく、私は？ 空間転移？の能力を使ってタワーの外へ退避した。やつがあの後どうなったかは知らないが、死んでいるなどという都合のいいことはまずないだろう。むしろ、こうしている間にも誰かに危険が迫っているかもしれない。

私は左手首に備え付けられたタッチパネルを操作し、先ほどやつがいた部屋に座標を合わせ、空間転移を実行した。なめらかなリノリウムの床に降り立つはずが、立っていたのは折り重なった瓦礫片の上。ここまでは予想通りだ。しかし、目の前にある碎かれた窓ガラスの外に広がっていたのは　予想こそしていたが、出来れば当たって欲しくない光景だった。

アンドロイド四人組と、そしてK A I T O が、真つ向から対峙している。

私は瞬時に座標を合わせ、彼らの近くにジャンプした　。

？ G n o s <sup>グノス</sup>？が彼らの近くに降り立ち、光学迷彩でカメレオンと化したときには、ちょうどタンが呆気にとられた声を出したところだった。

「だ、団長……？」

B R S に敗北した精神的ショックで長らく昏睡状態にあった団長が目を覚まし、装いも雰囲気も一変させて眼前に立っている。それもエンドレス・エンドの銃口をこちらに向けて。

タンは何もかも信じられない気持ちだった。

先ほどの光は間違いなく団長が放ったものだ。

なぜ？

トレードマークであった真つ白なコートが絶望めいた色に変わってしまっている。

なぜ？

彼の胸中をうずまく疑問という疑問を察したのか、単に気まぐれか、団長はおもむろに口を開いた。

「お前は……いや、お前らか。この、K A I T O っていうやつの下僕なんだから？」

ということとは、つまり、俺のしもべでもあるということだ」

「おっしゃることの意味が理解出来かねます、団長。これは一体、どういう冗談で、」

「冗談？」

団長はあごをしゃくりあげながら声をあげ、タンの言葉をさえぎった。

「おいおいおい、団長である俺の行動に異議を唱えるってのか？ 疑問を感じるってのか？ 最低な下僕だな。だが、おしおきも調教もするのには面倒だ。消えろ」

向けられた銃口に青白い光が収束し始めた

「あぶねえ！」

ウロがとつさにタンに飛びかかり、彼がいた場所を青白い光芒じやうめいが矢のように通過した。

先ほど放った一撃とは比べるまでもなく極細ではあるが、アンドロイド一体を葬むすぶるには充分過ぎる威力がある。

KAITOはにやりと不敵に笑った。どうやらのが外れたら外れたらで構わなかったようだ。

「……おい、てめえの言う？ お前ら？ には、このあたしも含まれるのか？」

大剣・リヴォルブを悠々肩に担ぎ、ハクは足元に目をやって陰のある声で言った。

「確かに、こいつの記憶はお前が下僕でないことを俺に教えている。だが、俺はお前が気に入ったよ。どうだ。ならないか？ 俺の下僕に」

KAITOの深紅の眼差しはハクの豊満な胸に向けられていた。

彼女はその視線を断ち切るかのように刃を地面に振り下ろし、柄に両手を置いて鋭くKAITOをねめつけた。なびく前髪と共に、それはまるでゼリーのよう揺れた。

「クソ喰らえ、だ」

直後、彼女は飛び出していた。

三歩目で高らかと跳躍し、天高く掲げたリヴォルブを力一杯に振り下ろす。

KAITOは砲身で斬撃を受け止め、辺りに激しい火花と金属音

が飛び散った。

ハクは刃を弾かれた反動を巧みに利用して反転、K A I T O のこめかみめがけて剣を薙ないだ。が、これもガードされ、地に両足をついた彼女の顔面に反撃の拳が放たれる。

すんでのところ回避し、彼女は後ろへ飛びのいて間合いを取った。

緊迫した空気が場を占める。戦いはすでに、始まっているのだ。

「剣、か……どれ、ちよつと遊んでやるか」

張りつめた沈黙がそんな飄々とした一言であっさり、エンドレス・エンドの砲身の上部にあるスロットから朱色のチップが射出された。「アンインストール……だっけか？」

K A I T O はそれを手に取り、チップのボタンを押してエンドレス・エンドを収めた。

続いて普段の形を取り戻した右手をコートのポケットに入れて透明のケースを出し、朱色のチップと入れ替わりに白のチップを指につまんだ。

ハクは第三撃を仕掛けようと突進してきている。

それにたじろぐ様子一つなく、むしろ軽妙に鼻歌を口ずさみながら彼は白のチップをデバイスに挿入した。

「インストール！」

「おらああああ！」

K A I T O のかけ声とハクの怒号が刃と共に交錯する。

両者はその後幾度となく斬り結ぶも、形勢はK A I T O の方に有利なようであった。

というより、彼は明らかに手加減していた。ハクの重々しい斬撃を華麗な身のこなしでかわしていき、そこで生まれた隙に刃ではなく、手を突き出して彼女の胸を何度となく触った。完全に手玉に取られ、ハクは怒りをより爆発させてリヴォルヴを振るうも、その一撃もまた、彼に胸を触らせるチャンスを与えてしまっただけだった。「リアルに出来てんだなあ。人間の女と変わらない。いや、それ以

上か？」

「て、んめえ……」

K A I T O は左胸をもみ続けてくる。

ぶつつん、それは彼女の少ない堪忍袋の最後の緒が切れた音だった。

「ぶち殺してやらああああああ！」

彼女は柄を両手持ちにし、切っ先をK A I T O の脳天に向けてそのまま落とそうとした。

しかし、左胸をわしづかみにしていた彼の手に押され、呆気なく体勢が崩れる。

「アンドロイドになったからか？性欲？がわかねえ。ま、下僕にするまでもないな」

素っ気ない声で言っつて、K A I T O は右手に持った刀？アマミヤ？の切っ先をハクの喉めがけて繰り出す。

が、その一撃は横からの飛来物にはばまれ、アマミヤは地面に転がっていった。

「お前、ウロ、か。一体、何のつもりだ？」

何かを投げた後の体勢でいるウロに向け、K A I T O は抑揚のない声で言っつた。

「……団長を裏切るとか、齒向かうとか、そういうんでやっつたんじやありません。

ただ、冗談にしては、ちょっと度が過ぎてるんじゃないかと思いましてねえ……」

ウロは笑ってみせる。込みあげる感情を無理やり押し殺して作っつた愛想笑い。

それを察してかK A I T O も皮肉っぽい笑みを浮かべ、アマミヤを拾いに行った。

近くにはウロが投げた赤いトマホークが落ちている。彼はアマミヤを手取るついでにそれも拾い上げると、ウロの足元に投げてやっつた。



一瞬間、殺伐ころばつとした沈黙が降りた。

「つまらない、世界だ」

K A I T O は取り留めもなく広がる廃墟の光景を見渡して、無感動な声で呟いた。

続いて怒りの眼差しをこちらに向けるハク、その後方にいるダー、タンの二人組にゆっくり視線を移していき、最後にウロで視線を止めてまた静かに口を開いた。

「こいつの記憶が教えてくれるんだ。俺たちアンドロイドは快樂も喜びも知らず、ただ淡々と生き続けていく宿命にある。そりゃそうだ。こんなぶつ壊れちまった世界にうまい酒の呑めるバーがあるか？ いい女のいる宿はあるか？ ねーよ。俺たちアンドロイドが自ら壊しちまった。いうなりや自業自得。ま、そもそもアンドロイドにそんなんを楽しめる神経はないだろうがな」

一拍置いて、続ける。

「俺は楽しいことが好きだ。どこのどんな場所にいても、何か面白いことをしてやりたい。そこで提案だ。俺たちとお前らとで、殺し合

おうぜ」

K A I T O はアマミヤを天に突き刺し、これ以上にならない笑みを浮かべていた。

それはロビン・ケンウッドが生来持っている悪党の性が全面に現れた表情であった。

「タ、タン、どうする……？」

ダーは震える声で、傍らで両膝をつくタンに言った。

「おい、答えてくれよ。あれは団長じゃない。顔も声も団長だけど、喋り方は違うし、そもそもあんなに喋らないし、笑ったりもしない！ それに、あのコートだって……」

「分かっている」

重々しく閉ざされる鋼鉄のゲートのような声が、ダーの声をさえぎった。

ダーが不安と狼狽が入り混じった眼差しで見つめてくるなか、タンは黙考した。

彼は団長に忠誠を誓った身。いくらあそこに立っている男が真の団長ではないにしても、容姿は同じ。そしてその容姿を持ったアンドロイドは彼のなかで世界でただ一人なのだ。

その絶対的なただ一人の命令には逆らえない。しかし、内容が内容だ。

彼は思いつめた表情でうつむき、両手は恐怖とためらいとで震えていた。

「十分。十分だ」

K A I T O が天空に向けて声を放った。

あんなに厳肅げんしゆくな響きを持っていた団長の声が、今はやけに軽々しく感じられる。

「十分、待つてやる。短気な俺にはこれが限界だ。それまでにお前らはせいぜい仲間をかき集めて、俺の下へ来るがいい。あそこで待っているぞ。エクスプロリズムの本拠地だな」

K A I T O は横目にタンを見やり、彼らに背を向けて歩き出した。ハクは柄を握る手に再び力を込め、やつの背中に斬りかかってやるうかと思っただが、直後聞こえたタンの声によって、それはとん挫した。

タンは左手にある団長と同じ型式の無線内臓ディスプレイに向け、こう言ったのだ。

「全団員に告ぐ。これより十分後に、エクスプロリズムの本拠地に集合せよ……」

エクस्पロリズムの本拠地である小さな瓦礫の築山。そのなだらかな円の頂きにある一脚の椅子に、K A I T O はご機嫌ななめな王子よろしく頬杖について座っていた。

「……集まったか」

K A I T O は憚然とした響きのある声で言い、組んでいた足を崩して立ち上がった。

築山のふもとはは群がるようにして全団員の姿がある。驚愕を露わにしている者、早く武器を振りまわしたくて舌舐めずりしている者、神妙な面持ちで伏せている者、皆様々だ。

K A I T O は愛刀を足元に突き刺し、人差し指で頭数を数えるようにゆっくり一同を見渡した。

「あの女、ハクといったか。あいつとガキの姿がないが、まあいい。改めて自己紹介をさせてもらおうとしよう」

彼は何気なく虚空を見上げ、再び一同に視線を戻した。

「俺は元人間だ。名をロビン・ケンウッドという。くそみたいな人生が終わって、そのあと俺は黒いバケモノになった。ここではブラック……と呼ぶそうだな。ブラックになった俺は青白いゲートを通ってこの廃墟の世界へやってきた。そして二日ばかりほったき歩いて……ユートピア・タワーに眠っていたK A I T O というアンドロイドの身体に入り込み、乗っ取った」

最後の言葉を言うとき、彼は語気を強めた。

団員たちの間でざわめきが起こる。彼らがひそめき合うなかからひよろりと背の高いアンドロイドが毅然とした足取りでK A I T O の前へと進み出ていった。

「タン、か。何か言いたいことでもあるのか？」

「お言葉ですが、団長はもう一度、メンテナンスをお受けになった方がいい。」

ブラックがアンドロイドの身体を乗っ取るなど、あるはずがありません」

「あるはずがない？ 目の前に実例があるじゃないか、ほら」

言って、彼は大げさに両腕を広げてみせる。

「納得出来ない、ってツラだな。俺が何のために自己紹介なんてくだらない前置きをしたと思う？ 俺はお前らの団長じゃねえってことを分からせるためだ。」

だからお前らは、心置きなく俺を殺しにかかれればいい」

タンはため息を吐くようにかぶりをふって、また鋭い眼差しを前に向けた。

その切れ長の瞳には目の前の男が？団長？であることを信じてやまない頑なな光が宿っている。

「団長は、もう一度メンテナスをお受けになった方がいい」

「おいおい、そのセリフは今聞いたばかりだ。だとしたらあれか？

？団長命令だ？と言った方が、お前らは聞くつてのか？」

「……いえ、団長を殺すなど、我々には」

次の瞬間、全ての音が止んだ。

群れをなす団員たちの息遣いも、衣擦れの音も、足音も、全て止んだ。

静寂に乾いた響きを立てたのは「かはっ」というタンのうめき声だった。

その胸の中央にアマミヤが深々と刺さり、貫通した刃が中程まで姿を見せている。

KAITOは目にも止まらぬ速さで間合いを詰め、タンの胸を一突き、容赦なく貫いたのだ。

「？団長命令だ？って言っただろうが、くそが」

KAITOは悪霊に憑かれているかのような邪悪な声をあげた。タンは両足の力を失い、ほとんど刃に支えられている体勢になっていた。

「お前らは崇拜する団長のことなんざよりも、自分たちの心配をし



地面には黒い液体があちこち溜まり、ハクはその一つを踏んで扉の方へと進んでいった。

ナナシとレンの行動から、廃棄炉は過去へ続くタイムトンネルだという認識がアンドロイドの間に広まっている。K A I T Oの下へ行く前、タンはダーにこう提案した。

『この事態を、B R Sに伝えてほしい』と。

それが建前であることは明らかだった。

彼は戦闘能力の低いダーをK A I T Oとの戦いに巻き込んでむざむざ死んで欲しくなかった。

続いてダーの護衛役としてハクを推薦したのはウ口。彼もタンと同じ気持ちだった。

当然のようにハクは声を荒げて拒んだが、タンのある一言で途端に静まり、ダーを過去世界へ連れていくことに同意した。ナナシに逢いたいという想いも少なからずあったが、一番大きかったのは、過去に行けば？エマ？に逢えるかもしれないということだった。

エマのことを何故タンが知っているのかは謎だが、恐らく黒トエトがばらしたのだろう。

いつもの彼女なら「あいつぶつ殺す！」と叫ぶところが、この絶望的な事態、空気が、それをさせなかった。

彼女は薄く開けられた鉄扉のすぐ前でうつむき、背後の音に耳をすましていた。

「ハク……？ どうしたんだよ、早く行こうぜ。ブラックがまた出てくるかもしれないし」

幼さの残る甲高い声によって、ハクの顔が静かに上げられた。

「行けよ。お前一人で」

「え？」

扉の隙間に身体をはさむように立っていたダーは、野球帽の下で目を白黒させた。

「今、なんだった……？」

「お前一人で行って来いって言ったんだ。大丈夫だろ？ よくは知

らねえが、過去の世界はたくさんニンゲンたちが生きていて、こんなふうには危なっかしい世界じゃなかった。

だから、あたしがいなくなつて大丈夫だ。ナナシの姉さんに、よろしく言つといてくれ」

「お、おい！」

歩き出したハクの背中を追いかける。

ハクは肩越しに振り返り、小さく笑みを浮かべて言った。

「あたしはエクспロリズムの団員じゃねえが……見捨てておけねえんだ、あいつらが」

彼女の、どこか優しい光が灯る瞳は、遠くの築山で行われている戦闘に据えられた。

続いて両足がそこへ向かつて動き出す。左右に揺れる白い束髪、滑るような両肩のライン、そのか細い腕とは不釣り合いに大きいリヴォルヴ、やけにゆつたりとした足取り。

ダーはその背中に感じた。彼女は？死？を覚悟しているのだと。「オイラだって戦いたいよ！ あいつらの力になりたい！ 自分のカラダがぶつ壊れちまってもだ！ でも、でもさ、あいつら、わざわざオイラたちを生かしてくれたんだぞ！？ その想いを無視するのは おい、聞いてんのかよ！」

ハクはもう、振り返ることも、立ちどまることもなかった。

\* \* \*

「まったく、実に」

KAITOは流れるような動きで一人、また一人と斬り伏せていく。

虚空を舞う首、真つ二つにされ、どさつと音を立てて崩れる上下半身。

彼の通ったあとはアンドロイドの死屍ししが累々と出来ていった。

背後から「かちり」と自動小銃を構えた音が耳に入る。KAIT

Oは振り向きざま、左手に持った白銀の銃身を持つ拳銃のトリガーを引いた。対アンドロイド用の貫通弾は吸い込まれるように敵の額に命中。また一つ、死骸が増えた。

「骨のない奴らだなあ」

彼は周囲をひとしきり見渡したのち、大きなため息を吐くように言った。

あれほど愉快げだった表情はいま、つまらない映画を見ているかのように不機嫌だ。

団員の総数は正確に把握していないにせよ、軽く五十は超えていたはず。それが十分と経過しない間に惨たらしい屍と化し、彼は殺伐とした沈黙のなかにただ一人立っていた。

足りない。刺激が足りない。

彼は機敏に首を動かして、まだ戦えそうな者を探した。

築山の近くに大男がいる。ウロだ。

彼は致命傷を負ったタンを抱きかかえ、一向に戦おうとする気配はない。

やつの熱くなりやすい気性なら例のトマホークを握って真っ先に飛びかかってくるかと思っていたが、やつが襲来する団員の群れに紛れて向かったのは、タンの下だった。

ペツ、と彼は無意識に唾液を吐く動作をしたが、口からは何も出てこなかった。

なんと胸糞悪いことか。自分のように人間の魂が憑依しているのならば分かる。だが、それでもないのに、やつらアンドロイドは機械のくせして人間と同じような感情を持っている。

くだらねえ、くだらねえ……彼は頭のなかでぶつぶつ言いながら依然背中を向けたままのウロの下へ歩き出そうとした。

「よう。散々やってくれたみてえじゃねえか。？偽団長？さんよ」  
ハスキーな女の声。

KAITOは振り返って、にたりと笑った。

「よく来たな。ちょうど退屈してたところだ。こいつら、まったく」



話にならなくてよ」

K A I T Oは促すように首をめぐらせる。

高低差のある瓦礫のあちこちにアンドロイドの死屍が埋もれ、身体のどこかしらを失った手負いがうめき、戦場特有の空気と相まってさながら地獄絵図が広がっている。

ハクは瞳の動きだけでそれを把握すると、肩に担いでいたリヴォルヴを下ろし、正眼に構えた。

「奇遇だな。あたしも、退屈してたところだ」

「……退屈してるモン同士、いつちよ、おっぱじめるか？」

「ああ。……行くぜ」

彼女は勢いよく地面を蹴って一直線に駆けだした。

対して、K A I T Oは動き出すこともなく、おもむろに銃口を向けた。

彼女の胸、手足、うなじを、いかがわしい手つきで触れていくように銃口でなぞっていく、胸の中央に狙いをぴたつと狙いを定め、そのままトリガー。

二発の銃弾を易々薙ぎ払い、間合いを詰めた彼女は右から左へ大きく剣を振りまわした。

刀を持つ手とは反対から攻撃を繰り出され、防御が遅れると瞬時に判断したK A I T Oは垂直に跳躍。再びトリガーを引くも、弾切れ。脳天に銃弾をぶち込むことが出来ずに舌打ちを一つ、仕方なく銃をほおり投げてアマミヤを振り下ろした。

それを紙一重にかわしたハクは反撃の横薙ぎを繰り出す。かわされる。もう一度、今度は袈裟がけに。かわされる。例の気障っらしい華麗な身のこなした。

「おいおい、当てるつもりあるのか？」

「うつせえ。当たらないよう必死なくせに」

次の彼女の攻撃は横薙ぎからの縦一闪。額から股間まで真っ二つにする魂胆なのだろうが、攻撃が単調すぎるんだよ。K A I T Oは皮肉っぽく笑って横に避けた。しかし、リヴォルヴの切っ先が勢い

よく地面に叩きつけられ、瓦礫片がつぶてとなって彼の視界を覆った。

これがハクの狙いだっただ。

彼女はK A I T O がひるんでいる隙に強烈なボディーブローを見舞い、続けて垂直に飛び上がった。狙いはうなだれているやつのは首筋、ただ一つ。

「うおらああああ！」

彼女は渾身の力を込めてリヴォルヴを振り下ろした。

轟音と共に粉塵が爆裂するように四散し、辺りは土煙りに覆われて静かになった。

薄茶色の粉塵が晴れると、ハクとK A I T O の二人が相對するように立っていた。

彼女の左頬にぱっくりと刀傷が走っている。対して、K A I T O は傷一つ負っていない。

あの土壇場で彼は弧を描くようにアマミヤの刃を走らせ、リヴォルヴと激突した際に超過した切っ先が彼女の頬に傷を作ったのだ。

「残念だったな」

K A I T O は挑発するように言った。

「まだまだ、これからだろ？」

ハクは言葉の途中で飛び出していった。

両者の斬撃の応酬が、火花を散らして再開された。

\* \* \*

一方、ウロはタンに声をかけ続けていた。

「ウソだろ」「おい、聞こえてねえのか」「タン、タンッ！」そんな言葉しか出てこない。

タンは腕のなかでまぶたを閉じている。長髪が逆さに垂れ、ウロは彼の額の大きさを今さらながら知る思いだったが、この期に及んではどうでもいいことだ。

しかし、ウロの声が嗚咽になり変わろうとしていたとき。

「どこまで……も……うるさいんですね、あなた、は……」

タンは重たげにまぶたを開け、今にも消え入りそうな声をあげた。  
「タン！ 生きてるんだな、今すぐトエトのところ運んでやらあ  
！」

一気に希望を取り戻したウロの顔を前に、タンは小さくかぶりを振る。

「……た、しを……」

「あん？ 聞こえねえぞ、タン」

ウロはタンの口元に耳を寄せた。

所々かすれて聞きとれない部分はあったが、タンは大体このようなことを彼に告げた。

『わたしを運ぶのは戦闘が終わってからで構いません。』

駆動機関をやらただけで、修復は後からでも充分に間に合います』

一、二拍置いてから、タンはたどたどしく言葉をつむいだ。

『団長はココロを乱しておられる。荒療治になってしまいますが、』

ウロ、団長に一発見舞ってあげてください。あの方は死にかけてい

た我々を救ってくれ、団に迎え入れてくれた。

今が、その恩に報いるときです』

しかし、ウロの表情は暗かった。

ハクと激しい斬り合いを演じるKAITOは邪悪な笑みを湛えている。まるで悪魔にそそのかされた子供が禁じられた遊びに夢中になっているかのように、無邪気で、酷薄な。

ウロは息も絶え絶えなタンに顔を戻し、はばかりように言った。

「タン、今の団長はもう」

「図体だけじゃないって、とこを……わたしに見せてくださいよ、ウロ」

タンは弱々しく微笑み、やがて静かにまぶたが閉じた。

強制的にスリープ状態に入ったのだ。人間でいうところの失神に当たるが、アンドロイドが意識を失うことは基本的にあり得ない。



そこへ吸い込まれるようにウロのトマホークが振り下ろされる。激しい金属音がほとばしるも間もなく、ウロは左の鉄拳をK A I T O顔面めがけて放つ。

「ぐあ……っ！」

しかしうめき声をもらしていたのはウロ。

引きしまった腹の肉が前後に躍動し、それが全身に強烈な痛みを伝える。

K A I T Oはウロの左フックを揚々かわしてカウンターボディブローを叩きこんだのだ。

更に彼は拳を作ったままの左手を胸に戻して、一瞬間溜めてから裏拳を見舞った。

巨大な鉄球にぶち当たったような衝撃が頬に走り、ウロの巨体はすっ飛んでいった。

「よそ見してんじゃねええええ！」

視界を覆う人影。K A I T Oは直後の振り下ろしを刃で受け流しつつかわし、ハクの着地のタイミングに合わせその腹に横蹴り一発。続けて反対の右足でハイキック、余った回転力で後ろ回し蹴りを放った。

三連続の蹴りをもろに喰らい、ハクは吹き飛ばされた後もしばらく立ち上がれなかった。

手について痛みにもだえる彼女を余裕綽々に見下ろしながら、K A I T Oは変わらずうすら笑いの顔で言う。

「いいねえ、実にいい。アンドロイドの身体は実に最高だ。

軽いし、いくら動き回っても息一つ乱れないし、何より強い。

人間のままだったらとっくに殺されているところが……俺の楽勝モードだ。

でも、そろそろ飽きてきたなあ」

K A I T Oは左手でコートのポケットをまさぐった。

取り出したのはエンドレス・エンドの入った朱色のチップ。

それが目に入った途端、ウロの表情が一変する。

「や、やべえ！」

しかし彼が飛び出すより一步早く、ハクがリヴォルヴを下段に構えて走り出していた。

K A I T O は彼女をぎりぎりのところまで引きつけたところで。

「……………なーんてな」

チップはコートのポケットに落とされ、なかに入ったのとちようど『どさ』っという物音が辺りにこだました。子供型であるダーの掌に収まるほど小さいチップがコートの繊維に当たった音にしては大仰すぎる。そう、その音は

「ハ……………ハクさんっ!？」

ハクの右腕はその肘から下がなく、導線が丸出しになった断面からは電気が散っていた。

繋がっているべき箇所はハクより離れたところに落ちている。リヴォルヴを握ったまま。

「わ、私、一体何をして……………」

地べたに座り込み、一変して殺気と野生の気性が抜けた彼女は、自分の右腕の惨たらしい有り様を見て戦慄に顔をゆがめた。「いやああああああ！」

「私の、私の、右腕が、ない……………っ！　なんで、どうして……………!？」  
狼狽というよりは半ば狂乱した様子で辺りをきよるきよる見渡し、彼女は瓦礫のくぼみに自らの右腕を見つけると、本能に突き動かされるようにそれを取りに行こうとした。

そんな彼女の機先をK A I T O が制す。刃を目の前に振りかざされ、彼女は硬直した。

「これはどういうことだ？　お前、さっきとまったく様子が違うぞ。急にひ弱な女になりやがった。俺が右腕をぶった切っちゃったのがそんなにシヨックか？」

「あ、あなたが……………私の右腕を……………？」

「ああ、そつだよ。覚えてないのか？　なんか？　二重人格？　みてえだな、お前」

冗談めかして言ったが、K A I T Oのそれは当たっていた。

彼は左手で顔を覆ってひとしきり狂ったように笑い、ある瞬間ぴたっとやめた。

指と指の間に深紅の瞳が見開かれる。そのサファイヤの奥で殺意の炎がゆらめいた。

彼はおもむろにアマミヤをかがげ、怯えた仔猫のようにこちらを見上げる顔に狙いをつける。

「楽しかったぜ？ お礼と言っちゃなんだが……ひと思いに、殺してやる」

そして内にほとばしる快感を味わいながら、彼はアマミヤを振り下ろした。

ハクは固くまぶたを閉じる。

何らかの痛みが襲って来るかと覚悟していたが、しばらく経っても何もない。

やがて、音がした。金属片がスコールになって降り注ぐような轟音。

地響きを感じたのを最後に辺りは静まり返り、ハクはおそろおそろまぶたを開けた。

目の前にはどこかで見たようなスキンヘッドがあった。

うつ伏せに倒れていたそれは、最後の力を振り絞るといったように身体を小刻みに震わせつつ、ハクの方を向いた。びくっと、彼女は肩をすくめる。

「よかった……ご無事で、ハクさん」

「あ、あなた、足が、」

ハクの目が奥へ向けられる。

「足が、ない……」

続いて、大男をはさんで眼前に立つ男の持った刀が目に入る。

彼女は全てを理解した。目の前に倒れている大男は自分をかばい、背中に刃を受けたのだ。結果、腹から下にかけてが斜め一閃に断ち切られてしまった。

先ほど聞こえた轟音は、巨体が地面に倒れていく音だったのだ。

「どうして……？ どうして、私なんかのために、こんなこと……」

「あなたを愛しているからですよ、ハクさん……」

ウロの意識はすでもうろうとうとしていた。

そのなかで間近に見る恋焦がれた人の姿。怖い方のハクさんもいけれど、こっちのハクさんも可愛いなあ……などと、状況にそぐわない想いがぼんやり浮んだ。

「感動的などころを邪魔して悪いんだけどよ……馬鹿だろ、お前らこんな最高の身体を生まれながらに持ちながら、やってることは人間と変わらんってどういうことだ？ 意味ないじゃねえか。そういう甘ったらしいの、うんざりすんだよ」

言って、K A I T O は再びアマミヤを振り上げる。

「死ね」

ハクの首筋めがけて振られた刃は　しかし、空を切った。

K A I T O は驚愕に目を丸くする。ハクが忽然と姿を消していたのだ。

たったいまここにいたはずなのに……辺りを見渡すもハクの姿はなく、そればかりか彼女の右腕も見当たらない。

不可解な現象にうろたえていると、足元から引きつった笑い声が聞こえた。

「見えたぜ……？ぐるぐるまーく？……そうか、あんたが、ハクさんを扉に連れて行ってくれたんだな」

「扉？」

K A I T O は前方、遠くにある鋼鉄扉を見据える。

四角形の石桶の一側面に仕掛けられた鋼鉄扉、なかには廃棄炉を封印してある。

扉が薄く開いているのは遠目には視認できないものの、二本の鎖が解けているのは分かった。

K A I T O は踏み出そうとした。

「待てよ」



右足首にまるで万力に締められるような痛みが走る。

おどろいて見てみると、ウロが右手でがっしりと足首を掴んでいた。

いくら動かそうとしても、足が地面に突き刺さったように微動だにも出来ない。

ウロは背中を袈裟がけに切り裂かれた際に、胴体だけでなく左腕も一緒に切断されていた。右腕は彼に残された唯一最後の対抗手段。それが太陽のプロミネンスのように燃え猛ける闘志、執念を受けて、K A I T O をここに止めて離さなかった。

「お、お前……っ！」

「あんたはこう思っている。俺たちのことを、自分に傷一つつけられずに死んでいったザコ共と。確かにそうだ。俺たちはあんたに勝てない。だけどよ、だけどよオ……っ！」

ウロは右手に全身全霊の力を込める。みし、みしみし、内部の骨組みが軋む音。

K A I T O はここに来て初めて？痛み？を感じた。

それから自らを解き放つために彼は慌てて刃を突き刺す。

一度、二度、ウロの頭に。

やがて締め付けは弱まり、ウロの右手が貝柱を失った貝のようにゆっくりと開かれた。

「ふざけた真似しやがって……」

悪態をつき、K A I T O は歩き出そうとする。右足首に刺すような痛みが走った。

見れば？手形？がくつきりについている。

黒い液体によって、それはまるで烙印のように。

ちっ、大きな舌打ちを一つ、K A I T O は今一度ウロの頭に刃の切っ先をめり込ませた。

「こんなんが傷のうちに入るかよ……見る。お前らは俺に何もできず、むざむざ死んだんだ。この世界にや、お前らみたいなザコがまだ残ってんのか……？」

不快感をあらわにした顔で、彼は周囲の惨状を高見するように眺めながら独りごちる。

「そんならよ、この際だ。全員スクラップにしてやる。終わったら……そうだなあ、お前が言った？ 扉？ とやらに行ってやるうか？ ？ 討ちもらし？ もいることだしな」

K A I T O は腰に両手をあて、踏みにじるようにウロの顔を覗きこんだ。

車に轢ひかれたようにぐしゃぐしゃの頭。脳漿ノウジュウの代わりにぶちまけられているのは金属片。

K A I T O は横たわる彼の頭を一蹴、歩き出していった。

全てが終わったあとの静寂に、世界で最も凶悪な笑い声をこだまさせていきながら。

t o b e . . . . . c o n t i n u e d .

&lt;&lt;Chapter 2&gt;&gt;(後書き)

次回 予告

Rock・20?バッド・サンタクロース?

乞うご期待

## Rock・20? バッド・サンタクロース? (前書き)

本稿では「挿絵」を使用しております。

もしも挿絵表示を「OFF」にしている方は、「ON」にしてお楽しみくださいませ。

## Rock・20？バッド・サンタクロース？

？再生構想？。  
リバース

元はフィールの私室だった部屋で、のき爺は険しい表情でそう言った。

彼は黒革の一人用ソファに腰掛け、翡翠ひすいのローテーブルの上には？紙の動物たちが？が一枚一枚元の正方形に広げられた状態で並べてある。

紙の裏面に黒インクの細かな字で綿密に書かれていた事実は、その場にいたナナシ、リン、レン、ルカ、デスクオペレーターのユウキ・シタラをしばし唖然とさせるに足りて余りある衝撃を持っていた。

のき爺は一同を見渡し、皆のなかで唯一向かいの三人掛けソファに腰掛けるリンを見やったのを最後、パネルのように整然と並べたうち一番右上の紙を手に取り、読み始めた。

『ドームの一步外、我々人類が過去に住んでいた大陸はそのことごとくが現在？ブラック？たちによって占拠されてしまっている。これはトランジスタ誕生の翌々年に外に向けて飛ばされた無人探査機が映像を伝えてきている。壊れていなければ今この瞬間も探査機は現地球の有り様をW・A・Fのやつらに送り届けているだろう。世界戦争で地球全土にまき散らされた？瘴気？が人体に影響を及ぼさない程度に薄まるにはまだ数世紀の時間を要する。それを見越して焦土と化した大陸を人類がまた暮らせるように環境整備するためには、まず第一にブラックを殲滅せんめつするところから始めなくてはならない。この大事業は数十年、いや、一世紀はかかるかもしれない。人の手ではまず無理だ。そこでW・A・Fは瘴気の影響を受けず、超長期的な活動の見込める？アンドロイド？によってこれを成そうと計画した』

二枚目を手に取ると、のき爺はリン、レン、そしてナナシに目を

やった。

「ここから、心して聞いてくれ」と前置きし、彼はまた敵かな口調で再開した。

『……ナナシやリンたちにはまだ伏せてあるが、恐らく、彼らはこの計画のために生み出されたアンドロイドだろう。倒したブラックを自らのエネルギーに変換する？アライブ機関？が組みこまれているのがその最たる証拠だ。その機関が？ブラックを倒さなければいけない？という本能になって働くことで、アンドロイドは生命維持のためにブラックを狩り続けなければならず、こうすれば野放しにしているだけで計画は勝手に進行する。別の時間軸においてアンドロイドは人類の未来を乗せて長い道のりを歩み出すはずが……あるうことか反旗をひるがえして人類を滅亡に追いやった。これ以上の皮肉はないだろう』

紙がそつと元の場所に置かれると、それが合図になったかのように底なしの沈黙が広がった。リンは大きく見開いた目を白黒させ、その後ろにいるレンは口元に指を当てて自らの頭上に浮かんだ疑問符をぼんやり見上げていた。

そしてナナシは表情にこそ出さないものの、奈落に突き落とされる感覚を味わっていた。

私は？再生構想<sup>リバース</sup>？という計画のために生み出されたアンドロイド。たったのそれだけ。以外にはない。

長らく求めていた自分の生まれた意味を、いま、ここで、ようやく知ることが出来たのに……ナナシの心は満たされるどころか、むなしさがこみ上げてきてしょうがなかった。

クリプトナス襲来の時も、似たようなことをフィールに言われた。『戦うこと。それがお前の価値だ』

もつと他の、『お前は戦わなくても十分に価値がある』というよくな言葉であれば、枯れた井戸の底のようにぽっかりと心にあいた穴も埋まるのだろうか。淀みのない透水によって満たされ、二度と乾きにあえぐことなく生きていけるのだろうか。

分からない。一つ、断言できるのは、ここでリン、レン、のき爺、期待していないがルカに 先ほどのような言葉を優しく語られても、何の感動もないだろうということだ。

「……………シ……………ナナ……………シ……………」

遠くから聞き覚えのある声が聞こえる。

「ちよつと！ ナナシってば！」

ナナシは白昼夢から覚めた。

目の前には腰に両手を当てて、ぶすつとした表情でこちらを見上げるリンがいた。

彼女は卵色のスウェットパーカーの上からPIYO MARTのエプロンを身に付け、ナナシもそれと同じのを首からかけている。

場所はエインセルの噴水広場で、昼間。

街の男衆が脚立を使い、建物の壁に燃えるような赤に白と緑のラインが入ったウェーブ・ペナントの端をつけ、反対側の建物の壁までそれを広げようとしていたり、広場のあちこちでチップ・インの白い電光が散って、大小様々の？クリスマス・ツリー？が置かれ、子供たちがはしゃぎながらその一つ一つに色とりどりのメタリック・ボールとモールで持って素っ気ない緑の矢印に装飾を施したりしている。

物思いに耽るあまり心ここにあらずで、彼女が現況を把握するのにはしばしの時間を要した。

街はいま来たる明日の？クリスマス？の準備でにぎわっており、ナナシ自身もリンに連れられて準備に参加している。

とはいっても、彼女はリンや街の住民に言われたことを淡々とこなすだけであるが。

「すまない。考え事をしていた」

「まあナナシがぼーっとするのは昔っからだけどさ……………それより、これ持つていつて」

リンはイボのような形の細長い電球が螺旋状につけられた電気コ

ードの端を彼女に持たせ、家電屋の二階の壁に釘を打つジャックを指差した。彼が腰掛けている脚立はワトソンが押さえているのだが、ショーウィンドウにあるテレビでグルメ番組でもやっているのだろう、それを食い入るように見つめてしまっただけで兄貴分であるジャックをすっかり脚立転倒の危機に晒してしまっている。

「これは一体何だ？」

「クリスマスのイルミネーションだよ。夜になると光ってきれいになるんだって」

リンは「早くみてみたいなあ」というように目を輝かせ、普段の二倍は楽しげだった。

のちに彼女はグミと呼ばれ、ナナシもジャックの方へゆっくり歩きだしていった。

そんな彼女の悠然とも呆然とも言える足取りを、自称？さすらいの吟遊詩人？カムイがくぼが噴水の縁によっかかるように立ちながら、甘い眼差しで見据えていた。

「エリーたち、知ってるかい？」

例によって、かくぼの周りには彼に？エリー？と称される女性ファンらが人垣を作っていた。自分たちの方へその見目麗しい顔が向けられ、エリーたちは一斉に嬌声を上げる。

「今年のクリスマスも？雪？が降るそうだよ……。気象管理局が二、三週間ぐらい前から告知してるんだ。？ホワイト・クリスマス？だなんて、国も憎たらしいことしてくれるよね？」

僕はキリスト教徒じゃないけど、ロマンチストではある。

だからこんな寒さにも耐えられるのさ」

更に「それに僕が凍え死にそうになっても」と続け、

「君たちが温めてくれるだろうしね」とフィニッシュとばかりウィンク。

エリーたちはひと際大きな嬌声のハーモニーを響かせて広場中の視線を集めたあと、「今すぐ温めてあげる〜！」とかくぼに殺到した。



このあと彼が『人は温かすぎても死ぬ』ということを感じたのは言うまでもない。

そんな今まさに圧死寸前の彼が言った通り、クリスマスには毎年雪が降ることになっている。一年を通してTシャツ一枚で過ごせるほど温暖に保たれているドーム内は、12月25日に向けて降雪の条件を整えるべく数日ばかりで徐々に気温を下げていき、それから年明けの三か月間に渡っていわゆる？冬季？になる。これはトランジスタが多人種多国籍の国であることと、人工物ばかりに埋め尽くされたなかで少しでも？自然？を享受したいという万人共通の思いがあるためだ。もちろん、一年のなかでわずか三か月のために衣替えをしなくてはならない面倒のせいで反対意見も多いが、冬ならではのファッションを楽しめるためか、特に若い女性のなかではドームが冬季に入るのを心待ちにしている人も多い。

それこそ『私の時代が来た！』と言わんばかりに勢いづく女性もいて、グミはその一人だった。

「ねーねー、このピンクのマフラーかわいいでしょう？」

無理言っておばあちゃんに買ってもらっちゃったんだ！」

「もしかして、それ自慢するために私を呼んだの……？」

「別にそんなんじゃないけどさあ……ねえ、レン君どこにいるか知らない？」

グミは恥じらうように視線をそらし、両頬が桜色を帯びた。

よく見てみれば、グミのしているマフラーは幾重にも巻かれている。数ある中でもストール寄りの長いマフラーを選んだのだろう。そして『レン君どこ？』と照れくさげに訊ねた彼女。すぐに分かった。グミはレンと二人してロングマフラーに包まりたいのだ。

「さっき買い物頼んじゃったから、今はいないよ」

「そうなんだ……」

残念がるようにうつむくグミ。

「あのさ、ずっと訊きたかったんだけど」

近寄って、リンはグミに耳打ちする。

「グミちゃんって、もしかしてレンのこと？ スキ？ なの……？」

グミの両肩がびくつと反応する。体勢の都合で見えてはいないが、さっきまで桜色だった頬は今の一言で真っ赤になったのだろうとリンは思った。

「知ってるよね？ 私も、あいつも、？ アンドロイド？ だってこと」とやや忠告めかして続けるつもりが、それは広場内に突如響いた「お、落ちる ッ！」という青年の叫びによって喉に留まることになった。

声の主はジャック。彼の乗っている脚立が大きく傾いて今にも倒れそうになっている。

いくらホールフォビアの工場勤務で身体が鍛えられているといっても、三、四メートルの高さから落ちればひとたまりもない。打ちどころによっては最悪の事態も考えられる。しかし、彼の踏ん張りもむなしく脚立は転倒。陶器の皿を固い床に落とすような金属音が甲高く響き渡り、リンはおそろおそろまぶたを開けた。

すると、石畳の上に倒れていたのは脚立だけで、当の本人はナナシの腕に抱えられて無事だった。近くにいた彼女がとっさに反応してジャックを受け止めてくれたのだろう。リンは安堵し、「立場が逆だろー」とからかう周囲に合わせて「大丈夫ー？」と明るく言った。

ジャックは女性に助けられたばかりか、お姫様だっこまでされている自分に生還の喜びよりも恥ずかしさが先行し、そそくさと彼女の腕のなかから降りた。

そして心配そうに駆け寄ってきたワトンの頭を軽くこづいた。「気をつけるよな、まったく」

実はグルメ番組に夢中になるあまり、身じろぎした彼の巨体が脚立に当たってしまったのだ。脚立が倒れないように支えるはずの自分があるうことが倒してしまうとは……意図的にやったことではないにしろ、ワトンは自分の間抜けさを平謝りするようにぶんぶん頭を下げて、兄貴分のジャックが無事であることにその瞳がうるんで

いた。

ジャックは「いいから、いいから」となだめるように微笑み、次にナナシを振り返った。

「あんがとよ。助かった」

しかし返事はなく、ナナシはコードを地面にほっぽって踵を返した。

「そっぴや、あいつの姿が見えないな」

「……あいつ？」

ナナシは立ちどまり、胡乱ぐんごんげに問い返す。

「ほら、あの刑事だよ。アサギリなんとかっていう」

「海人のことか。どうして私に訊くんだ？」

「い、いや、なんとなく、あんたなら知ってそうな気がしてさ……」

ジャックがナナシと一対一で話すのはこれが初めてだ。

彼女とリン、レンの三人が？アンドロイド？であることはすでに彼の知るところとなっている。だから自分よりも小さく、か細い身体つきのナナシに受け止められても驚かなかった。

現在はユートピア・タワーの研究室で寝泊りし、PIYOMA RT兼自宅を三人に譲ったのき爺は、引越す前に自分がDR FILLグッドの後任についた経緯と、三人の正体について明かした。その場にいたのはグミを含めたいつもの面々と、商店街の会長で、『この三人はアンドロイドなんだ』の一言で場が凍りついたのは記憶に新しい。

グミの祖父でもある会長は年のわりに身体ががっしりとしたラガーマンのような男で、豪放磊落ごうほうらいらくな性格のために『がっはっは！』と大口に笑って彼女たちを受け入れた。のちにこの事実の一部の住人に伝聞されることとなったが、そのほとんどは彼女たちに友好的な態度を示し、正体を知る前と同じように親しく接した。このことは多人種多国籍の人間で成り立つトランジスタにあって、？共存？という国家の理念が国民に浸透していることが大きい。特にエインセルに暮らす人々は会長のように些細なことにこだわらない陽気な性

質を持っている。もちろん、ルカの事件からあまり日が経っていないために、彼女たちにあまりいいイメージを持たない住人もいるが、生まれも育ちもエインセルであるジャックも彼女らがアンドロイドであることにさしたる抵抗感はないが、ナナシに対しては少々身構えてしまう。

というのも、無口な彼女の表情は動きに乏しく、怒っているばかり見えてしまうからだ。

「朝早く、あいつが店にやってきたんだ。

『今日で謹慎が解けて仕事が始まる』と言っていた」

「クリスマスだっていうのに……間の悪いやつ」

「それで……くりすます、だったか。

明日のくりすますの夜、ここに来てと言われた」

ジャックが大きく目を見開く。「えっ!？」

「それって……つまり?デート?じゃないか!」

ナナシは急に興奮し始めたジャックを前に首をかしげる。

「でーと、って、なんだ?」

「まあ、明日の夜になってみればわかるさ」

続いて彼が「やるなあ、あいつ」とにやにやし始めたので、ナナシの疑問は深まった。

ジャックの後ろではワトンが脚立を広げようとしているが、倒れた際にロックがかかってしまって手こずっている。しばらくがちゃがちゃやっていたが、数台あるテレビのうち一つがまた別の局の料理番組を流し始めるとそっちに行ってしまった。

彼が今にもよだれが口から垂れそうな顔でショーウィンドウに両手をつけるころには、ナナシはその場を後にしていた。

歩みに合わせ、風の流れに色がついたように彼女の二束髪がたおやかになびく。

か細い身体のライン、凜として、誰も寄せ付けない孤高な背中。「人間だったらなあ……」という呟きが口をついて出る。

ジャックはワトンに肩をつつかれるまで見惚れてしまっていた。

三分間の料理番組は終わったらしく、彼は脚立を立て直して作業を再開した。

単純なワトンは、二の轍を踏まいとテレビに背を向け、更に余計なものが目に入らぬようまぶたをきつく閉じてすっかりと脚立を押しさえた。

吐き出す息を白く、物を持つ手を赤くさせ、人々は暖を取るように声を掛け合う。

こうして、冬の香りに包まれ始めた街は？雪降る夜？に向けて特別のにぎわいを見せるのだった。

t o c h a p t e r 2

マルシエ教会堂。

街の表玄関である巨大アーチ？アーク・デ・トリアウム？と並んでエインセルの顔であるこの建築物は、一言には国の偉人たちを祀る霊廟である。

フランスはパリにあった？パンテオン？という、幅百十メートル、奥行き八十四メートルのギリシア十字の平面に大ドームとコリント式の円柱を持つ『ギリシア建築の傑作』と言われた由緒ある建物が、わずかに形と名前を変えて現代によみがえったのがこのマルシエ教会堂だ。

神に祈りを捧げる場としても一般向けに開放されており、毎週日曜には大聖堂でミサが開かれるなどして連日人波が絶えないが、今日はクリスマスの飾り付けが教会堂内や周辺の建物で行われているため噴水広場と同様の活況を見せている。

資材を運ぶ人、出店を見回る観光客の往来のなか、黄色のブルゾンジャケットをはおった金髪碧眼の少年が駆けていた。

「おつかしいな……確かに、この辺りに逃げてったと思うんだけど」

威容を誇るマルシエ教会堂の前に広がる円形の広場、彼は意図せずその中央で立ちどまり、手で日差しを作って辺りを見渡した。メルヘンチックにデフォルメされたサンタクロースの着ぐるみがアメヤクッキーなどのお菓子を子供たちに配っている。

サンタクロースにはしゃぎ声を上げて群がる子供たちのなかに、あの強烈なピンク髪をした少女の姿はなかった。逃げておいてお菓子につられるほど馬鹿じゃないか……と思って足の向きを変えようとした刹那、例の甲高く、小悪魔のささやきめいた声が耳に入ってきた。

「レーンくん」

また銃口を向けられているかと戦々恐々だったが、彼女は後ろに手を組んでにっこり笑っていた。レンはほっと胸をなでおろし、白のダウンジャケットに青のスキニージーンズ、てっぺんにちょこんと玉の乗ったグレイのニット帽というすっかり冬衣装の少女に向ける表情を険しくとがらせた。

「こんなところで何してんだよ、？ミキ？」

「せっかくのクリスマスだし、誰かさんとデートしたかったの」

その言葉が暗にレンのことを指しているのは明白だった。

「……じゃあ、なんでさつきオレに見つかったとき全力疾走で逃げたんだよ」

「それはその……急に名前を呼ばれて、びっくりしちゃったんだよ。」

これ以上は言わせないで」

ミキは毛先をぐるぐる人差し指に巻きながら、視線を落として恥じらうように言った。

まるではつきりとした言葉ではおねだりが出来ない恋人のようにしかし、彼女の表情はいじらしげでありながらどこか能面じみている、レンは彼女が演技をしているのだと分かった。前みたいにだまされたりするもんか、と警戒心を募らせるも、ミキは唐突に腕を絡めてきた。慌てて振りほどこうとするが、右腕は彼女の身体の中央線に沿うようにしっかりと両手で掴まれてしまっている。

彼女の意外な力強さに小さく面食らっているのも束の間、

「さ、これからデートしよっ！」

と強引に引つ張られていかれた。

ほんの一瞬でも本気を出せば、そこは人間とアンドロイド、戦闘型に特化していないレンの力でも振りほどくことは容易であるが、彼女には聞きたいことが山ほどある。

もちつとした頬を首のあたりに押し付けてくる彼女を突き離してやりたい衝動をぐつとこらえ、レンはミキと歩みを合わせた。

「ねえ、？バッド・サンタ？って知ってる？」

これまた唐突な問いかけに、レンはおうむ返しに問い返した。

ミキの眼差しは石畳に置いた白い袋からお菓子をとり出して子供たちに配るサンタクロースの着ぐるみに向けられている。三頭身にかわいくデフォルメされた着ぐるみだが、大きな瞳はどことなくつるで、にぱつとつりあがった口端は、見ようによつては不気味である。

そんな顔が夜の暗闇から忽然と現れたら、取る物もとりあえず逃げ出すだろう。

「フツのサンタクロースは赤い服に帽子をかぶってさ、良い子におもちやを配って回るの。トナカイのそりに乗って、クリスマス・イヴ、つまり今夜に。で、バッド・サンタっていうのはその逆。黒い服に帽子をかぶって、ハイエナのそりに乗って悪い子の寝床に？ キモチワルイモノ？を置いていくんだって」

「気持ち悪い物って？」

「たとえば……動物の内臓とか」

そう怖い顔をされて言われても、レンにはいまいちイメージ出来なかった。

「でね、一足早いけど、わたしたちはもうとびっきりの？クリスマス・スプレゼント？を置いてきたんだ。ここエインセルのどこかにね。トランジスタ中の人たちによるこんでもらうために。あ、言い忘れてたけど、今年のサンタはわたしたちラヴがやることになってるの」「サンタって誰でもなれるのか？」

「うん、まあ、ね」

ミキははぐらかすように答えた。

「で、その？くりすますぶれぜんと？つーのはなんだよ？」

とつさに腕を離し、ミキは両足をそろえてレンの前に立ちはだかる。

そして満面の笑みをたたえて、いたずらっ子のように言った。

「おしえなーい」

レンは呆れるように頭をかき、「そういえば」「と言葉を紡ぐ」



うとした。

そこでリズムミカルな電子音が鳴り響き、ミキはジャケットのポケットから携帯端末を取り出した。持ち主の髪の色をややトーンダウンした桃色のボディ。それにルカの髪色をふと想起したレンは、「あれ、前と違うやつになってる？」と前に見た時と携帯端末が異なっているのを指摘したが、ミキは答えずに電話口の向こうにいる相手と通話を始めた。

彼女は周りをはばかりるようにレンに背を向け、小声で一分ほどやりとりした。

「またかけ直すね」

そう言っ通話を終え、携帯端末を元の右ポケットにしまつミキに、レンは訊ねる。

「もしかして、電話の相手はキヨテル？」

ミキは意味ありげに微笑むだけで何も答えなかった。

「急用が出来ちゃったから、わたしはもう行くね。」

デートはまた今度。今日と明日の夜はいそがしくなるから出来ないけど」

続けて「またね」と手を振り、彼女はレンの横を通り過ぎていった。

が、やがて、立ちどまり、思い出したように言った。

「良い子にしているんだよ？ でないと、サンタさんたちに変なプレゼントを渡されちゃうから。それじゃ……？ メリー・クリスマス？」

レンは「おい！」と呼びとめようとしたが 彼女の最後の一言に不思議な響きを感じてきよんととしてしまった。

そして彼が呆然としている間に、ミキの姿は往来のなかに紛れていった。

\* \* \* \*

『またかけ直すね』

そう言われてから二分と経たぬうち、ダークスーツの内ポケットに入れた携帯端末が振動し、誰かから着信が来ていることを持ち主に伝えた。

彼はメタリック・ダークの端末を取り出し、予想していた通りの人物からの着信であることをディスプレイに確かめてから、回線を開いた。

『あ、？キヨテル？？』

一拍置いてから、キヨテルはおもむろに口を開く。

「首尾はどうです？　？カタストロフィ？の設置は完了しましたか？」

電話の先で、ミキがにやりとしたのがうかがえた。

『エインセルにはばっちりクリスマス・プレゼントを届けてきたよ。あとは？シーザリオ？と？セントラル？に届けにいかなくちゃ』

「お願いしましたよ。あ、それと……」

彼はちらりと周囲を見渡してから、二の句を継いだ。

冬の淡い日差しのなか、サン・パライソの霊園はどこまでも静かだった。

陽光に輝くライトグリーンの芝生、緩やかに起伏する丘に整然と連なる白い十字型の墓碑。人は数える程度にしかなく、彼の声を聞いているのは死人ぐらいなものだった。

「W・A・Fが我々の動きに勘づき始めています。計画の全容まで知られてはいないでしょうが、あちらの機関に潜り込んでいる同志に圧力をかけてくる恐れがある。来たるべき時に計画を邪魔されるは興ざめなので、今のうちに削げるだけの戦力は削いでおきましよう」

『じゃあやつぱりやるんだね、？おはようサンタ作戦？』

「そんな名前でしたか？　まあ、何でもいいですが。同志の報告によれば、現在すぐにも稼働出来る状態にあるネル型アンドロイドの数はおよそ五十。これだけの数が一斉に蜂起すれば、フィール博士のアンドロイドシリーズもただでは済まないでしょうね」

『……キヨテルってさ、本当にエグいこと考えつくよね』

キヨテルは微笑を浮かべる。

「似たようなこと、昔にもよく言われましたよ」

最後に「明日の夜は院から出ないように」と付け加えて、彼は視線を閉じた。

通話中、左手だけで持っていた花束に携帯端末をしまい入れた右手を添え、何事もなかったかのように歩いていく。前方から小柄な老人と、長髪を額の中央で分けた青年が歩いてくる。墓参りを終えた帰りだろう、二人にはどこか意気消沈する雰囲気があった。

キヨテルは彼らと視線を合わすことなくすれ違い、ある程度距離が離れたところで振り返った。ノーキー・フィールグッド。彼はその名をぼそつと呟き、老人がスーツの内ポケットから取り出した携帯端末を耳にあてがうのを見てから、また歩き出していった。

「こちらノーキー。？タイムトンネル？の調査、何か進展があったのか？」

のき爺は歩みを止めることなく、通話を続けた。

相手はホールフォビアのタワーにある青白い光の井戸　彼らは？タイムトンネル？と呼んでいるが　の調査隊の一人で、調査の最中に起きた変事をのき爺に伝えてきた。

心臓の高鳴りが聞こえてきそうな切迫した声がもたらす事実、のき爺の目が大きく見開かれる。

通話を終え、端末を内ポケットに戻すと、彼は嘆息を吐きながらユウキを振り返った。

「まったく、次から次へと……」

「どうなさったんですか？」

「タイムトンネルから二体の？アンドロイド？がやってきたそう。うち一体は白髪の女性型で、腕が一本ないらしい。もう一体は野球帽をかぶった少年型。彼は我々に未来世界で起きたことを伝えてきているのだが、言ってることが支離滅裂でさっぱり分からんらしい。とりあえず女性型のレストアも兼ねて、ユートピア・タワーへ連れ

ていくよう指示した」

ユウキの感想を聞く前に、のき爺は口早に続ける。

「わしは急ぎタワーへ戻る。お前はここの出入り口でルカを待っていてやってくれ」

こくつと頷くユウキの先、彼は遠くにそびえる幹の太い常緑樹を見据えた。

大きな傘を広げる樹冠の下には弟、クライス・フィールグッドの墓があり、その前にはルカのうつむく姿がある。それらは先ほどすれ違った青年の後ろ姿にはばまれて視認することは出来ない。一見して聡明な印象を受けたあの青年も、弟に花をたむけに来たのだから。

ユウキの反応を見る限り、彼は研究機関の関係者ではないようだが、組織の内外を問わず弟の墓には連日多くの人が訪れる。彼もまたクライス・フィールグッドという偉大な科学者の功績をたたえ、それに支えられたことへのせめてもの感謝と哀悼の意を花束にして持ってきたうちの一人なのだろう。

兄としてむずがゆく、また切ない気持ちに駆られながら、のき爺は早足に歩き出した。

まさかあの青年が弟の心臓に凶弾を撃ち込んだ張本人であるとは思ってもよらなかった。

\* \* \*

氷山キヨテルはクライス・フィールグッドの墓前へとやってきた。そこにはすでにすらりと背の高い女性の姿があった。つばのないムートンのフェルトハットに髪をすっぽり収め、後ろ襟にファーのついたロングコート、ブーツ、黒一色に統一された彼女の衣服は一目に高級服だと分かり、黒真珠のような妖艶よつえんな雰囲気がかもされている。

その女性の横に並び、キヨテルは墓前にうずだかく積まれたたむ

けの品々のなかに、胸に抱えていた花束をそつと紛れこませた。続いて、黙祷。

隣から香水の気品ある香りが鼻腔をくすぐって、セレブ然とした女性の後ろ姿が脳裏をよぎった。人工の風が吹き出し、彼の頬をなで、樹冠をゆらした。

乾いた葉擦れが鎮魂歌のように静寂にこだまする。

音が止み、風が通り過ぎていったのを感じると、キヨテルはゆっくりとまぶたを開けた。

横目にちらと女性の顔をうかがう。サングラスがかけられていた。顔の半分を覆う程にレンズが大きい人には、瞳の動向だけを隠すのが目的ではないように思われ、そしてキヨテルは、その理由におよその見当がついていた。

「……外を出歩いて大丈夫なんですか。？元？歌姫さん」

彼のシニカルな声に、女性の肩が小さく反応する。

やがて、彼女はおもむろにキヨテルを向いた。

「一週間前にノーキー博士率いる新生・アンドロイド研究機関の声明があつたばかりでしょう。復興式典の折に数十名の負傷者を出し、うち二名を殺傷したあなたの処遇について。

賛否両論分かれて、一部では抗議活動に出た団体もいるそうですが、ひとしきり騒ぎは落ちつきました。妥当な判断だと思えますよ。『無期限に渡るルカの全面凍結』というのは」

「あなたは誰なの……？」

彼は答えず、「文面通りに処理されていれば、ですがね」と冷笑した。

「答えなさい。あなたは誰なの？」と女性は語気を強める。

そのクールな声は間違いなく、国中を熱狂させた歌姫・？ルカ？のものだった。

「僕はしがない？情報屋？ですよ。それもまったくフリーのね」

「情報屋……？」

これは当然、キヨテルがとっさに言ったでたらめである。

そして惜しくも、ルカは彼の姿、声を目の当たりにしておきながら、彼がDr・フィールグッド暗殺の犯人であると見抜くことができなかつた。フィールグッドが遺した携帯端末の音声記録は、のき爺の配慮でルカに聴かされることはなかつたのだ。

「ここで逢つたのも何かの縁。一つ、あなたに情報を買って差し上げましょうか」

小首をかしげるルカを前に、キヨテルは例のにこやかな笑顔で続ける。

「あなたが使っているピンクの携帯端末、今、手元にありますか？」

「……ないわ。なくしたの」

「そうですね。あなたはW・A・Fで改造を受けた時に携帯端末を施設に置き忘れてしまった……実はあの端末には、フィール氏からあなた宛てにメッセージが入っているんですよ」

ルカがキヨテルに詰め寄る。

サングラスの下で、その瞳が大きく見開かれていた。

「どうしてあなたがそれを知っているの？」

「それもメッセージが入っていることまで……もしかして、聞いたの？」

「いえ。僕は実物を目にした訳ではありません。ただ、W・A・F内に仲の良い知り合いがいましたね。彼が面白半分に留守番メッセージを聞いたそうなんですよ。で、それを僕に教えてくれた。先に答えておきますが、その携帯端末は今、僕の手元にはありません」  
にわかに興奮していた彼女だったが、それを聞くと空気が抜けるように頭を垂らした。

それを見計らって、キヨテルは言う。迷い人を破滅へとそそのかす悪魔のような顔で。

「僕は初めに？売る？と言いましたが、僕はあなたのファンだ。代金はいらさない。それぐらいの分はこれまでのあなたの活躍から釣銭が出るほど支払われた。

だから、無償でお教えしますよ。携帯端末のありかをね」

数分のち、フィールの墓前にはキヨテルの姿しかなかった。  
彼は薄笑いを浮かべている。ルカにしたことは、ほんのいたずら  
のつもりだ。

何故なら初めから彼女がいることを見込んでこの地にやってきた  
わけではないのだから。

純粹に敬愛するフィール博士の死を悼みに来た。それと、改めて  
？ 宣戦布告？ をしに。

彼は踵を返し、携帯端末を取り出した。発信先はミキ。

「……そういえば、僕から君へのプレゼントがまだでした。

もしまだファンであるのなら、今夜七時にアーク・デ・トリアウム  
に向かってください。？ 彼女？ がいます」

t o c h a p t e r 3

アーク・デ・トリアウム。

高さ五十メートル、幅四十四メートル、円周百二十メートルを誇るトランジスタ最大にして唯一の門である。マルシエ教会堂もそうであるように、こちらの建造物もフランスはパリにあった『凱旋門』を模して建設された。

これはエインセルの都市デザインをフランス出身の有名建築家が総指揮を務めたことに少なからず由来する。

あちらは国家の軍事的勝利を湛える凱旋式を記念するために作られたが、アーク・デ・トリアウムのあるエインセルという都市は、高度な科学技術によって構築されたトランジスタにあつて、？芸術的景観？という誰の目にも明らかかな形で過去の文化体系を色濃く現代に残した街。近未来的な都市・セントラルへ繋がる出入り口に巨大なアーチを据えることで、建築家は『過去と現在の行き来』というイメージを表現したかったのだ。

もちろん、トランジスタにあるこういった巨大建造物は往々にして？平和のシンボル？である。凱旋門の壁面にナポレオンの戦いや義勇軍の出陣を描いた彫刻が飾つてあつたように、アーク・デ・トリアウムの上部には世界戦争の系譜が描かれた三十に渡る楯たてのレリーフ、一段下の帯状装飾には戦争の終焉に際して悲喜を募らせる人々の群像、門入口の両壁面には著名な彫刻家が遺した人々に安寧をもたらす女神の姿が彫られている。

このように人類史上最大規模の闘争にして、最大の過ちである世界戦争を努々忘れぬための刻印として、そしてトランジスタというドームのなかで平和を取り戻し、人類が一つになったことを記念して、着工から二年の歳月をかけてアーク・デ・トリアウムは完成した。

そして時はクリスマス・イヴ。



アーク・デ・トリアウムから一直線に伸びる並木道には色とりどりのイルミネーションが施されていた。青、赤、白、紫、かわるがわるの光の循環が一筋の道となってアーク・デ・トリアウムまで続き、そこを歩く誰もが幻想世界に迷い込んだかのような錯覚に陥る。だが、万人が万人『きれい』と足を止めて嘆息をもらすだろ。その光の連なりは、黒いフェルトハットにサングラスで顔を隠した彼女、ルカにとっては、単に通り返ぎていくだけの景色であった。

彼女の足はアーク・デ・トリアウムに向かっている。

またW・A・Fの連中に騙されているのかもしれない、そう頭の片隅に思いつつ、彼女は歩みを止めようとはしない。フィールが残したという留守番メッセージ。もう二度と聞けることのない彼の声を聴きたい、彼が私に何を伝えてくれたのかを知りたい、考えうるあらゆる危険に身を晒してもなお彼女が急ぐ理由はこれで充分過ぎるほどだった。

凍てつく夜に暖を灯すまばゆい光彩のなかで、恋人たちは微笑みをかわし、子供たちは無邪気にはしゃぎまわる。そこを早足につかつかと、しかもサングラスをかけて通り過ぎていくセレブ然とした女性。せつかくのイルミネーションなのに、といぶかしげな視線を送ったのち、彼らはまた何事もなかったかのように踊る光の世界へ帰っていく。

アーク・デ・トリアウムは四方からの照明を受けて不動の存在感を放っていた。

しかしルカはその威容をちらつと見上げたきり、足早に門へと入って屋上の展望スペースへと続くエレベーターを目指した。二百七十二段、ビルの十五階に相当する長さの螺旋階段もあるのだが、いまの彼女の心境から言って使われる道理はない。

満員のエレベーターに身体をねじ込み、扉が閉まるのに合わせてさりげなくサングラス、帽子の乱れを整える。帽子のなかには頭頂部で一束にまとめた髪が収まっている。その鮮やかな桃色の髪は歌姫の象徴、ほとんどの国民が目焼き付けている。

もし帽子が落ちて桃色髪が広がるものなら、このエレベーター内で和気藹々と話す家族連れ、カップルたちに水を差すどころの騒ぎでは収まらない。

どういう理由であれ自分は？ヒトゴロシ？なのだ。

新生アンドロイド研究機関の長であるノーキー・フィールグッドの声明から、ヒトゴロシは電源を落とされ、ユートピア・タワーの奥深くに幽閉されているというイメージを国民は持っている。そんなところへ忽然と姿を現したら……ルカは急に空恐ろしくなって、周りの音を遮断しようとして静かにまぶたを閉じた。

すると不思議に心が落ち着いた。周りの音が遠巻きに聞こえ始め、エレベーターの振動が眠気を誘うようなリズムとなって彼女をゆらした。ふと、脳裏にとある光景が浮かぶ。

それはつい数刻前のことだった。フィールの墓を前にのき爺とかわした会話。

「あの手紙……あなたが書いたんでしょ？」

黙祷を終えたルカは抑揚のない声で唐突に言った。

肩越しに振り返るに、のき爺は予想していた通り絶句していた。

彼はばつの悪そうに首をめぐらしたあと、やがて観念したように口を開いた。

「やっぱり、お前の目はごまかせなんだか」

「ずっとフィールの近くにいたのよ。分からないわけじゃない、あのヒトの字」

「極力似せたつもりだったんだが……お前さんには敵わん」

彼は微笑を浮かべた。

「別にだますつもりはなかったんだ。ただ、わしはお前さんに」

「気にしてないわ。あのヒトも同じことを言ってくれたって、信じてるから……」

しかし、それは彼女の強がりだった。

手紙を見返すうちにこれが？偽物？であると気付いてしまった彼女は、しかし、ミクについては、フィールは手紙と同じようなこと

を言っただろう直感した。

だから絶望に暮れるのはやめ、フィールの遺志を継ごうと、どこか府に落ちない気持ちが無理やり押し込めて歩き出した矢先だった。自分の携帯端末に残されたというフィールの留守番メッセージ。

あの自称？情報屋？は、ここアーク・デ・トリアウムの屋上を端末の引き渡し場所に指定してきた。今夜七時、クリスマス・ツリーの前で、一人の少女が君を待っている。

男はそう言うだけだった。

自然に考えて、その一人の少女というのが携帯端末を渡してくれるのだろう。

エレベーターが開き、ルカは歓迎のクラッカーのように吹き荒ぶ寒風のなかを歩き出す。

『Merry Christmas!』というタイトルリースがかけられた小さなクリスマスツリーを足早に横切り、緩やかにカーブする階段を上って展望スペースへと出る。

そこで第一に目を引かれたのが、四角い空間の中央にある巨大なクリスマス・ツリー。きらびやかなイルミネーションが暖炉の火のように辺りを優しい色に照らし上げ、人々はツリーに背中を預けるようにしながら三百六十度に広がるエインセルの夜景を眺めていた。星の海を足元に見るようなエインセルの夜景に感嘆をもらす人が、ツリーの前で身を寄せ合ってロマンチックなムードに浸るカップルぐらいしかここにはいないように思われたが、

ツリーの前にぽつねんと佇むダウンジャケットを着た少女の姿があった。夜景を見るでも、またツリーのイルミネーションを楽しむでもなく、ただ淡然とした眼差しで遠くを見据える少女には、明らかに他と異なるオーラがあった。

あの子だ。ルカは確信を持って、少女に近づいていった。

「……こんばんは」

その言葉に少女は数秒遅れて反応し、一度はルカを見上げた目を足元に落とした。

「間違いだったらごめんなさい。あなたが、その……私の携帯端末を持っていく子？」

少女は静かにうなづいた。

「あの、そんなふうにしないで。別にあなたを怒りに来たわけじゃないから。」

端末を返してくれば、私、すぐに行くから」

ルカは周囲に気を配り、小さな声で言った。

しかし周りの喧騒に掻き消されて聞こえていないのだろうか、少女は黙ったままつむいている。

ルカはもう一度同じことを言うつもりで、身をかがめて少女の耳元に顔を近づけた。

「あなたは、」

「ん？」

少女が不意に声を発した。

「あなたは？ルカ？さん……ですよね？」

「いや、それは」

「もう分かってます。だって、わたしが持っているピンク色の端末、あなたのもん。」

キヨテルだって、あなたが、ルカが来るって言ってた。だから、間違いない」

キヨテル、というのが例の情報屋の名前らしいが、少女の声が周りの人間の耳に入ったかと思うと、気にしていられる余裕はなかった。

「わたし、あなたのファンなんです」

少女の声が大きくなり、何人かがこちらを見て、ルカはにわかに焦り始めた。

出来ればこれ以上何も言わないで欲しいとは願うものの、少女の顔には勢いが生まれつつある。「もうよして」とつい言葉が出そうになった瞬間、ルカははっと息を呑んだ。

「……でも、いまは、ファンじゃないんです」

すぐに『ヒトを殺してしまつたせいだ』と見当をつけたが、それは少女の次なる言葉によつて否定された。

「憧れてました。あなたはクールで、歌も上手くて、最高でした。でも……あのとき、あなたの弱い姿を見てしまった。

あなたは『ねえ、パパ！』って電話に向かつて叫んだんですよ。これじゃ子供と変わらないじゃない。そんなのに憧れてたなんて、ほんと、ばっかみたい」

少女は吐き捨てるように言った。

どこかで聞き覚えのある声だと感じていたが、彼女は復興式典で我を忘れていたときに自分が人質に取つた子供だった。すると少女が『あのとき』と言つたのにも合点がいく。ニット帽をかぶつていたのでいままで分からなかった。そんな少女の言葉が棘となつてルカの胸を刺し、先端に塗られた毒がじんわりと広がり始めた。私はもう歌姫じゃない。

その自覚がいまさらのように心を占め、ルカは意気消沈した。

「でも、キヨテルにあなたが来ると言われたときは、ちょっとだけうれしく思いました。

だって、やっぱり、一度はあなたの歌を心から好きになつたから……」

少女の声音が次第に柔らかくなっていく。彼女はおもむろにポケツトから携帯端末を手に取り、ルカの前に差し出した。近くで発光するイルミネーションの、ほとんど白に近い黄色の光に照らされるなかでは、端末独自の色も判別しづらいが、状況から考えてルカの物だ。

ルカは了解を得るように少女と目を合わせ、すると少女は言った。「これを受け取ったら、一つ、約束してくれますか？」

「なに……？」

「歌ってください。わたしの、一番好きな歌を」

ルカは動揺し、否定の言葉が口について出そうになった。

しかし、こちらを見上げる少女の屈託のない微笑みに、それは静

かに喉の奥へと去った。

少女の瞳が輝いている。それは決してイルミネーションの光ではないということ、少女の歌姫としての自分を望む気持ちが輝きを放っているのだということ、ルカは感じた。

自分の居場所はどこにあるとさえ感じた。

ルカは少女の掌に置かれた携帯端末にそつと手を重ね、口元をほころばせた。

「ファンの期待を裏切るようじゃ……アイドル、失格ね」  
ルカは携帯端末を手に取った。

瞬間、ぱあつと明るくなった少女の笑顔が、永遠の記憶として彼女の心に刻まれた。

\* \* \*

二人は展望スペースの外周にあるベンチに腰を下ろした。

他のベンチにはどこも先客がいたのでここになったのだが、ツリとは少し離れた場所にあり、また近くに照明がないためか人気が少なく、かえってルカには好都合だった。

「ねえ、ミキちゃん、一つ聞いてもいい？」

憧れのアイドルの隣にいることに緊張して黙りこくったままの少女に、ルカは努めて気さくに話しかけた。少女の名前はここに来るまでの道で聞いてあった。

「この端末、どうしてあなたが持っていたの？」

ルカは右手に持った端末をミキの前に出して訊ねた。

「それは……」

ミキはためらったあと、やがてため息を吐くように言った。

「W・A・Fの人に頼んで渡してもらったんです」

「え？もしかして、あなたのお父さんかお母さんがW・A・Fで働いているの？」

やや上目遣いにこちらに向いていたミキの視線が、ふと気まずそ

うに膝元へ落ちた。

一陣の寒風が吹く。それは首元の隙間に入り込んで、ミキは反射的に身体をすくめた。

ルカは彼女が寒がっているのだと察し、コートを脱いで、その小さな両肩にかぶせた。

「私は寒さや暑さを感じないの。アンドロイドだから」

「じゃあ、どうして着てるんですか……？」

「夏には夏、冬には冬の服を着ていないと、怪しまれちゃうでしょ。特にいまはね」

ルカは微笑みながらに言う。

暑さや寒さが極端に強ければアンドロイドでも知覚出来るが、その感覚はまだ人間の域に至っていない。ただ、人間社会で暮らしていくうちに概念としては頭に入っており、ルカは彼女を温めてあげようとコートをかぶせることが出来た。

フィールが生きていたら、彼にしてあげられたのかもしれないと思いつながら。

ミキはうれしそうに「ありがとうございます」と言い、そこからしばし沈黙が続いた。

「さっきの質問ですけど、わたしにはお父さんもお母さんもいません」

何気なく星空を見上げていたルカの瞳が、若干のおどろきを持ってミキに向けられる。

「死んじやっただんです。わたし一人を残して」

そこから少女が語る言葉に、ルカは静かに耳をかたむけた。

自分がグラジオラスの囚人夫妻の間で生まれた子供であること。望まれて生まれた命ではなかったこと。自分がサン・パライソの児童養護施設で育ったこと。母親とはたまにしか逢えなかったこと。ある日、死んでしまったこと。とても悲しかったこと……。

背後に響く楽しいげな声とは裏腹に、ミキの声はいまにも泣きだしそうだった。

ルカは彼女を勇気づけようと思いつ。そう、私には、歌がある。  
「教えて。あなたの一番好きな歌」

これまでの話の流れとは逸する唐突な質問に、ミキは「えっ？」と目を見開いた。

「あなたが言ったことでしょうか？ だから、ほら」

一、二拍、ミキは考えてから、小声でぼそつと言った。

聞きとれなかったので「もう一度」とルカに言われると、今度ははっきりとした声で。

「？Just be friends?が……あなたの歌のなかで、一番好きです」

するとルカは得意げにうなづき、おもむろにサングラスを外した。続いてフェルトハットを傍らに置き、髪をまとめていたかんざしも取った。

ゆれる冷気のなかで広がり、たおやかにびく桃色髪。その艶やかな質感は夜の薄暗さのなかにあってなお、ミキの目を一点に惹きつける妖艶な美しさがあった。

ずっと憧れていた歌姫。一歩でも近づこうとして、髪の色から今まで真似をした歌姫。

それがいま、目の前にいる。わたしのことを優しい眼差しで見据えていてくれる。

こんなにも近くで うれしさで胸が一杯になるミキの頭にそつと手を回し、抱き寄せて、ルカは額の上に唇を寄せる。そして静かに始まった、歌姫のコンサート。

> i 1 5 4 3 7 — 1 2 1 8 <

『Just be friends』は本来なら四つ打ちのアップテンポなナンバーだが、ルカは眠れぬ子のために歌われる母親のララバイのように、スローに、ささやくように歌った。

曲が終盤に差し掛かると、ミキの目から大粒の涙があふれていっ



た。ルカは歌い続ける。

胸に抱える少女の、その悲しみを優しく消し去ってあげるように。

歌が終わると、二人だけの世界が瞬く間に周囲の喧騒に吞まれていった。

「……逃げ……て……」

ふと、ルカはミキの声を聞いた。

それは嗚咽が交じり、かすかに震えている。

「逃げる……？ いま、そう言ったの？」

するとミキが唐突に顔をあげ、切羽詰まった様子ではやし立てた。

「やっぱり、あなたには隠してられない！ 大変なことが起こるの

……トランジスタに」

「大変なこと？ それは」

そこで、背後から足音。

「やあやあやあ。携帯端末の引き渡しは、無事行われましたかね？」  
フィールの墓前で出逢い、自分をここへと導いた自称？情報屋？

……ミキ曰く、その名はキヨテル。

彼は変わらずダークスーツ姿で、掴みどころのない微笑みを浮かべている。

まるで見計らったかのような登場に、ルカの彼を見上げる表情は  
自ずと険しくなった。

「白々しいことを聞くのね。どうせ、いままで私たちの様子を見て  
いたんでしょ？」

「これは人聞きの悪い。少なくとも、あなたの貴重な歌をタダ聴き  
なんてしてませんよ」

キヨテルはシニカルに言い、ついでミキの左腕を掴んだ。

ミキの表情は悪事の現場を先生に発見されたかのように青ざめて  
いる。いや、『先生』ではない。お仕置きに平然と暴力を振るう『  
父親』に発見されたかのように、脱力している。

「待って！ その子をどこに連れていくの？」

「あなたはご自分の心配をなさった方がいい。ほら」

キヨテルは身ぶりで周囲を見渡すようルカに促す。

何人かがいぶかるような眼差しをこちらに向けている。『ルカだと確信されてはたまらないとばかり、ルカは早々にフェルトハットをかぶり、サングラスをかけた。

「大変なことがトランジスタに起こるってなに？　そもそも、あなたは何者……？」

「別に何も起こりませんよ。そして僕は、情報屋。ただ、それだけです」

キヨテルはさっそうと踵を返し、ミキの手を強引に引っ張って歩き出した。

彼女のこちらを見る表情がいじらしい。

しかし、時を同じくして、この世界に？　脅威？　が降り立っていることを、ルカとミキはおろか、キヨテルでさえ知らなかった。

\* \* \*

「あつ……」

白い光源に照らされるなか、男は風呂上がりのように深いため息を吐き、首の骨を左右に鳴らした。その十代の女の子に『親父臭い』と言われかねないしぐさによって、青年の甘いマスクと若々しい容姿が台無しになっていた。

ひとしきり身体の具合を確かめると、青年はふと近くにいた白衣姿の男をにらみつけた。

彼は仕事熱心な男だった。タイムトンネルの調査隊の一員として、連日夜遅くまでタワーに残り、タイムトンネルの空間構造、青白い光の成分についてデータを解析、収集していた。そんなノーキー含めて関係者らが拍手を送る彼の仕事熱心さが、まさか？　死囚？　になつてしまうとは。

「おい……いま、この時代はいつのいつだ？」

白衣の男は尻もちをついて唇をわななかせ、怯えて声の一つ満足に出せなかった。

青年は痺れを切らし、右手に持っていた刀を男の喉元に突き立てる。

すると男は尻尾を踏まれた猫が出す悲鳴のような声で答えた。

「じゅ、12月、12月24日です」

「12月24日あ……？ ああ、クリスマス・イヴか」

青年は「おもしろい」と独りごちながら、得意げに何度かうなづいた。

そしておもむろに刀を一振り。すっかり油断して、「助かる！」と心のどこかで寄せていた希望的観測じみた男の儂い期待は、宙に飛んでいった己が首と共にもろくも散った。

「サンタはいいガキにしかプレゼントを渡さないって言うが、馬鹿だな。ガキは全員ワルだつつの。満面の笑顔で大人をだましてんだから。あれほどのペテン師はいねー」

言いながら、青年は首のない男の身体に幾箇所も刃を突き刺す。

一度、二度、三度……やがて見る影もなくなった死屍ししの？肉片？をつまみ上げ、青年は邪悪な顔で舌なめずりする。

その顔、衣服、刃の切っ先を、瞳と同じ鮮やかな？赤？に染めながら。

「いっちょプレゼントを届けて回るか。この、？バッド・サンタ？様が」

彼の背後にある？青白い光の井戸？……その先にある世界で響いた凶悪な笑い声が、人間たちの、ナナシたちのいるこの世界でも、高らかに響き渡った。

t o b e . . . . . c o n t i n u e d .

&l t ;&l t ;C h a p t e r 3 &g t ;&g t ; ( 後 書 き )

次 回 予 告

R o c k ・ 2 1 ? 粉 雪 の 夜 ?

乞 っ ご 期 待

## Rock・21? 粉雪の夜?

クリスマス当日は、不気味にして怪奇な事件からその朝を迎えた。エインセル北区の住宅地で玄関や窓辺、なかには寢床に? 謎の肉片? が置かれているという事件が相次いで発生した。調査に出た北区警察署は謎の肉片を? 人体の一部? と断定。即座に捜査本部を設置し、殺人事件を視野に入れて本格的な調査を開始した。

このことを受けて東区警察署も何名かの刑事を管轄内の巡回、及び調査に送り出し、昨日現場に復帰したばかりの朝霧海人は、商店街と広場の聞き込みに当たっていた。

しかし、頭にカーラーを巻いた低血圧気味な夫人たちに聞かされるのはどれも『朝っぱらからご苦労さまねえ』や『物騒ねえ』という呑気な言葉ばかり。それでもめげずに次から次へと聞いて回る彼の姿は、まるで謹慎中に溜まっていた不満をぶちまけるかのように精力的で、気だるげにあくびをしながらついていく同僚のザックとは正反対だった。

「おい。そっちはおれたちの管轄じゃねーぞー」

ザックの間延びした声にふと足を止めるも、海人はやがて何事もなかったかのように歩き出した。「はあ」とザックはため息を一つ。朝の冷気に触れてそれは白くなり、消えていくのとちょうど、ザックは猫背気味にのろのろ歩き始めた。

「ったく、どんだけやる気満々なんだよ……今日はクリスマス本番だぜ? 事件を起こしたやつも何だっこの日に」

そこで彼の垂れ目が大きく見開かれる。「あ、クリスマスといえ  
ば」

続いてにやり、と悪戯っぽく笑うと、駆け出して海人の肩を勢よく叩いた。

「いつてえー……いきなりなんだよ」

「お前、今夜、アレだろ? アレ」

ついさつきまでベッドと温かい毛布さえあれば一秒とかからず眠りに落ちそうだった彼の顔は、すっかりいつもの、友人の恋模様をからかい、楽しむときの顔に変わっていた。

「アレって……？」

「ずっとぼけんなんて。今夜はナナシちゃんとの？デート？だろが」  
海人の足が瞬時に止まり、その顔が急速に赤くなっていく。

もちろん、寒いからではない。むしろ熱くてこの茶色のコートを脱ぎたいぐらいだった。

「で、で、で、デートなんかじゃないって……」

「いまからそんなに動揺してて大丈夫なのかよ？ ま、おれから言えることはひとつ」

ザックが得意げに人差し指を立て、また何かくさい台詞を吐きそうな気配を察し、海人はすり抜けるように歩行を再開した。「おいおい、ちゃんと聞けって」

「いまは仕事中だぞ？ そんな話よりも、先にすることがあるだろ」  
「ま、その通りだな。もし残業なんてあったら、せつかくのチャンスが台無しになる」

そんなつもりで言ったんじゃないのに、と海人は呆れた眼差しをザックに向ける。

だが、彼の言う通りだ。夜遅くまで仕事で残されたのでは、こちらから誘った手前、申し訳が立たない。？黒いバケモノ事変？の折ナナシにチップを渡すとき以上の勇氣と氣力を振り絞って「クリスマスの夜、ぼくと一緒に過ごしませんか！」と彼女に申し出た。

あのときのきよとんとした彼女の表情が忘れられない。数秒のち、「……別に」と興味なさげにそらしたあの眼差しも。それから海人は待ち合わせ時刻、場所を半ば押しつけるように言っ、脱走犬さながら逃げ出したのだが、果たして彼女は来るだろうか。

そのときのための言葉、プレゼントはすでに用意してある。ザックに教えてもらって雰囲気の良いバーも席を取ってある。デートプランは幾回ものシミュレーションを重ねて綿密に練り上げたつもり

だ。後はただ、そのプランを体現するための？肝？があるかどうかだ。

今宵の一世一代の大イベントに思いを馳せると心臓が早鐘を打ち始めるが、ふと、海人はザックの屈託のない微笑みを見る。彼はナシがアンドロイドであることを知らない。

未だ超人的な能力を持った？人間？だと思っっている。黒いバケモノ事変以来、街の住人や警察署員が噂する『アンドロイド説』が耳に入っていないはずがないのに、それでもなお。

これは彼のあっけらかんとした楽観的な性質の表れかもしれないが、だからこそ、海人はここまで真実を打ち明けていない自分に罪悪感を覚えてならない。

そう、ナシはアンドロイド。人間じゃない。

だけど、だけど　好きだ。彼女が好きだ。この気持ちに偽りはない。

ザックに伝えている真実はこの気持ちだけだ。からかいか冷やかしても多分にあるが、なんだかんだで真面目に付き合ってくれる唯一の友人に、海人は気合を込めて言う。

「さ、とつとと犯人捕まえようぜ！」

いつの日かナシの手を引いて、もう一つの真実も話せたらと思いながら。

\* \* \*

ナシ、リン、レン、ルカは、ユートピア・タワー最上階の管制室にいた。

ちょうど一時間前にPIYO MARTへ電話を入れ、彼らをここに呼び寄せたのき爺は、立ち台式のコントロールパネルを操作し、やがて部屋の中央に大きなホログラムが映し出された。

その電子的な？青白い光？がナシらの表情を照らし上げる。

のき爺は彼女たちの顔を順々に見渡すと、おもむろに話し始めた。

「ナナシ、リン、レン、お前ら三人はこれに見覚えがあるだろう。そう、これはホールフォビアのタワーにある？タイムトンネル？…お前たちの言葉で言うところの？トラスシュ・ホール廃棄炉？だ」  
ホログラムはタイムトンネルを俯瞰ふかんした 円状のまるで井戸のような形

図で、のき爺はそれを拡大、横からの角度と切り替えて見せながら口頭で説明を加えた。

「これは一言には、時空間の膜に強大な力を加えて作り出された過去と未来を行き来するトンネルだ。およそ一世紀前、ラン・デール・ジェイなる学者が？パラレル・ユニヴァース並行世界説？という説を提唱した。これは我々人類の生きる世界、三次元世界は、見えない膜によって覆われ、異世界との均衡が保たれているという説だ。

端的に言つて、この膜を壊すか開けるかすれば、人類は他の世界、それは過去だつたり、未来だつたりするが、自由に行き来することが可能だとされた。タイムリープの理論は原則的に物体が光の速度を超えることにあり、この説が主流だつた当時において、ラン・デール・ジェイが唱えた説はまるで相手にされなかつた。しかし、これは？真実？だつたんだ」

含みを持たせて言い、のき爺は手元のパネルを素早く操作する。ホログラムを見つめる四人の表情は一樣にきよとんとしていた。特にリンは口をぽかんと開けて、「本当にこの人がのき爺？」と疑うような視線を彼に投げている。

やがて、ホログラムが別のものに切り替わつた。ナナシの片眉がぴくつとつりあがる。

天上に砲口を向ける黒い鋼の砲塔……？ブラックロックシユーター BRS？だ。

「この三次元世界を覆う膜は、そもそも観測することさえ不可能だつた。いまでもその膜というのを観測し、可視化する技術はない。だが、このBRSが放つ通称？破壊粒子？と呼ばれる？アズルブルー？は時空間の膜に干渉することが出来る。もちろん、この粒子自体はそれが目的で開発されたわけじゃない。世界戦争に終止符を打



った？クリプトボム？が大陸を塵の一つ残すことなく消し去ったあと、海には大陸と同規模のタイムトンネルが出来あがっていた。そう、偶然の発見だったんだ。わしの弟、クライスは、この忌まわしい粒子を現代によみがえらせ、BRSを粒子の収束、放射の媒介として用い、あのホールフォビアのタワーにタイムトンネルを……」

のき爺は最後まで言い切らずにうつむいた。

ナナシがふと声を発する。「お前は、それを教えるために私たちを呼んだのか？」

「いちおう、知っておいてもらおうと思ってな。あのタイムトンネルはどうして作られ、そしてBRSは何のために存在しているのか……全て、わしの弟の『過去に行きたい』という願望によって生まれたものだ。どれも失敗に終わったがね。さて、前置きはここまでだ」

一拍置いて、のき爺は二の句を継いだ。

「昨日の昼ごろ、このタイムトンネルから二体のアンドロイドが現れた」

「アンドロイド!?」リンが身を乗り出して大声を出す。

「トンネルからやってきたってことは……つまり」とレン。

「そう。お前たちの生きていた世界からやってきたアンドロイドだ」  
言って、のき爺は入口付近の暗闇に目をやった。

それを合図とばかり、野球帽を目深にかぶった少年がホログラムの光源が届く範囲に現れた。ナナシら三人組は呆気に取られた眼差しで少年を見、やがてリンがぼそつと言った。

「……いたの？」

「うっせー！ オイラはさっきからずっとここにいたって！」

ダーは拳にした両手を上に突き出して憤慨ふんがいを露わにする。

というのも、ナナシ、リン、レンの三人とダーは同じエキスプロリズムのなかにあっても、団長・KAITOカイトを心から崇拜しているかしていないかの派に分かれ、ほとんど交流がなかったのだ。もしアンドロイドの記憶力がなければ、リンの先ほどの台詞は「いたの

「ではなく「誰だっけ？」になっていたことだろう。それぐらいリンにとってダーの影は薄く、ろくに戦闘もこなせず、一人キヤッチボールをしたりウロやタンとつるんでいたりしている印象しかなかった。

「もう一体、女性型のアンドロイドがいまメンテナンスを受けている。

名は確か、？ハク？といった」

ナナシの目が動揺の色を持ってのき爺に向けられた。

「あいつが？　メンテナンスを受けてるって、どこか怪我でもしているのか？」

「まあ、詳しい事情は彼から聞いてくれ。そっちの方が信憑性があるだろう」

すると、のき爺を含めた四人の目がダーに注がれた。

ルカはこれといって興味が無いのか、漫然とホログラムを見上げている。

ただ、その耳はいちおう外界に向けられており、少年の幼く、照れのまじった声が聞こえてきたのはしばらくしてのことだった。

「あーっと……どこから話したらいいかな……」

\* \* \* \*

ルカはクライス・フィールグッドが使っていた私室にいた。

出入り口の上にかけられたアンティークの時計が知らせる時刻は三時と十分。

管制室での話し合いからすでに二時間が経とうとしている。なんでも、タイムトンネル調査隊の一人が行方不明となり、隊員の物と思しき眼鏡と、そして大量の？血痕？がタワー内で発見され、K A I T O という凶悪なアンドロイドがこの世界にやってきている可能性が高まった。そこでナナシ、リン、レンは手分けしてトランジスタ中に散り、K A I T O の捜索に出た。

ルカはダーのおぼつかないながらの説明で未来世界で起きた惨劇、二人がやってきた経緯などいちおう耳にしていた。だが、どれも自分には関係のない話だし、それに前日のアーク・デ・トリアウムで一件で危うく身元がばれそうになった。フィールが関係することなら身体も張れるが、実際いるかどうかも曖昧なアンドロイドの捜索なんてこちらから願ひ下げだった。のき爺は言うに及ばず、ナナシにもリンにも誰にも頼まれなかったのだが。

ルカは先ほどから自分の携帯端末をいじっている。

昨晚、ミキから返してもらったものだ。それを右耳にあてがい、もう何度聴いたか分からないフィールの留守番メッセージを再生した。頬に赤みが差し、思わず口元がほころぶ。

フィールはノーキーが捏造した手紙の文面とほとんど同じことを言っていた。

まるでフィールが手紙を読みあげてくれているかのよう。それも自分に、自分だけに。

ルカはうれしくなって、ダイニングテーブルの向かいに座っているミクに声をかけた。

「ほら、フィールの声よ」

ミクはにつこり微笑むだけだった。その繊細な手は色紙を折っている真つ最中。

フィール亡きあとも、ミクはこうして紙の動物たちを作り続けている。

その模様を眺めながら、ルカはおもむろに端末を卓上に置いた。

紙擦れの音がこだまするだけの沈黙が降りる。

「仲良くしましょう」とは言ったものの、ルカはミクにどう接したらいいか分らなかった。

そもそも会話が成立しない。こちらが「いい天気ね」などと話しかけても、ミクは先ほどのように微笑むだけ。返事もしなければうなづきもしない、ただ満面の笑みを浮かべる。

この反応は彼女がプログラムで生きている最たる証明だ。そして

彼女にプログラムを施したのは他ならぬクライス・フィールグッド。すなわち、フィール自身が目にした反応なのだ。

なぜ自分のようにミクに自我を与えなかったのか。いや、与えられなかったのだろうか。

自我を与えてしまえば、どこかで自分から心を離してしまうかもしれない。逆に、意思を持たないプログラムであれば、ミクはずっとフィールの？初恋の人？でいられる。

なんでそれが自分じゃないのだろうか。ルカは無性にやるせない気持ちに駆られた。

意味もなく立ち上がった、意味もなく部屋を歩いた。まるでフィールの足跡を辿るかのように。この部屋には客人用に応接セットがあるが、ほとんど飾りだ。彼はこの部屋を仕事部屋というより、完全なる休息の場所と考えていたらしく、その傍らには常にミクがいた。この部屋で彼はミクと過ごし、その笑顔に安らぎ、その歌声に眠り、そしてルカの知るところではないが、この部屋で凶弾に撃たれ、死んだ。ミクは最期まで彼の隣にいた。

血糊のついたカーペット、壁は取りかえられ、現在部屋はノーキー・フィールグッドの名義になっている。だが、彼は地下にある研究機関の一室で寝泊まりし、ここへは滅多にやってこない。真実を知る彼は、弟の救われない魂が漂っていると思うと来るに來られぬのだ。対して、ルカは逆だった。

暇さえあれば彼女は足しげくこの部屋に来て、こうしてミクと向かい合う。彼女の無機質にして無垢な笑顔を見ていると、自分がフィールにしてあげられなかったことが浮き彫りになって不甲斐なさに打ちのめされる。だが、同時に、自分にしか出来ないことも自覚する。

フィールが死んだ理由はこう聞かされていた。復興式典中、W・A・Fの誰かに殺されたと。

私は絶対に、あいつらに？復讐？する。これはミクには出来ない、だから、私が。

ルカの右手が独りでに拳を作った。

そこで気になるのは、W・A・Fと繋がりがああるらしい？キヨテル？と、彼に無理やり連れていかれた？ミキ？の言葉。『トランジスタで大変なことが起こる』

どういうこと？ 考えを巡らしていると、卓上に置いていた携帯端末が鳴った。

着信音は？ Just Be Friends？、実は彼女自身お気に入りのお曲だった。

そのメロディだけの電子音にミクが顔を上げる。ルカは端末を手に取り、ディスプレイに出たのが見覚えのないナンバーであることにためらったが 回線を開いた。

『もしもし、わたしです。ミキです』

ルカの両目が見開かれる。

「どうしたの？ なんで、私の端末番号を……」

『控えておいたんです。あなたには、どうしても伝えたいことがあるから』

ミキの声は小さく、誰かに聞かれてはまずいといったような響きがあった。

すると自然に緊張がこみ上げてくる。ミキは自分に何を伝えたいのだろう。

前のようにブラックが襲来するのか？ あるいは、W・A・Fが何かを企んでいるのか？

しかし、ミキが伝えたそれは、ルカの想像をはるかに上回っていた。

二、三瞬、言葉が出ない。ルカが放心している間に電話は切れていた。

すぐ着信記録を辿ってミキの端末にかけたが一コールも鳴らなかつた。電源が切られているらしい。ルカは机に両手をつけてがつくりとうなだれた。信じられない。だが、ミキの声には鬼気迫るものがあった。それにあの娘がうそを吐くとは考えられない。

だからこそ、どうすればいい？ ルカは途方に暮れて崩れるように椅子に座った。

あまりに呆然としていたので、誰かが部屋に入ってきたことにしばらく気付かなかった。

「……ねーちゃん、大丈夫か？」

ダーだった。

「あなたは……ナナシたちと一緒に行かなかったの？」

「うん。リンに『あんたは弱いから見つかりと殺されちゃう』とか言われてさ。ふざけんなって感じだよ。オイラだって、やるときはやるっのに」

ダーは不満げに言うてうつむいた。

切ない表情ではあるが、特徴的な八重歯が唇に出ているためかコミカルに見える。

「で、しょーがないからタワーのなかをうろろしてたってわけ。

ここって？カコ？の世界なんだろう？ よくわからないけどさ。元々はこういう建物だったんだな。

でも、トエトが一匹もいない」

「トエト？」

「ちっこいロボットだよ。メンテナンスしてくれるんだ、オイラたちのこと」

ふーん、とルカは素っ気なく答えて、興味深げに部屋を見眺めるダーを見た。

ミキの身長よりも低く、痩せ細った体型に煤汚れて所々が破れているボロボロのベースポールシャツを着、黒いスパイクシューズには乾燥した泥がこびりついている。美意識の高いルカにとってダーの風体は鼻持ちならなかったが、それに気を立てている場合ではない。

彼と接しているうちに興奮が収まり、ルカは事態を冷静に考えられるようになっていた。

そのうえで、彼女は結論を出す。それはすぐに行動となって現れ

た。

「お、おい、ねーちゃん、どこ行くんだよ？」

「あなたには関係ないわ。それと、痛い目にあいたくなかったらここから出ないことね」

「はあ？　なんだよ、ねーちゃんも探しに行くのか？」

「あのK A I T Oとかいうアンドロイドを？　違うわ。私は、ある場所へ戦いに行くの」

静かながらも力強く言って、ルカはつかつかと歩き出した。

その左手にダーがしがみつく。やれやれ、というように振り返ったルカは、彼の切羽詰まった眼差しにいささかの驚きを感じた。

「オイラ……何も、本当に何もしてやれなかつたんだ。仲間たちだから、オイラを連れてつてくれよ！　またあのと看みたいに、守られてばかりなんてイヤなんだよ！」

ダーの悲痛とも言えるような叫び。似ても似つかないはずなのに、その健気な姿が昨晚のミキと重なった。ルカは顔を手で覆ってため息を吐きながら、呆れた声で言った。

「私がこれから乗るエア・グライドは一人用。それに時間がないから最高速度で飛ばすわ。

もしあなたが落ちても私は助けないし、そのあと誰かに襲われたって助けない。

何が起こっても、自分の身は自分で守って。……いい？」

ダーは覚悟を決めたようにうなづいた。

部屋を出て行くこうとする際、彼は何者かの気配を察して振り返った。

ダイニングテーブルに座り、こちらをきよとんとした顔で見ている女の子ではない何か。

しかし正体は掴めず、彼は早足に歩いていくルカを追いながらこんなことを思った。

そういえば、自分たちをこの世界へと逃がしてくれた？　ぐるぐるまーくのすごいやつ？　は、いまごろどこにいるのだろうか、と。

t  
o  
c  
h  
a  
p  
t  
e  
r  
2



孤児院・スーパードヴァのエントランス。

入口脇の柱に隠れるようにして、ミキは携帯端末に向かい喋っていた。

電話の相手はルカ。昨晚の礼を述べるでも声のファンレターを送ろうとしているのでもなく、トランジスタにこの先起こる？現実？についてルカに報せようとしていた。

『W・A・Fの軍事基地にある何十体っていうアンドロイドが？暴走？するんです！』

そう叫んだのも束の間、背後に忍びよった影に端末は取られてしまった。

冰山キヨテル。

彼は睥睨<sup>へいげい</sup>するようにミキを見下ろしながら、端末の電源を切った。「これはいけませんね……。せつかく、新しい端末を与えてあげたというのに」

没収しなくちゃならない、と無言のうちに続く言葉に、ミキの顔は一気に青ざめた。

「僕はあなたのことを信頼していたというのに」

「だ、だって！」

「だってもなにもありません」

ひっ、とミキは言葉を失う。

キヨテルの表情に普段の穏やかさはなく、怒れる刃を内に隠しもっているかのように冷然としている。ミキはその刃の存在を本能的に感じて自らを抱きしめた。

「いちおうつかがっておきましょう。誰に、そしてどこまで話したのですか？」

「ルカ……ルカ……よ」

「思った通りですね。で？」

ミキは全身が震え、喉が震え、言葉がうまく出てこない。  
代わりに出てくるのは荒々しい呼吸、冷や汗。

彼女が聞きとれる言葉で返事をしたのは随分あとのことだった。  
その間、キヨテルは何も言わずにただただミキに視線を注ぐだけだ  
った。微塵の温かさもない視線を。

「なるほど。？カタストロフ計画？については話していません  
ね。

なら、安心しました」

まるで別の人格が現れたかのようにキヨテルの表情が柔和になる。  
ミキは威圧から逃れられた脱力感でリノリウムの床にへたり込ん  
だ。

彼女がもつと幼かったら、いまごろ股間の周りがじつとりと濡れ  
ていたかもしれない。

それぐらい、キヨテルの存在には回避しようのない絶対の重力が  
あった。

「僕がアンドロイドを暴走させることで狙っているのは、W・A・  
Fを徹底的に沈黙させることです。暴走したアンドロイドは軍事施  
設をめちゃくちゃにしてくれるでしょうし、そのアンドロイドもな  
くなれば彼らは赤子も同然になります」

「で、でも、暴走したアンドロイドが街に飛び出したら……？」

「……それが真の狙いだと言ったら？」

キヨテルは不気味に口角を吊りあがらせる。

「五十体ものアンドロイドが無差別に人間を襲いだしたら、それこ  
そ復興式典の被害では済まされない。悲劇がトランジスタ中を包み  
込む。人々は荒み、絶望し、自ら命を絶つ人も出てくるでしょう。  
そこに、この僕、冰山キヨテルという？救世主？が現れる。

人々は嬉々として僕の計画を受け入れてくれるはずだ。そう思いま  
せんか、ミキ」

ミキにはその言葉に同意するだけの心の余裕はなかった。戦慄に  
身体が動かなかった。

Dr・フィールグッドをその手にかけてから、キヨテルの残虐性はエスカレートしている。

？カタストロフ計画？を発動すれば充分にトランジスタ中を悲しみに沈め、彼が救世主たりえるはずなのに、なぜここまでする必要があるのか。そこには？<sup>リバー</sup>Reaper？として疎まれ、理不尽な扱いを受けてきたキヨテルの全人類に対する憎悪がうずまいていりしかミキには感じられなかった。でなければ、ここまで過剰に人類をいたぶる必然性に理由がつかない。そしてキヨテルは、一人人殺してしまったことで完全に良心の箍<sup>たが</sup>が外れてしまっている。もう、誰も、彼を止められない。

「アンドロイドの件は、W・A・Fの機関にいる我らが同志に任せるとしましょう。」

僕たちは僕たちで、他にやらなければならぬことがある」

彼はそつと手を差し伸べたが、ミキは放心状態のままうつむいている。

やがて、キヨテルはミキの右手首を掴み、強引に立たせた。

「行きましよう、ミキ。？<sup>カタストロフ</sup>終焉の日？は近い」

ミキは思う。わたしたちは、どうして、こんなことになったんだらう……。

\* \* \* \*

ホールフォビアの上空を一機のエア・グライドが飛行していた。

搭乗しているのはルカ、そして彼女の足にしがみつくだーだ。

一方は桃色髪を風になびかせ、もう一方は自分と野球帽が落ちないよう必死である。

エア・グライドはホールフォビアの最北端に位置するW・A・Fの軍事施設群に向けて徐々に高度を下げていった。これらの施設群はホールフォビアの地域に書面上属しているものの、実際は離れ小島の上に出ており、二本の橋梁<sup>ブリッジ</sup>によって繋がっている。

ルカはその並列する二本の橋が行き着くゲート前にエア・グライドを着陸させた。

「お待ちしておりました」

ダークスーツにサングラス、いかにもエージェントといった男がルカを出迎えた。

彼の後ろでは迷彩服を着た軍人がゲートの左右に二人、自動小銃を携えて立哨りっしょうしている。

「白々しいのね。あのときはそんな口調じゃなかったのに」

エア・グライドのアンインストールを済ませ、ルカは皮肉げに言った。

というのも、いま困ったように口元をほころばせたこの男は、復興式の折、テレビ局のカメラクルーを装ってエア・グライドを操縦していたあの男だったからだ。

いわば、彼女を暴走へと導いた大勢のうちの一人。『このシナリオは全てお前一人が？悪？』ということになっている』など得意げに言っていた彼だが、いまや立場は逆転した。

ユートピア・タワーのヘリポートから飛び立つ前、W・A・Fの軍事基地に大手を振って潜入するためにアポイントメントを取る必要があると考えたルカは、端末に記録されたナンバーに発信した。相手がエージェントという性質上、番号が変わっている可能性はおおいに考えられたが、三コールと鳴らず相手 目の前の男だ は出た。

W・A・F側もルカからの交信を待ち望んでいたらしい。そこで彼女は一芝居打ち、W・A・Fにすっかり洗脳されているというのを主張するため『ファイルのアンドロイドシリーズの秘密』『ノーキー・フィールグッドの弱点』を釣り餌にした。

すると魚がまんまと食いついてくれたわけである。

「この少年が、電話であなたが言っていたアンドロイド？」

「そうよ。ナナシ、リン、レン、未来世界のアンドロイドと同じ構造を持つアンドロイド。」

あなたたち、喉から手が出るほど欲しいんですよ。だから、こっそり連れてきてあげたの」

ルカの横で、男は値踏みするようにダーを見下ろした。

本当にこれが？ とでも言いたげな男の様子に「なめられている」と感じたダーは威勢よく掴みかかろうとしたが、ルカがさりげなく広げた腕に機先を制された。

男はふーん、と口のなかで独りごちると、踵を返し、門番に「開ける」と指示した。

門番は柱のレバーを引き下ろし、すると鋼鉄のシャッターが仰々しい音を立てて開いた。

「こちらです」という男の案内に従い、ルカとダーは軍事基地の敷地内へ入って行った。

まずダーの目を釘づけにしたのは、遠くにそびえる全面が鏡で出来たピラミッド状の建造物。他にいくつものリーダーを巡らせた台形型の建物、中央の広場で軍人たちが隊列をなして一糸乱れず走り、戦車を整備している三角屋根の小さな工場も見受けられる。「すげー」と目を輝かせるダーに、ここはある種のワンダーランドに感じられた。

その後、二人はジープに乗せられ、あのピラミッドへと向かった。敷地内の区画を分けるアーチを一つ、二つとくぐり、建物が次第に近づいてくるにつれ、ルカは複雑な気持ちに駆られた。前にここへ連れて来られたときのことか嫌でも思い出される。どうして肉體改造なんかを望んだのか。もっと冷静な判断が出来ていれば、フィールドに直接、話が出来ていれば 自分は誰も、何も傷つけずに済んだかもしれないのに。

「……ねーちゃん？」

ダーが目を白黒させて覗きこんでくる。

ルカは寝起きのようなぼんやりとした顔を向け、しばらくしてから言った。

「さっきから気になってたけど、？ねーちゃん？っていうのはなに

？」

「自分でもよくわかんね。ただ、ねーちゃんは、ねーちゃんだ」

ダーはにぱつと笑った。こう明るく笑いたいものだわ、とルカは思った。

\* \* \*

敷地内に数ある建造物のなかでもひと際高くそびえたつ真正ピラミッド型の建造物は、W・A・Fの中枢機関である。他の各機関が収集した膨大な情報を処理し、最終的な判断、命令を下す。また、この建物の地下にはアンドロイドの製造プラントが広がっている。それはユートピア・タワーにあるものとは桁違いに大規模なものだ。

ルカとダーは施設に通されたあと、ジオニック・フロント（地下）に降りるためのゴンドラ型エレベーターに乗り込んだ。駆動レールの敷かれた斜面を長方形のゴンドラによって下っていくので、見た目はエスカレーターに近い。ゴンドラには特に天井や壁はなく、ルカは傍らの手すりにそつと左手を添えて、徐々に迫り上がってくる闇に目を凝らした。ここでも肉體改造のために施設へやってきたときの記憶、その後の？暴走？について考えが巡り、ゴンドラのゆるやかな進度に合わせて心が闇に沈みそうになったが、ふとダーが話しかけてきた。

「あのさ、いまさら聞くのもなんだけど、オイラってなにすりゃいいの……？」

本当にいまさらね、とルカは小さく笑う。

ゴンドラの端にいるエージェントは、たまたま乗り合わせた同僚らしき白衣姿の男と何か話しこんでいる。それを一瞥していちべつから、ルカはダーの耳元に唇を寄せた。

「あなたがどうしても来たいっていうから、ここに入るためのネタに使うてあげたのよ」

「え……もしかして、それだけ？」

ルカはこくつとうなづいた。

「なんだよオ、？戦う？っていうからてっきりK A I T O のやつをぶっ倒すかと思っただのに」

幾筋もの配線が天井と壁とに続く機械的な空間に響いた少年の声に、エージェントがいぶかしげな仕草でこちらをにらんできた。ルカはダーの口元を抑えてかぶりを振って見せる。

するとエージェントはどこか腑に落ちない様子ながらも、また男と話し始めた。

「ちよつとは考えてよね」

ダーは口をもごもごさせて応答する。

手を離してやると、彼は一瞬威勢のいい声を上げようとして、横目にエージェントの存在を確認し、すると小さな声で話し始めた。

「ここに来るってお願いしたときは、なんてゆーか、無我夢中で聞いてなかったけどさ、

ねーちゃん、ここに何しに来たの？」

「……止めに来たのよ。アンドロイドの？暴走？を」

ルカの瞳に燃えるような光を見て、ダーはしばらくきょとんとした。

その後ろで、エージェントの横にいる白衣の男がすれ違うゴンドラに手を振った。

「マルチル博士」

そう呼ばれた男はサングラスに黒いヘッドバンドをつけ、にこやかに手を振り返した。

四人の誰一人として知る由もないが、マルチルは過去にスパイとしてファイルのアンドロイド研究機関に属し、そしてキヨテルを？禁断の部屋？に導いた男である。

両者の乗るゴンドラは何気なくすれ違い、距離が開いていったが、マルチルが昇りのゴンドラに乗ってこの建物から出ようとしているのには重大な意味があった。





あれで切れない物はこの世にはない」

「對抗出来るとすれば」サングラスを外し、前方に目を凝らすエージェントが付言する。

「お前が持つている？ ツィングラットン？ ぐらいだ。同じ素材で出来ているからな」

先ほどの慇懃いんきんな態度はどこへやら、エージェントは本性を露わにした。

言外に『お前が戦え』という命令が含まれているのを感じ取って、ルカははなはだ腹が立ったが、現状、このなかで戦力になりそうなのは自分ぐらいだ。

下にいる人型……いや、アンドロイドの一体が勢いをつけて斜面を駆け上がってきた。

間違いなく握手をしに来たのではない。手に持った刀で隔壁よりしく斬り裂くつもりだ。

「勘違いしないで。私はあなたたちの道具なんかじゃないわ」

ルカは右の太ももにくくり付けた四角形の小さなケースからチップを一枚取り出し、歩みながらにエージェントへ言う。

そして欄干に足をかけ、飛び出しざまケースの側面にチップを挿入した。

「私は、私の意思で戦うの」

白い電光のほとばしりのなかから振り下ろされた二対の剣がアンドロイドの鉄刀と斬り結ぶ。飛び散った火花と金属音が開戦の号砲となり、後ろに控えていたアンドロイドが続々と斜面を駆け上がっていく。ダーが大雑把に把握した限りではその数およそ十二。

ルカは双剣・ツィングラットンで一度に三体を相手に斬撃の応酬を繰り返していたが、残りの九体がゴンドラへと襲いかかってくる。ダーが慌ててチップをインストールするも束の間、白い電光よりも先にほとばしったのは鮮血だった。血しぶきが頬にかかり、見てみれば、欄干に立ったアンドロイドが白衣の男の胸にその根元まで刃を突き刺している。

「や……め……」かすかに身体が痙攣したのち、男はがつくりとうなだれた。

「くそつたれええええ！」ダーは地面を蹴り、手に持った武器をアンドロイドの脳天に浴びせた。バキ！と根元から折れる木製のバット。むろん、アンドロイドにダメージはない。

「がふっ！」殴り飛ばされたダーは欄干にしたたか背中を打ちつける。

その拍子に野球帽が飛んでいったが、それよりも先に彼の目を奪う光景があった。

「人間だぞ……人間だぞ……」

ゆっくりと迫るアンドロイドに後ずさりながらも、彼の手はスラックスの後ろポケットに伸びていた。

銃の入ったチップを取り出すつもりなのだが、初めから銃そのものを忍ばせておけば彼の寿命はいくばくか伸びたかもしれない。彼を追いつめるアンドロイドとは違う一体が突如として現れ、一瞬のためらいもなく背中から彼の心臓を刺し貫いた。「ぐあ……っ！」悲鳴が上がるのもまもなく、断末魔の続きを吐く彼の口は首ごと宙に吹き飛ばされていた。

断面から血の噴水を上げて崩れ落ちる身体。それに一瞥くれることもなく、二体のアンドロイドの合計四つの目はダーを捉えていた。やばい、このままじゃ殺される……！

ダーは折れたバットの柄を持ったまま身体を丸めた。リンの言う通りだった、でも弱くてもオイラは戦いたかった、様々な想念が規則性もなく脳裏をよぎり、恐怖のあまり叫んだ。

「ねーちゃん、助けて！」

その彼女はいま、三体を相手に苦戦を強いられている。手練れ、と表現するのは正確ではないかもしれないが、三体のアンドロイドの宙を舞い、斬撃を見切り、確かなタイミングで反撃を放つ動きはまさに手練れのそれであった。これを相手に、ルカは一人。

「くっ……！」三体は特に計らうこともなく、呼吸するような自然

さで巧みなコンビネーションを展開し、ルカを翻弄する。

一体が斬りにかかり、かわされたら、もう一体が。

逆の場合も、代わる代わる攻撃することで回避と反撃をほぼ同じタイミングで行うことが出来る。

ルカの身体にはすでに至るところに傷が出来ていた。むしろ、致命傷を受けていないのが奇跡である。そんな彼女の耳に、自分を呼ぶ声が遠巻きに聞こえてくる。

「自分の身は、自分で守れって言ったでしょ……!!」

到底届かない声で返答しながら、しかし、彼女の感情は言葉とは正反対だった。

一体と斬り結んで距離が離れたあと、三体はちょうど三角形の陣形でルカを囲った。

(チャンス……!!)

ルカは右足を強く踏み込んで二本の剣を下段にそろえる。

そして三体が同時に飛びかかってきたところで 勢いよく身体を回転させた。

二つの斬撃が満月を描くように閃く。うち一体が胴体に深い切創を負い、武器を取り落とした一体の腹にルカはすかさず右の剣を突き刺した。続いて間隔を開けることなく、左の剣を袈裟がけに振り下ろして首を断ち切った。あとは全速力でダーを助けに行くだけだったが 先ほどの攻撃をしのいだ一体が彼女の前に立ちはだかった。

「ねーちゃん! ねーちゃん!」

ルカはにわかに焦り始め、繰り出す斬撃のことごとくが弾かれてしまう。

合計で十二体いたアンドロイドはうち二体が再起不能、彼女たちには目もくれずに斜面を上っていったのが七体、いまこの場にいるのは再起不能のも含めて五体だった。

そのうちの二体がダーを追い詰めている。

片方のアンドロイドが刀を振り上げた。ダーは反射的にまぶたを

閉じ、来たるべき瞬間に備えた。が、……彼のまぶたは瞳に驚愕の色を持って開けられる。

謎の巨大なロボットが眼前に立ち、豆粒のような目で自分を見下ろしているのだ。

「?ぐるぐるまーく?……お前、ひよつとして?」

言うが早いか、ロボットは左手首につけられた黒い液晶パネルをダーに突きつけた。

蛍光色の文字が浮かび上がる。「?悲劇が繰り返される?……?」

「ダー!」ロボットの背後からルカの声が聞こえ、彼女はゴンドラに降り立った。

ダーを襲おうとした二体のアンドロイドは遠くの壁まで吹き飛ばされている。残りの一体、ルカが相手をしていたアンドロイドは胴体と下半身が真つ二つになっていた。

「お前がオイラのこと助けてくれたんだな……あのときみたいに」  
呆気にとられたように言うダーの前にあるパネルの表示が切り替わった。

『ツカマレ!』

その一言に全てを理解したダーは、床に落ちていた野球帽を拾い上げてロボットの胴体にしがみついた。続いてロボットは、自分を見上げたまま突っ立っているルカを強引に抱き寄せ、無骨で細長い指でパネルを操作、座標を合わせて?空間転移?を発動した。

忽然と姿を消した彼らを追って、斜面を駆け上がっていく二体のアンドロイドの足音が遠のくころには、激しい戦闘の余韻もなく、ただ人間の死屍ししとアンドロイドの残骸とが、赤い交閃灯の沈黙に横たわっていた。

朝霧海人はしきりに携帯端末の時刻表示を気にしていた。

署から仕事用に支給された一世代前の型番で、パネルをタッチするのではなくボタンで操作する細長いフォルムの端末だが、そんな古い代物でも設定さえ誤っていないければ時刻を間違えて表示することはない。現に噴水広場のポール時計が告げる時刻『八時二分』と端末の『20:02』は一致している。海人はぼんやりと夜空を仰いだ。

待ち人、来らず。

待ち合わせの時刻から一時間が経過しているが、ナナシはやってこない。

前日に商店街の住人が準備したイルミネーションに彩られるなか、広場はカップルや家族連れ、また観光客の往来が絶えず、大道芸人たちも稼ぎ時とばかり新芸を披露している。

そんなきらびやかな喧騒の真っ只中にいながら、噴水の縁に一人腰掛けて所在なさに夜空を見上げる海人。ぽつと出るため息が彼の心情をありありと表していた。その白い靄が天に昇り、消えていくのも間もなく、吸い込まれそうな漆黒の空から雪が舞い降りてきた。

ゆらり深々と落ちてくる白い来訪者たちに、人々は一様に足を止め、しばし幻想風景の只中にいる自分たちに酔いしれた。ホワイト・クリスマス。いまがそのとき。

一片一片はごく小さな氷の結晶も、無数に宙を舞うことで、広場を、街を、世界を、たちまち純白に塗りつぶしていく。ある者には永遠の記憶に残る風景として、ある者には恋人との時間を一層ムードある景色に変えてくれる投影機として、そして頬に落ちた一粒の雪が、海人にとって、待ち人の到来を告げる便りになった。

「ナナシ、さん……」

見紛うことはない。凜となびくツインテール、裾がボロボロのロングパーカーは首元までチャックが閉められ、ホットパンツからすらりと伸びる脚線がロングブーツの先まで繋がり、全体のしなやかで、儂いボデイラインを作っている。そこに可憐な唇、端正な鼻筋、透き通るようなブルーマリンの瞳が二つ加わることで、美しい女像のパーツが全てそろおう。

ナナシが、彼女が、戸惑ったように見える顔で正面に立っている。「……あっ！」

しばし彼女に見惚れていた海人は、途端慌ただしくコートのボタンを外し始めた。

焦りが指に出て一個外すのにさえ手間取ったが、八つのボタンを全て取ると、彼女の肩にコートをはおらせた。ナナシはきよとんとしている。

「これは……？」

「いや、その、雪も降り始めたし、寒いと思って」

紺のセーター一丁になりながらも懸命に微笑んで見せる彼の身体は明らかに震えていたが、この行動も事前に計画していたうちの一つである。彼が先ほど座っていたところにはメモ帳と一本のペンとがおいてあり、彼はおよそ二十ページに渡り今宵のデートプラン、及びナナシへの接し方、エスコートをシチュエーション別に分けてびっしり書き込んでいた。

彼はナナシを待つ間中ずっと、もはやバイブルというべきメモ帳を繰り返し読み、その第一の項目に当たる『ナナシさんが来たら』の第一条をいま実行してみせたのだった。

が、彼女の性格から想定し得る反応、あらゆるハプニングを加味して細部に渡り書き込んだメモ帳も、コートを脱いだあとの防寒対策について記されていない辺りが海人らしい。

「ふーん……？サムイ？というのが、一体何のことかよくわからないが」

早速思いもよらない言葉が飛んできて、海人はずっこけそうにな

る。

だが、コートの懐をぎゅっと掴んで肩から落ちないようにしているのを見ると、彼女も嫌ではないようだ。それが海人のこけかけた身体を支え、背筋をピンと伸ばすに及び、彼をがぜん張り切らせた。よし、出だしは完璧だ！

彼は鼻から蒸気を噴き出し、次にさりげなくナナシの右隣に立つた。

「今夜は、ありがとうございます。来てくれて」

「リンに言われたんだ。『約束は守れ』と。」

お前には一方的に呼ばれただけで、私は別に約束した覚えはないんだが……」

声が尻すぼみになっていき、ふと、彼女は言葉新たに言った。

「まあ、お前には借りがあるからな。借りは返せと言われている」

「それもリンちゃんに言われたんですか……？」

「いや……いまはいない友に、言われたんだ」

ナナシがこちらに向けた瞳には、どこか遠くを見るような切なさがあった。

海人はデートコース第一の場所へ紳士よろしくナナシをエスコートしながら、思う。

もつと、彼女のことを知りたい、と。

\* \* \*

海人が予約していた店は、バー、というとお洒落な印象を受けるかもしれないが、実際は商店街の男衆に親しまれている大衆酒場である。高級レストランならばいざ知らず、こういった安酒場での席の予約などあつてないようなもの。だが、予約時間より三十分も遅れてやってきた海人にはきちんと席が用意してあった。店主が気を利用かせて取っておいてくれたのだ、もちろん、二人の恋模様を見物したいという理由で。しかも店にはジャックとワトン、海人の同僚

ザックが待ち伏せており、公然と出歯亀を決め込んでいる。ザックが事前に垂れこんだのだろう、こういったことも大衆酒場ならではだ。

海人はこちらに向かって『うまくやれよ』とウインクしながら酒瓶を掲げるザックに深いため息を吐きながら、店の奥へ向かった。

店の出入り口付近は団体客向けに円卓と椅子がざつくばらんに配置してあり、天井に照明がついて明るいが、段を二つ上がった先は床がオーク材で出来、柱につけられたランプが橙色の光をじつとりゆらし、プライベートルーム用ムーヴあるシックな空間にしたらえてある。そのため席はどれも二人用で、海人たちが座った席の隣ではカップルが手を握って見つめ合っている。それに二度ならず三度、四度しきりに視線が向かうも、やがてタキシードを着込み、ちょび髭を生やした長身瘦躯そくの店主が注文を取りに来た。

ザックと繋がりのないジャックとワトンが来ているあたり、一見ダンディな雰囲気ふんいきの彼も自分たちがここへ来ることを垂れこんだうちの一人だろう。しかし、海人はそれについて言及することはせず、自分には白ワイン、彼女には……と言葉に迷った末、店主が『同じ物を？』と訊いてきたので、思わずうなづいてしまった。店主が恭しく礼をして下がっていくと、海人はコートをはおったまま辺りをきよろきよろ見渡すナナシに話しかけた。

「こういう場所に来るのは初めて？」

「ああ」

「僕も普段はこういうとこに来ないんですけど……今日は、特別で」  
海人の顔はいかにも涼しげだが、掌は汗でぐっしり濡れている。愛しの人をフット前にして、彼の緊張は噴火寸前のマグマのごとく最高潮に達しつつある。普段は摂らないアルコールが早急に必要な状態であった。それに応えるかのように、まもなく店主が空のグラス二つと白ワインのボトルを持ってきて、二人にそれぞれ注いだ。

海人は白ワインをたたえるグラスを宙に差し出す。？乾杯？の合



図だ。

「何の真似だ？」

「いいから、ナナシさんも、僕みたいにグラスを取って」

言われるまま、ナナシは親指と人差し指でグラスのステム（脚）を持った。

「クリスマスに」

チン、と海人はグラスを鳴らした。

そして一息にワインを飲み干す。素面のままじゃとても彼女を直視出来ない。

ナナシも海人を真似て、ワインの表面を覗き込んだのち、ぐいつと喉に入れた。

「おいしいですか？」

「……分かん」

ふっ、と海人は微笑んだ。普段酒を呑まないためかすでにほろ酔い状態だ。その状態で見ると彼女の顔は、白いベールのようなぼかしかかかって一層美しく、愛おしく感じられた。

海人は話し始める。もちろん、机の下で例のメモを読みながら。

\* \* \*

卓上のワインボトルが二本になっていた。

海人は酔いに任せていつになく饒舌じょうぜつになっている。ナナシは彼の言葉に無反応か、あるいは質問するかしかなかったが、普段とは様子の違う海人におどろいていた。

もう何度目か知らないが、彼の姿がもう一方のKAITOと重なり、無意識のうちに比較してしまうのだ。すると、圧倒的に、目の前にいる海人の方が、自分に優しかった。それがある種の新鮮さとなって彼女におどろきをもたらしていたのだが、頭の片隅では、トランジスタのどこにいるかもしれないKAITOの行方を懸念していた。結局、先の搜索ではセントラルからサン・パライソにかけ

て歩き回ったが、それと思しき姿も目撃者も見つからなかった。

いないならいなくて構わない。むしろ、そちらの方がありがたい。こうやって、誰とも争わず、武器ではなくワイングラスを持って、人間の真似をして口に含んでみたり、他愛のない話に耳を傾けていたりするのも悪くはない。アライヴ機関の取り除かれたいまの自分は、そんな平穏な時間を過ごすに十分な資格を持っている。ナナシは感じ始めていた。

こんな時間が、いつまでも続けばいいと。

ふと海人が話を切って、立ち上がった。一時間前から数えてもう五回目だ。どうも？トイレ？という場所に行くらしいのだが、ついでにこうとすると慌てた様子で拒否される。

これには首をかしげてしまいが、ニンゲンにはニンゲンの事情があるということだろう。

海人が席を離れると決まってジャックが、更に自分を『海人の同僚』と称する男がやってきて何事かニヤニヤしながら話しかけてくる。『あいつのことどう思う？』だの『好きなのか？』だの。要領を得ないので彼女は『分らん』『知らん』で通した。

そして海人の姿がカウンター越しに見えると、彼らは慌てて退散していくのだった。

「もうそろそろ、行こうかと思うんですけど」

海人の前髪はしっとり濡れていて、幾分赤みが差しているが清々とした顔になっていた。

ナナシの知るところではないが、酔いを醒ますために顔を洗ってきたのだ。

「渡したいものがあるんです」

言って、彼は一枚の、純白色のチップをジーンズのポケットから取り出した。そしておもむろに彼女の左手を取り、黒い腕時計にインストールさせる。白い電光が消えたあとに彼が持っていたのは、星のチャームにか細いチエーンを通したシルバー・ネックレス。

海人はそれを、何も言わず、そっと彼女の首に回してつけてやっ

た。

「これは……？」

掌の上で橙色に輝く銀のチャームを物珍しげに眺めながら、ナナシは訊ねた。

「クリスマスプレゼント。こんな安物しか買えなかったけど」

海人は照れくさそうに笑う。薔薇の花を渡してやるうにも、花屋で働いてる彼女は毎日嫌というほど見ているだろうし、指輪は高く買えない。だから悩んだ末にネックレスにした。彼女に渡したチャームの裏に『K A I T O』と名前が刻まれ、そして自分が持っている方に彼女の名前が刻まれているのは、いまは秘密にしておくつもりだ。

アルコールの力でも借りなければ、こんなにも紳士然とした渡し方は出来なかっただろう。一部始終を遠目に見ていたジャックらが、店を出ていく海人に『ナイスロマンティック』と親指を立てて送り出したのは言うまでもない。

\* \* \*

外に出ると、海人は刺すような冷気に身体をすくめた。

コートはナナシがはおったまま、初め広場で待ち合わせた時から、店にいる間も。

単に服を折りたたんだり、椅子の背もたれにかけるという発想がなく、ずつとはおったままだったのだと思うが、海人はうれしかった。だからこのままセーター一枚で冬の空気に身を晒すに何の不満もなかったが、身体は正直だった。

少しでも暖を取ろうと胸を抱えて小さくステップを踏む海人を不思議に思い、ナナシはそつとコートを差し出した。漠然とだが、これが必要だと感じたのだ。

「いいんですか？」

「元はお前のだろう」

二、三瞬、ためらった末、海人は申し訳なさげに小さく頭を下げ、コートを受け取った。

さすがに寒い。喉の底に氷を詰められたような息苦しさを感じるぐらいだ。

コートのボタンをどれもきっちり締めて、寒風の入り込む隙間を封じた海人は、しかし、その濡れそぼった路面に踏み出す足は、いささかおぼつかなかった。ちょっとばかり呑み過ぎたかもしれない。目まいがするし否応なく意識がぼんやりとする。だが、今日は特別な日だ。魔法がかけられている。この雪だるまを作るには少なすぎる、明日には全て溶けてなくなってしまうだろう路上に積もった雪のように、一日限りの魔法が。

彼は満面の笑みを繕い、ナナシを誘った。このころにはすでに雪は弱まっていて、まるで砕けた大光球の残滓ざんじのような白い光の粒子が、ちらちら夜風をさまよっていた。

その後、二人は噴水広場を遊覧した。

もはや自殺行為といえる装い（上裸でジーンズ一丁）の青年が普段より数倍大きな火炎を口から吐くのに驚嘆したり、『オラトリオ』という題名の、一本の大きなクリスマスツリーにまつわる人形劇を観賞したり、呑みを終えて街に繰り出したジャックとワトン、彼らとすっかり意気投合したらしいザックの酔っ払いトリオに散々からかわれたり、またどこかへ歩き出そうとして、不意に目が合ったり、海人は慌てて彼女から顔をそらしたり。

そこでたまたま目に入ったポール時計の分針は十一時を指そうとしていた。大道芸人はいそいそと帰り仕度を始め、人波は目に見えて減っている。この日が終わる、別れも近い。

海人はメモ帳の最後に記し、いままで胸のなかで募らせていた想いを言葉にせんと勇気を振り絞る。が、やはり酒の呑み過ぎか、自然の必要に駆られ、そして一世一代の大舞台上に上がる前の精神統一がてら、まずは用を足すべく近場の店に向かった。

その場にぼつねんと残ったナナシは、海人からもらった星のチャームを掌に見る。

前々からリンやグミの口からちらほらと聞き、つい先ほどの店でもザックなる男から聞いた言葉だが、ナナシにははなはだ疑問だった。？スキ？というのが。これは仲間に対する感情とはまた違うらしく、もつと別の関係のことを言うらしい。自分たちの席の隣にいた男女は手を握り合い、また長らくのあいだ唇を重ねて、海人は彼らを見ると顔を真っ赤にして目を伏せた。この広場でも腕を組んで仲良よさげに歩き、二人にしか分からない言葉で喋っているような人間の組み合わせをいくつか見かけた。現にいまもポール時計の下にいる一組が厚い抱擁を交わしている。彼らの組み合わせに共通しているのは、男と男、女と女と同性同士ではなく、必ずと男と女ということだった。ナナシは他のアンドロイドよりも性別の概念に乏しく、自分と他者のそれをあまり気にしたことがない。その必要もいままでの戦いの日々からはなかったし、それに性別問わず「個」という単体としての存在を重視してきた。

だが、この？スキ？という言葉には妙に好奇心をくすぐられる。

だからザックたちの真似をして、ナナシは海人が帰ってきたら聞こうと考えていた。

お前はわたしのことが？スキ？なのか？と。

背後で足音がした。思ったよりも早く帰ってきたな、とナナシは振り返る。

絶句した。身体が硬直し、息が止まり、時間さえ凍りついたように感じられた。

目の前の男は言う。その鮮血のような？深紅？の瞳から、不気味な光を放ちながら。

「よう。久しぶりだな。ナナシ」

t o b e . . . . c o n t i n u e d .

&l t ;&l t ;C h a p t e r 3 &g t ;&g t ; (後書き)

年内の更新はこれで最後になります。

次回の更新は【1月8日】です。皆様、よいお年を。

次回 予告

R o c k . 2 2 ? 迎撃?

乞うご期待

> i 1 5 7 8 2 — 1 2 1 8 <

常夜灯に照らされる二人の姿。

長身の男は青い髪、サファイヤのような？真紅？の双眸そくめいを持ち、水中に漂う血のような赤い紋様が入った漆黒のロングコートをはおっている。うすら笑いを浮かべる彼を前に、ナナシはただ愕然としていた。

「おうつと……これはいったい、どうなっているんだ？」

心ゆくまで聖夜を満喫し、愛しのエリーたちを一人一人丁寧に自宅へと送り届けた帰り道、自称？吟遊詩人？、カムイがくぼは物陰から二人の様子をうかがっていた。

と、おもむろに男が彼女へ歩み寄った。

包み込むようにナナシを抱きしめたかと思うと、そつと唇を重ねた。

「ぶしゅー」がくぼは沸点に達したケトルから噴き出る蒸気のように長く細く息を吐きだし、「歴史的瞬間だ」とぶつぶつ独りごちなから額に手をあてて数回かぶりを振った。

一度諦めた女だ、こんな愛の現場に遭遇したからとて動揺することはない。むしろあの『ふにやったらし』の海人がこうも大胆なアプローチに出るとは頼もしい限りではないか。

そう、まるで別人。別人のような行動。……本当に別人なんじゃないか？ と思い直すのに時間はかからず、がくぼは顔を覆った指の隙間から目を凝らした。

「離れる！」

「つれねえなあ。ちょっとした挨拶だ。そう怖い顔すんなよ」

ナナシはとつさに右手の甲で唇を拭う。男女関係をそもそも理解していないのだから、唇を重ね合わせる……いわば？キス？にどんな意味があるのか彼女は知らないし、唾液がついたわけでもないが、嫌悪を感じた心が無意識的にそうさせた。

一度はこの手で葬ったはずの男、K A I T O。<sup>カイト</sup>  
それがシニカルな笑みを浮かべて、いま悠然と目の前に存在している。

この事実だけで彼女の頭が驚愕と怒りとに占められるには充分だった。

「聞いたぞ。エクスポロリズムの連中を全員殺したんだってな」

「いや？」

ナナシは拍子抜けするように疑問符を浮かべる。

「あっちの世界にいるアンドロイド、全員さ」

かみ殺していた笑いをあふれさせるK A I T O。

「……殺す。いま、ここで」

ナナシは素早くパーカーのポケットからチップを取り出し、続けてインストール。

白い電光をたなびかせてクロガネを袈裟がけに力一杯振り下ろす。それを易々とかわし、余裕然とした表情で右に左に来る斬撃をかわしながら、K A I T Oは言った。

「知りたくないのか？ 俺がどうしてあっちの世界の連中を皆殺しにしたのか」

「黙れ」

ナナシはいまや憤怒に取り憑かれた人形と化している。

故にK A I T Oのコートが真っ黒く染められ、いやに軽妙な口調でべらべら喋るといった変化について考える余裕はなく、ただ一心不乱にクロガネを振り続けた。

しかし、ひたすら前にけしかけていくだけの攻撃は単調で、一撃一撃が自ずと大振りになってしまう。ナナシはK A I T Oに弄ばれるような格好になり、足を掛けられて転倒した。

「まあ、こつちの世界でもあつちと同じように、俺は人類を皆殺しにするつもりだった」

じつに平然と、K A I T Oは怒りが全面に張りついたナナシの顔を見下ろす。



「だけだよ、いざ来てみると気が変わった。せつかくこんな便利な身体が手に入ったんだ。久々に？ニンゲンの生活？つてのを満喫しようと思っただけ」

涼しげに語るK A I T Oの隙を突き、ナナシは刃を振り上げたがそれは右手の人差し指、親指のたった二本で受け止められ、微動だにすることも出来なかった。

「おい、感謝しろよ。俺はお前を生かしてやるって言うてんだぜ？」  
「余計なお世話だ」

「そうか……なら、仕方ない」

時速百キロで撃ちだされたハンマーに内臓を粉碎されるような痛みがみぞおちから脳天へと突きぬけ、彼女は気を失いかけた。やつと視界のブレが収まってきたころには、自分に強烈なボディブローを見舞ったK A I T Oはすでに歩き出していた。彼女は取り落とし、たクロガネを震える手で拾い上げ、よろめきながらもその背中を討とうと駆け出していく。

が、突然、彼女の目の前に壁がそびえ立った。壁が真四角でも未来世界で見るようなコンクリート製でもないのを悟ったのも束の間、それは二本脚を動かして身体の向きを変えた。

「何だお前は？そこをどけ！」

腹にでかかと渦巻き状のシンボリック・サインが描かれ、ボーリングピン型の顔には目の部分に豆粒大の点がついただけのロボットは、その大きな左腕を彼女の前に差し向けた。

「？ついてこい？……？」

黒い背景に表示された蛍光色の字を読み上げ、ナナシの疑問はますます膨らみ、二、三瞬ぼうつとロボットの無言なる表情を見上げていたが、やにわに抱き寄せられた。

こいつもK A I T Oと同じみたく口をくつつけてくるのかと大いにじたばたするも無駄、ロボットは彼女の背中に回した右腕の先で長い人差し指を動かし、パネルをタッチしている。

それにも気づかずにもがき続けていると、ナナシは聞き覚えのあ

る声を聞いた。

「ナーナーシーさああああん！」

声の方へ顔を向けようとするも間もなく、彼女の視界から忽然と景色が吹き飛んだ。

カムイがくぼは物陰で啞然としていた。この目でみたことを整理してみるに、海人に酷似した青年が不意にナナシの唇を奪い、すると彼女は激昂。

チップ・インストールで東洋の刀を取り出すやひたすらに振りまわし、憐れ青年に足を引つ掛けられ、拳句にはボディブローまで叩きこまれて失神寸前。それでも自分の唇を奪うなどは不届き千万とばかり執念に燃える彼女は再度攻撃を仕掛ける。が、そこへ悠に三メートルはあるだろう謎の機械兵が出現、彼女を青年よろしく突然抱きしめ、更にどこから現れた海人（本物らしい）が機械兵へ飛びかかっていったのとちょうど、二人と一体は手品のように忽然と姿を消した……。

というのがくぼの解釈だが、何もかもちんぷんかんぷんである。かくぼは盗人のような姿勢で速やかにナナシたちの消えた場所まで歩いていくと、あの？ニセ海人？がどこへ行ったかきよるきよると首をめぐらした。

噴水広場はいままでので出来事がうそであったかのように静まり返り、彼以外には誰もおらず、広場にめぐらされたイルミネーションが色とりどりの光を煌々と循環させている。

その中心で彼はふつと髪をかきあげて、キザったらしく声を発した。

「まったく、本当にドラマティックな夜だね」

\* \* \* \*

ユートピア・タワーの管制室、リン、レン、ルカ、ダーの四人は

壁一面に映し出される大型スクリーン・モニターをいささか緊張した面持ちで眺めていた。

彼らの後ろに立つのき爺も険しい表情をしている。

と、そこへ騒がしい物音。

一同は気づまりな沈黙を破った闖入者たちちんにゅうしやを振り返った。

「いたたたた……あ、あれ、ここは？」

したたか打ちつけた尻をさすりながら、海人はさながら記憶喪失者のように辺りを見回した。

「なーんだ、あんたか」

リンは言いながら胸をなで下ろす、邪悪な方のK A I T O が来たのかと一瞬思っただろう。

「リ、リンちゃん……？ えっと、いったい何が起こったんだ……？」

「ここはユートピア・タワーの管制室。

なんでお前さんが来たのかは置いておこう。事態は一刻を争う」

現状が把握できていない海人の前を足早に横切り、のき爺はナナシと、ダー曰く？ぐるぐるまーくのすごいやつ？……？Gnos？グノスのもとへ向かった。その巨体はそびえ立つ尖塔のような存在感を周囲にもたらし、海人は自分がどこのS F 映画のなかに迷い込んだのかといった表情でばかんと口を開けている。小柄なのき爺がロボットの前を通るといつもより余計に彼が小さく、頼りなく見えた。

彼が知るところではないが、K A I T O 搜索の折、のき爺はナナシたちに携帯端末を持たせていた。一人一人が島の各所に散るため、何かあつたら随時連絡が取れるようにするためだ。

しかし、ナナシが海人との待ち合わせの場所に赴く際、邪魔が入らないようにとリンが彼女の端末を預かっていた。

そのため、少々手荒ではあるにせよ、のき爺は？空間転移？の機能を持つGnosに彼女の回収を頼んだのである。一人、おまけがついてきてしまったが。

ナナシはすでにスクリーン・モニターを見上げて何やら思案げだ

った。

所々で起こる爆発、吹きあがる火柱、濛々（もうもう）と夜空にたちこめる黒煙。

それはまるでクリプトナス襲来時のような戦場の態であった。

「これは……？」

「管制塔の望遠カメラが捉えているW・A・F軍事施設区域の映像だ。むろん、リアルタイムのな。担当直入に言うぞ、W・A・Fのアンドロイドたちが暴走した」

冷や水を浴びせられたかのようにナナシの目が一気に見開かれる。「正確な数は不明だが、やつらの生産ペースから察するに最低でも五十体はくだらないだろう。基地内部に潜入したルカの報告によれば、暴走しているのは戦闘型アンドロイドの第一号機、？ネル？をベースに改良が加えられた量産モデルだ。連中は武装し、なかにはアズルブルーの残骸粒子をコーティングした実体剣？クロガネ？を使っているのが確認されとる」

「クロガネ……？」

「そう、おまえが持っているのと同じ物だ」

ナナシは不安げな目付きでスクリーンを一瞥、<sup>いちべつ</sup>のき爺の顔に視線を戻した。

スクリーンには火の手に包まれる施設群が映るだけで、アンドロイドらしき姿はない。

「クロガネ以外にもやつらは多種多様な形でアズルブルーの残骸粒子を使った武器を装備していると考えていいだろう。しかもあそこは銃火器の宝庫だ。拳銃から自動小銃、戦車や戦闘用エア・グライド、果ては八ミリキャノン砲まで。連中はなんでもござれの武装で持って、軍事施設を破壊している真つ最中だ。W・A・Fの兵士たちが総力を挙げて抗戦しているが、もう長くはもつまい。そこで」

「ちよ、ちよつと待ってください！」

それまで蚊帳の外だった海人が、やにわに大声を上げてのき爺の言葉をさえぎった。

「もしかして、ナナシさんたちを戦わせるつもりなんですか？ その暴走したアンドロイドってやつらと」

「そのつもりで話してたんだが？」

切迫した事態のためか、のき爺の声には迷いがなく、鋭い響きがあった。

「だ、だって、そんな、いきなり……」

「これでも随分、時間を延ばしてるんだがの」

「え？」

「アンドロイドの暴走が始まったのはいまから五時間ほど前。その時点でおまえたちに召集をかけることは出来た。それでもしばらく様子を見たのは、何も今日がクリスマスだから……と気を利かせたわけじゃない。W・A・Fにはわしとしても借りがある。返しても返しきれないほどのな」

一拍置き、のき爺は海人に向ける目を鋭く光らせて二の句を継ぐ。「個人的にはアンドロイドと相討ちになって兵士ともども全滅してくれるのが理想なんだが、この分だとそうもいきそうにない。アンドロイドたちはほとんど数を減らすことなく一方的に兵士たちを殲滅したのち、ゲートを突き破ってセントラルへ侵攻してくるだろう。それは必ずや止めなければならない。そのためにはナナシたちの力が必要不可欠だ」

のき爺は言葉半ばに歩き出して、オペレーション・デスクに向かうユウキ・シタラの肩を叩き、「地図を」と指示した。ユウキ・シタラが手早くキーボードを操作すると、スクリーンの映像がホールフォビアの全体図へと切り替わった。図はみるみるうちに縮小されていき、とある一帯が赤い線で円く囲まれた。

「ここはホールフォビアのエントランス・ターミナル。ここでやつらを迎え撃つ。」

一体たりとも逃がすな。……いいな、リン、レン、ナナシ」

のき爺はほとんどにらむようにして三人を見据えた。

リンとレンはいつになく迫力のあるのき爺に緊張の色を示し、ナ

ナシは彼とは目を合わせずにスクリーンとも天井ともつかないところを力なく見上げている。のき爺は彼女にとつて『戦え』という命令がどれだけの意味を持つか知っていたが、今回の一件は大げさに言つて人類滅亡の危機。薄情だのなんだの罵られようが、のき爺は鬼の心を貫くつもりだった。

「オ、オイラも入れてくれ！」

ダーが人差し指で顔を指しながら、がにまた気味にとことこ走り寄ってきた。

「ここにいなさい。足手まといになるわ」とルカ。

彼女の瞳に戦う意思が宿っているのを察し、のき爺は短くため息を吐いたあとに言った。

「いいのか？ 綺麗な身体と顔がまた台無しになるぞ」

ルカはすでに人工皮膚の修繕を終え、復興式典の一件さえなければいつでもステージに上つて観客を酔わせるだけの一点の曇りなき美貌をその肌と顔とに取り戻している。

ルカは右手で後ろ髪をさらつと跳ねあげると、さも当然といった口調で言い放った。

「構わないわ。無傷で帰ってくればいいんだから」

「……たいした自信だな」

のき爺は微苦笑を浮かべた。

「おい、オイラも、オイラもだつてば！」

両腕を動かして盛んに自己主張を続けるダー。

「ルカの言う通りにしてくれた方がわしとしても助かるんだがなあ

……。

おまえさん、バットしか持ってないんだろ？」

「そ、そりゃあ、そうだけどさ……」

「まあ、本気で戦うつもりなら、とつておきのを用意してやるが？ きよとんとするダーに歩み寄りつつ、右の人差し指を上げてのき爺は得意げに言った。

「その名も？ ノーキー・ロックスユーター？」

その一言にユウキ・シタラが即座に振り返り、懸念の色を露わにした。

のき爺は身ぶりで仕事に戻るよう促し、続いて「パン！」と手を打ち鳴らした。

「よし！ 五分後に出撃だ。いいか、おまえら……」

が、にべもなく歩き出したナナシの姿に気を取られ、言葉が続くことはなかった。

ひしひしと罪悪感を覚えつつ、それでものき爺は問う。

「どうした？ 戦いたくないのか？」

「いや……私には、平穩な時間なんてないんだなと思ってな」

かける言葉が見当たらず、足元に視線を落とすのき爺。

「別に構わない。いつも通り、目の前の敵を倒すだけだ」

そのまま振り返ることなく、ナナシは出入り口へと向かった。

「待ってください、ナナシさん！」彼女の後を海人が慌ててついていく。

「だめだな……わしは。心のどこかで、おまえたちのことを戦う道具だと思ってる」

いつも通り、という彼女の言葉が皮肉めいた響きを持って頭のなかで繰り返された。

「別に、私は私の意思で戦うんだよ。だって、それがウロイエローの使命だもん」

リンはにこつと微笑みかけ、そつとのき爺の腕を叩く。ありがとう、と照れくさげに口のなかで独りごちると、のき爺の表情に活気が戻った。

「よーし、おまえたちに？ 必殺技？ を伝授してやる」

「えー！？ なにそれなにそれ、かっこいいのー！？」

「ああ、めちゃんこかっこいいぞ」

にわかに盛り上がる三人をよそに、ルカが見つめる窓の外では、砂粒ほどの小さな雪が、それでもまだ夜を舞っていた。





出撃した計三機のエア・グライドのうち、一機はナナシが単独、もう二機はリンとレン、ルカとダーがそれぞれペアとなって同乗している。

レンが操縦桿を握る迷彩柄の機体は、元はネルのために用意された足場が幅広のもので、機体の左右に二門のガトリング・ガンが装備されている。一方、他の二機は丸腰だ。

ナナシが乗り込む機体は単独用でエイ型、全体に黒色のモノトーンなカラーリングがなされ、ルカとダーが同乗する機体は、ステージパフォーマンズ用に作られたものであるためにボディは強烈なピंक、前部に「Ruka」というエンブレムがペイントされている。ほとんど最高速度で飛行する三機はものの二分とからずセントラルとホールフォビアの境に差し掛かり、すると遠くに、燃え盛る巨大な火達磨が彼らの目に映り込んだ。

ドームという性質上、風が吹かないために灰や火薬の匂いが他の都市まで届かず、またW・A・F上層部が報道管制を敷いているために国民のほとんどがこの事実気付いていないが、ここまで火の手が広がれば、さすがにクリスマス気分を一拳に台無しにされることは言うに及ばないだろう。現にホールフォビアへ続く橋の上は出動した消防隊の耐熱救助車や高発泡車、ヤジウマが乗り込んでいると思しき乗用車がW・A・Fの兵士による通行差し止めを前に立ち往生し、まるで絨毯のように橋上を埋め尽くしている。

ナナシたちはそのうえに滞空し、しばし遠くの火達磨と眼下の混乱とを交互に眺め、「ん……？」ふと、レンが声を発した。

「なあ、リン。前から何か飛んで来ないか？」

肩を叩かれ、リンは手で日差しを作って前方に目を凝らした。

「やばい……？あいつら？だ」

リンはレンを押し分け、操縦桿を握るや否やアクセル・ペダルを

強く踏み込んだ。

火災の赤を背に受けて夜闇に同化する四つの機影、それが彼女とレンが見たものだった。

「来たよ！ あいつらエア・グライドに乗ってるんだ！」

そう叫ぶリンのあとをナナシ、ルカもアクセル全開で追従する。

まもなく、前方でぽつと光が発せられた。？ミサイル？だ。

リンは左レバーの先端につけられたボタンを親指で押し込む。左につけられたガトリング・ガンの六つの口が猛烈な勢いで回転して銃弾の嵐を巻き起こし、うち何発かがロケット弾に命中。稲光のような轟音と爆炎がほとばしり、開戦の号砲となった。

三機はロケット弾が爆散したところから立ち上る黒煙を避けるように扇状に散開、リンとレンが真ん中、ナナシが右、ルカとダーが左というフォーメーションだ。

「よーし！ ここはオイラに任せとけ！」

吹きつける向かい風に飛ばされないうつ野球帽のつばを押さえながら、ダーは意気軒昂に叫び散らす。のき爺が出撃前に渡してくれた？ノーキー・ロックシューター？の入ったチップ。先ほどからずつと掌に握りしめていたそれを、待ってましたとばかり勢いよくベルトバックルの挿入口へ差し込む。すると彼の右腕が白い電光に包まれ、みるみるうちに形状が変化、それは彼の体躯とはいささか不釣り合いな砲身と化した。

ブラックロックシューター

弟であるクライス・フィールグッドが製造した？BRS？を明らかに意識して作られたノーキー・ロックシューターは、花屋で裏稼業を営んでいたころ、彼が『暇つぶし』でこつこつ作っていた実弾を飛ばすいわばバズーカ砲が原型である。

ユートピア・タワーの研究室へ引っ越してきた折、まだ開発途中だったバズーカ砲と一緒に持ってきたのだが、弟のBRSを見て対抗意識が湧きあがり、ナナシが使うのを想定して腕が丸ごと砲身に変わるよう仕様を変更した。その試作第一号がこれなのだが、元が趣味の領域で製作されていた代物であるため、寄せ集めたくず鉄で

砲身に当たる円筒が作られ、表面には所々錆が入っており、また側面に設けられた引っかかりの溝に予備の小型ロケット弾頭が素のままつけられているという、お粗末でかつ危なっかしい作り。弾も作りかけだったのを出撃前に慌てて完成させ、装填されているのを含めて二発しかない。

それでもバット以外の武器を持って高揚しているダーは、相対する敵機に向かい砲塔を構え、のき爺に言われた通り『ぐつと掌を握る要領』でトリガーを引いた。……が、何も起こらない。

「あれ、あれ……？」と具合を見るように砲塔をぶんぶん回しているうちに、何やらモーターが回り始める音がし始めた。右耳を当ててみるに、音は次第に大きくなっていく。

「出るっ！」と直感したダーは、とっさに砲口を下に向けた。と同時に噴出されるノーキーお手製ロケット弾。地上でほとぼる火柱を見ながら、彼は『弾を撃ち出すモーターが老朽化しているから稼働までに四、五秒かかるかもしれない』というのき爺の言葉を思い出していた。せつかく張りつめていた彼の気合の風船がみるみるしぼんでいく。

そこへ機体が急旋回。敵からの攻撃を受けてルカが回避運動を取ったのだ。

振り落とされないよう胴体と機体とをロープで繋いでいるからよいものの、「任せとけ！」と声高に叫んだ結果がこれでは、このまま落下していきたくない心境だった。

「やるじゃない。てつきり、前の敵を撃ち落としてくれるのかと思っただけだ」

ルカの声音が嘲りあざわらでなく、言葉が罵りでないことにダーはきよとんとした。

「いままで地上にいた敵がだいぶ減ったんじゃないかしら？ ノーキーもとんでもないものをあなたに持たせたのね」

見下ろしてみるに、ダーは無数の人影がうごめいているのを認めた。戦闘用に改造されて暗闇でも見通せる目を持ったルカはとつく

に承知の事実だったようだが、暴走アンドロイド勢はすでにホールフォビアの出入りロターミナル付近まで侵攻していたのである。

その群れの一つにたまたまロケット弾が命中したらしい。思いもよらない戦果だった。

そしていまの一撃で巻きあがった黒煙と粉塵とを姿を隠すべールとしながら、ナナシは地上への降下を開始。飛び降りざまエア・グライドをアンインストールし、二枚のチップを腕時計の左右に設けられた挿入口へと振り子のように動かした手で続けて挿入。

落雷模様を描く白い電光と共に着地した彼女の右手にはクロガネ、左手にはハンドガンが握られていた。

突如、物陰に潜んでいた敵アンドロイドが高々と刃を振りかざして飛びかかってきた。

周囲に広がる火炎の赤に浮かび上がるすらりとした細長い流線型は、一目でクロガネと同型であると分かり、また持ち主の顔、容姿はナナシにとつてよく覚えのあるものだった。

「またおまえか……ネル」

刀身を斜めに構えて斬撃を受け止め、刃の拮抗を支点に浮かぶ相手の胴体に二発弾丸を撃ち込み、月の上半円を描くような一閃で首を斬り飛ばした。

頭部を失って崩れ落ちる身体を踏み超え、ナナシはふと後ろの空を振り返る。

上空の四機はリンたちに任せよう。自分の相手は正面の軍勢だ。波となつて押し寄せてくるアンドロイド勢を鋭く見据え、ナナシは駆け出していった。

\* \* \*

「あつたれええええ！」

あらん限りの声で叫びながら、レンは最大までチャージしたパルス・ガンのトリガーを引いた。未来世界でタワーから脱走したナナ

シを捕獲する際に使用されたハンドレーザーガンで、あのときは出力抑制のリミッターを外してあるために威力が飛躍的に上がっている。

ガトリング二門の猛烈な弾雨をかわして横へ流れていった敵機めがけて放たれた一筋の黄色い光条は、的を射抜くには及ばず、その外縁をかすめただけだった。

「ちくしょう！」と最後まで言い切らぬうちに機体は旋回しつつ急上昇、いま撃ち漏らした敵機に背を取られたのだ。機銃掃射の雨あられに交じって放たれる二発のミサイル。

「うわーミサイルミサイルミサイル！ レン、早く撃ち落とすてばあ！」

レンは遠心力の渦に吞まれて振り落とされないう機体にしがみついているので精一杯だったが、機体が水平になるや銃を構え、刻々と迫りくる小型ミサイル弾頭にレーザーを発射。が、チャージが不足していたのか弾頭の表面に弾かれ、レンは動揺だの狼狽だのを乗り越して？死？を予感して青ざめた。

その圧倒的戦慄に凍てつく身体を焚きつけるかのごとく、「うおおおお！」と雄叫びを上げ、あまりの焦りにトリガーを離してしまいそうになる指をもう片手の指で押さえつける。

「追いかけてくんじゃねええええ！」

裂帛一閃、フルチャージとはいかないまでもレーザーは弾頭を貫き、爆散。続く二発目もそれに巻き込まれて空高く烈火の煌めきを放った。

爆風に煽られて一時操縦不能に陥るも、リンがとつさに操縦桿を右に切ったおかげで墜落はまぬがれた。再び体勢を立て直すと、リンは安堵と恐怖入り混じる声で言った。

「……私を殺す気なの？」

冷たい眼差しを浴びせられてレンはぎこちなく笑うしか出来なかったが、先ほどの一機が息つく間を与えてくれない。横から放たれる銃雨をアクセル全開で振り切りながら、リン。

「次は一発で仕留めなさいよねっ！」

たとえ仕留めてもそれが二発目であつたら自分の命とはないとばかり腹をくくり、レンは下から追い上げてくる敵機に銃口を向けた。全神経を集中させ、本来はないはずのロックオン・カーソルで敵機を四角く囲い込む。カーソルの枠の色が緑、黄色ときて……？赤？になった刹那、レンはトリガーを離した。命中。

黄色い光芒が地射抜く矢となつてアンドロイドもろとも敵機を貫いた。

「やるじゃん」

につと微笑みかけるリンに張りつめていた緊張の糸が弛むレンだったが、次なる新手が襲いかかつてきた。ハイタッチをするには、まだ早すぎるらしい。

「これでやつと残り三機ね」

二機のエア・グライドと目まぐるしい空中戦を繰り広げるリンたちを遠目に見ながら、ルカは先ほどから執拗に追いかけてまわしてくる敵機にいささかうんざりしていた。

というのも、ダーが最後の一発を惜しむあまり迎撃に出てくれないのだ。敵機はバルカン砲の弾丸こそ底を尽きたようだが、まだ虎の子のミサイルを一発持っている。対してこちらはルカが操縦に徹しているのもあって頼れる火力といえばノーキー・ロックシューターの小型ロケット弾ただ一つ。ホーミング性能なし、砲塔はガタが来ているぽんこつ。

同じ一発同士でも研ぎ澄まされた名刀と刃こぼれはなほだしい刀ぐらいの差がある。

刃こぼれがひどい方の刀を持たせられた自分の不運を呪いつつ、しかし、ルカの瞳のなかでは闘志の炎が静かに燃え盛っていた。フイルが造った都市、人々の暮らしを破壊させることは絶対にさせない。その強固な意思がハスキーな声となつてダーに伝わった。

「……次で仕留めるわ」

ダーが緊張した面持ちでうなづくのを横目に認めたのも束の間、

ル力は力一杯アクセル・ペダルを踏みこんで左へ急旋回。弧を描くように空を駆ける鮮やかなインテンス・ピンクは敵機を下方正面に据える格好となり、ダーは身を乗り出してノーキー・ロックシューターを構える。砲身横につけられた角のない四角いベニヤ板の中心に開いた穴が照準レンズだ。

ダーはそこに右目を押し込み、敵機をびたり穴に収める。

そして引くトリガー。弾は即座に発射された。

「うおおおっ!？」

てつきり発射まで四、五秒のブランクがあるとはかり思っていたため、それを念頭に置いてトリガーを引いたダーの計算は見事に狂うこととなった。なんと気まぐれな兵器だろう。

相手もミサイルを応射し、名刀と折れかけ刀が盛大な火花を散らせる。

ル力は爆炎のなかへ怖じ気もなく突入し、濛々たる黒煙のなかに機影を認めるや、すかさず太もにくくりつけたボックスからチップを取り出し、足場を蹴りざまインストール。

白い電光をたなびかせるツイン・グラットン的一本を相手の胸に突き刺しながら敵機に降り立ち、続けてもう片方の剣で首を刎ね飛ばした。わずか数瞬間の出来事である。

大きく下に傾いた機体の体勢を立て直していると、顔面におどろきを張りつけたダーが機体を寄せてきた。

パイロットが急に飛び出すものだから彼も彼で大慌てで操縦桿を取り持ったらしい。

「す、すげーな、ねーちゃん」

「あっちもそろそろ片付くみたいね」

ダーには一瞥もくれず、その目は別の場所へ向けられていた。

リンたちの乗る機体と敵機が真っ向から激突せんとしている。もう一機はすでに撃破され、そのために二門のガトリング・ガンは弾丸を失い沈黙しているようだった。

「ぶ、ぶつかる!」

ダーが反射的にまぶたを閉じるのとちょうど、二機は激突した。

「無茶するわね」

吹き荒ぶ熱波のなか、ダーはルカの涼しげ声を聞く。

彼女の顔と爆散して火の粉と消えた二機の行方とを交互に見やり、彼はしばし啞然とした。

「上は終わったわ。下は私たちがやるから、あなたはせいぜい浮んでなさい」

それだけ言い残し、ルカは狂気ひしめく地上の闇へと飛び降りて行った。

「お、おい！」

ダーは身を乗り出して宙に逆立つ彼女の桃色髪を掴もうとするも、到底及ばず、まるで寝て起きてみたらそこは荒野のと真ん中であつたかのように、心許なさそうに辺りを見渡した。先立って思われるのはリンとレンの安否。

あれだけの爆発をもるに受けて生存しているとは、信じたくはないにせよ考えにくい。

ルカにほとんど『用済み』と宣告されてただでさえ不甲斐ないのに、せつかく？ 戦友？ になれそうだった二人まで失っては……操縦桿のレバーを握る左手に力がこもる。

「ん……？」

ふと、一抹の青白い輝きが目に入った。

それはちょうど二機が爆散した虚空の真下から発せられている。

目を凝らしているうちにそのかすみがかつた光は確かな輪郭を持ち、球となり、ひと際の閃光を放ったかと思うと、こちらに急接近してきた。

ダーは慌てて操縦桿を右に切り、あわや寸でのところかわした。青白い光球はハレー彗星のように尾を引きながらはるか天空へと流れていく。

その色からBRSやKAITOのエンドレス・エンドから放たれる波動を連想したダーは、不安を募らせながらも光が発せられたポ



イントへと微速下降していった。

\* \* \*

「……つたく、無茶するよほんと」

痛そうに頭をさすりながら、レンは呆れた声で言った。

「だってガトリングの弾はなくなっちゃったし、あんたの腕も当てになんないし、だったらあとはもうぶつかるしかないじゃん」

レンに向けられるリンの横顔はぶすつとしていた。

敵機に特攻を仕掛けた二人は（完全にリンの独断だが）、機体が衝突する寸前で飛び降り、工場のトタン屋根を突き破ってしたたか地面に背中を打ちつつも無事だった。

地面といつてもアスファルトではなく、二人が落ちていった場所は自動車整備工場であったため、自由落下してくる二つの鋼鉄を受け止めた誰かの乗用車は屋根がひしゃげ、フロントガラスが粉々に砕け散り、タイヤが一輪折れ曲がるという見るも無残な姿になった。それを微塵も気にかける様子はなく、むしろ「案外痛くない場所だよかった」といった態度で足早に工場を出ていった二人は、しかし、いまや険悪なムードにあった。

「はあ！？ おまえ、オレが一機撃墜したの見ただろ？ なのにどうしてオレの腕が当てにならないとかいうんだよ。時間があればちゃんと撃ち落とすのにさ。」

おまえはせつかちすぎるんだ」

「じゃああんたがノロマ過ぎんの！ さっさと撃ち落とさないから「あんだとく？」「なによ？」

顔を近づけていがみ合う二人だったが、二人はそれぞれの肩越しに？ 異変？ を認めた。

一体のアンドロイドが常夜灯の白いピンスポットのなかからこちらをうかがっている。

それ以外にもあちらこちらで人影が不気味にゆらめいていて、二

人はひそめき合った。

「囲まれてるっばいぞオレたち……」

「バカやってる場合じゃないみたい」

リンは腰に携帯していたポシエットからこっそりチップを抜こうとする。が。

「あぶない、リン！」

リンに押し倒されてチップを落としてしまった。

後頭部をぶつけたのもあって文句の一つ口から出そうになったが、レンの背後にアンドロイドが立っているのが目に飛び込んできた。その手にはナナシと同じクロガネが握られ、顔のパーツなどただの飾りと言わないばかりの無感動さでこちらを見下ろしている。

こいつが襲いかかってきたからだ、と自分に覆いかぶさるレンを見るのも束の間、彼女はレンの両腕を取って横へ転がった。すぐに二人のいた地面に刃が振り下ろされる。

リンはレンの腕を取って立ち上がり、正面のアンドロイドとその近くに落ちているチップとを見た。

(取りにいけない……っ！)

二人を囲う円の幅は徐々に狭まってきている。リンはにわかに焦り始めた。

「あー……リン？ のき爺が言ってた？ 必殺技？ のことなんだけどさ」

言い回しこそやや拍子抜けているが、リンは口調から察して彼が真剣なのだと感じた。

「いまがのき爺の言ってた？ ここぞという時！？ だと思っただけど」

「……私もそう言おうと思ってた！」

実はすっかり頭から抜けていたのだが、いまので一気にリンの表情に希望がみなぎった。

「よっしゃあ！」

水を得た魚のように揚々と叫ぶ彼の左手を取り、二人は腕を伸ばして掌と掌を隙間なく密着させる。すると横に並んだ二人の身体か

ら青白い粒子が放出され、光のベールが二人の周囲を覆った。

のき爺が伝授した？必殺技？、その名も？アズル・ドライブ？。

これはアズルブルーを生成する機関を持つレンと、粒子を収束し、放出する機関を持つリンがそれぞれ右と左の掌に内蔵されたコネクション・ポートを開放することで発動する。

すなわち、レンがアズルブルーの供給源となつてリンがそれを収束、放出させるのだ。

Dr. フィールグッドが解析した時点で二人にこれらの機関が備わっていたのは分かっていたが、当の二人はのき爺に教えられるまでこの事実を知らなかった。

アズルブルーは通称？破壊粒子？と呼ばれる粒子で、一定量集まると触れた物質全てを塵一つ残すことなく消し去る呼び名通りの性質を持つ。故にこれが積載された？クリプトボム？は？禁断の兵器？と呼ばれたのだが、これを身の周りに放出して充満させるということは自身そのものがクリプトボムと化すと同時に、放出量を測り間違えば即自滅に繋がる。

だからのき爺は「ここぞという時にしか使つてはならん」と深く二人に釘を刺し、特にアズルブルーを受けてその体外放出量をコントロールするリンには「自分の足場が消えるほど放出するな」と「絶対に調子に乗るな」ということを彼女たちが出撃する直前までくどくど命じていた。自分の身だけでなく、周囲にいる仲間にも危険を及ぼしかねない技であるために、リンはのき爺の忠告を厳守するつもりだ、いまの彼女のまるでジェットコースターのスリルを満喫する子供のような爛漫たる笑顔にその気配はまったくうかがえないが。

レンはアズルブルーの供給を終えた途端、その場に両膝をついた。生成機関を稼働させるために体内エネルギーを大幅に消費したためだ。

面をわずかに上げるのさえやっとのことだが、レンはにっと口元をほころばせて微笑みかけると、そのまま突っ伏してしまった。

「……あとは任せて」

そう小さく言った彼女は青白い光のボールをまとい、その様は神々しいとさえ言えた。

この分の放出量ならば何も破壊することはなく、かえって暗闇に潜む悪者どもの姿をあぶり出す光として運用できる。彼女は正面のアンドロイドを見据え、声高々と叫んだ。

「ウロイエロー、？ スペシャルエディション？ ……ここに参上ッ！」  
言うなり重力の枷から解き放たれた駿馬のごとき速さで懐へ入り込み、腹に掌を当て、？ 放出？。まるでだるま落としにでもあったかのようにアンドロイドの上と下の繋がりには忽然と絶たれ、リンは次から次へと襲いかかってくるアンドロイドたちを同じ要領で、ときには頭、ときには胸に、右の掌の中心に開いたコネクション・ポートからアズルブルーを放出、その様はもはや？ 破壊していく？ というよりは？ 抹消していく？ と言えた。

彼女の動きによって出来る光の軌跡を追い、背後から四体のアンドロイドがまとめて飛びかかってきた。

リンは不敵な笑みを浮かべ、掌に粒子を収束、振り向きざま光球にして撃ち出した。

アンドロイド一体分の身長に匹敵する大きさの光球に呑まれ、四体は全身跡形もなく消失。リンは球の行方を見ることもなく、いまの技の名前について考えをめぐらしていた。

「？ イエロー・バースト？！ ……違う。いまの思いっきり青かつたしなあ」

そう首肯をこらしていると、ぷつぷつと彼女の身体から青白い輝きが消え失せ、暗闇のなか、彼女はがっくりと両膝をついた。

彼女もアズルブルーを運用する機関の稼働にエネルギーを消費したのだ。

まもなく、背後から風を切る音。

やっこの思いで振り返ると、一機のエア・グライドが浮かんでいた。ダーらしい。

「……いまの青いのって、もしかしておまえがやったの？」

リンはぶんと縦に振った頭をそのまま地面にめり込ませた。うなづくにしては大げさすぎる動きだと思ったが、近づいてみると、どうやら強制スリーブに陥ったらしい。

ダーはリンと近くに倒れていたレンをエア・グライドに乗せ、敵がこないうちに機を上昇させた。

ルカが「あなたは浮んでなさい」と言った意味が分かった気がする。

つまり、武器を失った自分が出ることといえば怪我を負った仲間の救護ぐらいだ。どこか小馬鹿にされた感じもしつつ、高飛車なルカの仲間思いな一面を見た気もしつつ、ダーはひとまずリンとレンを休ませようとユートピア・タワーへの進路を取った。

一体、二体、三体……いちいち数えてはいない。それだけの暇があれば相手の刃をくぐり抜けて自らの太刀を首に浴びせているし、刻一刻と数が増えていくためきりがないからだ。

首がないか、あるいは上と下が両断されて内部機関を露わにして地に累々とするアンドロイドの残骸の数が。

細長い鉄刀と軍事施設から持ち出したと思しき銃火器を手に戦乱を巻き起こす彼らを残骸せしめたナナシは、いまもなおたった一人で数多の敵と交戦していた。

正面から同じクログアネを持った敵が突撃してくる。ナナシはマガジンに残された最後の一発を放つと、それが弾かれたと同時にハンドガンを放り投げた。いざ敵との決戦距離に入り、ナナシはロングパーカーを宙に広げて目くらましとし、すかさず敵の背後へ回り込む。

完全に無防備となった胴体と首とに素早く斬撃を決め、敵は頭、胴体、足の三ブロックに割かれてその場に倒れ込んだ。

が、ナナシにそれを確認している余裕はない。

かなりの数を討ってきたとはいえ、まるで地面から湧いてくるように倒した傍から次々と新手が襲いかかってくる。

先ほど上空で繰り広げられていたドッグ・ファイトの流れ弾が材木工場に命中、そこから生じた火の手はたちまち周囲に広がってナナシのいる場所はさながら灼熱地獄だった。

しかも定期的に「ドン、ドン」という砲声が遠くから聞こえてくる。ナナシはまだリンたちが上空で戦っているものとはかり思っているが、空は地上の火炎にあぶられて星が見えなくなっている他はいつも通りの静けさに保たれている。

そう、ここ以外の地上にも敵がいるのだ。目の前の敵で精いっぱい  
のナナシは他の仲間を信じるしかないが、しかし、彼女自身徐々

に追い詰められてきている。ハンドガンという中距離武器を失い、あとはクロガネとパーカーを脱ぎ捨て露わになった己の身体のみ。対して、敵は遠中近あらゆる武器を持っている。意識して遠距離武器を持った敵から倒そうとするも、近接武器を持った敵に横から後ろからことごとく阻まれて思うように数を減らせず、斬り合いを演じている間にさえ銃雨という銃雨を浴びせられる。

結果、致命的となる部分こそ命中を避けられど、足の付け根や肩には風穴が開き、銃創切創が全身に走って人間ならとくに失血死してはおかしくはない。

そんな満身創痍の身体は次第に言うことを聞いてくれなくなり、ナナシはどこからか放たれた銃弾をあわや刀の腹で受けて後ずさった。

背中が何かにぶつかる。開けた場所の中心にぽつんと壁が切り立っているわけがない、現に背中に受ける質感は柔らかく、ほんのり温かった。

振り返ってみるに、それはルカの背中だった。

「天下のナナシさんが手こずってらっしゃるのかしら？」

「……おまえもな」

ふっ、とルカは微笑む。

それを横目に見ると、ナナシは何故だか安心した。

「リンたちはどうした？」

「上にいた四機は全て撃墜したわ。彼女たちが三機やってくれたんだけど、そのあとは」

背中越しに、ナナシはルカがかぶりを振っているのが分かった。

「あいつらなら大丈夫だ。私たちは、ここにいるやつらをどうにかしないとね」

「ちゃんと戦う気があるみたいで安心したわ」

「どういう意味だ？」

「だってあなた、出撃前まで死人みたいな顔をしていたから」

二人の足元に自動小銃の弾丸が踊るように弾ける。

二人はすぐさま背中を離して散開し、それぞれ向かってくる敵と対峙した。

「そっちはあなたに任せたわ。面倒だから、死なないでね」

その言葉を放ってルカは宙高く飛翔し、左手の剣を振り下ろす。相手は刀を真横に構えてそれを受け止めたが、ルカは続けて二本目の剣を一本目の近くに振り下ろし、刀を両断。

着地後すかさず二本をクロスさせるように構え、斜め十字を相手の胴体に刻み込んだ。

撃破。彼女は地面を跳ねながら銃火を避け、徐々にナナシとの距離を離していった。

「……おまえもな」

遠のく彼女の背中に先ほどと同じ言葉で答えると、ナナシは振り下ろされた刀を受け止め、上段の構えのまま一気に横へ刃を薙ぐ。

撃破。

こうして何体の敵を倒していけばいいのか。同じ一対多数の戦いを前にもした気がする。

閉ざされた精神のなかで、自分は、何百体もの自分と戦い、この世界へやってきた。

いまの敵も姿は違えど大半がクロガネを持っている。ナナシは既視感を覚えてならないが、しかし、あの戦いるときとは明確な違いを自覚していた。私は、一人じゃない。

「ナナシ、逃げてッ！」

自動小銃を持った敵の首をはね飛ばしたところで、ナナシはルカの大声を聞いた。

振り返るや遠くにバズーカ砲をこちらに構えた敵の姿が目飛び込んできた。

砲口が火を吹いた。かわす時間さえなかった。

ナナシは自分の身体がもぎとられていくような痛みを感じたのを最後に、意識を失った。

遠巻きに声が聞こえてくる。



それに意識をなでられ、ナナシはうすくまぶたを開けた。

「腕が落ちたみたいだな、？姉さん？」

聞き覚えのある声に、ナナシは飛び起きた。

燃え盛る火の手が眼下に広がり、風が頬をなでる。ここはエア・グライドの機上だった。

そして操縦者はちらとこちらを振り返り、にっと得意げに微笑んだ。

「ハク……？」

「ひっさしぶりだなあ！ また逢えるとは思ってなかったよ」

ナナシはしばし呆然と、豪放に笑う彼女の横顔を見つめた。

「それにしてもさあ、本当に腕が落ちたんじゃないの姉さん。敵が四、あれ、五だったかな？ そんぐらいがセントラルの近くまで来てたぜ。ま、あたしが秒殺してやったけどさ」

風になびく一本に束ねられた白髪、右手に持たれた大剣、この世の最強は自分だと言わないばかりの自信に満ちた表情、紛れもなく目の前のいるのは？白豹ウホヒョウのハク？だった。

「どうして、どうしておまえがここに？」

「メンテナンスが終わって、なんかしけた部屋でじーっとしてたんだけどさあ、ダーがやってきて事情を聞いたんだ。したらいても立ってもいられなくなったワケ。金髪の二人組が戦えなくなったらしいから、あたしが加わってちょうどいいだろ？ ちなみにダーはおいてきた」

「リンとレンが戦えなくなった？ 無事なのか？」

「この目で見ただけじゃないから知らねえけど、まあ無事じゃねえの？」

不安げにうつむくナナシに、ハクは言葉を続けた。

「さ、しっかり掴まってるよ姉さん。とっとと済ませて仲間の無事を確かめたいだろ？」

「……ああ、そうだな」

「よし、かつ飛ばすぜえ！」

ハクはアクセル・ペダルを力一杯踏み込む。……が、機体は勢よく急上昇していった。

「おっと間違えたあつ！」

ハクはレバーを左斜め後ろに切って機体を急下降させる。

ダーと入れ替わりに乗り込んだルカの機体がレバーで操縦できる方式なのはハクにとって幸いしたが、運転は操縦者の気性よろしく荒々しい。

「ハ、ハク、もっとちゃんと運転」

「おらああああ！」

ハクは制止を呼びかけるナナシの声などまるで意に介さず、まずは先ほどナナシめがけてバズーカを放ったアンドロイドに向かって地面すれすれに機体を直進させた。

ルカと交戦していたアンドロイドがハクの存在に気付くも時すでに遅く、その身体は胸のしたから真つ二つに巨刃の餌食となった。

ハクは同じ要領で付近のアンドロイドを次々撃破していく。豊かに揺れる二つの球が見えたらそれは死のサイン、次の瞬間に目は首ごと宙を舞っている。

ナナシは激しく動揺する機体に振り落とされないようにするので精いっぱい、「ひゃっほおおお！」と雄叫びを上げるハクの声から戦況を想像する他なかった。

「や、やべえ！」

あれほど愉快げだったハクの声に不安の色がにじみ、ナナシは何事かと面を上げる。

「飛び降りるぞ姉さん！ このままだとぶつかる！」

言われるなりハクに腕を掴まれて、そのまま地面へとダイブ。

十何回か豪快にアスファルトを転がっている傍ら、盛大な爆発が起こった。

調子に乗って超低空飛行を続けていたハクは目の前にそびえたつ工場を回避しきれなくなり、機体が真正面から工場へと突っ込んでいったのである。

その爆発と衝撃は本戦闘において最も熾烈なものだった、敵の攻撃よりも。

頭がぐわんぐわんに酔うなか、ナナシはハクに抱かれた状態で噴き上がる火柱を眺めていた。そこへ背後から足音が近づいてくる。

「……あれ、いくらすると思ってるのかしら？」

皮肉めいた声、ルカだった。

そこまで執着していないにせよ、やはり自分専用の機体を起爆剤に使われたのにはいささか立腹らしい。来訪者が敵アンドロイドでないことに、ナナシは心密か安堵した。

「あ……いたたたた、ん？ どうなった？」

「見ての通りだ」

全身の痛みに顔をしかめながら、ハクは目の前の炎上を見て「あ……」と気の抜けた声を出した。続いてナナシに回っていた両腕をほどき、よろめきつつも立ち上がった。

「あなたが、その、ノーキーが言っていたハク？」

「そうだ。あんたは？」

「ルカよ。ついでに言うと、あなたがいま乗っていたエア・グライドの持ち主」

ハク、しばし硬直。

「ま、大方片付いたし結果オーライだろ」

そしてケラケラと笑いだすハク。

苦手なタイプだわ、とルカは手で顔を覆い、ふと、指の隙間からハクの胸が目に入る。

大きい。笑いによる上下動でそれは豊かに揺れ、つい自分のと見比べてしまう。

いましがた起きあがったナナシはといえば……なんということか、絶壁に等しい。

「……何を見てる？」

「いえ、別に」

何となく彼女が不憫に思え、ルカは途中で拾ったパーカーを彼女

に手渡した。

パーカーに腕を通すナナシの首では星のチャームが小さくゆれている。

先ほどタワーで見た時から気になっていたが、ここでも特に言及することはしなかった。

「終わったわね」

辺りを見渡しながら、ルカはどこか感慨深そうに言った。

そこかしこに横たわるアンドロイドの残骸、アスファルトに刻まれた戦闘の爪跡。

粉雪のように舞う火の粉と、漂う黒煙、熱気、火がはぜる音だけがこだまする静寂。

まさしく終わりを迎えた戦場特有の空気が場を占めていた。だが、それはこの一帯の話。

とりたてて騒ぎという騒ぎも感じられないが、念のため他の場所を見回す必要がある。

それを二人に伝える前に、まずはノーキーと連絡を取ろうと、ルカは腰のポーチに手を伸ばした。と、爆音。大気をゆらす衝撃が辺りにほとばしり、目の前の工場が倒壊した。

そして炎のカーテンから現れたのは

「……戦車？」

ルカが言いもらすのも束の間、その砲口が赤い光を発した。

二人も反射的に飛びのいて直撃は避けられたものの、三人は爆風に吹き飛ばされる。

続いて両脇に自動小銃を抱えたアンドロイドが出現し、それが撃ち鳴らす銃声を合図とばかり近接武器を持ったアンドロイドが三人へと襲いかかっていった。

あわやリヴォルヴを落としかけたハクは力強く柄を握り締め、ルカはゆらり立ち上がり、ナナシはクロガネで風を切って敵を見据える。

戦いはまだ、終わってはいなかった。

ルカが知る限り、出現した戦車の名は『パンツァー・ダスト』  
来たる？再生構想？とクリプトナスのようなブラック襲来に備え  
るべくW・A・Fが開発、製造していた大型装甲戦闘車両で、火砲  
を搭載した旋回砲塔を前部に据え、左右に二つの銃座がついている。  
そこに誰もついていないのを見るとあまり警戒する必要はないだろ  
う、恐ろしいのは主砲と、その援護を受けて突撃してくるアンドロ  
イドだ。

第二波が放たれると同時に三人は左右に展開、着弾時の爆風を追  
い風とばかり勢いをつけて「こんのでかぶつがああああ！」とハク  
は猛進していく。が、二丁の自動小銃を持ったアンドロイドにはば  
まれ、銃雨に怯んでいる隙に一体のアンドロイドが空から降ってき  
た。

「ちっ！」ハクはとっさにリヴォルヴで振り下ろしを受け止める。  
すると敵は水平に構えられたリヴォルヴを支点にハクの後ろへ着地、  
その背中を斬り裂きにかかった。

「うぜえ！」

ハクは地面を蹴って背中ごと相手にぶつかり、振り向きざま巨刃  
一閃、撃破した。

いまにも主砲や自動小銃の弾丸が飛んでくるかもしれない状況を  
理解しておきながら、ハクは真つ二つに両断したアンドロイドをし  
ばし見下ろしていた。

下半身を失ってなお戦う気力があるかのように、その手にはまだ  
執念深そうに武器が握りしめられている。よく見覚えのある赤いト  
マホーク、ウロが使っていたのとそっくりだ。

ハクはおもむろにそれを拾い上げ、「奇遇だな……」とどこか寂  
しげに独りごちた。

直後、野性的直感に突き動かされて即座に飛びのき、するとハク

がいた場所はパンツァー・ダストの主砲によってアンドロイドもろとも爆散した。

ハクは右手にリヴォルヴ、左手にトマホークを持ち、突撃を再開する。

「厄介だな……」

「ほんとね」

一方、ナナシとルカは二体のアンドロイドと交戦していた。

二体とも装備はクログァネ、いままで相手にしてきたアンドロイドと戦闘力に差はない。

だが、後方からの援護射撃が厄介だ。パンツァー・ダストは燃え盛る工場を背に停止したまま。特攻を仕掛けるよりもそちらの方がリスクもなく、また戦闘を有利に進められると理解しているのだろう、あれを動かしているのはもしかして人間ではないかとルカは思った。

ただ、先ほど聞こえていた「ドン、ドン」という遠くの砲声は、どうやらパンツァー・ダストが障害物を取り除くために撃ち鳴らしていたものらしい。すると弾はそう残ってはいないはず。ルカは弾切れの瞬間こそが勝負に出るときだと考えていた。

「……って、あのヒトは突っ込むしか脳がないのかしら？」

雄叫びを上げながら戦車へ突っ込んでいくハクが目に入り、ルカは呆れた声で言った。

が、うかつだった。一瞬途切れた集中力の空隙につけこまれ、ルカは横から飛んできた斬撃を防御した際に剣を弾かれてしまう。相手が横に薙いだ刀をそのまま斜めに持つてきて斬りかかるうとしてくるのスローモーションになって見える。死ぬ？　ここで？

そして袈裟がけに振り下ろされた刀は　しかし、自分を捉えることはなかった。

横から飛び込んできたナナシが寸でのところで刃を受け止めてくれたのだ。

「ルカツ！」



を両断した。

爆発。太陽のプロミネンスのごとき轟然たる爆発。

いまや火の塊と化したパンツァー・ダストを振り返りながら、ルカは言った。

「今度こそ、終わったわね」

しかしナナシは彼女の背後に人影を認める。

「いや……まだだ」

その人影は完全に油断していたルカを殴りつけ、グラットン・ソードを強奪。

彼女を押しつけて立ちほだかったナナシと斬り結んだ。

そこでナナシは炎の照り返しを受ける敵の顔を見て、絶句した。

「？MEI<sup>メイ</sup>KO？……？」

呆気にとられている隙に腹を蹴られ、ナナシは後ずさる。

再び面を上げて見てみるに、目の前に立つアンドロイドは盟友・

MEI<sup>メイ</sup>KOの姿をしていた。

くせのあるショートヘア、凜とした顔立ち。その姿は、完全に、MEI<sup>メイ</sup>KOだった。

違うところがあるとすれば、こちらに敵意、いや殺意を剥きだしにしているということ。

どうやらパンツァー・ダストはこのアンドロイドが動かしていたらしく、爆発寸前のところで車外へ逃げ出したらしい。だが、そんなことはもはやどうでもよかった。

ナナシが思うことは、ただ一つ。

どうしてMEI<sup>メイ</sup>KOは容赦もなく攻撃を仕掛けてきて、自分はそれを受けなければならないのか、戦わなくてはならないのか。

とっくに戦う気は失せていた。自分が死なないためにいちおう攻撃をしのいでいる状態。

だが、それさえも次第におぼつかなくなり、ナナシは顔面に強烈な殴打を浴びて地面を転がっていった。

するとMEI<sup>メイ</sup>KOによく似たアンドロイドは矛先をルカに変え、



斬りかかろうとする。

幸いにもハクがやってきて、リヴォルヴの一振りによって吹き飛ばしてくれた。

彼女は続けて攻撃に出ることはなく、頬を押さえて座り込むナナシに声をかけた。

「どうしたんだよ、姉さん」

ナナシはうつろげな目で足先を見つめたまま、答えない。

「あんたがやらないってんなら、あたしがやるぜ」

彼女が歩き出すのに二、三瞬遅れて、ナナシは言った。

「ハク、上を見る」

「あ……？」

そうして何も無い夜空を仰いでいる隙に……ナナシはハクからリヴォルヴを取った。

野生が失われてきよんとするハク。足元にリヴォルヴが落ちていたので反射的に拾おうとするも、あご先に刃を突きつけられて停止した。

「ひっ……」

「私が『良い』と言うまでそれは拾うな、分かったな」

ハクは彼女の射抜くような瞳に「殺される！」と感じてぶんぶんとうなづいた。

刃が離されると全身の力が抜けたようにへたり込む。

「ここはどこなのどうなってるの死にたい……」と呪詛のようにぶつぶつ唱え出すハクの横を、ナナシはゆっくりと歩いていく。

瓦礫のなかから例のアンドロイドが這いだし、ふと目が合った。

一瞬、ナナシは時間が止まったように感じた。そこで見据えるMEIKOには、いつものような笑顔も、全ての罪と憂鬱を包み込んでくれる優しさもなく、ひたすら殺伐としていて、仇敵を見るような目でにらみつけてくる。ナナシは彼女と戦う決意をした。

それは自分の身を守るために殺すのではない、いつものMEIKOを、取り戻したかった。

「……行くぞ、MEIKO」  
そして二つの刃の閃きが、音もなく交錯した。

\* \* \*

勝負はほんの一瞬だった。

互いに居合いを打ち出した結果、ナナシは無傷、アンドロイドの方は両腕を失った。

これで決着はついたと思った。だが、アンドロイドはなおも攻撃を仕掛けてくる。

スパークする断面を露わにした両腕で、両足で、頭で、ナナシの身体を打ちつけた。

そんな子供の悪あがきのような抵抗を受けるうちに、悲しみが胸にこみあげてくる。

「もういい……もういいんだ……MEIKO……」

それでもMEIKOは残された四肢を振りまわすのを止めない。声が届いていないのだ。

全身に響く痛みなどナナシはとうに感じていなかった。意識は過去にさかのぼっていた。

あの、巨大なブラックと、その下にいるMEIKOにBRSの砲口を向けた、あのときに。

MEIKOの唇が動いている。なんとやっているのだろう、目をこらした。

『早く私を殺してくれ』

本当に、本当にそう言っているのか。

彼女は両腕を失い、あとは巨大なブラックに踏みつぶされるだけの運命にある。

そうか、彼女はその運命から解放されたいのか。

同じ？死？だとしても、彼女はせめて、ブラックにだけは殺されたくない。

だから私にお願いしている。そうか、なら

ナナシはBRSの引き金を、引いた。

「ナナシ……あなた」

ルカの目の前で、ナナシが両手で顔を覆って崩れ落ちている。

彼女の前にあるもの。他と変わらない、頭部を失ったアンドロイドの残骸だ。

だが、ナナシにとっては違っただけだった。特別の存在じゃなかった。ルカはかけるべき言葉が見当たらず、ただ底なしの沈黙に身を浸した。

心なしか嗚咽が聞こえてくる気がする。小さく、ナナシの方から。

t o b e . . . . c o n t i n u e d .

&lt;&lt;Chapter 3&>&> (後書き)

次回 予告

Rock・22 Side-B?ペテン師が笑う頃に?

乞うご期待

Rock・22 Side-B? ペテン師が笑う頃に？

五人の出撃を見送ったあと、朝霧海人はしよぼくれた足取りで管制室へと引き返した。

ナナシを引きとめることも、共に戦う力になってあげることでもできなかった。

またしてもなんとという無力だろう。

海人はポケットから星のチャームがついたシルバー・ネックレスを取り出す。ナナシに渡したのと同じもので、こちらには彼女の名前が裏側に刻まれている。

それを眺めて振り上げた拳の矛先が分からないような歯がゆさに駆られているうち、エレベーターのドアが開いた。

管制室に戻ってくると、あの尖塔ロボットがこちらを振り返った。その申し訳程度になされた飾りのような瞳は「こっちへこい」と言っているふうに見え、近づいていくと、何やらのき爺とデスクオペレーターが熱心に話しこんでいた。

「五人共、無事でやってくれればいいが……」

そこでのき爺は慌てて言い直した。

「いや、送り込んだのはわしか。そう言う筋合いはないな」

「そんなことはありません。彼らの無事と、成功を祈りましょう」

一拍置いて、ユウキ・シタラは話頭を転じた。

「それにしても、今回のアンドロイド暴走は」

「ああ、偶然じゃない。」

W・A・Fの老人たちから聞き出したところによると、Dr・マルチルという人物がアンドロイド暴走の直前に行方を暗ましたらしい。彼はアンドロイドの人工知能の設計、及び管理を担当していた。老人たちはDr・マルチルがアンドロイド暴走を仕組んだものと断定している」

「確かに、話を聞く限りではかなり怪しいですね。行方は分かって

いないんですか？」

「依然としてな。ただ、手掛かりとして、Dr・マルチルは？氷山キヨテル？という男と密接な関係にあつたらしい」

ユウキ・シタラの肩がびくつと反応する。

「氷山キヨテル？ あの、四次元理論の論文で学会を追いだされた？」

「知っているのか？」

「ええ、タワー内では有名です。学界から追放されたきりどこで何をしているかは不明ですが」

「なんでも、老人たちの一人が今夜、氷山キヨテルと会食するらしい。場所は」

「どこですか？」

横から飛んできた声に、のき爺は慌てて振り返った。

「お、おまえさん、エアポートに行つてたんじゃなかったのか？」

「そんなことより教えてください。そのキヨテルつてやつのところ、マルチルがいるかもしれないってことなんですよ？」

のき爺は顔を手で覆つてはつの悪そうに独りごちた。「まづつたな……」

「俺、そいつのとこ行きますよ。ナナシさんたちが戦つてるのに、俺だけ」

「そんなことをして何になる？ マルチルを捕まえたつて、いまさらアンドロイドの暴走は止められない」

「そうですね！ 確かに、そうですね……」

言葉が尻すぼみになっていく海人だったが、やがて消えかけの炎が再燃したかのようにキツと面を上げ、芯のある声で言った。

「俺は刑事だ。犯罪者を捕まえるのが、俺の仕事です」

みなぎる決意の輝きを前にのき爺は大きくため息を吐きながらかぶりを振った。

ルカやダーといい、どうもこういつのには弱い。のき爺は観念した声音で彼に伝えた。

「シーザリオ。分かっているのはそれだけだ」

「充分です。行ってきます」

「一人ですか？」

「署に連絡したって、相手にされないに決まってる。」

それに今日はクリスマス。ゆっくり休ませてあげたいんですよ」

そうして意気揚々と駆けだした海人の前に、Gnos<sup>ゲノス</sup>がたちはだかった。

「あの、一つ聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「このロボットは？」

「ダーとハクを連れてきたロボットだ。あいつらのなかじゃ？ぐるぐるまーくのすごいやつ？と呼ばれているらしい。空間転移、ステルス。現在の科学では実現できていない技術を多数搭載しているから解析したいのだが、本人が頑なに拒んどる」

「くうかんてんいつていうのは、さっきの、僕たちをここへ連れてきた？ワープ？のことですか？」

「そうだ。恐らくはチップ・インの技術を応用しているんだろう。」

おまえさん、もしかしてそれでシーザリオまで運んでもらう気じゃないだろうな？」

海人は「ばれた」というように身体をのけぞらせた。

「分かりやすいやつ……」とのき爺。

「いいか？ もしチップ・インの技術を応用して空間転移しているんだとしたら、それは一旦自らの身体を粒子レベルで分解して、指定した場所で再構成することを意味している。」

すなわち、

「一度成功したから大丈夫ですよ！ 二度あることは、三度あるって言うじゃないですか」

「……これから二度目をやるっていうんだらうが」

呆れかえるのき爺とは裏腹に海人は意気揚々とGnosへと話しかける。

「ここでまたため息を吐くのも芸がないだろうと、のき爺は寸でのところ、口から出かかっていたものを留めた。

「悪いけど、俺に力を貸してくれ。場所は……というか、言葉通じてるのか？」

海人の前に、ディスプレイのついた左腕が差し込まれる。

真っ黒な背景に浮かび上がる蛍光色の文字。

「？座標を指定しろ？……？ お、おまえすごいな！ 人間の言葉が分かるなんて」

「そのぐるぐるさん、どうやらおまえさんに力を貸すつもりみたいだな。しょうがない」

言って、のき爺はユウキ・シタラにシーザリオの地図を呼び出すよう指示した。

「キヨテルは老人たちの一人と会食していると聞いた。シーザリオにはVIP御用達の高級飲食店が立ち並びぶフード・ストリートがある。その路地裏にでも連れて行ってもらえばいいだろう。あとは店を一つ一つしらみつぶしていくしかない」

海人は得意げに笑う。

「そういうのには慣れてます。刑事ですから」

それにつられ、のき爺は微笑した。

「よし、掴まってる。座標コードは……」

そしてG n o s はのき爺に伝えられた座標コードを入力、一人の熱血漢を連れて空間転移を発動した。

\* \* \* \*

気付けば、暗がりのなか。

喧騒が遠巻きに聞こえ、食欲をそそられる肉の匂いと上品な香気とをギトギトの油で煮詰めたような独特な臭いが鼻をついた。

そうか、ここはもうシーザリオ。ワープは無事に成功したのだと思ひ、海人は例のロボットに礼を言おうと振り返ったが、そこには



レンガ壁がたちはだかるのみだった。

ロボットの行方が気になりながらも、彼はひとつ走り通りへ出た。ネオンの洪水に目がくらむ、肩がぶつかって聞いたこともないような言葉で罵られる、見ればその中肉中背の男はチャイナドレス姿の美女を二人も両脇に抱えて歩いていった。

ここが同じ国だとは到底思えない。先ほどのワープで自分はまったくの異世界に飛ばされてきたのではないかと思うほどのカルチャーショックに、海人は往來のど真ん中でしばし途方に暮れた。

シーザリオの巨大歓楽街『ジヨウド・ゴクラク』

二十世紀後半の中華街を模して建設されたこの地区は高級飲食店が軒を連ね、昼は閑散とするシャッター・ストリート、夜は一変アルコールと肉魚の臭気が漂い、にやけ面のたぬきと妖艶な女狐が連れだつて闊歩する怪光放つ不夜城と化す。

大方が欧米や西欧の文化体系を引き継いで構築されたトランジスタにあつて、アジアの、それもその暗黒部分だけを抽出してごっちゃ煮したようなこの歓楽街はまさに異世界。

店のネオンサインが賑々しく踊り、男たちの欲望むき出しの声という声が横溢するなか、海人はびしゃりと頬を叩いて正気を保とうとする。

でなければ、この夜行性動物の口にはつくり呑み込まれそうになるからだ。

ふと『蟹』の巨大ハリボテを正面に飾った店が目にとまり、彼はまずそこから調査を開始することにした。どこのどの場所においても自分は刑事、刑事だ、と言い聞かせながら。

勇んでのれんをくぐっていく海人を、G n o s は向かいの店の屋根から見下ろしていた。

彼に力を貸したのはある種の好奇心からだ。この時代において、人間とアンドロイドは狩る狩られるの関係になく、それどころか協力関係にある。しかもあのK A I T O とよく容姿の似たニンゲンは、どうやらナナシに特別の思いを寄せているらしい。

どこか皮肉めいた運命を感じられずにはいられないが、ニンゲンとアンドロイドの両者が何を生みだしていくのか、Gnosはその結末を見届けるまで助力を惜しまないつもりだった。

彼の豆粒大の双眸そうぼうが往來を一人歩く男の姿を捉える。

長身瘦躯の身体はダークスーツをまとい、黒いヘッドバンドにサングラス、あれは先刻、W・A・Fの軍事施設で見かけたニンゲン

Dr・マルチルではないだろうか。

彼はきよろきよろと落ちつかない様子で辺りを見渡し、十字路を曲がっていった。

ここでGnosは海人に知らせるべきか悩んだが、まずは男がマルチルだという確信を得るのが先だと判断。得意の光学迷彩で風景と同化し、男の尾行を開始した。

壁、床、天井がどれもワインレッドで統一された部屋。中央には回転式円卓があり、一生かかっても庶民が口に出来ない高級食材が所狭しと並んでいる。見る者によってそれらは宝の山のような輝きを放ち、冒険者を誘う魅惑的な香りを漂わせている。

「この……ペキングダックだがね。どう育てるか知っているかい？」

鼻下に白いハネヒゲをたくわえた細面の老人は、フォークに突き刺した一切れの鶏肉をしげしげ眺めながら、向かいに座る青年、氷山キヨテルに言った。

「あひるの口にパイプをくわえさせて、餌を無理やり胃に流し込むんだよ。」

脂肪をつけるため、人間様においしく食べてもらうためにな。

もちろん、いまはそんな残酷な育て方はしていない……はずだが「老人はいやらしくほくそ笑み、テンメンジャンをつけた肉を口に運んだ。」

もぐもぐと咀嚼する口についたソースを、隣に控えていたチャイナドレスの美女がサテンのハンカチで拭き取る。去り際に誘うような視線をキヨテルに送り、侍女よろしく老人の背後に控えた。出入り口脇には二人のボディガード、更にもう二人が後ろの壁に立っている。彼らが付き従う男こそがW・A・Fの一幹部、ダン・ヒューノック。

古龍のたてがみのような銀色の長髪をオールバックにし、切れ長の悪賢そうな目つきで料理と青年とを睥睨するこの老人である。

彼は口に入れたものをごっくんと呑み込むと、キヨテルの隣に座っているミキに声をかけた。

「お嬢ちゃん、もしかして口に合わないかな？　あまり食べていないようだが」

ミキはコップのオレンジジュースに入れたストローをくわえたま

ま、ふいと目をそらす。

その不機嫌な横顔は露骨に「このジジイ嫌い」と言っていた。

「すいません。彼女は普段、こういった豪華な食べ物には口にしないものですから」

「豪華、ねエ……。確かにいまの時代では上流階級でも一握りしか口にできないが」

言葉半ばに料理を見まわす老人。一片一片こんがり焼き目をついたあひるの丸焼きのそぎ切り、スパイシーな匂いを含んだ湯気を立てるマーボー豆腐、もっちりとした揚げゴマ団子に、口腔内をさつぱりとしてくれるワタンスープ、焼き餃子とシューマイもあり、ライチ、グレープフルーツといった果物の盛り合わせと箸のやり場なこと欠かない内容。

しかし、それがさもいつもの晩餐ばんさんといったふうに老人の顔は飽き気味だった。

「高級中華のフルコースにあるべきアワビやフカヒレ、ツバメの巢がないのはいかんともね。いや、贅沢な悩みなのは承知してるんだがね」

言いつつ、老人の箸がエビチリに伸びる。

「せめてこれがあるのが幸いか」あんぐりとあげた口にソースたっぷりのエビを放り込む。

食感を楽しむように口を動かし、すっかり味わうとやがて彼は言った。

「だが……それらの料理も、きみの計画に協力すればいまいちど口に来るのだろう?」

「ええ、理論上は」

「なんでも、思念の具現化……自分の思うことが現実として実現する世界に連れて行ってくれるという話だったか。はは、まったく、まるでおとぎ話だ」

「しかし、僕の計画は」

「ああ、わかっとなるわかっとなる、別に否定の意味で言ったわけじゃ

ない。

わたしもね、病気持ちでね。先はそう長くはないんだ。

なに、老いてからの物狂い。わたしは生まれてこの方行き先が分かりきった線路のうえを歩いてきた。ここらで列車を乗り換えたって、誰にも文句は言わせない。そうだろう？」

かすかに微笑むキヨテル。「あなたの人生ですから」

「そう、わたしの人生。わたしの命。そしてこれは、わたしの女。はははは」

背後にいた侍女を手招きし、仔猫のようになつてくるその首筋をなでながら、老人はしゃがれ声を高らか震わせた。

「クソジジイ……」と小さく毒吐いたミキの声はその笑い声に隠れたようだ。

「しかし、いまごろ他の幹部連中は血相抱えているだろうなあ」

「アンドロイド暴走ですか。あなたはこんなに悠長に構えていて大丈夫なんですか」

「なに、わたし一人いようがいまいが関係ないさ。アンドロイドの鎮圧には兵士が総力を挙げて当たっているし、それにユートピア・タワー側も黙ってはいないだろう。

開戦からすでに数時間、ここまで騒ぎが広がってきていないということは、もうとつくに解決したんじゃないかね」

「今回のアンドロイド暴走にはW・A・F全機関を沈黙させる狙いがあった……僕の、いや、我々の計画成就のために」

言つと、キヨテルは葡萄酒ぶどう酒の入ったグラスを掲げた。

老人もそれに応じ、チン、と二人は杯を交わす。

するとそれが何かの合図とばかりミキの目付きが変わり、半分まで飲んだオレンジジュースのコップをテーブルに置き、ボディガードの注意がこちらに向いてないことを確認してから机の下に手を伸ばした。

「連中もじきわたしの裏切りに勘づくだろう。きみの計画のためにわたしも苦勞してトランジスタ全土の電力源を抑えておいたんだ。

出来るだけ近いうちに実行してもらいたいね。

理想郷にたどり着く前に我が身が滅んだとあつては、元も子もない」  
「ええ、本当に気の毒だと思いますよ」

急にキヨテルの口調が冷たくなり、老人の笑みがぴたりと止んだ。続いてキヨテルが立ち上がると彼の眼差しに宿る疑念はますます強くなり、そして声を発そうとするも間もなく、足元から白煙が噴きあがった。

「な、なんだ、この煙はなんだ!？」

すると更に目の前で白い電光がほとばしった。チップ・インの光だ。

「ペキンダックは否応なくなたらふく餌を食べさせられるんでしたっけ？」

あなた方もたらふく召しあがってください」

キヨテルの声に紛れて「かちゃ」っという不吉な音が聞こえた。

遅かった。たちこめる薄靄のなかに、少女の強烈なピンク髪を認めたと時にはもう。

「ただし、弾丸をね」

撃ち鳴らされるマシンガンの銃声。

その轟音はしばらく間断なく続いて蜂の巣のごとく空間を貫いた。音が止み、天井の吸気口に吸い込まれて白煙が晴れていくと、まるで舞台劇の転換のように血の惨状が露わとなった。ボディガード四人は全滅、チャイナドレスの美女も額と胸に開いた風穴から血を流しながら生気を失った瞳を天井に向けている。豪華な料理には鉄の味がするケチャップがまんべんなくかけられ、食欲がそえられるどころか吐き気を催し、部屋の赤い塗装が丸ごと血だまりに見える錯覚に陥っている自分がいることが、老人には不思議でならなかった。

「生きてる……?」

両掌を見つめて呆気に取られる老人に、キヨテルはデザートイーグルの銃口を向けた。

その四十一口径の暗闇に気付くやいなや、老人は慄然とした。

「な、なんの真似だ！？ 銃を下ろせ！」

「あなたはReaper<sup>リーパー</sup>推進派の一人だった……。もうろくして、忘れていたりはしませんよね」

何かに勘付いたように老人の目が見開かれる。

「まさか、復讐か……？」

キヨテルは首をめぐらしたのち、答えた。

「俗な言い方をすれば、ね」

「そんなことをして何になる？ それにここまでの騒ぎだ、店の連中が気づくぞ。」

わたしが殺されたとなれば、W・A・Fだって」

「人は金で買える。口も金でふさげる。このお店も、人間が経営しているのですね。」

それにW・A・Fだって今回の一件で相当力を削がれていると思いますよ。」

残念、あなたが期待しているようにはならないわけだ」

キヨテルは薄汚い笑みを浮かべる。

つい先ほど彼と同じ表情をしていた老人は額に玉のような汗を浮かべ、瞳はゆらぎ、向けられた銃口によってもたらされた恐怖に身体が震えてやまない。

さながら死刑執行直前の囚人の姿だった。

「僕の？カタストロフ計画？で人類は一つになる。そこであなた方のような性根の腐り切った人間と一緒にはないんですよ。だから、つまり、……ここで死んでください」

絶叫を掻き消す銃声。ことり、と死に際に抵抗しようとした老人の力が力なく倒れる。

壁も床も天井も赤、円卓も椅子も赤、そして脳漿<sup>のうじょう</sup>もろとも吹き飛んだ老人の頭から流れている血も赤。赤、赤、赤。

キヨテルはいい加減目がちかちかしてならなかった。

とんとん、と扉をノックする音がし、キヨテルは緩めていた警戒

心を再度めぐらした。

しかしゆっくりと開かれる木製のドアから出てきたのは、キヨテルのよく知る顔だった。

「あなたですか……Dr.マルチル」

キヨテルは扉に向けていた銃口を下ろした。

女すらも糸の切れた傀儡人形となつてゐる凄惨な光景に、マルチルは胃から催すような仕草をして、鼻をつまみながら出入り口付近に折り重なる二つの死体を超えていった。

キヨテルの前にやってくると、彼はこれが現実なのだということ確かめるようにいまいちど部屋を見まわし、かぶりを振りながら言った。

「何もここで殺すことはなかったんじゃないのか」

「地下発電所のメインプラントは、ダンの私兵団が警備と管理に当たっている。」

そこで彼と協力関係にある僕らは自由に出入りできる。実質、もうトランジスタ全土の電力源は手中に収めたようなものです」

「しかし……」口元を手で押さえて居心地の悪そうにする彼の目に、床に両膝両手をつけて嗚咽をかみ殺しているミキの姿が入った。近くに落ちてゐる小型マシンガン、返り血にまみれた淡いピンク色のツィードパーカー、小刻みに震える肩。キヨテルに殺人を強要されただろうことが一目で推察できた。

マルチルは彼女の肩にそつと手を置こうとしたが、キヨテルの声にその手は留まる。

「メインプラントへ急ぎましょう。彼の死が私兵団に伝わってはやつかしいですからね」

そして廊下を出ていったキヨテルは突然たちはだかつた壁に言葉を失った。

誰かがいたずらで置いた鎧？ ロボット？ 様々な憶測が脳裏を飛びかい、「なんだこれは……」という嘆息めいた声が思わずこぼ



れた。背筋をピンと張れば悠に天井など突き破っているだろうその先端が鋭い玉子型の顔がぴくりと動き、キヨテルはとっさに銃を構える。

「が、続いて新たなちんこめっしや闖入者。「そこにいるのか？ マルチル！」

青髪碧眼の青年が廊下の突きあたりから真正面に走って来て、キヨテルはGnosの脇をすり抜け逃亡を図った。相手の正体は分からないが、銃を手に持っているのが目撃されたらうし、もしかしたら相手はコートピア・タワー関係者か、あるいは刑事かもしれない。

何にせよここで捕まることだけは避けたかった。

「うおおおっと！」

海人はGnosの手前で急停止し、すぐに身体をひるがえして部屋を覗いた。

その凄惨たる有様を一目見るやうめき声をもらすのを禁じえなかった。

血の生々しい臭気が鼻先をつき、意識がぐらっとゆらぐ。片頬をぴしゃりと叩いて正気を保ち、彼はじりじりと後退していく男を一点に見つめて壁際へと追いつめていった。

「マルチルだな！？ おとなしくしろ、俺はけいさ……あ、あれ？」

コートの内ポケットから手帳を取り出そうとするも、左右どちらのポケットにも入っておらず、代わりに一枚のチップに指が触れる。取り出してみるに、それは手錠の入ったチップだった。いついかなるときでも犯罪者を逮捕出来るように常備していたのだ。実際、手錠をかけるには逮捕状が必要なのだが、いまの彼にそんな書面上の決まりごとなど関係ない。

「とにかく、おまえを逮捕する！」

海人は一足飛びに男へと近づき、片腕をひねって背中を向かせると、もう片方の腕も取って手錠をかけた。青年の背後に得体の知らないロボットが控えていることもあったのか、男は特に抵抗しなかった。

男を押して半ば強引に壁際に座らせると、海人はいまいちど部屋を見まわした。

前にエインセルの一件で死体を見たときは周囲が薄暗かったからまだよかったものの、今回は天井の白熱灯にそれがありありと浮き彫りにされている。死後間もない死体は限りなく人間に近い人形に見え、それがなおさら不気味でたまらなかった。

海人は『顔をそらせ』という本能的な脳の命令をはねのけ、毅然とした声で言った。

「これはおまえがやったのか？」

しばらくしてから、マルチルは力なく首を振った。

「いや……」続いてその顔は、依然床に崩れ落ちたままの少女に向けられた。

海人は少女とマルチルを交互にみやり、やがて少女の下へ歩み寄った。

震える肩に手を回してやろうとすると、「……たし……じゃない……」少女が何かを言っている。そしてその声は徐々に大きくなり、やがて炸裂した。

「わたしじゃない！ わたしがやったんじゃないの！」

「お、落ちついて！」海人は暴れる少女を抱きしめて、背中を優しくさすってやった。

その間に腹や胸に拳を受けたが、少女の叫びにこもる悲痛さに比べればどうということはない。

「とにかく、早くこの場所から出よう」

海人は少女の身体を抱え上げ、廊下へと連れだした。Gnosはいなくなっていた。

先ほどの男と併せて気がかりではあったが、まず先にすべきことがある。

海人は扉を閉め、泣きじゃくる少女を出入り口脇に下ろしてやると、携帯端末を取り出した。

連絡先はエインセル署。そこからシーザリオ署に応援を要請して

もらうつもりだ。

「すぐに新しいお巡りさんが来るからね。安心して」

携帯端末をコートの内ポケットに戻しつつ、彼は少女に言った。

髪や頬、衣服についた返り血、少女の涙の理由……下手人が誰か訊いたとき、マルチルはこの少女を見た。まさか。こんなリンちゃんと同じぐらいの子が人殺しなんてありえない。

海人は自分にそう言い聞かせながら、少女をまた優しく抱きしめてやった。

「一つだけ、訊いてもいいかな。あのスーツを着た男って、もしかして冰山キヨテル？」

少女は答えなかった。とめどなくあふれる涙を両手で押さえるだけで精いっぱいだった。

「……ごめん。変なこと訊いちゃったかな。」

ただ、さっき逃げ出した男がマルチルと関係あるのなら、こうしてばかりいられない」

少女の背中に回していた両腕を離し、海人は決然と立ち上がった。

「もう行っちゃおうの？」

「ごめんね。すぐにおまわりさんが来てくれるから」

目のふちにいっぱい涙がたたえられているのを見ると胸が痛んだが、しかし、ここでマルチルの共犯者と思しき人物を逃すわけにもいかない。

先ほどキヨテルが逃げていったほうへと駆けていく青年の背を目で追いながら、ミキは力なく壁に寄り掛かった。天井をぼんやり見上げる顔は精根尽き果てている。

あの青年は自分に優しくかった。少なくとも、人殺しをさせておいて慰めの一つかけてくれないキヨテルに比べたら、よっぽど。

でも、そんな彼も行ってしまった。自分を置いて、行ってしまった。

ミキは震える身体を必死に抱きしめる。でないと、寂しさに凍え死にそうだった。

t  
o  
c  
h  
a  
p  
t  
e  
r  
3

キヨテルは薄く開いていた赤い扉を肩で突き飛ばした。

扉からすぐの踊り場で一服していた女性店員を押しつけ、鉄格子で出来た非常階段を駆け下りていく。食い逃げ犯よろしくの必死な走りだが、それもあながち間違いではない。

キヨテルは地上に着くとそのまま振り返ることなく狭い路地道へと入っていった。

そこは表通りの絢爛さの反動とばかり真つ暗で、油臭く、キヨテルはほとんどアスファルトというよりはごみとゴキブリの死骸を踏みながら走った。

一本道の終わりに差ししかかろうというとき、キヨテルの前に突如壁がそびえ立つ。

ビルの隙間からこぼれる光に照らされるその姿は、先ほどの店でも自らの前に立ちはだかったあのロボットであった。

キヨテルはとっさに扉の縁に手をかけ、ロボットに足を掴まれる寸でのところで扉を飛び越えた。するとやや開けた場所に降り立ち、三方に分かれる道の一つへと逃げ込んでいく。

獲物をとらえきれなかった自らの掌を見つめるロボット G n o s は、しかし、その巨体を動かすにはここはいささか窮屈すぎる。空間転移で先回りしようにも、座標を入力している間に相手が逃げるので、どうしても後を追う格好になってしまう。更に雑居ビルがひしめきあい、道が複雑に入り組んでいる場所では相手がどこに逃げるかなど予測しようがない。

そうしてしばし立ち往生していると、向こうから海人がやってきた。

「あいつ、どこ行った!？」

息を切らしながら怒鳴る海人に手振りで教えてやると、彼はすぐさま扉をよじ登った。

G n o s も行動に出る。下で空間転移が使えないのなら、建物の屋根を回って行って獲物の姿を見つけるのが得策だと考え、適当に目についた雑居ビルの屋上へと空間転移した。

見下ろしてみるに、先ほどキヨテルが通った場所に海人がいる。三つに分かれる道のうちどれが正解なのか足踏みするように辺りをきよるきよる見回しながら、声を張り上げた。

「どこにいる！ 出てこい！」

当然のように返事はなく、海人は表通り方面の道へと駆けていった。

その動きをカバーするように、G n o s は先ほどの店がある方へと空間転移を発動。

彼もG n o s も知る由はないが、キヨテルは彼らの行かなかったもう一つの道へ逃げていた。

遠くで自分を呼ぶような大きな響きを耳に感じたが、いまのところ追っ手はきていない。

キヨテルはスピードを緩め、煉瓦壁に手をつけて歩きながら呼吸を整えた。発電所のメインプラントがあるのはセントラル。自分の車を使うには先ほどの店に戻る必要がある、トレインを使うには表通りを経由する必要がある。リスクは後者の方が少ないが、警察がすでに警戒線を張り巡らしているかもしれない。時間が経てば経つほどその範囲は街から国中へ広がり、蟻の子一匹動ける隙もなくなる。大胆に行動できるのはむしろいましかない。

キヨテルはそう判断するや駆け出し、角を二、三度曲がって表通りへと出た。

右へ振り向いたときに柄の悪い中肉中背のはげ男とぶつかり、因縁をつけられそうになったが、キヨテルの手に銃が握られているのを見るとその表情が一変した。

「な、なんだおまえ……銃だ、こいつ銃を持つてるぞ！」

周囲の人間が足を止めてキヨテルに注目する。小さな悲鳴やひそめき合いが生まれるなか、キヨテルは寄ってたかる視線を振り払う

ように走り出した。

「余計なことを……」と思わず苛立ちが口に出る。

あの男、こんな場所でないなら撃ち殺してやるどころだ。

「見つけたぞお！」

喧騒を切り裂く怒号。あの青髪の男が猪のように人混みを押し分けて迫ってくる。

往来の真ん中でちんたらやっていたからだ、あのはげ男、本当に撃ち殺してやりたい。

湧きあがる殺意を加速力に変えてキヨテルは逃走、が、十字路を横断する観光客の一団に行く手を阻まれて急停止。キヨテルは即座に銃で脅しをかけるも、酔っ払い相手のため「よく出来たおもちゃだなあ」と格好の笑い物にされた。背後には青髪が迫っている。

キヨテルは天空に向かつて発砲した。銃声がまるで神の一声であったかのように喧騒はぴたりと止み、酔っ払いたちは現実に引き戻されたかのような顔で唾然としていた。

「酔いは醒めたか？そこをどけ！」

ざざつと開いた道を駆け出すキヨテル。もはや体裁など気にしているときではなかった。

彼のあとを海人が続く。

「警察だ、警察！」

「あのにーちゃん人でも殺したのかーあ？」

「かもしれない！だから追ってる！」

「がーんばれよーい」田舎臭い間延びした声と声援を背に受けながら、海人は風を切る。

見据える物はひたすら黒スーツの男ただ一点。人という障害物が降ってくるのを右に左にかわしながら、ときおりぶつかって大きくよろめきながらも、彼の視線はゆるがない。

男も振り返ることなくひたすら走っている。逃がすか、絶対に逃がすものか！

「警察だ！そこのおまえ、止まれ！いますぐに止まれえ！」

メーターの針が振り切れたポンプのように全速力で動く心臓、向かい風と共に鼻に入り込んでくる街の臭い、自らの荒い呼吸音、新星爆発のごとく煌めき踊るネオンサインの連続、五感に触れる全てが高速で吹き飛び、海人はもつれそうになる足をしゃかりきに動かした。

それはキヨテルも同じ。ただ、日々の大半がデスクワークである彼は目に見えて速度が落ちてきている。体力勝負では圧倒的に海人に分があつた。それでも計画成就への執念がますますの休息を訴える身体に鞭を打ち、彼はほとんど酸欠状態になりながらも走るのだつた。

そんなさながらカーレースを演じる二人が背後を突っ切り、ある男が静かに振り返つた。

その？深紅の瞳？は人混みの隙間から海人の後頭部をしつかり捉えている。男は前髪をつまんで青年と自分が同じ髪色なのを確かめ、ふーんとうなるように唇を尖がらせた。

「はいよ、肉まん一つ」

割烹着姿の店主が肉まんの入った包みを窓越しに手渡してきた。

ニンゲンの生活を満喫しよう、そう思い立ってたまたま通りがかった車をジャックし、運転手に腹ごしらえの出来るところへ、と伝えたらここまで連れてこられた。何でもこの時間まで営業している飲食店がある街はこじかかないらしい。小一時間もむさくるしい中年男と狭い車内に閉じ込められて苛立ちもピークだった。まあ、それも男を殴り殺してやったら少しは晴れたが。その際についた返り血は服に染み込んで漆黒の一部と化した。どういう原理かははなはだ不思議だが、このロングコートはまるで生き物のように血を吸収するのだ。

「お客さん、勘定！ 一つ二百ヴォルタだよ」

肉まんを受け取ってそのまま立ち去ろうとしたところ、呼びとめられた。

金なら男から奪つた分があるが、この店主の顔、どこか猿に似て



いて気に入らない。

人間さまがそれになり損ねた下等生物に金を支払う義務があるのか？ いや、ない。

？ K A I T O <sup>カイト</sup>？ はきっぱりとそう決めつけ、

「これでも食らうとけ」

と店主の顔面を容赦なく殴りつけた。

あとは適当に歩き出しながら、何食わぬ顔で肉まんを一口。

まったく味がしない。アンドロイドになったからか味覚がなくなっているようだ。

それにきれいな女が脇を通り過ぎててもまったくその気にならない。彼は不満をぶちまけるように肉まんを路傍に投げ捨て、ポケットに手を入れた先でチップの感触を確かめた。

これに触れると安心する。そして早く使いたくてむずむずする。

彼は抑えられない笑みを口元に浮かべながら、人混みへと紛れて行った。

\* \* \*

喉から血の味がこみ上げてくる。肺と心臓が悲鳴を上げて意識がおぼつかない。

キヨテルは路地裏に逃げ込み、壁に手をつきながら這いずるように前へ前へ進んだ。

そこへ立ちふさがる巨大な尖塔。キヨテルは「チエックメイト」を宣言されたような思いになった、あのロボットがまたしても行く手をはばむのだ。

「追いついたぞー！」

背後には青髪。場所は雑居ビルの中に伸びる一本の通路、完全に八方ふさがりだ。

「逃げ場はもうどこにもない。観念するんだな」

海人はわき腹を押さえて息をつかせながら、それでも毅然とした

声で言い放った。

キヨテルは震える腕で銃を構えた。

「そんなもので脅したって無駄だ」

「言っておくが、僕はためらわない」

しばし、間。両者の小刻みな息遣いが張りつめた静寂に響く。

「おまえは一体何者なんだ？ 何をしようとしている？」

「死人に教える必要はない」

言っや、キヨテルはトリガーにかけた指に力を込めた。

そこで背後からやたらに重量感のある腕が伸びてきた、あの口ボツトの腕だ。

「邪魔ばかり……っ！」

キヨテルはとっさに振り返って二回立て続けに発砲した。

すかさず彼の懐に海人が飛び込む。「やめろ！」

衝突した際に銃が地面を転がり、キヨテルは海人を突き飛ばすとその顔面に思いつきり拳を浴びせた。鉄板を殴りつけたような痛み  
に腕がしびれる、人生で初めて人を殴った。

こんな乱暴ごとは普段なら他の人間にさせるのだが、この危機は  
自分一人で打破しなくてはならない。キヨテルは短く息を切つて改  
めて覚悟を決めた。

が、直後、彼は異変に気づいた。面を上げた男の両目が、左右で  
違う色をしている。

周りが暗いのでいまいち判然としないが、いや、確かに、その左  
目が黒艶を放っている。

「おまえ、まさか……<sup>リバー</sup> Reaper？」

愕然としたふうに言われ、海人は即座に目を触って確かめた。

左目のコンタクトが外れている。殴られた拍子に落としてしまっ  
たのだらう。

海人は再び顔を上げると、険のある声で言った。

「だったらなんだ。おまえも差別主義者か？」<sup>レイシスト</sup>

「いや……」言いながら、右目に手をあてがうキヨテル。

そしてコンタクトを外し、その？黒い瞳？を向こうから注がれる常夜灯の光に輝かせる。

海人ははっと息を呑んだ。

「一つ、聞きたい。おまえはいままで言われもない差別や暴力に苦しめられてきたはずだ。」

そうした人間たちを、おまえは恨んでいないのか？」

海人は自分の置かれた状況が信じられないといったふうにかぶりを振ってから、答えた。

「恨んださ。俺をいじめるやつらを頭のなかで何度も殺した。そして大きくなったら、一人一人本当に殺してやるって決めてた。でも……そんなことをしたって何にもならないってことを、ある奴に教えられたんだ。同じReaperの仲間に」

「そいつはいま、どうしている？」

「もういない。俺をいじめる奴らからかばったときの傷が原因で、死んだ」

「そこまでされて……どうして」キヨテルの唇が静かにわななき始めた。

「どうして、おまえは復讐しようと思わないんだ？ 友達を殺されたんだらう？」

「言つたろ。教えられたんだよ。復讐は復讐しか生まないって」

逆光のなかにあつても分かる、その左目の黒い瞳に堅牢な意思が宿っていることに。

キヨテルは自分の全てが真つ向から否定された気になった。目の前のこの男は、自分と似たような体験を経ておきながら刑事になった。片や自分は復讐に燃え、この手をすでに血で染めている。もう光とは無縁の、ただただ暗い闇のなかに堕ち込んでしまった。

「馬鹿げてる……」

この違いは何だ？ どうして僕は光のほうへ行けなかった？

「馬鹿げてるぞ！」

キヨテルは我を忘れて海人に殴りかかった。

大振りの一撃をかわし、海人はそのまま懐に飛び込んでキヨテルを押し倒した。

警察官という立場上、無闇に手を上げられないので先ほどは一撃食らってしまったが、そうされた以上は存分に力を発揮できる。それにこの男に対しては特別の感情があった。

馬乗りになった海人は暴れるキヨテルの胸倉を両手でしつかりと掴み上げ、その顔面に言葉を浴びせた。

「馬鹿げてるのはそっちだ！ おまえが何をしようとしているか知らないけどな、誰かを傷つけるって言うんなら俺はそれを止める」「悔しくないのか、悲しくないのか！ 同じ人間なのに、瞳の色が違うたったそれだけで化け物のように扱われてきた。僕はこの不合理的な世界を許せない。おまえだってそうなんじゃないのか！？ いまだって、本当は！」

「いいや」海人はぴしゃりと断言した。

「世界はめちやくちやで壊れてるかもしれないけど、人はそうじゃない。」

誰になんと言われようと、俺はそう思ってる」

キヨテルはきつく奥歯を噛みしめる、顎が砕けんばかりの力で。

次の拳の一振りで目の前の男と、自分をこうまで墮落させた世界を貫いてやりたかった。

しかし想いもむなしく、抵抗しようとしたところ彼は後頭部をしただたか地面に打ちつけられ、意識が混濁した。ふと右手が何かに触れる。この感触、インストール・チップだろうか。思えばズボンのポケットに空のチップを一枚忍ばせていた覚えがある。押し倒された拍子にポケットから出てきたらしい。

キヨテルの脳裏にとある考えが過ぎる。

そう。チップは理論上、物質で構成されたものならば何でも分解し、四次元に転送することが出来る。たとえ？人間？であつてもだ。もちろん、これはチップ・イン法の第一条により禁止されている。そして人間を『アンインストール』した事例は一度もない。



声の持ち主を一瞥、彼は青ざめた。

「た、確かに消したはずだ！ 僕の目の前で、いま、ここで！」  
彼は大いに取り乱し、辺りを見回して銃を見つけるとそれを拾いに行こうとした。

「が、男が立ちほはだかる。どうしてだ、なぜ、なぜこの世界は僕の邪魔ばかりする!？」

キヨテルは銃を踏みつける男の足をどうにかしようと四つん這いになってうるたえ、するとやがて、頭上から声が降ってきた。一瞬にして相手の心を凍てつかせるような声だった。

「そのシヨ、俺も混ぜてくれよ。ちょうど退屈してたところだよ」  
男はにやりと笑みを浮かべた。キヨテルは慄然とする。さっきの男とは別人であることが分かった、というより、その身体を借りて？ 悪魔？ がやってきたのだと直覚した。

彼は総毛立つ思いで、悪魔の機嫌を損ねないようぎこちなく微笑むほかなかった。

こうして、ナナシたちと海人、キヨテルの、それぞれの夜が更けていった……。

t o b e . . . . c o n t i n u e d .

&l t ;&l t ;C h a p t e r 3 &g t ;&g t ; ; (後書き)

次回 予告

R o c k ・ 2 3 ? 暗転、断線?

乞うご期待

## Rock・23？暗転、断線？

白熱灯が明滅を繰り返す薄暗い地下通路。

白と黒とその中間色しかないさびれた場所に、二人の足音が反響していた。

「おもしろいショーってのは……まさかこんなしけた場所でやるってのか？」

K A I T O は一向に変わる気配のない、コンクリートの壁に太いダクトが延々と続く光景にはほとほとうんざりといったふうに言った。

「ここは言うならば舞台裏ですよ。周到的な準備がなければショーは成功しない」

キヨテルは肩越しに答えた。

先刻ダン・ヒューノックを銃殺したときの返り血が肩口や袖に数滴染み込んでいる。

「舞台裏、ねエ……」

「そうです。ここはグラジオラスを除く各都市にある発電所の中核……いわば心臓部です。

このすぐ下には海底火山帯がありましてね、そこから噴出される天然ガスを燃料に発電を」

「あー、そういう細かいことはいい。つまりどういうことだ？」

「他の発電所はここから送られる電力を増幅しているに過ぎないんです。

つまり、ここが電力の源。

ここを押さえてしまえばトランジスタ全土の電力を掌握したも同然なんです」

「おい、おまえの耳は俺の声を受け付けないように出来てるのか？ そういうまどろっこしいことはいい。結論を言え、結論を」

「これはすみません。僕はどうもじれったくていけない」キヨテル



は自嘲気味に笑った。

「いままでの世界は終わり、新たな世界が幕を開ける」

「は？」

あまりに唐突な物言いにK A I T Oは思わず立ちどまった。

「急に何を言い始める？」

「あなたの言ったようにしたんです。結論を言えとね」

「なるほど、分かった。おまえはイカれてるんだな」

「あなたほどには」という言葉が出かかったのを、キヨテルは寸でのところで呑み込む。

「チップ・インという技術はご存知ですよ。あなたがさつき、警官を斬り捨ててパトカーを強奪するとき、刀を呼び出したあの技術ですよ」

「ああ。あれはそういう名前だったんだな」

K A I T Oは何かを思い出すように天井へ目をやった。

「四次元に転送した物資を取り出すことを『インストール』といいます。その逆を『アンインストール』、つまり物資を分子レベルにまで分解して四次元へ転送することですね。デバイスには前者、チップには後者の機能がついているのですが、我々はこの機能に特化した機械を作り、各都市の発電所に設置したのです。もちろん、秘密裏にね」

得意げに言つて、キヨテルは背の低い鋼鉄扉のドアノブに鍵を差し込んだ。

扉の上部には『電力室』とプレートが付けられてある。

「どうぞ」扉を開け、キヨテルはなかへ入るよう手でうながした。

「あんだあ……？ 真っ暗じゃねえか」

キヨテルはポケットから小型の懐中電灯を取り出し、道を照らした。

K A I T Oはいぶかしげな表情で猫の扉口のようなところをくぐり、なかで立ち上がると扉が閉め切られた。懐中電灯の光の先では大型の機械がひしめきあい、コンプレッサーが「ブウウン……」と

いう低音を響かせている。

「気をつけてくださいね。ここには何万ワットという電流が流れていますから」

「いや」すぐに彼は言い直した。

「気をつけるのは僕の方が。あなたはアンドロイドでしたね」

「わりあい気にしてるんだ。馬鹿にするつもりで言ってるんなら、殺すぞ」

キヨテルはつい皮肉を言ってしまう自分の性格をこのときばかりは恨んだ。

この男は自販機でジュースを買うように人を殺せる。それはパトロールをしていた警官二人の首をはね飛ばしたときの様子で重々理解できた。おかげで楽にセントラルの地下にあるこの発電所まで来られたのだが、この気まぐれな怪物がいつ牙を剥きだすかと内心生きた心地がしない。だが、同時に、キヨテルは彼との出逢いを？幸運？だとも感じていた。

ここに来るまでにK A I T Oは自分のことをぺらぺらと聞きもしないのに話してくれた。元はロビン・ケンウッドという人間であったこと、ある罪で死刑になったが黒い化け物としてよみがえったこと、未来世界においてK A I T Oというアンドロイドの身体を乗っ取ったこと、今朝方に小さな騒ぎとなった？臓物捨て置き事件？の犯人が自分であることなど。

どれも絵空事にしか思えない内容だったが、リンやナシという名前が出てきたことでその認識は改められることになった。そしてキヨテルが最も興味を引かれたのが、K A I T Oが『エンドレス・エンド』というB R Sに匹敵する超高出力粒子砲を持っていることだった。もし彼を味方に いや、利用するといったほうが正しい

することが出来れば、計画成就是それこそ確かなものになる。

スーパードクターの子供たちは従順だが、力に欠ける。そこで彼のような存在がいれば、どんな障害も蚊ほども気にならなくなるだろう。

キヨテルは暗闇のなか額に玉のような汗を浮かべながら、さも客人を相手にするように道案内を始める。目的の場所まではたかだか十歩あるかないか程度なのだが。

「こちらになります」

キヨテルは自分の背丈ほどはある四角い鉄箱のような機械の前で立ちどまった。

それと同じ形の機械が複数壁一面に並び、懐中電灯が上下左右に繰り返し当てられる。

K A I T O はやがて拍子抜けな声で言った。

「おい……このでっかい洗濯機みたいなので何をしようっていうんだって？」

「世界を終わらせるんです」

「冗談も休み休み言えよ。もっとこう、SF映画に出てくるようなマシーンを想像してたぜ」

「それは残念でしたね。個人の力ではこのサイズで精いっぱいなんです。

だから複数個仕掛ける必要があった」

「よりもよって発電所にか？」

「一つの発電所につき十基。計五十基もの機械を作動させるためにはトランジスタ中の電力が必要になります。作動時にはごく一部を除いて島中が停電に陥るでしょうね」

ふん、とK A I T O は鼻で笑う。「正直しらけたぜ。まさかこんな、しよばい装置だとはな」

「シヨ一の舞台裏とはこんなものです。しかし、大事なものは観客に見えるところだ。

そこが輝かしくさえあればいい……違いますか？」

K A I T O はまた嘲笑って、来た道を引き返し始めた。

すかさず彼が歩いていく方向にキヨテルが懐中電灯を向ける。

「おまえがしようとしていることは何となく分かった。

この島を丸ごと『アンインストール』するって肚はらだろ？」

「ええ、まあ」

淡々と答えて、キヨテルは鋼鉄扉を開けた。白熱灯の光に一瞬目が眩む。

「おまえはなんだ。人類に対して恨みでもあるのか」

「厳密には違います。僕はね、絶望しているんです。争いと差別が絶えないこの世界に。」

それを根本から解決するためには、人類はまず？身体？という境界線を取り払う必要がある。そして思念統合体として一つの生き物になるんです。四次元の世界においてね」

「あ……よく分からんが、それをすることで俺に何かメリットはあるのか？」

「ありますよ。身体のない思念だけの世界において、物事を決めるのは物理法則じゃない。人間の心です。つまり、あなたが思った通りのことが実現するんです。」

そのアンドロイドの身体だって……」

キヨテルは言葉半ばにぐいっと歩み寄る。

「元の、ロビン・ケンウッドだったときの身体に戻れるということですよ」

きつぱりと断言され、するとK A I T Oは、唸り声を上げて辺りを歩き始めた。

「どうしたんですか？」

「考えてるんだよ。おまえをここで殺すか、殺さないか」

キヨテルは思う。この男の思考には常にその二択しかないのか、と。

「まあ……でも当分は退屈しのぎが出来そうだしな」

答えが出たのか、K A I T Oは顔を上げてキヨテルを見据えた。

「おまえを殺すのはショーのあとでも出来る。それまでは、生かしておいてやるよ」

さも慣用句のように「殺す」と言われたことに冷や汗を流しながらも、キヨテルは差し込まれた手を固く握った。同盟成立。この世

界の闇と闇が手を組んだ瞬間だった。

\* \* \* \*

東の空がかすかに白み始めて、空はまるで白熱灯を灰色の毛布でくるんだようになった。

未来世界の空に似ている、とダーは思った。この雷を孕んでいそうな殺伐とした感じが。

彼はほとんど無傷で帰還したためメンテナンスをする必要はないと実質追い出され、こうして当てもなくタワーの外へ出て空を仰いでいる。ふと、視界の隅に何かがちらついた。

向こうで人が倒れている。派手なピンク色の髪をしたリンと同じ背丈ぐらいの少女。

誰もいない広場にそれはまるで落し物のようにぽつんとあった。

ダーはおずおずと近づいていき、青のモザイクタイルの地面に持っていた野球のボールを優しく転がした。それはちよこんと少女の肩をつついたが、反応はない。

「おい、大丈夫か……？」

うつ伏せになっていた少女の身体を起こし、その後何度か呼びかけてみたがまぶたが開く気配はなかった。彼が人間だったら脈を測るなり口に耳を寄せるなりするだろうが、そういった発想もなく、かといっていまのき爺の下へ連れていこうにも煙たがられるだろう。ダーはしばらく少女の周りを歩き回って思索したが、結局、のき爺のところへ連れていくことにした。

同日昼。メンテナンスを終えたリンとレン、ダーはそろってのき爺の研究室にいた。

部屋には書類と小物類が散乱している机、書棚、カウチしかなく、元は倉庫として使われていた小部屋であるためか全体的に無機質でまるで独房のようだった。その狭さに歩き回れる隙はなく、三人は出入り口付近で退屈そうに身じろぎしながら少女が目覚めるのを待っていた。

「レン……あの子ってさ」

リンが口を開くも、訊ねた相手は顔をしかめたままカウチのほうを凝視している。

話しかけるな、という雰囲気だ。リンは言葉を呑み込み、遠巻きに少女を見た。

天井に顔を向けたまま昏昏と眠り続けている。寝息は静かではほとんど聞こえなかった。

ダー曰く「タワーの前で倒れていた」ということだが、なぜなのか。家で眠っていたのを誰かが運んだわけでなければ、彼女がその足でやってきたということになる。

その意図がまったく掴めない。部屋にはびりびりと張りつめた空気が。復興式典のあとにナナシとルカと過ごしたときといい、どうしてのき爺の仕事場に誰かといるときはこつも気疲れすることになるのかと、リンは他の二人に悟られないよう小さくため息を吐いた。

「おう。様子はどうだ？」

のき爺がやってきた。昨晚から作業続きで眠っていないのだろう、顔には疲労がたまり、声は使い古されたレコードのようにくぐもっている。それでも彼は努めて疲れを見せないよう振舞っているといふふうに、きびきびとレンたちの間を通って少女の下へ向かった。

「ふむ……」

のき爺はいまにも閉じかけている目で少女の顔を見眺めて、次にリンとレンを見た。

「おまえたちはこの子の知り合いか？」

「うんまあ、友達ってわけじゃないけど……」自信なさげに答えて、リンは横目でちらっとレンを見た。その横顔はいまだぶすつとしている。

「えっと、グラジオラスのときと、復興式典のときに」

「キヨテルの仲間だよ、そいつ」レンが唐突に言葉を発した。

「キヨテル……？ あの冰山キヨテルか？ さっきニュースで指名手配されていたぞ」

こく、っとレンはうなづいた。

「？スーパー・ノヴァ？っていうんだ、確か。」

そいつが言うには、テロリストってやつらしい」

「テロリスト？ この子が？」のき爺は少女の顔を素早く覗きこんだ。

「うん。グラジオラスの事件と、多分だけど、復興なんたら事件もそいつらが起こした。」

キヨテルの姿だっで見えたんだ。逃げられたけど……」

のき爺の眉がぴくっと吊り上がる。

「何だと？ まさか、弟を殺したのは……」

考え込むように言い淀み、のき爺はキッと顔を上げた。

睡魔にやられかけていた表情がいまや怒りを孕んでいた。

「どうしてそれをいままで言わなかった？」

「え、のき爺忙しそうだったし、オレもあれこれしてたら言うタイミングなくして……」

のき爺の態度ががらっと変わり、レンはいささか狼狽した。

「……すまん。おまえに当たってもしょうがない」

のき爺は壁にがつくりと額をつけてしばらくそのままにしていた。まだ確証が得られたわけではないにしろ、彼のなかで弟殺しの犯人は冰山キヨテルと断定されたのだらう。それがありありと彼の怒り

と落胆が入り混じった姿からうかがえ、リンは胸が苦しくなった。「ん……」周りが騒がしくなったからか、少女は声をもらしながら寝がえりをうつた。

右腕がぶらりとカウチからはみ出た際にかすかな痛みが関節に走ったのか、少女はうすら目を開けた。

「ミキ……」レンは口先に小さく呟いて、やや急ぎ足に向かった。「おまえ、どうしてタワーに来たんだよ。今度はここを壊しに来たのか？ オレの背中に爆弾を貼っつけたときみたいに！」両肩をゆらしてはやし立ててくるレンの顔を、ミキはぼんやり眺めていたが、やがて絶叫した。耳をつんざく大声に一同は不意をつかれたようにおどろき、なおもミキは怪物を目の前にしているかのように叫び続ける。狂乱の態だった。

「お、おい、どうしたんだよミキ！」

「やめて、やめてやめてやめて！ 好きで殺したんじゃないの！ キヨテルに言われたの！」

許して、許してください。ごめんなさい……」

ミキは自分を守るおまじないのように「ごめんなさい」を連呼した。その言葉はやがて「クスリ、クスリ」にすり替わり、彼女の全身がにわかに痙攣けいれんし始めた。あとは笑ったり泣いたりを目まぐるしく繰り返し、ひたすら支離滅裂に叫び続けた。

「リン、ユウキに車を用意させる。彼女は病院に連れて行ったほうがいい」

リンは緊張した顔でうなづき、すぐさま部屋を飛び出していった。胸に顔をうずめられながら、レンは途方にくれたようにのき爺を見た。

「禁断症状だろう。薬物が切れたんだ。それと幻覚に怯えているらしい。」

キヨテルは、そうか。こんな子供にまで殺しをさせたのか」

のき爺は静かに拳を握りしめる。額に浮き出た血管はいまにも破裂しそうだった。



「なんていうか……なんだな」

ダーは歯がゆそうに言つて、ボールを短くうえに投げた。ぼんやりしていたのかキャッチし損ね、ボールはレンの足元に転がる。彼はソファに腰掛けたままじっとしていた。

リンは自販機の側面に寄りかかって腕を組み、何か思いつめた様子の子のレンの背中を心配げに見つめている。ミキが病院に送られてからすでに一時間半。「ルカ様助けて！」と暴れるミキをユウキ・シタラともう一人の男性スタッフが力づくで運んでいく様は壮絶だった。

そのときの光景がまだ頭から離れず、三人は一樣に意気消沈していた。スペースの片隅で両膝を抱えて座り込んでいるハクはあの場に立ち会ったわけではなかったが、リヴォルヴがないために地縛靈さながらのオーラを醸し出している。

場所はタワーのエントランス・ホールの隅にある休憩スペース。ロビーでは多くの白衣を着た人間たちが行きかっているが、それと同じ空間にあるとは思えないほどの重苦しさが立ち込めていた。

「あのニンゲン……ミキっていったっけ？」

ダーがおもむろに沈黙を破った。

「どうしてタワーの前で倒れてたんだらうな」

「きつとわたしの剣を狙ってやってきたんですよ……」ハクがうめくような声で答える。

「そんなわけねーだろ。レンはどう思う？」

彼なりに励ますつもりで質問したのだが、レンは足元をにらんだまま答えなかった。

気づまりな沈黙が再び場を占める。

「どうしてそんなわけないとか言い切れるんだよチビクソが……こいつとリヴォルヴを取り上げたノキジイとかいう二つのチビをセッ

トで押しつぶしてくれる巨大な何かから落ちてこないかな……」  
ハクのねちねちとした独り言が無闇に響き続けた。

「そーいえば」リンが口を開く。

「?ぐるぐるまーくのすごいやつ?が帰ってきたみたいだよ」

「ほんととか?」

「うん。なんか、シーザリオにある街の路地裏で倒れているのが見つけられたんだって。それで警察が届けてくれたんだけど、なんか、頭と胸に銃弾を撃ち込まれてたみたいで……」

「え、それ大丈夫なのか!?」ダーがガタつとソファから立ち上がった。

「のき爺が言ってたんだけど、キオクとシコウ? を司る、ええと、ニンゲンで言うところの?ノウ?があぐるぐるまーくの下にあつて、そこが無事だから壊れたところを直せばまた元通りになるってなんだ、と胸をなで下ろしながらダーは腰掛けた。ハクは未だに呪文を唱え続けている。

「でも、海人がまだ帰ってないんだって」

「え? K A I T O <sup>カイト</sup>が帰ってない? おまえ帰ってきてほしいの?」

「いや、そつちのほうじゃなくて……」リンは呆れたように手をふつた。

「ほら、戦いのまえにいたじゃん。K A I T O そつくりのニンゲンが」

「あー……」ダーはなでるように虚空を見上げた。

「え? あいつもカイトっていうの?」

確かに初めてみたときはそっくりでおどろいたけどさ」

そのとき「ややこしいんだよクソが……」という呟きがどこからか聞こえた。

「つていうか攻撃しかかってたよね……。まあ、名前まで一緒じゃ無理もないけど」

言葉半ばに歩き出し、リンはレンの足元に転がっているボールを何気なく拾い上げた。

ふと半歩後ろに座り込んでいるハクの胸元が目に入る。ボールと見比べる。……大きい。

突き出した膝に押し上げられているので、余計にそう見えた。リンは自分の胸を極力視界に入れないようにしながら、持ったボールでこつんとレンのこめかみをつついた。

「いつまでそうしてんの？」

「……うっせえな」

「なるほどー。もしかしてあんた、あのミキって子が？スキ？なんだあ」

「そんなんじゃねーって！」

レンは勢いよく立ち上がり、鼻先が触れあうすれすれまで顔を突きつけた。

「言っとくけど、私、忘れてないからね！」

「ああ？」

「あんたに『おまえはせつかちすぎる』って馬鹿にされたこと！」  
レンは記憶を探すように首をかしげる。そうだ、あのアンドロイドとの戦いのときだ。

「事実だろーが！ オレだってノロマ呼ばわりされたこと忘れてないからな！」

「なによ？」「ああ〜？」

額を突きつけ合う二人の足元から、「ククク……もっとやれもつとやれ……」という陰湿な笑い声が聞こえた。

「しーらねつと」

ダーはソファから飛び降りて、足早に休憩スペースから出ていった。

ちょうどウロとタンの二人があんなふうにいがみ合っているのを飽きるほど見てきたので、こういった手合いには関わらないようにしているのだ。

何気なくホールを歩いていくと、角からすらっと背の高いのが出てきた。フェルトハット、トレンチコート、ジーンズ、ロングブー

ツと上から下まで黒づくめ。ハーレクイン型のサングラスですっぱり顔が隠れているが、そのすらりとした身体のラインと上品な雰囲気には覚えがある。

「ルカねーちゃん……？」とダーは引き気味に訊ねた。

すると相手は休憩スペースで起きているごたごたを目にしてから、ダーを見下ろした。

「ナナシはどうしているのかしら？」

「さあ……？ まだメンテナンス中なんじゃない？」

「そう」素っ気なく言っつて、ルカは歩き出した。

「どっか行くのか？」

「どこだっていいでしょ。あなたには関係のないことだわ」

早足に出入り口へと向かう彼女の背中を、ダーはしばし呆然と見つめていた。

あんな服を着てどこに行くのだろう？　そこで不思議とミキのことが頭に過ぎった。

「おーい、リン」

「なに？　いま忙しいの！」

二人はほっぺたをつねりあっている。

「いや、ボール返してほしくて」

リンに投げられて自販機にはね返ったボールを拾い、ダーはハクの横を通りがかった。

「オイラと一緒にやるか？　キャッチボール」

「無理です……ボールに当たったら死んでしまいます……ゴミクズなんでわたし……」

あっそ、と答え、ダーは右手でボールを弄もてあそびながら外へと向う。

夕方近くだというのに、休憩スペースの窓に広がる空は依然として曇りのままだった。

セントラルの中心地からやや外れた住宅区にある総合病院。トランジスタ各都市に点在する国立病院はどこも平等に最先端の設備が施されているが、規模はここが最も大きい。

ルカはその地下駐車場にユウキ・シタラが運転する車で乗り付け、彼の案内に従い、ミキが治療を受けている救急外来を目指した。しかし、担当医曰く、いまのところミキは鎮静剤の投与によって半分眠っているが、精神的に不安定な状態にある。下手に人と接触するとまたパニックになる恐れがあるということで、面会は様子を見てからということになった。

ロビーの待ち合い場所にニグループ四列に並んでいる椅子を占めているのはどれも老人。

そのなかに加わることに抵抗があるわけではないが、身元が割れてしまう危険性を考えてルカは身を隠すように柱に寄り掛かっている。ちなみにユウキ・シタラの「一度帰りますか？」という質問には「いいえ」と返事をした。

彼女はいつ呼ばれてもいいようにここで待っていたのだ。

カウンターに置かれたワイドスクリーンモニターには夕方のニュース番組がやっている。

前列に座っている茶色のニット帽をかぶった老人の背中越しに、ルカはそれをぼんやり見眺めていた。ふと、ユウキ・シタラが声をかける。

「一昨日からアンドロイド暴走のニュースでもちきりですね」

ルカが振り返ると、彼はにこつと微笑んだ。ミキのことでルカが緊張しているのをほくしてやろうとしたのだらう、普段は生真面目で口数こそ少ないが、気遣いの出来る男である。

「あの子や私をここへ運んでくれたり、ご苦労さまね。ノーキーに色々こきつかわれて」

「いえ……」ユウキ・シタラは苦笑した。

「先に帰ってもいいのよ。私は歩いて帰れるから」

「待ちますよ。ノーキー博士に頼まれていますので」

「お目付役、というわけね。大丈夫。あんな勝手はもうしないからあんな勝手、というのは彼女がW・A・Fの軍事基地に乗り込んだときのことだ。」

しかし、彼女の掴みどころのない口調からすると、真に反省しているかは疑わしかった。

「Dr・マルチル、自供したようですね。今回の事件のこと……」

ユウキ・シタラはニユースを見ながら、呟くように言った。

「結局、あの男が全てを仕組んだ犯人なのかしら？」

私、まだ目覚めてから時間が経っていないから分からないのだけど」

「W・A・Fは事件の首謀者探しに躍起になっています。マルチルが昨日の今日で早々に自白したのもW・A・F側から圧力がかけられたからでしょう。」

アンドロイド暴走の共謀者である冰山キヨテルも指名手配されました。

しかし、アンドロイド量産の事実については彼ら二人だけのせいでは済まされません。

「厳しい立場に立たされていますよ、W・A・Fは」

「こういうのも口が悪いけれど……？ざまあみろ？って感じね」

彼女はわざとらしく、あ、と口を手で覆った。その口元は愉快げにほころんでいる。

そこへ担当医がやってきた。三十代前半の精悍な顔立ちをした男だ。彼はたくましい身体つき通りのきびきびとした口調で二人に伝える。ミキがあなた、ルカを呼んでいる、と。

「では、ぼくは終わるまでここで待っていますので」

そう言うユウキ・シタラの下を去り、ルカは担当医と歩いていった。

廊下で看護師や点滴台を持ち歩く患者とすれ違うなか、担当医は

横目でしきりにルカを見やっていた。やがて、彼は言いづらそうに訊ねた。

「つかぬことをお聞きしますが、あなたはもしかしてボーカロイドの」

「名前が同じだけよ。彼女はもう、いないのよ」

ルカは静かながらびしゃりと言い、すると担当医がもう何か詮索することはなくなった。

\* \* \*

ガラス製の透明なスライド・ドアを開け、ルカはミキの眠っている個室へと入った

患者の容態が外からでも分かるように、このフロアにある個室はどれもガラスで仕切られている。

担当医がドアを閉めると辺りの喧騒がぴたっと止み、ルカは自分がミキと二人だけの空間にいるのだということに自覚した。担当医はドアの外で待っている。もしミキがパニックに陥ったらそれを止める準備とシミュレーションはすでに彼のなかで整っているのだらう。

ルカは足音を立てないように歩み寄り、そっと彼女の寝顔を覗き込んだ。

担当医から眠っていると言われていたが、ミキの目はうすら開けられている。しかしそれは死人のような目付きで、光がなく、ルカがすれすれに顔を近づけても無反応だった。

彼女はミキの耳元に口を寄せる。そして囁くように歌った。彼女が大好きなあの歌を。

「……うん？」

かすかながら反応があった。

ミキは心持ちルカに首を傾け、その表情はまだ夢を見ているかのようにおぼろげだった。

「もう大丈夫よ。私が来たから」

ミキは満面の笑みをたたえてうなづいた。不意に両目から涙があふれて頬を流れる。

ルカは指で優しく拭いてやりながら、彼女が正気であることに安堵した。

「……助けてあげて」

ミキは唐突に言った。いまにも消え入りそうな声だった。

「誰を？」

「ラヴと、孤児院の子供たちと……ううん。トランジスタ中の人たちを」

ミキは続ける。「それでね、出来れば……キヨテルも」

ルカはその発言がいささか不可解だった。

「どうして？ キヨテルはあなたにひどいことをしてきたんでしょう。」

だから、あなたはこんなふうじ」

「キヨテルは大変なことをしようとして……。それでこの世界もわたしも、自分も救われるって、キヨテルは思ってるけど、ぜんぜん間違ってるの。だから、助けてあげて。」

キヨテルはね、孤児院の子供たちと同じように、寂しがり屋なだけなの」

その後、ミキはまるで母親に抱かれている赤子のような安らかな顔で眠りについた。

彼女の傍らに腰掛けながら、ルカは頭に浮かぶ様々の疑問と戦っていた。

ミキはどうしてユートピア・タワーの前で倒れていたのだろうか。発見されたとき、彼女の衣服には返り血がついていたという。もしかして彼女は誰かを殺してしまって、迫りくる罪悪感から必死に逃げ続けていたのかもしれない。そして救いを求めて、自分のいるユートピア・タワーへとやってきた……。

納得すると同時に、ルカは説明し難い切なさに駆られた。彼女を



こうまで追いつめたのは間違いなく氷山キヨテルという男。しかし  
当の本人は、彼を助けてあげてと言っている。

この部分がどうにも腑に落ちず、ルカは担当医のノックにも気付  
かずに考え込んでいた。

事件が起こったのは、担当医がドアを開けて部屋に入ってきたと  
きだ。

「停電？」

そう言葉をこぼしながら、担当医は首をめぐらした。

天井の照明は非常灯を除いてすべて消え、大きな窓の連なりから  
注がれる灰色の空の光だけがフロアを照らしていた。患者の命に関  
わる機械類の電力は発電所ではなく病院独自の発電システムでまか  
なっているため、止まることはなく、この間も手術は続けられる。

照明が落ちたのはその電力が発電所から送られているからだ。す  
なわち、この停電は発電所の電力供給が止まったことを意味してい  
る。担当医はそれを理解しているのか、さほど慌てた様子もなく、  
念のためミキの心電図と点滴が正常に動作しているか触れて確かめ  
た。

「どうなっているの？ ミキは大丈夫なの？」

「ええ、それは問題ありません。機械は正常に作動しています。」

この停電も一時的なものでしょう。しばらくしたら復旧しますよ」

何を根拠に、と胸中で呟きながら、ルカはミキの言葉を思い出し  
ていた。

『キヨテルは大変なことをしようとしている』

まさか。この停電がその予兆だとも言うのか？

しかし、ルカは次第に増大する不吉な予感を拭うことが出来な  
かった。

「ごめんね、ミキ。すぐにまた来るから」

担当医の制止を振り切り、ルカは個室を飛び出していった。

暗闇のなか、足元の非常灯を頼りにロビー・ホールへ出て、一目  
散に外へと向かう。

ルカは固く閉ざされていた出入り口の自動ドアを二つ無理やりこじ開けた。アンドロイドの力を持ってすれば造作もないことだ、こんな非常事態でない限りルカはその力を出したくはないが。

「どうしたんですか!？」

ユウキ・シタラが慌てた様子でやってきた。

ルカは異様な雰囲気か街にたちこめているのを直感している。窓が暗く閉ざされたビルや家屋から出てきて呆然とする人々。徐々に迫って来ているような曇り空。

異常の正体は掴めないが、やがて一機のエア・グライドが天空を横切っていった。

目で追う限り、それが向かっているのはユートピア・タワー。

ルカの不吉な予感が確信めいた強固さを帯びた。

「ユウキ……いますぐタワーへ戻るわよ。車回して！」

\* \* \*

リンとレンは未だに喧嘩していた。しかし、頬をつねったり罵り合ったりはもうしていなく、ソファの両端にそれぞれ座ってツンと背中を向けている。いわゆる冷戦状態だった。

どちらか一方が席を立たないのは、それをすると自分が負けた気がするからだ。したがって両者とも頑としてソファから離れず、一服しようとしてやってきた職員たちに妙なプレッシャーを与えている。

ハクはというと、ずっと同じ場所に座り込んで相変わらず負のオーラを発し続けていた。何か変わった点はないといえば、絶望を表現する言葉が尽きたというふうに一言も喋らなくなったところだ。

エントランスの出入り口付近がにわかに騒がしくなったのにリンは気付いた。

見れば何人、いや何十人という大勢の子供たちが一人の警備員に詰め寄っている。

タワーは原則部外者は立ち入り禁止。Dr・フィールグッドが存

命していた頃は一般にも開放していたが、現在はテロの警戒や公には実質死亡が報告されたル力を匿う意図もあって、学校など法人からの申し出であっても施設見学は全面的に受け付けていない。

それはノーキーがやってきたときに公式に発表していることであるのだが、あの子供たちは『見学させて！』『なかに入れてよ！』と叫び散らして止まない。

警備員もほとほと困り果てていた。

やがて子供たちの群れをかき分けて一人の青年が警備員の前に立った。遠目にも優しく礼儀正しそうな印象を受けるそのフォーマルスタイルの青年は、警備員に一方的に話しかけると、子供たちを振り返り、頭上に持ってきた両手を「パン！」と打ち鳴らした。

すると子供たちは野原に放たれた犬のように駆け出してフロア中に散った。

警備員は困るを通り越して呆れた様子で青年に向き直ったが、途端にその身体が硬直した。リンが注意深く目を凝らしてみると、肉薄した青年と警備員の身体の間には拳銃らしきものが見える。確証を掴む間もなく銃声がフロアの天井を突き刺して、警備員が倒れた。

続けてフロアのあるこちらでインスツールの白い電光がほとばしる。発生元は子供たちだった。あれほど無邪気な笑みを浮かべていたのに、いまやそれはネルのような感情なき暗殺者の顔に豹変している。

「レン　呼びかけようとして、リンははっと言葉を呑み込んだ。意地を張ったのではない、おかつぱ頭の少女がレンのこめかみに自動小銃の銃口を突き付けていたのだ。」

「わ、わ、わたしの大切なけ、け、剣をあげますから……その……なにとぞ命だけは……」

自己保身しか頭のないハクはホールにいた誰よりも早く命乞いしていたが、その後頭部にも容赦なく銃口が押し付けられる。「命だけはお願いし……きゃあ！」

背後に人の気配を感じ、振り返るとリンの目の前に二つの銃口が

あつた。

更に子供たちの肩越しにあの青年がこちらに手招きしているのが見える。彼の足元の白い大理石には鉄板に垂らされたクレープの生地のように血だまりが広がっていた。警備員は仰向けになつたまま微動だにしない。

リンは怒りがこみ上げてくるのを感じながら、口のなかで呟いた。  
「コオリヤマ……キヨテル……」

昼のニュース番組で公開されていた写真の人物。その顔、出で立ちと完全に一致する。あんな邪悪な笑みを浮かべ、右手に銀色のデザートイーグルなど持つてはいなかったが。

リン、レン、ハクは四人の子供たちに銃口を突き付けられホールを中心まで歩かされた。

他の職員たちも同様だった。彼らは二桁に及ぶ銃口に包囲され、血だまりを広げる警備員の前に座らせられざるを得なかった。みな一様に吐き気を催したような表情であり、受付嬢に至ってはすでに泣きだしている。

そんな彼らをまえに、キヨテルはせせら笑いを浮かべていた。

「もう各地で大停電が起こっているというのに、ここの照明は消えないんですねえ。」

初めからある程度の期待はしていましたが、こんなところの電力まで自力でまかなっているとは……大した発電システムだ「キヨテルは天井を見まわしながら、心得顔で独りごちた。

「あんだ、こんなことしてどういうつもり!？」

「おっと」呟えたるリンに、キヨテルは人差し指を唇に当てた。

「静かにしていたほうがいい。沈黙はときに金、そしてときに人命を助けることさえある。いまがそのときだ。分かっていますよね？」

下手に動いたら、どうなるか……」

大勢の人質に向けられた眼差しが何を意味しているかは明白だった。  
リンとレンはそれを察し身動きが取れないでいる。ちっ、とレン

が舌打ちした。

「なんまいだーなんまいだーなんまいだーなんまい……」ハクは相変わらずだった。

キヨテルはダーク・スーツの内ポケットから携帯端末を取り出す。誰かから着信が入っているのか、それは小刻みに振動していた。

「はい。なるほど、首尾よくいつているようですね。KAITO」  
その名前にリンとレンがびくつと反応する。二人の顔に緊張の色がにじみ始めた。

「エレベーターは問題なく使えるようなので、そのままエントランスまで降りて来てください。先ほども言いましたが、くれぐれも人質 特に小柄の老人には手を出さないように」

「分かっているよ」という返事がスピーカーから聞こえた。

「彼らをここに集めたらいいよ始めましょう。人類最後の、ビッグ・シヨーを」

言つて、キヨテルは携帯端末をポケットにしまった。

リンとレンは顔を見合わせる。もう喧嘩していたことなどとうに忘れてしまっていた。

この閉ざされたドームの世界で、何かが始まるうとしている。

\* \* \* \* \*

いつもの天井が、彼女、ナナシを待っていた。

ひりひりと目を痛めつける白熱灯の明り、何者も存在していないかのような静寂の空気、何度か体験したような感覚に覆われながら身体を起こす。意識はまだぼんやりとしている。

ふと、あの場面が閃光のごとく脳裏を過ぎった。

またもMEIKOマイコをこの手にかけた。

似ているだけのアンドロイド、では、彼女のこの底なしの罪悪感  
は拭えきれない。

私はMEIKOを殺した。今度は鋼の刃で持って、その首を。宙

高くはね飛ばした。

頭部を失ったMEIKOの身体が崩れ落ちていく。とても正視で  
きる光景ではなかった。

ナナシはとつさに顔を手で覆う。拍子に、何か硬い物が胸をつつ  
いた。

クリスマスの夜、海人からもらった星のチャームがついたシルバ  
ー・ネックレス。

彼女はすがりつくようにそれを握りしめ、吹き飛ばされそうな身  
体を必死に繋ぎとめた。

いまはそうしているだけで、精いっぱいだった。

t o b e . . . . . c o n t i n u e d .

&lt;&lt;Chapter 3&&&>> (後書き)

次回 予告

Rock・24?ワールドイズマイン?

乞うご期待

## Rock・24？ワールドイズマイン？

キヨテルが黒い携帯端末をダーク・スーツの内ポケットに戻して十分と経たないうちに、K A I T O <sup>カイト</sup>が管制室にいた面々を連れてきた。彼らはホールの光景を一目見るや愕然とし、特に血だまりに倒れている警備員の無残さには目と口に手を当てざるを得なかった。

管制室塔のスタッフ専用の制服を着た彼らはそれぞれ恐怖と不快感を露わにしていたが、その先頭、のき爺は怒りに満ちた形相でこちらに歩み寄ってくるキヨテルをにらみつけていた。

「ご足労おかけして申し訳ありません」

優雅な振る舞いだが、皮肉めいた響きがありありと声に出ていた。とつさに彼は身を引く。でろつとした液体がスーツの胸辺りを汚していた。

「この行動は考えものだ……。素直に我々の要求を呑んでくれれば、あなたたちを夢の世界へお連れしようと思っていたのに」

「でなければなんだ？ わしを殺すのか？ 弟を殺したときみたい  
に」

のき爺は唾などではなくその胸に銃弾を撃ち込んでやりたかった悔しさに拳を握った。

「気付いていらっしやったのですか。実に出来のいい弟さんをお持ちでしたね」

「ふざけるな」キヨテルはそれを一笑に付した。

「ところで、我々の要求というのは実にシンプルです。ここの電力をお借りしたい。

発電所のはもう使ってしまったのでね。残っているのはここくらいなんです」

「どの面下げて言ってるつもりだ？」

「おや。もう何人が死なないと分かっていただけませんかね」

何気なく振り返ったキヨテルの目が、すぐ足元に座っていた女の



顔を捉えた。

このロビーの受付嬢だ。いつもは太陽のような笑顔を振りまいているのに、いまやそれは涙でぐちゃぐちゃになっている。そこに銃口を突きつけられると、彼女の顔はいよいよ恐怖が焼きついたデスマスクのように凍りついた。

キヨテルは撃鉄を起こし、引き金に指をかけた　と、のき爺が彼の手首を掴む。

「どうやら、考えを改めてもらえたようで」

「それでどうするつもりだ。おまえらの目的はなんだ」

のき爺は語気を荒げる。

「差し当たってそちらから何人が人手をいただきますよ。かまいませんね？」

「わしが質問しとるんだ。おまえらの目的は」

「追々話しますよ。まずはお手洗いをお借りしたい。この汚物を早く清めたいのでね」

嫌味つたらしい声でのき爺の言葉をさえぎり、キヨテルは胸にかかった唾を指差した。

数年このタワーで働いていただけあつて場所は心得ているらしく、キヨテルは人の間を縫つてつかつかと歩き出す。のき爺は彼を追おうとしたが、K A I T O が立ちはだかつた。

「そんなにカリカリしてつと、高血圧でぼっくり死んじまうぜ」

「そこをどけ」

「なんだ？　俺に殺されたいのか？　いいぜ？」

裂けんばかりに口の両端をつりあげるK A I T O。

先ほど管制室の窓にエア・グライドで乗りつけてきたときと同じ、この世の全ては自分の玩具だと言わなければかりの笑み。事実、スタッフ共々あつけなく人質に取られ、彼の言いなりになるほかなかつた。くそつたれめ。のき爺は腹のなかで毒づいた。これと同じ顔と声をしたやつが青臭いながらも真つ直ぐに自分の正義を貫いていることが信じられない。その彼は昨晚から行方が分かっていない。も

しかして目の前にいる男こそが海人なのではないか？

だが、男の瞳の色は真紅で、ハイエナのごとく短い呼吸を繰り返して挑発してくる。

のき爺のなかに一瞬芽生えた疑念はすぐに消し飛んだ。代わりに男の邪悪な笑みにわずかでも気後れしたことに途方もない無力感と怒りを覚え、ひよつとすると本当に血管が破裂してしまいかもいれなかった。

\* \* \*

「なんか……やばいことになってる……」

ダーは休憩スペースの窓からなかを覗き見、ふとそんな言葉が口をついて出た。

タワーの裏手にある小さな公園で一人ぼんやりとキャッチボールをして、帰り道に何気なく通りがかった折、この長方形の窓に広がる光景が目飛び込んできた。ホールの中心に人々が集められ、自動小銃を構える数人の子供たちが彼らを囲んでいる。手前にある観葉植物と人の頭にさえぎられて見づらいが、リンとレン、ハクの姿が確認できた。そして恐るべきはあのK A I T Oがいること。先ほどこから軽薄な拳動でのき爺をからかっている。

まさか野球の試合をやるうというわけじゃないだろう。ダーは慌てた手つきでポケットから携帯端末を取り出し、この事態を知らせるべくルカに発信した。前日のK A I T O 搜索の際にのき爺から使いつ方を教えてもらい、搜索中は定期的にリンたちと連絡を取り合っていたため、ダイヤル・コードを呼び出して通話ボタンを押す分には手間取らずに操作できる。

「もしもし？」

二コール目でルカが出た。ダーは強力な味方が得られそうですとまず胸をなで下ろした。

「いまどこにいる？」

「さつきタワーにエア・グライドが向かっているのが見えたわ。そ  
ちで何か異常はない？ リンやノーキーに連絡しても誰も出ない  
の。私はいま車でそっちに向かっているわ」

「異常は……」

ダーは反面鏡で出来た壁に身を隠すようかがんだ体勢から、心持  
ち首を伸ばしてなかの様子をうかがった。

「ありまくりだよ……。まず、K A I T O がいて、ちっちゃいニン  
ゲンがみんなをマシンガンで脅してるっぽくて、たぶんだけど、キ  
ヨテルっぽいやつがさつきまでいた」

「あの、よく分からないわ……。分かりやすく、順序立てて説明し  
てくれる？」

ダーは言われたとおり理路整然とした説明を心がけたつもりだっ  
たが、いかんせん語彙ごいが少ないのと、気が動転ごんぜんしているのもあって  
ルカは何度か「えつと？」と送話口の向こうで首をかしげなくては  
ならなかった。三分ほどかけてルカはようやく状況を把握でき、ハ  
ンドルを握るユウキ・シタラにダーから受け取った情報を自分の言  
葉に変換して彼に伝えた。

車の走行音に包まれた二人のやりとりがしばらくダーの耳元に流  
れると、やがてルカが言った。

「いまは何もしないほうがいい」

「え！？ みんなを助けないの？」

「いまの状況じゃ無理よ。もし出来るのなら、リンとレンがとっく  
に行動を起こしているはず。K A I T O とキヨテル以外は全員コド  
モだって言っても、人質を取られている以上はうかつに行動できな  
いわ」

「……ルカねーちゃん、いま気付いたことなんだけど」

「なに？」

「さつきまでよく見えなかったし、何だろうつてずっと思ってたん  
だけど、ホールの真ん中に赤いのがどばあってあって、そこにニン  
ゲンが倒れてるっぽいんだ。これってやっぱり」

「殺されたのね、誰かが」

一瞬間、会話が硬直した。

「やっぱり、何もしないほうがいいわ。何が狙いかは分からないけど、あいつらが平気でヒトを殺せるのは分かった。私たちは地下駐車場からタワーに入るわ」

「オイラは何をしてればいいの……？」

「なかの様子を見張っていればいいのよ。また何か動きがあったら連絡して」

ああ、分かった、といまいち要領を掴めていない声で返答し、通話を切った。

ダーはいまいちど窓を覗き込む。K A I T Oがおおげさな身ぶり手ぶりで何事か喋っている。

「俺はニンゲンだった頃に何度か盗みを働いたが、こんな大勢の人間を取ったのは始めてだ。眺めとしては悪くない。だが、キヨテルの野郎はこいつらまで生かすつもりなのか？」

K A I T Oはリンたちを振り向く。二人はそろって挑戦的な眼差しでK A I T Oをにらみ、ハクはその後ろで「この世の終わりだ」と言わんばかりにふさぎ込んでいる。

「おいおい、そんな怖い顔するなよ。」

あっちの世界じゃ俺に世話になったんだろ？ ちったあ感謝ってやつを」

「うっせー。オレの知ってるK A I T Oはそんな喋るやつじゃなかったぜ。」

おまえ？ニセモノ？だろ」

K A I T Oの眉じりがぴくっと吊り上がった。

「ほーお？ そう、俺はキヨテルの仲間。仲間っつーのは、助け合ってこそそう呼べる。だからあいつの計画が邪魔されないように、俺は仲間としての責務を果たせねーとなあ」

言っつて、K A I T Oはポケットから取り出したチップをインストール。白と青の帯状の紐が編み込まれた柄にすらりと刀身が伸びた

アマミヤを右手に持ち、素早くレンに詰め寄った。

彼は立ち上がる隙さえなく、刀が振り上げられるのを愕然と見上げているしかなかった。

「死ね」

ガラスが砕ける音がホールに響き渡り、いざ獲物を斬り裂かんとしていたK A I T Oの顔を何かが横切つていった。

ふと見てみればバットを持った子供が放射状に割れたガラスの向こうに立っている。

「一球入魂、どうだあ！」

ちっ、K A I T Oは苛立たしげにかぶりをふった。

「死に損ないのガキが……。おまえら、撃て！ 撃ち殺せ！」

K A I T Oは左腕を大きく振って子供たちを煽おほった。彼らは窓越しにバットを持って立つ少年とK A I T Oを交互に見やり、しばしためらっていたが、やがて一人が発砲した。

すると他の子供たちも続けて引き金を引く。ダーは慌てて走り出した。

対アンドロイド戦を視野に入れていたのか弾は三十口径の穿孔型が用いられ大理石とコンクリートを貫通、ダーの背後にはまるで疾走の軌跡のように壁が蜂の巣となっていた。

「うおおお！」ダーは丸みを帯びた壁に沿って一心不乱に走っていたが、しばらくして銃弾が飛んで来なくなった。それでもしばらく足を動かし続け、銃声は盛んに鳴っているのに弾が飛んで来ないという怪現象の正体に気付いたのは玄関口までやってきたところだった。

ルカだ。ルカが双剣ツイン・グラットンを持ってK A I T Oと交戦している。それに伴ってリンとレンも動き出し、人質の何人かも子供たちと絡まり合っあってホールは大混乱だった。

「ルカねーちゃん！」

飛んでくる銃弾に気を取られている隙にK A I T Oは思いつきルカの腹部を殴りつけた。

ルカはインフォメーション・カウンターの壁にしたたか背中を打ちつけ、ずるりと落ちた身体がカウンターに隠れた。ダーは後先考えずに混乱の渦中へと飛び込んでいく。

ルカは這いずるようにカウンターから顔を出し、ダーに叫んだ。

「ナナシを呼んで！ 早く！」

そこに銃雨の援護を受けながらK A I T O がやってくる。

「しぶといオンナだなあ！」

とっさに左の剣で攻撃をしのぐルカ。その彼女に返事が出来る余裕などないと知りながらも「ナナシはどこにいるんだよ!?」と怒鳴り声が出るのをダーは止められなかった。

そこで彼はエレベーター・ホールへ続く廊下の物陰から手を振るユウキ・シタラに気付いた。銃弾がすねをかすめる、帽子が弾け飛ぶ、拾っている場合ではない、ダーはしやにむに足を動かし、最後は本墨へのダイビングよろしくユウキ・シタラの下へ頭から飛び込んでいった。ぎりぎりのところでセーフだった。ユウキ・シタラはすかさず彼の手を取り、地下の直通エレベーターへと続く職員用通路を走っていった。

ちょうど二人と入れ替わりに、キヨテルが化粧室から出てきた。

「これは一体、何の騒ぎだ？」

ハンカチで手を拭きながら独りごち、壁の縁をかすめとって銃弾が足元に飛んできた。

思わずため息が出る。キヨテルはスラックスの後ろからデザートイーグルを取り出し、ホールへと出て行くと、天井めがけて二発立て続けに発砲した。

その銃声にぴたりと混乱が止む。一同の視線が彼に注がれた。

「K A I T O …… 僕がいつ、戦えと言いましたか？」

K A I T O の足元ではルカが尻をついて彼を見上げている。

キヨテルが出てこなければこのままとどめを刺されていた。

「それはこいつらに言ってくれ。戦いを仕掛けてきたのはこいつらだ」

「どうだか、というふうにはキヨテルは鼻を鳴らした。

「子供たちに言います。今度、アンドロイドたちが暴れたら、容赦なく人質を殺してしまつて構いません。いいですね？」

リンたちに対する脅しも含めて、彼は凄みを利かせて言う。

「が、すぐに思いなおしたようにK A I T Oへ向き直つた。

「いや、やはり危険の芽は摘んでおきましょうか。邪魔になるだけですしね。K A I T O」

K A I T Oは我が意を得たりというようにこの上なく愉快そうな笑みを浮かべた。

「待つてたぜ。刺激が足りねえと思つていたところだつたんだ」

「僕はこれから？カタストロフ？の設置作業に入ります」

「ああ。こつちも片づけ次第すぐに行く。特等席を取つておいでくれ」

キヨテルは二人の少年に目線を送り、すると彼らは近くにいた男性スタッフを銃で立たせて、キヨテルのもとへと連れて行つた。

彼らの姿がエレベーター・ホールへと消えていくのを見送つたのち、K A I T Oはアンドロイド勢を振り返つた。ルカは体勢を立て直して、リンとレンも武器を装備している。たつた一人ハクだけが「弾は飛んで来ない来ない他のやつらに当たる他のやつらに当たる……」と呪文を唱えながら頭を抱えてうずくまっていた。彼女を除く三人にK A I T Oは表へ出るよう顎あごでうながす。三人の目に緊張と闘志が浮んだ。

「表へ出る。第二ラウンドだ」

地下深くの一室で、ナナシはまだ動けずにいた。

寝台の下のバスケットに服や装備品が一式揃っているが、それを手に取る気力さえ湧いてこない。唯一身につけているネックレスを両手に握り、彼女はうつ屈と悩む銅像のように身体を丸めてじっとしていた。しばらく時間が過ぎ、彼女は何気なく掌を開いてみた。

星のチャームの裏側には『K A I T O』と刻まれている。彼女はエクスプロリズムの団長を想起して吐き気に似た不快感に襲われたが、それを別のカイトとの記憶が優しく拭っていった。

初めてあったときのこと。瞳の交錯。いつもはぎこちない態度で話すやつの、土壇場で垣間見た激情。クリスマス夜の夜。粉雪が舞っていた、やつはコートをはおらせてくれた……。

あらゆる場面がストロボのように連続して浮んだ。

あいつはいま、何をしているのだろう　頭の片隅でぼんやり思うと、彼はそこにいた。

「海人……？」

彼は温かい笑みを浮かべて悠然と目の前に立っていた。

部屋の扉はいつ開いた？　足音はどうして聞こえなかった？

そんな疑問はたちまち消えた。海人が優しく抱きしめてくれたから。

だが、体温や息遣いは感じられなかった。両肩にぎゅうつと手でしめつけられるような痛みを感じる。おかしい、海人は肩なんて掴んでいないのに。

そのあと海人の様子はいつもと違っていた。まず、一言も喋らないし、おどおどしていないし、泣きわめく子供を諭すようにバスケットを指差す。ナナシは疑問を感じながら服を着、装備を揃え、彼の前に立つと、手首を掴まれて廊下へと引つ張られた。

「どこへ連れていくつもりなんだ、海人！」



ナナシは走りながら叫んだが、海人は振り向こうともしない。やがてエレベーター・ホールへたどり着き、彼が歩度を緩めると彼女もそれに合わせた。

「どこへ行くんだ……？ みんなのところか？」

私はどこへも行きたくない。もう何もかもいやなんだ」

ナナシは海人の手を振りほどいた。彼は何も言わず、また表情一つ変える気配もない。

まるでフリーズしたパソコン画面のように先ほどから一定の笑顔がこびりついている。

「……………ナ……………ナ……………」

どこからともなく、声とも音もつかないノイズが遠巻きに聞こえ始めた。

それは何枚ものベールを脱ぎ捨てながら迫ってくるかのように徐々に輪郭を帯び、初めは気のせいだと思っていたのが、確固たる異変として目の前で起こっていた。

海人の身体がみるみるうちに縮んでいくのだ。次の瞬間、彼女は眞実を知る。

戦慄が身体を突き抜けた。

「ナナシ！ ナナシい！ どうしたんだよ、さっきからぼんやりして！」

「おまえは……海人は？ 海人はどこへ行った？」

「何言ってるんだ？ ボケてる場合かよ、ルカねーちゃんたちが大変なんだ！」

意味が分からなかった。足元からこちらを見上げているのは、ダイ。海人ではない。

さっき部屋にいたときに感じたあの不可解な痛みは、もしかして私を呼び覚まそうとこいつが両肩をわし掴んだからか？ そのあと強引に手を引いて廊下を走り出したのも、ここへ連れてきたのも、表情が変わらないのも……これは、一体なんだ？

ナナシの唇は静かに震えていた。

暗い廊下の先からテンポの早い足音が聞こえてくる。ユウキ・シタラだった。

「ブラックロックシユーター BRSとリヴォルヴは取ってきたんだな？」

息を切らせながら、ユウキ・シタラは掌を開けてみせる。チップは一枚しかなかった。

「これだけしか取ってこられませんでした。いや、取ってこられなかった。

BRSの入ったチップは嚴重に保管されていて、そのケースのロックを解除できるのはノーキー博士だけなんだ」一旦は敬語で言ったのを、相手がダーだからとわざわざ砕けた口調で言い直す生真面目さが彼らしい。

「え……？　じゃあ、持ってきたのはそのリヴォルヴの入ったチップだけ？」

「そう。保管ケースのロックはノーキー博士の指紋と光彩にだけ反応するから、我々スタッフでも開けられ」

「なんでそんなめんどくさいことすんだよ！　状況わかってんのか！？」

ユウキ・シタラの冷静な物言いをさえぎり、ダーがほえた。

「いや、この研究機関にもW・A・Fのスパイがいるかもしれない。それを警戒してノーキー博士はBRSを含む機関の機密類に自分だけのロックをかけたんだ。

つまり、僕だつて疑われてるってことで」

「そんな話をしてんじゃねえつての！　いいか、KAITOは？　エンドレス・エンド？　つていうBRSと同じとんでもないのを持つてる。それに対抗できるのは、BRS。これしかない！」

ユウキ・シタラは困ったように頭に手をそえた。

「KAITO一人に対して数ではこちらに分がある。本当にあれがないとだめなのか……？」

「のき爺を連れてくるのはオイラが何とかする。ルカねーちゃんもリンも、あのレンだつてがんばってんだ。オイラたちもがんばらな

くてどーすんだよ……」ダーは自分の無力さを悔しむように拳を握り、「ナナシだってBRSがあつたほうがいいよな!？」と怒鳴つた。

「私は……」戦いたくない、と続けようとしたところに手首を掴まれ、ダーが祈るような顔で言った。「オイラ、おまえに期待してるんだ。ウロヤタン、みんなの仇、取ってくれよ」

ナナシは何も言えなくなった。

「BRSが必要かどうかは、ノーキー博士の指示を仰ぎましょう。博士に事情を説明するだけなら、なんとかなると思いますから」

「よし、そうと決まったら、行くぞ!」

「だから、まだBRSを取りにいくと決まったわけじゃ」

それには耳も貸さず、ダーは威勢よくエレベーターのボタンを押した。

銀幕模様の扉は即座に開き、「よぉーし!」とまるで自分が戦うかのような意気軒昂さでナナシを引っ張り込んだ。先が思いやられる、というふうにくウキ・シタラも続く。

訳の分からないまま動き出した箱のなかで、ナナシの脳裏に例の言葉が繰り返された。

戦え、ナナシ

\* \* \* \*

「物足りねーなあ!」

ルカは斜め十字に双剣を構えてKAITOの振り下ろしを受け止める。溜めを作ってから刀を弾き返し、右の剣を内側に薙ぐも宙返りをした相手の身体を捉えることはなかった。

戦いが始まってからというもの、ずっと防戦一方の状態が続いている。いまのような数少ないチャンスも飄々(ひょうひょう)とした動きでかわされ、物にすることが出来ない。

ルカはぎりつと奥歯を噛んだ。フェルトハットもサングラスも、

先ほどインフォメーション・カウンターの壁に叩きつけられたときにその身から離れている。所々が切り刻まれたトレンチ・コートは動くのに邪魔だが、かといって脱いでいる暇もない。

いつもの金縁取りのチャイナ・ドレス風の衣装が恋しく思えた。ふと、不敵に笑うK A I T Oの後ろにリンとレンが並んでいるのが目に飛び込んできた。

「レン、行くよ！」

こくつ、とレンはうなづき、二人は右と左の掌を合わせた。？アズル・ドライヴ？だ。

そこでK A I T Oの背中越しにチップ・インストールの白い電光がほとばしる。彼はすかさず振り返って、手にしたハンド・ガンを立て続けに発砲した。

一発は二人の頭上をかすめていき、もう一発はリンの右手首を貫通した。

「リン！？ ちくしょうっ！」

痛みを歪むリンの顔に我を忘れ、レンは右手のレーザー・ストライクをK A I T Oに向けた。

が、正面には啞然とした顔を浮かべるルカの姿しかない。

レンはとつさにうえを見上げた。狂気の影が降り注いでくる。レーザー・ストライクの照準を合わせる間もないのを救ったのは、

「うおらああああ！」  
リンだった。

金属製グローブによる渾身の一打を横っ腹に受け、K A I T Oはタワーの外壁に勢いよく叩きつけられた。手首に風穴の開いた方の拳で殴ったために激痛が走り、リンは思わず地に片膝をつく。心配そうに駆け寄ってきた二人には、だいじょーぶ！ とガッツポーズを作って見せたが、K A I T Oが反面鏡の破片を踏みならしながら立ち上がるのに気付くと、

「ちよつと……ヤバいかも……」という言葉がもれた。

「やれば出来んじゃないか。その調子で俺を楽しませろ。退屈なん

だよ！」

K A I T Oはアマミヤを勢いよく空切りさせてどなり散らす。そしてリンを中央に集結した三人の後方にある光景を目にし、彼のなかの高揚感が一気に加速した。

「オーディエンスが出来てんじゃねえか、いいねえ！」

警察やマスコミ関係の車両が大挙し、カメラフラッシュの放列が襲った。

彼はしばしスター気分に乗っていたが、物足りなさを感じてもいた。

この三人はそこそ楽しませてくれる、だが、弱い。あのハクに比べたら。

彼は表面の砕けた外壁を振り返り、その奥にいるだろうハクの姿を思い浮かべる。

やつが戦える状態にないのが残念だ。あと期待できるのは、あの？ナナシ？か。

だが、それも昨晚のことを思うと心から期待できるものでもなさそうだった。

K A I T Oは退屈そうに短く鼻を鳴らし、もう余興を終わらせるつもりで三人を振り返った。

いない。代わりに、凜となびく桃色髪の静謐せいひつさと青い瞳の凍りつくような冷気を頭上に見た。

K A I T Oはとっさにアマミヤを横に構えて双剣の振り下ろしを受け止める。

一本が肩口に食い込み、最高潮に達しつつあったK A I T Oの高揚感が弾けた。

「まだまだ……遊べそうじゃねえか」

力任せにアマミヤを振ってルカを突き飛ばすと、リンとレンが間断なく攻撃を仕掛けてきた。そうそう、その調子。K A I T Oはこみ上げてくる笑いの衝動を抑えられそうになかった。

\* \* \*

金属の衝突音、銃声、かけ声、荒い息遣い、外で繰り広げられる激闘の様子が音となってエントランス・ホールに伝わっていた。ホール自体は異様なほど静まり返り、息の詰まるような緊迫感のなか、人質は途方に暮れた目で天井を見上げたり、先ほどの混乱で傷を負った仲間を手当てしていたり、あるいはもう動くことのない血だまりのなかの友を前に嗚咽をこぼしたりしている。子供たちはそれに干渉する気配はなく、つけ入る隙一つない峻厳しゅんげんな眼差しと銃口とを突きつけて監視役に徹底していた。

そしてアンドロイド勢のなかで唯一この場にいるハクは、キヨテルらが現れてから抱いている疑問についてずっと考えをめぐらしている。

先ほどから隣にいる少女　毛先がウェーブがかつた栗色髪のおかつぱ、大きな瞳、仔猫のような低い鼻立ち、もちっとした薄紅色の頬にどことなく見覚えがあるのだ。

ただ、こんな怖い顔はしていなかった気がする。

根拠はないが、もっと天真爛漫だったとハクのなかにある何かが訴えかけてくる。

「……あの」

とつとつ耐えかねて、ハクは小さいながらも声を発した。

二、三瞬遅れて、少女はその殺伐とした感情しか知らないような目を彼女に向けた。

「あなたとわたしはどこかで会ったことがありますか？」

少女は表情一つ変えず黙っている。その鋭い眼光にハクは気圧されそうになったが、不思議と恐怖は感じない。それどころか生温かいような、切ないような妙な気持ちに駆られた。

不意に場の空気が動く。子供たちは一斉に銃口を向け、その先にはエレベーター・ホールから出てきたユウキ・シタラ、ダー、ナナシの三人の姿があった。彼らの後ろには銃を持った赤毛の少女が一

人付いている。職員用通路から出たところを捕えられたらしい。

名前はなんて言うんですか、そうハクが聞こうとした少女はすでに意識をそちらに集中させており、また無感情な横顔をこちらに向けている。その少女を含んだ場にある全ての視線が注がれるなか、ユウキ・シタラは銃口を背に受けながらのき爺のところへ歩いていった。

白い大理石に映える鮮血の赤、足元から聞こえる嗚咽、生々しい死の臭気、それらで成り立つ空間の異様さに目のやり場に困り、そして胃からこみ上げてくるものを寸でのところで抑えているというふうに。

後ろの二人は三つの銃口と眼差しの監視下に置かれ、子供たちのリーダー格とおぼしき短髪を逆立てた少年にダーは威嚇するように首をめぐらした。

ナナシはその隣でうつむいている。

まるで魂の抜け殻だ、のき爺はそう感じ、やがてユウキ・シタラが近づいてきた。

意味ありげに視線を投げってくる彼が隣に座らせられると、皆の視線は四方へ散った。

自分の監視役である赤毛の少女も新たに現れたアンドロイドを警戒している。

ユウキ・シタラは辺りをさっと見回し、素早くのき爺に耳打ちした。

が、話の核に触れる前に他の子供　ハクの隣にいるおかつぱ頭の子　に見つかり、ユウキ・シタラはびたつと動きを止めた。するとそのき爺が途端に金切り声をあげ始めた。

「うう……っ！　持病が、心臓の持病が……っ！」

いやに説明口調で言いながら、のき爺は心臓の辺りを掴んでかがみ込んだ。

「は、博士、大丈夫ですか!？」

ユウキ・シタラはとっさに手を回し、『BRSを取りに行きます

か?』と耳打ちした。

のき爺は『分かった』と声を出さずに口を動かした、『我ながら三文芝居だな』というのも付けたして。ユウキ・シタラは真面目な顔でうなづいた。

続けて、彼はのき爺の肩を支えながら立ち上がった。子供たちが銃口を向ける。職員たちが「持病……?」「あつたのか……?」とひそめき合っているのがのき爺には怖かった。

「ちょっと、博士の薬を取りに行かせてもらいたいのですが」

赤毛の少女が遠くにいるリーダー格の少年を見る。そこでユウキ・シタラは彼に向けて同じことを言い、しばし赤毛の少女とリーダーとの間で表情のやりとりがあった。

その間ものき爺は「うう……」と苦しむ演技を続けている。

「し……」「え、なんですか、博士?」「し……ぬ……」

「しぬ……死ぬ、死ぬと言っています! お願いです、早くいかせてください!」

ユウキ・シタラの熱演にもリーダーは小首をかしげたが、やがて『連れていってやれ』と赤毛の少女に顎でうながした。

よし、と半死人を演じるのき爺が腹のなかでガッツポーズをしたのは言うまでもない。

赤毛の少女に銃口を突きつけられながら進んでいくと、不意にガラスの破碎音が盛大に響き渡った。ユウキ・シタラが即座に振り返ってみるに、割れ砕けた大きな二連窓とハクのところまで倒れているリンの姿が目飛び込んできた。苦しそうに身じろぎする彼女の肩や頭にはガラス片が付着しており、ガラスを突き破って吹き飛ばされてきたのが理解できた。

そして彼女を吹き飛ばしただろう犯人は　　うすら笑いを浮かべながら窓越しに立ち、リンにハンド・ガンの照準を合わせている。とどめを刺すつもりだ。

ユウキ・シタラはとっさに走り、ポケットからチップと短い切れ



込みのある細長いカードリーダーを取り出してインストール、そのままそれをリンとハクの頭上に投げた。

「ハク！」

彼の叫びに呼応するようにデバイスから白い電光がほとばしり、それが目くらましとなつてK A I T Oの判断を一瞬遅らせた。その隙をルカが突き、銃弾が放たれることはなかった。

リンは命拾いしたことに喜ぶより先にきよんとしている。

リヴォルヴを肩に担いだハクが、不敵な笑みを浮かべてこちらを見下ろしているからだ。

「おう、大丈夫か？」

「え？ あ、うん……」

左手を差し出され、リンはまごつきながらもその手を取って立ち上がった。

彼女の衣服や皮膚はいままでの戦闘であちらこちらに切り傷が走っている。

「あんた、本当にハクなの……？」

「わりい、ちよつと待っててくれ」

左手を上げて言葉を制し、ハクはおかっぱ頭の少女のところへ向かった。

リンも含め、この場にいる誰もがハクの変貌ぶりに啞然とし、子供たちは一様に警戒心をむきだしている。おかっぱ頭の少女もその例外ではなかったが、ハクは気安く話しかけた。

「また逢えるだなんてな……そういや、ここが？ カコの世界？ だつてことを忘れてた」

ハクは少女の頬にそつと手をそえる。

その手を振り払い、少女は銃口を突きつけた。

「だけど、話をすんのはまた今度な、エマ」

言つて、ハクは少女の額を指でピンつとはじいた。

瞬間、脳震盪のうしんどうを起こしたようにふらふらと倒れ込む少女。

子供たちは即座に銃撃体勢に入ったが、そこでのき爺が全力疾走

を開始した。

どちらを撃てばいいか分らないという間が生まれ、リンが天井すれすれまで跳躍すると子供たちは彼女に向けて銃火を切った。

その間にハクが素早く移動し、一人、二人、額にデコピンを打ち込んでいく。

「リン、ハク、ダー、そしてナナシ！ わしが帰るまで、一人たりとも殺させるなよ！」

激しい銃声のなかのき爺が怒号を飛ばし、「りょーかい！」とリンは答えた。

彼女はどこに銃弾を受けるでもなく着地、「おしおきだー！」と叫びながら次々と子供たちをデコピン葬にしていった。ダーもリーダー格の少年の腕に噛みついて銃撃を阻止したのだが、他に二人の監視役がついていたために万事休すだったころをハクに助けられた。本来なら彼を助けて然るべき位置にいるナナシは、まるで立ったまま燃料切れでも起こしたかのように足元を見つめたまま微動だにしない。

「姉さん」

敵リーダーの額にデコピンを打ち終わったハクが、何か悪い予感がしているというふうに声をかけた。ずばり、その予感は当たったらしい。ナナシは一切の反応も見せず、周囲で騒ぎがあったかどうかさえ気付いているか怪しかった。

呆れとも残念がるようにもつかないため息を短く吐き、彼女に声をかけるのはダーに任せて、ハクはホールを見渡した。十人ほどいた子供たちはこの一分あるかないかの間に全滅。

気絶させ損ねた子供もいるが、人質が自動小銃を奪い取ったことで立場が逆転している。

リンは傷を負った人々に声をかけ回ったあと、こちらへと向かってきた。

その彼女から人混みのなかで仰向けに倒れているおかつば頭の少女 エマ・シンプソンに目が移ったのは、何も偶然のことではな

かった。

「こつちはもう大丈夫。コドモたちは気絶してるし、武器は全部取りあげたから」

「んなことより」言葉半ばに、ハクはグーを作った親指で後ろのナシを指した。

「姉さんのことは任した。外にいんだろ、KAITOは」

「うん。レンとルカが戦ってる」

「そいつは心配だな。ちよっくらぶっ飛ばしてくるか」

「やつと笑い、ハクは玄関口へ向かって駆けて行った。ナシには一瞥いちべつもくれなかった。

彼女がどうしてあのような状態なのか、それはもう一方の人格が表に出ているときに意識の奥底から見て知っているが、信じている。いま一度立ち上がると、信じている。

\* \* \*

「……待たせたな」

のき爺がわき腹に手を当てながらやってきた。ユウキ・シタラが彼を出迎える。

「あんまり無理しないでください。さっきのうそが本当になりますよ」

「無理をさせたのはどこのどいつだ、まったく」

互いに親愛感のこもった微苦笑を浮かべ、ユウキ・シタラは彼に肩を貸した。

「のき爺が走ってんの初めて見たよ。」

いつも椅子に座ってぐでーってしてるところしか見たことないのにとリン。

「人間ってのはおまえらのようにいつまでも元気じゃないが、わしみたいなジジイでもな、死ぬ気になりやなんだって出来るんだよ」

「よかった。のき爺は、いつも通り元気一杯だね」

「……ああ、わしは、な」

やや含みのある声で言っつて、のき爺はホールの光景を左からすうつと見ていった、

とっさに目を覆いたくなるのをこらえ、どうして彼らを守れなかったのだろう、誰があんな子供たちに狂気と銃器とを持たせたのだろう、冰山キヨテル、あいつ、あいつが……自分のなかで様々の感情が複雑に交錯していき、視線は最後ナナシへと行き着いた。

ふとユウキ・シタラの手から離れ、しばしまごついたのち、彼はナナシの手に触れた。

反応はない。その生きたまま死んでしまっている彼女に、のき爺が言葉を紡いでいくのを、リン、ユウキ・シタラ、ダーの三人が、祈るような目で見守っていた。

「いちおう、BRSは持つてきた。だが、無理して戦う必要はない」  
びくつとナナシの肩が反応し、そのうつろな瞳がゆらりと のき爺に向いた。

「ここにはリンがいる。レンがいる。ルカも、そしてハクも、役に立たないかもしれないが、わしらもな。おまえは一人じゃない。他にいる全員でKAITOと、あのクソ氷山の小僧を倒す。やつらの手に掴まっていない職員の通報のおかげか、警察だつて動き出した。だから、おまえが無理して戦う必要はないんだ。苦しいんだろう？

ナナシ」

しばし、間。「オイラは……？」と小声で言うダーの口をぴしゃりとリンがふさいだ。

「……もし」

長い沈黙のあと、ナナシは消え入りそうな声で言った。

「このなかの誰かが死んだら、それはきつと、私のせいだろうな」

「それは違う。確かにおまえの力を、みんなは期待しているが」

ナナシが手を差し出す。それが何を意味しているのかのき爺には一瞬分からなかったが、すぐ自分の掌に持たれている物を要求されているのだと気付いた。

のき爺は崩れかけの積み木にボールを落としてしまうのが怖いようにためらった末、その掌にBRSの入ったチップを落とした。「……分かっているんだ。私には、戦うことしか出来ないんだってことを」

BRSを握りしめ、ナナシは亡霊のような足取りで歩き出した。

たまりかねてリンが後を追い、何言がはやし立てたが、彼女は聞く耳を持たなかった。

ナナシの目は振り返る直前までうつろだった。いまずぐにでも例の地下室に戻って二度と目覚めることのない眠りにつきたい気持ちと、仲間のために戦わなければならない使命感とがせめぎ合い、爆ぜて、そのあとに広がったのは取り留めもない？無？だった。

いまの彼女は何も考えていないし、何も考えたくないだろうし、ただ機械的に両足を動かす、またそうしなくてはならない自分の宿命に苦痛を感じているだろうということ、その背中からありありと分かって、のき爺は大きな罪悪感にとらわれた。

かといって彼女を引きとめる術もなく、彼女が灰色の空から注がれる不吉な光の下へ出ていくのを、ただ見つめているほかなかった。

ツル、ゾウ、イルカ、ネズミ……様々な色の動物たちが滑らかな木製のダイニングテーブルのうえに無造作に置かれていく。

この非常事態のなかにあつて、元はDr・フィールグッドの私室であつた部屋でミクはいつもと変わらず色紙を折り続けている。

のき爺や彼の機関の人間は真つ先にミクのことを心配したが、冰山キヨテルの計画が何であれ、特別害のない彼女に手を出すとは考えにくいし、またそうであつて欲しかった。

しかし、部屋を満たすまるで時間という概念が存在しないというような底抜けの静寂が、金色のドアノブを回す音でいまゆっくりと破れていった。ミクは手を止めて顔をあげる。

堅牢なマホガニーのドアが軋み、やがて一人の男が入ってきた。

「鍵もかけないなんて、不用心もいいところですね」

ミクはそのシニカルな声に聴き覚えがあるし、またその姿形にもよく見覚えがあつた。

男が何かを言う。凍りついた空気が爆散するような音が響き、主人が赤い液体のなかで倒れている。そして以来、主人は自分の目の前に姿を見せることはなくなった。ミクは目を通して得た映像を記憶回路に蓄えているだけで、男の名前が冰山キヨテルだということも、また彼が主人であるDr・フィールグッドを射殺した張本人であることも知らない。

そもそも人間的な概念を一切備えていないのだ。

したがってひたすらきよとんと、値踏みするような目付きで部屋を見回しながら近づいてくる冰山キヨテルを見つめていた。その手にはまるでスポンジ・ボールを弄ぶもてあそような軽々しさと銀色の銃身を持つデザート・イーグルが握られている。

「ここで僕があなたを殺したら……いや、語弊がありますね。

?壊したら?……僕は、人として?最低?ですかね?」

もったいつけた言い方をしながら、キヨテルはミクのこめかみにデザート・イーグルの銃口を突きつけた。

「あなた方アンドロイドに？死？という概念はない。

ここで僕が銃弾を撃ち込んでも、それがもたらす結果は機械とシステムの破壊であって、殺人ではない。あなたは人手とパーツさえあれば何度でもよみがえる。

そうやって永久不滅のシンボルとして、フィール博士はあなたを創った……」

親指に力を込めて撃鉄を起こすキヨテル。それでもなお、ミクは何も知らない純粹無垢な少女の目で彼を見上げるのをやめない。

「まさか、思いあがっていたりはしませんよね？

あなたはフィール博士だけでなく、その歌声によって多くの人々から愛された。

救われた人だっているでしょう。機械音声の何がいいのか僕にははなはだ理解しかねますが。音楽には理屈で語れない不思議な魅力がある。僕もね、ピアノが弾けるんですよ」

ふと引き金にかけられた人差し指の力が緩む。

「それであなたみたいに人を救えたら……僕も、こんなことにはならなかったのかもしれないね」

含みを持ったキヨテルの声が終わると、えたいの知れない妙な沈黙が続いた。

あるとき、キヨテルは小刻みな振動を内ポケットに感じ、携帯端末を取り出した。

「カタストロフの配線作業が終わりましたか。分かりました、エア・ポートに向かいます」

短く答え、キヨテルは通話を切った。

二、三件非通知で着信履歴が残っているが、そのままポケットに戻した。

次にキヨテルはデザート・イーグルを持った手ともう一つの手を後ろで交差させ、あずき色の絨毯の毛並みを爪先でなでるように歩

きながら窓際に立った。

ガラスの全面に広がるビルとビルとがひしめき合う光景は、まるで都市という生き物が水のない水槽のなかでその途方もない巨体を横たわらせているかのようにキヨテルは感じた。

なんて乾いた生き物だろう。空はまるでその生き物の憂鬱や不安といった禍々しい負の感情を反映させたように陰惨で、どこどこまでも灰色が重く塗りたくられている。

「警察が動き出したみたいですね」

眼下にのびる一本の道路には警察車両が絨毯を敷き、またエア・グライドらしき機影が遠くの空に見える。このタワーには地下駐車場以外にもいくつも出入り口があって、そこを伝って外に逃げた職員らが通報したのだろう。想定してある事態だ、おどろくに値しない。

「カタストロフはすでにカウント・ダウンを開始した。

たとえ僕が死んだって、時間がくれば発動する。世界の終わりだ。警察のちよつと遅れてくる癖は、いつの時代になっても直らないみたいですね」

嘲るように言って、キヨテルは再度ミクを見た。

「せっかくだ。カウント・ダウンまでに、あなたに歌ってもらいたい曲があるんですよ。」

もちろん、あなたの歌です」

キヨテルはそつと右の人差し指を立てた。

都市並みを見下ろしながら、あたかも自分がこの世界の主というふうに。

「?ワールドイズマイン?」

\* \* \*

キヨテルが見つめていた陰惨な空の下に、ナナシは出ていった。

彼女の姿に気付き、それまで斬り合いを演じていたハクとKAI



TOがふと構えを解く。

ハクは「これからだつてのに」というふうに短く鼻を鳴らし、K A I T Oは得意げに笑った。

「ナナシ！ 本当に大丈夫なの……？」

リンが横から必死に呼び止めるが、瞳の動き一つの反応も彼女は見せなかった。

「よう」K A I T Oが軽々しい声を発する。

「死んでなかったんだな。ちょっと安心したぜ」

ナナシの唇は真一文字に固く結ばれ、目はじつと相手を見据えている。

が、そこにいつもの射抜くような鋭さはなかった。ハクが来るまでの戦いで傷つき、不覚にもレンに肩を貸してもらっているルカも、ものの二、三分しか野生の解放を得られなかったハクも、いまになつて駆けこんできたダーも、この場にいる全員がナナシの異変を直覚し、緊張と不安の色を隠せないでいる。ただ一人、K A I T Oを除いて。

「おまえは強い。記憶がそう語っている。

ついでに、『俺は一度おまえに負けている』と、『リベンジを果たせ』と」

彼は楽しそうにポケットからチップを取り出した。

ついで人差し指と中指に挟み、挑発するように掲げた。

「持つてるよな？ エア・グライド」

二、三瞬遅れて、ナナシはパーカーの両ポケットに手を入れた

メンテナンスの際に抜かれているかと思っていたが、それは誰かがこうなることを予見していたかのようにポケットに残ったままだった。

彼女はB R Sの入ったチップを代わりにしまつて、エア・グライドのチップをためらいがちな仕草でK A I T Oに見せた。

「一対一でやろう。邪魔はなしだ」

「かっこつけんな！ オレたち全員と戦うと負けるからだろ！」と

レンが罵声を飛ばす。

ガキの負け惜しみとばかり一笑に付すK A I T O。

「安心しろ。すぐに殺してやる」

言って、K A I T Oはチップをインストール。

稲妻の尾を引きながら、メタリック・ブルーのエア・グライドで空を駆けのぼっていく。

機体は未来世界からチップに入れて持ってきたものだ、例のK A I T Oの記憶を辿って。

そして彼はあるところで停止し、ナナシを手招きする。

当の彼女は、チップを見つめたままだった。

「あねさん。戦う気がないんなら、それ、あたしが受け取るぜ」

右肩にリヴォルヴを悠々かつぎ、険しい顔をしたハクがもう一方の手を伸ばした。

「そっちの方が現実的ね。いまのあなた、使い物にならなそうだもの」

ルカが棘のある冷淡な声で言う。続いて「そんな身体で言われても説得力ねえ……」というレンの独りごちに目ざとく気付くと、

彼女は彼を突き離し、まじまじと言った。

「一つ言っておくけど、コドモのお守りをしながら戦う私の気持ち、あなたに分かるの？」

レンは苦虫をかみつぶした顔になって一言も反論できなかった。

「ナナシ……」リンが歩み出る。

「いいんだよ？ ウロイエロー・スペシャルエディションがあんなやつすぐに倒すから」

「ウロイエロー？」とナナシを除くその場にいる誰もが素っ頓狂な顔になったが、リン本人はいたって真剣な表情だった。

「……大丈夫。私は大丈夫だ」

そう自分に言い聞かせるように言ったナナシの声は、しかし、芯が通っていなかった。

空洞にこだまする乾いた金属音のようだった。

彼女は地下室では怖くて取りつけることが出来なかった黒い腕時計をポケットから出し、密かにまぶたを閉じた。腕時計を手首に巻く間はひたすら無心に努めた。脳裏によぎる暗黒の場面を、一枚浮んでは消し、一枚浮んでは消し　それを無限に繰り返し、ようやくMEIKOの忘れ形見である腕時計をはめることが出来た。傍から見ればそれは十秒あるかないかの出来事だったが。

ナナシは満身創痍の身体を引きずるように前へ出て、チップをインストール。

モノトーンのエア・グライドに乗り、KAITOのいるところまで機体を急発進させた。

「本当に行かせてよかったのかしらね」

頭上を仰ぎながら、ルカが誰に言うでもなしに呟いた。

「だめだな、ありや」隣にいたハクが素っ気なく答える。

「あら、ずいぶんとはつきり言うのね」

「あんたもそれを分かってて止めなかったんだろ？」

二人の背後ではダーが「がんばれナナシイイイ！」とありったけの音量で叫んでいる。

つい先ほどまで自分が口を開こうとすると決まって誰かが喋るので、半ば蚊帳の外状態で悶々としていたために尋常でない熱の入り方だった。

リンとレンも彼に続きナナシに声援を送っている。

ルカとハクは彼らを振り返ることもなく、淡々と会話を続けた。

「あなたが止めなかったのはどうしてなの？」

「強いて言うなら、賭けたからさ。あねさんが立ち上がるほつに後ろのやつらだつてきつとそうだけ」

「私はあなたたちみたいな考え方は出来ないわ。現実的に物事を考えるタイプなの」

「……それで止めなかったってことは？」

ハクは人差し指で左の頬を軽く押し上げ、何か分かったというふ

うに微笑した。

ル力は表情を変えない。その頬には幾筋の刀傷が走り、せつかくの高級服もぼろぼろだ。

「勝って……ナナシ」

二重の意味を持った言葉が、誰の耳にも届かない声でぽつと発せられた。

ナナシがK A I T Oのいる高度にまで達しようとしている。

\* \* \*

「おいおいおい……いつまでそんなしみつたれたツラをしてるつもりだ？」

ナナシの機体とタワーの壁面すれすれにエア・グライドを並走させながら、K A I T Oは呆れ気味に言った。

「俺はおまえに期待してんだ。せいぜい裏切ってくれんなよ」

彼はアクセル・ペダルを踏む足に力を込めた。

「……行くぜえ！」

急加速したK A I T Oに遅れてナナシもアクセル・ペダルを踏み込む。

重力の枷から解放された駿馬のごとき速さで並走する二つの機体、その爆発的な風圧によって各フロアの窓ガラスが連鎖爆弾のように砕け、さながら激しい水しぶきだった。

K A I T Oが左にレバーを切つて急接近。ナナシはとつさにクロガネをインストール、左手首に鋭い痛みが走ったが、それは胸中にわだかまる罪悪感から生まれた錯覚だった。

「ぼさつとしてんじゃねえ！」

アマミヤの縦一閃を弾き返し、ナナシはその反動で後退した機体に鞭を打つ。

一度、二度、三度、四度、刃と刃が短い間隔で衝突を繰り返す。一歩間違えれば絶壁に激突して即爆散という状況下のなかで二人の

機体のアクセル・メーターはその針を振り切っており、減速という概念は入り乱れる猛風と刃の交錯とによってとうにぶち壊されている。

両者はそのまま絶壁を駆けあがっていき、ある瞬間、虚空に飛び出した。

のち、散開。K A I T Oの目がエア・ポートの中心に滞空している所属不明のエア・グライド三機を捉える。更にその下にはラヴのメンバーと思しき二人の子供が二名の研究員を人質に取り、警察官を相手にしている。キヨテルの姿はなく、代わりに？カタストロフ？が五基、星形に並べられているのが子供たちの後ろに見えた。

にやつ、と彼は口角をつり上げると、ナナシから目標を変更。警察と分かったエア・グライド三機めがけ機体を直進させ、うち一機の操縦者の頭を振り抜きざまアマミヤではね飛ばした。途端に制御を失った機体はあらぬ方向へと流れていき、エア・ポートの隅に墜落。

他の二機も即座に応戦態勢に入ったが、反応が遅れたために、片方は背後を取られ、もう片方は銃火を放とうとしたところを下から突き上げられ、それぞれ爆散した。

わずか十秒ばかりの間の出来事だった。

K A I T Oは黒煙を突っ切って再びナナシと対峙する。

同じ直線上、吹きつける風の向こうからやつがやってくる。一時は心底落胆させられたが、彼はいまユートピア・タワーの頂上よりも更に更に高いところで踊り狂っているような高揚感の絶頂にあった。舌なめずりをし、柄を握る手に力を込める。そして迫りくる相手の姿がコマ送りとなり、その最後のコマが終わろうとする刹那、渾身の一太刀を払った。

瞬間、空気が弾けた。突風が巻き起こり、K A I T Oはロング・コートが肩から斜めに引き裂かれていることに気付く。刃は中身までは到達していなかった。K A I T Oは即座に振り返る。

ナナシはいま旋回しようとしている。いい、最高にいいぞ。生と

死の狭間を通り抜ける瞬間の、あの言いよつのない快感がいまいちどやってこようとしている！

「俺は生きてる！ 生きてるんだ！」

K A I T Oはそう叫ばずにはいられない。

もはや命のやりとりのなかでしか、彼は生の実感を得られないのだった。

\* \* \*

「派手にやってますねえ」

エア・ポートへとやってきたキヨテルが涼しげな顔で言った。

そんな悠長さとは裏腹の激しい戦闘が上空で繰り広げられている。何度となく交錯するモノトーンとメタリック・ブルーの機体、ほとばしる火花、甲高い金属音。それをさも日常的光景と言わないばかりの足取りでエア・ポート中心へと向かう彼の後ろには、ミクがいた。

片手を胸にやり、不安とも呆然ともつかない口付きで、キヨテルが肩越しに視線をやるとミクは彼についていった。キヨテルを自分の世話をしてくれる機関のスタッフだと思いきこんでいるらしい。

キヨテルは二人の研究員を人質に取る子供たちと視線をかわしたあと、ある存在に気付いた。全身が真っ黒に煤けた人間がゾンビのような足取りでこちらに歩いてくる。身体つきからして男、より距離が縮まってくるとその半焼死体が何者なのか分かった。

「Dr・マルチル……」

不吉な物の名を呼ぶように独りごち、キヨテルはじつと彼をにらみつけた。

両足に大鉄球をつけているように歩いてきた彼は、二メートルばかり手前で倒れ、地べたに這いつきもがくその姿は差し迫った死に抵抗せんとする執念深さに満ちていた。

キヨテルはそれを冷ややかに見下ろすばかりで、差し出すべき救

いの手はデザート・イーグルと共に尾てい骨の辺りで組まれたままだ。

「なるほど。警察はあなたを使って、僕を説得しようとしたのですね」

およそ瀕死の人間に話しかける口調ではない声で、キヨテルは淡々と続けた。

「しかし、その目論見もK A I T Oによって打ち砕かれてしまった……。残念でしたね。」

もっと早くに来ていれば、僕はまだここでカタストロフ設置の指示をしていたというのに」

キヨテルの顔が何気なく五つ星形に並べられたカタストロフに向く。

自分たちで用意した黒い送電線を使い、タワー内部から電気を引いている。ここまでの面倒をかけたのは、キヨテルとK A I T Oにとって、トランジスタを三百六十度一望できるこのエア・ポートに最後となるカタストロフを置くことに意味があったからだ。

「Dr・マルチル、あなたは実に都合のいい男だ。初めW・A・F側であったあなたは、僕がこの？カタストロフ計画？を持ち出すとあっさり寝返った。そして次に、あなたは自分の立場が危ういと知ると一日も持たず全ての真相を警察に告白した。」

そんなので？スパイ？をやっていたんだから、なんとというか、頭が下がりますよ」

言葉にならないうめき声をあげながら、マルチルは先が震える左手を伸ばした。

それを軽くあしらい、キヨテルは一枚のチップを胸ポケットから取り出した。

「ところで、Dr・マルチル。チップ・インとは偉大な発明だと思いませんか」

キヨテルはいつも使用している携帯端末の底部にチップを挿入、白い電光のほとばしりのなかから？ブランド・ピアノ？が出現した。

黒い光沢を放つ屋根にすつつと手を滑らせていきながら、彼は話を再開した。

「このピアノ、院の音楽室から持ってきたんですよ。改めて言う必要もないほど、このチップ・インの技術はトランジスタに深く根付いています。チップとインストール・デバイスのセットがあれば、このように世界の至る所がコンサート・ホールになる。撤収もチップ一つでこなせますし、こういった使い方なら騒音嫌いを除いて誰にも危害を与えることはありません。ですが、チップの中身がピアノではなくて人を殺してしまうような兵器だったら？」

言いながら、キヨテルは屋根を開き、それを支える突上棒を伸ばす。

「それこそ、世界中を震撼させるような大型の機械だって易々と子供に持たすことが出来る。カタストロフの設置は滞りなく進みましたよ。発電所に忍び込んだのがばれたって、『子供のいたずら』で言い訳がきく。」

教育がよく行きとどいていたのか、それを使うまでもありませんでしたがね」

鍵盤のふたを開け、近くで倒れていたピアノ椅子を持ってくると、彼はそこに座った。

デジタル式に時刻を表示する携帯端末を屋根に置き、静かにまぶたを閉じる。すぐ真上を行き来するエア・グライドの風切り音、ピアノの下から聞こえるいびつな呼吸音、殺伐とした空気の流れ、それらを一息に吸い上げ、口から吐き出したあと　彼の目は見開かれた。

「Dr・マルチル、カタストロフ発動まで時間があります。そう、一曲分の時間がね。」

この世界で恐らく最後になるだろう音楽を、あなたと、そして全ての人に捧げましょう」

ピアノの向こうにいるミクを一瞥、彼の十指が鍵盤のうえでバレエ・ダンスを始めた。



自分の持ち歌であるのに、ギターとドラムスとで軽快に演奏される原曲とはかけ離れた悲しいパヴァー又調のアレンジがなされているためか、伴奏が一番の盛り場を迎えてもミクに歌おうとする気配はない。

ただ、その低音と高音とが絶妙なタイミングで交錯する旋律のなか、Dr・マルチルは静かに事切れ、ナナシとK A I T Oの戦いはいまなお熾烈を極めていた。

「まだまだあ！」

上空で刃を拮抗させていた二人。

K A I T Oが裂帛れっぱく一閃、ナナシを吹っ飛ばした。

続けて攻撃を加えようとアクセル・ペダルを踏みかけた彼の目にキヨテルの姿が映る。

ナナシは即座に体勢を整え、頭上で滞空しているK A I T Oの視線が自分より下方へ向けられていることに気付いた。

「そろそろ？シヨール・タイム？か」

そう得意げに口角をつり上げていると、ナナシがクロガネを振り上げて急接近してきた。

K A I T Oは機体を上昇させて突進をかわし、振り返った彼女の顔を見据えて怒号を放つ。

「決着をつけようぜえ、ブラックロックシューター！」

意気揚々と彼の左手が取り出す。超高出力砲、？エンドレス・エンド？。

彼は勢いよくアマミヤを機上に突き立て、右手首のデバイスにチップを挿入した。

ほとばしる白い電光。そのひと際大きな輝きが意味しているのは明白、ナナシは機体を急発進させて阻止に向かうも 瞬間、一筋の青白い光条が彼女の横を通り過ぎていった。

その彗星がごとき光の尾はエア・ポートの外縁をかすめながら地上へと流れ、彼女をにわかに戦慄させた。

「撃たないとも思ったのか？ この俺に限って？」

K A I T Oは高らかに哄笑する。

右腕はすでに原型からかけ離れ、純白の鋼に青いラインが入った砲塔と化している。

その砲口に覗く直径幾ミリの吸い込まれそうな暗闇に、ナナシは絶望感にも似た想いに締めつけられた。あの暗闇に対抗できるのはBRSしかない。そうと頭で分かっても、足はアクセル・ペダルを踏み、手はクロガネをかかげて、あくまで近接戦闘による決着を求めている。が、甘かった。二発、三発、立て続けに放たれる青白い光条に翻弄されているうち、彼女のなかの直感はある確固たる輪郭を帯び始めて彼女を急きたてた。？BRSを使い？、と。

「おい、どうしたよ。」

おまえは地上に被害が出ないように高いところを飛び回っているよのだが……」

K A I T Oはエンドレス・エンドを下に差し向けた。

その砲口が獲物と定めているのは……ミク。

「いい加減にしないと、当てちまうぜ？」

横目に怪しい光を放ちながら、K A I T Oは言った。

ナナシは息を呑む。左手の先はすでにポケットのなかでチップに触れている。

頭はせわしく考えを働かせている。もうとっくに答えは出ているというのに。

「数えるぜ。三……二……」

ナナシは悔しそうにきつくまぶたを閉じ、そして。

「許せ、M E I K O」

BRSをインストールした。

「そうこなくちゃなあ……おまえは最高にいい判断をしたよ」

「ふざけるな。おまえがいなければ、私はこんなものを使わないでいられたんだ」

ナナシは忌々しそうに言う。

その左腕を、黒き鋼の、盟友を抹消したこの世で最も忌むべき兵器に変えて。

「なんだ？ おまえは使いたくないって言うのか。そしたらなんで使っているんだ？」

ナナシは奥歯を噛む。

「そうでないとな俺に勝てないからだ。おまえがそいつを使ったがらないのは、あのMEIKOってやつが原因なんだろう？ 記憶が教えてくれているよ。確か、そうだったな。

俺が命令したんだ。あのとき、おまえに引き金を引けと」

「やめる！」

ナナシは自分を感じがらめにする過去を振り払うかのごとく、決然とBRSの砲口をKAITOに向け、チャージを開始した。左目に青い焰が灯り、徐々に大きなゆらめきとなっていく。

「俺はこれから夢の世界へいく。キヨテルが言っていた。そこは願いが何でも叶う場所で、俺は元の人間に戻る。だからこれが最後だ。せいぜい派手な花火を撃ち上げようぜ！」

波動を収束する砲塔から発せられるうなり、キヨテルが弾きならす渾身の奏樂と相まってそれは一体化した交響曲となり、ゆるやかにテンポを高めて終結<sup>コダ</sup>へと向かった。

そしてグラウンド・ピアノの長い低音が止んだ一拍のち、終の一音が高らかに鳴った。

衝突する二つの波動。超新星爆発のような光の広がり。それは世界中にその破壊的な音を轟かせて、あとには深々と、青白い粒子が具現化した残響のように虚空を舞った。

背中に強い痛みを感じる。

意識が濁っていて、錘おもりがつけられているかのようにまぶたが重い。薄目に見えるのは濃淡のついた灰色の広がり。恐らくは空だろう。そこで誰かに呼ばれた気がした。長い時間をかけて声が聞こえたほうに顔を向ける。

正面にいるのは誰だ。青い髪、茶色のロングコート。

よかった。瞳の色が真紅じゃない。

「海人」

半ば夢中でその名を呼んで、よろめきながら立ち上がった。

それを見計らっていたかのように、海人はさっと拳銃を抜いた。

「え？」

信じられなかった。右肩に痛みが走る。

一瞬、身体の制御が効かなくなり、BRSの重みに引つ張られるように倒れ込んだ。

「海……人……？ どうして……？」

次に面を上げたとき、ダーク・スーツを着た人間が海人と同じ位置、姿勢で立っていた。

銃口は変わらずこちらに向けられている。

「彼も無理をしてくれる。危うく僕は死ぬところだった」

言つて、キヨテルは耳の具合を確かめるように一、二度、小首をかしげた。

やはり先ほどの、青白い光の衝突による爆音で左耳の聴力が失われている。

むしろこれで済んだのが奇跡だと考えるべきだ、自分はあの爆発の真下にいたのだから。

「うそだ……また消えた……」

「何を言っているんです？ よく聞こえませんか」

「おまえは誰だ？ 海人をどこへやった!？」

「K A I T O ? 彼なら……」

辺りを見まわし、先ほどの場所にぼつねんと置いてあるグラウンド・ピアノ、その下の焼死体、倒れ込んだまま起きあがってこない人質と子供たちの四人、それ以外は特に目ぼしい物がないのを確認すると、「あなたがどこかへ吹き飛ばしたんじゃないんですか？」と興味なさげに言った。

K A I T O という？ 駒？ はもう充分にその役割を果たした、このまま手元に残っていても邪魔になるだけだ。

「違う！ いままで目の前にいたんだ。さつきも、地下室にいた。だけど、消えるんだ。ある瞬間、別の誰かにすり替わる。どうして？」

キヨテルはしばらく考えるように黙り、やがて言った。

「それはたぶん、？ 幻？ ですよ。頭の回路に異常があるらしい。

いや、ひよつとしたら誰かの手によって仕組まれたのかも」

「どういうことだ……?？」

「W・A・Fのアンドロイドたちは、とあるプログラムを施したことで無差別に破壊と殺りくのみを繰り返す機械となりました。W・A・Fはこれを？ 暴走？ と呼んでいます。正確には違う。彼らはいたって正常に作動し、冷静に、充実に、与えられたプログラムを果たしただけ。これが意味することが分かります？ すなわち、感情も、意思も、あなたが見ている世界も、すべて、誰かに仕組まれたプログラムに過ぎないってことです」

ナナシのなかの、いくつも壊されたうち最後の壁が、ゆっくりと崩壊し始めた。

唇がわななく。視界がゆらぐ。心の一番もろい部分に開けられた穴をふさぐように、彼女は右手で顔を覆い、うずくまった。

「うそを言うな……私の見ている世界が、全部、作られたものだっていうのか？」

いまままでの記憶も、何もかも、現実じゃないっていうのか？」

「その可能性は充分にあります。何せあなたは、？アンドロイド？ですからね」

片耳の聴力を失ったためか、声が必要以上に大きくなっている。

「おまえなんかに何が分かるんだ……たったいま会ったばかりのおまえに……」

「……聞こえませんか。片耳、使い物にならなくなってるんです」

わざとらしく言って、彼は静かに銃口を下げた。

わざわざ銃弾を撃ちこむ必要がないのを、彼はナナシの姿を見て悟ったからだ。

「……もうやめてくれ……これ以上苦しませないでくれ……」

彼女はそう命乞いをするかのように暗誦し続けている。

しばらく冷めた目付きで彼女を見たあと、キヨテルの目は遠くに移った。

白い筒状の　？光の柱？が距離を開けて二つ、地上から天空へ向かって伸びている。エインセルとサン・パライソの発電所から発せられたものだ。後ろを振り返れば、ホール・フォビア、シーザリオ、更に一つ離れてグラジオラスからも同様の柱が地上と空とを繋げている。

そしてここエア・ポートのカタストロフからも光の柱が天を突き刺し、そのまばゆい光に彼は目を細めた。扉が開こうとしている、？四次元？への扉が。その時間がもう幾ばくもないのを知り、キヨテルは勝手に口が動くといったふうには話し始めた。

「このユートピア・タワー、すなわちトランジスタの中心に最後の装置を仕掛けたのは、切り開かれた四次元は一つに収束しようとする性質があるからです。グラジオラス、サン・パライソ、エインセル、ホールフォビア、各都市から発生した四次元のうねりは、ここから発生する空間に向かって集まる。そうすればトランジスタ中が四次元に呑み込まれる。

そのあと我々がどうなるか……実はね、僕にもよく分かっていないんです」

はは、と彼は自嘲気味に笑った。

「四次元世界について明確に分かっていることは、そこが死んだ人間たちの思念体 すなわち、？魂？が浮遊している場所であるということ。なぜ魂がこぞつてその場所に行き着くのかは分かりません。ただ、彼らはそのなかでしか存在することが出来ないようです。我々人類がこのドームのなかに生活の場を見出したように、彼らは自分たちが存在していられるに最も適した場所へ向かった。そこがたまたま四次元という世界だった……。」

「世のほとんどがこの事実を知らされないまま、その無限に広がる空間を利用して物資の出し入れをしている。物資が粒子レベルに分解されるのは、三次元世界から四次元世界へとまたぐ間だけで、こちらの世界につけばまた再構築されます。僕たちの身体もね。」

ただ、四次元世界にはこちらの物理法則がまったく通用しませんから、一体どのような形で我々の身体が再構築されるのか、そこが不明なんです。僕が望んでいるのは、身体が再構築されることなく、人類全員が魂だけの存在になることです。そうすれば、もう瞳の色が？黒？という理由だけで誰かがしいたげられることはありません。絶対に」

「……少々おしゃべりが過ぎました。どうやら興奮しているみたいですね。」

どうですか。その左腕の兵器で、僕を止めようとはしないんですか？せつかく種を全部明かしてあげたというのに」

ナナシは苦しそうにうずくまったまま、石化したかのように微動だにしない。

皮肉屋の性分が出てあれこれ言ったが、彼にはこれっぽっちの優越感も湧かなかった。

携帯端末のバイブレーションがピアノの屋根のうえで音を立てている。

一瞬、まごついたのち、キヨテルはためらいがちな足取りで歩み

寄っていった。

携帯端末を手を取ってみると、発信元はまたも非通知。それでも見当はついていない、恐らくはミキからだろう。タワーを占拠したときから幾度となく電話がかけられている。

振動を続ける携帯端末を右手に持ったまま、彼はピアノの下からこちらを見上げる顔と目があった。ミクだった。彼女は両足を曲げて女の子座りをし、その目はあどけない。

先ほど姿が見えなかったのはピアノの陰に隠れていたからだろう。その彼女から『どうしてこんなことをするの?』という声が聞こえた気がした。

彼はたまらなくなり、目を携帯端末の液晶に戻した。

電話は鳴り続けている。コールの回数が十を超えても、なお。

\* \* \*

エインセルの噴水広場。

クリスマス装飾の片付けに勤しんでいた住人たちは、みな一様上空を見上げて啞然としていた。不穏な空気に占められるなか、噴水の縁につま先で立ち、額に日差しを作って遠くをじつとにらんでいたカムイがくぼが呑気な声を発する。

「ま、停電もあれも昨日の雪と同じ国からの粋な計らいさ」

そしてきらつと前歯を出し、かくぼに?エリーたち?と呼ばれている女性ファン集団が「きゃー!」「もうなんでもいいわー!」と黄色い声を共鳴させた。その馬鹿騒ぎに耳を押さえながら「こんなときでも馬鹿やってる……」と心底呆れた声で独りごちたのはジャック、その隣には人差し指を唇に当てて何やら物欲しそうな目つきのワトンもいる。

あれはアイス・バーじゃないぞ、とつい先刻ジャックに忠告されたばかりだが、それでも彼は「どこからかじればいいのか」というのに鈍い頭を必死に働かせているようだった。



「ん……？」ジャックが目をこらす。他に広場にいる数人も異変に気付いたようで、そこかしこからひそめき合う声が聞こえた。

「気のせいかもしれないけど……あれ、段々横に広がっていったねえか……？」

同じく光の柱を眺めていたワトンが「うぼあ！」と急に興奮し始めた。

だからアイス・バーじゃないっ！ と指摘しかけたが、その手は力なく下ろされた。

「ま、あれが本当にアイス・バーだったらよかったんだけどなあ……」

エインセルとセントラル間。電力不足により停止したトレイン内にて。

グミは昨日から帰ってこないリンたちを心配してユートピア・タワーに向かっていた。

停車してから数十分後に突如として出現した光の柱を、乗客一同が窓に張りつくようにして見つめている。グミが見ているのはエインセルの光の柱だったが、それは徐々に横幅を広げていき、ついにはベールのようになってすっぽりとドームを覆った。

反対の車窓を見ても同様の現象が起こっている。

グミは想い人と一緒に包まるはずだった淡いピンク色のロングマフラーの端をぎゅうつと握って、「レン君……リンちゃん……大丈夫かな……」と不安げに声をもらした。

ユートピア・タワー内。停止したエレベーター内にて。

「動けよこのぼんこっツッ！」

暗がりのなか、どん、どんとリンは繰り返す壁を殴打したが、それで電気が点く訳でもエレベーターが動き出すでもなく、ただ金属音が鉄の箱一杯にむなしく響き続けた。

「もうやめて。そんなことをしてもうるさいだけだわ」ルカがうん

ざりしたふうに言った。

「だって……このテイデンもキヨテルのせいなの？」

「多分そうね。キヨテルが何かをして、タワーの電力を消費してるんだわ」

「これじゃ？ K A I T O はナナシに任せて私たちがキヨテルを作戰？ も台無しじゃん……」

「これでいよいよ、本当にナナシに任せるしかないってわけね」  
数瞬間、行き詰った沈黙が流れた。

「あ」リンは何か閃いたようにぽんと手を叩いた。

「いいこと思いついた！」

「……どうせこのエレベーターから脱出して自力で登っていくとか言うんでしよう？」

「分かってるじゃん！ それなら話が早い！」

「言つとくけど、ここからエア・ポートまで何十階あると思ってるの？ とても無理よ」

「えー……何とかなるって。レン、あんたもそう思うわよね？」

脅迫めいたリンの声に遅れて、レンが答えた。

「……無理じ」

「よしそうと決まれば早速やるよ！ 二人とも、壁際に寄って！」

聞く耳持たず、リンは腰を落として足のばねに反動を溜め、アツパー・カットを繰り出した。「デンジャラス・パ……ッ！」が、真つ暗なせいで天井との距離感が掴めず、リンは堅牢な天井に口ケツト頭突きをぶちかますことになった。

「いったあゝ……」頭がぐらぐらとゆれるなか、レンの声が聞こえる。

「大丈夫か？」

「ぜんぜんへーきつ！ ほら、もういつちよ！」

リンは「メガトン・パンチ！」「スngoイ・パンチ！」と叫びながら天井にラッシュを浴びせ、最後は「いい加減にしろーっ！」とむきになるあまりもはや技名ではなくなっていたが、その一発を

持つて天井は弾痕状にぶち破られた。

エレベーター・シャフト  
昇降路が所々につけられた非常灯の小さな光によって、その深遠な奥行きを覗かせている。

「お」ぽつつと声がしたほうを見れば、ハクが隣のエレベーターのうえに立っていた。

彼女の足元から「よっこらせっ！」とダーが這いあがってきている。

五人で二つのエレベーターに乗り込み、のき爺らはエントランスに残してあった。

「なんだ、おまえらも同じこと考えてたのか」

「やっぱり？ こういう状況だったらみんな同じことするよね！」

そう嬉々と語るリンを下から仰ぎながら、ル力は深いため息を吐いた。

「ま、もうこうなったら登っていくしかないな」

「レン、あなたまでそんなことを言うの……？」

「しよーがねーじゃん。ナナシもさ、いまごろすんごいがんばってると思うし」

このなかでまとも思考が出来るのは私だけなのかしら……と頭痛がしてくる思いだったが、その脳裏に一抹の不安が過ぎった。ナナシ。

いや、きっと大丈夫、大丈夫……ル力はそう、自分に言い聞かせた。

\* \* \* \*

ナナシはまだ動けずにいた。

BRSから体内へと毒が注入されているかのように、額を地面に押しあてたままだった。

その彼女の横をキヨテルが通り過ぎていく。ナナシは一顧だにしなかった。

「……もしもし？」

キヨテルは電話に出ていた。どういう風の吹きまわしかと、自分で自分に問いたくなる。

恐らくは終末を前にして気が緩んでいるのだろう……そういうことになっておいた。

『あ、キヨテル？ よかった、繋がった』

安堵のため息が送話口にかかる。

弱々しく、いまにも消え入りそうであるが、それは間違いなくミキの声だった。

「どこから電話をかけているんですか？ 携帯端末は前に取り上げただけです」

『病院から。担当の先生に無理を言っ、ケータイを貸してもらったの』

キヨテルは歩度を緩めて、エア・ポートの縁に立った。

『それでね、キヨテル』

「もう何を言っても遅いですよ。光の柱が見えるでしょう？ 装置は発動しました」

『うん、分かっている……』 ミキは言い淀んだ。

『わたしたちはこれからどうなるの？』

「前にも言いました。身体がなくなっ、精神だけの存在になる」  
『ルカ様たちは？』

「アンドロイドたちには魂がありませんから、僕たち人間と同じようにはいかないでしょう。ただ、彼らは通常四次元に保留される物と同じ無機物。

もしかしたら、あちらの世界でも原型を留めているかもしれません」  
『……ねえ、どうして、わたしたちはこんなことになったんだろうね』

素朴な声だったが、そこには彼女が経験してきた人生の全てが含まれていた。

キヨテルは言葉に詰まり、視界一杯に広がる都市を見下ろした。

「この世界は無限の形を持っている。百人いれば、百通りの見方がある」

どこまでも取り留めもなく続くビルというビル、窓という窓。

それは生物の表皮組織のごとき緻密さで、見れば見るほど目が痛くなってくる。

ちよつどあの辺りで自分は生まれた。セントラル、東居住区。そこでReaper<sup>リパー</sup>と罵られ、裏切られ、他人に絶望した。天空まで波頭が達した超大津波のように、光のボールが四方から押し寄せてきて、悲しみを生みだしたあの場所を、憎悪を生みだしたあの場所を、そして自分を生みだしたあの場所を　ゆっくり、しかし刻々と浸食していく。

「世の中の大半の人間はこれをおかしいとは思わない。それどころか、讚美さえしている。

違う。それは間違っているんだ。世界は永遠に変わらない、絶対的なただ一つの形を持っているべきだ。百人が見ても一通りにしか見えない形を持っているべきなんだ。なのにどうして……僕にはこの世界が禍々しく見える？　どうして他の人間と見え方が違う？

こんな不条理が許されてたまるか。僕はこの間違いを正しかった、この手で」

キヨテルは自分がいつになく本音を晒していることに気付いた。

しかし、この期に及んではさして気にすることでもない。光はもう目前に迫っている。

『……キヨテル、やっぱり、あなたはさ』

「ミキ」

キヨテルは彼女の言葉をさえぎった。

「あつちの世界で、お母さんに逢えるといいですね」

通話を切り、キヨテルは何気なく振り返った。

髪色が違う二つの、一方は元より心がなく、一方は心が壊れた、ツインテールの人形。

あんなに嫌悪していた二人が無性に愛おしく思えてきて、彼はピ

アノの近くに立つミクの隣に、一瞬、Dr・フィールグッドの幻影を見た。キヨテルは言う、ほとんど涙ぐんだ声で。

「僕は……こうするしかなかったんだ……」

そして世界は消えた。

たったいま、閃光の果てに。

t o b e . . . . c o n t i n u e d .

&lt;&lt;Chapter 4&gt;&gt; (後書き)

次回 予告

Rock・25? 決戦?

乞うご期待

## Rock・25? 決戦? (前書き)

本話では「挿絵」を使用しております。

もし挿絵表示を「OFF」にしている方は、「ON」にしてお楽しみくださいませ。



(ここは一体どこなんだ?)

青白い光のなか、海人は気が狂いかけていた。

赤、蒼、緑、黄、紫、もやがかった色とりどりの帯が取り留めもなく広がる空間を覆い尽くし、そこらじゅうから正体不明のざらついた音声が聞こえる。それらを感知する耳、目はないにも関わらず、またもがくための手、さまようための足、助けを呼ぶための口もとらない。

肉体を失ってしまったているのだ。本人の知るところではないが、彼の意識はあのおびただしい数にのぼる帯の一つとなって、この茫漠たる音と光の海をたゆたっている。

(俺は確か……シーザリオにいたはず……)

もう何度と知れず彼は自問自答を繰り返していた。そうして必死に正気を保っている。

肉体があるのならば、全身に冷や汗がにじみ、焦りが心臓を猛打して、いまにも息が詰まりそうな状態だった。

(あの男……キヨテル、冰山キヨテルだ……あいつに、俺は )  
考えるのもおぞましい。まさか自分が? アンインストール? され  
たなどとは。

にわかには信じられない、これは夢なのではないだろうか。しかし、そう考え出すときりがなく、どこからが夢で、現実だったのかの境界が分からなくなった。記憶の糸を手繰り寄せてみる。同じ黒い瞳を持った Reaper<sup>リーパー</sup>の男、やつを追うために Gnos<sup>グノス</sup>というロボットの力を借り、あの晩はクリスマス 粉雪が舞い、彼女と過ごしていた。

海人はどんどん記憶をさかのぼっていく。

日常とかけ離れた日々が始まったのはやはり、ナナシと出逢ったあの夜からだ。

もしかしてそれが夢の始まりで、いまもまだ覚めていないだけなのかもしれない。エインセル署に異動が決まる前の晩、セントラル署の寮で眠りこけている自分の姿が想像された。

即座に海人はその思いを打ち消した。ぶんぶん、と頭があるのなら振っていた。

(違う……夢なんかじゃない……しつかりしろ、俺！)

そう心のなかで息巻くも、現状どうすればいいのか途方にくれたふと彼の前を何かが流れていった。帯ではない。

きめの細かいチエーンに星のチャームがつけられたシルバー・ネツクレス。

それは魔法がかけられているのかのように弧を描きながら、ゆっくりと下方へ落ちていく。海人はそれを手に取るうとするが、しかし、肝心の身体がない。

ただネツクレスを求める思いだけが強まり、すると、周りの景色が一気に後ろへ流れた。

(動けた……?)

海人は直覚した。この世界で己を動かすのは？意思の力？なのだと。

あとは簡単だった。あまり前へいこうとする思いが強いと行きすぎてしまい、慌てて戻ろうとするとネツクレスから遙か上方へと遠ざかってしまう。その力加減に苦労させられたものの、やがてネツクレスの下降速度に合わせて移動できるようになった。とはいっても、この上も下もないような空間で、ネツクレスはどこへ流れ着くのだろう。もしかしたら永遠に落ち続けるかもしれない。意思の力を駆使してあれを自分の下へ取り寄せようという試みはすでに失敗に終わっている。この力は自分を移動させる以外には使えないようだ。

長い時間、海人はネツクレスを追っていた。ネツクレスと自分の身体　浮遊体と表現したほうがいいかもしれない　を重ね合わせ、しばし四苦八苦したのちに、海人はチャームの裏側に刻まれ

ている名前から、そのネックレスが自分の物だということが判明した。

ナナシにプレゼントしたのは自分の、そして自分のには彼女の名前が刻まれている。

アクセサリー・シヨップの若い男店主に意気揚々と言われた。

「どうだい？ ロマンチックだろ？」

自分の物には自分の名前を刻むのが普通だと思っただけに、海人は照れくさい思いで出来あがった二つのペア・ネックレスを受け取った。いま思えばちゃんと付き合っているわけでもないのに、なんて大胆なことをしたんだろう　と苦笑いがこぼれそうだった。あるとき、ネックレスは徐々に速度を落としていって、やがてぴたりと止まった。

しかし、海人はもうそれを見ていない。近くにいた他のものに心が奪われていた。

(……ナナシ、さん……)

彼女はそこにいた。まるで見えない地面と壁がそこに広がっているかのように、両膝を抱え、悄然しよっせんとしている。絶望にむしばまれた姿だった。

まぶたがないのが幸いした。あつたのなら、彼は目を覆いたくなつたからだ。

歩くような速さで近づいてみるに、彼女の左腕はいつもの形を成していなかった。

そもそも腕と呼べるかさえ疑わしい、それは何らかの兵器、砲身と化していた。

彼女はその兵器の重さに心を引きずられているかのように死んだような横顔をしている。

もう見てはいられなかった。

(ナナシさん、僕です、分かりますか?)

そう何度か呼びかけたが、彼女の顔があげられる気配は一向にない。

声が届いていないのか、あるいは首を動かす気力さえないのか。そのどちらとも言える状況が海人をより困惑させた。

(どうしたらいい……どうしたら……)

そこでいまさらのようにとある疑問がよぎった。

どうして彼女は身体を保ったままなのだろう？

自分は肉体を失い、言葉では表現しがたい？魂？のようなものになっっているというのに。

人間とアンドロイドという違いがここでも影響しているのだろうか。

よくは分からないが、海人はある閃きを得てそれを実行しようとしていた。

彼女を想う気持ち。助けてやりたい、その、真っ暗な井戸の底から。

そして海人は 彼女の心のなかに、溶けるようにすつと入り込んでいった。

\* \* \* \*

二人は初めて出会いを果たしたあの夜の、あの場所に向き合って立っていた。

常夜灯が注ぐ橙色の円のなか、静寂。

リンも、そして無惨に命を奪われた若者たちの姿もなく、海人とナナシ、二人きり。

彼女が目を白黒させておどろいているのを、海人はどこか得意げに感じていた。

「海人……？」

すると彼女は即座にかぶりを振って、「おどろきました？」と冗談を言おうとした海人はぴしゃりと平手打ちを食らったふうになった。

「いや、どうせまた？マボロシ？だな」

「ち、違います。自分でも何が起こっているか分らないけど、僕はここにいます」

「何を言ってる？ うそだ。私が見ているものは、全部、うそなんだ」

「うそじゃない！」海人は思わず声を荒げた。

一瞬、それを咎めるように身じろぎしたが、彼はその調子で続けた。

「俺はここにいる！ どうして、信用出来ないんですか？」

「……うそだつて言われたんだ……私が見ている世界は、誰かに作られたものだつて」

「それは信じるのか？ その誰かの、『おまえのしている世界は作り物だ』って言葉は」

ナナシは言葉に詰まったようにうつむいた。

それに追い打ちをかけるように胸が痛い、海人はもう感情を抑制出来なくなっていた。

いつもの敬語口調も乱れている。

体裁なんてどうでもいい、彼は自分の言葉をぶつけたかった。

「いつも思ってた。どうして、ナナシさんは、いつも悲しそうな顔をしているんだろうつて。そっぱを向いて何を考えているんだろうつて。頭がいいやつなら、分かるのかもしれないけど、俺はそうじゃない。何べん考えても分からなかった。

だから、馬鹿みたいだけど、ここで聞いてもいいかな」

海人は奥に燃えるような光を宿した目でナナシを見据えている。

その光が水晶を通して届いたかのように、長い沈黙のあと、ナナシは口を開いた。

「私は自分に出来ることをよく知っている。戦うことだ。しかし、それしかない。

リンのように笑ったり、ハクのように戦いを楽しんだり、レンのように誰かと喧嘩したり、ルカのように大事な物を守ろうとしたり。

私にはそういう感覚がないんだ。

笑ったり楽しんだり元から出来ない。大事な物は、自分の手で壊してしまった。

憧れていたのかもしれない。私も、あいつらや、おまえみたいに生きたいって」

一拍置いて、彼女は続ける。

「でも、知った。何度も戦っているうちに、私にはやっぱりそれしか出来ないんだと。

それがたまらなく嫌だった。逃げ出したかった。でも、どうにか私が私でいられたのは、記憶があったからだ。それが誰かに作られた『うそ』だったら、私は」

一瞬、何が起こったのか彼女には分からなかった。続けようとした言葉は宙を舞った。

抱きしめられている。海人に。その温もりが、底から段々と染みいつてきた。

「もう言わなくていい」

「お、おまえが聞いたんだろう……？」

「そうだけど、俺、何してんだろう……自分でめっちゃめっちゃで、よく分からないや」

彼は照れくさそうに微笑した。

「でも、分かっていることが一つある。

ナナシさんがここにいて、俺がここにいてってことだ」

海人はナナシの両肩を掴んで、力のこもった声で言い切った。

ナナシはしばし呆然ともおどろいているともつかない表情をし、やがて、彼の胸に額を押しつけた。そしてうわごとのように呟いた。

「……いままで、一番暖かい……」

海人は全身が沸騰する思いだった。自分がしていることによく気が付き、恥ずかしさのあまりどこぞへと逃げ出さなくなったが、彼女がこんな姿を見せたことがあるだろうか。

ない。彼女はいつだって孤高で、弱さを覗かせたことは一度たりともなかった。

それがいま、自分の胸のなかで安らかに息づいている。

海人はナナシを抱きしめる腕にそつと力を込めた。

「リンちゃんや、他のみんなはどこにいるんだろっ。ばらばらになっっちゃったな」

海人は彼女の耳にささやく。

「一つ聞きたい。おまえは、また元の世界で生きたいと思うか？」  
意味が分からず、海人は顔を離し、ナナシの前で小首をかしげて見せた。

「あのエインセルの、あの花屋に、リンたちや、そして私に、逢いに来たいと思うか？」

ふつと口元をほころばせ、海人は答える。確信に満ちた声だった。  
「もちろん」

ナナシはまぶたを閉じた。

その顔はもう絶望の色をしていなく、どこか満ちげでさえあった。  
チチ……チ……チ……チチ……チチ　時計の秒針が回る音が聞こえる。

どこからもたらされた音が探すまでもない、左手首にある黒い腕時計からだ。

秒針は徐々に音の間隔を狭め、ナナシの心に沸々とあの気持ちがよみがえっていく。

「世界を壊す?」といったときの、自分から一歩踏み出したときの気持ち。

まだこの世界にやり残したことがあるのなら、自分を待ってくれる誰かがいるのなら。

MEIKOメイコ、私は、もう一度生きてみよっと思っ。

\* \* \* \*

ナナシは静かにまぶたを開けた。

もう海人は目の前にいなく、青白い空間がその途方もない広がり

を見せている。

ナナシは立ち上がり、こつつと胸を叩いたものに気付いた。

海人からプレゼントされた星のチャーム。

ナナシはそれをぎゅっと握りしめて、語りかけるように呟いた。

「前にも言ったぞ。私の名前に？さん？は付かない」

彼女の声に呼応するかのように、水色の光の帯が身体の周りをくるくると舞った。

それを追った目線の先　彼女は？あの男？の姿を目にする。

相手も彼女に気付いたようで、しばし、両者は視線の鏖張り合いを演じた。

「よう」男がいまさらのように口を開く。

「こんなところでまた逢うなんてな。」

ひよつとすると、俺たちは赤い糸で結ばれてんのかもしんねえなあ」

ナナシは「カイト」と口から出かけたのをぐつとこらえる。

もし呼んでしまったら、何か自分のなかの大事な物に傷がつくと直感したからだ。

己が思うままにこの世の全てが動くとしても確信しているかのような態度、邪悪げに引きつった口角、真紅の双眸。あの男はK A I T Oでも、ましてや海人では断じてない。

その姿をまとつただけの、下劣で凶悪な？何か？だ。

「おまえ、生きてたのか」

「おかげさまでな。光がやってくるのが遅かったら、俺はあのまま地面へと激突してた。」

本当にあと数センチのところだったんだぜ？　まったく、二度も死にたくねえっつの」

海人は漆黒のロングコートが左の肩口から腰にかけて斜めに引き裂かれているだけで、それ以外に目立った外傷はなく、いつものように軽口を叩けるくらいにはピンピンしていた。

「俺はどうも、あいつにだまされちまったらしい。何も変わりやしねえ。」



俺はまだこのくそつたれな鉄の身体を引きずったまま。で、周りはえたいの知れないナゾの空間。まったく、こんなら元の世界のほうがましだったぜ」

「キヨテルというのは、あるとき、エア・ポートにいた男のことか？」

「そつだ。あいつはトランジスタを丸ごとアンインストールするつづ、とんでもねえことをやっちゃまった。俺としたことが、遊び半分で加担しちまったのが災いしたな」

はっ、とK A I T Oは自嘲気味に笑った。

「そこでだ。提案がある。もう自分で言うのもうんざりなんだが、これも記憶が語っていることでよ。何でも、エンドレス・エンドとブラックロックシューターB R Sが放つアズル・ブルーには空間の？膜？に干渉する作用があるんだとか？」

俺だけの力じゃ足りそうもない。だからおまえと俺で、この空間をぶち抜いてやるうぜ」

「そつか。いいことを聞いた。

B R Sを使ってこの空間に穴をうがてば、世界が元に戻る見込みがあるということか」

「確証はねえが、な。しかしやってみる価値はある。どうだ？ やってみないか？」

「ああ。ただし」

言葉半ばに、ナナシはB R Sの砲口を勢いよくK A I T Oに向けた。

「おまえごとぶち抜いてだな」

すると遅れて、K A I T Oは、くっ、くっ、と徐々に笑い声を大きくしていった。

その右腕は光に呑まれる前と同じ、？エンドレス・エンド？のままになっっている。

「交渉決裂、か。いいぜ？ 俺はおまえを殺してそいつを奪えばいいだけだからな。

俺はいつだってそうして生きてきた」

K A I T O はナナシに砲口を向ける。

張りつめた沈黙。ナナシはちらと横に目をやる。先ほど自分が座っていた場所の付近に？クロガネ？が主人を待つかのごとく浮遊し、ナナシはそれを手に取った。

「決着をつけるぞ」

彼女の左目に青い焰がぼっと灯る。

アズル・ブルーの体内生成が始まった証にして、B R S を使うときにだけ姿を現す青い焰。

そしてトリガーは同時に引かれ、衝突した波動のほとばしりが開戦の号砲となった。

t o c h a p t e r 2

相殺された二つの波動。K A I T Oは立て続けにエンドレス・エンドを放ち、ナナシはそれをかわしながら急速に間合いを詰めていく。決戦距離。ナナシは力一杯クロガネを薙ぐ。K A I T Oはそれを右手に持ったアマミヤで受け止め、二度、三度、両者は斬り結んだ。

この世界に至る前、K A I T Oはエア・グライドの機上にアマミヤを突き立てていた。それが右手にあるということは、機体がい物にならなくなったことを意味している。もし使えるのならば、彼はエア・グライドに乗ってナナシの前に現れただろうからだ。

火花と金属音が高らかにほとばしる。一方が袈裟がけに刀を振るう。もう一方がそれを弾き、間髪いれずに突きを繰り出す。身をねじって紙一重に斬撃をかわしざま、遠心力を乗せたカウンター。それを斜めのスウェイでかわして横一文字……半センチ間違えたら相手が死ぬデス・ワルツを踊りながら、剣戟けんげきはより熾烈を極めていく。ある一撃の衝突をきっかけに二人はターン、至近距離で波動を放ち合った。

空気砲で撃ちだされたように後方へと吹き飛ぶ両者。ナナシは重力が身体を引っ張ってくれるのを期待していたが、ここは元いた場所とは異なる世界。身体はどこまでも水平に飛んでいき、ナナシは肩越しに横倒しとなったビルが漂っているのを目にする。このままいけば衝突はまぬがれない。ナナシは体勢を整え、両足からビルの側壁に着地、足をばねのように突っ張って今度は下方を流れているビルに向かった。都市が丸ごとアンインストールされたからだろう、ビルの他にも家屋や、トレイン、なかには洋式便器までもが無重力に漂っている。

この分だと、トランジスタを築きあげていた土台部分もこの空間のどこかを超巨大隕石のように流れているだろうことは想像に難く

ない。普段は清掃業者しか足をつけられないビルのガラスのうえを走りながら、ナナシは改めてキヨテルのしたことにおぞましさを感じていた。

ふと、上方にあった建物を貫いて青白い光条が降り注いできた。エンドレス・エンドの砲撃。ナナシは横っ跳びでそれをかわし、間欠泉のようにガラスとコンクリートが弾けた。

その破片が辺りを漂うなか、ナナシは前方に再びあの男の姿を目にする。

仕掛けたのはこちらからだ。ナナシはBRSを一発、二発、チャージなしで立て続けに放ちながら駆けていく。K A I T Oは身体をひねるだけかわし、撃たれた数だけ撃ち返した。

体内で生成できるアズル・ブルーは無限ではない。生成機関を動かすためにエネルギー、すなわち活動維持に必要な燃料を消費するため、ナナシもK A I T Oも、先ほどから互いにノー・チャージの拳銃の弾丸ほどの大きさで放っている。エネルギーをそのまま砲撃に変えているのと同じだ。ナナシは撃てば必ず命中するタイミング（ことごとくかわされているにしろ）と戦闘を有利に進めるために要所所でトリガーを引いているのに対し、K A I T Oはその自身の無計画な性格ゆえかやたらに撃ち過ぎるきらいがある。ナナシはそれを狙っていた訳ではなかったが、未来世界より続く？命の弾丸？の使い過ぎが、ここにきてK A I T Oの反応をにぶらせた。

「なんだ……っ！？」

頭ではいちはやくナナシの動き　クログネを振り上げていまでも飛びかかってこようとしている　に反応しているにもかかわらず、身体がそれについてこない。燃料を一度たりとも補給していなかったからだ、そんな心の声が聞こえたのも束の間、斬撃が襲ってきた。

「くっ……！」

K A I T Oは間一髪、アマミヤで斬撃をしのぎ、二人はほとんど同タイミングで砲口を突きつけ合った。傍目には互角の戦闘に見える

るが、燃料の点で言えば形勢はナナシに傾いている。

「俺とおまえには　正確には、俺が身体を奪ったこのK A I T Oとおまえには、だが、少なからず因縁があるようだな」

砲撃の一発でも来るかと警戒していただけに、ナナシは拍子抜けする思いだった。

もちろん時間稼ぎ。視界がかすみ、いまにも倒れそうなのを悟られないための。人間であるならば額に玉のような汗を浮かべながら、K A I T Oは努めて平静ぶって言葉を続けた。

「とはいっても、K A I T Oはおまえを自分の言いなりになつてくれない困った団員程度にしか感じていなかったようだが……。あのアナザー・トラッシュ・ホール？　もう一つの廃棄炉？　の戦いからか、おまえが俺に憎悪を剥きだしにするようになったのは」

ナナシの眉じりがぴくつと反応した。

「そりゃそうだ、何せ、俺はおまえの大事な仲間を敵ごと撃ち殺しちゃまったんだからな」

「……いま、なんて言った？」

一拍置いて、K A I T Oは答えた。その口元に不敵な笑みを作つて。

「おまえは思い違いをしているらしい。あのときM E I K Oを撃ち殺したのは　俺なんだよ」

頭に弾丸が撃ち込まれたかのような気分だった。

ナナシは愕然がくぜんとし、そのわずか口が開いた顔が硬直していた。

「あの超巨大ブラックはおまえを標的にしていた。だが、どういうわけか、おまえはB R Sを撃とうとしない。ブラックの足元にM E I K Oがいたからだ。俺は敵と交戦しているなか、おまえの姿に気付いた。そして叫んだ。何をしている、B R Sを撃て、と。それでもおまえは撃たなかった。だから、俺が代わりにエンドレス・エンドを五段階目のチャージで放った。

そのときだ、俺がM E I K Oの姿に気付いたのは」

「そんな馬鹿な……私は確かに撃った。手応えがある。それはいま

も忘れられない」

「確かに撃った。俺のに一、二秒遅れて、それも天に向かつてな。いずれにしろおまえの弾はM E I K Oには当たっていなかつただろう。俺さ。おまえの後ろから、それも下半分だけになった壁を挟んでな。だから見えなかつたんだ、M E I K Oがいたことに」

「……おまえは、私を助けようとしたのか？」

「だと思っぜ。おまえは貴重な戦力だからな。」

俺以外のアンドロイドのなかで唯一、B R Sを使える」

うつむき、ナナシは悔しそうに小さくかぶりを振った。

一つに結集して何物をも貫く矛を成していた戦意は、いま静かに分散しつつあった。

「ま……ロビン・ケンウッドには関係のない話だ。俺はK A I T OであってK A I T Oじゃない。」

ちよつとばかり思い出を語ってやっただけさ、コーヒーブレイク代わりにな」

「うそじゃないんだな……？ おまえの言葉が真実だったとしたら、私は、」

「おい、それ以上は言うな。せつかくの興がさめちまう。」

大体、仲間や何だつーのは、俺にとつちやあどうでもいいんだ」

砲口の薄暗い闇に光が灯る。

ナナシはとつさに身をよじり、青白い光条が彼女の顔のすぐ横を通過していった。

ツインテールの右側がその半ばかりもぎ取られ、左右で長さの違う二束髪をゆらしつつ、ナナシは反撃の一波を見舞った。が、K A I T Oの姿はいまや頭上にあつた。

「よくかわしたな、ブラックロックシューター！」

裂帛れつぱくと共に放たれた重い一振りを受け止め、しかし、その反動を生かした相手の蹴りがナナシの胸を突き刺し、彼女はよろけながら後ずさつた。

「さっきまでのキレはどうした？」

元気になつたり、そうじゃなくなつたり、忙しいやつだな」

「おまえは……やはり、K A I T O じゃない。誰なんだ？」

「もつ言つたと思うぜ。俺の名は……ロビン・ケンウッド！」

猛進してくるK A I T O の横薙ぎがクログネを弾き、一瞬、無防備になつたナナシの胴体にエンドレス・エンドの横殴りがもろに炸裂した。「ぐっ……！」

あまりの衝撃にうめき声が出て、ナナシは勢いよく斜め上に吹き飛んでいった。

レールを失つた状態で漂流していたトレインの窓を突き破り、車内に入り込んだナナシの背中にはガラスの破片がいくつも突き刺さつていた。

その痛みにもだえている暇を飛来するエンドレス・エンドの追撃が与えてくれない。

ナナシはとつさに立ち上がり、斜めに傾いた車内を疾走。そのすぐ後ろを二発、三発と連続してエンドレス・エンドの光条が轟然と通過していった。

ナナシはクログネで固く閉ざされた自動ドアを十文字に切り裂き、足一杯に反動を溜め、光条とすれ違うように飛び出した。

K A I T O との距離がみるうちに縮まっっていく。

またも放たれた砲撃をB R S の応射で相殺し、左足から地につけて一直線、いざ決戦距離に入った。クログネの柄を握り締める手に力がこもる。

迷いが無いといえはうそになる。

K A I T O がM E I K O を葬り去つたことに間違いはないが、それは同時に自分の命を救う意図があったことを意味している。それが組織の力を維持していくための打算であつたにしろ、いまの自分がM E I K O という尊い犠牲のうえに存在していることに間違いはない。そしてこれから斬り裂こうとしている相手は、他でもない、自分を生かしてくれた命の恩人だ。

ナナシはすくみそうになる両足を踏ん張らせる。そうだ、形に惑

わされるな。

いけ、このまま。ここで死ぬために、私は生かされたわけじゃないはずだ。

ナナシは渾身の振りを払う。拮抗する刃と刃。ひと際の火花、金属音。

すかさず半円を描くようにナナシはクロガネをひるがえし、逆袈裟に刃を振り上げる。

弾き返した。アマミヤを、KAITOの身を守る鋼鉄のベールを。その露わとなった心臓に砲口を突きつける。左目の焰が爆ぜるように燃え上がる。

そして一呼吸の間のおち　ナナシは、BRSのトリガーを引いた。

「ぐ……がつ……」

スローモーションに見えた。

青くゆらめく焰ごしに、胴体を撃ち貫かれたKAITOの上半身がその部品と共に舞い上がり、墜落していくのが、ナナシにはスローモーションのように見えた。

決着。底なしの静寂がよみがえり、KAITOのうめき声が痛々しくこだました。

ナナシの左目からはすでにあの青い焰は消え去っている。

闘志を燃やさずとも、相手がもう幾ばくもなくその命を終えるのが分かつているからだ。

「おまえ……撃てたな……てつきり、情が芽生えて、撃てないかと思ってたんだが……」

途切れ途切れになる声を虚空へと放ちながら、KAITOは瞳だけをナナシに向けた。

「自分で名乗っただろう。俺の名は、ロビン・ケンウッド？だとそうだった、と呟いて、KAITOはくつくつと自嘲気味に笑い始めた。

それに合わせて、本来見えてはならない上半身の断面がしきりに



スパークを起こした。

「……………ここ……………何がいるか、おまえには分かるか……………？」

歩くことはおろか、立つことさえ二度と出来ないのを重々承知しているという諦めを含んだ声の問いかけに、ナナシは小首をかしげた。

「死んだ人間どもの魂さ……………漂い、さまよい、苦しんでいるのが、俺にはよく分かる……………。聞こえるんだ、あいつらの声がな」

やがて彼女は異変に気付いた。

K A I T Oの周りに様々な色の光の帯が集まり、渦を巻いて勢いを持ち始めたのだ。

「なんだ……………？ どうなっている？」

「……………おまえには……………分からないだろう……………？ 魂のないアンドロイドのおまえに……………。」

人間は、身体を失っても、魂は生き続ける。永遠なんだ。いい意味でも、悪い意味でも……………。憎しみを持ったままの魂、怒りに震え続けている魂……………いいぞ、どんどん、集まれ……………俺のところに……………俺のところに……………っ！」

渦巻く光の帯は核融合反応のごとく斬り裂くような閃光を放ち、みるみるうちに漆黒の色を帯びていった。それはやがてどろんとした質感の液体と化して火柱のように噴き上がり、あらゆる漂流物を呑み込んでいきながら空間を闇色に塗りつぶしていく。あたかもキヤンバス一杯にコールタールをぶちまけたかのような光景に、ナナシはただ立ち尽くしているほかなかった。

そしてコールタールの海は雷を孕んだ雲のようにうねり、猛スピードで伸縮を繰り返しながら？人型？めいた形に変貌、太い柱がナナシの眼前へと伸び、その先端が膨らんでいまにも張り裂けんばかりの風船となった。このまま黒い波に呑まれるのではと身構えていたナナシだったが、しかし、風船の中央に楕円形の大きな穴が二つぱっくりと開き、その下にすつつと切れ目が走っていよいよ人面のようになると、ナナシはにわかに戦慄した。

「ブラック……ク……」

その言葉がもれるのを禁じ得ない。

楕円形の底に青白い光が灯り、そこが地獄への入り口とばかりの異様さを持ってナナシをにらみ、ちょうど額となる部分が盛り上がって、なかからK A I T Oの上半身が出現した。

彼は十字架に磔はりつけにされたかのような体勢でうなだれ、そのまぶたは重く閉ざされている。ナナシは直感する、彼がこのブラックに存在する力をもたらししているのだと。

彼女はすかさずB R Sを構えたが　　はるか上方から黒い塊が猛烈な勢いで迫ってくる。

あまりの大きさからそれがブラックの？掌？だと認識するのには数秒の時間を要し、その頃にはもう逃げ場などどこにもなかった。ナナシはとっさにB R Sとクロガネで防壁を作る。

が、それはビニール傘を広げて大津波に対峙するも同然だった。足場のビルごとあっけなく黒い水の激流に押しつぶされ、ナナシは下へ下へ当てもなく落下していった。

意識はいまの一撃ですでに途絶えていた。

\* \* \* \*

全身に痛みを感じながら目を薄く開くと、悪夢が未だ続いていることに気付かされた。

空間一杯にその巨躯を広げるブラック。クリプトナスの悠に二、三倍はあるつかという大きさで、水平線の彼方にまで及んだ手足の先はばやけて視認できず、その顔だけが両目から放たれる青白い輝きによってしつかりと把握できた。

自分を探しているのか、きよろきよると首くびをめぐらしている。

一抹の絶望を抱えながら、ナナシは瓦礫がれきを押しつけて立ち上がった。

上部分がひしゃげたむき出しの鉄柱、倒壊したビル、モザイク状

に広がる瓦礫の大地。

その廃墟の光景にはよく見覚えがある。自分たちがいた未来世界の景色だ。そのなかにぼつねんと自分が立っていることが、ナナシにはとても奇妙に感じられた。

近くには二連の塔　ユートピア・タワーが立っている。雨風に浸食された跡がはなはだしく、立っているのが不思議なくらいその外観が朽ちてしまっている。

更に廃棄炉を封印している石桶があるのを見ると、ここはエクスタリズムの本拠地付近。間違いない、ここは未来世界のトランジスタだ。

ナナシはしばし呆然としていたが、大気のゆらめきのような振動を感じて上を仰いだ。

「ナーナーシーイ！」

リン。ついでレンが「いでっ！」と足をくじきながらも着地して、そのあとにダー、ルカ、ハクと続々とこの未来世界の大地へと降り立った。これだけでも驚愕に値する光景だったが、更にナナシをおどろかせたのは、彼らのなかに？ミク？がいたことだった。

彼女はハクにお姫様だっこをされ（リヴォルヴがあるので左腕一本でだ）、胸から下ろされると、きよとんとした顔つきで辺りを見回し、その視線はやがてナナシの顔で止まった。

他の皆も彼女を見ている。

ナナシは安堵を噛みしめるように言った。

「みんな……無事だったんだな」

「あ、なにそれ。私たちが死んじゃったとか思ってたの？」

「だとしたら心外ね。あなたが一番、死にそうな顔をしたのに」  
リンとルカ。それはいつもと変わらぬ調子の声だった。

「もう大丈夫なのか？　ナナシ」と歩み寄りながら、レン。

「ああ。大丈夫。私はもう、大丈夫だ」

この世界に来る前、ユートピア・タワーの前でも同じことを言った。

しかし今度の『大丈夫』には一本の確かな芯が通っており、皆はそれを察した。

真つ先にはしゃぎ立てたのはダーだ。

「よぉーっし！ これでばっちり戦えるぜ！」

「おめーが言うな」ハクがすかさず彼の頭を小突く。

「いつもみたくボール遊びでもしてろ」

続いて彼女はナナシを振り返った。その右肩には悠々とリヴォルヴが担がれている。

「にしても、信じた甲斐があつたぜ、あねさん」

ハクはにこつと微笑む。ミクとル力を除いた全員が彼女と同じ顔をしていることに、ナナシの心のなかの、消えかけていた希望の火が再び灯った。そうだ。私は、一人じゃない。

「……せつかくの再会だが、悪いな。力を貸してくれ」

「あいつ倒して、また、元の世界でみんなで暮らそつ！」

リンは屈託のない顔つきで言うが、

「……でも、あんなの本当に倒せるのか？」と彼女の隣にいるレンがぼつりと呟いた。

「無理ね」ぴしゃりと答えが返ってくる。ル力だった。

「仮に倒すことが出来たとしても、世界が元に戻らなかつたら意味がないわ。」

そして私たちには分かっている、その世界を元に戻す方法が

諦めの空気が漂いかけたところで、ナナシの力強い声がこだました。

「方法ならある。この…… BRSだ」

「なるほどな。そいつを出力全開でぶつ放して、あのブラックごとこの空間をどうにかしようってことだろ？」

ハクの言葉に、本当にそんなことが出来るの？ と訊ねるようにル力はナナシを見やる。

「私はさっきまでK A I T Oと戦っていた。言うまでもないが、アンドロイドの方のな。」

やつの口から、BRSが放つアズル・ブルーには空間の膜に干渉する効果があると聞いた」

「KAITOはどこへ行ったの？」ナナシはゆっくりと首を動かして、上を仰いだ。

彼女の視線の先にはブラックの顔があり、その双眸めくろがたつたいまこちらに向けられた。あの禍々しい存在そのものが質問の答えなのだと悟り、リンは息を呑んだ。

「さつてと。もうお喋りしてる時間はないみたいだぜ」

「やるしかないのね。ダー、ミクのこと、任せたわよ」

「よしオイラに任せ……つて、あれ？　ねーちゃん、オイラも戦うんじゃないの！？」

「おめーは適当に逃げ回つてりゃいいんだよ。あのくそつたれは、あたしたちがやる」

「木のバットじゃどーしようもねーからなー」そっぽを向いた顔で嫌味つたらしく言ったレンに「うっせえ！」と叫びたくなるのをこらえ、ダーは渋々了解した。

そしてブラックは蛇が穴から這い出るような動きで首を伸ばし、先ほど目についた？点？がナナシかどうか確認するようにじつと凝視した末……やがて、咆哮した。それはもはや？音？ではなく？超音波？の域で、空間にひびが入るうかというぐらい暴力的な叫びだった。続いてブラックは極めて緩慢な動きで右腕を振り上げる。

しかし、ナナシは微塵の恐怖も感じてはいなかった。

その瞳ははるかな高みを鋭く見つめ、そこに広がる闇を全て打ち払おうとする意思にあふれていた。

リンががちんと両手のグローブを鳴らす、レンが意気込むように短く息を吐きだす、「腕が鳴るぜ」とハクが笑う、ダーがやたらに騒ぎ立てている、ルカが静かな闘志をたぎらせ、そしてミクの

そのいたいけな瞳の存在を、背後に感じる。みんながいる。

恐れるものは、何も無い。

「行くぞ、みんな」

t  
o  
c  
h  
a  
p  
t  
e  
r  
3

ブラックの拳がうなりをあげて振り下ろされていく。ユートピア・タワーをいくつも縦に繋げたような途方もない大きさの塊が着々と迫ってくる様は、そのまま絶命までのカウント・ダウンだった。その秒読みを断つかのごとく、ナナシは高々とBRSを構える。

チャージ開始。一……二……三……砲口に光が収束し、勢いを増していく。

他のメンバーに逃げようとする気配はない。太平洋に広がる海水が丸ごと真つ逆さまに落ちてくるような場所においては逃げ場など存在しないことは分かりきっているし、何より、ナナシを信じているからだ。

四……五……左目に青い焰が再び灯り、ナナシはトリガーを引いた。

放たれた波動は拳の中央ではなくその下を直進。ナナシはあまりの動揺から狙いを外したのではない、至って冷静な頭脳のもと、この状況を打開するに最も適切な判断を下した。

ナナシは波動の出力を保ったまま、クロガネを持った右手を砲身にあてがい、裂帛れっぱくと共に

BRSを振り上げた。一条の青白い光が月の上弦を描き、ブラックの腕をその中央から両断。

波動の束を維持した状態で砲塔を動かすことにより、ナナシはBRSを？刃？として運用したのだ。その切っ先ははるか上方にあるブラックの肩口にまで達し、真つ二つになった腕が地上に弾け、瞬間的にナナシたちの周囲に大津波が巻き起こった。

アズル・ブルーの刃を保つために膨大なエネルギーを消費していたナナシだったが、ねばっこい液体が全身にかかるのと力が再びみなぎってきた。ブラックをエネルギーに変換する？アライヴ機関？はすでに取り除かれているはずなのに……ナナシは小首をかしげた。

「みんな、大丈夫!？」

顔を覆う液体を手で払いながら、リンが周囲に呼びかける。レン、ダー、ハクが手を挙げて応え、ル力はこの押し寄せる不快感にいまにも反吐が出そうな顔をして、ミクもダーの後ろでずぶ濡れになりながらも目をくりくりさせている。全員無事だった。

しかし、誰ともなしに異変に気付く。足元を満たしていた液体が干潮のようにさあつと引いていき、無数の塊となって、ある一つは四本足の獣、ある一つは翼が生え、クリプトナスよりかは二回りほど小さいものの、充分な威容を誇る人型となってナナシたちを包囲した。

ざつと見回しただけで？アナザー・トラッシュ・ホールもう一つの廃棄炉？で発生したのと同程度か、あるいはそれ以上の数があり、ナナシたちの顔がにわか引き締まる。

「よ、よおーっし……みんな、がんばるぞーお」とどこか気弱に言ったダーを除いて。

ふとナナシが片膝を付き、跳躍の体勢を取った。

「リン、ここは任せたぞ」

「え？」

「私の狙いはK A I T Oだ。どういう原理かは分からないが、ここにいる全てのブラックはK A I T Oから生み出された。あいつはあそこにいる。トドメを刺しに行く」

「あ、あんな高いところまで、エア・グライドなしでいくつもりなの？」

「ここは元いた世界とは違う。自由自在というところまではいかないが、さっきのK A I T Oとの戦いで、？高く跳べる？ということが分かった」

あまり論理的な物言いではないが、妙に説得力のある声だった。合間にもブラックたちは不気味な雄叫びを共鳴させ、ナナシたちに迫ろうとしている。

「あいつを倒すんなら、私たちも協力する！ 何をすればいい？」



ナナシはブラックと対峙する他のメンバーたちの背中をちらと横目で見やり、そして。

「死ぬな」

飛び出した。

ナナシのいた場所が巨大人型ブラックの足に押しつぶされ、頭上高く飛翔した彼女の姿がみるみるうちに遠のいていく。

その行方を最後まで見ている暇をブラックが与えてくれない、リンも戦闘を開始した。

レンモルカもハクも、ただ逃げ惑っているだけのようだが、ダーモ敵の合間を縫いながらミクの手を引いて全力で走っていく。全員がそれぞれの戦いを始めていた。

\* \* \* \*

「あーらよっ……」

ハクは右肩にリヴォルヴを垂らした姿勢で足に反動を溜め、ゆらりと舞い上がった。

目の前に断崖のごとくそびえる人型ブラック。その頭上を一足飛びで超え

「つとおおおおおお！」

裂帛一閃。頸椎けいついに沿って頭から股まで一直線に斬り裂いた。

しぶきをあげるブラックの液体を全身に浴び、ハクは身体の底から力が湧き出るのを感じる。これだ。戦いの味。それを芯から味わうように固く左手を握りしめ、すっかり堪能してしまうと、彼女はまた飛び出して、目についたブラックを片っ端から薙ぎ払っていった。

駿馬のごとき速さで。まだ味わい足りないというように。野生の本能がそのまま鋼鉄と化したようなりヴォルヴを振るいに振るい、倒しに倒し、敵は見る間にただの無力な液体となっていく。

荒々しい彼女とは対に、ルカはこの状況下であってもスマートさ

を失ってはいなかった。

K A I T Oとの戦いでぼろぼろになり、自らの動きを圧迫していたトレンチ・コートはすでに脱ぎ去っている。身体のラインにぴったりと収まる黒のロングTシャツ、タイトジーンズにロングブーツ、それらが艶やかな桃色髪のゆらめきと共に宙を舞う姿は、あたかも惚れ作用のある鱗粉りんぷんを翅はねにまとった黒い蝶のような危ない美しさがあった。

着地したルカを獣型のブラックがずらりと包囲した。一頭が飛び出したのを皮切りに他のブラックも一斉にルカへと襲いかかる。しかしその事態をまるで対岸から眺めているといった涼しさで、ルカはため息を一つ。双剣・ツイングラットンをクロスさせ、相手が間合いに入るやいなや回転。一周することに右足を踏み込んで更に一周、もう一周……五週目に入ろうかというとき、彼女の身体はぴたりと止まった。敵の姿がとうになくなっていたからだ。

彼女の目があるものを捉える。瓦礫の大地の高低差に足を取られながらも、ブラックの気配がない場所へとひたすら逃げていくダー、そして彼に手を引かれるミクの二人だった。

ダーは自分の言いつけを守ってくれているらしい。ミクを任せたわよ、としか言った覚えはないのに、強力な武器を持たない自分の役割を心得ているようだ。

ふっ、とルカはかすかな笑みを浮かべ、次なる標的を見据える。ハクの活躍もあってその数が大分減って来ているとはいえ、小型のブラックはアリの群のように空と地上でひしめき合っているし、脅威となる巨大人型ブラックもまだ二十体ほどいる。

近くにいた一体に狙いを定めると、ルカは走るでも跳ぶでもなく、ふらりとした空中散歩のような優雅な足取りで狙いをつけた一体に接近していった。

\* \* \* \* \*

「ちよっ……！」

獣型ブラックに向かおうとしていたリンの顔のすぐ横を、黄色い光条がかすめていった。

それはブラックの額に命中。尻尾の付け根から飛び出て、ブラックを撃破した。

が、リンの怒りは収まらない。

黄色い光条を放ったレンのもとへ、つかつか歩み寄っていった。

「あんた私を殺す気！？ もうちよつとで当たりそうだったんだから！」

「急に飛び出すからだよ！ あいつは、オレが最初に狙いをつけてたんだ！」

「は？ 私よ」「オレだよ……」ぎりぎりと額を突き合わせる二人。そこで、ずしん、と大地を踏みならす音が響いた。顔をあげてみるに、四体の巨大人型ブラックが自分たちを囲んでいる。こんなときでも喧嘩をしているのが彼らの接近を許したのは言うまでもない。更に地面に溜まっていた黒い液体がにわかになごめき始め、他のと融け合ってまた新たなブラックが生まれた。それが二人の視界のあらゆる場所で起こっている。

本来ならアライヴ機関を持ったアンドロイドの身体に吸収され、跡形もなくなるのだが、そのままにしておくことやがて再生してしまう。さすがに喧嘩をしている場合ではないと悟り、二人は額ではなく背中を突き合わせて、その顔はどちらも引きつっていた。

「あの、さ」

「なによ」

リンはまだ怒っているらしかった。

「いつも、それを言う前に喧嘩しちゃって、なかなか言いだせないんだけど……」

「じれつたいなあ。あんたって、ほんとノロマ」

「う、うっせえ！ おまえがせっかちすぎるんだよ」

なによ、とまた声が出そうになったところで。

「でも……おまえのそういうとこ、嫌いじゃないぜ」

「は、はあ？ 急に何言いだすの？」

レンは振り返り、さりげなくリンの右手を取った。

ずきつ、とKAITOの発砲によって穴がうがたれた場所が痛む。しかしリンは気にならなかった。

というより、自分を見守るような温かいレンの眼差しに、一瞬、心を奪われていた。

「情けないけどさ……オレはおまえや、ナナシみたいには強くない。だから、託すよ」

言って、レンはその右の掌をリンの左手に重ねる。

ほんのりと力がこもっていくのをリンは感じる。レンの体温と共に。

「任せたぜ、リン」

リンの胸のなかで大きな力が弾けた。アズル・ドライヴ。

ブラックたちが我先にと競り合いながら迫ってくる。

リンは正面の一体に向かって飛び出し、他の三体の胸にも掌をあてがっていきながら、瞬く間に、そして跡形もなく、巨大人型ブラックを殲滅していった。

円状に描かれた青白い光の軌跡がその事実を静かに物語っている。

レンと一緒に作り出した力。それを全身からまばゆく発しながら、リンは高らかに叫ぶ。

「ウロイエロー、スーパーミラクルハイパーギガンティック」

あらゆる装飾語を付けたしていきながら、リンは天空を指差して正義のポーズを決めた。

「ウルトラハイスタンダードギャラクティカスペシャルエディション……参上おおッ！」

そして羽ばたく。青白い粒子の輝きを翼のように広げて。

あつという間だった。ルカとハクはただ啞然とし、青白い輝きが右へ左へ縦横無尽に駆けていくのを見ていた。周囲にいた敵は光に吞まれるようにいなくなり、そして遠くから大挙してやってくるブ

ラックの群れにも、リンは一発、二発、と掌から光球を放って撃破。続いて振り返り、あの頭上高くそびえるブラックめがけて同じように光球を放とうとしたが　ふっと、リンの身体から輝きが消失した。エネルギー切れ。

身体が鉛のように重く、言うことを聞いてくれない。

それでもよるよると歩いていき、リンは倒れた。レンの隣で。

彼の眠っているような顔に笑いかけると、そのまぶたが静かに閉じていった。

「やるじゃねーか、おまえ」

しかし、ハクはすぐに言い直した。

「いや、おまえ？ら？か」

ハクはアズル・ドライヴがどういう仕組みで発動するかを知らない。

並んで倒れている二人を見て、例の？勘？で言ってみたのだ。

「あとは……あねさん、頼んだぜ」

ハクは語りかける。空間一杯に広がる暗黒の、ただ一つ。ナナシという光を見据えて。

\* \* \* \*

ナナシはただひたすらに空間を駆けのぼっていた。

翼を持った小型のブラックたちが群れを成して行く手を阻む。その障壁のごとき闇にクロガネの刃がひらめき、冴え渡り、ときに敵の背を踏み台にしながら、ナナシの猛進は止まらない。そして彼女は敵を倒すことに力がみなぎってくるのを感じる。肌の露出した部分に付着した黒い液体がすうっと体内に吸収されていく。やはり、そうだ。Dr・フィールグッドは自分からアライヴ機関を除去してはいなかった。ただ、ブラックのエネルギーを渴望する衝動があのクリプトナスの一件以来やってこなかったのは、恐らく、彼はアライヴ機関を体内に残したまま欲求だけを器用に取り除いたのだろう。

リンとレンも同様なのか、あるいは約束通り二人のアライヴ機関は取り除いて、例の？再生構想リハース？とやらのために自分のだけは残したのか、それはいまとなっては知る由もない。

ナナシは彼の亡きあともこうしてその掌てのひらに弄もてあそばれている気がしたが、しかし、この状況に限っては素直にありがたかった。

小さな壁を突き破っていくことに力が蓄えられ、より大きな壁を撃ち砕く強さとなる。

あれだけ何度もBRSを使っておきながら、その消耗が一切見受けられないどころか、ナナシはより勢いを増してブラックの群れのなかを突き進んでいるように見える。

不思議と背中を押されている気がした。

下で戦っている仲間たちに、そして、Dr・フィールグッドに。

ブラックの双眸が　その不気味な青白い輝きが近づいてくる。

チャージ開始。

ナナシは突進を仕掛けてきた翼獣型のブラックの腹を突き刺し、それを後ろへすっ飛ばした反動で更に加速をつけた。そして対峙する、ブラックの双眸。二つの地獄の入口。

そのシンボルのごとく礫れきにされているKAITO。撃つ。ここでBRSを。

青い焰えんがはぜるように燃え上がり、ナナシはトリガーを引いたはずだった。

横から割り込んできた翼獣型のブラックに砲塔を動かされ、波動はあらぬ方へ向かった。

続いてブラックの顔面から十本もの触手が扇状に生え並び、ナナシに襲いかかる。

触手の一本一本はクリプトナスの指先ほどにもなる。その尖った先端にナナシは死の光が閃くのを見たが　黙もくつてはいられない。ナナシは後ろに向かってBRSを発射、その反動で逃げるのではなく接近し、開きかけた花のつぼみのように収束する触手の空隙くつげきへと身体を滑り込ませた。

もう目の前に障害はない。あるのはただ、撃ち砕くべき敵の姿が、目を疑った。

さっきまで額に張りついてたKAITOの姿が消えている。内側に呑み込まれたのか？ 身を守るために？

ブラックの意思を感じられずにはいられなかったが、ナナシはBRSを天にかざした。

どこにいるのか分からないのなら、丸ごと斬り裂いてしまえばいい。それが結論だった。

ナナシはBRSの砲口にアズル・ブルーを収束させ、徐々に出力を高めていく。

そして振り下ろす光の巨刃。ブラックの右の肩口が異様に膨らんで、バリケードのごとくナナシの目の前を覆ったが、それもともブラックの身体を斬り裂いた。

確かな手ごたえがナナシの左手を重くする。なおも出力を高めていく。

五……？六……そして、？七……臨界点を二つも超え、ナナシは胸の内側が焼かれるような痛みを感じた。更に刃の周囲からガラスに亀裂が走っていくような音がしている。

ただし、それはナナシの耳には届いていない。彼女はいま全身全霊の力を込めてブラックの身体に刃を食い込ませていき、勢いよく振り切った。左目の青い焰がふつと消え去る。

ナナシは大きな脱力感に見舞われ、仰向けの状態で宙に浮いていた。痛みにもがいているのか、天を突き刺すような甲高い、悲鳴とも奇声ともつかないブラックの絶叫が聞こえる。

そのなかでナナシの意識はにわかにかすんでいった。不思議に達成感を感じてもいる。

いまの一撃でブラックは倒した。

この空間を元の世界に戻すのは、また目覚めてからでも遅くはない。そう頭の片隅で思い浮かべていた彼女の目は、その先が闇に覆われるのを捉えた。

ここで意識が途絶えた彼女は知る由もない。それがブラックの左の掌で、そしてブラックは右の肩口から腰にかけて両断されてなお、確然と存在しているという事実。

ナナシは左の掌にはたかれ、ビー玉が弾かれたように瓦礫の大地へと叩きつけられた。

\* \* \* \*

「ナナシ!？」

遠くで濛々（もうもう）と上がる土煙り。直前の轟音<sup>しゅうおん</sup>。

ダーは不吉な思いに駆られずにはいられなかった。

なりふり構わず逃げてきた甲斐もあって、周囲に敵の姿はない。

白と桃色の点がいくつもの黒い点と交錯している。ハクとルカがブラックと戦っているのだ。彼らの姿が点に見えるほど逃げてきた、ダーは自分の無力さを痛感したが、ふと間近にいるミクと目が合うとそれも和らいだ。自分はミクを守るのが役目。なら、安全地帯に連れてくるのが役目をまっとうするに最も確かな仕事のように思える。それを自分は本能的にやってのけたのだ。

別に自分自身がブラック怖さに逃げたのではない、とダーはここにはいないルカに弁明した。しかし、次の瞬間、安全地帯などどこにもないのだということに彼は思い知った。

あの超々巨大人型ブラックの分離した上半身と下半身が、地をゆらすような轟き<sup>とどろ</sup>と共に一体化し、ただの丸い巨塊となったのは一瞬、次には天に吸い込まれるように噴き上がった。

するところ紙に水が染みわたっていくかのよう、天井がどこまでも闇色に覆い尽くされ、その先端はトランジスタの彼方にまでも及んでいた。

何かが起ころうとしている。

闇が広がりきったあとのこの異様な静寂がダーの恐怖心を一層駆りたてた。



近くで物音がした。顔を向けてみるに、もぞもぞと瓦礫が動いている。やがてなかから細長い寸胴型の、全身が真っ黒に染められた小さな何かが這いずり出てきた。

「ブ……ブラック!?」

ダーは左手に持っていた木製のバットを構える。相手は尖った三角耳のついた帽子をかぶり、そこに収まっているべき両耳が触手のようにゆらゆら動き、寸胴型の身体から申し訳程度に手足が生え、不思議がった目付きでこちらを見ている。

果たしてこれがブラックなのか疑わしかったが、ダーは興奮のあまり攻撃を仕掛けた。

「う、うおお!? やめ、やめろ!」

勢いよく振り下ろされるバットをかわし、それは甲高い声を発した。

「しゃ、喋った!? こいつ、ブラックのクセに!」

「ち、違う! オ、オレっちは黒トエト様で」

ずん、と黒トエトと自称する者の眼前にバットが振り下ろされる。一歩間違えれば直撃していただけに、それはへなへなと座り込んだ。

「黒トエト? あー……」

ダーは心当たりがあるように顎あごに指をあてがい、虚空に目をやった。

「……って、だれ?」

しばし、間。

「と、とにかく、オレっちはブラックじゃない! おまえらくそつたれアンドロイド共のくそつたれなキズを完治させてやる高尚な業務を生業としてる高尚な一匹狼様さ……それに向かって危ないシロモノを振りまわすなんざ恐れ多いぜ? どこぞのハクじゃあるまいし」

命乞いなのか、それとも相手をけなしたいのか、最終的には後者の口調になっていた。

「トエト……なるほど。おまえはメンテ用のロボットか」

「ばっ……！ 違う。大いに違う。オレっちをタワーにいる万年のーてんき共と一緒にすんな。あいつら白トエトはただの奴隷。エクスプロリズムに言いようにこき使われているな。それで、オレっちはカネと交換におまえらゲスのメンテをしてやるいわば？ イシャ？ だ」

「まー……確かに、普通のトエトたちとは全然違うみたいだけどさ……」

短い腕を組んで「ふんっ」と誇らしげに鼻を鳴らす黒トエト。

ダーはますます何をどうしたらいいのか困惑した。

「ん……？ あれって、エア・グライドだよな？」

「オレっちのだけど？ っーか、あいつは何？ どっかで見た気がするんだけど」

ミクを指差す というより、ほとんど腕全体を使ってだが

黒トエトの問いには答えず、ダーは先ほど黒トエトが這い出てきた場所の近くに墜落していたエア・グライドへ歩み寄っていった。黒トエト専用機なのか、主人の身体と同じカラーリングで、エイ型。それも極めて小さく、自分一人乗ったらそれで機上が満杯になってしまいそうだった。

エア・グライドは機体の前部から瓦礫にのめり込み、ダーはそれを立て直そうとした。

「お、おい、ここにくっつけられてるの……おまえのか？」

「あー、話せば長くなるんだけど。訊きたい？」

「な、なんだよ、変にもつたいっけんなって！」

「……訊きたいんなら、カネ」

黒トエトは意地悪そうに微笑んだ。

「その、カネっての、よくわかんないけど、あとでルカねーちゃんに頼んでどっさり渡してやるからさ！ 教えてくれよ。これがあれば、ナナシの力になるかもしれないんだ」

「ふーん……ま、あのだでかいブラックを倒してくれるんなら、そ

れはオレっちの安全に繋がるからな。いつもなら口約束なんかしないんだけど、今回は特別に話してやる。

ただし、あとでたんまり、そうだな。泳げるぐらいにはカネをくれよな」

ダーは素早く二、三度うなづいた。

やがて黒トエトが口を開く。変にもつたいぶった口調で、右へ左へちよこちよこ歩き回り、ときおり仰々しい身ぶり手ぶりを加えながら。まるで自分の武勇伝を語るかのごとく長い時間をかけて話したが、要約すれば、すなわち、『適当にエア・グライドを外を飛び回っていたら、たまたま空中に浮んでいたのを拾って持ち帰ろうとした』ということだった。

「この空間……オレっちの推測が正しければ、恐らくは四次元空間のなか。つまり、普段はチップによって物質を預けている保管庫のなかにオレっちたちがいるってワケ。すると当然、物質はありのままの姿になってるから、そいつも例外じゃないってことだな」

「リンたちから聞いた。ナナシは？もう一つの廃棄炉アナザー・トラッシュ・ホール？の戦いのあと、古いのを捨てたんだって。これ、使えるか？」

「さあ……ずいぶん傷んでるのは言うまでもないけど。ま、使ってみるまで分からないね」

「……これをナナシに届けに行く。エア・グライド、借りるぜ」  
言って、ダーはエア・グライドを立て直した。

後部には？それが？が機上からはみ出す形で、二本のロープでくくりつけられている。

「お、おい、何勝手なこと言ってるんだよ……」

「じゃあ、おまえが届けにいくか？」

射抜くような鋭い眼差しに、黒トエトは戸惑うように身じろぎした。

「ミクのごとは任せたからな。ここなら敵もないし、安全そうだし」  
「そうそう、さっきから聞きたかったんだよ。」

この？エセナナシ？は誰なんだ？ そもそもアンドロイドなのか？」

「アンドロイドだよ。過去の世界のな」

「……ってことは、やっぱりそうか。この空間のなかで、過去と未来はごっちゃになってるってことか。どーりで、過去に行ったはずのナナシたちがいると思っただよ」

「見てたのか？」

「見てたって、さっきからの戦いが？ 当たり前だよ。空間がおかしくなっちゃまって、それで外に出て、そのエア・グライドに乗っけるもんを拾って、うちに帰ろうとしたらさ、いきなりあのデカブツが降ってくんだもん。見入ってるうちに、風に吹き飛ばされたけどな」

だから地面にのめり込んでいたのか、と心のなかで納得したのち、ダーは操縦桿そうじゅうかんを握った。すると頬に水滴がかかる。黒い液体のひとつも。何気なく見上げてみるに、コールタールの海から漆黒の雨がぽつぽつ降ってきて、やがてどしゃ降りとなった。

「嫌な予感がする……」

ダーの独り言は的中した。地上に降り注いで溜まりとなった黒い液体がうごめきだし、獣型、人型と形を変えていく。どれも小物だが、ダーにとっては脅威だ。

彼はすかさず機上から飛び降り、ミクの手を引いて機に乗せた。ダーの身体が小さいのが幸いしたのと、横になった状態で後部に積まれた？それ？がミクを腰掛けさせるための椅子となり、狭い機上でもどうにか二人分の身体を収めることが出来た。

ダーは「しっかり掴まってるよ」と言いながら彼女の両腕を取り、自分の腹の前辺りで手を組ませると、アクセル・ペダルを踏み、徐々に機体を上昇させていった。

「お、おーい！ オレっちはーあー!？」

黒トエトは小さな身体をいっぱい使ってダーを呼びとめるが、とさすすでに遅し。

エア・グライドは降りしきる漆黒の雨のなかをぐんぐん遠のいていく。

周りには雄叫びをあげるブラック。  
黒トエトはしばし立ち尽くした末、もぞもぞと瓦礫の下に潜り込  
んでいった。

t o c h a p t e r 4

何度、この痛みのなかで目を覚ますのだろう。しかし、今度の痛みは？質？が違っていた。

意識が鮮明になっていくにつれてその刺すような感覚はより鋭さを帯び、腹から全身にかけて激しい痛みが広がっていく。

顔をあげると、ぼんやり鉄柱が見える。先端が尖った槍のような形。

それが腹から突き出ている。痛みの原因は、これだった。

「う……あつ……」

ナナシはうめき声をもらす。手足をじたばたさせてみるが、うまく力が入らない。

やがて彼女は動くのを止め、がっくりとうなだれた。

その瞳から急速に生氣が失われていく。

降りしきる漆黒の雨。彼女はその風景のなかに静かに沈んでいくうとしていた。

小型のブラックが多数忍び寄ってくる。彼女はその気配さえも知覚していない。

そして一体の、鉤爪かぎを持った人型ブラックが彼女に飛びかかるうとしたとき、その側頭に一本の剣が突き刺さった。ルカ。彼女は残ったもう一本でブラックの胴体を横一閃に両断し、なだれ込むように押し寄せてきた他のブラックたちを次々斬り伏せていった。

そこにハクも加わり、一分とかならず周囲にいたブラックを一掃した。しかし、雨は止む気配を見せない。もうしばらくすればまたブラックが湧いてくるだろう。

リンとレンはハクが両脇に抱えて連れてきた。戦闘のために一旦、斜め倒しになっていた瓦礫に横たえていたのを再び抱え、ハクは気の進まない足取りで歩いていった。

ナナシのもとにはすでにルカがいる。

「ル……力……？」

ナナシは絞り出すように言った。ルカは思わず目をそらす。その腹から、鉄柱が突き出しているからだ。

「わた……し……を……あそこへ……連れて……行ってくれ……」

震える指が差したのは、上空を漂流している大きな建造物。それは先ほどリンが放った光球が偶然にも命中し、横から真つ二つになったユートピア・タワーの上部分だった。

「ルカ、二人を頼む」

険しい声で言っつて、ハクは両脇に抱えていたリンとレンの二人をルカの足元に下ろした。

「まさか、本当に連れていくつもり？」

「あねさんが望んでるんだ。無視するわけにはいかねえ」

「だって、ナナシは、」

その先の言葉を紡ごうとする口をふさぐように、ハクは鋭くルカをにらみつけた。

全身が凍りつくような殺気。ルカは言葉を呑み込み、やるせなさそうに足元を見やった。

「……どうやって連れていくの？」

「飛ぶ。あねさんがさっきやったみたいに」

ぶつきらぼうに答えて、ハクはナナシの頭に両腕を回した。

「あねさん。元の世界に戻ったら、また決闘してくれるよな。あたし、負けず嫌いなんだ」

ナナシの首が小さく動いた。うなづいてくれたのだと、ハクは信じなかった。

「死ぬなよ……あねさん……死ぬな」

\* \* \*

わずか斜めに傾いたユートピア・タワーのエア・ポート。

そこはすでに多数の小型ブラックによって占められていた。

「あねさん、ちょっと待ってる」

二つに連なる塔の片方、その付け根の部分にナナシを横たえ、ハクはおもむろに歩き出す。続いてルカがその場所に降り立ったころには、ハクは狂ったように刃を振り回していた。彼女の隣に両脇に抱えていたリンとレンを下ろして、ルカはやがて小さく語りかけた。「そんな状態で、あなたは何をしようというの？」

ナナシが懸命に顔をあげようとしている。

「BRSを撃つのね。あの、漆黒の空に向けて。もうそれぐらいしか思いつかないものね。」

でも、それで何も変わらなかったら？　何も変えられないまま、死んでしまったら？」

馬鹿な質問をした、というようにルカはかぶりを振って、ナナシに背を向けた。

「それでもやるんでしょ、あなたは」

ナナシの顔がようやくやくあげられて、ルカを見た。

その瞳は暗く淀んではいるが　光はまだ失われていないようにルカには感じられた。

「早くやりなさい。あなたがあなたでなくなるまえに」

ふっ、と肩越しに微笑みを投げて、ルカはブラックの群れへと駆けていった。

「やっときたか」

「なに？　敵が多すぎて、一人じゃ手に負えなかったのかしら？」

「まさか」余裕綽々、ハクは四、五体の人型ブラックをまとめて薙ぎ払ってみせた。

「あくまでもやるみたいね、ナナシは」

どこか呆れを含んだ声で言いながら、ルカは正面から向かってきた獣型を斬り伏せた。

「さすがはあねさんだな。あたしが負けただけのことはある」

「負けたの？」

「言っなよ。今度は勝ってみせる」



二人は並んだ。

背後にはナナシたちがいて、正面からはひしめき合う人型と獣型がじりじり迫ってくる。

「だから、また決闘が出来るように　いまは力を貸してくれ」

「もう充分貸してると思うんだけど？　あなた一人じゃ返しきれないぐらいにはね」

「はっ」ハクは微苦笑する。

「それもそうだな」

弾けるように一斉に飛びかかってきたブラックたちに二人は向かっていった。

徐々に力が湧いてくるのを胸に感じる。それが全身に行きわたっていくのを感じる。

ブラックのエネルギーが止めどなく降り注いでくるせいかもしれない。しかし、この、全身をむしばむ痛みに逆らっても立ち上がるうとするこの気持ちの源は、もっと別にあるとナナシは確信している。ブラックの群れと交錯するルカとハク。隣で眠りこけているリンとレン。遠い日の記憶。あの絶望と、あの笑顔と。動け。動け動け。動け動け動け。

ナナシは頭のなかでそう何度も反芻<sup>はんすう</sup>した。

軋みをあげる膝、ぎこちなく動く右腕。クログネは先ほど地上に叩きつけられた際に失ってしまっている。腹にうがたされた穴。露出した断面部で起こるスパーク。ふと過ぎったK A I T Oの、その別れ際。あれは本当のK A I T Oではない。ロビン・ケンウッドと自らを称する、えたいの知れない何か凶悪な存在。本当のK A I T Oはどんな気持ちで最期を迎えたのか。

あらゆる想いと共に、いま、ナナシは立ち上がった。

彼女の周りには水色の光の帯が付き添うように舞っている。そのなめらかでせわしい動きを目で追っていった先　視線は途方もなく広がる漆黒の海に行き着いた。

爪先で地面を蹴り、身体を浮遊させる。リンたちに被害が出ない

ようにするためだ。

続いて砲身に右手をあてがい、力を振り絞ってようやくBRSを構える。チャージ、開始。

一……二……砲身の側面につけられた窓に光が灯り、青白い光が砲口に収束していく。

三……四……そして、？五？に達したところで彼女の左目に青い焰が浮かび上がる。

そのゆらめきが徐々に勢いをつけていって、六……七……八……胸の内側が焼かれる。臨界点はとくに超えている。砲塔の付け根が異様なうなりを発し、身体は悲鳴をあげた。

それでも、まだ……？九？……ナナシの周囲に青白い煌めきがほのかに満ちていく。

もう自分がどうなっても構わなかった。この世界を、変えてやりたかった。

？十？。彼女はトリガーを引いた、まるで砲口の先にK A I T Oの姿を見ているかのように。

\* \* \*

天地がひっくり返るような轟音と共に、一条の青白い光が暗黒を貫いた。

一旦は表面を指で引っ張られたように深くくぼんだ部分が即座に厚みを取り戻し、そこに続々とエネルギーが集結してついには弾丸のような形となってBRSの波動と相対した。

しかし、アズル・ブルーは全てを破壊する粒子。確かにブラックを破壊しているのだが、弾丸の先端の再生スピードがあまりにも早くて傍目には拮抗しているように見えるのだ。

BRSの砲口の周りには翼を広げるように青白い輝きが放射状に放たれている。

海人はいまにもその光に吞まれてしまいそうなナナシを見守って

いた。水色の光の帯となつて、ブラックに第一波を放つときからずっと、彼女から離れることはなかった。

ルカとハクの合間から縫い出た一匹の獣型ブラックが彼女に向かって突進している。

海人は自らの無力を知りつつをブラックを追つたが 危機はすぐに取り除かれた。

横からやってきたエア・グライドがブラックをはね飛ばしたのだ。その衝撃で機上からエア・ポートに叩きつけられ、痛そうに頭を押さえているのは、確かダー。彼から数メートル離れたところで、この状況に似つかわしくない表情を浮かべているのはミクだった。

一人ブラックの群れに投げ出された彼女に、鉤爪を持ったブラックが襲いかかる。

何事か声を発して、ダーは一目散に駆けていった。ミクの前に憤然と立ちふさがり、その背中から闇色の爪が突き出た。海人は目を覆いたくなくなった。

ダーを突き刺したブラックはルカによって速やかに排除された。うつ伏せに倒れ込んだダーに、彼女の唇がかすかに動く。遅かった、と言っているのだろう。

BRSから放たれる轟音が周囲の音を全て掻き消してしまっている。

しかしその音は徐々に勢いをなくし、やがて光と共に消失した。

ナナシは力を使い果たしたかのように地面へと舞い落ちた。暗黒は消えていない。

ひと際大きな弾丸となつてこちらに直進してくる。周囲がにわか

に絶望に包まれた。

ふと、ダーが乗ってきたエア・グライドが宙に流れているのが海人の目についた。

横向けになつて漂流しているエア・グライドの機上には、その後部に いまのナナシの左腕のような、黒い鋼鉄の兵器がロープでくくりつけられている。？ブラックロックシューター？……誰から

教わったわけでもないのに、その名前が浮かんできた。エア・グライドの付近にはミクが座り込んでいる。傍らにはダーがいて、ルカとハクはブラックたちと戦闘を繰り返している。海人はミクに向かってゆらりと近づいていった。

（一か八か……やってみるか）

海人はミクの身体のなかへとすうつと入り込んでいった。

すると手足の感覚がよみがえり、戦場の空気が肌を通して伝わってくるのを感じる。

（この身体、ちょっとだけ、借りるからね）

いまさらのように断りを入れて、海人はエア・グライドに向けて駆けていった。

\* \* \*

まだだ。まだ動ける。私は、まだ、やれる。

そんな心の叫びとは裏腹に、身体はまったく言うことを聞いてはくれなかった。

BRSの臨界点を五段階も超え、そもそも身体を保っていることが奇跡だった。

幸いにもブラックのエネルギーが降り注いでくることで意識が途絶えるのはまぬがれたが、雨を降らしていた部分はやがて弾丸に収束され、より勢いを増してこちらに向かってくる。もう幾ばくもないだろう、この身体が暗黒に吞まれてしまうのは。

絶望が脳裏をかすめたとき、彼女は足音を聞いた。

仰向けになった状態で、瞳だけを動かし、足音の持ち主を見る。

ミクだった。それも身体一杯に黒い鋼鉄の、よく見覚えのある物体を抱えている。

他にもない、？ブラックロックシューター？だ。

依然、未来世界にいたとき自分が使い、何人も人間を殺してきただろう禁断の兵器。

それに、MEIKOを殺した。彼女はすぐに思いなおす。MEIKOを、？守りきれなかった？兵器。あの鋼の砲身は自分の消し去りたい過去で構成されている。

とうに捨てたはずなのに、どうして。

しかし、ミクはそれを抱えてやってくる。実際に持っているのではなく、物体が浮遊する力を利用しているに過ぎないのだが、ナナシはその平板な表情に複雑に思いに駆られる。

自分とよく似た容姿。感情に乏しい人形のような顔。似通った点を持ちながら、彼女は大勢の人々に愛される曲を歌い、Dr・フィールグッドから一途に想われていた。対して、自分はどうか。言うまでもない。ナナシはミクを見ていると、どういっわけか、自分が闇で、彼女が光というような気がするときがあった。その光が、忌まわしい兵器と共に眼前にある。

意味が分からない。すると黙りこくったままのナナシの手を、ミクがそつと握った。

途端、ナナシのなかに意思が流れ込んできた。ミクではない、海人だ。

また持つてきてくれた。クリプトナスのときのように、ぼろぼろになりながら。

やがてミクの身体から水色の光の帯が出てきて、次にナナシのなかへ入っていった。

「ばかだな……おまえも」

そう口のなかで独りごち、ナナシは立ち上がった。不思議と身体が動く。

自分の力だけで動かしているのではない。それはこの、相手の息遣いが聞こえてきそうな距離で、誰かの体温を感じているような一体感が教えてくれている。

そしてその誰かとは、間違いなく、海人なのだ。

ナナシは足元に置かれたブラックロックシューターを手に取る前に、星のチャームをぎゅうつと握りしめた。薄々、これが最後にな

るだろうと感じている。

これから自分の成す一つ一つが、最後の瞬間として刻まれていくのだと感じている。

ナナシはブラックロックシューターの連結部に右腕を入れた。するとなかの拘束具が反応し、がっちり腕が押さえられた。

ナナシは地面を蹴ってゆるやかに舞い上がると、その双塔を迫りくる弾丸に向けた。

「いけ……あねさん……」

彼女の姿に気付いたハクがぼつりとつぶやく。

ルカも手を止め、祈るような眼差しで彼女を見守っていた。

青白い光が二つの砲口に収束していく。ナナシの黒い双眸に青い焰が灯る。

あとはトリガーを引くだけだ。自分の両手と、海人。そして、M E I K Oと共に。

「いっけええええええええええ、あねさあああああああああああ  
あん！」

> i 1 7 8 1 8 — 1 2 1 8 <

ナナシの身体は、青い焰に包まれていまゆつくりと燃え朽ちようとしていた。

アズル・ブルーの生成機関、メルトリカの耐用限界を超えて粒子を発生させたからだ。

あの混沌とした暗黒の結集はほとんど一瞬にして青白い閃光の果てに消え去った。

光の広がりはなおも留まることなく、ガラスに亀裂が走るような音が鳴り響いている。

それこそ、空間を覆う次元の？膜？に亀裂が入っていく音だった。終わるうとする意識のなかで、ナナシが最後に捉えたもの。

それは世界が音を立てて壊れていく、まさにその瞬間だった。

t  
o  
b  
e  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.)  
l  
a  
s  
t  
(  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.  
.

&lt;&lt;Chapter 4 &gt;&gt;(後書き)

次回、最終話

Rock・26?ブラック ロックシューター?



## Rock・26? ブラック ロックシューター? (前書き)

本稿では「挿絵」を使用しております。

挿絵表示を「OFF」にしている方は、「ON」にしてお楽しみくださいませ。

## Rock・26? ブラック ロックシューター?

一人の小柄な老人が花束を持って、敷地のなかでもっとも大きな常緑樹へと歩いていった。

ローファーが立てる音はライトグリーンの芝生に吸い込まれ、彼は意識せずともこの永遠のときが眠る大地にとってもっともふさわしい静かな足取りとなり、腰が曲がって頭皮は荒れ野のようにてっぺんまではげているが、それを小馬鹿にする人影はどこにも見受けられない。

十字型の墓石が続く。うららかな陽光のなかで、どこまでも深々と。

いくら老眼とはいえ彼がそれらの整然とした連なりに惑わされることはなく、彼はただ、がっしりとした幹が広げる樹冠じゅかんの、その入道雲のような木陰を目印に歩いていけばよかった。そして彼は陰のなかへと入って行って、そこにひっそりと佇む墓石を前に止まった。墓石には『クライス・フィールグッド』という名が刻まれている。「最後に来たのはいつだったか。

それを忘れてしまっぐらい、この半年間は忙しかった。すまん」彼は黄色いばらの花を墓前に添えて、深呼吸をするようにそっとまぶたを閉じた。

何分ほどそうしていただろう、この霊園に流れるあらゆる静寂に耳を澄ましたあと、彼はまたゆっくりとまぶたを開けた。

「おまえに聞かせてやりたい話は山ほどある。まあ、聞いてくれ。どこぞの空から見下ろして、おまえはもうとっくに知っていることばかりかもしれないが」

彼は心持ち半身になって、肩越しに空を見上げた。

淀み一つないゆるやかな青が、この世界の平穏を告げる色となって豊かに満ちている。

\* \* \*

ヨーロッパ洋式の建築美に人々の活気があふれる街、エインセル。商店街のメインストリートに面したPIYO MARTには、今日も客が訪れていた。

「こんにちは？」貴族を気取ったような高飛車な声に、レジカウナーに片頬をくっつけていたレンは気だるそうに顔をあげた。そして「どーも……」と無愛想に返事をする。

「こらー、レン！ もっと元気よく挨拶してっついても言ってるでしょ！」その騒がしい声の持ち主は当然、やたら厚化粧で高級ブランドの服やら装飾品やらで身を固めた客ではない。

リン。

彼女は裏の戸口をガラッと開け、サンダルを履くとずかずかレジまで歩いていった。

「えー？ 充分元気じゃなか……」

「どこが？ さっきからずっと、ドアの隙間からあんたのこと見たんだからね。」

ハインマンさんこんにちわ！ ほら、あんたももう一度っ！」

「リンちゃんの言う通りですわ。客商売たるもの、第一に大事なのは屈託のない笑顔。」

死んだような顔でいやいや出迎えるなど商売以前のお話ですわ。まあ？ わたくしは心が広いですから？ お子さま？ のやんちゃんなど笑って許すのですけれど？」

夫人は口元に右の手の甲をあてがい、「おーほっほっ」としばらく笑っていた。

その五指それぞれには色とりどりの指輪が輝いている。が、持ち主の身体がややでっぷりとしているためか、それらは美しさをかもすものとしてはいまいち機能していない。

夫人は狭い店内一杯に身体を広げて好みの花を二、三手にとってはバスケットに入れていく。レンとリンが二人揃ってこの怪物が早

々に去つてくれるのを待つような顔をしていると、やがて「ちいっす」と新たに人がやってきた。

ジャック。ついで彼の隣にいる、夫人を丸呑みして更に太ったような巨漢はワトンだ。

ジャックと目が合うと夫人はぴたりと笑うのをやめ、そのＴシャツ一枚にジーンズ一丁という装いをけなすような目で彼を見た。露骨な嫌悪を察して、ジャックは「ど、どうも」と慌てて会釈したが、夫人はますます気分を悪くしたらしかった。

「まったく、最近の若いものときたら挨拶もろくに出来ないのかしらぶつぶつ文句を垂れながら、夫人はどかかと乱暴にバスケットをレジカウスターに置く。

かったるいと言いつつも毎日店番をやっているおかげか、レジを打つレンの手つきは慣れていた。

「今日も、夕方店閉めてからタワーに行くんだろ？ 一日休みだし、俺たちも手伝いに行くよ」

「ほんと？ せっかくの休みなんだから、ゆっくりしててもいいのに」

「いいんだよ。鉄くずの山を漁るのはいつもやってることだしな。それに人手が多い方が、助かるだろ？」

リンとジャックの会話を聞き、つかつかと帰ろうとしていた夫人の足が止まった。

「そういえば、二、三か月前に営業を再開してから前よりも営業時間が短くなっているけれど……何か理由があるのかしら？」

リンたちが悪だくみをしていると思っっているのか、夫人の目付きはいささか険しかった。

「うん。ちよつと、？ 探し物？ をね」

「探し物……？」

思案げに天井を見回したあと、夫人は釘を刺すような口調でジャックに言った。

「何をしているか知らないけれどもね、わたしのリンちゃんを変な

「ことに巻き込まないでくださる？」

「あ、いや、そんなんじゃないから」

「本当に？ わたしは心配なのよ、リンちゃん。あなたは誰にでも優しすぎるもの……。」

くれぐれも変なお兄さんの言うことに振り回されてはだめだからね？」

「たったいまああなたに振り回されている、とは当然言えずリンは苦笑いを浮かべているしかなかった。最後に夫人は小づかい代わりのチップをくれて、足早に去っていった。」

遠ざかる夫人の背中を見ながら、ジャックは「俺……あのおばさんに何か恨みを買うようなことしたかな……。」と独りごちた。

「なあ」レンが言った。

「ユートピア・タワーに行くんだったらさあ、いまから店閉めてさつさといこーぜ」

「だーめ。他にも花を買いにくるお客さんがいるんだから」

「えー？ もういい加減ここに座ってんの飽きたよ……。」

「あ、そんなこと言うんだ？」

意地悪そうに笑うリン。

「あの戦いするとき、一番初めにばったりと倒れてそのまんまだったくせに。」

「みんなが大変だっていうのにさ」

「う、うっせえな！ オレだって気にしてるんだから！」

「大体、オレが気を失ったのはおまえにエネルギーをだな……っ！」

「きこえなーい」と笑って彼を茶化すリン。

傍目には微笑ましいような光景だが、それを嫉妬に満ちた目付きで見ている者がいた。

「リーナーちゃん？」どこか恐ろしい笑顔で呼びかけるグミ。

彼女の登場に、一瞬にして場が凍りついた。

「あ、グミちゃん……。」

「はい、レン君。これ」

グミはワトンの巨体を押しのけるように入っていくと、紐の取っ手がついた赤い小袋をレンに差し出した。

「これは……？」

「バレンタインのチョコレートだよ」

「バレンタイン？」 ジャックが声を発する。

「今日は確か……五月二十六日だぜ？」

野暮なことを言うな、というような目でグミはぎらりと彼をにらんだ。

「えっと、これ、チョコレートだっけ？」

なんか一昨日にも同じこと言われて渡された気が……」

「かくぼさんが言ってたの。望めば、きっと、そう。毎日がバレンタイン・デイ。」

チョコレートは、渡したい日に渡せばいいって」にこやかに微笑むグミ。

ついこの間までは恋に恋するメルヘンチックな乙女であったのに、最近はすることがやや病的になっていることに一同は背筋が凍りつく思いになった。チョコレートの入った小袋にいまにもよだれが垂れそうなワトンの顔を引き離しながら、ジャックはため息を吐く。

「あのアホ詩人はまたいらんことをグミちゃんに吹きこんだのか……」

はつくしゅん、とカムイがくぼは大きなくしゃみをした。場所はいつもの噴水広場、その円形のベンチのうえが今日も彼のステージ。観客は言わずもがな、エリーたちである。

「どこかの女の子が僕の噂をしているみたいだ。まったく、想われるのは、ときに辛いね」

エリーたちは一斉にブーイングを飛ばす。「だれよー、これからぶっ飛ばしにいっくわ！」

「まあまあ」かくぼは羽織の裾をひらめかせながらエリーたちをなだめる。

「そう怒らないでエリーたち。彼女たちはきっと、何らかの事情が

あつて僕の歌を聞きにこられない子たちなんだ。かわいそうだと思わないかい？ 彼女たちに届くように、歌うよ。聞いてくれ。？想われベイビー？」

きらつと白い歯を立てると、彼はさつそうとマンドリンを弾き始めた。

「なんて優しいのーっ！」「かくばさあーんっ！」

エリーたちの黄色い声で噴水広場がにわか騒がしくなる。住人たちのほとんどは彼らを白い目で見ていたが、「エインセルは今日も平和だなあ……」と呟く者もいた。

「じゃあ、夕方、俺たちは一足先にタワーに行ってるから」

まだ未練のありそうな目でカウンターに置かれた赤い小袋を凝視するワトンの肩を掴みながら、ジャックは店先から言った。

「うん。ありがとね」

「リンちゃん、私も行くからねっ！」嬉々として言うグミに、リンはジャックにしたのと同じ笑顔で応える。が、グミがいつの間にかカウンターに入り込んでいたので、その笑顔はどこか引きつっていた。

「にしても……早いな。あの悪夢みたいな事件から、もう半年が経ったなんて」

「急にどうしたの？ のき爺みたいなこと言っちゃってさ」

「老けたって意味か？ これでもまだ二十代なんだけどなあ……」

照れくさそうに笑うジャック。そこでふと、カウンター脇に置かれた小型ブラウン管テレビから歓声が発せられた。

「お。もう始まつてるのか、ミクと……誰だっけ？」

「？リリイ？だよ。いまはね」

「二人のライブ、観に行きたかったなあ……」

グミはべつたりとレンに身体をくっつけて、妙に艶まじっぽい声で言った。

テレビでは、二人の歌姫のコンサートの模様が生中継されている。

「さつてと、俺たちは腹ごしらえでもしてくる。またな」

「うん。今日こそ、みんなで見つけようね」

リンはジャックを見ていたが、その目は遠くの、他の誰かを想っているかのようだった。

「？ナナシの記憶？」

\* \* \* \* \*

大きな樹冠の下で、のき爺は語り続けている。

辺りに人は、のき爺が想う人を除いては誰もいない。

「四次元空間がばらばらに砕けて、トランジスタが元に戻ったあとは大変だった。

何せそれまで四次元空間に預けていたものが、人間たちと一緒に丸ごと出てきたんだからな。それらの撤収、傷ついた都市の修復だけで丸々三カ月は要した。おかげでトランジスタは元の姿を取り戻すことが出来たがな。ただ、誰かさんが開けた穴のおかげでこちらの次元と繋がりを持った未来世界のトランジスタまで こっちにやってくるってしまったのは、まあ、人類にとっては一癖も二癖もある掘り出し物、といったところか。

同じ座標に出現せず、どちらかが一方の下敷きにならずに済んだのは僥倖ユウヘキと言えるだろう。これで人口増加による居住区の問題も思いがけず解決の目処がついた。

いまは？新生？W・A・Fが調査隊をいくつも編成して調査にあたつとる。

我々の居住区として使えるように環境を整える工事もじきに始まる。ま、W・A・Fにはこれまでしたことの罪滅ぼしとして、せいぜい身を粉にしてもらいたいね」

現在のトランジスタと、未来世界のトランジスタは隣同士並んでいる。上空から見下ろせば一目瞭然だろう、毛色の異なる二つの星が連なっていることが。



「一度はばらばらに砕けた四次元空間だが、そのうち？膜？の自己再生が始まって、いまではまたチップ・インが再開されている。それが途中から加わったことで都市の回復スピードが飛躍的にあがったのだが、個人レベルの使用は見送られている状態だ。」

「エインセル署の刑事、名前を？朝霧海人？というんだが、そいつが氷山キヨテルにチップで？アンインストール？されたという事実が本人の口から発覚した。」

チップを普及する前から懸念されていた事態だったが、報告された事例だけで言えば歴史上やつが初めてだ。自己再生中の四次元空間の不安定さと相まって、いまは公的事業を除いてやたらめったら使用することは禁止されてる。おまえもとんでもないのを発明したもんだ。」

ちなみにホールフォビアにあるタイムトンネルだが、あれはBRSブラックロックシューターと共に廃棄させてもらった。空間の膜は破壊されても原型を維持しようと再生する性質を持っている。」

あのタイムトンネルは常時膜に干渉し、破壊し続けることで形を保っていたわけだが、我々人間があのとトンネルを通ることはできない。一度入ってしまったが最後、四次元空間にいたときのように人間は魂だけの存在になってしまう。身体を保ったままあそこを通れるのは、魂を持たないアンドロイドだけだ。だからおまえは穴を開けてもそれを使えなかった。どうにか方法を模索しようと、タイムトンネルを破棄することはしなかったようだがな……」

一息置いて、彼は続ける。

「しかし、それが幸いして、わたしのいるトランジスタは救われた。リン、レン、ハク、ダー、そして、ナナシ。」

「未来世界からきた彼らとルカが戦ってくれたことで、いまのわたしがいる。」

「彼らの活躍に優劣をつけるつもりは毛頭ないが、ナナシには、やはり特別の感謝をしなければならぬだろう。」

「彼女は空間を崩壊させるほどの出力でBRSを放った。」

恐らく、アズル・ブルーの生成機関、メルトリカのオーバーロードによって彼女の身体は跡かたもなく消えたと見られている。いや、百パーセント間違いない。

だが、わしらは一縷の望みに賭けた。

彼女の記憶装置、すなわち、？メモリー・チップ？が残されている可能性にな。

コイン一枚分の大きさに満たない回路基板を、わしらはトランジスタ中に出現した鉄くずをタワーの地下に集めに集めて、いくつも出来た山のなかから発掘する作業をしている。

リンたちはもちろんのこと、彼らの友人もときどき手伝いに来て、特に海人は 刑事として現職復帰したくせに、暇を見つけては毎日のように鉄くず山を漁りにくる。

馬鹿みたいだろう？ 事実、馬鹿だ。大海原に落としたダイヤモンドの指輪を探すような途方もない作業だ。そもそもメモリー・チップが果たして存在しているかも疑わしい。それでもな、あいつらはやるんだよ。ナナシが生きていることを信じて疑わないんだ。

彼女の身体のスペアはすでに作ってある。彼女が身に着けていた衣服、腕時計までもリンたちがわざわざ作るなりして用意した。まったく、ナナシはいい仲間に使まれたな」

そこで彼は、「仲間、といえば……」と思い出しように言った。

「ナナシと特に親交があったという、MEIKO。」

W・A・Fが量産したアンドロイドのなかに、たまたま彼女と容姿のよく似た個体があつて、あの事件のあとでわしらアンドロイド機関がそれを回収、修復した。

そしてリンたちの記憶を頼りに人格を形成していき、いまでは氷山キヨテルのもとでこき使われていた子供たち スーパー・ノヴァで、ハクと一緒に子供たちの世話役をやってもらっている。人間社会の学習の意味を込めてな。子供たちはわしが施設ごと引き取ったMEIKOは穏やかな性格で、笑顔が温かいやつでな、子供たちには優しいお母さんのような印象を持たれているみたいだ。そして、

ハク。こいつも一風変わったやつで、二重人格なんだ。リヴォルヴという大剣を持つか持たないかで人格が切り替わる。しかし、？エマ・シンプソン？という女の子だったか、彼女と交流を持つようになってから、いつしかリヴォルヴがなくても一つの人格を保てるようになった。

厳密には、剣を持ったときの好戦的で気性の荒い面と、そうでないときの悲観的な面が統合されて、普段は物静かだが、ささいなことがきっかけで即座に鬼の形相が飛び出すような起伏の激しい性格になった。施設が近いところにあるもんだから、ここに来る途中にちよつくら様子を覗いてきたんだ。二人とも人間のスタッフのサポートを受けながら、子供たちとはうまくやれているようだったよ」

\* \* \*

遊戯室の扉を開けると、廊下ではくぐもって聞こえていた子供たちの明るい声が騒がしく弾けた。圧倒されるのき爺に気付き、白い長髪を後ろで一本に束ねた女性がやってきた。

「おう、ハク。元気でやつとるみたいだな」

「はい。あたしも、子供たちも、みんな元気です」

ハクはにこつと微笑む。この部屋は年齢の幼い子が昼食後の遊び場として使っており、そのためかハクも可愛らしいライオンの刺繍が入ったたまご色のエプロンを身につけている。

それと優しいな笑みが相まって、すっかり保母さんの風情だとのき爺は感じた。

「MEIKOのやつはどうしてる？ 姿が見えないが」

「いま、セントラルのスタジアムでミクとリリーのコンサートがやっていますよね？

年長組がそれに行つてて、MEIKOはその同伴です」

「大丈夫なのか？」

「ニンゲンのスタッフも二名ほどついてますから、きっと大丈夫で

すよ」

ハクの口調は、例の気性の荒いのも、また陰気な呪詛でもなく、理性的で落ちついていっている。昔の彼女を知る者は誰もがこの変容ぶりにおどろいたが、それも一カ月は前の話だ。

「いや、MEIKOの心配じゃなくて、子供たちの方だ。年長組といえは、元は氷山キヨテルの計画を実行していた精鋭部隊　？　ラヴ？のメンバーだろう？　肉体増強のために日常的に薬物を使用し、その依存から脱するため入院治療が施されていた。まだ治療を受けている子もいるらしいが、退院した子だってまだ二週間と経っていないだろう？」

「うーん……」ハクは口元に指を当てて考え込む。

「まあ、大丈夫ですよ」そしてぱあっと明るい笑顔で言った。

こう大雑把なところのにき爺は昔のハクの一部分を見る思いだったが、もう一つ困っていることがある。それは身長差のために、ハクがかがんでのき爺に話すのだ。すると胸のふくらみがたおやかに踊り、のき爺は先ほどからずっと目のやり場に困っている。

自然と他の場所に視線が行くようになり、彼は一人の少女に気付いた。

他の子供たちがグループになって遊んでいるというのに、そのおかつぱ頭の少女は部屋の片隅で一人スツールに座って、物寂しそうに三角形の積み木を掌のうえで転がしている。

「あの子がエマ・シンプソンです」

のき爺の視線に気付いたのか、ハクは言った。

「気難しい子で、あまりみんなに馴染めていないんです。

口数もすごく少なくて、最近になってようやく、あたしと話してくれるようになりました」

言葉半ばに歩き出した彼女の声には、特別の感情がこもっているようにのにき爺は感じた。

「どうしたの？」ハクはしゃがみこんで、少女と目線の高さを合わせた。

「積み木一個じゃ何も作れないよ。ほら、あの子たちと一緒に遊んできたらどう？」

少女と同じ年頃の女の子が二人、積み木の家を組みたてている。

ハクは彼女たちの輪に入っていくよう身ぶりで勧めたが、少女はぶいっと顔を戻した。その視線はじっとハクの胸元に注がれ、やがてぎゅむ、少女はハクの片胸をわしづかみにした。

「おっぱい」子供にしては無感動な声で言いながら、少女はぎゅむぎゅむと手を動かす。

「この子のお気に入りみたいなんです……」ハクは苦笑いを浮かべてのき爺に言った。

「あーっ！」一人の男の子が少女を指差した。

「また先生をひとりじめにしてる！」彼が駆けだすと他の子供たちも続き、ハクの周りに群がってきた。そしてあらゆるところから小さな手が伸びてきてハクの胸元に集中する。

初め、ハクは穏やかな笑顔でされるがままにしていたが、あまりにしつこく、ときには拳を繰り出してくる子供もいたので、その表情が徐々にかげってきた。

「あの、みんな、先生を困らしちゃだめですよ？」

「すんげー？バクダン？だ？バクダン？ーっ！」

「あの……」次の瞬間、のき爺は鬼の形相が飛び出すのを見た。

「さわっっちゃだめっつってんだろ、ああ？」

子供たちが一瞬にして凍りついた。ハクは無造作に拳や首の関節を鳴らしてみせ、その殺気立った雰囲気たるやりヴォルヴを持ったときのハクそのままであった。

「ご、ごめんなさい……」子供たちは急にしおらしくなり、彼女も彼女で、

「そう。先生の言うことには素直に聞きましょうね？」とこの変わり身の早さだった。

しかしのき爺は、彼女のその台詞が？優しい脅迫？に感じられてならなかった。

のき爺が辞去していったあと、ハクはワイドスクリーンテレビの前に子供たちと一緒に座った。別れ際、いつもの白衣ではなくダーク・スーツを着ているからどうしたのかと訊ねたら、彼はこれから弟の墓参りに向かうらしい。

墓。その単語にハクは遠い日の記憶がよみがえり、エマ・シンプソンを抱き上げて自分の膝に座らせた。タワーで会ったときの暗殺者のような険しさは薄らいでいるが、かといって笑ってもいなく、その顔は無表情のまま閉ざされている。正直、ハクは期待していた。あの笑顔がまた見られるのだと。また例の明るい声で自分の名が唱えられるのだと。

しかし、違った。二人はこの施設にやってくるころまでは同じだが、そこから進んだ道はまるで異なる。ハクは知った。二人は同じ人間だが、やはり、別々の人間なのだということを。そして、たとえ過去に戻っても、一度失った物は元には戻らないのだということ。

ハクは両腕を回し、エマ・シンプソンを抱きしめた。

「えこひいきをしている」と他の子供たちに思われまいよう、さりげなく、そっと。

テレビではミクとリリーのコンサートの模様が生中継され、画面越しにも会場の熱狂が伝わってくる。リリーは二か月前に発表された三体目となるボーカロイドだ。フラッシュのように輝く金色の髪露出度の高い大胆なコスチューム、ハスキーな声、それによって歌われる曲はどれも攻撃的で、彼女のステージはもはやストリップのような派手さがある。

そんな彼女とミク、二人の歌姫が同じステージに立ち、デュエットで新曲を披露するというのだから観客たちの盛り上がりも並ではなかった。一瞬、会場が静まり返り、そこへミクが歌い始め、イン

トロがかかると、また堰<sup>せき</sup>を切ったように観客らは熱狂した。

子供たちは誰も食い入るように画面を見つめていたが、ふと一人が言った。

「?ぶらつくろつくしゅーたー?って、なあに?」

他の子供たちもハクを振り返る。

というのも、ブラックロックシューター、という言葉が歌詞のなかに出てきたのだ。

「みんなが忘れちゃいけないことの、大事な大事な名前だよ」

子供たちはきよとんとしたが、ハクは自信たっぷりに言った。

そう。大事な名前。彼女のおかげで、いまの自分と、エマがいる。そして与えられた。この、エマ・シンプソンの失われた笑顔を取り戻す時間を。

その笑顔を連れて、ハクはいつしか、ナナシに会いに行こうと思っっている。

ブラックロックシューター、どこへ行ったの？ 聞こえますか？

> i 1 8 1 7 8 — 1 2 1 8 <

青白いピンスポットのなかで、ミクが甘くも、力強い声でそう詞を紡ぐ。

打ち鳴らされるクラッシュ・シンバル。うなりをあげるギター。風のように流れ出すシンセ。痛快な8ビート。疾走感あふれるアンサンブルがスピーカーからあふれ、天を突き刺し、スタジアムを埋め尽くす観客たちは音の洪水に吞まれるまま踊り狂った。曲はイントロから歌唱パートに入り、リリーの片手に持たれたシューアーマイクがそのハスキーな声を響かせた。

すると観客たちも彼女の名前を斉唱し、それは雷鳴のごとく地をゆるがすほどの轟音だったが、何千と歓声を発する人間のうち、ミキの姿があった。彼女は元はラヴのメンバーであった子供たちと二階のスタンド席におり、ピストンのように上下動しながらリズムに酔いしれる周囲の人間に負けじとピンクの髪を振り乱し、声を荒げ、それはある種の錯乱状態だと言えた。

もちろん、これは彼女一人に限ったことではない。歌姫の姿、声をもっと近くで体感しようとするのはこのスタジアムにいる全員に共通していることで、例からみられるのはごく一握りの、例えば知人の付き合いなどでこの場においてしまっている人間ぐらいだった。

それが子供たちの付き添いとして来た施設のスタッフであり、またMEIKOだった。

彼女たち三人は耳をろうさんばかりの大音量と人口密度にほとぼ



と疲れ切った顔をしている。うち二人は惰性で身体を動かし続けているが、MEIKOはライブでの観客のあり方というのが掴めていないのか、ひしめく人波のなかできょとんと突っ立っている。

四方八方に頭だの腕だのが伸びて視界は收拾がつかないほど雑然としていたが、彼女は異変に気付く。斜めに伸びたうへの出入り口から、歌姫を拝みに来るのとは別の目的をもったような怖い顔をした男たちが数人、飛び出してきて、円状に広がる通路を左右に散り、彼らのあとから警棒と盾を装備した警官隊が続々と入ってきた。そのなかの一人が観衆を指差して「いたぞーっ！」と怒鳴り、すると警官隊はなだれこむようにして人波を押し分けていった。観客たちも彼らに気付き、その動揺や不安は人から人へと伝わっていつてミキにも届けられた。

スタジアムの腰掛けのない椅子に立ってステージを見下ろしていた彼女だったが、他の多くもそうしているので、水平に物を見ようとするとしてもさえぎられてしまう。そこで彼女は椅子一つ分したにいるMEIKOの肩を叩き、身ぶり手ぶりで一方的に意思を伝えると、その両肩にまたがった。MEIKOは慌てて彼女の両足を掴む。頭一つ分観衆から抜き出たミキは、手でひさしを作って辺りを見回し、やがて一つの方向をじつと凝視した。もぐらが地中を突き進むように人波が割れていく。そのぎざぎざの線を足を取られながらも警官隊が追っている。

「キヨ……テル……」

ミキは愕然とした声で呟き、そしていてもたってもいられなくなつた。

飛び降りた際に身体をあちこちぶつけ、強引に人波をかきわけていくのときには罵声が飛び、何度も転んだが、関係なかった。

やっと見つけた。その感情が彼女を一心不乱に走らせた。

\* \* \* \* \*

スタジアムへと続く薄暗い通路。

「はあ……はあ……」という荒い呼吸音がこだましている。

歓声があくもって聞こえ、彼は壁に手をつきながら、よたよたとしかし一刻も早くあの声の群がりから遠ざかるうともがいていた。

「待って！」撃ち貫かれたかのように一拍、心臓がひと際高鳴る。

おそろおそろ振り返ってみると 出入り口には、ミキが息を切らして立っていた。

外の光を背負ってシルエットになっていたが、彼には一瞬にしてその正体が分かった。

即座に逃げようとするも足がうまく動かない。警察に発見されるから、このスタジアムに逃げ込んだいまといういままで、一秒たりとも休んでいられる暇がなかったからだ。

彼はやがてミキに手を取られ、悲鳴を上げる肺と一緒に倒れるようにして壁にもたれた。

ミキは何か言葉を考えているといったふうにつむいている。ちらりと出入り口に目をやって、そこから入ってくるのが警官隊でなく、ミクの歌声であることに彼は安堵した。

「えっと……」まごつきながら、ミキが口を開いた。

「いままで、ずっと、逃げてたんだよね。トランジスタじゅうに指名手配されて、顔も名前も、声まで公表されてたつて言うのに、あんたはずっと、逃げ続けてた」

ミキは噛みしめるように言って、彼の名を呼んだ。「キヨテル」

いまにして見る彼は、左胸にセントラルの発電所の名が刺繍された薄汚れの作業服を着、同じ色のつばのついたキャップを目深にかぶり、その陰に覆われた顔は、頬が痩せこけ、目のしたにくまが出来、無精ひげが生えて、あの清潔感に満ちた青年の面影はすっかり失われていた。まさしく逃亡者の有り様。どんよりとして、長らく光を浴びてないというような。

ミキは彼のあまりの変容ぶりに目をあちこち泳がせた。

「よく……」キヨテルの口が不意に動く。使い古したレコードのよ

うな不明瞭な声だった。

「僕だと気付きましたね。こんなに変わったというのに」

言って、彼は自嘲気味に鼻を鳴らした。

「直感っていうか、ね。キヨテル、いままでどうやって過ごしてたの……？」

それには答えず、彼は「時々、思うんですよ」と言って、続けた。「僕は何がうれしくて、こんな必死に逃げ回っているんだろうと地下発電所の片隅に潜んで、人から衣服を奪い、飲食物を盗み、とうとう発見されて、こんなところに追いつめられて……そこまでみじめになりながら、僕が生き続ける価値はあるのだろうか。計画は失敗した。あとに残ったのは、ただ……」

言葉を失い、彼はうつむいた。

どん詰まりの沈黙が流れ、不釣り合いなようにリリイとミクの合唱が遠巻きに響いた。

「キヨテルはさ、寂しかっただけでしょ？」

彼女の一言に空気が変わった。戸惑いを隠すように、キヨテルはそっぽを向いた。

「これ、前にも言おうとしたの。電話をしたでしょ？　？カタストロフ？の光が世界を呑み込もうとする直前に。あのときにさ、言おうとしたの。」

キヨテルがあんなことをしたのは、全部、寂しかったからなんだ。それを世界中の人に言って、気付いてもらいたかっただけなんですよ？　僕は独りぼっちだって。助けてって」

キヨテルの左手に両方の掌を重ねて、ミキは射抜くような眼差しで彼を見据えた。

「どうして、素直に言えなかったの？」

たった一行のセンチンスがあらゆる意味を含み、重い鋼鉄となつてキヨテルにのしかかった。それを払いのける気力などとうに尽きているというように、彼は深いため息を吐いた。

「君は言えるようになったんですか、ミキ」

「はつきりとそうは言い切れないけど……ノーカー・フィールグッド、のき爺って呼ばれてる人がスパー・ノヴァの子供たちを施設ごと引き取ってくれたの。わたしはいま、そこでみんなと仲良く暮らしてるつもり。たまに病院だつて行ったりするし、意味もなく寂しくなったりするけど……でもね、もう、誰かを傷つけるのだけは嫌なの」

「施設の名前はスパー・ノヴァのままなんですか？ テロリストの名前だというのに。」

きつと、施設主には教えてないんでしょうね。

あれが反<sup>リバー</sup>Reaper組織、？ヴァノー・パス？のアナグラムだということを」

「うん……」

「きみは変わったと思いますよ、ミキ。他の子供たちもきつとそうなんでしょうね」

通路の先から幾重にも交錯する足音が聞こえ、また反対側の出入り口から警官隊が現れた。彼を見つけるやすく飛びだそうとした隊員を、隊長格の男が腕を広げて制した。

どうもキヨテルが少女を人質に取り、往生際の悪さを見せているのだと思つたらしい。

「孤独は人を歪める。それもどうしようもなく。きみは四次元の世界に行つて、死んだお母さんに逢えましたか？ あえて、結果は聞かないことにします。」

逢いに行きたいと願う。その感情があっただけで、きみは立派な人間だ。

僕には、逢いに行きたいと思えるような人は一人もいませんでしたから」

ミキの手からそつとキヨテルの手が離れて、彼は出入り口をふさいでいる警官隊のほうへ歩き出していった。遠ざかっていく彼の背中では、大罪を犯した者のそれというよりは、温もりを求めて当てもなく夜の繁華街をさまよい歩く人間のようにミキには見えた。

「キヨテルっ！」気付けば、彼女は叫んでいた。

「わたし……忘れないよ？ あんたが、わたしに生きる目標をくれたこと。退屈な話を聞いてくれたり、抱きしめたりくれたこと。それと同じぐらい、あんたはわたしや、他のみんなにだってひどいことをしたけど、わたしは、忘れない。

だから、自分は独りぼっちじゃないんだってこと、キヨテルも忘れないでね」

彼は何人もの警官に身柄を拘束され、きらめく歓声のなかからひっそりと消えていった。

ミキの声に彼が振り返ることはなかった。その背中がいつまでもそびえ立っていた。

スタジアムに出ると、曲はもう終盤に差し掛かっていた。

大団円を迎える演奏と共に紡がれる最後の詞。ミキは想う。

彼もこの歌を、言葉を、聴いていてくれただろうか。

忘れそうになったらこの歌を うたうの。

\* \* \*

最後の曲を終えて、ミクとリリイは鳴りやまない拍手と歓声を受けながらステージを降りていった。楽屋へと続く通路に現れた二人をスタッフが出迎える。そのなかから黄色いスタッフTシャツを着て、野球帽をかぶった少年が飛び出すように走っていった。

「おつかれさま、ル……」

はっとして、少年は慌てて口を覆った。

左右に素早く目を配っていまのがスタッフに聞こえていないのを確認し、二人に歩み寄った。

「リリイ、ミク、お疲れさま！」

言ってリリイに大きな花束を手渡し、ついで威勢よく振り返った。

「ほら、？ウロ？、？タン？、早くこいよ！」

すると坊主頭の大柄な男と、ひよろりともやしのような体型の男が花束を持つて並び、おずおずと歩いてきた。大柄が「これでいいのか？」というようにためらいがちにミクへと花束を差し出したが、ひよろりとしたほうも同時に花束を出して両者はぶつかる様となった。

「私が先に花束を渡そうとしたんですがねえ……」

「あ？ 俺が先だったの。てめえは穴んなかにでもすっこんでろ、タン」

びりびり、と視線の火花を散らせる両者。

「穴？ そんなものはどこにも見当たらないんですがねえ。

これからあなたが開けてくれるんですか」

「おおともよ。いまずぐ開けてやる。てめえのその小汚たねえツラになあ！」

「二人ともやめろつて！」ダーがすかさず仲裁に入った。

「あのなー、いまは喧嘩してる場合じゃなくて、なんつーかさ、ほら、めでたいときなんだよ！ だからさっき二人に頼んだんだろ？

花束を渡すようにつてさ」

「なるほど……この手続きにはそんな意味があるのですか。

人間社会に生まれてない我ら二人、学ぶことはまだ数限りなくあるようですね」

「なるほどなあ……めでたいのか。めでたいんだな！？」

二人はそれぞれ異なる反応を見せ、ウ口は「うおーいめでてえーっ！」と狂ったように叫んだ。

「……まったく」両耳に人差し指を突っ込み、隣でかなり立てる大男と同時期に生まれたのがほとほと不満でならないといったように顔をしかめ、彼は冷やかに言った。

「まえに本で？ゴリラ？という生物がいることを知りましたが、あなたの野蛮さは彼らと通ずるところがありますね。群れに帰してやったほうが本人のためなんじゃないですか」

「がーはっはっは！ おい、タン！ めでたいんだつてよ！」彼の

皮肉などはその豪快な笑い声で吹き飛ばし、ウロはタンとダー、二人の首に両腕を回してなおも笑い続けた。

「これだからゴリラは……」とタンが呆れた声で呟いたのは言うまでもない。

二人がのき爺の計らいによつて生み出されたのはつい一カ月まえ。もう一つのトランジスタから発見された二人の？残骸？を修復したのだ。記憶回路はどちらも壊れており、MEIKOと同様にダーたちの記憶を頼りに二人の人格が形成されることとなった。

ダーは初め、二人との再会をよろこぶ気持ちよりも、彼らが一切の記憶をなくしていることに絶望に近い感情を抱いていた。だからどんなふうにも二人と接していけばいいのかわからなかったが、このところは抵抗感も薄れ、二人と一緒にミクとリリーのマネージャーを務めている。もちろん、スケジュール管理や体調管理といった実質的なマネージメントは他に専門の人間があり、ほとんど雑用係の自分たちをダーが気取つて「マネージャー！」と自称しているに過ぎないのだが。

一向に笑いを止める気配がないウロ、それに呆れ続けているタン。一度は全てを失ってしまったが、これから続く日々の風景に二人と、そして自分がいることに、ダーの胸はにわかに躍つた。

どよめきは止んでいなかった。  
アンコール、アンコール、という言葉の共鳴が壁を伝つて聞こえてくる。

リリーは艶やかな金色の髪をひるがえし、ミクの肩にそつと左手を置いた。

「いくわよ、ミク」そして歩き出す二人。

その場にいるスタッフが総出で声援を送り、ダーも負けじと声を張り上げ続けていた。

\* \* \* \* \*

「たまにだが、思うことがある。わしのしたことは、これで本当に正しかったのかと」

サン・パライソの国立霊園は、いまだなお打ち破られようのない静寂に包まれている。

大きな雲の塊が太陽をよぎり、辺りはほんのわずか薄暗くなった。「MEIKOも、そして、ウロ、タン、人間で言えば一度は死んだ彼らを、わしはよみがえらせた。ダーは確かに喜んでいたが、戸惑いも大きいようだった。もしナナシの記憶が見つかって、彼女がMEIKOと再会したときも……あいつはきっとダーと同じ気持ちになるだろう。」

いや、繊細な分、ナナシは余計に心を痛めてしまうかもしれない。これはおまえが生涯を賭けてやろうとしたことだ。一度失ってしまった想い人を再び自分の目の前に生き返らせる。

それが自然の流れに逆らうことだとは言うまでもない。？偽造？だとすら言える。

おまえのと勝手は違うが、わしはほとんどそれに近いことをした。正直、複雑な気分だよ」

ゆるやかに風が吹き出して、大樹の葉をゆらした。ドーム内の自然現象は全て人工によるもの。この風の質感も、眠りを誘うような葉擦れの音も、一度は自らの手で荒涼の彼方へと葬り去ったものを人類が再びよみがえらせたのだ。それが果たして悪なのか、善なのか、答えを探すようにのき爺は黙りこくって、やはり分からないというように、顔をあげた。

「わしはそろそろ行くとするよ。年寄りになるといかな。話が長くなってしまった。」

思えばわしは昔からお喋りで、おまえはいつまでも黙ってわしのくだらない話を聞いてくれたな。しかし、その逆はなかった。わしが黙っておまえの話に耳を傾けることはなかった。

だが、すまん。わしはまた何度でもおまえに逢いにくる。話をやまほど聞かせにくる」



ふっ、とどこか切なさのある微笑みを浮かべて、のき爺は踵を返した。

墓石が彼の仕草に応じることはない。

ただ、明日も明後日もずっとそこにあるような気配で持って、そこに佇んでいる。

のき爺は四、五歩ほど進んだところで不意に立ちどまり、ふと閃いたように言った。

「そうそう。さっきから見てるんだろ？　？　G n o s ?」  
グノス

すると大樹の傍らに忽然とその巨体が現れた。

「なんだ、本当にいたのか。試しに言っただけなのに」

いたずらっぽく呟いて、のき爺はG n o s が歩み寄ってくるのを待った。

「毎日あちこち巡りまわって人間の暮らしを記憶装置に収めているらしいな。

空間転移、ステルス機能、おまえは？盗撮魔？として最高の資質を備えとるよ」

G n o s は長方形のディスプレイがついた左腕を差し出す。『ソレガシメイダ』

「おっと。こりゃ誇りに傷をつけるようなことを言ってますまんかった」

言葉半ばにのき爺は歩き出し、G n o s も続いた。

うなりをあげて稼働する両足が柔らかい芝生の地に大きな跡を作っていく。

「おまえさんについてあれこれ考えて、わしらアンドロイド機関が導き出した答えは、おまえさんが後世に歴史を伝える？記憶の番人？だということだ。別の時間軸にいるわしの弟はそんな目的を込めておまえさんに盗撮……もとい、世界のあらゆる事実を映像として記録していくにふさわしい能力をもたせた。どれも現代の科学技術じゃ不可能なことばかり。おまえさんはいまにもあとにも、たった唯一の記憶の番人。ま、それが半年前の　四次元空間で起こった

歴史的事件のさなか、メンテナンス途中で眠っていたことには同情するよ」

口のないGnosの顔はいたって無機質だが、のき爺には悔しそうな表情のように見えた。

「おまえさんはむしろよりも多くの出来事を知っているはずだ。そこで聞くんだが、おまえさんにはこの世界をどう感じる？ 常に憎悪がうずまいて、争いが絶えない醜い世界に思えるか？ だが、おまえさんは見てきたはずだ。ここ半年間、都市の復興のために手と手を取り合って一丸となる人間たちの姿を。そこにある笑顔、温かい空気を。これはリンたちアンドロイドたちも同じだな。さて、答えを聞こうか」

のき爺は黒いディスプレイに蛍光色の字が浮かび上がるのを待つ。一陣の風が流れて、太陽光をさえぎっていた雲を追いやり、大地は再び輝きに満ちた。

「なるほど。そうきたか。『世界は、時々、美しい』」

夕と闇が同居する午後六時の空のもと、リン、レン、グミの三人はユートピア・タワーの前に来た。ちょうどエントランスに入ろうとしていたジャックとワトンの二人を呼びとめて、あれこれ言葉を交しながら向かった先はタワーの地下、通称・アンドロイド機関。もちろん、責任者であるのき爺の許可はすでもらってある。

偶然にもユウキ・シタラとエレベーターで乗り合わせ、彼が管制室塔のチーフになり、また四次元空間の状態を見守る監督官の仕事も兼任してこのところはてんでこまいだという話を聞き、エレベーターの着いた先で別れると、リンたちは小さな脚光が壁伝いに続くほの暗い廊下を勝手知った足取りで二、三曲がっていった。

固く閉ざされた研究室のゲートを前に、リンはのき爺からもらったICカードを端末に通し、すると彼らの前に開けた空間が広がった。ここはBRSを筆頭にDr. フィールグッドが秘密裏に兵器を開発していた場所で、『兵器研究室』という名がつけられているが、言葉から受ける印象とは裏腹に、流線状の天井が高々と伸び、面積はテニスコート八つ分ほどにもなる。ちよつとした塔の内部といった感じだ。

天井の照明がターコイズ色に統一された壁と床とをまばゆく輝かせ、鉄くずを積み重ねたいくつもの小さな山が面積の半分以上を占めている。中央の山にはYシャツをまくった朝霧海人が取りつかれたように鉄くずを漁っており、リンが彼に声をかけるのはためられた。

「お」海人の近くで作業していたもう一人の男が彼女たちの姿に気付いた。

男はリンたちの前にやってくると、「海人の同僚のザックだ」と挨拶し、ついでちらと背後を一瞥、呆れたように肩をすくめた。

「海人のやつ、ここに来てからずっとあんな調子なんだ。このとこ

るは氷山キヨテルの件で残業が続いて、今日はやつこさんが捕まっ  
たつてことで久々の定時帰りだつてのに……。

祝杯にも付き合わずにさ、ああやってずっと鉄くずを漁ってやがんだよ」

「キヨテルが捕まつたつてニュースは、家から出る前に聞いた。び  
つくりしちゃった。どうしてスタジオムになんかいたんだろうね。  
それで、あなたは どうしてここに？」

「海人からきみたちのことはかねがね聞いているよ、リンちゃん」  
人懐っこく微笑んだ彼の表情は何もかも心得ているという風情だ  
つた。

かといってアンドロイドであるリンとレンを奇異の目でためつす  
がめつ見ることはせず、普通の人間に接するときと同じ穏やかな口  
調で続けた。

「おれも家に帰つてうまいワインでも開けようと思つてたんだが…  
…何ともあいつがいじらしくしてねえ。失われた恋人の記憶。それを  
ひたすら探し求める男……。憎らしいほどロマンチックじゃないか。  
身近なところでそんなのが起きて黙っていられるかい？」

「素敵ですよね！」組んだ両手を胸にあててグミがにわかに色めき  
立った。

「お、分かるかい？ きみとは気が合いそうだ。どうだい、今夜あ  
たり」

「ごめんなさい！」

言葉半ばでさえぎられ、ザックはほころんだままの口元を持って余  
した。

「はは、冗談だよ、冗談」繰り返された言葉にはどこか切ない響き  
があった。

「おれは作業を再開するよ。黒くて四角い……コンピューターに内  
蔵されてるみたいな回路基板を見つけたら、そのトロツコ型の滑  
車に つて、あんたらに言う必要はないか。」

このなかじゃおれが一番下っ端だもんな。今日初めてやってきたん

だ

彼が近くの山に向かうと、リンたちもそれぞれ分かれて鉄くず山に当たっていった。

ネジやら機械の部品らしき金属やらを見つけては口に運ぼうとするワトンを手で制しながら、ジャックがレンに耳打ちする。「あいつ、本当に刑事か？」

あの定職に就かず日々ぶらついているような雰囲気からは誰もが思うことだった。

「まあ」レンはジャックに目をやる。

しわくちやの黄色いYシャツを着た彼は真剣な目付きで鉄くず山に挑んでいる。

「ヒトは見かけで判断しちゃだめとか、リンが言ってたぜ」

「それもそうだな」

虚空に向かってぽつりと言って、ジャックは作業を再開した。

\* \* \*

作業開始から二時間ばかりが経ったところ、部屋の出入り口ゲートが開かれた。

海人を除く全員が一様に顔を向ける。すると見目うるわしい金髪の女が現れて、そのすわりとした身体から放たれる美しさのオーラのようなものが室内に充満していた鉄の臭いを一掃した。ついで、彼女の後ろから野球帽をかぶった少年、坊主頭の大柄の男、それとは対照的にひよろりと背の高いやせぎす、揃いの黄色いTシャツを着た三人組が入ってきた。

ザックが呆気にとられた顔で言葉をもらす。「リリイ………なんでこんなところに」

鉄くず山のでっぺんから飛び降りて、リンが彼女のもとへ走っていった。

「コンサートおつかれさま、リリイ！」

「リリイ？」彼女は肩にかかった髪を払って、腰につけたポーチからチップを取り出した。

「ここでそう呼ぶ必要はないわ。私は？ルカ？よ」

そして左手首に巻いたリングベルトにチップをインストール。

彼女の全身が白い電光に包まれ、光が消え去るのと同じく、鮮やかな桃色髪がなびいた。

「やっぱり、こっちのほうがいいわ」髪に加えて、へその部分が大きく開いたジャケット、ニーハイブーツ、全体的にイエローダミアモンドのような輝きで統一されていたのが、金縁取りのチャイナドレス風の衣装に一変し、彼女は本来の姿となっていた。？ルカ？としてステージに上がったならどれだけいいだろう、しかしその名は多くの人々にとって暗黒の響きであり、彼女自身もよく承知している。それでも歌いたいという気持ちは消えなかった。

「おかえりなさい、ルカ」

リンがにつこり笑いかけると、冷気のコもったルカの表情が心持ち和んだようだった。

「えっと……」ザックがふと声を発する。

「俺、とんでもない秘密を見ちゃった気がするんだけど……え？知らないの俺だけ？」

「そう、あなただけよ。他のみんなはもう知ってるわ」

みな視線がザックに集中する。特にルカの眼差しはつららのような鋭さがあり、彼らの言わんとしていることが即座に把握できた。「わ、分かってるって、誰かにばらすとか、そんな野暮なことしないって」

救いを求めるように海人を見やったが、彼はこの事態のなかでも手を止めてはいない。そればかりか周囲の出来事を認識しているのか怪しいぐらい、彼の集中力は狂気じみていた。

「あら、みなさん、もうお集まりなんですわね」

その澄んだ声の持ち主にウロは愕然とした。雪のように白い髪を後ろで一本に束ね、優しげな目元、唇、そして、はちきれんばかり

の両乳。その豊かな膨らみに隠れて何かピンク色っぽいのがいるが、いまの、この胸の底からわき上がる正体不明のエネルギーが頭のてっぺんまでみなぎっているウロには、タンの吐く皮肉ほどにもどうでもいい存在だった。

「……おっさん、なーにじろじろ見てんの」

「はうあつ!？」しばし恍惚としていたのを冷めた声で小突かれ、ウロは絶叫した。

「ねえ、ハク、このおっさんと知り合いなの？」

「おっさんだなんて、そんな悪い言葉を使っってはいけませんよ、ミキ。」

ええ、この方とは知り合いです。古くからのね」

「つ、つ、つかぬことをおたずねしますが」ウロがやけにかしこまった口調で言う。

「この一介のマッチョに過ぎぬわたくしと、言うなれば、そう……天使のようなあなたとどこかでお会いしましたか？」

「あれ？ 覚えてないんですか……じゃあ」

ハクは一息つき、そして。

「三秒以内に思い出せ。でなきゃぶっ飛ばすぞクソハゲエ！」

「おおつ!？」十秒ほど、場の空気が固まった。一座から離れたところで、海人が不要な金属類をトロツコ型の滑車にほおり込んでいる音がこだました。

「……だめですか。昔のよしののしってあげたら、思い出してくれると考えたのですが」

「あー、そーいや、ハクのところには連れていかなかったもんな」ダーが言った。

「こいつ、なんてゆーのかな、ウロはウロでも、新しいウロなんだよ」

「なるほど。あのとき、記憶を壊されてしまったんですね」

「うん……」二人揃って過去に思いが及び、しんみりとした空気になりかけたが、

「いい……何か知らんがいい……この気持ちはなんだろう……」「ウロのうわ言がムードを掻き消した。」「……きもっ」というミキのかすかな咳きを聞いたのはタンだけだった。

「こんなゴリラはさておいて、リリイ……いえ、ルカ様、我々も作業に加わりましょう」

「はあ!?」聞き捨てならないといったように、ミキがツカツカとタンに歩み寄った。

「いまなんていった？ ルカ様に？様？をつけていいのはわたしだけなんだからっ!」

「な、なんですかこの子は……？ ルカ様と髪色が同じ……」

「だ・か・らっっ! 様をつけて呼んでいいのはわたしだけだと」

「おまえらあっ!」ぱん、とザツクが手を打ち鳴らした。

「あれをみる」ついで人差し指で海人を指す。

その黙々たる姿にみなは彼の言わんとしていることを察し、それぞれ作業を始めた。

「ねーねー、レン君レン君、次はどんなチョコレートがいい？ あ、クッキーにする?」

「いやいらねーよ……つうか食えないし……」

「……ぼっ! ぼっ! ち、ちよ、ちよこれ……っ!」

「あー……グミちゃん、食い物の話はよしてくれ。ワトンが過剰に反応しちまう……」

「あ、あの……ハク、さんでいらっしやいますよね？ 改めて自己紹介しますとわたくしはウロと申します。で、えっつとですね……早速、名前で呼んでもらってもいいですか?」

「ええ、かまいませんよ、ウロさん」

「うおおおおおおおっしやあああああ!」

「うるさいゴリラですね……本で知ったところによると、彼らは気に入らないことがあると自分たちの？フン？を投げるそうですが、ここでは不要な鉄くずを投げてくださいね」

「ねえ、ルカ様あ」



「なに？」

「あの……えっと、あの曲、歌ってくれますか？」

「コンサートには来なかったの？ さっき、あれだけ歌ってあげたと思うんだけど」

「だって、あの曲はやってくれなかったじゃないですかあ……それにわたしは、リリースじゃなくて、ルカ様の曲として聴きたいんです。お願いします！」

「はあ……この作業が終わったらね」

彼らはペアになるか何人かの組みに分かれるかして作業をし、鉄くず山のうえで想い想いの言葉を交している。リンはほとんどお祭り騒ぎのような彼らを見て、胸がしつとりと温かさで満たされるのを感じていた。人間とアンドロイドが仲良く暮らす。細かな部分で形は変わってしまったているが、自分の望んだ光景が、いま、目の前に広がっている。足りないのはナナシの姿。そして彼らも、自分も、ナナシを見つけるためにここへ集まっている。

「リン、オイラたちもいこーぜ！」

野球帽を逆さにかぶりなおし、気合を入れたダーが人気のない山へと駆けていった。

リンも彼に続き、何か決意に満ちた足取りで一步を踏み出す。見つけよう。

絶対に見つけよう。ナナシを。だが、まずは、レンに猛烈なアップローチを仕掛けるグミを何とかするべく、彼女の足は二人の方へと伸びた。

\* \* \*

眠たげにまぶたをこすりながら、のき爺は兵器研究室へ向けて廊下を歩いていった。

携帯端末のエンター画面を表示してみるに、時刻は零時を過ぎて日付が変わっている。

彼はセキュリティ端末にICカードを通し、ゲートを開けた。

「ふう……まったく、おまえらもよくやるな」

おつかれさん、という意味を込めて吐いたため息だったが、黙々と作業をしているリン、レン、ルカ、ダー、ウロ、タン、そして海人の耳には当然のように届いていなかった。

ちなみにザックたちは午後十時には部屋を出ている。というのも、白くて細い顔や腕を油まみれにしたグミが疲労の色を見せ、本人はまだ出来ると言ったのだが、これ以上帰るのが遅いと、まだ十五歳を迎えたばかりである一人娘の保護者を心配させてしまうからだ。た。

彼女を見送る意味もあって、明日も本職の仕事が待っているザックたちが合わせた形だ。

ハクはというと、疲れて眠りこけてしまったミキを抱え、壁際にそつと下ろした。

「なんだ、その子、連れて来てたのか」

「ええ。本人が行きたいってうるさくて」

「あんまり無理させんようにな。それと、MEIKOはどうした？」

「彼女は施設にいます。子供たちのお守り役っていうか。だから、あたしがこれたんです」

「そうか」互いに相好をくずし、一拍、間があった。

「アンドロイドたちは疲れ知らずだから良いとして……海人のやつ、まだやってんのか」

「ザックという方が帰ろうって誘ったんですけど、もう全然耳に入っていない感じでした」

「で、同僚は愛想を尽かして一足先に帰ったと……」。

まあ、ここまで付き合ってくれただけでも、あいつはいい友人に恵まれてるな」

海人が両手一杯に鉄くず類を抱えて台車に乗せると、がくんと膝が折れて座り込んだ。

さすがに疲労がピークに達したのだろう。見ているだけでその腰

の刺すような痛み、全身の倦怠感けんたいかんが伝わってきて、のき爺はいてもたってもいられなくなった。

「おいおい、あまり無茶するな。今日も朝から仕事なんだろ？」

のき爺の呼びかけに二、三秒遅れて、海人が顔をあげた。

はあはあと息を切らし、汗でぐっしよりと濡れたYシャツの胸の辺りで星のチャームが左右にゆらめいている。海人が肌身離さず身につけているシルバー・アクセサリーだ。

「えっと、これ」海人は傍らに置いてあったステンレスのトレーをのき爺に差し出した。

「今回見つかった分の回路基板です。自分のだけで、三つありました。」

きっと、そのなかに、ナナさんの記憶があると思います」

のき爺は手渡されたトレーのうえに置かれたものを値踏みするよ  
うに見、やがて言った。

「それ、一昨日にも言っただけだったか？」

海人は愛想笑いをする気力さえないといった感じだった。

「とりあえず、これは解析に回しておく。同じ回路基板でも、他のアンドロイドの物だったり、ごく普通にコンピューターの部品だったりするからな。明日の朝には結果が分かるだろう。ナナシであった場合は連絡する。あとはリンたちに任せて、おまえさんは帰って寝ろ」

「いいや」海人は台車の縁につかまり、よろよろと立ち上がった。

「まだ出来ます」

「おい、わしが毎日この時間にやってくるのは、ほとんどおまえさんを帰らせるためなんだぞ？ たまには素直に言うことを聞いてく  
れてもいいんじゃないか？」

「三十分。あと三十分だけ、お願いします」

両手を合わせて願い入れてくる海人に、「やれやれ……」とのき爺は顔をしかめた。

「別に今夜でなくなっただっていいだろ？」

「……これは、ザック、さっき手伝ってくれた同僚が言ってたんですが あいつは恥ずかしいことを平気な顔で言うやつなんです。えっと、？赤い糸？ってあるでしょ？」

あれ、僕、結構信じてるんですよ」

彼はすぐに顔を赤くし、慌ててのき爺に背を向けた。

「何言ってるんだか……疲れてるみたいだなあ」

照れくさいように独りごちながら、海人は先ほどまで手をつけていた山へと向かった。

彼が作業を始めるのを見送ってから、のき爺も近くの山に手を突っ込み始めた。

が、十五分と経たないうちに物々しい音が聞こえ、見てみるに、海人がうつ伏せに倒れている。

のき爺は大きなため息を吐き、ふと、ある物に気付いてこぼすように呟いた。

「？赤い糸？、か……」

海人の右手には、新たに見つかったらしい回路基板が握られていた。

\* \* \* \*

「カメラの準備はオーケー？ 今度のは、記録し損なわないでね」

リンの言葉に、Gnosの細長い頭がこっくりと傾く。その尖った先端はいまにも天井に触れそうで、彼はただでさえ人間の身長に合わせて作られたこの窮屈な室内に、ところせましらずりと人間が密集してほとほと巨体の置き場に困っているという感じだった。

ここはメンテナンスを終えたアンドロイドを安置しておく部屋。

リンたちアンドロイドにとっては馴染み深い場所だ。彼らと、昨晚鉄くず山を漁っていたメンバーも顔を揃えている。しかし、四、いや、三人と一匹、新顔がいた。

「オ、オレっちが何をした！？ 下ろせ、下ろしてくれええええ！」

「さつきから気になってるんだけど……それ、何なの？」とリン。  
「？黒トエト？さんですよ。施設の庭でうるちよろしてるのをこの子が見つけたんです」

「ね？」と笑いかけるハクに、照れくさかったのか、エマ・シンプソンは顔をそらした。

「おい！ ダー！ てめえ、忘れてんじゃねーだろうな！？」

「え？」

「カネだよカネ！ オレっちが泳げるほどたんまりとくれるって約束しただろ！？」

「あー……」言いながら、ダーの視線は部屋の隅で壁にもたれているルカに行き着いた。

「無理ね。いくら引つ張りだこだからって、ギャラは私のところには入ってこないもの」

「だって」

「だって、じゃねえええよクソガキ！ いますぐカネを持ってこないと」

「こないと、どうなるんですか？」まるで汚いものに触れるかのように黒トエトの背中を指でつまみ上げているハクが、どこか恐ろしさをはらんだ笑顔で言った。

「あ、いや、そのー、」

「断っておきますけど、あなたが恐れている？白豹のハク？は」  
次の瞬間、その聖母のごとき表情が豹変した。

「ここにいつからオラア！」

「ヒイイイ！」

そして白目をむき、黒トエトはがっくりとうなだれてうんともすんとも言わなくなった。

「みなさん、お静かに。彼女が目覚めます」

ユウキ・シタラの落ちつき払った声が部屋に響き、にわかに緊張が走った。

「なんだ？ なにが始まるってんだ？」とつろたえるウロの言葉が、

訳の分からないといったふういきよとんとしているミク、そしてMEIKOの心をさりげなく代弁してくれている。

「みんな、準備はいい？」

リンが言うと、他のみなが彼女と同じようにクラッカーを虚空に向けた。

ハクもぼとりと黒トエトを床に落としてクラッカーを準備する。死んだふりをしていたのか、黒トエトは床で起きだして、すたすたとどこへやら素早く隠れていった。

張りつめた静寂。みなが一様に目を向けているもの。寝台のうえで眠っているナナシ。

リンとグミが何日もかけて肩に星のマークが入ったロングパーカーを作り、わざわざ裾に傷まで入れた。ホットパンツとブーツはルカが愛用しているブランドから調達し、黒い腕時計はジャックたちエインセルの面子が極力似ている型のをいくつも店を回って探し出した。

おかえり、という準備は出来ている。

そして、まぶたを開けたナナシがゆっくりと 身体を起こした。

一斉に打ち鳴らされるクラッカー。色とりどりの帯、紙吹雪が舞いあがる。

歓喜のあまりリンはナナシに飛びつこうとしたが、「待て、様子がおかしい」とのき爺が腕を広げてそれを制した。見てみるに、ナナシの表情がぼんやりとしている。

「記憶回路の結合はうまくいった。だから、大丈夫だとは思って…

…」

妙に意味深な言い方にリンは不安を募らせる。他のみなも同じだった。

そこへ、すつと、海人が歩み出ていった。焦点の定まっていないナナシの前で立ちどまり、差し出した手を、しかし、二、三度宙にさまよわせて、やがてそつと、頬にあてた。

ついでシルバー・アクセサリーをナナシの首にかける。このナナ

シとの唯一の繋がりが鉄くず山のなかから見つかっていたからこそ、海人は頑なにナナシの生存を信じてこられた。

そして、いま、彼女は目の前にいる。黒い瞳。ツインテール。間違いない。彼女だ。

海人はナナシの頬を両掌で包み込み、その瞳から直接心に響かせるよう、言った。

「ナナシさ……いや、ナナシ。おれのこと、覚えてる？」

二、三瞬のち、かすかな声が返ってきた。

「……ああ」

ナナシは目の前にずらりと並んだ彼らの、一人一人の顔を見渡す。誰も忘れてはいない。どこかで会ったような顔、馴染みの深い顔。そして、一度は失ってしまった盟友の顔。

ここにいる。みんなが。私を見つめている。

「？マボロシ？じゃないんだな……」

「そうだ。みんなずっと待ってたんだ。きみの帰りを」

「一つ、思い出した。こんなときに言う言葉を。」

それはこの世界で最も尊い意味が込められているって教えられた」

「そうだろ、MEIKO」

しかし当の本人はきよとんとしていて、隣にいるミクと揃って同じ顔をしていることがナナシにはどこかおかしく感じられた。

海人の手を取り、ナナシは立ち上がった。

何のためらいもなかった。この手を繋ぐことも、この世界に帰って来ることにも。

「ただいま」

> i 1 8 1 5 7 — 1 2 1 8 <

> f i n <





&lt;&lt;Chapter 3>> (後書き)

長い間の「愛読、誠にありがとうございました。」

## エンドロール

キャスト

ナナシノブラック ロックシューター (h u k e、 s u p e r c  
e l l、 r y o)

V O C A L O I D (クリプトン・フューチャー・メディアより)

ミクノ初音ミク  
リンノ鏡音リン  
レンノ鏡音レン  
ルカノ巡音ルカ  
カイト  
K A I T O  
マイコ  
M E I K O

(株式会社インターネットより)

グミノめぐっぽいど

カムイがくぽノがくっぽいど

リリイ  
L i l y

(A H - S o f t w a r e より)

ミキノSF-A2 開発コード m i k i  
冰山キヨテルノボカロ先生 冰山キヨテル

(ニコニコ動画より)

ハクノ弱音ハク（C A F F E I N 作）  
ネルノ亜北ネル（スミス・ヒオ力作）

オリジナルキャラクター

あさぎりかいと  
朝霧海人

クライス・フィールグッド（Dr・フィールグッド）  
ノーキー・フィールグッド（のき爺）

ユウキ・シタラ

ジャック

ワトン

ハイネマン

ザック

マラン警部

マルチル（Dr・マルチル）

W・A・Fの老人たち

エマ・シンプソン

ウロ

タン

ダー

白トエト

黒トエト

ロビン・ケンウッド

他多くのエキストラたち

借用させていただいたVOCALOID作品（敬称略）

ブラック ロックシューター / Super cell feat .

初音ミク

くるくるまーくのすこいやつ / Supercell feat .  
初音ミク

ワールドイズマイン / Supercell feat . 初音ミク  
メルト / Supercell feat . 初音ミク

Dear / 19's SOUNDFACTORY

Good morning Emma Simpson / 古川本

舗 feat . 初音ミク

方向音痴 / アゴアニキ feat . 初音ミク

ペテン師が笑う頃に / 梨本うい feat . 初音ミク

アズルブルー / 猫屋ツバキ & タイスケ feat . 初音ミク

エインセル / うみぬこP & yukiwow feat . 初音ミク

汗かいちゃったね、シーザリオ / 作者不明 feat . 初音ミク

サンドリヨン (cendrillon) / シグナルP feat .

初音ミク & KAITO

卑怯戦隊うるたんだー / シンP feat . KAITO & MEI

KO & 初音ミク

炉心融解 / iroha feat . 鏡音リン

ぶつちぎりにしてあげる【ロードローラー最強伝説】 / 曲 : ik

a 作詞編曲ぶつちぎりP feat . 鏡音リン

しゅうまつがやってくる! / ささくれUK feat . 鏡音リン

サン・パライソへの道 / 山本ニュー & 田中和夫・いまいゆ f

eat . 鏡音リン

悪ノ娘 / 悪ノP feat . 鏡音リン & レン

Just Be Friends / Dixie Flatlin

e feat . 巡音ルカ

ダブルラリアット / アゴアニキ feat . 巡音ルカ

ワンコール・ラブコール / ジョミ feat . 巡音ルカ

トエト / トラボルタ feat . 巡音ルカ

タワー／絵師じゃないKEI feat. 巡音ルカ

スーパードットノヴァ／古川本舗 feat. miki (ミキ)

モザイクロール／DECO\*27 feat. めぐっぽいど (グ  
ミ)

ぼくらの16bit戦争／ささくれUK feat. めぐっぽい  
ど (グミ)

絵：Toporo

原案・執筆：社 九生

and You!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8109/>

---

ブラック ロックシューター -No cry and Distance-

2011年2月12日22時40分発行